

ポケットモンスターXY バロンの旅

バロン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ポケットモンスター縮めてポケモン。

この世界には数多くのポケモン達が生息している。

ポケモンマスターを目指す少年の物語です。

ホントに数多くのポケモンがいますね・・・

伝説ポケモンも後々登場します。

目次

ポケットモンスターXY	バロンの旅	一話	1
メイスイタウン編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二話	5
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三話	8
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四話	12
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五話	14
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六話	18
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七話	21
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八話	24
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九話	29
ハクダンシティ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十話	35
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十一話	43
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十二話	48
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十三話	53
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十四話	56
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十五話	60
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十六話	64
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十七話	70
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十八話	75
ミアレシティ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	十九話	78
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十話	84

ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十一話	88
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十二話	91
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十三話	97
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十四話	101
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十五話	104
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十六話	107
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十七話	110
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十八話	114
ポケットモンスターXY	バロンの旅	二十九話	117
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十話	122
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十一話	127
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十二話	131
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十三話	135
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十四話	142
番外 ユウキ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十五話	146
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十六話	152
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十七話	156
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十八話	160
ポケットモンスターXY	バロンの旅	三十九話	166
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十話	169
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十一話	173
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十二話	175
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十三話	179

ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十四話	184
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十五話	189
コボクタウン編再開			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十六話	195
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十七話	200
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十八話	203
ポケットモンスターXY	バロンの旅	四十九話	207
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十話	214

ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十一話	218
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十二話	223
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十三話	228
コウジンタウン編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十四話	233
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十五話	236
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十六話	240
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十七話	245
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十八話	251
ポケットモンスターXY	バロンの旅	五十九話	258
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十話	263

シヨウヨウシティ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十一話	266
シヤラシティ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十二話	274
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十三話	281
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十四話	288

ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十五話	293
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十六話	299
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十七話	305
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十八話	311
ポケットモンスターXY	バロンの旅	六十九話	317
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十話	320
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十一話	326
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十二話	330
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十三話	334
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十四話	341

ヒヨクシテイ編

ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十五話	347
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十六話	350
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十七話	355
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十八話	359
ポケットモンスターXY	バロンの旅	七十九話	365
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十話	369

雷轟シテイ編

ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十一話	373
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十二話	378
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十三話	384

クノエシテイ編

ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十四話	388
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十五話	394
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十六話	398

ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十七話	401
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十八話	406
ポケットモンスターXY	バロンの旅	八十九話	412
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十話	415
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十一話	420
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十二話	426
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十三話	429
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十四話	432
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十五話	437
ヒヤッコクシテイ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十六話	442
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十七話	445
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十八話	450
ポケットモンスターXY	バロンの旅	九十九話	454
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百話	457
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百一話	461
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二話	466
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三話	472
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百四話	478
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百五話	481
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百六話	484
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百七話	487
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百八話	492
エイセツシテイ編			
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百九話	495

ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十話	499
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十一話	503
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十二話	506
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十三話	511
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十四話	515
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十五話	520
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十六話	525
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十七話	529
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十八話	533
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百十九話	539
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十話	544
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十一話	548
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十二話	551
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十三話	555
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十四話	558
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十五話	561
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十六話	566
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十七話	571
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十八話	576
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百二十九話	581
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三十話	587
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三十一話	590
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三十二話	595
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三十三話	601
ポケットモンスターXY	バロンの旅	百三十四話	604

	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百三十五話		608
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百三十六話		610
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百三十七話		615
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百三十八話		619
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百三十九話		622
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十話		627
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十一話		630
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十二話		634
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十三話		640
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十四話		644
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十五話		648
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十六話		652
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十七話		655
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十八話		658
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百四十九話		661
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十話		664
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十一話		668
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十二話		672
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十三話		676
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十四話		681
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十五話		685
	ポケモンリーグ編				
	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十六話		690
693	ポケットモンスターXY	バルンの旅	百五十七話	リーグ1回	

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十八話 リーグ1回

戦 | 699

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十九話 リーグ1回

戦 | 704

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十話 リーグ1回戦

707

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十一話 リーグ1回

戦 | 710

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十二話 リーグ1回

戦 | 716

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十三話 リーグ1回

戦 | 720

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十四話 リーグ1回

戦の夜 | 726

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十五話 リーグ1回

戦の夜 | 732

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十六話 リーグ2回

戦の朝 | 736

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十七話 リーグ2回

戦 | 741

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十八話 リーグ2回

戦 | 746

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十九話 リーグ2回

戦終了 | 754

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十話 チャンピオン

	戦前の午前中	760
	ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十一話 チャンピオ	
	ン戦前半	765
	ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十二話 チャンピオ	
	ン戦	769
	ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十三話 チャンピオ	
	ン戦決着	774
	ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十四話 バロンの旅	
781		

ポケットモンスターXY バロンの旅 一話

一話

ここは俺が生まれ育った町、アサメタウン。

お隣さんはセレナといって、可愛い女の子だ。

ちなみにセレナは同じ年で、昨日、始めのポケモンと一緒に貰いに行こうと誘ったので、今日、町の出口で昼12時に待ち合わせすることにした。

俺の名前は、バロン。今日は、俺とセレナがポケモントレーナーになれる日だ。

俺は待ち合わせ時間の15分ほど前に着いたので、しばらく待つ事にした。

その時、町の大工さんに声をかけられた。

「おうバロンじゃないか！今日からポケモントレーナーになるんだってな！頑張れよ！」

「ありがとう、ガンジさん！」

大工のガンジはそう言い、仕事をするために工房に行った。

その後すぐに、セレナが手を振って走って来た。

「待たせちゃってごめん！待った？」

セレナは走って来たので、息を整えるのに必死だ。

「俺も、今来たところだから大丈夫だよ」

一度言ってみたかった事、言えた〜！

「そう、ありがとうね。じゃ行きましようか、メイスイタウンに」
「うん！」

こうして、俺とセレナは一緒に一番道路に踏み込んだ。

遠くの方で町の人達が温かい目で見えていたが、見ないふりをした。

「一番道路では、ポケモン達が出ないから安心だね。バロン君」

「そうだね。けど、万が一セレナが危険な目にあったら全力で守るよ」

セレナは俺の言葉を聞いて下を向いた。

「ありがとう」

「うん」

俺達はその後、メイスイタウンまでポケモンの話で盛り上がった。

しばらく歩くとメイスイタウンに着いた。

そのメイスイタウンの入り口にいた白い研究服を着た女の人に呼び止められた。

「君達！新人トレーナーね！ポケモンは見たところ持ってないみたいだけど？」

一方的に話されたが、今はポケモンを持ってないのは事実。

「はい。俺達はまだポケモンを持っていないので、このメイスイタウンでポケモンを与えてくれるという人を捜そうとしました」

俺の説明を聞いた研究服の女の人は、

「そのポケモンを与えてあげる人…それ、私よ？」

「……………」

俺達は沈黙してしまった。

「ああ、私の名前よね！私はダンテ。このメイスイタウンのポケモン研究所の所長をやっているわ」

ポケモン研究所の所長!?!?

「君達、驚き過ぎて言葉が出ないのね。とりあえず、研究所においで」

「はい」

俺達はダンテに着いて行き、研究所に案内された。

研究所は表向きは普通の家だが、中に入ると機械がいっぱいあり、書類の山が凄かった。

「散らかっててごめんね。ここの部屋で待っててね、バロン君にセレナちゃん」

「!?ダンテさんなんで」

「俺の」

「私の」

「名前を知ってるの!?!」

ダンテは凄く満足そうにして、

「見事なハモリね。名前を知っていたのは、あなた達の親に頼まれたからよ」

なるほど。親が頼んでくれたおかげだったのか。

「じゃ、私はポケモンを連れて来るから待っててね」

「はい」

ダンテはそう言い、部屋を出て行った。

「ダンテさんって所長だったのね…凄いわ」

「確かに」

それからすぐにダンテは戻って来た。ポケモン達を連れて。

「この子達の内一体があなた達に与えるポケモンよ。左から、フオツ

コ、ケロマツ、ハリマロンよ」

『フオッコ！』

『ケロ！』

『マロ！』

「このポケモン達、可愛いな。」

「セレナはどのポケモンを選ぶの？」

「私はフオツコがいいなあ〜」

フオツコか。なら良かった。俺はケロマツを選ぶつもりだったか

ら…

「なら大丈夫だね。俺はケロマツを選ぶつもりだったから」

「良かった〜」

「あなた達ポケモンは決まったみたいね！」

「はい〜」

「私はフオツコで！」

「俺はケロマツで！」

「お願いします！」

俺達はまたハモったが、もうポケモンが貰える事で頭がいっぱいになっただけだ。

「はい！じゃあこのモンスターボールがこの子の分ね」

ダンテはそう言い、俺達にモンスターボールを手渡した。

「ありがとうございます！よろしくな、ケロマツ」

『ケロ！』

「ありがとうございます！よろしくね、フオツコ」

『フオコ!』

メイスイタウン編

ポケットモンスターXY バロンの旅 二話

二話

俺達はダンテに最初のポケモンを貰った。

「これであなた達は、ポケモントレーナーよ！おめでとう！」

「ありがとうございます！」

ダンテにお祝いの言葉を貰って、これからがポケモントレーナーの始まりなんだなと、感じた。

「あなた達にお願いしたい事があって、聞いてくれる？」

ダンテからお願い事？なんだろう？

「お願い事は何ですか？」

「実は：あなた達にポケモン図鑑を渡したくて。そのポケモン図鑑でポケモン達を登録してほしいの！ダメかしら？」

なるほど。ポケモン図鑑を渡して、ポケモン達を登録してほしいという事か…

ポケモンを全部ゲットしないとイケないのかな？

「ダンテさん、そのポケモン図鑑の登録なんですけど、ポケモンを登録するにはどうすればいいのですか？」

「良くぞ聞いてくれた！この私が独自に開発した最新ポケモン図鑑の性能を説明しよう！」

ダンテの説明では…

ダンテから貰える最新ポケモン図鑑は通常、カロス地方のチャンピオンを倒してから、ダンテの試練を終えて始めて貰える。しかも、ダンテが自ら開発した世界に今は二台しかない、いわゆる超最新ポケモン全国図鑑だ。

そのポケモン図鑑は、野生のポケモンに出会うだけで自動的に登録され、野生ポケモンの詳細を見たい時は、図鑑を野生ポケモンに向けるだけで、図鑑にそのポケモンの事が出てくるようになってる。何体出会ったかも載っているので凄い。

この説明にあった野生ポケモンに関しては、図鑑の効果で詳細が見れるが、もうトレーナーにゲットされているポケモンには、ポケモンを図鑑に登録は出来るが、詳細は見れない。そこは、のちのち改良していくと言っていた。

一通りの説明が終わったダンテは、さらに！と付け加え、凄い事を言った。

このポケモン図鑑を持っているだけで、ポケモンの経験値を通常よりも多く貰え、さらに、ポケモンのレベルアップ時のステータスが通常よりも多く上がる：最強のポケモンを育てるには凄く欲しい物だ。

ダンテはそんな超最新ポケモン全国図鑑を俺達、新米ポケモントレーナーに渡そうと言うのだ。しかも、その見返りにポケモンを図鑑に登録するだけでいいと言っている。凄くいい条件だ！

「そのお願い、お受けします。俺はポケモンマスターになるのが夢なので是非、ご協力させてください」

「ありがとうございます！セレナちゃんは？」

セレナはしばらく考えてから口を開いた。

「私はご遠慮させていただきます。私の夢はポケモンと楽しく旅をする事なので、自分のペースで頑張っていきます」

俺はセレナの言葉に驚いたが、セレナにはセレナの夢がある。俺は何も言わない。

ダンテを見ると予想外だ：みたいな顔をしている。

「じゃあセレナちゃんには、普通のポケモン図鑑を渡すわね」

「ありがとうございます」

セレナはそう言い、ポケモン図鑑を受け取った。

俺もそれに続き、ダンテから超最新ポケモン全国図鑑を受け取った。

次からはポケモン図鑑と呼ぶけどね：

ちなみに、俺達はまだこのカロス地方を旅するから、まずは、カロス地方制覇から始めよう！

俺はそう意気込みケロマツを見て、

「ケロマツ、これから俺達はもう特訓するぞ！着いて来られるよな？」

『ケロ！』

ケロマツは当然だ！と言わんばかりの鳴き声で答えてくれた。
セレナは、

「ほどほどにね〜」

そう言い、フォッコを撫でていた…

ポケットモンスターXY バロンの旅 三話

三話

俺はダンテのポケモン研究所を出てから二番道路に行こうとした時、

「バロン〜！モンスターボール渡すの忘れてたわ！はいこれ、モンスターボール五個ね」

「ありがとうございます！」

それから俺は、ケロマツをモンスターボールから出して、メイスイタウンに向かうために二番道路に向かった。

二番道路で俺はケロマツを強くしようと思い、野生ポケモンとバトルを積んで強くなる修行をすることにした。

二番道路には、ヤヤコマが木の上で休んでいたり、近くの茂みにはコフキムシ、ジグザグマ、ホルビーと言ったポケモン達がいた。

俺はダンテに頼まれていたポケモン凶鑑のポケモン達の登録をしておいた。

自動でも出来るが手動でやった方が詳細も見れて手っ取り早い。その中で一体、明らかに個体値が以上に高いポケモン、ヤヤコマを見つけた。

ヤヤコマの詳細を見ると：

名前ーヤヤコマ

Lv15

特性

炎の体

持ち物

いのちのたま

技

①ニトロチャージ

②でんこうせっか

③エアスラッシュ

④はねやすめ

以上がヤヤコマの詳細だ。
ダンテのポケモン凶鑑は凄いな…
普通ならゲットしないと分からないぞ…
にしても、あのヤヤコマ…
なぜに強い技をあんなにあるんだよ…
しかもレベル15だぞ…
それに、こんな高レベルのポケモンって二番道路には出てこないはず…

迷いこんだのか？

ステータスは見たいけど、えげつないのは確かだろうなあ

「ケロマツ、あのヤヤコマは結構強いぞ…戦うか？」

『ケロ…』

ケロマツもあのヤヤコマは強いと分かったのだろう。

だが！

あのヤヤコマは手に入りたい！

そして今よりもっと強くなる！

欲しい！

あのヤヤコマが欲しい！

幸いに俺は、武術も多少は出来る。いざとなれば…

無理だな…

相手がポケモンだと、人間の俺には勝ち目が無いわ

だって…ポケモンの技って人間に当たるとね…

うん…色々ヤバイのさ…

そんな事を考えていたら休んでいたはずのヤヤコマが戦闘態勢で

こちらを見ていた…

やばい…

俺は、気づいた時にはケロマツを抱えて近くの木に向かって走っていた。

その後すぐ、さつきまでいた場所に爆発が起こった！

爆発の中心に方を見るとあのヤヤコマがいた。

ヤヤコマは炎を纏い、こちらに狙いを定めて突進して来た！
俺はやつと近くにあつた木に隠れたが…

ズガン……………

俺の隠れていた木がへし折れた……………

しかも、燃えてる…

『ヤーコー！』

ヤヤコマは雄叫びに近い鳴き声をあげ、また炎を纏い出した。

あの攻撃は…ニトロチャージか！

あの攻撃を止めなければ！

ニトロチャージは、使うたびにスピードが上がっていく技だ。

ケロマツを見るとバトルしようとしてくれる。

やるなら今だな！

「ケロマツ！ヤヤコマにあわ攻撃！」

『ケロロ！』

ケロマツはたくさんのおあでヤヤコマを攻撃したが……………

ジュー……………

水蒸気しか出ない……………

それよりも……………

『ヤッゴーーー！』

ヤヤコマを怒らせてしまった！

てか、短期過ぎだろ！

ヤヤコマは纏う炎をさらにあげ、

ニトロチャージの倍増した強烈な突進をして来た！

しかも、素早さがさらに上がってる！

「ケロマツ！その首のモコモコで動きを止めてくれないか！」

『ケロロ！』

ケロマツは首のモコモコ…ケロムースと勝手に名付けるが…

それをヤヤコマに放った。

だが……………

ジュツ！

一瞬で焼けた……………

ヤヤコマはそのままケロマツにニトロチャージを当て、ケロマツは近くにあった木にめり込む形でぶつかかった。

ズドン！

『ケロツ！』

ケロマツはその木にめり込んで、身動きが出来なくなった！

『ヤーコー！』

ヤヤコマはまた炎を纏い、ケロマツにとどめをしに来た！

このままじゃまずい！

せめてバトルを中断させないと…

そう思い鞆を探ってモンスターボールを取り出した。

俺はもう気づいた時にはモンスターボールをヤヤコマに投げた。

モンスターボールはヤヤコマに見事当たり、ボール吸い込まれ地面に落ちた。

そして左右に三回ほど揺れて、ピコンと音が鳴った。

これはゲットの音だ。

俺はヤヤコマのモンスターボールを鞆になおしてからすぐに、ケロマツの方へ向かった！

ケロマツは氣を失っていたのですぐにケロマツのモンスターボールを使い、モンスターボールに戻した。

それからはひたすらダントのポケモン研究所まで走った。

ポケットモンスターXYバロンの旅 四話

四話

俺はダンテの研究所に着いてすぐに

「ダンテさん！ケロマツが！助けてください！」

「ケロマツが!?すぐに私に預けて！ハピナス出番よ！手伝ってね！」

『ハピー！』

俺はケロマツが入っているモンスターボールをダンテに渡した。

ダンテはすぐに医療室に入り、治療を始めた。

「ヤヤコマ、出てくれ」

『ヤコー！』

俺はとりあえずヤヤコマを出してポケモンフーズをあげた。

俺のポケモンだし、可愛がって強く育てる！

「ヤヤコマ、美味しいか？」

『ヤコ』

ヤヤコマは領きすぐにポケモンフーズを食べるのに戻った。

俺はしばらくケロマツを安全にレベルアップして強く育てるかを考えていた。

「バロン君。ケロマツの回復は終わったわ」

「ありがとうございます！」

ダンテは俺にケロマツを渡してくれた。

その時なのだが、ダンテがヤヤコマを見て驚いた。

「どうかしましたかダンテさん？」

「うん。そのヤヤコマ、二番道路で新人トレーナーや野生のポケモン達を痛めつけてたポケモンだったから…ゲットしたんだね」

そうだったのか…ヤヤコマの戦い方は確かにポケモンを痛めつけるやり方だったな…

「運良くゲットできました。ケロマツが危険な状態までされて、何もできない俺は鞆からモンスターボールを投げたんです」

「そう。それは良かった。あのままヤヤコマを放置していたら、私が行くところだったから」

ダンテは凄くいい笑顔でヤヤコマを見た。
ヤヤコマはビクツと震え、俺の後ろに隠れた。
ヤヤコマも怖いと感じるんだな…

その後俺は、ケロマツとヤヤコマをボールから出したまま二番道路に行き、レベル上げをした。

後思っただが、ヤヤコマは強くなるのが好きで俺との相性が良いんじゃないかと思ってる。

現にヤヤコマは俺に懐いている。

バトル時は徹底的に攻撃とかをするが、別に気にしない。

俺も徹底的にする派だから…

うん！やっぱりヤヤコマは俺に似てるな！

二番道路でのレベル上げは想像よりも早く終わってしまった。

なぜかと言うと、野生ポケモンが俺達を見ると一目散に逃げて行く

からだ…

それを追うケロマツとヤヤコマは凄くいきいきしてる…

獲物を追うのが好きなんだな…うん！良いことだ！

何でって？ケロマツとヤヤコマの素早さがとんでもなく上がって、

めっちゃ速いからさ…

逃げるポケモンを一瞬で追いついて攻撃…もう少し遠い所にいる

奴はヤヤコマが見つけれケロマツに教えてる。

ヤヤコマはケロマツを徹底的に育てたいんだよな？

うん…

よく考えれば、俺…何もしてない…

どうしたらいいのか…

うん！

とりあえずここから離れてハクダンの森に行こう！

ポケットモンスターXY バロンの旅 五話

五話

俺はヤヤコマとケロマツをモンスターボールに戻し、ハクダンの森に向かった。

その道中、

「僕とポケモンバトルしよー!」

急にそう言われた…

まあ、お金も欲しいし受けてやるか…

「良いぜ!バトルしよう!」

「あっ!言い忘れてました!僕はビズと言います」

「俺はバロン。よろしくな」

☆ビズVSバロン☆

勝負…始め!

「行け僕の相棒!ジグザグマ!」

『ジグ!』

「行け相棒、ケロマツ!」

『ケロ!』

さあ!やってやるか!

「ジグザグマ!先にアタックするぞ!たいあたり!」

ジグザグマはジグザグに進んでたいあたりをしてきたが…

遅い!

遅すぎる!

「ケロマツ、あれぐらいは躲す事が出来るだろ…頼んだよ」

ケロマツはうなづき、ジグザグマが直前まで来てから難なく躲した。

さあ、仕上げようか!

「ケロマツ、でんこうせっかでトドメをさせ」

『ケロ!』

ビュン!

俺、でんこうせっかかって命令したよな?

でんこうせつかの速さ超えてるぞ…

あれは…神速の領域だぞ…

ジグザグマはケロマツの技をまともに受けすぐに戦闘不能になった。

まあ、あれをくらったら負けるわ〜

「悔しいが僕の負けだ…」

すると、ポケモン図鑑にお金が増えた。

この世界でのお金は、一般人はカード、ポケモントレーナーはポケモン図鑑にお金が増えるようになってる。

ちなみに…

ポケモントレーナーは、バトルで負けると自動的に勝った方のトレーナーに相応のお金が増えるような仕組みになっている。

もちろん、全額では無い。

よし！お金ゲットだ！

これできずぐすりが買える！

俺はバトルが終わったのでケロマツをボールに戻し、ハクダンの森に向かった。

ハクダンの森に着くと、褐色の少女、巨漢な少年、小柄な少年の三人組に出会った。

「やあ、君達はここで何をしているの？」

俺はとりあえず声をかけてみた。

もしポケモントレーナーだった場合、バトルしようと思っていたから。

「私はサナ。バロン君を探していたの。ハクダンの森は絶対に通ると思っで、ここで待ってたんだ」

なるほどね。じゃあ、この三人組は俺に用があるって訳だ。とりあえず話を聞かか。

「そのバロンって人…俺だよ？」

「「え…？」」

三人とも一緒の反応って面白いや！

「じゃあ、ダンテ所長に会った？」

「うん」

「じゃあ、ポケモン図鑑も貰った？」

「うん」

「って事は、ポケモンも貰った？」

「うん」

三人は顔を見合わせると、小柄な少年が話かけてきた。

「僕はトロバ。僕達はプラターヌ博士からバロンさんに最初のポケモンやポケモン図鑑を渡すように言われまして…」

俺はふと思った事をいった。

「それってさ…二番道路に行く前に渡さないとダメじゃないかな？ここはもう、野生のポケモンもいるし、何より、メイスイタウンで渡してくれた方が早かったし安全だった。ちなみにダンテ所長から貰ったポケモン、ポケモン図鑑は返すつもりは無いって事は先に言っておくわ」

だって…ポケモン図鑑は凄くいい機能が付いてるし、ケロマツもヤコママも俺のポケモンだ。誰にも渡すなんてするもんか。

「そうですよね…わかりました。今回の件は忘れてください」

「ちよつと待てよトロバ。バロンにポケモンを渡すのはいいんじゃないのか？」

「ティエルノは黙ってください」

ん？ポケモンは貰えるのか？それはいい事を聞いた…

「ティエルノよ。ポケモンはもらって良いんだよな？」

「ああ！博士から渡すように言われてたからな！」

「じゃあ、ポケモンを貰いたいのだが…」

「おう！フオッコにハリマロンにケロマツ。どれにする？」

んー悩むが…やっぱりハリマロンかな？

「じゃあハリマロンにするよ」

「分かった！これがハリマロンのモンスターボールだ！可愛がってやれよー！」

「もちろん！」

あつという間にティエルノからハリマロン入りのモンスターボールを貰い、俺のポケモンになった。

トロバは慌てていたが放っておこう。面倒くさそうだ。

サナは呆れていたしまあ、大丈夫だろ。

ティエルノは達成感があるみたいで凄く満足気だ。

「さて、バロンよ！ケロマツは育てているんだろ？ポケモンバトルしようぜ！」

ラッキー！向こうから勝負を仕掛けきた！

「もちろん！俺対サナ、トロバ、ティエルノでも良いぞ」

この言葉に三人は一斉に

「分かった！」

さくって！

ポケモンバトル楽しめますか！

ポケットモンスターXY バロンの旅 六話

六話

俺はサナ達とポケモンバトルをする事になった。

☆バロンVSサナ、トロバ、ティエルノ☆

3対3のバトル形式！

俺が使うポケモンは、

ケロマツ、ヤヤコマ、ハリマロンだ。

サナはヒトカゲ。

トロバはフシギダネ。

ティエルノはゼニガメだ。

「じゃあ始めるぜ！フシギダネにニトロチャージ！」

『ヒッノー！』

ヤヤコマは瞬く間にフシギダネに接近し、回避も出来ないままフシギダネに攻撃を当て戦闘不能にした。

「そんな！僕のフシギダネが！」

フシギダネは状態異常攻撃をしてくると思い一番最初に倒してやったのだ。

さーて次は…

「ゼニガメ。ヤヤコマにみずでっぼう！」

『ゼニ〜！』

ティエルノは直ぐにヤヤコマを攻撃してきて焦ったが

「ハリマロン、ミサイルばり！」

『ハリ〜』

ハリマロンは直ぐにミサイルばりを使いみずでっぼうに当てて相殺した。

「ケロマツ、ゼニガメにでんこうせっか！」

『ケロー！』

ケロマツは神速の速さでゼニガメに攻撃をして吹き飛ばした。

ゼニガメはそのまま戦闘不能に。

「ゼニガメが！」

「残りは一体！ケロマツ、みずでっぼう！ヤヤコマ、エアスラッシュ！ハリマロン、ミサイルばり！」

俺は残りのヒトカゲに容赦なく一斉攻撃をした。

「ヒトカゲ！急いであなをほる！」

『ヒノ！』

ヒトカゲは素早く穴を掘り、一斉攻撃を交わした。

その後直ぐにケロマツの下の地面が膨らんで、ヒトカゲが穴から出て来てケロマツをアッパーで攻撃した。

ケロマツは仰け反る形で吹き飛ばされ近くにあった木にぶつかった。

「今の攻撃は驚いたぞ……だが！ヤヤコマ、エアスラッシュ！ハリマロン、ミサイルばり！」

俺はヤヤコマとハリマロンに同時攻撃を仕掛けたが、

「ヒトカゲもう一度あなをほる！」

ヒトカゲは素早く穴を掘りまた攻撃を躲された。

次はどこから来るか分からない緊張感の中、ハリマロンの足下が急に膨らんだ！

そこからヒトカゲが出て来てアッパー攻撃をハリマロンに当てた！

ハリマロンもその攻撃を受け仰け反る形で吹き飛ばされ、地面に叩き付けられそのまま戦闘不能になった。

俺はハリマロンをモンスターボールに戻してた。

「お疲れハリマロン。回復したら特訓するからね」

俺は少し笑って言うてからヤヤコマの方を見た。

ヤヤコマははねやすめの技でHPを回復してくれてたので、大丈夫そうだ。

ケロマツの方を見ると。

ケロマツはゆっくり立ち上がった…

だが様子がいつもと違う…

なぜなら……

目が赤く染まっている…

身体からは青色の気が出ている…

『ゲツゴー！！』

ケロマツは完全に怒りモードだ…

しかも並大抵の怒りじゃない…

ケロマツは声をあげた後ヒトカゲを睨んだ。

その瞬間…

ケロマツはヒトカゲの前に一瞬で移動…

そのままヒトカゲを掴み…

技【いあいぎり】を使ったがただのいあいぎりではなかった…

刀身は青く光り、その周りを赤い気が纏っている…

初めて見た技だ…

技名…【居合斬り改】でいいよね？

あっ！

その前にケロマツを止めないと！

「ケロマツ！待て！俺の指示を聞いてくれ！」

ケロマツは聞こえていないのか、その居合斬り改をヒトカゲに当てようとした！

その瞬間、ヤヤコマがニトロチャージを使いケロマツに攻撃した！

ケロマツは少しよろめいた瞬間にヒトカゲはケロマツから脱出した。

ケロマツはヤヤコマを睨み、居合斬り改を構えた…

ヤヤコマはニトロチャージを使い炎を体に纏わせた。

「サナ！今うちのヒトカゲをモンスターボールに戻せ！」

「分かった！戻ってヒトカゲ！」

これで一応ヒトカゲは無事だが、ケロマツとヤヤコマか…

まさか俺のポケモンが怒りで我を忘れるとわ…

俺が何とかしないと…

ポケットモンスターXY バロンの旅 七話

七話

俺はケロマツの暴走止めるため、ヤヤコマと一緒にケロマツと戦うことにした。

☆ケロマツ怒りモードVS俺&ヤヤコマ☆

ちなみに俺は空手や剣道とかもやっており、多少は戦える。

まっ！

俺の事は置いておき、ケロマツをどうやって落ち着かせようかな？

少し考えてるうちにケロマツはいなくなっておりヤヤコマの背中に乗っていた。

そして…

ケロマツは居合斬り改をヤヤコマの背中に思いきり刺した！

ヤヤコマは地面に落ち戦闘不能になった。

俺は直ぐにヤヤコマをモンスターボールに戻して、

「お疲れ様ヤヤコマ。ケロマツ！お前、仲間まで斬りつけやがって！」

俺は近くにあった少し丈夫な木の枝を折り、構えた。

俺はその木の枝に気を送り武装した。

とりあえず、木の枝を武装したので折れにくい。

名前く【気剣】でいつか！

ケロマツは直ぐに動き俺を攻撃して来たが、俺は気剣で受け流しケロマツの背中に気剣を振った。

だが、そこにはケロマツはいなく俺の背後に瞬時に回っていた。動きが凄く早い！

更に怒りモードなのに動きに無駄がない…

ヤバくね…

だが、俺も剣道で培ってきた物がある！

負ける訳にはいかない！

俺は自分の体に気を纏わせ、身体能力を底上げした。

俺が先ほどから使用している気だが、これは自分の意識を使って身体や物を強化出来るものだ。

俺はそう言い近くにあつた岩に座り休憩した。

サナは俺が疲れてるのを察して、水筒の水をくれた。

俺は素直に礼を言い、水を飲んだ。

「だいぶ疲れてるね。少し休んで！」

サナはそう言いティエルノとトロバにオレンの実やオボンの実を取ってくるように言った。

サナは水を汲みに行き、俺は1人岩に座つたままの状態になった。疲れたし少し寝るかな…

ポケットモンスターXY バロンの旅 八話

八話

俺は少し休憩していると、ティエルノとトロバが大きい葉に木の実をいっぱい積んで持ってきてくれた。

木の実はおレンの実、オボンの実と回復に役立つ木の実が中心で、モモンの実、チーゴの実と他にも状態異常を直す木の実を取っていた。

「バロン待たせたな。体は大丈夫か？」

ティエルノがそう言いオボンの実を手渡してくれた。

「ありがとうティエルノ。助かったよ。ポケモン達の体力も回復したのだが」

「もちろんだぜ！ほら、オボンの実とおレンの実。バロンのポケモンは強いからな、多めに渡しておくよ」

俺はティエルノにありがとうと礼を言い木の実を貰った。

☆入手アイテム【木の実】☆

おレンの実10個

オボンの実10個

モモンの実10個

俺は木の実を一度鞆に入れ、モンスターボールからケロマツ、ヤヤコマ、ハリマロンを出した。

ティエルノとトロバは少し離れた所でゼニガメとフシギダネを出し、木の実で体力を回復していた。

俺も木の実でポケモンを回復させた。

その時にサナが水筒に水を入れて持って来てくれた。

なぜ分かったかと言うとチャプチャプと水の音がしたから。

「ティエルノ、トロバ水をどうぞ」

「ありがとうサナ」

2人は礼を言うと言った水を少し飲み、ポケモンにも飲ませてあげた。

「バロン君もどうぞ」

サナはそう言い俺にも水をくれた。

「サナの分はどうするの?」

そう・・・水筒は三本しかないのだ・・・

「うん? バロン君に渡した水筒の水を飲むけど?」

サナは不思議そうにそう言った。

「そうか。ありがとうなサナ。ありがたく頂戴します。」

「うん!」

俺は少し水を飲みサナに返した。

「サナは直ぐに水を飲んだ。」

俺はふと気づいた・・・

これ、間接キスじゃないか・・・

サナはあまり気にしないみたいなので気にしないようにはするが、なかなか緊張するものだ・・・

俺達はポケモン達の体力回復と休憩を終え、ハクダンの森を出るところにした。

少し進むと出口が見えて来たのだが、誰かが物凄い勢いで出口からこちらに向かってきた。

「どいて、どいて〜!!!」

その人はそのまま俺達の所に来たので俺達はさっと左右に分かれ、道を譲った。

その人はそのまま森の中に走って消えていった。

「何だったんだ?」

「「さあ?」」

その直ぐ後、出口の方からうるさいバイクの音が聞こえてきた。

「おいこの森に逃げ込んだはずだ! 探せ!」

「「了解!」」

その声が聞こえた後、バイクに乗ったスキンヘッドの人が先頭でその後ろにリーゼントの男が3人がバイクになって現れた。

「おいガキども! ここに女が通らなかつたか!」

俺達は顔を見合わせ、

「通っていませんが、なにか問題がありましたか?」

俺はそう答えた。とりあえず追っている理由を聞きたい。

「その女はなあ！俺を侮辱しやがった！だから許しておきねえんだよ！」

ああ〜侮辱されたら怒るわ・・・

あの女と言うのは先ほど走り去った人だろうな。

「そうでしたか。それは酷いですね。もし捕まえたとして何かするんですか？」

「ああ！痛めつけてやるぜあの女なあ！」

俺の中の正義がこの男を止めろと聞こえた気がした。

「ちよつとそれは酷すぎです！ポケモンバトルで俺に勝てたらここを通しあげます。その女の人はこの先を走って行ったので」

「このガキ！俺に嘘をつくとはいい度胸してんじゃねえか！おい！おめえらは後ろのガキ3人の相手をしてろ！」

「はい！」

このスキンヘッド！俺の仲間にまで！

「おい！こいつらは関係ねえだろ！」

「大丈夫だバロン。俺達も戦える。この人達を通したら危ないしな。協力させて貰うよ」

「すまない・・・いけ！ケロマツ、君に決めた！」

「ゼニガメ」

「ヒトカゲ」

「フシギダネ」

「君に決めた！」

俺達はポケモンを出して構えた。

「俺のポケモンは、いけ！ドクロッグ！」

『グロ〜！』

「俺達は、いけ！グレッグル！」

相手は毒タイプと格闘タイプを合わせ持つポケモンだ。

☆暴走族頭&したつぱ3人VSバロン、サナ、トロバ、ティエルノ

☆

「グレッグル、ケロマツにどくづき！」

何?!三体で一匹を集中攻撃だと！

「させない！ゼニガメグレッグルにこうそくスピーン！」

ゼニガメの攻撃がグレッグルに当たり、グレッグルは飛ばされた。ありがたい！ケロマツの居合い切り改を使えば勝てるな。

「ケロマツ、いあいぎりー！」

ケロマツは刀の形状をした状態でグレッグルのどくづきを相殺した。

更にケロマツは足を使いグレッグルを蹴り弾き飛ばした！

「後ろがから空きだぜ！ドクロッグ、ポイズンクローー！」

ポイズンクローーだつて!? テールは知っているがクローーは初めてだ。ケロマツはギリギリの所で気づき紙一重で躲した！

正直危ない。あの攻撃が当たればケロマツもただでは済まなかつただろう。

オリジナル技の可能性が高いな。たぶん・・・

どくどく×どくづき

これで間違いないだろう・・・

ならばこちらもオリジナル技を使うまで！

「ケロマツ、居合斬り改だ！」

『ケローー！』

ケロマツは居合斬り改でドクロッグを攻撃したが、

「ドクロッグ、お前も居合斬り改だ！」

なに!?

色は紫・・・と言う事は

いあいぎり×どくどくか!!

お頭と呼ばれる事だけの実力は確かだつて事か!だが!ケロマツも負けてはいない!

「いけ〜!ケロマツ!」

『ケろ〜!』

「やれ!ドクロッグ!」

『グろ〜!』

二体の居合斬り改がぶつかり、火花が散った!

ケロマツは攻撃がぶつかった瞬間、直ぐに横に移動し横から薙ぎ

払った！

それをドクログは一步下がり躲して、直ぐに薙ぎ払い！

それを読んでいたかのようにケロマツも直ぐに一步下がり躲し、横に移動し、薙ぎ払った！

この連続攻撃にドクログの反応は少し遅れ、ケロマツの攻撃がドクログの脇腹に当たり、吹き飛ばした。

「良くやったケロマツ！」

『ケロー！』

ドクログは少しよろめき立ち上がった。

吹き飛ばしたのに・・・

サナ達の方を見ると、したっぱのリーゼント3人組とのバトルが決着を迎えようとしていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 九話

九話

サナ達はしたっぱがバロンの邪魔をさせないように戦っていたが、トロバの挑発により直ぐにサナ達を攻撃してきた。

その挑発が・・・

「あなたたちはバロンさんの邪魔をしようとしています。それは僕たちが怖いからですか？したっぱはどこまで行ってもしたっぱなんですわ〜」

「「こいつーぶっ潰す!!」」

トロバのこの挑発でしたっば3人はほぼトロバだけを見ていた時に、

「ゼニガメ、高速スピーン！」

「ヒトカゲ、穴を掘る！」

2人は敵がトロバに集中しているときに攻撃し、グレッグルを吹き飛ばし、ヒトカゲは吹き飛ばしたグレッグルの下から出て、更に吹き飛ばす連携攻撃をして、グレッグルを戦闘不能にした。

残りは二体!!

「ちっ！戻れグレッグル」

「後は任せろ！」

「フシギダネ、痺れ粉！」

フシギダネの粉が二体のグレッグルに当たり、麻痺状態になった。「姑息なまねを！グレッグル、毒つきだ！」

『グッ!?!』

しかし、グレッグルは体が痺れて動きが取れない・・・

フシギダネが使った痺れ粉は、オリジナル痺れ粉なのだから・・・痺れ粉を重複して使っているので普通の痺れ粉の倍以上の効果を発揮する嫌な状態異常攻撃。その間に攻撃役の2人がとどめをする段取りなのだ。

な・・・で・・・

「ゼニガメ！超！高速スピン!!!」

高速スピンを更に乗せした超高速スピン。威力は2倍だ！

痺れて動けない二体のグレッグルの内一体にゼニガメの攻撃が当たり、凄い勢いで吹き飛んだグレッグルはそのまま戦闘不能に・・・

「ヒトカゲ、爆・火炎放射!!」

火炎放射に爆発する煙幕を使った火炎放射。爆発の威力は技【自爆】と一緒に・・・

「グレッグル！迎え撃て!!ヘドロ毒爆弾!!」

ヘドロ爆弾にどくどくを足した感じだな。けど！火炎放射で焼き尽くす!!!

「やつちやえ〜!!!」

火炎放射はヘドロ爆弾をあつかりと燃やし尽くし、グレッグルに当たった。

その後大爆発が起こり、グレッグルは吹き飛んで、戦闘不能に・・・それを横で見てた俺、素直にえげつないと感じてしまった。

リーゼント3人組はサナ達が楽勝に勝った。

フシギダネ、恐ろしい技覚えていたんだな・・・

ゼニガメの超・高速スピン。あれの対処は今はまだ無理だな・・・ヒトカゲの爆・火炎放射は水で何とかなるのかな？今度戦ってみていな。

俺はサナ達のバトルが終わったのでお疲れと声をかけ、暴走族の頭に向き直った。

「俺達がバトルに勝ったので素直に引き下がってくれませんか？」

「俺達が素直に従うと思ったか？ハハハハハ!!!そんな訳ねえ〜だろうが!!!やろう共〜!!!バイクで突っ走るぜ〜!!!」

あ〜やつぱりダメか・・・バイク怖そうかな・・・

暴走族はそのままバロン達に向かって来た！

「メタグロス、ギガイinpクト!!!」

後ろから急に声が聞こえたと思ったらメタグロスが暴走族に向

かってギガインパクトを当てた。

その衝撃でバイクは大爆発して暴走族は空に飛んで消えていった……

(アニメでロケット団が飛ばされるイメージです)

「助けて頂いてありがとうございます！あなたは一体？」

その人は銀髪に黒のスーツ……

「僕はダイゴ。ホウエン地方でチャンピオンをしているよ。今はメガ進化の研究中だね。この地方に来たんだ」

「ホウエン地方のチャンピオン……鋼タイプを使うと言われてる人……」

俺は気づいたら喋っていた。

「そうだよ。僕は鋼タイプが好きだね。ところでそろそろ名前を聞いても良いかな？君たちのポケモンの合体技も気になってね」

ダイゴはそういい、答えるのを待っているようだった。まあ隠す必要も無いので教えるが。

「俺はバロン。ポケモンマスターを目指しています」

「俺はティエルノ！ポケモンと楽しくダンス、バトルを楽しむのが目標さ」

「僕はトロバ。ポケモンの写真を撮りたいです」

「私はサナ！今は自分の夢を探し中よ」

俺達は自己紹介を済ませ、ダイゴの聞きたい事、俺達が聞きたい事を話し合った。

気がつけば時間は夕日が染まる時間……ダイゴも話に夢中になって気づいていなかったみたいだ。

俺達はダイゴと一緒にハクダンの森を抜け、ハクダンシティに向かうため三番道路に向かった。

三番道路に着くと、ポケモン達が草むらや池から俺達を見ていた。

ダイゴは野生のポケモンを見ていると

「おや……これは珍しいな……」

ダイゴは草むらで隠れていたピカチュウに向かってそう言った。

俺達もそのピカチュウを見ると、普通のピカチュウは黄色だが、そ

のピカチュウは白色だったのだ。色違いなら橙色のはずなのだが、白色は聞いたことも無い・・・

ダイゴも興味津々でピカチュウを見ていた。

サナ達もピカチュウを興味津々で見ている中、俺はこっそりポケモン図鑑を取り出しピカチュウのステータスを見た。

名前 ピカチュウ

レベル ??

特性 ノーガード・蓄電・あめふらし

技 雷

アイアンテール

地割れ

???

・・・・・・ヤバくない??

レベル??なんじゃそりや！ポケモン図鑑でも測定出来ないレベル・・・??

しかも最後の技名の??って何だ!?

更に!!特性がピカチュウじゃ無くなってる!?!しかも三つの特性だと!?

ヤバイ!!欲しい!!!ゲットしたい!!!

「みんな、俺、あのピカチュウゲットしたい!!いや!ゲットさせてくれ!!!」

俺はもう我慢出来ずにみんなにそう言った。

「おやおや。まあ私がかまわないけどお仲間さんはどうかな?」

「俺はかまわないぜ」

「僕もです」

「私も大丈夫だよ」

みんなは俺にピカチュウゲットのチャンスをくれた。

良かった・・・これであるピカチュウをゲット出来たら・・・

今はゲットすることだけに集中しよう。

「ピカチュウ!俺とバトルだ!いけケロマツ!!」

『ケロー!』

☆ケロマツVS色違いピカチュウ☆

ピカチュウはバトルが始まった瞬間、地割れを使ってきた!

ケロマツは直ぐに近くの木に登り躲したが、ピカチュウの特性、ノーガードが発動するはず・・・なぜ躲せた?

ピカチュウの方を見ると、その疑問を考えてるようだった。

それもそのはず、特性ノーガードは「絶対に避けられない」の特性なのだから・・・

もう一つの特性、蓄電は電気タイプの技を受けると体力を回復出来る特性・・・

最後の特性、あめふらしは「雨」を降らす事が出来る特性・・・

ちなみにケロマツの避けれた理由、今はまだ明かされていないが説明しよう。

ケロマツにも、もう一つ隠された特性があったのだ・・・

それは・・・隠れ特性【絶対回避】

全ての攻撃を【回避】出来る最強特性・・・

だが、この特性は意識しないと発動しないという弱点もある。

まだ雨が降っていないと言う事は、ピカチュウのあめふらしも意識しないと発動しないタイプだな。

ケロマツは「絶対に攻撃を避けたい」の意識で無意識に【絶対回避】を発動させたのだ。

普通の攻撃を避けたいとは少し違うだけで特性が発動しないのは後々分かることになる。

「ケロマツ、良く避けれたな。ナイス!!ここからは俺達の番だ!ケロマツ、居合斬り改!」

ケロマツは刀を腰辺りで抜刀、ピカチュウに斬りかかった。

ピカチュウはアイアンテールでケロマツの攻撃を防いだが、ケロマツは直ぐに横に回りもう一度刀を振った。

ピカチュウはその攻撃に対処出来ずそのまま攻撃を受け吹き飛んだが直ぐに体制を立て直した。

その後直ぐ、雷雲が空を覆った・・・所々雷の音も聞こえる。

そして、雨が降った・・・

ピカチュウを見ると、少し笑ってる？

その後直ぐピカチュウは空に雷を放った。

その雷は雷雲に吸い込まれたと思ったら直ぐに雷がピカチュウに落ちた。

ピカチュウは特性、蓄電の効果で体力を回復したのだ！

更にそのピカチュウが電気を帯びてパワーアップ・・・

これは大変だ。

ピカチュウはアイアンテールを発動したが、そのアイアンテールは電気を帯びており、雷鋼テールになった。

(雷鋼テールⅡ雷+鋼タイプ)

更にピカチュウは磁力すら操り、加速・・・瞬時にケロマツの懐に潜り込むと雷鋼テールがケロマツを捕らえた。

ピカチュウはニツと笑うとそのまま雷鋼テールを振りケロマツを吹き飛ばし、更にピカチュウは追撃し、雷鋼テールをもう一度叩き降ろした！

ケロマツは強く地面に叩き付けられ戦闘不能に・・・

俺は直ぐにケロマツをボールに戻し、労いの言葉をかけた。

このピカチュウ、めっちゃ強い。

ケロマツのスピードを遙かに超えている。

雷電モードのピカチュウ、これは厄介だ・・・

このピカチュウ、めっちゃ強い。

ケロマツのスピードを遙かに超えている。

雷電モードのピカチュウ、これは厄介だ・・・

ハクダンシテイ編

ポケッツトモンスタ―XY バロンの旅 十話

十話

俺の相棒のケロマツが倒された今、俺のポケモンはヤヤコマ、ハリマロンだけ。

相手は雷電モードピカチュウ・・・

この世界のポケモンはオリジナリティが豊富で結構強いポケモンがいて大変だが、燃えてきた！

必ずこのピカチュウをゲットしたい！

俺はボールからヤヤコマを出した。相性は不利だが素早さはまだこちらが上のはずだ。

―第2ラウンド―

☆雷電モードピカチュウVSヤヤコマ☆

「ヤヤコマ、ニトロチャージ！」

ヤヤコマは炎を纏い、ピカチュウに接近したが・・・ピカチュウはまだ動かない。

ヤヤコマはそのままピカチュウにニトロチャージを当て爆発が起こった！

爆発が晴れた後、ヤヤコマはピカチュウの尻尾の上でぐったりとしていた。

よく見ると、ヤヤコマの腹にピカチュウの尻尾があった。

そう、ピカチュウはヤヤコマが接近した瞬間に雷鋼テールを当て、戦闘不能にしたのだ。

ピカチュウはヤヤコマを俺の方に尻尾で投げ捨てニツと笑った。

俺は直ぐにヤヤコマをボールに戻し、労った。

このピカチュウは素早さも上でパワーも上・・・

俺のポケモンはハリマロンだけ・・・

正直きついが・・・仕方ない、ハリマロンに託すか。
俺はボールからハリマロンを出した。

―第3ラウンド―

☆雷電モードピカチュウVSハリマロン☆

バトルが始まった瞬間、ピカチュウは地面に雷鋼テールを当て地割れを発動させた。

ピカチュウの特性で避けられないハリマロンは為す術も無く地割れの餌食になり戦闘不能に・・・

開始早々にやられた・・・俺はハリマロンをボールに戻した。

ピカチュウを見ると満足そうな顔でこちらを見ていた。

話し合いで仲間になってくれないだろうか・・・

俺はピカチュウに歩み寄り、ピカチュウに声を掛けた。

「なあピカチュウ。俺はポケモンマスターになるのが夢なんだ。お前も俺と一緒に頂点を目指さないか？」

俺はそう言いモンスターボールをピカチュウの前に置いた。

「もし一緒に来てくれるならそのモンスターに入ってくれないか」

ピカチュウは少し悩んだが、俺を一度見て、雷電モードを解除した。

そして、ピカチュウはボールにタッチし、ボールの中に入った。その後すぐカチツと音が鳴った。

「バロン君見事だね。あのピカチュウを手に入れることが出来るなんて」

ダイゴは俺にそう言い拍手をくれた。

サナ達も拍手をしてくれて嬉しかった。

空に立ち籠めていた雷雲は無くなり、雲一つない青空が広がっていた。

俺のピカチュウは天候すら変えるのかと思ってしまったが、雷電モードはあの状況下以外はならないと思うのでよしとしておこう。

「みんなありがとう！大切に育てるよ」

俺はそう言いピカチュウをボールから出した。

ピカチュウは直ぐに俺の肩に乗った。

「ピカチュウもう懐いたんだ。さすがバロン君！」

サナは素直な感想を言ってくれたが、ピカチュウはテレパシーで俺に語りかけてきた。

『バロン。俺はお前と頂点に立つことにした。これからよろしく頼むぞ』

「もちろんだ」

俺は小声でピカチュウにそう言い撫でてやった。

「さーハクダンシティに向かおう！」

「「おー！」」

俺達は再びハクダンシティに向かって歩き出した。

3番道路からハクダンシティは直ぐであり時間はかからなかったはずなんだが、なぜかポケモンバトルを申し込むトレーナーが多くて、ピカチュウで全て片付けた。

ケロマツ達はピカチュウに全滅させられたからな・・・

ちなみに雷電モードは使わずに勝てる相手ばかりだったので普通に勝利していった。

そのせいで、ハクダンシティに着いたのは夜だったので、みんなでポケモンセンターでポケモンを回復させ泊まる事にした。

ポケモンセンターでは食堂もあり、宿泊施設も大方備わっている所が大半なので問題はないのだ。

まあ時々、そういう設備が無いところもあるのだが・・・

俺は明日の朝にジム戦をすることにし、みんなで晩ご飯を食べるところにした。

ダイゴも今日はここで泊まるらしく、明日の朝出発すると言ってい

た。

サナ達はもう少しポケモンを鍛えてからジム戦に挑むと言っていたので、明日から1人でまた旅だ。なので今日はみんなで楽しむ事になった。

ちなみに寝る部屋なのだが、俺はダイゴと一緒に寝ることになった。

ダイゴと寝れるとは少し驚いたが、こんなきかいもう無いだろうな
と思い、一緒に寝さして貰った。

寝る前にダイゴから、

「これは僕から君にプレゼントだよ。大切に育ててね」

ダイゴから言われ貰ったモンスターボールにはダンバルが入っていた。

ダンバルは、ダイゴの持っているメタグロスの初期ポケモンだ。

ダンバル↓メタング↓メタグロスとなるのだ。

「ダイゴさん、ありがとうございます！大切に育てます！」

「うん！僕は明日の朝早くにここを出発するから次会ったときはバトルをしようか」

ダイゴからポケモンバトルしようと言ってくれて凄く嬉しくて

「はい！絶対しましょうね！」

俺はそう言いダイゴと握手をしてから寝た。

次の日の朝、俺は目が覚めるともうダイゴが出発した後だったが、机の上に置き手紙があった。

バロン君へ

君はこれからもっと強くなるだろう。

もしかしたら、僕を超えるほどに・・・

僕は今、メガ進化の研究を doing ね。メタグロスをメガ進化させる事が出来る石を見つけたんだ。それも二個！僕は1つで十分だか

ら君に1つあげるね。ダンバルを最終進化させてメガ進化を体験するといい！けど、それにはもう一つ必要要素があるんだけど、その機械はプラターヌ博士に尋ねてみるといい。

そのの袋にあるからね。

では、またのきかいに会おう!!

ダイゴより

ダイゴさん、ありがとう。

俺は袋に入っている物を確認した。そこには、

【メガグロスナイト】と言うメガ進化させる石があった。メガグロスに進化した持たせてあげよう。

サナ達は隣の部屋でまだ寝ていたので俺は食堂で朝ご飯を食べ、ジムに向かった。

ハクダンジムに着くと、女性の方が出迎えてくれた。

「ようこそチャレンジジャー！ここはハクダンジムだよ。私はこのジムリーダーのビオラ！よろしくね」

「こちらこそよろしくお願ひします。俺はバロンと言います」

自分の名前を名乗るのを忘れて後から言ってしまった。

「ではバロン君、バトルしちやいましょうか！フィールドに案内するね」

俺は礼を言うとビオラに着いて行った。

少し歩くとバトルフィールドに着いた。

そこには審判の方がもう立っていてくれたので、俺も早く準備をした。

まあ準備と言っても所定の位置に立だけどね。

「それではこれより！ジムリーダービオラ対チャレンジジャーバロンの試合を始める。使用ポケモンは三体！ポケモンの入れ替えはチャレンジジャーのみとする！それでは始め！」

「出番よ、アメタマ！」

「行ってこいケロマツ！」

ジム戦 第1ラウンド

☆ジムリーダービオラVSバロン☆

「ケロマツ、先手必勝だ！居合斬り！」

ケロマツはアメタマに瞬時に近づき攻撃しようとしたが、

「アメタマ、ケロマツの足下にバブル光線」

アメタマはケロマツの足下に泡状の光線を出してきた。

それは見事ケロマツの足下に付着しケロマツは体勢が崩れた！

「アメタマ、オーラロビーム！」

アメタマは虹色の光線をケロマツに当てようとしたがケロマツは体を仰け反らして紙一重で攻撃を回避した。

「ケロマツナイスだ！電光石火で一気に近づけ！」

ケロマツは体勢を立て直すと電光石火で直ぐにアメタマに近づいた。

「今だ！居合斬り！」

「そうはさせないわ！アメタマ、高速移動で避けてから、シザークロス！」

アメタマは凄い速さで下がってから横に移動しシザークロスを仕掛けてきたが、

「ケロマツ、居合斬りだ！」

ケロマツは居合斬りでアメタマのシザークロスを防いだ！

「これであなたのケロマツは動けない、今よ！アメタマ、オーラロビーム！」

「させない！ケロマツ、足でアメタマの口を封じてくれ！」

ケロマツは起用にアメタマの口を足で封じ、オーラロビームを口の中で爆発させた！

アメタマはその衝撃でふらつき、

「ケロマツ、トドメの居合斬り！」

ケロマツは居合斬りをアメタマに当て、戦闘不能にした。

「アメタマ、お疲れ様。見事ですね。次はそうはいきませんよ。出番よ、アメモース！」

ジム戦 第2ラウンド

☆アメモースVSケロマツ☆

アメモースはアメタマの進化形・・・飛行タイプがある虫ポケモンか。

「アメモース、銀色の風！」

アメモースから銀色の色をした風がケロマツを襲う。

「追撃よ！アメモース、ツバメ返し！」

アメモースが銀色の風の力で加速した！

「ケロマツ、居合斬りで迎撃してくれ！」

ケロマツは居合斬りで迎撃しようとしたがそれよりも早くアメモースのツバメ返しがあたった。

ケロマツはその攻撃が当たり戦闘不能になった。

「良くやったな。お疲れ様。出番だ、ヤヤコマ！」

ヤヤコマはバロンの周りを一周回って着地した。

ジム戦 第3ラウンド

☆アメモースVSヤヤコマ☆

「アメモース、ツバメ返しよ！」

「ヤヤコマ、ニトロチャージ！」

アメモースはヤヤコマに攻撃しようとしたが、ヤヤコマは瞬時に下降し、アメモースが上を通った瞬間、急上昇し攻撃を当てた！

更に攻撃を当てた時に、アメモースの体は燃え、地面に落下した。

「ヤヤコマ、トドメのエアスラッシュ！」

「アメモース避けて！」

アメモースは必死に逃げようとするが落下の時に羽を痛めていて動けなかった。

そこにヤヤコマのエアスラッシュが当たりアメモースは戦闘不能になった。

「アメモースお疲れ様です。バロン君強いね。ジムリーダーである私の最後のポケモンは、頼んだよドラピオン！」

第4ラウンド

☆ドラピオンVSヤヤコマ☆

え?! ドタピオン!? 毒と虫タイプか!

「私がドラピオン使うの驚いたでしょ」

「はい。しかもドラピオンはレベル40以上で進化するポケモンだったはず」

そうドラピオンはレベル42で進化するポケモンだ。ステータスは勿論高い。

だが! それに勝てる可能性があるポケモンは俺の手持ちにいる!

「ヤヤコマ、ドラピオンにエアスラッシュ!」

「ドラピオン、破壊光線!」

え!? 破壊光線!?

これはヤバイ!!

その時にはもう遅かった。破壊光線はヤヤコマの攻撃を簡単に跳ね返し、ヤヤコマに破壊光線が当たった。

ヤヤコマは地面に落ち、戦闘不能に・・・

「だが! これでドラピオンは動けない! ヤヤコマありがとうな。いけ! ピカチュウ!!」

俺の最後の切り札、ピカチュウ!!

頼んだぞ!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 十一話

十一話

ハクダンジム最後の対戦

☆ドラピオンVSピカチュウ☆

ドラピオンは前の戦闘で破壊光線を放っているので動けないはず。ピカチュウの攻撃で大ダメージを与えてやる!!

「バロン君。1つ教えといてあげるね。私のドラピオン、破壊光線撃つても硬直時間無いからね」

「嘘だろ・・・破壊光線は普通、撃つた後は硬直するはずじゃ・・・」
そのはずなのに・・・

「私のドラピオンはそれが出来ちゃうのよ。鍛えたからね」

ジムリーダーが鍛えたポケモン。破壊光線の硬直すら無くせたと
言う事は、オリジナル技もある可能性がある。

「じゃ、バトルの続きをするよ!ドラピオン、斬空刃!!」

(斬空刃Ⅱ毒+飛行タイプ)

ドラピオンが両手を振った瞬間、紫色の風の刃が出て来て、ピカチュウに向かっていった。

斬空刃!?!そんなの知らん!!見たところは毒、飛行でいいはずだが・・・

「ピカチュウ!避けてくれ!!」

不確かな以上、様子をみたい。

ピカチュウは斬空刃をギリギリのところまで避け、

「雷!」

ピカチュウはドラピオンに雷を放った。

「ドラピオン、防いでね」

ドラピオンは丈夫な2本の手をクロスさせ、ピカチュウの攻撃を易々と防いだ。

「何!?!雷を防いだだと!」

「驚くのはまだ早いよ。ドラピオン、天・地神撃!!」

(天・地神撃Ⅱ飛行+地面+格闘+悪+毒+ゴースト+ドラゴン)計7

種類・・・

ドラピオンは両手を勢いよく振り下ろし、地面を叩き付けた！
すると、ドラピオンの周りに重力が発生した！

その重力は周りを飲み込み始め、ピカチュウの側までやってきた！

「ピカチュウ！雷電モードに入れ！」

俺は直ぐに命令し、ピカチュウに雷電モードを指示した。

ピカチュウは特性のあめふらしを発動し、雨が降り出した・・・

この雨がピカチュウを本気モード・・・雷電モードにしてくれる！

ピカチュウは雨雲に向かって雷を放ち、それがピカチュウに返ってきた！

「なにをしているの？まさか、自爆？」

「違いますよ。見ていれば分かります」

それにしても・・・天・地神撃の攻撃範囲が広い・・・

今はなぜか止まっているが、いや・・・止めているのか？

なんにしても今のうちに雷電モードに入らないと勝てない。

雷がピカチュウに降り注ぎ終わると、ピカチュウの白い体は雷の影
響で金色に輝いていた。

雷電モード完成だ。

「ピオラさん、ここからが本番ですよ。ピカチュウ！地割れだ〜！」

ピカチュウは尻尾を勢いよく振り下ろし地割れを発動させた。

「地割れ!? あっ！ドラピオン避けて!!」

フ・・・ピカチュウの地割れは、普通は避けられないんだよ。

ドラピオンは、ピオラの命令で天・地神撃の攻撃を中断し、避ける
ことに専念したが。

「ピオラさん。俺のピカチュウの特性は普通ではないんですよ。特性
は、ノーガード。攻撃は避けられない」

「何ですって!? ノーガード!? そんなのあり得ない!!」

「では、ホウエン地方のダイゴさんに確認を取って貰ってください。
その時は一緒にいたので」

俺はピオラにそう告げた後に、ピカチュウの地割れはドラピオンを
捕らえた。

「あつ！ドラピオン!!」

ドラピオンは地割れの攻撃によって戦闘不能になったかと思つたが、地割れの攻撃は、「相手よりレベルが高くなければ不発」となる攻撃、だが、地割れは「絶対に起きる」事を生かして、ドラピオンの足場を地割れで絶対に回避出来無くさせてから・・・

「ピカチュウ！最大パワーでねじ伏せろ！最大級の雷鋼テール!!」
『ピ〜カ〜!!』

ピカチュウの雷鋼テールの雷は尻尾に留まりきらず溢れだし、更にその溢れだした雷はピカチュウが蓄電の特性で吸収、更に雷鋼テールに加算され、雷鋼テールの巨大化が完成した。

(雷鋼テールの巨大化・・・威力は350になっており、大爆発の威力より上・・・大きさはピカチュウの大きさ×5倍)

「いっけ〜!!」
『ピ〜カ〜!!』

俺達の声が重なり、ピカチュウは雷鋼テールを振りかざした！

「避けてドラピオン!!」

ドラピオンは必死に避けようと、もがくが足が地面に挟まっており、動けない・・・

ピカチュウの雷鋼テールはドラピオンを捕らえた。

そして・・・

雷鋼テールはドラピオンの体にダイレクトに当たり、地割れで割れていた地面は更に割れ、フィールドはとんでもない事に・・・更にジムの設備の所まで地割れの被害が及び大爆発・・・

更に・・・雷鋼テールの雷が地面に到達したとき、地割れの割れているところに一気に電気(雷)が流れだし、辺り一面が雷の電気で大爆発・・・

ジムを支えていた柱は地割れの影響で崩壊・・・

ジムは崩れ始めて、俺達は被害に遭うと思つた瞬間。

「ハガネール！私達を守って！【守る】」

ハガネールは審判の方を器用に尻尾で捕まえて、俺とピカチュウとピオラさんは走ってハガネールの所に行った。

ドラピオンはハガネールを出した後に直ぐにモンスターボールに戻されており、崩壊に遭う事はなかった。

「ビオラさん、すみません。ジムを……」

ピカチュウも隣で頭を下げていた。

「まあ崩れてしまつては仕方ないよ。でも、これからどうしようかな」

ビオラさんはジムが崩壊している間、どうするかを考えていた。

「あつ！忘れてた！今で悪いけど勝利おめでどう！これが勝利の証、バグバツジよ」

「あ、ありがとうございます」

その後はジムが崩れ去るのを待つて、崩壊が終わつてからハガネールは俺達を解放してくれた。

「ありがとうございますハガネール助かつたよ」

俺はハガネールにそう言い撫でた。

ハガネールは嬉しそうにしてくれた。

「ありがとうねハガネール」

ビオラもそう言いハガネールを撫でた。

ハガネールは凄く嬉しそうにしていた。

ビオラはハガネールをモンスターボールに戻してから審判の方に話があると云つて、隅の方で少しの間話しをしに行った。

俺はとりあえずここで待とう：

少し経つとビオラが戻つて来た。

「バロン君、私、このジムが元に戻るまで一緒に旅に行かせて！ジムのお金は大丈夫だからさ」

「ビオラさんが俺と一緒に旅に行くんですか？」

「うん。ダメなの？」

ダメな事はもちろんない！

しかもお金の方も大丈夫と云つてくれた。

ここは素直に一緒に来てもらう事にする。

「いいえ！ダメじゃないです！一緒に旅をしましょう！」

「うん！よろしくね♪フェイドさん、後の事頼むね」

「畏まりました。お嬢様。良き旅を」

審判の方はフェイドと言うらしい…

……………お嬢様？

「あのくビオラはお嬢様？」

「うん？そだよく驚いた？」

「うん！」

めっっちゃ驚くよ！

お嬢様と一緒に旅に行くなんて！

これは夢か？夢だな！

俺は自分の頬をつねってみた。

うん。痛い…

現実だ！

俺、お嬢様のビオラさんと一緒に旅をする事になった！

これからどうしようく

ポケットモンスターXY バロンの旅 十二話

十二話

俺はビオラと旅をすることになり、一度ポケモンの体力を回復させるためにポケモンセンターに立ち寄った。

俺達はそので戦闘で傷ついたポケモン達の体力を回復させるため、女医さんにポケモンの回復を頼んだ。

「ポケモンの回復をお願いします」

「はい♪」

「私もお願いします」

「えっ？ビオラ様〜!？」

女医さんは凄く驚いて、取り乱したが直ぐに自分の仕事のため、

「かしこまりました。それでは、ポケモン達を預からせて頂きます」

「よろしくお願いします」

俺達は女医さんにポケモンを預け、待合室で待つことにした。

「ところでバロン君は、ポケモン達を進化させないの？」

痛いところを突かれた・・・

進化させたいがなぜか俺のポケモンは進化がしない・・・

なぜだ？

「進化させたいんですが、なぜか全然進化しないんですよ。進化到達レベルはとっくに超えているんですが」

「うーん・・・絆の問題かな〜?」

絆・・・

俺のポケモン達は絆は絶対にあるはずだ。なにかきつかけが必要なのかな？

「ビオラさんのポケモン達は絆で進化したんですか？」

「ええ。絆だね！戦闘中とかで進化したんだよ」

戦闘中か・・・

そこにきつかけと絆と・・・

ほかにも何かあるのかは分からないが物は試しだ！

「ビオラさん！ポケモン達の回復が終わりたい特訓に付き合ってく

ださい」

「ええ！強い事は良いこと！いくらでも付き合おうよ！」

丁度その時女医さんが来て、

「ポケモン達の回復、終わりましたよ。今の話は聞かせて貰いました。裏にバトル場があるのでお使いください」

「ありがとうございます！」

「助かるわ」

俺達は女医さんの言っていたバトル場に着くと、

「ではビオラさん！いきますよ！ケロマツ、君に決めた！」

「アメモース出番よ！」

特訓バトル

☆アメモースVSケロマツ☆

「ケロマツ、居合斬り！」

ケロマツは腰に手を当て、抜刀出来る体勢になり、アメモースに突っ込んだ！

「アメモース、銀色の風で押し返して！」

アメモースは銀色の風をおこし、ケロマツに発射した。

「ケロマツ、居合斬りのまま電光石火で躲せ！」

ケロマツは銀色の風が当たるより早く電光石火で躲し、そのままアメモースの懐まで来た。

「今だ！居合斬り抜刀!!」

ケロマツは溜めに溜めた居合斬りを勢いよく抜刀！アメモースにクリティカルヒットさせ、吹き飛ばした！

だが、アメモースもレベルは高い・・・一発で倒す事は出来ない・・・
「もつとだ・・・俺達のもつと強くならなければ！」

『ケロ〜！』

ケロマツも俺と一緒に事を考えていたらしく、雄叫びをあげた！

「行くぞケロマツ！電光石火！」

『ケロ〜！』

「来るよアメモース！ツバメ返し！」

アメモースは飛行タイプのオーラを纏い、突進してきた！

ケロマツは足に気を溜め、瞬発力をあげ、高速で突進した！

アメモースとケロマツは、バトル場の中心当たりで互いの技がぶつかり合い、火花が散った！

ケロマツもアメモースも負けじと押し合い状態になった！

「ケロマツ！負けるなく！押し返せ！」

「アメモース！押し切りなさい！」

『ケ〜ロ〜！』

突然ケロマツの体は光り出した！

「どうしたケロマツ！」

「バロン君、あれは進化するときの状態よ。光が収まると進化が終わったって事になるのよ。アメモース、少し下がってて」

アメモースは技を解除し、少し下がった。

少したつとケロマツから放たれていた光は消え、別の姿に変わっていた。

「あの姿は?!」

ビオラは進化したポケモンの姿を見て驚いた！

「バロン君、ポケモン図鑑で調べてみて！」

俺は直ぐにポケモン図鑑で調べたが、

「登録項目にデータがありません」

データが無い……?!

「なんてことなの……」

「ビオラさん？」

ビオラは驚きで固まってしまった……

ケロマツが進化した姿は図鑑ではゲコガシラになると書いていたが、俺のケロマツは明らかに別の姿をしていたのだ。

全体的には白色の体をしている。

体は筋肉の塊な、「ゴリキー」みたいな体に……

顔は凶暴な、「リザードン」的な感じに……

背中にはキレのいい、「ボーマンダ」みたいな翼が……

尻尾はしなやかな、「ハクリュー」的な尻尾が・・・

色々なポケモンの特徴を一体のポケモンに詰め込んだかのような特徴のポケモンに進化したのだ・・・

ポケモンは判明していないが、良い！

誰にも知られていない新たなポケモン。

たぶん、新たな技も。

ポケモンのタイプの複数ある可能性。

「今日からお前の名前は【白龍】だ。漢字で白い龍と書いて白龍。」

『ゴ〜♪』

白龍は気に入ってくれたらしく、ポケモン図鑑に新規登録欄に白龍と付け加えた。

タイプは・・・

「白龍のタイプって何があるのかな？」

『私のタイプは【神】だ』

・・・どこから声が聞こえたんだろ？

『聞いているのかなバロン。いや、マスター』

・・・まさかな・・・

『言い忘れたが、神が加わった事でテレパシーを使える用になったんだ』

・・・もしかしなくても白龍なのか？

『もしかして白龍？』

『その通りだ。この名気に入ったぞマスター』

白龍だった。

ケロマツから白龍に進化したのはなぜか分かるかな？

「なあ白龍、ケロマツから進化したのが白龍であってるよね？」

『なぜ当然のことを言っておるのだ・・・マスターの前で進化（神化）したではないか』

確かに・・・進化（神化）したな・・・

もしかしてこれがビオラさんの言っていた絆か！

「白龍、これからもよろしくな！」

『よろしく頼むぞマスター』

こうして、1人固まったままのビオラ（忘れていた、いること）を
ほったらかしで話しは進んでいっていた。

俺の新たな相棒、白龍！

これからよろしくな!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 十三話

十三話

俺と白龍は今だ固まったままのビオラを元に戻すため声をかけた。「ビオラさん。そろそろ反応してください。バトルの続きを早くしたいですー!」

ビオラはバトルの言葉でやっと気付いてくれた。

「ああ。バトルね!よし!バトルしましょ!ん?そのポケモンは?」

ビオラは記憶が少し飛んだらしい……

「先ほどうしん『マスター!少し待て。我は少し特殊でな。捕まえた事にしてくれ』

「バロン君?」

「ああ!すみません。このポケモン白龍です。先ほど捕まえました」

白龍は良かったと言っていたが

「えくと今ゲットしたの?」

「詳しい事は説明出来ません……とりあえずバトルしましょよ!」

「ええ!バトルすれば吹っ切れるし、やりましょ!」

やっとバトルが出来る……

『マスター。我は裁きの鉄槌と言う技を使える。神のみが使える専用技だ』

「ありがとう。このバトルで使ってみる」

「さあバトルするわよ!いっっておいでドラピオン!」

「蹴散らしてこい白龍!」

特訓バトル?

☆白龍VSドラピオン☆

「ドラピオン、ポイズンテール!」

「白龍、裁きの鉄槌!」

『ゴ〜!』

白龍は翼を羽ばたかせ上空に飛んだ。

ドラピオンのポイズンテールはもう届かない位置にいたので、技を止めたようだ。

『ゴウーガ〜！（受けてみるがいい！裁きの鉄槌！）』

白龍の口から光線を天高くに打ち上げ、爆発した。

その光線は爆発の影響で辺り構わず降り注ぎ、

近くにあった木は消え・・・

近くにあった家は消え・・・

後ろにあったポケモンセンターは半分まで消え・・・

ドラピオンは戦闘不能に・・・

「白龍！技を中断しろ！」

『マスターなぜじゃ？』

「周りを見るろ！大変な事になってるだろ！」

『すまない・・・直しておく』

白龍はそう言うのと、翼で体を覆い隠し、緑の輝きが光り出した！

『直すと言ったからな・・・』

白龍はそう呟くと翼を一気に広げた！

緑色の輝きは当たりに降り注ぎ、消えた物、壊れた物、傷ついた物

等を全て直した。

「すごい・・・元に戻っていく！」

「これは現実なの？あつドラピオン！」

ドラピオンの傷も治っていき元気になった。

これが神の力・・・

『マスター我は疲れた・・・少し休ませて貰う。』

白龍はそう言うのとモンスターボールに入ってしまった。

「バロン君。凄いポケモンを手に入れたのね」

「はい・・・自分でも驚いています」

周りの物はすっかり元に戻っていて、何事も無かったかのようになっていた。

とりあえず、裁きの鉄槌は暫く使わないようにしよう・・・

治す力があるといえね・・・

「とりあえず、旅に行きますか？」

「そうね！行きましようー！」
俺達はやっと旅に出ることにした。

我は白龍・・・

天界より来た者・・・

当初、ケロマツの体を依り代としていたのだが・・・
副作用で深い眠りにつくことになってしまった・・・
だが、マスターの強い意志を感じ・・・
バトルのさなか・・・

進化（神化）として我は等々、自由に動ける体となったのだ・・・

まあ・・・自由は自由なのだが・・・

勝手に動き回ると、この世界の神がうるさくての・・・
ほどほどに自由と言う感じだな・・・

今度マスターを天界に連れて行ってやろうかな？
ポケモンの声が聞こえるようになるのだから！

皆に先に言っておこう！

我はまだ進化するぞ！

大丈夫！神化はもう終わっている！
進化するのだ！

新たな姿となつてな！

アゝハツハツハツハツハツハゝゝ
アゝハツハツハツハツハツハゝゝ
!!!!!!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 十四話

十四話

俺達はハクダンシティを旅立ち、4番道路に行った。

4番道路の道の中央付近には噴水があり、比較的レベルの低いポケモン達がいるエリアだ。

よくカップルがその噴水付近で見かける。今日もカップル達がいる・・・

そのカップル達は俺達を見てから直ぐに

「君たち、僕とハニーと一緒にポケモンバトルしようではないか！」

「もうあなたたつたら〜」

ビオラの方を見ると、顔が無表情になってドラピオンのボールに手を掛けていた。

あ〜うん・・・バトルしなきゃだめだよね・・・

俺もダンバルが入ったボールに手を伸ばしたが、

「バロン君は何もしなくていいよ。こいつらは私が相手する」

「は〜君、僕の強さ分かってないね〜」

「ホント、わかってな〜い」

ビオラは無表情のまま、ドラピオンを出した。

ドラピオンはムカつくカップル2人組に威嚇するように両腕を高く振り上げた。

「あなた〜やっっちゃいましょう〜」

「もちろんさ」

「さっさとポケモンだしな」

「わかったよ。いけ、ニャオニクス！」

「ダーリンに続け、ニャオニクス！」

二匹の色の違う・・・雄と雌のニャオニクスが出て来た。

カップルなだけあり、そんな感じのポケモンが出て来たな。

機嫌が悪いビオラ戦

☆ドラピオンVSニャオニクス雄・雌☆

「ドラピオン、破壊光線、破壊光線、破壊光線」

ドラピオンがえっ？って顔をしながら直ぐに分かったが、ドラピオン・・・お前は良いやつだな。頑張れ。

ドラピオンはニャオニクス達に、特に雄のニャオニクスに2発、雌のニャオニクスに1発破壊光線を放った。

「ちよー！破壊光線は反動があるはずじゃ！」

「あなたは知る権利も無い」

そのままニャオニクスは破壊光線で戦闘不能になったが・・・

「ドラピオン、あのカップル？変な者に破壊光線。なんなら毒を混ぜても大丈夫よ」

ドラピオンは賢い子・賢い子・・・だよね？

ドラピオンは破壊光線をカップルに放った！

一応、見た限りは毒はないはず・・・

カップル2人組はニャオニクスと共に天に飛んで行った。

(ロケット団みたいな感じと思ってください)

「ドラピオン、お疲れ様！はくすつきり♪」

ドラピオンも大変なんだな・・・お疲れ様！

「さーミアレシテイに行くわよ！」

「はい！」

ミアレシテイか・・・

俺の持っているポケモン図鑑は、色々な情報が入っているので調べたい事があれば殆ど調べられる。

4番道路の事も図鑑を見て分かったことなのである。

にしても・・・ダンテさんの作ったこの世界に2台しかないポケモン図鑑はホント凄いな・・・

これを作るのにどれだけ時間を掛けたのだろう・・・

今度ダンテさんに会った時に聞いてみよう！

俺は考え事していたら4番道路の北のゲートが見えて来た。

「バロン君、ゲートが見えて来たわ。このゲートをくぐるとミアレシテイよ」

「ああ、やつとミアレシティに着くんですね」

ビオラは微笑み、

「そうね」

と答えて一緒にゲートをくぐろうとした時・・・

突如空から隕石が4番道路の北のゲートに落ちた・・・

もちろん、ゲートは瓦礫の山と化し、俺達は爆風で噴水近くまで吹き飛ばされた。

「なんで問題ばかり・・・てか！隕石って！」

「災難ばかりね・・・あの隕石を少し調べてみましょうか」

俺達はその隕石に近づこうとした時、落下した隕石が突如爆発した

！

「危なかった・・・近づきすぎなくて良かった・・・」

「そうね・・・」

爆発の衝撃で煙が凄かったが、少し晴れてきた。その煙の中にはオレンジ色の生命体【ポケモン】が立っていた。

『オ・マエハ・ダ・レダ？ワレハ・ドウシテ・ココニイル？』

「これはテレパシー!?あのポケモンは・・・」

俺は直ぐにポケモン図鑑を取り出し、調べた。

名前 デオキシス

LV 50

特性 プレッシャー

隠れ特性 ブレイクオーラ

(ブレイクオーラは全ての攻撃を効果抜群に変更出来る特性／オーラ
の特性を持つ相手の効果を無くす効果もある)

技 神速

サイコキネシス

破壊光線

変身

図鑑で見た情報でブレイクオーラ・・・

これは厄介だな・・・【神】と大して変わらないではないか。

さすが伝説ポケモン・・・

『オマエタチ・ハイジヨ・スル』

「ちよ！いきなり攻撃発言!?出てこい白龍！」

『カミヲカクニン！サイダイパワー・ハイジヨカイシ』

やっぱりバトルは避けられない！

ここは白龍で頑張る！

ポケットモンスターXY バロンの旅 十五話

十五話

神対神戦

☆デオキシスVS白龍☆

『オーロラブレイクハツドウ！カミニモ、コウカバツグンニナル！ハカイコウセン!!』

デオキシスは適応力が高いな。もう言葉も話せるようになってきている。

「白龍、裁きの鉄槌！」

白龍の放った裁きの鉄槌は光線となってデオキシスに向かって行ったが、デオキシスも破壊光線を放ってる。

2体の神の上級技は2体の間でぶつかり合った！

「白龍、神速！」

『シンソク！』

二体の神は互いの技でもう残像しか見えないが、凄い速さでぶつかり合った！

『オマエツヨイナ。オレノトツツテオキヲ、ミセテヤロウ！サイコブレイク！』

『お前も強いぞ。俺もそろそろとっておきを見せてやる！裁きの雷（いかづち）！』

デオキシスは両手を自身の前にし、エネルギーを縮小していった！

白龍は天に雷の光線を放ち、雷雲を発生させた。

天気は一転。雷が轟く荒れた戦場になった。

ちなみにここ、4番道路ですよ？

ちなみに隣に立っているピオラさんは啞然としている。

白龍は突然、雷雲に向かって咆哮をした！

雷雲の雷は白龍を標的にしたかのように、一斉に雷が白龍を襲った！

『く〜！流石にキツイな・・・だが、これで完成！疑似雷電モード！』
『ナルホド・・・ソナツカイカタガアツタトハナ・・・ナラバ、サイ
コキネシス！』

デオキシスはサイコキネシスを雷雲に向かって放った！
雷雲に轟く雷をサイコキネシスで一塊にし、デオキシスは自身にそ
の塊の雷を受け入れた！

『ガガガ！タシカニコレハキクナ！ダガコレデオレモギジライデン
モードトヤラニナツタゾ！』

デオキシスは誇らしげにそう言った。

ちなみに言っておくが、雷電モードは蓄電の特性で自身に電気を取
り込む事で成り立つモード。

決して雷に撃たれたからと言って、雷電モードは完成しません。

二体の神はそうとは知らず、雷を自身に受け、結構なダメージを受
けてるよね？

デオキシスは溜めに溜めたエネルギー弾、サイコブレイクの発動の
最終段階に入った！

サイコブレイクは普通に撃つことも出来るが、その場合威力が落ち
る事になる。

『少しキツイな・・・バロン、どうしたらいい？』

え・・・神である白龍から聞かれた・・・

どうしようかな・・・

相手は今、サイコブレイクの最終段階・・・

最終段階？

「白龍、今のうちに神速！相手は躲せないはずだ！」

『アノコゾウ、イイヨミヲ。タシカニカワセナイナ。』

『いくぞ〜デオキシス！神速だ！』

白龍は溜めていたデオキシスに神速の攻撃を当て、デオキシスのサ
イコブレイクは途切れさせた！

『ダガ！コノキヨリハ、ニゲラレマイ！ハカイコウセン！』

確かにこれは逃げられないな・・・

「白龍、もう一度神速を使え！そして、少し距離を取り、裁きの鉄槌だ

〜!」

なるほど。その手があったか。さすが我がマスター!

『残念だったなデオキシス。我がマスターはお前の上を行くようだ』
『確かに。さすがお主のマスター。私の負けだな』

白龍は神速を使い、デオキシスの破壊光線を避け、白龍は裁きの鉄槌を放った!

デオキシスは満足そうに両手を広げ、裁きの鉄槌を受け入れた。

裁きの鉄槌を正面からまともにくらったデオキシスは地面に落ち、大の字で横たわった。

白龍は静かに地面に降り立った。

空には雷雲は無くなり、晴天が広がった。

「白龍、お疲れ様! デオキシス大丈夫か! 動けるか!？」

俺は直ぐにデオキシスの側に駆け寄り、声を掛けた。

『あまり、大丈夫ではないな・・・』

デオキシスはそう言い少し笑った。

俺は直ぐに鞆からオボンの実を取り出し、デオキシスにあげたが、
『俺は果実を食えない。まず、口が無い』

あ・・・確かに。俺はデオキシスや白龍のテレパシーで会話しているから忘れていた。

『マスター。デオキシスをモンスターボールに入れてやれば、多少は回復するぞ?』

「そうなのか!? デオキシス! お前をこのままにさせたくはない! 俺と一緒に来ないか?」

『うむ。我もお主を気に入ったの・・・よろしく頼む。マスター』

俺はモンスターボールをデオキシスに当て、直ぐにピコンと音が鳴った。

「よろしくなデオキシス」

俺はデオキシスの入ってるモンスターボールにそう言い、ビオラさんを正気に戻してから、直ぐにミアレシテイに・・・行けなかったので、ハクダンシテイに戻った。

一応説明はしておこう。

4番道路の北ゲート、ミアレシティに行けるゲートだが、隕石がそのゲートに落ちて、瓦礫の山になってしまい、通行不能になってしまってる。

デオキシスが元気になってから、サイコキネシスで瓦礫をどかして貰おう。

ポケットモンスターXY バロンの旅 十六話

十六話

俺達はハクダンシティのポケモンセンターでデオキシス達の回復を待っている間、ビオラと昼飯を食っていた。

「バロン君。あなた本当に凄いわね。伝説ポケモンを手に入れてしま
うなんて・・・」

「たまたまですよ」

俺はそう言い飯にかぶりついた。

「私も伝説ポケモン欲しいな」

ビオラはそう言い俺を見てきたが、俺は知らんぷりをし、そのまま飯を食った。

ビオラはちえつと言い、飯を食うことにしたようだ。

俺の手持ちは色々と凄い事になっているが、俺のポケモンは大事に育てると決めているから、誰にも渡しはしない！

その時、女医さんが俺の方に来て、

「バロンさん、ポケモン達の回復終わりましたよ。伝説のポケモンを
手に入れるなんて凄いですね」

「ありがとうございます」

俺は礼だけを言い、モンスターボールを腰のベルトにセットし直した。

「ビオラさん。昼飯を食べ終わって早くミアレシティに行きましょう
！」

「でも、北のゲートが・・・」

「デオキシスに全部どかしてもらいます」

ビオラはその手が有ったかと言わんばかりの顔をし、残っていたご飯を口の中に放り込んだ。

「落ち着いてくださいよ・・・まあこれで出発できるし、いっか・・・」

「バロン君、行きましょう！」

「はいー」

「お気を付けてー！」

女医さんに手を振られながらポケモンセンターを出た。
俺達は再び4番道路に戻ってきて、北のゲートに来た。

「出てこいデオキシス！」

『マスター回復してくれてありがとう！』

「お、おう！所で、この瓦礫、どかしてくれない？」

『もちろんです！マスター！サイコキネシス！』

デオキシスの性格、変わった？

まあいつかな？

デオキシスは瓦礫を全て、サイコキネシスで浮かばせ、道の端に一カ所にまとめた。

その後、ミニ破壊光線で瓦礫を粉々にして、サイコキネシスで形を作っていった。

しかも、その形が・・・

「デオキシス、この形って俺・・・だよな？」

『はい！マスターでございませう！ここは私とマスターと出会った場所！石像にして、歴史に残すのです！』

アハハ・・・

デオキシスはルンルンで作っていくので、止めることは俺には出来ない！

だって、めっちゃ嬉しそうに作ってるんだもん！

デオキシスは技を器用に使いながら、どんどん完成させていく。

最後は粉々になった瓦礫を固めるため、水と地面タイプの合わせ技を使った。

『最後の仕上げです！マッドショット（細工使用）！これでフィニッシュ！』

デオキシスはそう言って誇らしげに両手を天高くに上げて、顔も上に向けた！

完成したデオキシス作の石像は、見事としか言い様のない素晴らしい物だった。

俺がモンスターボールを前に突き出し、俺の左後ろにデオキシスが腕を組んで仁王立ち。右後ろには、白龍が翼を広げ、腕を組み、見下

ろす感じで立っている。

最後の仕上げで使ったマッドショットは泥では無く、煌びやかな砂金だった。

それを俺を中心に（一番目立つように）砂金を使い、固めていた。凄くキラキラ光っており、光で更に神々しく輝いている・・・

デオキシスは砂鉄入りのを使い、オレンジ色に近い色で固めていて、俺より目立たないがそれでも、作りが良いので見とれてしまう。

白龍は、石灰を少し混ぜた砂金入りのを使っているようで、白い体を余すこと無く再現されていた。もちろん砂金効果で光が当たる場所は神々しく輝いている。

素晴らしい！これはもう芸術だ！

「デオキシス、お前、凄いよ！今日は俺とデオキシス、白龍の記念日だな！」

『うん！マスターに褒めて貰えて凄く嬉しいよ！』

『確かに。これは見事だ！』

『白龍様・・・』

白龍はモンスターボール越しにテレパシーで喋り、デオキシスも嬉しそうにしていた。

ビオラは驚きのあまり、立ち尽くしている・・・

俺達は綺麗に片付いた北のゲート・・・無いな・・・4番道路の出口に再度、ゲートを作ることにした。

今ビオラはまだ固まっているので放っておこう。

「出てこい白龍！デオキシスと共にゲートを作ってくれ！」

『お安いご用だマスター！』

『よろしくお願ひします！白龍様！』

今更だが、デオキシスは伝説だが、言葉がちゃんと喋れるようになっており、少し、子供のような感じがする。

もしかしなくても、俺のデオキシスはまだ、子供なのか？

白龍はもしかしなくても・・・大人？

だって、白龍様だもん・・・

少しの間考え事をしていたらデオキシスから呼ばれた。

『マスターマスター！ゲート出来たよ！見てみて！』

デオキシスは早くと言わんばかりに言い、俺をサイコキネシスで浮かせてゲートまで連れてきてくれた。

結構楽な移動方法だな。

ゲートを見ると・・・

外装は白銀の城・・・

門は白銀で作られた強固な扉・・・

中は砂金の効果なのか、凄く煌びやかな状態・・・

更に、石像とかが壁沿いに並んでおり、一体ずつ違う形をしており、全てポケモンの形だった。

しかも、この城のゲート、デオキシスにGATE（ゲート）って言うて欲しいと頼まれてGATEと呼ぶことにした。

この白銀の城、その名の通り何階層もあり、最上階には、俺の形をした石像が1番輝かしい所に置かれており、その左右に白龍とデオキシスが立つ感じで石像が置かれていた。

ちなみに、このGATE（城）には中央に噴水もあり、4番道路の噴水がちっぽけに思えるほど豪華な作りになっている。

この城なのだが、中に温泉まで完備されており、なぜか天然温泉になっていた。

この城の材料は白龍が全てゼロから作り出し（神だからこそ可能）デオキシスが作っていくと言う感じで使ったと聞いた。それにしても早い！

俺の考え事は10分も無かったはずだが・・・

俺は素直に凄いと思えた。

「白龍、デオキシス。お前達は本当に凄いよ！今日はこの城で泊まって明日ミアレシティに行くことにするね」

『うん！』

『了解した！』

俺は手持ちのポケモン達を全員出してあげ、自由に行動させてあげた。

外でまだ啞然としているピオラはデオキシスがサイコキネシスで

城の寝室に運んでくれた。

俺は1つ思ったことがあった。

「なあ、ご飯どうしよう・・・」

『うむーそう言われると思っていたので、我のとおきを見せてやろう。変身！』

すると白龍の体から光が輝きだし龍の姿から人間の姿に変わった！

『え〜！白龍様もその姿になるんだったら僕もなる！』

するとデオキシスも体から光が輝きだし、デオキシスの姿から人間の姿に変わった！

白龍は仙人みたいな感じのおじいちゃんで、デオキシスは・・・
女の子？・・・

うん。女の子だな。

それも小学生並みの・・・

「デオキシスだよね？で、白龍はおじいちゃん？」

『うむ。我の人間の姿はこれなのだ』

『僕はこの姿だよ！』

デオキシスはそう言ってくるつと一回りした。

正直結構可愛い・・・

デオキシスの擬人化は、「フェアリーテイル」のメイビスと言う女の子に凄く近い容姿をしている。ネットで調べてたら擬人化はポケモンの容姿が少しは残っているが、この世界は違うのかもしれない・・・

だって・・・

白龍の擬人化は、「ナルト疾風伝」に出て来るマダラが十尾を取り込んだ、言わば最終形態の仙人状態の姿だ。

絶対、天界では偉い人だなと感じてしまった。

(ネットでマダラと調べれば容姿が直ぐに分かります)

「擬人化、いや。もう人間だね。ちなみにデオキシスちゃんめっちゃ可愛い・・・」

『褒められたらもつと頑張っちゃおうよ〜!』

デオキシスは褒めれば更に伸びる子だな。

もしかして、ピカチュウ達も擬人化したりして・・・

俺はピカチュウの方を見た。

『俺は擬人化など出来ん!神である、伝説のお方達だけだ』

「教えてくれてありがとう」

「とりあえず、白龍、デオキシス。ご飯よろしく♪」

『任せて!』

『任せろ!』

二体の擬人化(神)は互いにキッチンに入っていた。

俺は超豪華なりビングで待つことになった。

俺のポケモン達もりビングで待っていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 十七話

十七話

翌日、目が覚めると白い世界に俺は立っていた。

周りには何も無い……

正直、立っていると言うより浮いてる感じの方が合ってる。

俺はとりあえず、まっすぐ進むことにした。

どれだけ進んだか分からなくなった時、白い世界に光が俺の前に舞い降りた。

『ここは天界。私は案内人みたいな者です。』

光が案内人？

「あの、ここは天界と言っていました。俺は死んだのでしょうか？」

『いえ。あなたは現世でちゃんと生きてますよ。精神エネルギーはここですが』

精神エネルギー？魂みたいな物なのかな？

「とりあえず、現世に戻りたいのですが、どうすれば戻れますか？」

『この世界の神に会えば帰れますよ』

神？それもこの世界の神だって？

「もしかして、その神様は……伝説のポケモンですか？」

『その通りです。この世界を作り出した伝説のお方、アルセウス様に会うのです』

アルセウス……この世界を作り出しただって……

「どうやって世界を作ったんですか？」

『それはアルセウス様に聞いてください。』

あ……確かにそうだよな。

「悪かったね。アルセウス様に会わせてくれませんか？」

『かしこまりました。』

光は俺の手に触れると、周りの景色が白から宇宙に変わった！

息は!?で……きる……のか〜!

宇宙なんて空気が無いと思っていたから、凄く焦った〜!

『あ、言い忘れてましたが。あなたの考えてる事は全部聞こえています』

よ?』

え?.....マジで?

『はい』

そうだったのか!

『ところでそろそろアルセウス様とお話しないのですか?』

そうだった!

光の後ろにいる強大なポケモン。【アルセウス】

このポケモンと話すことが目的だった。

「お初にお目にかかります。俺はバロン。ポケモンマスターになる男です!俺は早く現世に戻り、旅をしたいので早く元の世界に戻してください!」

長話も嫌だし、本題をさっさと切り出してやった。

『そうかそうか!だがな、バロン。お主のポケモンに白龍とデオキシスがおるであろう?』

「はい。いですが何か問題があるのですか?」

『当たり前じゃ!伝説ポケモンを持つているトレーナーとか世界のバランスが崩れるわ!それでお主を呼び、手放せと言おうとしておったのじゃ!』

手放せだと.....!!!!

「神だか何だか知らねえが!俺の大切なポケモンを手放せだと!ふざけるな!」

俺は怒りのあまり、自身の気を最大パワーで発動させアルセウスに殴りにいった!

『人間の分際で.....裁きをくらうがいい!』

アルセウスは【裁きのつぶて】の技を発動し、俺を攻撃してきたが「そんなもん!俺のポケモンの思いに勝つことが出来ると思うのか!食らいやがれ!俺の愛のパワー!愛の鉄拳!」

(ネーミングのなさがw)

俺はアルセウスが放った裁きのつぶてを弾き返し、そのままアルセウスを殴った!

『ぬ〜!まさか人間の攻撃が我に当たるとは.....バロン。お前の思い

は分かるが、世界の事も我は考えなくてはならんだ。分かってくれないか?』

「無理だ! 神であるアルセウス、あんたがやればいいだろう!」
俺はもう頭にきていた。

なぜ! 俺のポケモンを渡さなければならぬ!

そんな事、許すわけ無いだろう!

『仕方ないか・・・光よ、バロンに力を与えたまえ』

アルセウスがそう言うと、光は俺の体を包み込んだ!

すると、どこからか声がした。

『私はあなたの魂。現世に戻るための試練だったのです。伝説のポケモンを持つにふさわしいかどうかの』

そういう事だったのか・・・

俺、アルセウスをぶん殴ってしまったぞ?

『気にするな。それよりも、お主の事を心配しているあの子達を頼んだぞ。ポケモンマスター』

「ああ! 任せろ!」

俺はアルセウスにグツジョブサインをしてから、白の世界に戻された。

『バロン様。お疲れ様です。バロン様は今日からポケモン達の声が聞こえるようになります』

え?!

どう言う事?!

『バロン様はアルセウス様とお話されている間、ポケモンの言葉を理解できる用にされていたのです』

マジで?!

『マジです』

じゃあ、現世のポケモン達の声が俺には全部分かるようになってるって事?!

『その通りです』

じゃあもう白龍達のテレパシー無しでも会話出来ちゃうって事だな！

『はいー！』

よっしやっ！

ありがとうアルセウス！

言いプレゼントありがとう！

『では、そろそろ現世に戻るの、ポケモンマスターに頑張ってたってくださいな。バロン様』

おう！任せろ！

俺は必ず、ポケモンマスターになる！！

俺は目が覚めると、寝室に寝ていた。

周りには白龍やデオキシス(両方とも擬人化)や俺のポケモン達、ビオラまでも周りに集まっていた。

「やつと目を覚ました！バロン君大丈夫なの!?もう丸2日間寝てたのよ！」

2日間も寝ていた？

白龍『やつと目を覚ましたか・・・』

デオキシス『良かった〜！目を覚ました〜！』

ピカチュウ『お前ってやつは！心配させるなよ』

ヒノヤコマ『やつと目を覚ましたんだね！僕、進化したんだよ！』

ハリボーグ『僕も進化したんだよ！主にピカチュウのおかげで・・・』

メタング『僕も、進化、したよ？目を覚ましてくれて、良かった』

確かにみんなの声が聞こえる・・・

良かった。

夢じゃ無かった！

「みんな、心配かけてごめん」

ビオラは今にも泣き出しちゃってしまいそんな顔をしていたが、涙をこらえて

「今は体を休ませて。元気になってから移動しましょう」

ビオラはそう言うと水を差しだしてくれた。

俺は一口飲み、少し寝ることにした。

白龍『バロン。俺の技で直ぐに元気に出来るが……』

その時にはもう俺は寝ていた……

ポケットモンスターXY バロンの旅 十八話

十八話

俺はその日の夜、目が覚めた。

周りにはみんなが寝ていたので、起こさないようにベッドから降りた。

「みんなに迷惑かけてしまったな・・・少し風にあたりに行くか」

俺は白銀の城、GATEの最上階にある部屋で寝ていたようだ。

凄く高い場所だが、特殊な結界が張つてあるのか、風をあまり感じない・・・

俺は最上階にあるテラスに行き、風を感じに行つた。

テラスは結界が張つていないみたいだ。

「ん〜涼しいな」

俺は素直な感想を言い、近くにあった椅子に腰を下ろした。

みんな色々頑張っているみたいだし、俺も頑張るか！

俺は静かに立ち、ベッドに戻って行つた。

次の日の朝、俺はみんなと朝ご飯を食べた。

凄く久しぶりに感じ、更に凄い空腹でご飯がいつもの何十倍にも美味しく感じ、お腹がいつぱいになるまで食べてしまった・・・しばらく休憩しないと動けない・・・

『仕方ないマスターだ・・・治癒しますぞ』

「ああ。ありがとう」

白龍は俺に治癒を施してくれて、直ぐに動けるようになった。

「おお！凄いな！これならもう出発出来るぞ！」

『マスターの為ならなんでもしますよ』

『僕もなんでもするよ！』

デオキシスは僕もと言いながらぴよんぴよん跳ねながら存在をアピールしていた。

ちなみに、白龍とデオキシスは擬人化状態だ。

ビオラはもう慣れたのか、みんなと仲良くしている。

「そう言えばデオキシス。俺、デオキシスの名前考えたんだけど、気に

入るかな？」

『え？僕の名前を覚えてくれたの!?嬉しい！教えて教えて！』

俺は考えていた名前をデオキシスに言った。

「メイビス。この名前を考えていた。」

『メイビス。メイビス…うん！いい！僕はこれからメイビスだね！』

メイビスは「名前だ」と言いながらくるくる回った。

けど、目が回り転んだ…

『ちゃんとしないとダメだぞメイビス。マスターが困るだろ』

『はい！』

白龍はそう言うため息を少し吐いた。

「そろそろ出発しないかな？結構目立つ城『GATEだ！』」

ビオラは直ぐに謝った。

『だが、確かにこのGATEは目立つ。そろそろ出発しても言い頃だ
と思うが。マスターどうする？』

「出発で良いと思う。早くバッチを集めてリーグに行かないと真のマ
スターにならない」

『決まりだな。擬人化解除！我はモンスターボールに戻るとしよう』

『じゃ僕もだね。擬人化解除！ボールに戻るね』

「みんなもボールに戻ってくれ」

ピカチュウ達は各自モンスターボールに触れ、ボールに戻って行っ
た。

「さあビオラさん、出発しましょう！」

「ええ！」

俺達はようやく4番道路を出るのであった。

3日間かけて…

後の4番道路は超有名な観光地として目立つことになる。

大方、GATEを目的で来る人達だが。

最下層から最上階まで、ポケモンの石像が結構人気になってる。

自分の好きなポケモンを探すのが主流になってるからだ。

4番道路の中央にあった噴水は一応まだあるが、もう人気はない。

だって、GATEの中に豪華な噴水があるからね。
ちなみに、結界は解いてあるので風は普通に吹いてくる。

俺のポケモン達だが・・

メイビスが作る造形物。

白龍が調理する美味しいご飯。

戦いが大好きなピカチュウ。

優しい性格のハリボーグ。

素早さを磨き続けるヒノヤコマ。

鉄壁防御のメタング。

みな、色々な個性があつて楽しい旅になりそう♪

さく！これからも頑張るぞ！

ミアレシテイ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 十九話

十九話

俺達はやつとミアレシテイに着いた。

「ここがミアレシテイ・・・凄く都会だな・・・」

ここはミアレシテイ。

大都会ではあるこの街は、海にも面しており、近くには山。

高層ビルが建ち並び、この街の中央にはプリズムタワーがそびえたつ。

この街にはポケモン研究所もあり、プラターヌ博士がいる。

更に、この街には、5つのゲートがある。

俺達が通って来た4番ゲート。

次の目的地に行く5番ゲート。

今は用がない13番ゲート。

後は14番ゲートに、16番ゲート。

この5つである。

俺達はミアレシテイのジムを探そうと思ったのだが、先にプラターヌ博士に会いに行こうと思い、研究所に向かった。

研究所は道なりにまっすぐ進んだところがあり、直ぐに分かった。

俺とビオラは研究所に入り、

「失礼しまーす！プラターヌ博士いますか！」

「おお。ようこそ！バロン君だね。ん？そちらの方はビオラ様ではないですか」

「ご無沙汰してます。バロン君と旅をさせて貰ってます。」

ビオラは、軽く頭を下げ、プラターヌ博士に言った。

「そうでしたか。あつバロン君、君に渡しておきたい機械があるんだよ。」

プラターヌ博士はそう言って、後ろの機材置き場から腕輪のような物を取り出した。

「ダイゴ君から君に渡してくれてと言われてね、取っておいたのだよ。さあ、どうぞつといきたいところだが、まずは僕と勝負をしてからでもいいよね?」

プラターヌ博士は側にあつた機械に手を翳すと、モンスターボールが地下から出て来た。

その中の1つを手を取った。

「もちろんバトルしましょう!バトル場に行かないんですか?」

「君相手にバトル場はいらないよ」

俺はカッチーン!ときて・・・気を纏った。

「博士!ここでバトルしていいんですね?」

「構わないよ」

「出てこいピカチュウ!」

『なあマスター。アイツやっちゃう?』

ピカチュウは出てきた時から、雷が迸っている。

「んゝあいつのポケモンと戦っている最中、流れ弾的な感じならOK」

『了解マスター!』

俺のポケモンたちは全員俺のことをマスターと呼ぶが、なれているから大丈夫だ。

「さあ、出てこいチラーミー!」

.....

『マスター!あいつふぎけてるよ!もうやっちゃうね!』

「いや、少し待て。あいつを十分怖がらせてからやろう・・・」

『良いねえ』

俺とピカチュウはもう頭にきてるから、怖いこと普通にやっちゃうよ?」

『あのゝピカチュウさん?』

『あゝん?なんだてめえ』

『いえ!なんでもないです!』

十分怖がつてるかもしれないが、演技の可能性もある。さくつとやっちゃうか!

「じゃあ、バトルを始めちゃうよ!チラーミーハイパーボイス!」

チラーミイは大きな声をだして攻撃してきたが、

「ピカチュウ、特性のあめふらしを使ってから雷。なに、お前ならあんなの攻撃と認識してないだろ？」

『当たり前だ。さくらて！』

ピカチュウは特性であめふらしを発動した。

その時、チラーミイのハイパーボイスの攻撃を受けたが、ピカチュウは平然としている。

ちなみに、ピカチュウはバロンが眠っていた2日間、伝説であるデオキシスや白龍と特訓していて、神の攻撃を何度もくらっていた。なので、普通の攻撃とか蚊に刺された程度にしか思わない。

しかも、この特訓でピカチュウの効果抜群技は「神」だけになった……

それ以外は効果抜群にならない……特殊体質を手に入れたのだ……ピカチュウ「電気・神？」みたいな感じになってる……

ポケモン研究所の社内は、突如降り出した雨のせいで、機械は故障……資料はびしょ濡れ……チラーミイは雨に濡れるのが嫌らしく、机の下に行きやがった！

「さあピカチュウ、どうぞやっちゃってくださいな……」

ピカチュウの電気が更に膨れていき、雨雲に向けて雷を発射！雷はそのまま雨雲に吸い込まれるように消えていき、雷雲と化したその直後！雷がピカチュウに落ちた！

ピカチュウは特性の蓄電で雷を全て吸収！

雷電モード完成だ……

『マスター……あの生意気な小僧に地獄を見せてやるよ。あ……あのワカメみたいな髪の奴にもな』

「どうぞ研究所の崩壊は出来るだけ抑えてね……」

ピカチュウはチラーミイが隠れている机に向かって……

『さっさと出てこいや！雷鋼テール！』

机を真っ二つ！更に、追撃で電気が爆散！机は塵と化した……

『ひいひい！博士……！』

『逃がさんぞ！神速ボルテッカー！』

ボルテッカー!?

いつの間に覚えたんだ!?

にしても・・・神速を使えるようになったのは良いことだ。
新しい技も覚えているし。

それを掛け合わせた技、神速ボルテッカーか・・・

あの速さで電気・・・雷を纏ってアタックしていくピカチュウ・・・
十分強いな・・・

磁力も扱えるモードだし・・・神速を超えるんじゃない・・・

ヒノヤコマも驚愕してるだろうな・・・

この速さには・・・

チラーミイは博士の元へ全力ダッシュしたが、ピカチュウからして
みれば止まっているのも同然・・・

チラーミイはピカチュウの攻撃を全部受け、壁まで吹き飛ばした。

だが、チラーミイも博士のポケモンだけはあはれ。咄嗟に技「こら
える」を使いギリギリ耐えていたのだ。

『ふん・・・それぐらいしてもらわないと面白くないわ! さあ、楽しま
せろ!』

「君のピカチュウはなかなか強いね〜! チラーミイ、アイアンテール
だ!」

『了解博士! 行つくよ〜!』

チラーミイはアイアンテールを振りかざし、ピカチュウに当てよう
としたが・・・

『何かしたかな?』

ピカチュウは瞬時にチラーミイの背後に回っていて、片手でチラー
ミイの尻尾を抑えていた・・・

「なに!?!」

『うそつく!?!』

「ピカチュウ、もういいよ。とどめしちゃって・・・雷」

『マスターがそう言うなら・・・残念』

ピカチュウは尻尾を抑えたまま、雷を・・・物理的に当てた・・・
あちやくチラーミイの毛がアフロみたいになってる・・・

良い感じにしてくれたねピカチュウ。

『マスター！あのワカメに流れ弾するの忘れてた！もう一回雷使って良い？』

「もうよしときピカチュウ・・・」

ピカチュウは少し残念そうに技を止めた・・・

「いや〜君のピカチュウは凄いな。僕のチラーミイが!？」

ピカチュウは博士がチラーミイの名前を言った瞬間、チラーミイを持ち上げ、尻尾で打った・・・

チラーミイはもう戦闘不能状態・・・為す術無く博士の所に飛んで行った。

「君のポケモンはとても怖いよー!」

「な・に・か・い・い・ま・し・た?」

自分のポケモンをそんなふうに言われるのは少々ムカつくな・・・

一発、殴つときやいけなかったか?

「ああ！悪かった！よしてくれ！何でもするから〜!」

『ん?マスター！あいつ何でもするってさ♪これは良いこと聞いたな〜』

「そうだね〜博士、何でもするって言ったもんね?」

博士は頭を何度も縦に振った。

さて、何をしてもらうかな?

① 発明品を貰う

② アイテムを貰う

③ ポケモンを貰う

④ 博士と契約

⑤ 博士と友達になる

俺は⑤でいいや・・・

「では博士、俺と友達になってください」

「え?友達かい?」

博士は不思議そうな顔をしている。

たぶん、無理な事を言われると思ったのだろう・・・

まあ、①〜④はね・・・

『マスターはそれだけで良いのか?』

「うん。友達って結構いいじゃん!楽しいし、会話も弾むし」

『まあマスターがそう言うなら・・・』

プラターヌ博士は先ほどの事を考えているようだった。

「バロン君はホントにそれだけが頼みかい?」

「ええ」

俺は直ぐに返答した。

「うん!では今日から僕とバロン君は友達だ!よろしくな」

「はい。こちらこそよろしく!」

プラターヌ博士と友達になれた・・・

「じゃバロン君、僕の事はプラターヌと呼んでくれ。僕はバロンと呼ぶよ」

「了解ですプラターヌ」

「じゃあ今日は僕とバロン君の友達記念日として、パーティーだ!みんなく飲むぞく!」

「「おお〜!」」

研究所のみんなが喜び各自荒れた研究所の片付け班と料理班、買い出し班で分かれた。

ちなみに俺は片付け班だ。もちろん、プラターヌもね・・・

その日の夜は盛大に盛り上がり、ポケモンの話しをしたり、こんな研究もしていたんだなと驚かせられる事もあった。

俺のポケモン達も研究所のみんなと楽しく遊んでいた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十話

二十話

翌日の朝、俺はプラターヌに呼ばれ、研究所の屋上に来ていた。

「朝早くにすまないね。じつはバロンに渡しておきたい物がある……」

渡したい物？

なにを渡すのだろうか？

「腕を前に出してくれないか？出来れば目を瞑って欲しい」

俺は言われた通り、目を瞑り、腕をだした。

カチャカチャ……ガチャン

腕にはしつくりくる重さに、フィット感もある……

「目を開けてくれかな」

俺は静かに目を開け、腕に付いている物を確認した。

それは……

「プラターヌ……これってチャンピオンが付けていたメガリング……ですよね？」

「その通り！これは僕が友達と認めた人にしか渡していない、数少ない貴重な品だよ」

(ゲームでは普通に貰えます)

「ありがとうプラターヌ！大事にするよ！」

俺は凄く嬉しくて、何度も翳して見つめた。

その時、リングの突起に玉がはめ込まれているのを見つけた。

「プラターヌ？この突起の中にある玉って何？」

「よくぞ聞いてくれた！この玉はね、メガストーンと言ってポケモンとの絆で更なる進化、「メガ進化」させる玉なんだよ」

「メガ進化……」

メガ進化、更なる進化を可能にする貴重なアイテム……

それが俺の腕に付いている……

もしかして、ダイゴさんから貰ったこの玉って……

俺は鞆からメガグロスナイトを取り出した。

「なんと!?!それは珍しいメタグロスナイトじゃないか!どこで手に入れたんだい!?!」

「ダイゴさんから貰いました」

プラターヌは凄く驚き、

「ダイゴ様から貰うなんて、凄いじゃないか!あの人は気に入った方にしか物を渡さないんだよ。しかも、貴重なメガストーンを貰うなんて!凄いい!凄すぎるよ!」

朝からテンションMAX状態になったプラターヌを沈めようとしたけど、メガリングを貰っているのでそのまま放置した。

「さすがにメタグロスは持っていないよね?」

「持ってないですが、メタングならいますよ。出てこいメタング!」

俺はモンスターボールからメタングを出し、プラターヌに見せてあげた。

『マスター僕は何をすればいいの?』

「ああ、ちよつとプラターヌに見てやりたくて。後これ、メタグロスナイトって言うんだけど、メタング。お前が進化すれば俺とお前の絆で進化の先に行けるぞ」

『ホントに!?!』

「ああ!だから、頑張って強くなって、誰にも負けない絆を作ってやろうぜ!」

『うん!』

俺とメタングは絆を含めるために更に頑張ることを誓った。

「おお!メタングでは無いか!なかなか貴重なポケモンなんだよ!ホントに貴重なんだよ!?!どうやって手に入れたんだい!?!」

俺はプラターヌに両肩を捕まれて、更に揺さぶられちよつと迷惑だなど思ったが、今日はメガリングを貰っている。少しは我慢するか・・・

「ダイゴさんから貰いましたよ。その後でメタグロスナイトを貰いました」

「なくんと!ダイゴさんがダンバルまであげたのか!?!君は凄い事をしているんだよ!」

普通に迷惑になってきた・・・

俺はメタングの方を向いて、頷いた・・・

『マスターも色々大変なんだね・・・サイコキネシス』

メタングはプラターヌをサイコキネシスで浮かばせ、俺から離してくれた。

「ありがとうメタング。助かったよ。静かに出来るだけ遠いところに降ろしてあげて」

『了解マスター！』

メタングはそう言い、屋上から玄関の入り口にプラターヌを降ろしてあげた。

その間プラターヌは何か叫んでいたが、気にしないでおく。

「メタング、これはお前がもっておいてくれ・・・」

『ありがとうマスター！大事にするね！』

俺はメタングにメタグロスナイトをあげてから、2人でリビングに戻って行った。

食卓にはもう豪華な料理が並んでいて、早く食べたい衝動がヤバかった・・・

誰が作ったなんか見たら直ぐにわかったし、早く食べて〜！

「メイビス、白龍。料理お疲れ様。他のみんなは？」

『他の人達はみんな、昨日の疲れかまだ寝ている』

『食材の場所は昨日確認していたから、大丈夫だったよ〜』

さすが、メイビスに白龍。しっかりしてくれて助かるよ。

「2人ともありがとうね♪」

『うん！』

『ああ』

俺は研究所の人達と、外で待っているプラターヌを連れに行った。

その後はみんなで食卓を囲み、美味しくご飯を食べた。

5つ☆レストラン位のおいしさは保証できる！

研究所の人達は一口食べた瞬間、泣く人もいた。

理由は、こんなに美味しい料理、始めて食べたよ〜とか、

この料理、美味し〜！よか、

超うまい！何!?誰か5つ☆レストランのシェフ呼んだ!?

等々、色々な感想が飛び交っていた・・・

プラターヌは料理が美味し過ぎて、気絶した・・・

何はともあれ、楽しい朝ご飯を食べ終え、俺達はミアレシテイのジムに向けて出発した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十一話

二十一話

俺はミアレジムの場所をビオラに聞くと、プリズムタワーの中にジムがあると聞いた。

俺達はミアレジムに向かうとき、近道があるとビオラに聞いたので、路地裏にある道を通ることにした。

路地裏の中央辺りに、オレンジ色に近い服を着た連中がたむろつていた。

「あのく俺達、ここを通りたいのでどけてくださいますか？」

「あゝ？んだてめえゝ！俺達の前を通るだゝ？」

「お前は俺達、『フレア団』を知らねえのか？」

フレア団？知らんな・・・

「そんな名前、知らん。とりあえずどいてくれませんか？」

「バロン君、もう良いから普通の道を行きましょう・・・」

ビオラは俺の名を呼び、引き返そうと言ってきたが・・・

「俺はビオラさんが言ったこの道を通る。こいつらがどかないのなら、蹴散らす」

俺は腰のモンスターボールに手を付けた。

「ふん！小僧が！出てこいアブソル！」

「出てこい、クチート！」

「お前も行け、デルビル！」

「お前もだヨーギラス！」

「仕方ない、俺も出しておくか・・・行けキバナア！」

全員悪タイプのポケモン達を出して来たか。

アブソルの奴はリーダーだろうな。

「もう！バロン君たら！私も戦うからね？出て来てオンバーン！」

「あ。ありがとう。じゃ俺もポケモン達を出しますか！出てこいみんな！」

「みんな!?!」

ビオラさんはえ？みたいな声で言った。

てか、そうなるよねw

「ハハハ・・・だって、5体2じゃ嫌じゃん？だから、ぜくぶ使っちゃう♪」

「そうね♪私の残りも全部出しちやおう！出て来てみんな！」

「おい！お前達！ずるいぞ！俺達も全部だしてやる！」

フレア団の連中は各自のポケモン達を全部出して来た。

もちろん俺達もね♪

フレア団サイド

フレア団リーダー？

アブソル【悪】

ヘルガー【悪・炎】

ヤミラミ【悪・ゴースト】

サメハダー【悪・水】

バンギラス【悪・地面】

フレア団B

ヤミラミ【ゴースト・悪】

ヨマワル【ゴースト】

デスマス【ゴースト】

フレア団C

デルビル【炎・悪】

ガーディ【炎】

ロコン【炎】

フレア団D

ヨーギラス【岩・地面】

サイホーン【岩・地面】

ダンゴロ【岩】

フレア団E

キバナア【水・悪】

ウデツポウ【水】

ブイゼル【水】

バロンサイド

バロン

白龍【神】

メイビス（デオキシス）【神・エスパー】

ピカチュウ【電気】

メタング【鋼・エスパー】

ヒノヤコマ【炎・飛行】

ハリボーグ【草】

ビオラ

アメタマ【虫・水】

アメモース【虫・飛行】

オンバーン【飛行・ドラゴン】

クチート【鋼・フェアリー】

ミロカロス【水】

ウルガモス【虫・炎】

ビオラさんが今まで出さなかったポケモン達・・・

クチートにミロカロスにウルガモス。

・・・ウルガモス？

伝説に入っていないなかったっけ？

フレア団は1人だけ悪タイプ的一致で、進化形が殆どがいて、それ以外は進化はしていないが、タイプが一致しているのが4人か・・・

フレア団17体VSバロン達、12体

数では負けているが、バトルはするまで分からない！

絶対に勝つてやる！

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十二話

二十二話

大戦闘バトル！

☆フレア団VSバロン・ビオラ☆

「バンギラスの特性で、砂嵐状態だ〜！行けバンギラス！岩雪崩れ！」
バンギラスは特性【砂嵐】を持っている。

この特性は、戦闘に出すだけで砂嵐が巻き起こる厄介な特性だ：：
更に岩タイプの威力も上がると言う、岩タイプにうってつけの特性。追加効果で岩、地面以外に微弱ながらもダメージを与えてくるのも厄介な特性の1つと言えるだろう・・・

バンギラスは右手を思い切り地面に振り下ろし、岩雪崩れを起こした！

それはヒノヤコマにまっすぐ向かって行ったが、

「ミロカロス、雨乞いからのハイドロポンプ！」

特性系の天気変更の弱点は、最後のポケモンの特性か技で天気系が変わる時だ。

ビオラはそれを直ぐに打ち消すため、雨乞いを使ったのだ。

更に、雨乞いをするとう天気は【雨】の状態・・・

ピカチュウの雷電モードにうってつけだ！

「ピカチュウ、雷を放て〜！」

ピカチュウは雨雲に向けて雷を放った！

「雷を俺達のポケモンに当てないだど!?意味が分からんが今は攻撃あるのみ！ヤミラミ部隊、シャドーボールだ！」

ヤミラミ部隊はフレア団Bが率いるポケモン達だ。

リーダーのヤミラミとフレア団Bのヤミラミ、ヨマワル、デスマスは一斉にピカチュウに向けてシャドーボールを放って来た！

「オンバーン、ピカチュウを守るよ！爆音波！」

オンバーンの両耳から超音波の波動がシャドーボールに当たり、爆発した！

時間は十分！雷はピカチュウに降り注ぐ・・・

「何か分からんが雨に効果があるならさせねえぞ！ヘルガー！日本晴れ！」

雨は一転！ヘルガーが雨雲を日本晴れに変えさせた！

日照りが辺りを焼き尽くすかの様な暑い状態になった。

日本晴れには、炎タイプの技の威力を上げるほか、水タイプの技の威力を下げる効果がある。

更に、ソーラービームの発動にかかる時間を短縮することが出来るほか、光合成と言う技で体力が回復する量が増えたりと色々な効果がある。

「くっ！雨を消されたか！雷電モードには成れなかったが、普通状態でも十分戦える！ピカチュウ、雷だ！」

「日本晴れね〜ウルガモス、あなた好きでしょ♪暴れておいで！」

ピカチュウが放った雷は日本晴れに変えたヘルガーに向かって行った！

「サイホーン！ヨーギラス！ヘルガー様の縦になり、雷を防げ！」

サイホーンとヨーギラスは直ぐにヘルガーの前に立ちふさがり、ピカチュウの雷を受けた！

だが、地面タイプは電気を通さない・・・ピカチュウの攻撃は不発に終わったのだ・・・

その時、ヘルガーの後ろにデカイ蝶が舞い降りた・・・

ヘルガーはまだ気付いていない・・・

デカイ蝶・・・それはウルガモス！

ウルガモスはヘルガーを後ろから襲った！

たぶん、技の【暴れる】だと思うが・・・ビオラさんが暴れておいでって言ってたし・・・

ヘルガーはたこ殴り状態になり、反撃が出来なくなっている。

「ヒノヤコマ、今のうちにツバメ返してデルビルに攻撃をしろ！」

ヒノヤコマは直ぐにデルビルに攻撃を仕掛けた！

「俺の炎部隊！火炎放射で迎え撃て！」

「白龍！お前の力でねじ伏せろ！裁きの鉄槌！」

白龍が技を放つ前に、炎部隊の火炎放射はヒノヤコマの手前で消し

飛んだ・・・

更に、日本晴れの暑い天気は曇り空に変わっていく・・・
場のポケモン達の動きが止まる・・・

この異常な状態を巻き起こしたポケモンをみんなは見ただ・・・

空に緑の光が一点・・・

そこから緑の龍が舞い降りてきた・・・

『我はレックウザ。戦いを止めに来た』

「うるせえ！俺達の戦いに邪魔をするな！アブソル、ヘルガー、ヤミラミ、サメハダー、バンギラス！みんな悪の波動！」

リーダーのポケモン達は一斉にレックウザに向け悪の波動を放った！

『我に攻撃を仕掛けるか。破壊光線！』

レックウザから全てを破壊する光線・・・破壊光線が放たれた！

悪の波動はあつけなく蹴散らされ、悪の波動を放ったポケモン達を薙ぎ払った！

リーダーのアブソルが間一髪躲したが、その他のポケモン達は破壊光線を受け、戦闘不能になり、リーダーが直ぐにモンスターボールに戻した！

（破壊光線は、ポケモンに対しては消す事は無いですが、威力はゲームより威力が高いです）

「俺のポケモンが一撃で倒されるなんて！アブソル、大丈夫か!？」

アブソルはリーダーに頷き、レックウザを見た。

レックウザもアブソルを見ていた。

『お主の目、まだやる気のようなだ』

レックウザはまた破壊光線を打つ気だ！

「ヤミラミ、ヨマワル、デスマス！リーダーを守るぞ！シャドーボール！」

「俺達も守るぞガーディ、デルビル、ロコン！火炎放射！」

「俺達も行くぞヨーギラス、サイホーン、ダンゴロ！ストーンエッジ！」

「俺達もだ！キバナア、ウデツポウ、ブイゼル！水の波動！」

合計12体の一斉攻撃がレックウザに放たれた！

威力も全部を合わせた攻撃力はデカイ！

『ほほう〜良い考えだが、我にその程度で勝つつもりか？流星群！』

レックウザの周りから隕石が降り注ぎ、ポケモン達の一斉攻撃を簡単に打ち消し、そのままポケモン達に攻撃が当たっていった・・・

攻撃を受けたポケモン達はみな、戦闘不能に・・・

フレア団達はみな直ぐにポケモン達をモンスターボールに戻した。

「えげつねえ〜あんな攻撃受けたら、さすがに耐えきれないぞ・・・」

「あれはキツイわね・・・伝説のポケモンを相手にするなんて・・・」

「メイビス、ピカチュウ、ヒノヤコマ、ハリボーグ。すまないが一度、

モンスターボールに戻ってくれ。みんなを傷つけたくない。戦える

のは白龍だけだと思う」

『マスターの言う通りだな。俺達では勝てない・・・みんな戻るぞ。頑

張れよ白龍・・・』

ピカチュウはそう言いみんなをモンスターボールに戻させた。

ピカチュウもモンスターボールに戻り、俺と白龍はレックウザを見た。

「みんなもごめんね・・・クチートだけ残ってみんなはモンスターボールに戻ってくれる？」

ビオラのポケモン達もみんな頷き、モンスターボールに戻って行った。

ビオラとクチートはレックウザを見た。

『我と戦う覚悟を決めた者たちよ。我の真の姿を見せてやろう！メガ進化！』

レックウザの体が虹色に輝きだした！

体は大きくなり・・・

顔から生えていたX状の角は、上部分が顔の先端部分から後ろに尖るように伸び・・・

下部分は顎辺りから前に伸び、△状に伸びた・・・

天気は一転！乱気流が吹き荒れるフィールドと化した！

「フレア団のリーダーさん。ここは一時休戦で良いですよね？」

「勿論だ！すまないが、手伝ってくれ！」

「ああ！行くぞ白龍！」

『まかせろ！』

「クチート、私達の絆を見せつけるよ！メガ進化！」

『はい！ビオラ様！』

ビオラがメガストーンを掲げ、クチートの首から吊りあつたクチートナイトが虹色に輝きだした！

クチートの後ろに伸びていた顎は2つに別れ、体も少し大きくなり、ピンク色のスカートみたいのが付いた状態になった。

【メガクチート】にメガ進化したのだ！

「俺達の絆も見せてやる！アブソルメガ進化！」

『誰にも負けない強い絆見せてやる！』

フレア団のリーダーは腕に付けていたメガストーンに触れ、アブソルの首に吊りあつてあるアブソルナイトと共鳴！虹色の光が2人を結び、輝きだした！

アブソルの体は少し大きくなり、首から生えていた毛は大きな翼みたいな形状に、髪は長くなり、角は更に大きくなり、もう片方にも小さいながらも角が生えた。尻尾は少しギザギザが入った尻尾に変わった。

【メガアブソル】にメガ進化したのだ！

「俺達はメガ進化しないな・・・」

『マスター忘れては困る！我とマスターには深い絆があるではないか！』

「そうだったな！すまなかった。俺達には絆がある！もつと強くなるぞ〜！」

『オオオオ〜！』

白龍は雄叫びをあげ、体が虹色に輝きだした！

白龍は全体的に小さくなり、小型化した・・・

翼は動きやすい形状に・・・

顔はスピードが出るフォルムに・・・

尻尾はしなやかな綺麗な形状に・・・

色は一緒の白だが、少し黄金色になっていて、煌びやかな状態……俺が見えている場所は白龍が見えている場所……

手も足も白龍と一緒に動く……

白龍も俺と一緒に感覚の様だ……

……シンクロ……

この言葉がしつくりきた……

【シンクロ進化】したのだ！

『むう……この進化方法は我は知らぬな……いったいどんな力があるか……』

「行くぞみんな！レックウザを撃退、いや！倒すぞ！」

「おお〜！」

『面白い！やってみろ！』

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十三話

二十三話

決戦

☆メガレックウザVSメガアブソル・メガクチート・シンクロ白龍

☆フィールドはメガレックウザの特性【デルタストリーム】で乱気流が起きている。

この乱気流・・・

雨乞い

日本晴れ

砂嵐

あられ

これらが一切発動しなくなる・・・

更に、飛行タイプの弱点となるタイプの技のダメージが通常ダメージに変わるなど、なかなか厄介だ・・・

「アブソル、悪の波動だ！」

「クチート、ムーンフォース！」

「白龍、目覚める波動！」

※目覚める波動・・・

ポケモンのステータスを一時的に大幅に上昇させるサポート技。

自身にも効果あり。

アブソルとクチートは白龍の技の効果で攻撃力が大幅に上昇した！

悪の波動とムーンフォースはまっすぐにレックウザに向かっていったが、

『画竜点睛（ガリユウテンセイ）！』

レックウザは天高くに上がり・・・

空に緑の光が見えた。その光の正体はレックウザ！

レックウザは自身の周りにオーラを纏っており、高速で俺達のポケモンに向かっていった！

だが、直線上にはアブソルとクチートの技が迫っている！

『我がこの技だけだと思ふなよ！画竜点睛にアイアンヘッドも付けてあるのだ！』

アイアンヘッド・・・

鋼タイプの技でファイアリータイプには相性が悪い技・・・

それが同時に使われ、更に高速で迫ってくるレックウザ・・・

技はもう当たる寸前！

「白龍！オーバーリミッド・ゴッド！」

※オーバーリミッド・ゴッド・・・

全ての攻撃する技を一時的に【神】に変換するサポート技。

自身にも効果有り。

白龍はクチートとアブソルの後ろに行き、手を翳した。

その翳した手から、黄金色のオーラが2匹を包み込んだ！

2匹の放っていた技の色も黄金色に変わり、タイプは完全に【神】に変わった！

そして、技はレックウザに当たった！

レックウザは2匹の神タイプの技が当たり、落ちるかと思つたが、

さすが生きる伝説・・・

簡単には落ちなかった・・・

レックウザは当たる直前、自身の隠れ特性【無限エナジー】を発動したのだ！

※無限エナジー・・・

自身の力の源を無限大に増殖させ、最強状態に変換出来る。

副作用で使った後は、自身に多大なダメージを受ける。

レックウザは無限エナジーを使い、最強状態まま画竜点睛で技を粉

砕しながら突っ込んで来た！

白龍もサポートを頑張っていたが、もうダメだ・・・

攻撃に移る！

『マスターの考え方が我にも伝わってくる・・・行きましようマスター！』

「おう！攻撃だ白龍！ゴツドキャノン！」

※ゴッドキャノン・・・

シंकロ状態のみ使用可能な特殊技。

神タイプの上級技に入る強烈な技。

両手を前に翳して、光線を発射するのだが、片手ですると腕が消える・・・

光線の圧量に耐えきれなくなるからだ。

白龍は直ぐに両手を翳し、レックウザにゴッドキャノンを放った！

画竜点睛のレックウザが、白龍のゴッドキャノンに当たった！

そして、大爆発がおこり、レックウザは煙をあげながら地面に落下していった・・・

ゴッドキャノンを放った時、腕がもげそうな痛みがきて、腕を押さえることになったが、なんとか勝負に勝てたようだ・・・

レックウザが地面に落ちた時、メガ進化が解け、普通のレックウザに戻った。

アブソルもクチートもメガ進化を解き、体を休ませていた。

俺はレックウザに歩み寄ろうとしたとき、

「バロン君！危ないから下がってなさい！」

ビオラにそう言われたが、俺はそのまま進んだ。

レックウザに確かめたい事があるから・・・

俺はビオラに進みながら言った。

「ビオラさん。俺はレックウザに確かめたい事があるので行かせてもらいます」

そう言い、俺はレックウザの直ぐ側まで来た。

『我を見下ろすとは、頭が高いぞ小僧！』

「すまないな。1つ聞きたいのだが、レックウザは戦いを止めに来たんだよね？」

『ああ』

「戦っている時思ったんだが、レックウザって戦い好きだよね？」

レックウザは答えなかったが、知らんぷりしたので正解だと思った。

戦いを止めに来たは口実で、実際は戦いたいただけだったように思っ

たからだ。

俺はレックウザの耳？元で言った。

「なあレックウザ。俺と来ないか？俺の日常は基本、バトルだらけだぞ」

俺はニツと笑うと、レックウザは呆れたかの様に言った。

『我を仲間にしよとわ。面白い！我はお主に付いていこうではないか！よろしく頼むぞマスター』

レックウザはそう言い、早くモンスターボールを出せと言ってきた。

俺は直ぐにモンスターボールを取り出し、レックウザに当てた。

そして、直ぐにカチツと音が鳴り、ゲットした・・・

「バロン君？ゲットしちゃったの？」

「うん・・・」

「お前ずるいぞ！俺が欲しかった！」

「すまない。最初は話しだけにしようと思ったが、成り行きでつい・・・」

俺は苦笑いしたが、

「お前、俺ともう一度勝負だ！」

「ああ、良いぜ！」

「ちよつと待ちなさい！まずはポケモンセンターに行きなさい！ポケモンを回復してあげなくちゃ！」

俺とフレア団リーダーは直ぐにポケモンセンターに走って行った。

その部下達は

「ちよつとリーダー！待ってくださいよ〜！」

ビオラは、

「バロン君！おいてかないですよ！」

ビオラはフレア団の部下達と一緒にバロン達を追いかけた・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十四話

二十四話

俺達はポケモンセンターに着いてから休憩していた。

「なあ。フレア団ってどんな団体なんだ？」

「突然だな…素直に言っておくが、俺達は悪の組織【フレア団】。俺はキースと言う。そこにいるのは俺の部下達だ」

フレア団って悪の組織だったのか！

「だが、俺はフレア団を今回の事で抜けようと思う」
「抜ける？」

「フレア団にいても俺は強くなれない…お前のポケモンに勝てるように俺は特訓に行く」

「キース様…俺達も一緒に行きます！」

フレア団のキース…いや、元フレア団だな…

「そうか。お前達ならちゃんの特訓すれば確実に強くなるだろうな。ちなみに言っておくが、俺はまだバッチ1個なので、キースとのバトルが終われば出発することにする」

「な!?バッチ1個だと!見せてみろ!」

俺はバッチが1つしか入っていないケースを見せた。

「ホントに1個だけだ…マジかよ…」

「キース様元気出してください!」

「なあビオラ?バッチが1個だけってやつぱり可笑しいの？」

俺は疑問に思ったことを素直に言った。

「ええ。だって伝説であるポケモンを2体。いえ、3体だね。それに、普通では決して見ることが出来ない白色のピカチュウ…しかも、貴重なメタグロスになるポケモン、メタングすら持つてる。更に最初のポケモンである、ハリボーグも…バロン君のポケモン達は普通はバッチ1個じゃ手に入らないポケモン達ばかりなのよ…」

元フレア団になったキース達が、うんうんと頷きながら話を聞いている…

俺のポケモン達ってそんなに凄かったんだ…

『マスターは俺達の凄さが解ってなかったのか・・・』

ピカチュウが呆れ声でそう言ってきたが、俺は普通に知らなかった・・・

今更だが、俺の手持ちポケモン・・・

俺のポケモン

白龍 LV45 【神】

ヒノヤコマ LV30 【炎・飛行】

ハリボーグ LV31 【草】

ピカチュウ LV45 【電気】

メタング LV29 【鋼・エスパー】 【メタグロスナイト】

メイビス LV55 【エスパー・神】

レックウザ LV60 【ドラゴン・神】

合計7体・・・

次育てるならメタングかな？それともハリボーグが良いかな

「なあバロンよ。俺との戦いは良いから、先に旅に行けよ。バッチ1個に負けるなんてさすがにキツイからな・・・早くバッチ4個は取ってこい！その時に再戦しようぜ！」

「うん！」

「あ・・・これ、俺のアドレスな」

キースは俺のポケモン図鑑にキースのアドレスを登録してくれた。

俺もキースのポケモン図鑑に俺のアドレスを登録した。

「なにかあれば相談になってやるから、気軽に声を掛けろよ」

「ありがとう！」

「じゃ、俺達はフレア団に抜けることを言ってくるわ。これでも一応、幹部なんでね」

幹部!?

キースって幹部だったんだ！

「凄いクラスですね！だけど、フレア団を止めてくれて嬉しいですよ。一緒に頑張りましょうね！」

「おう！俺達とお前は友達だからな。約束は守るぜ」

キースは部下達を引き連れて、路地裏に消えていった・・・

ん？路地裏に基地があるのかな？

まあ、今はジム戦だ！

プリズムタワーまでもう少し！行くぞ〜！

「バロン君、私、少し用事があるから先に行つてて・・・」

「わかった！気を付けてね！」

ビオラはそう言うと言を振って、歩いて言った。

『マスター。あのビオラって人、何か隠してないかな？』

「気のせいでしょ。それよりもジム戦頑張ろうな！」

『ああ！』

ミアレシテイ・・・

とある路地裏の一角・・・

「ハンサムさん、こちらビオラ。フレア団に動きがありました」

『ご苦労。俺も直ぐにそちらに向かう！』

「了解。引き続き捜査します」

「気を付けろよ」

「はい」

会話の後、ビオラは路地裏に消えて行った・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十五話

二十五話

俺の前には高くそびえ立つ塔……

『プリズムタワー』に来ていた。

ここにジムがあるとビオラは言っていた。

俺はプリズムタワーに入って行くと、金髪の男の子が門の前で立っていた。

「あの〜ジムに挑戦したいんですけど?」

「え? ああ! ジムにチャレンジしに来たんですね! ようこそミアレジムへ! 僕がジムリーダーのシトロンです!」

ジムリーダーと言った少年、シトロンはなぜ、門の前にいるのだろうか?
う?」

「シトロンさんは門の中に入らないのですか?」

「ちよつと今は入れないんだ……電気が滞っていて、復旧に時間がかかるみたいなんだ」

電気が滞るだって……

フレア団と言う奴らの仕業なのか……

ちよつと調べてみるか。ジムに挑戦出来ないし……

「シトロンさん、また後でジムに挑戦しますね!」

「ごめんね……」

俺は再び来た道に戻り、プリズムタワーを出た。

うくん……これからどうしよう……

ピコン!

メールの音?

俺はポケモン図鑑を取り出し、メール欄を見た。

差出人 ビオラ

バロン君ごめん!

急用が出来て、一緒に旅に行けなくなっちゃた!

ほんとにごめん!

ビオラからのメールを見てから、とりあえずプラターヌに電気を送っている施設を聞いてみよう。

俺は、プラターヌの研究所の向かった。

研究所に着くとプラターヌの助手の方が出迎えてくれた。

「こんにちは。プラターヌいますか？」

「うん。いるよ。どうぞ」

プラターヌはいつもの場所で研究をしていたみたいだった。

邪魔をしちやっとな・・・

「やあ！待たせたね。どうしたんだい？」

「この街に送ってる電気の場所を知りたくて来ました。」

プラターヌはそういう事か！と言ってから、

「そうだね・・・電力を送ってる場所なら・・・ここだな。カロス発電所・・・」

「カロス発電所・・・」

カロス発電所は、荒野になっている13番道路。

通称【ミアレの荒野】

そこの左側にカロス発電所がある。

「そこに不具合が起きて、電気の流れが滞っているんですね・・・」

「その通りだよ。僕も行きたいけど、設備に支障が出ると行けないので、僕は行けないのだよ・・・」

「大丈夫ですよ。僕には心強い仲間達がいるので」

俺はその後少しだけプラターヌと話してから研究所を出た。

13番ゲートは東にあるが、

『マスター、俺を使え！俺がマスターを発電所まで運んでやる』

「おお、それは助かる！頼むぞレックウザ！」

俺は腰ベルトからレックウザのモンスターボールを投げ、レックウザを出した！

俺はそのままレックウザの頭に乗し、ミアレの荒野に向かった。

その時、プラターヌが研究所の窓から見ていて、モンスターボールからレックウザが出て来た瞬間、気絶をしたと言う・・・

レックウザを持つ俺はミアレシティの有名人になるにはそう遅く

は無かった・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十六話

二十六話

ミアレの荒野にあるカロス発電所にて、1人の男がポケモンと一緒にオレンジ色の集団・・・フレア団と戦っていた。

「くっ！流石に多いな・・・」

「そろそろ終わりにしてやる！ヘルガー、火炎放射！」

ヘルガーの火炎放射がその男のポケモンに当たる直前！

「ミロカロス、ハイドロポンプ！」

どこから来たのか、ミロカロスが出て来て、ハイドロポンプを放った！

ハイドロポンプは火炎放射を押し返し、ヘルガーに当てた！

ヘルガーは効果抜群の技を受け、吹っ飛んだが、体勢を立て直し、ミロカロスを睨んだ。

「おお！ビオラ！来てくれたのか！助かったぞ」

「間に合って良かったですよ。ハンサムさんのハッサムは鋼・虫タイプで炎が相性悪いですもん」

ハンサムと言われた男は苦笑いし、ハッサムは少し落ち込んだ・・・

ビオラはフレア団のヘルガーを使っているトレーナーを睨んだ。

その人物は、キース・・・

バロンにはフレア団を抜けると言っておきながら、結局抜けていないじゃないか！

絶対に許さない・・・

ビオラから怒りのオーラが・・・

「ミロカロス、破壊光線！」

ミロカロスは体勢を立て直したばかりのヘルガーに破壊光線を放った！

「ヘルガー！避けるんだ！」

ヘルガーは当たる直前、横に飛び攻撃を回避したが、破壊光線を放った軌道にはキース・・・

ビオラもミロカロスも相当怒っているが、技の無駄遣いはしな

い・・・

キースはもうダメだと目を瞑った瞬間、キースの前に黒い影が映った。

その影は破壊光線を受け、キースは助かったが、その影は大きく吹き飛ばされた・・・

キースは直ぐに飛んだ影を見ると、ヘルガーだった！

「ヘルガー！おい！大丈夫か！」

キースはヘルガーを揺さぶりながら必死に声をかけた！

「私はあなたを許さない。もう一度破壊光線よ」

ミロカロスからもう一度、破壊光線が撃たれた！

狙いはまっすぐにキース・・・

キースは破壊光線が撃たれた事に気付いてきない。

私は勝利を確信した。

だが！

現実はその、甘くは無かった・・・

「グラエナ！破壊光線！」

グラエナがキースの前に立ち、ミロカロスが放った破壊光線に、破壊光線を放ち、技を相殺した！

「キース、ちゃんとしなさい。私が駆けつけないとあなた、危なかったわよ？」

「アケビ様・・・」

アケビと呼ばれた女性はキースを引っ張り上げ、ヘルガーをモンスターボールに戻させた。

「ここは私に任せなさい。あなたは発電所の警護に向かってちょうだい」

「わかりました」

キースは走って発電所に向かおうとしたので、

「私が逃がすと思うか！オンバーン、キースを追って仕留めろ！」

ビオラは腰のベルトからオンバーンが入ったモンスターボールを投げ、オンバーンを出した。

オンバーンはキースを追いかけるため、空を飛んだが、

「そう簡単に行かせる訳ないじゃない！」

オンバーンの前にゴルバットが立ち塞がった！

その隙にキースは発電所に辿り着き、建物の中に入って行った。

「くそ！あんた邪魔よ！」

「邪魔も何も、私の可愛い部下を可愛がってくれたお礼、させてもらおうよ！」

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十七話

二十七話

荒野の戦闘

☆オンバーン&ミロカロスVSグラエナ&ゴルバット☆

「ハンサムさんは先に発電所に行つて！オンバーン、爆音波よ！」

「簡単に通すと思わないでよね！グラエナ、吠えるよ！」

なっ吠えるだと！

※吠える・・・

戦闘に出している相手のポケモンを入れ替えさせる技。

よつて、ビオラのオンバーンは爆音波の前に手持ちに戻つて行つてしまつた。

そして、クチートが出て来た。

「残念だつたね！お前のオンバーンの攻撃は防いだわ！」

グラエナは誇らしげに鳴いた。

だが、ビオラのクチートは・・・

「クチート、そうそうに決着を付けるわよ！メガ進化！」

『そうですね』

ビオラはネットクレスに付けているメガストーンに触れ、クチートの首に吊してあつたクチートナイトと共鳴。

虹色の光が輝き、2人を包んだ。

その光が収まつた時にはクチートの姿はメガ進化した、メガクチートに変わつていた。

「なに!?だが、もう一度吠えるよ！」

グラエナを吠えようとしたが、

「クチート、守るよ」

クチートの周りに緑色の壁が出来た。

※守る・・・

緑色の壁を発生させ、相手の攻撃から身を守る。

守るの前ではどんな攻撃でも防げる。

グラエナの吠えるは不発に終わったのだ。

「ちっ！じゃあ悪の波動！」

「クチート、グラエナにムーンフォース！ミロカロス、ゴルバットにハイドロポンプ！」

※ムーンフォース・・・

月の光を集め、相手に攻撃する、妖精〔ファイアリー〕タイプの技。

グラエナの悪の波動はクチートのムーンフォースの押し戻されて行き、グラエナに攻撃が当たった！

ミロカロスのハイドロポンプはゴルバットを容赦なく当て、吹き飛ばした！

「くそっ！なんて奴なのよ！グラエナ、ゴルバット！同時に破壊光線をミロカロスに当てなさい！」

グラエナとゴルバットは直ぐに破壊光線をミロカロスに放ったが、その前にはクチートが・・・

「クチート、守るよ。ミロカロスは波乗り！あの二体をやつつけなさい！」

※波乗り・・・

自身の周りに水を出し、波を発生させる。

周りにも影響がでる。

クチートは2体の破壊光線を守るで、ミロカロスに当たるはずだった技を防いだ。

その間にミロカロスは波乗りを使い、辺りを波にし、グラエナとゴルバットに攻撃した！

クチートはその間、守るでビオラも一緒に守った。

ミロカロスの波乗りは、グラエナ、ゴルバットを容赦なく攻撃し、そのまま私の邪魔をしたアケビを巻き込み、流して行った・・・

ハンサムはハッサムの守るを使い、身を守っていた。

流された方を見ると、グラエナとゴルバットは戦闘不能になっていた。

「もう〜服がびちゃびちゃじゃない！とりあえず戻って」

アケビはグラエナとゴルバットをモンスターボールに戻した。

アケビの服はオレンジ色なので透ける事はないが、服が体に引っ付

くので、体のラインがはつきりと解る。

ハンサムの方を見ると、ハッサムがハンサムの前に立ち、アケビを見えなくさせてくれている。

(後で解りますが、ハッサムは雌です。クチートとミロカロスも雌ですよ)

良かった。ハッサム、ナイス!

アケビは確かに許さないけど、これとそれとは別って事で...

アケビは悔しそうに腕で前を隠しながら、睨んでいた。

「アケビと言ったわよね? その格好恥ずかしいでしょ? 発電所の計画を止めて、撤退してくれれば、見逃してあげる。後、キースを差し出せ。そうしないと後ろにいる変態があなたを捕まえることになるわよ...」

アケビは後ろにいるハンサムを見た。

その瞬間、アケビは首を縦に何度も振り直ぐに隊員達に連絡を取り、撤退させるように命じた。

その間、ハッサムは頑張つてハンサムをこっちに近づけないようにと、見せないように頑張つてくれていた。

「お疲れ様クチート、ミロカロス。戻つてね」

ビオラはクチートとミロカロスをモンスタールボールに戻した。

アケビは隊員達の撤退が終わつたのを直ぐにビオラに伝え、キースを差し出した。

その時ビオラは、コートをアケビに渡してあげた。

アケビは戸惑っていたが、意図を察し、直ぐに羽織つてから撤退した。

その後、発電所の中を調べたが、電気の復旧も無事に元に戻つていたので、よほど、変態に捕まりなくなつたのか、あるいはもう用済みだったのか...

一応、今回の件は無事に片付いたが、キースはこのままハンサムに渡す。

ハンサムはキースを逮捕し、連れて行つたくれた。

私はバロン君のジム戦が気になるので、ミアレンティに戻ることに

したその時、

「あれ？ビオラさん？」

バロン君の声が聞こえたが、どこにもいない……

「ビオラさ〜ん！〜ここですよ〜！」

俺は思いきり手を振って、存在をアピールした。

ビオラはようやく上を向いてくれた。

「え？レックウザに乗って……」

一応ビオラさんもレックウザゲットの目撃者だから、なんでレックウザで来てるの？って意味だろう……

「レックウザが乗せてくれるって言うからさ、乗せてもらった！」

レックウザは静かにビオラの前に降り立ち、バロンを降ろしてあげた。

「ありがとうレックウザ。あ、発電所の電気が滞っていると聞いてやって来ました」

「あ。それならもう解決しちゃった……」

ビオラはごめんねと手を合わせて謝った。

「いえいえ！解決してくれてありがとうございます！これでジムに挑戦できますー！」

「あ〜このジムは殆ど電気で動くもんね……良かった、治って〜」

「では、そろそろミアレシテイに戻りますか。頼むぞレックウザ」

『任せろ！』

俺はビオラさんをレックウザに乗せ、俺もレックウザに乗った。

「さ〜！レックウザ！ミアレシテイに向けて再出発だ〜！」

『了解だマスター！』

レックウザは直ぐさま飛び立ち、俺達はミアレシテイに飛んで行った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十八話

二十八話

俺とピオラを乗せたレックウザは、ミアレシティ上空にゆっくり飛んでいた。

「いや／＼上から見る景色もまた違うね／＼」

「そうだね。なかなか見ることの出来ない景色だね」

『マスター？あのタワーに降ろせばいいの？』

レックウザはどこに降ろして良いか解らなくて、空をゆっくり飛んでいたようだ。

あ……そう言えばどこに降ろして欲しいって言ってなかったな……うん。そのタワーの入口付近に降ろしてくれば助かる」

『了解だ』

レックウザはゆっくり下降していき、プリズムタワーの入口前に静かに降り立った。

その光景を街の人達は見ていて、

「あのポケモンは数時間前の!？」

「それよりも人が乗ってるぞ！」

「大丈夫なのか!？」

「みんな見に行くぞ！」

街の人達はレックウザが降りていく場所を目指して向かって行った。

「ありがとうなレックウザ。おかげで助かったよ」

「ありがとうねレックウザ。なかなか体験出来ない事を出来たよ」

俺達はレックウザに礼を言い、モンスターボールに戻そうとした時、

「いたぞ！あそこだ！君たち大丈夫か！」

「ん？騒がしいがどうしたんだろう？」

次から次へと街の人達がプリズムタワーに集まっていく……

『マスター……見世物みたいで嫌なのだが、消していいか？』

「ダメだよ……」

レックウザは今にも暴れそうだが、堪えてもらおう。

「え〜と？何が大丈夫なんですか？」

「君たちの横にいるドラゴンだよ！」

あ〜そう言う事でしたか・・・

「このポケモンは俺のポケモンです。名はレックウザ」

「レックウザ？この地方では聞かない名だな・・・」

「そうね。どこの地方のポケモンなんだ？」

『ホウエン地方と言う場所だ』

街の人達が固まった・・・

まあ、ポケモンが喋るなんて誰も信じがたいだろうな・・・

『様が無いなら、我はもう戻りたいのだが・・・』

「ちよ！ちよつと待ってくれ！レックウザはその坊主のか？」

レックウザがその事を言った者を睨み付けた！

『その者！マスターに小僧だど!?消されたいかあ!』

レックウザは破壊光線を撃とうと、エネルギーを溜め込んだ！

「やめろレックウザ！」

『だがマスター！あやつ、マスターを小僧と！消さなければ!』

「やめろと言ってるだろうがあ〜！」

俺は瞬時に気を全身に纏わせた、全身武装した。

そして、レックウザの頭を殴った！

『ぐああ！マスター!?なぜ我を殴るのです!?!』

「言う事を聞かないからに決まってるからだ」

レックウザはようやくやく意味を理解し、溜めていたエネルギーを解除した。

こんな所で撃たれたら、街も人もただ事では終わらないからな・・・

「ぼーっ！」

レックウザが睨んだ。

「マスターさん。助けて頂いてありがとうございます。」

「いえいえ。当然のことをしただけですよ」

「私はこの街の町長をしています、マカロフと申します」

町長と言った人物は頭を軽く下げ、名前を名乗った。

「俺はポケモンマスターを目指している、バロンと言います」

俺も目標を言いつつ、名前を名乗った。

「バロン様、私めの無礼をお許しくください。私のお屋敷にご案内をしたいのですが……」

ん〜どうしようかな……

今からジム戦もしたいし……

『おい、マカロフと言ったな。マスターはジム戦をするためにここに来たのだ。そんな暇はない』

レックウザがマカロフにそう言うと、

「それはすみませんでした。ジム戦が終わられましたら、是非、私のお屋敷に来てください。お礼をしたいのです。もちろん、お迎えを用意しますで」

お礼をしたいと言ってるのだから、行かないとね。

「解りました。では、後ほど伺います」

「よろしく願います」

マカロフは自分の屋敷に戻るべく、馬車を呼び、帰って行った。

街の人達は、

「これからバトルするんだろ？見せてくれよ」

「俺もみたい！」

「私も！」

みんなからそう言われ、承諾した。

「さ〜ジム戦だ！頼もう！」

「バロンさん、凄く盛り上げてくれましたね……心臓が持ちませんよ……」

シトロンはため息をつきながらそう言った。

まあ、こんなに盛り上がったらね……

「ですが、ジム戦はジム戦！気を引き締めて行きましょう！ようこそ！我がジム、ミアレジムへ！」

ポケットモンスターXY バロンの旅 二十九話

二十九話

「使用ポケモンは3体！ポケモンの交代はチャレンジャーのみとさせて頂きます！それでは、勝負始め！」

ミアレジム戦

☆シトロンVSバロン☆

「行け！ピカチュウ！」

「行ってきてください！レントラー！」

いきなりレントラーかよ……

「レントラー！エレキフィールド展開！」

※エレキフィールド……

地面にいるポケモンは、電気タイプの技の威力が1.5倍になる。エレキフィールドか。

確かに、電気タイプにはうってつけの場だな。

「ピカチュウ、特性で雨乞い！その後、雷だ！」

『いつもの感じだな』

ピカチュウに指摘されたが、雷電モードは強力。

別に良いじゃ無いか……

『マスターに先に言っておく。雷電モードをあまり、頼りすぎるな。今は命令で動くが、解らないようでは、自分で勝手に動くからな』

ピカチュウはそう言い、雷電モードになるため、雨乞いをしてから雷を放った！

「ピカチュウの特性が雨乞いなんて、聞いたことないですが、僕にもメリットがあるんですよ！レントラー！雷を自身に撃て！」

『了解した！』

レントラーは雨乞いを糧に雷を放った！

その雷のタイミングはピカチュウと同時……

その雷が落ちてきたのも同時だった……

雷が2体のポケモンに落ちた時、真の力を発揮した！

ピカチュウの力は雷電モード・・・
レントラーの力は雷獣モード・・・

レントラーにもピカチュウと似た真の力があつたのだ！

「なに!?ピカチュウ以外にもこの力を使えるだど!?!」

「正直、僕も驚いているよ。レントラーの力に似た力を持つポケモンがいたなんてね」

レントラーの雷獣モードは・・・

レントラーの周りに雷のオーラを纏っている。

更に攻撃する時に、そのオーラは形を変える。

雷タイプの攻撃力は3倍になる。

その他のタイプに雷属性を付与する。

レントラーの雷獣モードは、性能が良い!

「さあ!バトルの続きをしようじゃないか!レントラー!雷の牙!」

「ピカチュウ!雷鋼テール!」

※雷の牙・・・

顔の周りに牙の形をした物が現れる。

その牙が、噛み付いたりする。

レントラーは顔の周りに2本の牙を出し、更に雷獣モード・エレキフィールドの効果で威力は4・5倍!

雷の牙は巨大化し、ピカチュウを襲う!

ピカチュウの雷鋼テールもエレキフィールドを活用し、更に雷電モードの効果で威力は4倍!

雷鋼テールは巨大化し、レントラーを襲う!

そして、2体の技がぶつかり合った!

技の接触により、火花が激しく飛び散るが、2体は気にしない。

更にピカチュウには電気を吸収する力【蓄電】があるので、体力も回復、更に技の威力も上がると、最高のポテンシャル!

だが、さすがジムリーダーのポケモンだ。

雷を吸収されているはずなのに、威力が落ちない!

「レントラー!破壊光線を放て!」

なに!?この距離からの破壊光線だど!

「ピカチュウ！磁力を使って逃げる！」

ピカチュウは瞬時に磁力を使い、その場から逃げた。

だが、レントラーは一行に破壊光線を撃とうとしない……
まさか！

「シトロン！お前、破壊光線ははったりだったのか！」

「戦いには知恵がいるのですよ。さあ！行きますよ！レントラー！充電！」

※充電……

自分の防御を上げる効果と、次の電気タイプの威力を2倍にする技。

充電!?

「ピカチュウ！地割れだ！」

「はい!?地割れだつて!?!」

シトロンの声が裏返った……

ピカチュウは尻尾を追い切り振り落とし、地割れを発生させた！

その地割れはまっすぐにレントラーに向かって行く！

「流石にまずい！地割れは想定外だった！レントラー！充電を解除！逃げに徹しろ！」

『流石に地割れは無いわ……』

レントラーは愚痴を言ってから、技を解除し逃げた。

だが、俺達はそれを見逃す筈がない！

「今だピカチュウ！磁力を使い懐に行け！雷鋼テール！」

『おう！』

ピカチュウは磁力を使い瞬時にレントラーが逃げた方向に向かった。

そして雷鋼テールをレントラーの脇腹に当てた！

レントラーは吹き飛ばされ、フィールドにあった壁に激突！

その壁に埋まり逃げられなくなった。ちなみにまだ、倒されていない！

「ピカチュウ！トドメの特大雷！」

ピカチュウは自身の雷電モードの雷を全て、更にエレキフィールド

の電気も蓄電で全て無理矢理吸収！

それは、1つの兵器と化した・・・

「まずい！レントラー！逃げろく！」

『くーうぐ・・・け・・・ない・・・』

『食らいやがれ！俺の必殺技！超ド級・雷玉弾！』

あれ？俺は雷と言ったはず・・・

ピカチュウは超ド級の雷玉弾を放った！

それはまっすぐにレントラーを向かって行き・・・

大！爆！発！

レントラーの周りの物から全てを巻き込み、フィールドには大きな穴が開いた！

レントラーはそのとんでもない攻撃を受け、大きく空に飛んで行った。

穴が開いたところから風が入ってきた。

「レ・レントラー戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

審判を務める人も爆発に巻き込まれ、吹き飛ばされたが、直ぐに立ち上がり、そう言った。

「戻ってくださいレントラー。大変お疲れ様です。あなたのピカチュウはとんでもなく強いですね・・・雷電モード解除されますよ？」

「ええ。今の技は俺も始めて見たので、俺自身が驚いています」

『マスター！これが俺の力だ！』

ピカチュウは俺にどや顔しながらそう言ってきた。

「では、僕の2体目を出しますね。行って来て！ジバコイル！」

ジバコイル・・・【鋼・電気】を持つポケモンか・・・

鋼が邪魔だな・・・

「まだ行けるかピカチュウ？」

『休憩したい・・・』

ピカチュウは苦笑いしながら頬を掻いてそう言った。

確かに、あのどでかい技を使った後だもんな・・・

俺の2体目か・・・

①白龍を出す

②メイビスを出す
③レックウザを出す
④ヒノヤコマを出す。
⑤メタングを出す。
⑥ハリボーグで戦っちゃおう？
うくん・・・悩む
「よし！ピカチュウ戻ってこい！そして、俺の2体目！行け！メイビス！」

『やった〜！僕の出番だ〜！』

メイビスは俺の周りをクルクル回りながらそう言った。

『メイビス様。相手はジバコイル。ただならぬ気が感じます』

『ピカチュウ〜？誰に言ってるか解ってるのかなあ〜？それぐらい僕も感づいてるよ〜』

『すみません！出過ぎたマネをしてしまいました！』

『解ればよろしい〜』

メイビスは俺には優しいけど、それ以外には手厳しい時がある。

「メイビス、頼んだぞ！」

『任せてマスター！』

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十話

三十話

ミアレジム戦

☆メイビスVSジバコイル☆

メイビスは勝負が始まった瞬間に特性「オーロラブレイク」を発動した。

※オーロラブレイク※

全タイプの攻撃技を効果抜群に変えることができる。

メイビスは更に、ノーマルフオルムから、攻撃に特化したアタックフォルムにチェンジした。

『これが僕のフォルムチェンジさ！さあマスター！行きましょう！』

『おう！シャドーボールだ！』

メイビスは両手から闇のエネルギーであるシャドーボールを放った！

『ジバコイル！ミラーコート！』

※ミラーコート※

相手の特殊技で受けたダメージ2倍を与える。

ミラーコートか・・・特殊技を跳ね返される・・・

あつ！シャドーボールもだ！

シャドーボールはまっすぐにジバコイルに当たり、ミラーコートが発動した！

メイビスはミラーコートの技の効果で大幅にHPを削られた！

『今のは想定外だったよ・・・』

『メイビス、自己再生は使えるか？』

『その手があったか！ありがとうマスター！僕、その技もちゃんと使えるよ！』

『よし！メイビス、自己再生！それから、ミラーコート対策として物理技で攻めるぞ！神速！』

『了解！マスター』

※自己再生※

最大HPの1/2を回復する。

※神速※

もの凄い速さで相手を攻撃する、先行技。

メイビスは、直ぐに自己再生を使った。

自己再生する間は無防備になるが、メイビスは自己再生の達人！

無防備どころか、直ぐに再生を終え、神速を使いジバコイルに攻撃した！

「な!?早すぎですよ！大丈夫ですかジバコイル！」

『あまり、大丈夫ではないな・・・』

ジバコイルは首を横に振り、大丈夫では無いことを伝えた。

だけど、これは勝負！相手に情けを掛けるなどしてはいけない！だから！

「メイビス！トドメの技だ！サイコブレイク！」

『うん！いっくよ〜！』

※サイコブレイク※

相手の特防ではなく防御によって与えるダメージが計算される。

(この小説のみの追加効果。技を溜めた分、更にダメージが上がる)

メイビスは両手を胸の前に構え、サイコブレイクのエネルギーを溜めた！

『マスター！最大パワーで放つ?』

『ああ!』

メイビスは俺の了解を得たので、更にパワーを溜め込んだ！

「これはまずいですね・・・ジバコイル！鉄壁を重ねがけしてください！」

※鉄壁※

自身の防御力を格段に上げる技。

ジバコイルは直ぐに鉄壁を重ねがけし、防御力を格段に上げた。

『僕の攻撃をそれで受ける気かい?』

『主人の命令に従うだけだ。俺は鉄壁を任せれた。それだけでいい。来るなら来い！受けてやる!』

俺はポケモンの声が聞こえるから、2体の会話が聞こえる。

ジバコイルは主人と言い、シトロンを慕っているのが分かる。けど、サイコブレイクは防御によってダメージが変わる。

簡単に言えば、防御が高くなるほど、ダメージが大きくなるのだ。

シトロンはそれを知らないのだろう・・・防御を上げる技を重ねがけしたのだから

「メイビス！溜め込んだパワーを今、解き放て！最大パワー！サイコブレイク！」

『了解マスター！受けてみる！サイコブレイクを！』

メイビスは溜めに溜めたサイコブレイクをジバコイルに放った！

「ジバコイル！リフレクター！」

『さすが主人。リフレクター発動！』

※リフレクター※

目の前に特殊なバリアを展開。物理技のダメージを半減する。

「なに!?リフレクターか！」

『だけど！僕のサイコブレイクをそれだけで受けきれぬ筈がない！』

メイビスの言う通りだ！

最大まで溜め込んだサイコブレイクはまっすぐにジバコイルに迫っている！

これを受けきれれば、次の技をするだけが、最大パワーで放ったメイビスの疲労は凄い。

「ジバコイル！更に追加です！バリアー！」

『更に重ねるとは。さすが主人。バリアー展開！』

※バリアー※

目の前に特殊なバリアを展開。自身の防御力を格段に上げる。

「まだ追加でバリアを展開するだ?!」

鉄壁を重ねがけ、更にバリアーで防御力を上げてきた。

今のジバコイルの防御力は生半可な技じゃ通用しなくなってしまう。

メイビスが放ったサイコブレイクは遂に、ジバコイルが展開したりフレクターに当たった！

リフレクターは直ぐに亀裂が入り砕けたが、次に展開してあるバリ

アーは直ぐに亀裂は入らなかった。

だが、少しずつ亀裂が入り始めたとき、

「ジバコイル！更に追加でリフレクター！更にバリアー！」

『了解した主人！』

ジバコイルは亀裂が入り始めたバリアーにリフレクターで囲み、補強した。更にその手前にバリアーを張り直した！しかも、バリアーは使えば、防御が上がっていく・・・

サイコブレイクは頑張つて押してるが、補強されたりフレクター強化のバリアーを突破することは出来なかった。そして、技は効力を失い、消滅した・・・

『僕の最大パワーのサイコブレイクが・・・』

「こんな事があるなんて・・・」

「今がチャンスです！ジバコイル！10万ボルト！」

『了解！これでも食らえ〜！』

※10万ボルト※

強い電気で相手を攻撃する。たまに相手を麻痺状態にする。

ジバコイルは10万ボルトをメイビスに当てようとしてきた！

「ヤバい！メイビス！バリアー！」

『あつ！はい！バリアー展開！』

メイビスは咄嗟にバリアーを展開し、10万ボルトを防いだ。

「なかなか攻撃が通りませんねえ〜」

「それはこちらも同じですよ」

俺達は互いを見て、考えた・・・

俺達のポケモンは互いにだいたいHPが削られている。次の一撃で勝敗が決する・・・

「バロン君！君は強い！この一撃で勝負を付ける！」

「ありがとうございます！俺もこの一撃で決めます！」

俺とシトロンは互いのポケモンの最高の技を出すことにした。

「ジバコイル！電磁砲！」

『ハアアア〜！』

「メイビス！サイコブレイク！」

『ハアアア〜!』

※電磁砲※

電気を圧縮した超濃度の電気玉。当たれば確実に麻痺になる。

お互いのポケモンは、技をチャージした!

この技が勝敗を決する!

「放て〜!」

俺とシトロンの合図は一緒だった!

2体のポケモンは技を同時に放った!

電磁砲とサイコブレイクは2体の間の場所でぶつかり合い、大爆発した!

その爆発は2体を巻き込み吹き飛ばした!

2体は戦闘不能状態で地面に落ちた・・・

「両者のポケモン戦闘不能!この勝負は引き分けです!」

「戻れメイビス。ご苦労だった」

『勝てなくてごめんよ』

「戻ってくださいジバコイル」

『主人、すまない』

お互いのポケモンは戦闘不能で引き分けになった。

だけど、これでまだ2体目なのだ・・・

最後のポケモンの強さはこれより上か・・・

「バロン君!僕のジバコイルに勝てたのは褒めます。ですが、僕の最後のポケモンは簡単には落ちませんよ!出てこい相棒!デンリユウ!」

『やくてやるぜ!』

「俺のメイビスを倒したのはシトロンさんが初めてです。ですが!俺も簡単には負けない!俺の最後のポケモンは、出てこい相棒!白龍!」

『我に任せろ!』

お互いの最後のポケモンが出た。

このバトルが最後のバトル。

絶対に・・・勝つ!

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十一話

三十一話

ミアレジム戦

☆デンリュウVS白龍☆

このバトルが最後の戦い……

絶対に勝ってみせる！

「頼むぞ白龍」

『おう！』

「頼みましたよデンリュウ」

『はい！』

「先手必勝！白龍、神速！」

「デンリュウ！守るです！」

デンリュウは直ぐに守るを張り、白龍の神速を防いだ！

「次は僕たちの番ですよ！デンリュウ！あまごい！」

「それがどうしたく！白龍！竜巻」

※竜巻※

竜巻を発生させ、相手にダメージを与える。

相手が空に飛ぶ系統の技を使っている時、威力は2倍になる。

(小説の時のみ、天気系の技を解除させる)

白龍はデンリュウが起こした雨雲を竜巻で消し飛ばし、そのままデンリュウの方へ攻撃した！

「デンリュウ！守る！」

デンリュウは再び守るを使い技を防いだ。

だが！守るを使ってくるのは読んでいた！

「白龍！竜巻を維持したまま、どくどくを竜巻に追加だ！」

『了解！』

※どくどく※

相手を猛毒状態にする。

白龍は竜巻を維持したまま、片手を前に出しどくどくを使った。
竜巻の色は直ぐに紫に変わった！

どくどくと竜巻が合わさった……

「守るが解けたとき、デンリユウは毒と竜巻の餌食だ！」

「僕が簡単に許すとても？デンリユウ！今こそ僕達の絆が勝利を呼ぶ！メガ進化！」

『了解！メガ進化！』

シトロンは腕輪にはめられているメガストーンに触れると、デンリユウの首に吊してあった、デンリユウナイトと共鳴！虹色の光が竜巻を両断！竜巻を掻き消した！そして！デンリユウの体が光り出した！

デンリユウの体は少し大きくなり……

頭と尻尾に白い毛が生えた。

デンリユウの違いはそこぐらいしかないが、タイプに「ドラゴン」が付く。

竜巻を掻き消したか……それに、メガ進化……

ならば！

「白龍！俺達もシンクロするぞ！」

『了解した！』

俺と白龍の心が1つとなった時！真の姿が現れる！

シンクロ進化！

白龍は雄叫びをあげ、体が虹色に輝きだした！

白龍は全体的に小さくなり、小型化した……

翼は動きやすい形状に……

顔はスピードが出るフォルムに……

尻尾はしなやかな綺麗な形状に……

色は一緒の白だが、少し黄金色になっていて、煌びやかな状態……

シンクロ進化完成……

「メガストーンを使わない進化……面白い！行くぞデンリユウ！雷パンチ！」

『食らいやがれ〜！』

「白龍！ギガブレイド！」

『オラアア〜！』

※雷パンチ※

手に雷を纏わせた攻撃。たまに麻痺状態にする。

※ギガブレイド※

大剣の形をした神タイプ専用技。

聖なる剣、「エクスカリバー」をモチーフにした剣。

殆どの神の大剣の形はエクスカリバーになっている・・・

白龍はギガブレイドを、デンリユウは雷パンチで攻撃してきた！

2体の攻撃はぶつかり合い、お互い一步も引かない攻撃となった！

「初めて見る技、初めての形、実に興味深い！もつと、もつと見せてください！デンリユウ！そこから破壊光線です！」

「白龍！テレポート！」

※テレポート※

その場から瞬時に離脱する。

白龍は瞬時にテレポートし、上空に離脱した。

デンリユウの破壊光線はその後発射され、空を切った！

「白龍！天空の聖域！」

※天空の聖域※

神タイプの専用技。聖域を発生させ、神タイプの技の威力を4倍にする。

神タイプ以外は、濃い霧に覆われ目の前から1mしか見れなくなる

この瞬間、プリズムタワーの周りが濃い霧に覆われ、当たりは深い霧と化した。

天空の聖域・・・

神タイプ以外は、濃い霧に覆われ目の前から1mしか見れなくなる。

俺は白龍とシンクロしていて、目が見える状態になっている。

「なにも見えない!?デンリユウ?どこですか!？」

『主人!?どこなの?』

デンリユウもシトロンもお互いの場所が把握出来ない。

いや・・・出来ないのだ。

「白龍、神の槍（ゲイボルグ）！」

※ゲイボルグ※

通称【神の槍】 威力200

この作品の時、様々な能力がある。

- ①相手のメガ進化・シンクロ進化を解除させる。【青】
 - ②相手のステータスを極限まで下げる。【緑】
 - ③一撃必殺。相手を戦闘不能にさせる。【赤】
 - ④これは、禁忌となっている・・・即死攻撃【黒】
- 白龍は片手を空に向け、ゲイボルグ【青】を形成し、放った！
ゲイボルグはまっすぐにデンリユウに向かって行き当たった！
そして、デンリユウのメガ進化が解けた！

攻撃が通常で200もあるのに、天空の領域の効果で攻撃力が4倍の800・・・

デンリユウはメガ進化が解けるも何も、HPが耐えきれない・・・
白龍と俺はシンクロを解除して、天空の領域も解除した。

霧が晴れた時にはデンリユウは戦闘不能になり、横たわっていた。

「え〜と？デンリユウ・・・デンリユウ戦闘不能！勝者！チャレンジャーバロン！」

「デンリユウ戻ってください。お疲れ様です。バロン君の最後の技は、これまでに見たことのない全く新しい技でしたね。最後は何があつたのか分からなくなりました。」

「本気で勝つため、白龍に頑張って貰いました」

「何はともあれ、ジム戦の勝利おめでとう！これが勝利の証【ボルテージバッチ】です！」

遂にジムバッチ2個目・・・

「ありがとうございます！ボルテージバッチ、GETだぜ！」

コボクタウン編

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十二話

三十二話

俺達はミアレジムクリア後にプラターヌに会いに行つた。

ジムクリアを報告するために。

「プラターヌ〜！ミアレジムに勝つたよ〜！」

「さすがバロン！プリズムタワーから濃い霧が発生した時はびっくりしたけど、勝ててなによりだ！おめでとう！」

俺はプラターヌに礼を言い、旅に行くために準備し始めた。

「そうだ！バロン！君にジム勝利の記念として、僕からお祝いの品をあげよう！」

プラターヌはそう言い、近くにあった機械のボタンを押した。

すると、プラターヌと俺の間の床が開き、その間から丸テーブルが出て来た。

その丸テーブルの上には、アタツシケースが置かれていた。

プラターヌはそのアタツシケースを開けると、中に入ったのは……

「バロンにこれをあげよう！世界に数少ない【マスターボール】さ！どんなポケモンでも必ず捕まえる事が出来るボール！バロンになら渡しても大丈夫だと思って……受け取ってくれ！」

「ありがとうプラターヌ！大事に使うよ！」

俺はマスターボールを受け取り、鞆に入れた。

「これからの旅は更に大変になるだろう。頑張つてね！」

「うん！」

後ろではビオラが何かを言いたそうな顔をしていたのを気付いて声をかけてみた。

「ビオラさん、どうかしたの？」

「さのね……私、そろそろハクダンジムの復旧の方に行こうと思って……」

ビオラは申し訳なそうな顔をしながら言った。

「大丈夫さ！ビオラさんにはビオラさんの道がある！やりたいことをして何が悪い？」

「そうだね。ありがとう！それじゃ私、行って来る！またね！」

ビオラはそう言うのと、走って行き、扉を開けた瞬間、オンバーンを出して飛び去っていった……

「良かったのかいバロン？」

プラターヌがそう言ってきた……

「別に大丈夫だよ」

俺はそう言い、再び旅に行く準備をした。

「僕はバロンと一緒に旅に出たいのだが？ダメかな？」

「ん？」

プラターヌ？何か言ったよね？

「プラターヌ。聞き取れなかったのもう一度言ってくれる？」

「うん。僕はバロンと一緒に旅をしようと思ってる！その為にポケモン研究所に僕のポケモンを呼び集めたりしたしね。それとね、僕が旅に出たい理由はもう一つあるんだ」

もう一つの理由？研究の事かな？

「僕はポケモン博士！ポケモンの事を知るには現地で直接観察するのが一番なのさ！僕自身、時々一人で野生のポケモンに逢いに行くしね！」

「まあ、別に一人で旅をして行く訳ではないので大丈夫ですが」

「なら決まりだね！よろしく頼むよバロン！後、出てこい僕のポケモン達！バロンに挨拶を！」

プラターヌは腰に吊りあっていたモンスターボールを全て出し、ポケモン達を出していった！

「紹介しよう！僕の相棒、ボーマンダー！」

『よろしく頼む』

その後、プラターヌのポケモンの紹介は一時間続いた……

なので、簡単に説明しよう。

プラターヌのポケモン

相棒 ボーマンダLV85

マフォクシーLV80

ウオツシユロトムLV75

ゴルーグLV78

ミカルゲLV78

ニンファイアLV83

プラターヌのポケモン達はどれも高レベル・・・

今の俺じゃキツそうだな・・・

『さすがはポケモン博士だな。レベルも高いが相棒と言われたボーマンダ。メガ進化するぞ』

白龍は感知系も優れており、そう言うのも分かるみたいだ。

「ありがとう。確かボーマンダのメガ進化って」

「よくぞ聞いてくれた！僕の相棒のメガ進化はね・・・」

やってしまった・・・

プラターヌは喋り出すと止まらないのを俺は学習した。

なので今回もカットさせてもらう。

あ、簡単に説明するとね、

※メガボーマンダ※

メガ進化すると特性が変わり、「スカイスキン」の特性に変わる。

この特性は、ノーマルタイプの技が飛行タイプに変わり、技が1.3倍に上がる。

ノーマルタイプを飛行に変更出来る事から、物理攻撃が強いボーマンダにギガインパクトとかを覚えさせていけば、結構な脅威になる。

自身のタイプと技のタイプが一緒だと威力が上がるからだ。

しばらくプラターヌの長話を聞き終えると、

「さあーバロン。旅に出ようではないか！研究所のみんな！後のことは任せたよー！」

「はーん」

研究所の人達は凄く満面の笑みでそう言った。

それもそうだろうな・・・長話が好きな人がいなくなると作業がグンと早くなるし・・・

ちなみに、プラターヌと一緒に次の目的地であるコボクタウンに向かうため、5番道路を指している最中、ずっとプラターヌは俺に話しかけて来たので、相づちを軽くしながら殆どの話は聞き流していた。

全部の話を聞くと頭が可笑しくなりそうだ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十三話

三十三話

俺とプラターヌは5番道路に行くために、5番ゲートを通つていた。

「おい！そこのお前！俺とポケモンバトルしようぜ！」

いきなりお前と言われムツとなったが、ポケモンバトルの申請なら快く受け入れよう！

そして、お前と言ってきた奴をボッコボッコにしてやる・・・

「その勝負受けて・・・」

「君！人にバトルを申し込む時は礼儀が必要だぞ！」

俺がバトルを受けようとしたとき、プラターヌが割り込んでそう言った。

「ふん！そんなもん俺様が知った事か！この俺様にポケモンバトルで勝てれば考えてやる！」

「良からう！僕が礼儀と言う物を教えてやろう！」

先ほどから俺様と連呼しているボンボンは、お金持ちの家柄の子なのだろう。

そうでなければ、プラターヌと戦うと言う馬鹿はいるはずがない・・・

ここまで来るときの長話にあつた話しの中でプラターヌは元々、この地方のチャンピオンをしていたと言っていた。だが、次のチャレンジャーに負けてチャンピオンを交代したらしい。

その人が現チャンピオンの【カルネ】だ。

メガサーナイトとメガボーマンダの戦いは熱心に語ってくれていて、俺もそれは興味が有り、ちゃんと聞いていた。現チャンピオンの話は有意義な物だった。

話しがそれだが、今は馬鹿なチャレンジャーのボンボンと元チャンピオンのプラターヌのバトルを見ておこう。

5番ゲートの裏庭バトル

☆ボンボンVSプラターヌ☆

「行け！ガバイト！」

ん？ガバイトか・・・

確かガブリアスに進化するポケモンだな。

「僕のポケモンは、行ってこい！ニンフィア！」

さすがプラターヌ・・・

出すポケモンは完璧だ。

先に言っておこう。

ガバイトは龍タイプ。

その龍タイプの弱点は氷、龍、妖精（フェアリー）タイプの3種類：

ニンフィアはもちろん、妖精タイプだ。

更にプラターヌのニンフィアの特徴は「ファイアリースキン」。ノー

マルタイプの技がファイアリータイプになり、技が1.3倍に上がる。

さすがにこの勝負の決着は始まる前から決まっている様な物だが、

ボンボンは・・・

「そんな可愛いポケモンで俺様に勝てると思うなよ！ガバイト、龍の波動！」

『え？坊ちやま？』

※龍の波動※【龍】

体内から龍の波動を出し、それを相手に攻撃する。

こりやダメだ・・・

俺は頭を抱えてしまった・・・

言い忘れていたが、妖精タイプは龍タイプの攻撃は通用しない。

実質ダメージは0なのだ。

ガバイトは凄く焦っているが、もうどうでも良いと思っただろう。

技を出す前にガバイトの顔が、ハアアとなっていた。

だが！ポケモン勝負は諦めたらそこで終わりなのだ！

ボンボンのポケモンは技を出す前にもう諦めてる。連携すら取れていないではないか！

あゝ！俺が戦いてく！

「君自身、もつとポケモンを良く知るべきだな・・・ニンファイア、その攻撃は何もしなくていい。そこで待機しなさい」

ニンファイアは頷くとその場で待機した。

「は！馬鹿か！そのまま龍の波動を食らいやがれ！」

ガバイトが放った龍の波動はニンファイアにダイレクトに当たり、爆発した！

爆発の煙が晴れると、何事も無かったかのようにニンファイアはその場で立っていた。

「なに!? なにか細工をしたな！なら！師匠直伝！流星群！」

※流星群※【龍】

流星群を生み出す球体を天高くに打ち上げ、爆発させる。

その爆発した物が流星群になる。

このゲートを破壊する気なのか!?

「これはダメだね。ゲートが壊されちゃう。ニンファイア、このバトル終わらせるよ。ムーンフォース！」

『そうですね。あの子もガバイトもダメだわ。ムーンフォース!』

※ムーンフォース※【妖精】

月の力を宿した技。

(この小説のみ)

この技は月が出てる時に使うと威力が倍に上がる。

ニンファイアの体から光が溢れだし、月みたいな球体と化した。

その球体をガバイトが放った流星群の元にぶつけ、容易く消し去りそのままガバイトを攻撃し爆発した。

爆発が晴れた時には、ガバイトは戦闘不能になっていた。

「この勝負僕の勝ちだね。君、ガバイトをモンスターボールに入れて僕と少し話そうか。」

「フーン！ポケモンバトルに勝てないポケモンなんていらな！じゃあな！」

この瞬間、俺を含めバトルを見ていたトレーナー達、対戦相手であるプラターヌ全員がボンボンを睨んだ。

「なんだよ！バトルで勝てなきや意味なんてないだろ!?!俺は強いポケ

モンが欲しいんだ！」

こいつ、ポケモンを何度と違ってやがる！

俺の体は気がつけば気を纏っていて、ボンボンに襲いに掛かろうと動こうとしたのだが、俺の体は前に行かない……

俺はその正体を直ぐに探した。それは……プラターヌだった。

プラターヌも気を纏うことが出来ていて、俺よりも格段に気の使い方がうまかった……

しかも、プラターヌの気は闇の色をしていた。

気の色はその感情によって色が変わるのだ。

俺の先ほどもまでの気は赤だったが、今はプラターヌに恐怖を覚え白色、気をただ纏っているだけだった。

闇の気……それは憎しみや、憎悪や、怒り等が合わさった物だ。

「バロンはここにいろ。ニンフィアはモンスターボールに戻れ」

ニンフィアは直ぐにモンスターボールに戻った。

もちろん俺はここに待機！そうしないと、ヤバいの确实……

「なんなんだよお前！俺様に関わるなよ！」

「お前は、ポケモンを大切にも思わないクズだ。この世にいるな。消えろ」

プラターヌはボンボンの顔を鷲掴みにし、持ち上げた！

そして、プラターヌの纏っている闇の気が、手を通してボンボンの体を包んでいく……

周りの物は何が起きているのか全く分からないようだが、俺には直ぐに察した。だからプラターヌは俺にここにいろと言ったのか……

簡単に言おう。

プラターヌはあのボンボンをこの世から消すつもりなのだ。跡形も残らせずに……

闇の気はどんどんとボンボンを包み込んでいく！

ボンボンは顔、口を主に塞がれていて喋ることが出来ず、ジタバタしている。

周りの奴らもやっと、あのボンボンが危険な状態だと分かったのだろう。口々にあの子ヤバいぞと言っているが、自業自得よと声を出す

者もいる。

「最後に言い残したい事はあるか？有るわけ無いよな？クズに分際だよ」

とうとうボンボンは泣いたが、今のプラターヌは怒りしかない。もう手遅れか・・・

そう思った時！

「プラターヌー！待ちなさい！」

光の輝きを纏う者がプラターヌの腕を掴んだ！

急に現れたその者は見たことがあった！

そう！現カロスチャンピオンのカルネだったのだ！

カルネはプラターヌの闇とは正反対の光。

「邪魔をするな・・・このクズはこの世に残しておく訳にはいかない」
「気持ち察しますが、この人は私の所で処罰しますので、引き取らせてもらいます！」

カルネはプラターヌにそう言ったが、もちろんプラターヌも直ぐには領かない。

「俺の邪魔をしないでくれ。お前も消すぞ・・・」

プラターヌは開いてたもう片方の手でカルネを掴み掛かろうとした！

「私を消すですって？やれるもんならやってみな！ここはポケモンバトルの方がいいでしょ？お互い1VS1でポケモンバトルをして、勝った方が言う事を聞くでどう？」

「仕方がない。それでよかろう。だが、俺が勝てばこいつは消す。お前が勝てばこいつはくれてやろう」

プラターヌはそう言うと言とボンボンから手を離れた。

話しがついた時、ボンボンは立ち上がる気力が無くなっていて、地面にしゃがみ込んだ。

「クズよ。邪魔だ」

そう言われた瞬間ボンボンは地面を這いながら避難を開始した。

俺は見ていられなくなり、仕方なく手を貸した。

それは、失敗だった・・・

プラターヌは俺にここにいると命じていたのを破った俺を、プラターヌは神速の速さで俺の前に立ちボンボンにさしのべようとした手を、消された・・・

俺は驚愕と、痛みあまり地面にのたれ周り叫んだ。

「痛い痛い痛い！」

俺は手を手で押さえて必死に痛みを堪えてるが痛いは我慢出来ない！

凄く痛い！

「プラターヌ！あなたなんてことを！」

「言いつけを破った罰だ」

「それでもこれは酷いでしょ！手は私が直させて頂きますよ！」

「勝手にしろ」

プラターヌはバトル位置に移動し待つことにしたようだ。

それどころじゃない！

俺の手が！俺の手が！

「バロン君だったよね!?直ぐに手当てするから頑張つてじつとしてて！」

俺はうんうんと頷きながら、必死にじつとした。

カルネは俺の消えた手を両手で包み込み、光の輝きを発した。

すると、凄く痛かった痛みは消えていき、手の感覚が戻ってきた！

「今はこれぐらいしか出来ないけど、完全に治すには今の私の力じゃ無理の・・・ごめんね」

カルネがそつと包み込んでいた手を外すと、消えていた手が光り輝く手変わった。いた。

形自体は元の手の形なのだが、その手が輝いている・・・

「普通の手にするにはもつと細かい修行が必要で・・・ホントごめん！」

「い、いえ！とんでもないです！痛みを抑えて頂いた上に、手を形成させて貰えるなんて、ありがとうございます！」

「ようが済んだのなら早くバトルを始めるぞ！」

「ごめん。直ぐに行く！バロン君、次はリーグで会いましょうね」

「はっ」

その後、元カロスチャンピオン【プラターヌ】VS現カロスチャンピオン【カルネ】のバトルが始まった！

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十四話

三十四話

頂上決戦？闇対光

☆闇プラターヌVS光カルネ☆

1体1の戦いなら2人とも相棒を使ってくるはず……

「行け！俺の相棒〜！ボーマンダ〜！」

『オオ〜！』

プラターヌはやっぱり、ボーマンダを出して来たが、様子が変わだ！

ボーマンダの体が紫がかっていて、目は赤い……

更に狂気じみた感じになっている！

(ポケモンコロシウムで出て来る、ダークポケモンの状態です)

「ボーマンダが……プラターヌ！あなたを正気に戻さないとダメな様

ね。行つてきて！サーナイト！」

『仰せのままに！』

プラターヌとカルネの相棒ポケモンのバトルが遂に始まる！

「最初からクライマックスだぜ〜！ボーマンダ！お前の真の姿を晒せ

！メガ進化〜！」

『オオ〜！』

プラターヌは持っていたメガストーンを掲げ、ボーマンダの首に吊

してあったボーマンダナイトと共鳴！2人は虹色に輝き……にはな

らなかつた……

闇と闇の光が2人を包み込みこんだ！

ボーマンダの体は大きくなり……

手足は引っ込め……

翼は2本あったのが1つになり、巨大化し……

顔にあった角は更に鋭く尖った……

メガボーマンダ完成だ……

「いきなりメガ進化か……私達もメガ進化するわよ！」

『はい〜！』

カルネはネットレスに吊してあったキーストーンに触れ、サーナイ

トの首に吊してあったサーナイトストーンと共鳴！虹色の光が2人を包み込んだ！

(この作品中のみ、キーストーン。メガストーンは一緒にメガ進化させるための物です。違いは、メガ進化時のステータスアップぐらいです。キーストーンは希少価値が高い石で出来たメガストーン。メガ進化時はステータスが大幅に上昇する。メガストーンも貴重なのは一緒だが、キーストーンよりは下だ。ステータスの上がりもそこまで上がらない・・・)

サーナイトの体は少し大きくなり・・・

スカート状の部分は更に大きなスカート状になり・・・

耳は更に長くなり・・・

胴体から出ていた赤い部分は1つから2つに分かれた・・・

メガサーナイト完成だ・・・

両者のメガポケモンは互いを見、構えた！

「先手は貰った〜！ボーマンダ、神速だ！」

ボーマンダは特性で飛行タイプに変え、神速でサーナイトを攻撃しに行った！

「サーナイト！守る！そして、ムーンフォース！」

サーナイトは即座に守るを展開！ボーマンダの攻撃を守りきり、ムーンフォースで反撃した！

だが、ボーマンダも簡単には食らわない！

ボーマンダは神速を維持したまま、ムーンフォースの攻撃範囲から逃れた！

「なかなか当てさせてくれないわね・・・サーナイト、サイコネシス！」

カルネは攻撃が当たらないと悟り、サイコネシスでボーマンダの動きを止めた！

「なんだと!?ボーマンダ、そんな攻撃。振り解け！逆鱗！」

※逆鱗※【龍】

暴れ回り、敵を攻撃する。

使い続ければ混乱する。

ボーマンダはサイコキネシスを振り解く為に逆鱗を使い続けた！
だが、サーナイトも負けずに、サイコキネシスを使い続け、動きを止めていた。

「サーナイト、少し辛いと思うけど、そのままムーンフォースを放つて！」

『了解です！』

サーナイトはサイコキネシスを維持するため、更に出力を上げてから、ムーンフォースを発動させた！

ボーマンダは必死に逆鱗で抗っているが、なかなか抜け出せない……

後少しでも逆鱗を発動すると混乱になってしまう。どうすれば……
プラターヌはそんな考えをしている間に、サーナイトのムーンフォースは発動を終え、ボーマンダに放った！

「あれがあった！ボーマンダ、最大出力！ギガインパクト！」

※ギガインパクト※

自身の周りに破壊のオーラを纏い、相手に突進する。
使用後は反動により、少しの間硬直する。

ボーマンダはギガインパクトを纏い、サイコキネシスから逃れ、そのままサーナイトを攻撃しに行った！

だが、サーナイトにはあの技があるのだ……

「サーナイト、もう一度守るよ！」

『はい！』

サーナイトは直ぐに守るを展開して、ボーマンダの攻撃を防いだ！

ボーマンダは反動で少しの間硬直した！

「なんだと!?!ボーマンダ！早く動け！」

『グルル〜』

ボーマンダは必死に動こうとするが、技の反動は思っていたよりデカイ。

「サーナイト！今がチャンスよ！破壊光線！」

『これで終わりよ！破壊光線発射！』

サーナイトは破壊光線をフェアリースキンの効果で妖精タイプに

変え、ボーマンダに放った！

その攻撃はサイコキネシスを使い続けられているボーマンダに避けられるはずがない。

破壊光線はまっすぐにボーマンダに当たり、一撃で戦闘不能にした……

「そんな馬鹿な！俺の相棒を一撃だど!?」

「約束は守って貰いますよ。その子、私と来て貰います」

ボンボンは首を縦に何度も振り、カルネの元に行った。

プラターヌはボーマンダをモンスターボールに戻し、仰向けに転がった。

「ハハハハ！いや、私にはまだまだ修行が足りないようだ！いっそ、博士を辞めてホントに修行の日々にしようかな」

「それは困ります。プラターヌ博士の研究は素晴らしい。辞められるのは困りますよ」

カルネはそう言い、仰向けに転がったプラターヌの元に行き、手を差し伸べた。

「あなたは少なくともバロン君と一緒に次の目的地までは行ってあげてください。フレア団が活発化し始めてるみたいです」

「なんと！それは大変な事ではないか！いざ行こうコボクタウンへ！」

プラターヌは直ぐに俺の所に駆けつけて、俺の手をとり、5番ゲートを出た……

ちなみに、プラターヌは元に戻っているので陽気な状態だ。

俺の手は右手が輝く手、左が普通の手だ。

俺はやつと5番ゲートを出れるのであった。

一部の大変な事はあったが……

番外 ユウキ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十五話

三十五話

俺たちは5番道路に着いた。

5番道路にはローラースケートで遊ぶ場所がある。

俺はそれに興味があったのでそこに向かうことにした。

「君たちもここで遊ぶのかい？」

遊ぶ場所に着くと女の子が言ってきた。

「ああ。遊ぼうと思いついたのだが、今思えばローラースケート持ってなかった……」

「それなら大丈夫だよ！ここはローラースケートの貸し出しもあるからさー！」

貸し出しがあつて良かった……

興味があると言っていたが、正直、遊びたかつたからだ。

「もし良かったら僕の使つてない靴あげようか？サイズが合わないのを間違つて購入してしまつて」

「いいのか？」

「もちろん！」

女の子は僕っ子みいだ。正直に言おう。

可愛い……

話しがそれてしまった。貰える靴のサイズは果たしてあうのかが、疑問だがとりあえず履いてみよう。

「ありがとう。とりあえず履いてみて良いかな？」

「どうぞ♪合うと良いなあ〜」

俺はローラースケートに足を入れてみた。

ん？意外と合つてるぞ……

「靴のサイズはピタシだね！良かった〜」

「ほんとありがとう！これで俺も楽しめる！自己紹介が遅れてしまつた。俺はバロン。よろしくな！」

「僕はユウキ！よろしく！」

(SAOのユウキの容姿です)

俺はユウキから貰ったローラースケートをそのまま履いて、練習を始めることにした。

「僕の存在忘れないでね？」

プラターヌは苦笑いしながらそう言ったが、俺は練習の事で頭がいっぱいだ。

「バロン君！上達早いよ！ならば、これはどうだ！」

俺は思っていたより上達が早く、ユウキにローラースケートの技を教えて貰った。

ローラースケートで段差を一回転しながら飛んでみたり、バックからの宙返りとか・・・

結構レベルの高いのを色々教えて貰った。

半日ぐらいユウキにローラースケートの稽古をしてもらった結果・・・

俺はユウキのローラースケートの技を全て手に入れた！

「バロン君・・・君は凄いよ！僕の技をここまで習得しちゃうなんて」

「いや、ユウキの教え方が良かったからだよ。ホントにありがとう！」
俺とユウキは近くのベンチに座り休憩することにした。

ちなみにプラターヌもローラースケートを所持しており、一緒に練習してたが、早くにくたばり先に休憩していた。一応、飲み物とかのサポートはしてくれていたので助かったのだが。

「照れるじゃないか！あ！もうこんな時間！ごめん、僕帰らないといけないよ」

「稽古ありがとうな。お礼と言ってはなんだが、家まで送って行ってあげるよ。出て来て、レックウザ！」

俺はレックウザの入ったボールを天高くに放り投げた！

一番天辺辺りの時、ボールが開きレックウザが出て来た。ボールはそのまま俺の元に来てそのまま腰のベルトにしまった。

「凄い！ポケモンだ！このポケモンは何て名前？」

「レックウザって言うんだ。レックウザ、俺達をユウキの家に送って

くれ」

『了解した。1つ聞いていいかマスター?』

「ん?」

レックウザはニヤ〜としながらこう言った・・・

『マスターも恋をするんだな』

「な!?! ななな!」

俺は咄嗟にユウキを見てしまった・・・

「あ、あああ」

ユウキは顔を真っ赤にしながら狼狽えてる!

俺も顔が真っ赤になってるのが直ぐに分かった。

「レックウザ! からかうなく!」

『マスターの意外な一面・・・まだ10歳だったな。可愛いぞ』

あのレックウザから可愛いと言われた。しかもすっごいにやけ顔で!

「どっ! とにかく! 運んでくれないか?」

『もちろんだ! ユウキと言ったな。マスターにしっかりとしがみつくんぞぞ?』

「うん!」

ユウキは凄く嬉しそうな笑顔でそう返事を言った。

俺は先にレックウザにまたがり、ユウキに手を差し伸べた。

ユウキは俺の手に捕まったので、一気に持ち上げ、俺の後ろに座らせた。ユウキは直ぐに俺にしがみついた。

『準備はいいな?』

「ああ。大丈夫だ!」

『では、行くぞ!』

レックウザはそう言い、一気に空に駆け上った!

・・・・・・今、思い出した!

プラターヌを置いて行ってしまった!

まあ、あの人なら大丈夫か。

「僕の家はあそこにあるよ!」

ユウキは山の上にある、屋敷を指さしてそう言った・・・

『あそこのデカイ家であってるのか?』

「うん♪みんなに紹介したいから一緒に家に上がって貰っていいかな?」

「俺達は全然大丈夫だ。」

『俺もだ』

レックウザはそのまま山の上にある屋敷に飛んで行った。

「ところで、バロンと一緒にいた人は?」

「あの人なら大丈夫!」

「そっか!」

レックウザは聞かなかった振りをした。だって、レックウザ視点からそのプラターヌが凄い速さで追って来てるんだもの・・・

一応、プラターヌの声が聞こえない位置で飛んでいるので、何を喋っているかわからないが、待てと言っているのは分かる・・・

プラターヌ視線・・・

「お〜い!待ってくれ〜!僕を置いて行かないでくれよ〜!」

なんで僕は置いて行かれたのだ!しかも、バロン君の後ろにいる女の子は、先ほどのユウキ君じゃないか!

(プラターヌは誰にも君を付けてしまいます)

「ユウキ君〜!バロン君〜!レックウザ〜!聞こえたら返事を〜!」

聞こえないのか!?!そうなのか!?

じゃあもつと気の出力を上げなければ!

(プラターヌはポケモンの力を借りずにレックウザの速さに追いついています。主に気を使って・・・)

「ス〜・・・レックウザ〜」

その時、山はデカく振動した・・・

その時、空の雲は消えた・・・

!!!!!!!!!!!!

その時、暴風がレックウザを襲った(バロン達にも被害あってます)
レックウザはあまりの衝撃に体勢を崩した!その時、ユウキがレックウザから落ちてしまった!

「きゃあああああ〜!!」

「ユウキ〜!!!」

俺は直ぐにユウキを助けようとレックウザから飛び降りた!

俺は落下中にユウキの手を掴み引き寄せ、抱きしめた。

「レックウザ! 体勢を整えたら直ぐに俺達を助けてくれ!」

『もちろんだマスター!』

レックウザは直ぐに体勢を立て直し、俺達の所に辿り着き、頭に乗せてくれた。

「助かったよ! 大丈夫かユウキ?」

「怖かったよ〜! うえ〜ん!」

ユウキはあまりの怖さに泣いてしまった!

ユウキを泣かせやがった! 誰だ!

俺は直ぐに気を広範囲に張り巡らせ、気配を探した。

その人物は直ぐに見つかった!

「プラターヌだと・・・なんで・・・」

「え?」

『気付いたようだな・・・』

俺は驚愕、ユウキは戸惑った。

「レックウザ、先にユウキを家に運んであげて。俺はプラターヌに用がある。ユウキ、1人で大丈夫か?」

「大丈夫! バロン君は大丈夫なの?」

ユウキは凄く心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だよ。話し合いに行くだけだから」

「そうだね。分かった! 一応、気を付けてね」

「ありがとうユウキ。行って来る! 後は頼んだぞレックウザ!」

『了解した! ユウキは我が守ろう!』

俺はレックウザから飛び降り、急降下した。

急降下中に俺は全身武装し、落下ダメージを無くすようにして、プラターヌの前に降り立った。

「派手な登場だね・・・」

「ああ。ところでプラターヌ、なんで僕達を攻撃してきたんだ?」

「止まらないからさ」

プラターヌは当然の事の用に言った。

「全く聞こえてなかったが・・・」

「そうだったのか・・・すまい事をしたね。ごめんよ」

プラターヌは素直に謝ってくれた・・・

「あ、うん。なんかごめん。とりあえず行こう？」

「ありがとうバロン」

俺はそう言い山の上にある屋敷にプラターヌと一緒に行くことにした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十六話

三十六話

俺達は今、道に迷っている・・・

目的地の崖の上にある屋敷を目指して、ひたすら歩いているが、なかなかたどり着けない。

それどころか、近づいていないような気がする・・・

「バロン。少し休まないか・・・さすがに2時間歩きっぱなしは・・・」
「そうだね。少し休もう・・・」

俺とプラターヌは鬱蒼と生い茂る森の中にいる・・・

この山一帯はユウキの私有地と言っていた・・・

規模がヤバイ・・・この山一帯ですよ？

ちなみに、道に迷っている最中に何度も野生ポケモンに襲われていたが、2人で全部倒していった。

ちなみにこの辺り一帯のポケモン達は全て図鑑に載っていないかったので登録しておいた。

2時間の内に登録出来たポケモンは凄く多い・・・

一番驚いたのは、セレビィが出て来た時だった・・・

まさか伝説であるセレビィが出て来るとは思わなかった・・・

セレビィは俺達が山のポケモン達を攻撃するから怒って攻撃した。

俺達からすると、山のポケモン達が俺達を攻撃してきた為、迎撃した感じなのだが、セレビィは怒りで我を失っている。俺とプラターヌは仕方なくセレビィを迎撃したのだった。

この山のポケモン達の平均レベルは60前後・・・

一番高かったのがセレビィのLV80だった。

俺のポケモン達はポケモン図鑑の効果で驚異的成長をし、レベルも凄く上がった・・・

このポケモン図鑑は、ホントに素晴らしい・・・

一般のポケモン達のレベルアップ時のステータスの伸びは普通なら少ないが、ポケモン図鑑のおかげで経験値アップボーナスに加え、ステータス上昇ボーナスも付いている。

ここまでの旅で1つ分かったのだが、このボーナスは普通ポケモンなら2倍のボーナスだったのだ・・・

更に、伝説・神タイプはボーナスが4倍・・・
比較的強くなる・・・

俺のポケモン達は2時間でプラターヌのポケモン達のレベルに追いつくことに成功したのだ。

今の俺のポケモン

白龍 LV90【神】

ファイアロー LV80【炎・飛行】

ブリガロン LV78【草】

ピカチュウ LV85【電気】

メタグロス LV80【鋼・エスパー】【メタグロスナイト】

メイビス LV86【エスパー・神】

レックウザ LV86【ドラゴン・神】

見て分かったと思うが、俺のポケモン達は進化出来るポケモン達は全員進化したのだ！

しかも高レベル！

プラターヌもこの2時間でだいぶレベルは上がっている・・・

プラターヌの今のポケモン

相棒 ボーマンダLV92

マフオクシーLV87

ウォッシュユロトムLV85

ゴルーグLV83

ミカルゲLV85

ニンフィアLV90

相当向かってくるポケモン達を倒しまくっていたプラターヌのポケモン達は凄いレベルになっている・・・

さすがにプラターヌの相棒、ボーマンダのレベルには追いつけなかったが、それでも2時間前と比べると凄い速さでレベルアップした。

レベルだけを見ると負けてるように見えるが、俺にはポケモン図鑑

の恩賜があるので、レベルより遙かに高い、レベル100代の強さを誇る……

今ならプラターヌのポケモン達に勝てるかも思っている。

「バロン君のポケモン達は凄いね……僕のポケモンに追いついてる。それにしても、なかなか着かないね……」

「確かに……なにか細工をされてる筈だと思っただけなのですが、全然分からん。どうやればあそこにたどり着ける」

ん？そう言えば、レックウザの時は普通に行けたではないか……まさか……

「プラターヌ。この山は空から行けば屋敷にたどり着けるんじゃないか？」

「その手があつたか！ありがとうバロン！出てこい、ボーマンダ！俺達を乗せて、あの屋敷に連れて行ってくれ！」

『了解！』

ボーマンダを改めて見ると、レベルアップの影響か、前より少し大きくなったような気がする……

ボーマンダは俺とプラターヌを背中に乗せ、森から飛び立った！

上空に着くと下からポケモン達の光線技をめっちゃ撃つて来やがった！

「メタグロス、出番だ！守る！」

俺は直ぐにメタグロスを出して、守るを使わせた！

メタグロスは直ぐに守るを発動してくれたので技の直撃を受ける事は無かったが、正直、冷やっとした……

「バロン。これは仕返ししなきゃダメだね？」

「もちろん！」

俺とプラターヌは笑みを浮かべ、それぞれポケモンを出し、光線を放ったポケモン達を倒させに行かせた。

物の数分で森から撃つてきてた光線は途絶えた。

その後すぐ、俺達のポケモンが帰って来た。

「良くやったな白龍、メイビス。お疲れ様」

俺は白龍とメイビスに労いの言葉をかけ、モンスターボールに戻し

た。

「お疲れ様ですミカルゲ、ゴルーグ」

プラターヌ劳いの言葉をかけてから、モンスターボールに戻した。

「さて、それではそろそろ屋敷へと向かいましょう！」

「早く屋敷に着きたいよ……」

俺達はボーマンダに乗りながらユウキの屋敷に向かった。

その頃レックウザは……

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十七話

三十七話

俺達は今、道に迷っている・・・

目的地の崖の上にある屋敷を目指して、ひたすら歩いているが、なかなかたどり着けない。

それどころか、近づいていないような気がする・・・

「バロン。少し休まないか・・・さすがに2時間歩きっぱなしは・・・」
「そうだね。少し休もう・・・」

俺とプラターヌは鬱蒼と生い茂る森の中にいる・・・

この山一帯はユウキの私有地と言っていた・・・

規模がヤバイ・・・この山一帯ですよ？

ちなみに、道に迷っている最中に何度も野生ポケモンに襲われていたが、2人で全部倒していった。

ちなみにこの辺り一帯のポケモン達は全て図鑑に載っていないかったので登録しておいた。

2時間の内に登録出来たポケモンは凄く多い・・・

一番驚いたのは、セレビイが出て来た時だった・・・

まさか伝説であるセレビイが出て来るとは思わなかった・・・

セレビイは俺達が山のポケモン達を攻撃するから怒って攻撃した。

俺達からすると、山のポケモン達が俺達を攻撃してきた為、迎撃した感じなのだが、セレビイは怒りで我を失っている。俺とプラターヌは仕方なくセレビイを迎撃したのだった。

この山のポケモン達の平均レベルは60前後・・・

一番高かったのがセレビイのLV80だった。

俺のポケモン達はポケモン図鑑の効果で驚異的成長をし、レベルも凄く上がった・・・

このポケモン図鑑は、ホントに素晴らしい・・・

一般のポケモン達のレベルアップ時のステータスの伸びは普通なら少ないが、ポケモン図鑑のおかげで経験値アップボーナスに加え、ステータス上昇ボーナスも付いている。

ここまでの旅で1つ分かったのだが、このボーナスは普通ポケモンなら2倍のボーナスだったのだ・・・

更に、伝説・神タイプはボーナスが4倍・・・
比較的強くなる・・・

俺のポケモン達は2時間でプラターヌのポケモン達のレベルに追いつくことに成功したのだ。

今の俺のポケモン

白龍 LV90 【神】

ファイアロー LV80 【炎・飛行】

ブリガロン LV78 【草】

ピカチュウ LV85 【電気】

メタグロス LV80 【鋼・エスパー】 【メタグロスナイト】

メイビス LV86 【エスパー・神】

レックウザ LV86 【ドラゴン・神】

見て分かったと思うが、俺のポケモン達は進化出来るポケモン達は全員進化したのだ！

しかも高レベル！

プラターヌもこの2時間でだいぶレベルは上がっている・・・

プラターヌの今のポケモン

相棒 ボーマンダLV92

マフォクシーLV87

ウォッシュロトムLV85

ゴルーグLV83

ミカルゲLV85

ニンフィアLV90

相当向かってくるポケモン達を倒しまくっていたプラターヌのポケモン達は凄いレベルになっている・・・

さすがにプラターヌの相棒、ボーマンダのレベルには追いつけなかったが、それでも2時間前と比べると凄い速さでレベルアップした。

レベルだけを見ると負けてるように見えるが、俺にはポケモン図鑑

の恩賜があるので、レベルより遙かに高い、レベル100代の強さを誇る……

今ならプラターヌのポケモン達に勝てるかも思っている。

「バロン君のポケモン達は凄いね……僕のポケモンに追いついてる。それにしても、なかなか着かないね……」

「確かに……なにか細工をされてる筈だと思っただけなのですが、全然分からん。どうやればあそこにたどり着ける」

ん？そう言えば、レックウザの時は普通に行けたではないか……まさか……

「プラターヌ。この山は空から行けば屋敷にたどり着けるんじゃないか？」

「その手があつたか！ありがとうバロン！出てこい、ボーマンダ！俺達を乗せて、あの屋敷に連れて行ってくれ！」

『了解！』

ボーマンダを改めて見ると、レベルアップの影響か、前より少し大きくなったような気がする……

ボーマンダは俺とプラターヌを背中に乗せ、森から飛び立った！

上空に着くと下からポケモン達の光線技をめっちゃ撃つて来やがった！

「メタグロス、出番だ！守る！」

俺は直ぐにメタグロスを出して、守るを使わせた！

メタグロスは直ぐに守るを発動してくれたので技の直撃を受ける事は無かったが、正直、冷やっとした……

「バロン。これは仕返ししなきゃダメだよね？」

「もちろん！」

俺とプラターヌは笑みを浮かべ、それぞれポケモンを出し、光線を放ったポケモン達を倒させに行かせた。

物の数分で森から撃つてきてた光線は途絶えた。

その後すぐ、俺達のポケモンが帰って来た。

「良くやったな白龍、メイビス。お疲れ様」

俺は白龍とメイビスに労いの言葉をかけ、モンスターボールに戻し

た。

「お疲れ様ですミカルゲ、ゴルーグ」

プラターヌ劳いの言葉をかけてから、モンスターボールに戻した。

「さて、それではそろそろ屋敷へと向かいましょう」

「早く屋敷に着きたいよ・・・」

俺達はボーマンダに乗りながらユウキの屋敷に向かった。

その頃レックウザは・・・

『うまい！なんだこの食べ物は!?!』

餌付けされていた・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十八話

三十八話

今回はポケモン達のレベル、ステータスと、トレーナーの紹介をします。

主人公：バロン

相棒 白龍LV90【神】

通常のレベルアップ時のステータス上昇値

HP 6

攻撃 8

防御 5

特攻 8

特防 5

速度 7

これだけでも十分ヤバイ・・・

凶鑑効果でのボーナスのレベルアップステータス上昇値

HP 24

攻撃 32

防御 20

特攻 32

特防 20

速度 28

凶鑑効果で神は4倍のボーナスがあるので、上昇率がヤバすぎる・・・

1レベル上がるだけでこの数値、通常だと4レベル上がらないといけない数値はヤバイ・・・

白龍はケロマツから進化したのだが、白龍は特殊で、進化した時のレベル分のステータスの数値がいつきに上がったのだ。その後、レベル90まで育った白龍のステータスは・・・

HP 2160

攻撃 2880

防御 1800

特攻 2880

特防 1800

速度 2520

全て4桁・・・

ちなみに通常なら、

HP 540

攻撃 720

防御 360

特攻 720

特防 450

速度 630

それでもこの数値・・・

白龍、恐るべし・・・

技は全て使え、神専用技を使える。

得意技は、裁きの鉄槌。

次は、アイドル的な存在、メイビス！又の名をデオキシス！LV8

6 【エスパー・神】

通常のレベルアップ時のステータス上昇値

HP 3

攻撃 5

防御 2

特攻 6

特防 3

速度 5

(ノーマルフォーム時)

凶鑑効果でのボーナスのレベルアップステータス上昇値

HP 12

攻撃 20

防御 8

特攻 24

特防 12
速さ 20

出会ったときのレベルから加算されと思ったのだが、神は違うらしい・・・

凶鑑が悪いのかは分からないが、今までののが全て加算されている数値になっている。

その結果・・・

HP 1032
攻撃 1720
防御 688
特攻 2064
特防 1032
速さ 1720

残りのポケモン達は結果だけを説明しますね。

長くなると読むのが面倒くさいと思いますので（笑）

レックウザLV86 【龍・神】

HP 1720
攻撃 2064
防御 1376
特攻 1720
特防 1376
速さ 2064

凶鑑ボーマスは通常のポケモンだと2倍です。

ピカチュウLV85 【電気】

HP 680
攻撃 680
防御 510
特攻 1020
特防 516
速さ 850

ファイアローLV80 【炎・飛行】

HP 480
攻撃 640
防御 320
特攻 640
特防 640
速さ 960

メタグロスLV80【鋼・エスパー】

HP 800
攻撃 800
防御 960
特攻 640
特防 960
速さ 640

このメンバーが俺のポケモン達だ。

凶鑑効果で凄く強くなっている・・・

今一緒に旅をしているプラターヌのポケモン達も紹介します！

プラターヌの今のポケモン

相棒 ボーマンダLV92【龍・飛行】

HP 276
攻撃 460
防御 276
特攻 460
特防 368
速さ 552

マフオクシールLV87【炎・エスパー】

HP 348
攻撃 261
防御 261
特攻 522
特防 348
速さ 348

ウオッシュユロトムLV85【電気・ゴースト】

HP 255

攻撃 340

防御 255

特攻 425

特防 255

速さ 340

ゴルーグLV83【地面・ゴースト】

HP 415

攻撃 332

防御 332

特攻 249

特防 415

速さ 166

ミカルゲLV85【悪・ゴースト】

HP 255

攻撃 340

防御 255

特攻 340

特防 340

速さ 255

ニンフィアLV90

HP 270

攻撃 270

防御 360

特攻 540

特防 360

速さ 450

この小説では基礎ポイントは決まっております、レベルアップ時のス

テータスは、

基礎ポイント×レベルになっています。

なので、この小説ではレベルが高ければ高いほど、強くなります。

後、この小説では上限レベルがありません・・・

なので、更なる高みへと登り続けられるようになっていきます。

ポケットモンスターXY バロンの旅 三十九話

三十九話

俺達はボーマンダにユウキの屋敷に運んでもらっている最中・・・
「バロン。屋敷の周辺の辺り、ヤバくないか・・・」

「ヤバいしか言いようがない・・・」

俺達がヤバいと言う理由は・・・

屋敷の周りに、数多くのポケモン達がたむろっており、地上にも数多くのポケモン達が俺達を探していた。

そのポケモン達が俺達を見つけた瞬間、襲って来た！

数はもう分からない！

とにかく多い！これを相手にするのは面倒だが、見逃してはくれないだろうな・・・

「プラターヌ、ここは協力でいいよね？」

「もちろんだ！下からまた攻撃が来るのは面倒くさいから下に降りて戦おう！」

プラターヌはそう言いボーマンダに下降の命令をださせる前に、

「俺は空から来るポケモンを攻撃するからプラターヌは地上を頼んだ。メタグロス、頼むぞ」

俺はボーマンダからスツとメタグロスに飛び移り、目の前に広がる大群を見た。

「え!?!あの空の大群を一人で戦うのかい!?!」

「地上も似たような数でしょ・・・大丈夫、俺のポケモン達は簡単にはやられない」

俺のポケモンは少なくても、プラターヌのポケモンよりステータスは上だ。

後はどう戦うかである・・・

「わかった！今回は長話している場合じゃないから空は頼んだ！地上は任せろ！行くぞボーマンダ！さっさと片付けてバロンを援護しに行くぞ！」

俺はどれだけ弱いと思われているんだ・・・

俺だって気は使えるし、ポケモンも強いし・・・

今はそれどころじゃないか。俺もプラターヌより先に空のポケモンの軍勢を片付けて手伝いに行つてやろう。

「行くぞメタグロス。プラターヌに負けるわけにはいかない！みんなもよろしく頼むぞ！」

俺はモンスターボールからみんなを出し、メタグロスにサイコキネシスで空を飛ばないポケモン達を浮かばせ戦うように細工し、みんなでポケモンの群れに向かった。

空のポケモン大軍勢戦

☆空を飛ぶポケモン軍勢VSバロン率いるポケモン達☆

俺は先にポケモン図鑑でざっと野生ポケモン達のレベルを見た。

殆どのポケモン達がレベル70を超えている。

中にはレベル80を超えるポケモンも少なからずいた。

てか！ユウキの屋敷に行くだけなのになんでこんなに邪魔されるんだよ！

こっちはさっさと逢いに行きたいんだよ！

「白龍は裁きの鉄槌！メイビスとレッククウザは破壊光線！ピカチュウは特大の雷！ブリガロンはリーフストーム！ファイアローは暴風！メタグロスはすまんがサイコキネシスを続けてくれ。ピカチュウとブリガロンが落ちてしまう」

『了解です』

※リーフストーム※

沢山の草木に風を起こして相手に攻撃する。

※暴風※

風興しの上位版。物凄い風で相手を攻撃する。

俺のポケモン達は一齐に空に飛ぶポケモンの軍勢に攻撃を放った

！

だが！

野生ポケモンもレベルが高いと知識も付く・・・

前衛のポケモンは一斉に守るを発動し、俺のポケモン達の攻撃を防いだ！

「つたく！面倒くさい事をしてくれる！白龍、みんなにシールドブレイク・オーラを！」

『了解した！』

※シールドブレイク・オーラ※

オーラ付与中。相手の守る系統の技を無力化し、そのまま攻撃を当てる事が出来る特殊サポート技。

俺は手を、空飛ぶポケモンの軍勢に指を指し、

「みんな、先ほどの攻撃を再び開始！」

みんなの一斉攻撃が放たれた！

ポケモンの軍勢は再び守るを発動してきたが、白龍のオーラ効果で守るは無力化！

そのままポケモンの軍勢に攻撃を当てた！

守るを発動していたポケモン達はこの攻撃で一掃出来た。

残りの軍勢は大方、サポート、攻撃役あたりだろう・・・

「みんな！一斉に攻めるぞ！」

『『オオオ〜！』』

俺はポケモン達と一緒に空飛ぶポケモンの軍勢に突っ込んで行った！

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十話

四十話

地上ではプラターヌとそのポケモン達が野生ポケモンと戦っていた。

「ゴルグ、岩雪崩れ！ニンフィア、ムーンフォース！ボーマンダ、破壊光線！」

プラターヌは3体に命令を出し、野生ポケモン達に攻撃していた。その攻撃は岩タイプのポケモン達が守を使い、攻撃を防いだ！

プラターヌの残りのポケモン。

ミカルゲ、マフオクシー、ウオツシユロトムは手持ちの控えにいる。プラターヌはあえて3体で攻撃している。

ポケモンが疲れた時に交代出来る様いだ。

空を見るとバロンが空飛ぶポケモンに一斉攻撃を放っていた。

うかうかしてられないな。

俺がよそ見をしているときに野生ポケモンが一斉攻撃を仕掛けてきた！

「くそー油断した！ゴルグ、守るだー！」

だが、野生ポケモンは高レベル。馬鹿ではない！

野生ポケモンのゴチルゼルとランクルスはゴルグに封印と回復封じを仕掛けてきた！

※封印※

自分が覚えている技は、相手は使えない。

※回復封じ※

回復系統を全て効かなくする。

「くーゴルグ、一度下がれ！」

その下がった先にはダグトリオ達が穴を掘るで足下を崩していた！

ゴルグはそれに気付かずそのまま下がり、その穴に填まってしまった。

そのせいで体勢が崩れ、野生ポケモンからの一斉攻撃の的になった

「ヤバい！ゴルーグ戻るんだ！」

プラターヌは直ぐに腰からモンスターボールを出し、ゴルーグを戻そうとしたが、野生ポケモンから、黒いまなざしを直前で使われ、プラターヌの場にいる全てのポケモンは手持ちに戻すことが出来なくなつた！

※黒いまなざし※

戦闘に出ているポケモンは離脱出来ない。

更に！プラターヌはゴルーグだけに集中してしまい、残りのニンフィアとボーマンダの命令が疎かになっていたのを野生ポケモン達は逃さなかつた！

毒、鋼タイプのポケモン達はニンフィアを一斉に攻撃し、妖精（フェアリー）、龍（ドラゴン）タイプのポケモン達はボーマンダを一斉に攻撃し、水、ゴーストタイプのポケモン達はゴルーグを一斉に攻撃した！

プラターヌのポケモン達は為す術無く一斉攻撃を食らい、戦闘不能になつた！

「僕のポケモン達が!?」

プラターヌは倒されたポケモン達をモンスターボールに戻した後、新たにポケモンを出した！

「お前達、こいつらをぶつ倒せ！」

プラターヌはマフオクシー、ミカルゲ、ウオツシユロトムを出し、野生ポケモン達に攻撃を仕掛けたが、野生ポケモン達はプラターヌを嘲笑うかのように、技を相殺したり、ポケモンにちよつかいを出したりと、プラターヌを怒らしていった。

「てめくらあ〜！もう、許さんぞおお〜！」

プラターヌは怒りの赤い気を纏つた！

プラターヌの気は自分のポケモン達にも影響を及ぼす。

マフオクシー、ミカルゲ、ウオツシユロトムはプラターヌ同様に赤い気を体に纏わせ、攻撃力をアップした！

それでも野生ポケモン達は怯みはしなかつた。

『このトレーナー、上で戦っているのと違い弱いな』

後ろの方で戦いを観戦していた高レベルの野生ポケモン、フリーデンがそう言った。

ちなみにプラターヌはポケモンの声は聞こえない……

「行け！お前達！マフォクシー、大文字！ミカルゲ、破壊光線！ロトム、ハイドロポンプ！」

僕のポケモン達の攻撃はまた守るを使う部隊に攻撃を防がれたが、俺が何のために赤い気を使ったか……

それは……

「僕の赤い気は、相手は攻撃を防ぐことが出来ない特殊サポートがあるのだ！このまま食らえ！」

そう……プラターヌが使う気は基本的にはサポート効果がポケモンに付与されるのだ！

よって、守るで攻撃を防いでいたポケモン達は、気の効果により攻撃をまともに食らった！

『それだけか……回復部隊！負傷した部隊を直ぐに回復だ！特殊部隊！相手を状態異常に！攻撃部隊！一斉攻撃開始！』

フリーデンはそう言い、ポケモン達に命令を出した。

回復部隊の指揮官、ハピナスは直ぐに守るを使っていたポケモン達を回復しに行った。

特殊部隊の指揮官、フシギバナは直ぐに部隊に特殊技を使うように命令を下し、プラターヌのポケモン達に、封印・回復封じ・黒いまなざしを使った後、痺れ粉・どくどくを使った！

攻撃部隊の指揮官、ルカリオは部隊編成を直ぐに済まし、プラターヌのポケモン達を攻撃しに行った！

※痺れ粉※

相手を麻痺させる特殊攻撃。

(この小説のみ、トレーナーにも効果有り)

※どくどく※

相手を毒状態にさせる特殊攻撃。

重ねがけで使うと猛毒と化す……

(この小説のみ、トレーナーにも効果有り)

プラターヌはポケモン達に命令を下そうとしたが、口が動かない！
体も動かしたいのに動かない！

辺りを目だけで探ると、視界の端の方でこちらにサイコキネシスを
使っているポケモン達がいた！

プラターヌのポケモン達は、体を動かしたいが、体が痺れて動けな
い。更に毒症状・・・

そこに更に攻撃部隊が一斉にプラターヌのポケモン達を攻撃した
！

「っ！」

プラターヌは命令を出せずにポケモン達が攻撃されてるのを見る
しか出来なかった・・・

プラターヌのポケモンも必死に抵抗はしたが、麻痺、毒の効果も合
わさり、戦闘不能のなっていた・・・

最初はロトム、次はミカルゲ、最後に残ったのがマフオクシー・・・
マフオクシーは根性だけで耐えきっていると说着てもいい状態
だった・・・

毒は猛毒に変わっており、麻痺のせいで体も動かせない・・・

攻撃部隊のポケモンから攻撃のラッシュが続く・・・

絶対絶命だ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十一話

四十一話

空中では、バロンのポケモン達が飛行タイプのポケモン達を蹴散らしていた……

『なんなんだ！この強さは！』

『全軍！後退しろ！このままでは負けてしまう！地上はもうじき片付くが俺達がヤバイぞ！』

空の総司令官である、ピジョットが後退の命令を出し、全軍を引き下からそうとしたが、

「それを俺が認めると思うか？お前達の速度じゃ、俺のポケモン達には足下にも及ばない……後、地上が片付くと言っていたな……ピカチュウ、ブリガロン、地上のポケモン達を片付けてこい。」

『了解！』

メタグロスはピカチュウとブリガロンをサイコキネシスを使ったまま地上に降ろしてから解除した。

「頼んだぞ」

『はい！』

地上はこれで暫く、いや……片付くだろうな。

俺は空に集中するか。

「白龍、滅龍奥義・鳳凰拳！」

※滅龍奥義・鳳凰拳※【神】

自身の体にステータス大幅アップのオーラを纏い、相手を攻撃しまくる物理攻撃技。

『オーラオーラ〜！』

白龍は鳳凰拳で空の軍勢を相手に単体で半分を今の攻撃で蹴散らした！

更に、白龍のステータスは他のポケモンと比べて凄く高い。

それに加え、オーラでまだステータスを強化……

敵は白龍の攻撃を一撃食らうだけで、戦闘不能になる……

白龍は空の軍勢を1人で壊滅状態まで追い込んだ……

俺と俺のポケモン達はただ見るだけ・・・
いや・・・俺は命令しただけだった・・・
動けないのだ・・・

白龍のあの表情を見てしまうと、次は自分かと思える程に・・・
白龍は鳳凰拳を使っている最中、敵を攻撃するだけで遣られていくのを快感と感じ始め、今はもう、快感しか感じなくなってしまう・・・

5分ぐらいたっただろうか・・・
空の軍勢は皆、もう目の前からいなくなっていた・・・
全て地上に横たわっている・・・

空の軍勢は、白龍だけで殆ど片付けてしまったのだ・・・

「は、白龍?」

『なんだ、マスター?』

白龍は不思議そうな顔をして聞いてきた。

「ううん。なんでもない。白龍は一度休憩をとってほしいからボールに戻って貰っていいかな?」

『ああ。少し疲れたので助かる。すまないが休ませてもらうぞ』

白龍はそう言い、腰に吊りあっていたモンスターボールに自ら入って行った。

俺のポケモン達は少しホツとしており、正直に助かったと思っただろう・・・

「さて、地上の方はどうなったかな?」

俺は地上の方を見ると、プラターヌのポケモン達が遣られており、マフオクシーだけが残っていたのを見た。

その直ぐ後方にピカチュウとブリガロンが向かっていた。

今までどこに行っていたんだよ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十二話

四十二話

俺達はメタグロスに地上へ降ろしてもらってからプラターヌの所に向かおうとしたが、地上の野郎共・・・

俺達の着地地点に大穴を掘ってやがった！

俺達はその大穴にまんまと埋まり、足止めを食らってしまったのだ！

この大穴は確実にダグトリオ共だろうな！

俺は尻尾に技のエネルギーを充電した！

『この大穴ごとぶった切ってやる！アイアンテール！』

『便乗させてもらうぜ！爆裂パンチ！』

※アイアンテール※

尻尾を鋼の堅さにして、相手を攻撃する。

※爆裂パンチ※

猛烈なパンチを相手に与える。

相手を混乱状態にさせる。

ピカチュウとブリガロンは同時に技を放ち、大穴からプラターヌ側に大きな切れ目を作った。

『うしーこれで大丈夫だな！行くぞ、ブリガロン！』

『はいー！』

ピカチュウはブリガロンを連れてプラターヌの方へと走って行くこととしたが・・・

『まったく！邪魔ばかりする奴らだな！』

『すまないな。だが、ここから先は通すわけには行かない』

そう言ったポケモンは、ドサイドン・・・

ここを任された準指揮官と言ったところだろう。

『俺達は急いでから早急に決着を付けさせて貰うぜ！』

『早急に決着が付けばいいがな。岩石封じ！』

※岩石封じ※

岩を出現させ相手に向けて放つ。

その岩で相手を閉じ込める。

『それだけか？ブリガロン、頼んだぞ』

『了解！連続・爆裂パンチ！』

※連続・爆裂パンチ※

連続で爆裂パンチで相手を攻撃する。

(説明いらんなw)

ブリガロンは体格とかステータス関係で通常は早く動けないが、バロンのブリガロンは違う。

凶鑑効果があるので通常のポケモンよりも素早さは倍以上だ・・・
ブリガロンは迫ってくる岩石封じを全て、爆裂パンチで粉碎した！
『岩石封じのお返しをあげるぜー！』

ブリガロンは、思いもつかない速さでドサイドンに接近し、爆裂パンチを頭にクリーンヒットさせた！

『ぐお〜！』

『思い知ったか！』

ドサイドンはこの一撃で戦闘不能になった。

だけど、そこにいたのは当然、ドサイドンだけでは無い・・・

『あくあ。簡単に遣られてしいまいやがって・・・』

そう良いながら出て来たポケモン、ノクタスはポケモンを引き連れてやってきた！

『お前さん達よ、ここから引き返せば見逃せてやるよ。嫌なら、その時は分かっているな？』

『ああ。俺達はここを通らせて貰うぜ。ってことで！雷！』

ピカチュウは奇襲がてらに雷を放ったが、雷はノクタスに当たること無くドサイドンの方へと当たった！

ドサイドンの特性、避雷針だ！

避雷針は雷タイプの攻撃を全て自身に当たるようにする特性・・・

ピカチュウと相性が悪い！

『行け、お前達！一斉攻撃だ！』

『悪の波動！』

『龍の波動！』

『水の波動！』

『波動弾！』

『リーフストーム！』

『岩石砲！』

『ラスターカノン！』

『ムーンフォース！』

※悪の波動※【悪】

20%の確率で相手を怯ませる。

威力が80と少々高い攻撃力を持つ。

※龍の波動※【龍】

通常攻撃。

威力85と少々高い攻撃力を持つ。

※水の波動※【水】

20%の確率で相手を混乱状態にする。

威力は60と少々低い。

※波動弾※【格闘】

通常攻撃。

威力が80と少々高い攻撃力を持つ。

※リーフストーム※【草】

自分の特攻のランクが2段階下がる。

威力が130と高い攻撃力を誇る。

※岩石砲※【岩】

使用した次のターンは反動で動けなくなる。

※ラスターカノン※【鋼】

10%の確率で相手の特防のランクを1つ下げる。

威力が80と少々高い攻撃力を持つ。

※ムーンフォース※【妖精】

30%の確率で相手の特攻を1段階下げる。

威力が95と高い攻撃力を持つ。

様々な属性攻撃の上位番が一斉にピカチュウとブリガロンに放たれた！

『俺の防御をなめるなあ！守る発動！』

ブリガロンは瞬時にピカチュウの前に立ち、守るを張って、攻撃を防いだ。

だが、相手の数が多い上に攻撃も絶え間なく続けて攻撃してくる。ブリガロンは防御力も凄く高いが技の一斉攻撃を食らえば、さすがにキツくなる。

技の守るはそう長くは続かないのが弱点でもあるので、攻撃をしていれば、いずれは技が解除される。

早くプラターヌの所に行かないと行けないのに・・・
バロンに怒られる・・・

それは、絶対に嫌だ！

『あめふらし発動！雨雲よ！来い！』

ピカチュウは雷電モードになるため、雨雲を呼んだが・・・

『それぐらい呼んでたわ！日本晴れ！』

※日本晴れ※【炎】

暫くの間、天気を晴れにする。

『なに!?!』

『お前達の強さは、この地方のポケモン達は殆ど知っている。それに、白いピカチュウは結構有名だぞ』

俺ってそんなに有名だったのか・・・

『ピカチュウさん、顔がにやけてますよ?』

『う、うるさいなく！もう!』

ピカチュウは軽く拗ねたが、今は戦いの最中・・・

直ぐに気を引き締め治した。

『ピカチュウさん、そろそろ守るの効果が・・・切れます・・・』

『くっ！さすがにキツいな・・・』

ブリガロンもピカチュウも今回ばかりは、凄く危険な状況だ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十三話

四十三話

俺はブリガロンに守られっぱなしの状態だ・・・
情けないな・・・

マスターは、お前達の速度じゃ、俺のポケモン達には足下にも及ばない・・・こう言っていたな。

俺達の速度は、あいつらよりも格段に上か！

『ブリガロン、ここに来る前にマスターが言っていた言葉、覚えてるか？』

『もちろん。お前達の速度じゃ、俺のポケモン達には足下にも及ばないだろ』

『その通り。だから、守るなんてしなくても俺達は、スピードで戦えば良かったんだよ・・・』

ブリガロンは、びっくりした顔の後、ニヤツと笑った。

『確かにな』

ブリガロンはそう言うのと技を解除した。

『ブリガロン!?!』

『一斉攻撃って結構ダメージ食らうよな？俺の防御力は高いからな。こいつらの攻撃が全く効いてねえわ』

マジか・・・

『これぐらいの攻撃に俺は守るを使っていたのか・・・』

ブリガロンの様子が少し変わった・・・

その瞬間、ブリガロンは先ほどより更に早いスピードで、俺達を攻撃して来たポケモン達を吹き飛ばしていった。技、爆裂パンチを使つて・・・

0距離なら、確実に当たるこの技。

ブリガロンの素早さで、野生ポケモン達に一瞬で近づき、懐に潜り込み相手を殴ってるから、確実に当たっている。

更に爆発し！

相手を吹き飛ばす！

更に混乱効果も合わさる！

まず耐えきっているポケモンがいなかったが・・・

ブリガロンが動いて1分が経ったとき、周りのポケモン達は皆、横たわっていた・・・

『ピカチュウ、片づいたぞ』

『俺を呼び捨てすんじゃねえ！』

俺はブリガロンの頭を叩いた。

ブリガロンはニツと笑うと、

『さて、マスターに怒られる前にプラターヌを助けますか？』

『勿論！マスターはああ見えて、実は恐ろしいからな・・・早く片付けようじゃないか！』

俺達はスピードを上げ、プラターヌの元へ向かった！

技か1分ほどでプラターヌのいる場所に辿り着いたが、酷い有様だった・・・

プラターヌのポケモンが毒で横たわっている・・・

マフオクシーが攻撃のラツシユを食らい続けてる・・・

プラターヌはサイコキネシス、金縛りを使われ、身動きが取れなくなっている・・・

悪条件、揃いすぎだ・・・

とりあえず、助けるか！

『雨雲よ来い！』

『俺はこいつらを倒す！爆裂パンチ！』

ピカチュウが雨雲を呼んでいる間に、俺はプラターヌを縛っているポケモンを倒す事にした。

俺は瞬時に、ゴチルゼルの懐に潜り込み、爆裂パンチで思いっきりゴチルゼルごとランクルスを殴った！

そのまま、周りのポケモンを殴っていき、片付けた後、雨雲の影響で雨が降り出した。

『雷〜！』

ピカチュウは雨雲に向け、雷を発射！

だが、まだ残っていた避雷針の特性を持つ、ポケモンが雷を邪魔しようとしたので、

『邪魔をするなあ〜！ば〜くれつ！パ〜ンチ!!』

ブリガロンは避雷針持ちのポケモンとの距離が開いてるにもかかわらず、瞬時に追い詰め、思いつき殴りつけた！

そのポケモンは思いつき吹き飛び、木々を薙ぎ倒しながら止まった・・・

その後直ぐ、雷は雨雲に吸い込まれていき、ピカチュウに雷が落ちた！

この落ちる雷が雷電モードに必要なのだ。

詳しく説明していなかったなのでここで説明しよう！

普通に撃つ雷は威力こそ高いが震動と衝撃が少ない。

だが、雨雲に撃った後に戻って来る雷は、震動も衝撃も普通に撃つより、格段に上だ。

この震動と衝撃が無ければ、雷電モードにならないのだ。

震動と衝撃で、蓄電の特性を活発化させるのが、この雷の意味なのだから・・・

『雷電モード完成だ！さ〜暴れるぜ〜!』

『僕の出番は、ここままでかな?』

ブリガロンは自分を攻撃してくるポケモンだけを攻撃することにし、後は雷電モードピカチュウに任せることにした。

磁力を操りし純白の雷公・ピカチュウ・・・

ピカチュウは磁力を使い浮いた後、尻尾に電気を最大まで溜め込み、

『食らいやがれ〜！特大！雷鋼〜テ〜ル〜!』

ピカチュウは雷鋼テールをポケモン達が群がっている所に思いつき振り下ろした！

『盾を起動しろ!』

フリーデインがそう言った後、直ぐに守るの技が発動された！

『俺の攻撃か！お前達の防御か！どっちが上か教えてやる!』

ピカチュウはそのまま、雷鋼テールを振り下ろした！
その攻撃を盾隊が一生懸命受け止め取る！

だが、その盾隊の防御に、亀裂が入り、砕けた！

雷鋼テールは容赦なく振り下ろされ、そこにいたポケモン達を容赦なく襲った！

フリーデインは咄嗟にレポートを使い、避難したが、ブリガロンがそれを見ていて、移動先に先回りした・・・

その場所で、拳に気合いを最大まで溜め込む・・・

最大まで止め混んだ時、フリーデインが目の前に出現した！

フリーデインは目を大きく広げ、驚いた！

『お前の負けだ！気合いパUNCH！』

※気合いパンチ※【格闘】

後攻技。気合いを溜めてる最中に攻撃されると失敗する。

威力は150と破壊力抜群の大技。

フリーデインはもう一度レポートを使おうとしたが、

『遅いわ〜！』

ドン!!!

フリーデインの顔面にブリガロンの放った気合いパンチがヒット！

フリーデインは回転しながら木々を薙ぎ倒していき、屋敷の手前にある、大岩に激突して止まった・・・

勿論、フリーデインは戦闘不能・・・

それまで戦っていた残りのポケモン達は一目散に逃げ出していく・・・

丁度その時、マフオクシーが倒れた・・・

最後は毒に耐えきれなかったみたいだ・・・

プラターヌも疲れたのかその場で倒れ込んだ。

俺達は逃げ出したポケモン達を追いかけようとしたが、空からマスタールが降りてきたので、その場で待機した。

「ピカチュウ、ブリガロン。よく頑張ったな！上から最後の方だが、見させて貰ったぞ！」

『『ありがとうございます。マスター！』』

今回の戦いで俺のポケモン達のレベルは大幅にレベルアップした。もう、レベル100は当たり前前の俺のポケモン達・・・

だが、手持ちは7匹・・・

とりあえず！ユウキに逢いに行こう！

俺はポケモン達と一緒に歩いて行くか聞いたところ、皆が、勿論と答えたので、プラターヌを運んで貰うことにした。プラターヌのポケモン達はモンスターボールに戻しておいたから大丈夫だ。

さ〜！これでやっとユウキに逢えるぞ〜！

『マスター？顔がにやけてますよ？』

「そうか？」

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十四話

四十四話

俺達はやっとの思いで、屋敷に着いた……
屋敷に着くのに、何時間かかるんだよ……

「すみませくん！ユウキさんいますか〜！」

「ちよつと待つて〜！」

直ぐに返事が返つて来てホツとした……

間違いなくユウキの声だったのでまた、顔を緩めそうになってしまった。

俺のポケモン達は一斉に俺の顔を見るので、

「し、しかた、ない、だろ？」

『まあ、まだ10歳ですもんねえ〜』

メイビスがそう言い、ウフフと笑いながら言った。

俺だつて女の子と話したいさ！

少し待つとユウキが走つてこちらに来た！

服装が今日会った時と違う事に直ぐに気付いた！

最初の時は動きやすいスポーツ系の格好で、今は……

ドレス……紫色のドレスだった……

俺は完全に惚けてる……

「待たせちゃつてごめん〜！」

「大丈夫だ！全く大丈夫！」

「良かった〜！レックウザは僕の部屋で寛いでるよ〜」

レックウザめ……ユウキの部屋で寛いでいるだと……

覚えてろ……

『皆、今日のマスターはユウキと言う女の子にメロメロだ。あの子に何かしたら俺達の命が危ないぞ』

『心得た』

残りのポケモン達と、プラターヌのポケモン達も皆、納得した。

「じゃ行こうバロン君！」

「お、おう！」

俺はユウキと走って、屋敷に向かっていった。

『俺達も行くぞ！』

『うん！』

バロンのポケモン達とプラターヌを背負っているブリガロンは急いでバロンの後を追った！。

屋敷の前に着くと、使用人達が並んで整列していた・・・

「「お帰りなさいませ、お嬢様」」

「ただいまバロン君連れてきたから、そのまま部屋に行くね」

「「かしこまりました」」

俺は、啞然としてしまった・・・

ユウキはお嬢様。

屋敷の時点で気付いていた筈なのだが、頭の処理が遅れている・・・

「どうしたのバロン君？」

「い、いや。何でも無い」

俺は直ぐにお邪魔しますと言い、屋敷に上がらせてもらった。

屋敷の中庭には、大きな噴水があり、屋敷の裏方にはこれもまた、大きな庭があった。

ユウキの部屋は3階の一番奥の部屋だった。

「遠くてごめんよ。ここは、見晴らしが良かったから僕が貰ったんだ」

「ユウキは凄いなだね」

「えっへん♪あっ！思い出したんだけど、バロン君のポケモンって今、7体？」

ユウキは首を傾げながら聞いてきた。

「うん。今の手持ちが7体なんだけど、俺のポケモンを置いて旅をするのが嫌なんだ。それで、腰のベルトに入りきれないポケモンは鞆の中にしてたよ」

「じゃあさ！僕にバロン君のポケモンを預けてくれないかな？それとも、やっぱりダメ？」

うん・・・

いくらユウキの頼みでもな・・・

俺はポケモンを手放すが嫌なんだ・・・

『マスター。ユウキ様に預けても貰っても、俺達はいつまでもマスターのポケモンだから、大丈夫だよ』

ピカチュウは、ここに来るまでに俺のポケモン達と話し合っ、決めていたみたいだった。

「それとね。バロン君のポケモンはこの辺りのポケモンよりも強いんだ。今、この辺りのポケモン達は人を襲うから統括するポケモンの存在も必要なんだ」

「ユウキは凄いな。俺のポケモンを見るだけで強さが分かるなんて」「だって。僕の目は特殊なんだ。ポケモンのレベルとステータスが分かるんだよ」

ユウキの目は特殊能力があつたんだ・・・

それで、俺のポケモンの強さが・・・

ん・・・？

って事は・・・

「なあ。白龍のステータスの見れたりするのかわ？」

「残念ながら白龍さんのステータスもレベルも分からない。タイプもね。後、初めて見たポケモンだったから、正直、凄く驚いているよ」

『我は、ポケモンだが、ポケモンでは無い・・・タイプも全く無かった新タイプを持っている』

白龍はユウキにそう話しかけた。

「え!?!白龍さんは喋れるの!?!」

『うむ』

ユウキの目が爛々と輝いている。

「ねえ!白龍さん!あなたのタイプは何!?!」

『神だ』

ユウキの目が更に輝きが増した!

「ねえ!それってもしかして!技も神タイプって事!?!」

『うむ』

ユウキはもう興奮しかない・・・

「じゃあじゃあ!」

「ちよつと待つてくれないか？白龍が・・・」

「あ・・・」

白龍は、ユウキの質問ラツシユにより、精神ダメージを受けていた・・・

「すまなかつたね・・・白龍さんの事、もつと詳しくしりたくなつちやた。えへへへ」

ユウキは笑いながら頭を搔いた。

「まあ、気持ちは察するが。それは止めて貰う。俺の大事な相棒なんぞでな」

「そつかく」

ユウキは心底残念そうにそう言い、下を向いてしまった。

「あ。じゃあ、この山一帯を統括するポケモンがいればいいんだよね？」

「うん」

「皆、聞いたな？この辺りのポケモンのレベルはおおよそ、70～80。それより上がいるかもしれない。後、不審な輩がユウキを襲おうとしたときは、完膚なきまでに叩きのめせる者はいるか！」

俺のポケモン達は右手を胸に一斉に押し当てた！

『マスターのポケモンは皆！この山のポケモンは無論！全てのポケモンからもユウキ様をお守り出来ます！』

「よろしい！では、ユウキ。俺のポケモンから1体。この山を統括する者を選んでくれ！」

「じゃあ白「白龍は絶対にダメだ！」

.....

「じゃあ、どの子ならいいの？」

「うっ！うくん・・・」

俺はポケモン達を見た。

ピカチュウは俺の方を向き、頷いた。

『マスター。俺ならここを統括することも、ユウキ様をお守りすることも出来る。レックウザはレベル的に無理がある』

「すまないなピカチュウ。ユウキ、ピカチュウをユウキに預けていい

か？」

「うん！」

俺は、ピカチュウとピカチュウのモンスターボールをユウキに渡した。

「では、ユウキ。ピカチュウをよろしく頼む」

「任せて！ピカチュウ、よろしくね♪」

『うん。よろしく頼む』

いつの間にか戻って来ていたレックウザと俺のポケモン達を一度モンスターボールに戻し、ユウキの屋敷に設備されているポケモンセンターに回復してもらおうついでに、一夜泊めて貰うことになった。

「バロン君に断られると思っていたから、凄く嬉しいよ。ありがとう♪」

「いや。こちらこそ、泊めてもらうなんて。ありがとうなユウキ」

ちなみに、プラターヌは別室の部屋で爆睡している・・・

「なあユウキ。俺、ユウキの事が、好きだ」

「え？」

「ユウキの事が好きなんだ！」

「ありがとう僕もね・・・好き・・・だよ」

ユウキはそう言うと言顔が赤くなるのを隠すために、向こうを向いてしまった。

俺も顔が赤くなってるのが分かり、直ぐに向こうを向いてしまった。

その後すぐ、俺の背中に温もりを感じた。

「ありがとうね。おやすみ、バロン」

「うん」

こうして、一夜を過ごした・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十五話

四十五話

翌朝、ユウキとプラターヌとポケモン達全員で朝食をとってから、プラターヌが唐突に言ってきた。

「ユウキ君。僕は君とポケモンバトルをしたい」

「いいよ〜裏庭にバトル場があるからそこでやろう!」

「ありがとう」

呆気なくバトル交渉が終わった。

ユウキ君とバトルか。楽しみだ・・・

「ちよつちよつと待つて!俺がバトルするよ!」

「僕は、売られた勝負は受ける主義だよ?バロン君もバトルする?」

「嫌。俺は遠慮しておくよ」

「わかった。じゃプラターヌさん。バトル場に行こっか。クラウド。審判を頼んでいいかな?」

「是非とも」

クラウドと呼ばれた執事は、一例をし、バトル場に向かって行った。ユウキとプラターヌもクラウドの後を追う形で、バトル場に向かって行った。

俺はとりあえず、観客席からみようかな。

「すみません。今からバトルが始まるので、観客席とかは有りますか?」

「はい。ご案内します」

近くにいたメイドに声をかけ、案内して貰った。

バトル場は一般的なバトル場だが、観客席はソファアールになっており、フカフカだった。

だが、バトルがしつかりと見られるように設定されていて、腰深く座ってもバトルが見れるようになっていた。

ユウキとプラターヌはそれぞれ、バトル場の定位置に立った。

その後、クラウドは審判の位置に立ち、

「それではこれより、ユウキ様VSプラターヌ様のバトルを行います。

使用ポケモンは1体。それでは、始め！」

「出てこい！ボーマンダ！」

「出番だよ！ディアンシー！」

屋敷バトル

☆ディアンシーVSボーマンダ☆

ディアンシーだって!?

始めて見たポケモンだ。凶鑑凶鑑つと・・・

名前 ディアンシー

レベル 100

タイプ 岩・妖精

特性 クリアボディ

技 ムーンフォース

ダイヤストーム

神秘の守り

トリックルーム

※ダイヤストーム※【岩】

50%の確率で自分の防御を1段階上げる。

威力が100と高い攻撃力を持つ。

※神秘の守り※【ノーマル】

暫くの間、味方が状態異常にならなくなる。

※トリックルーム※【エスパー】

特殊な結界を張り、素早さが低い方が先に攻撃出来るようになる。

ユウキのポケモン、ディアンシーはレベル100か・・・

結構レベルが高く、宝石みたいなポケモン。

タイプは凶鑑の通り、岩と妖精がある・・・

龍タイプのボーマンダと相性が不利だな・・・

「ユウキ君。珍しいポケモンを持っているね」

「えへへ。ディアンシーは僕が子供の頃からいるポケモンでね。ト

レーナーになれるときに相棒として、一緒に行動しているんだ」

「じゃ、今回の戦いは相棒対決だね。じゃ行くよ！ボーマンダ、竜巻！」

「ディアンシー、避けて、トリックルーム！」

ボーマンダの竜巻は渦を巻きながらディアンシーに向かって行つたが、ディアンシーは難なく避け、特殊な結界、トリックルームを起動させた！

「トリックルームとは・・・厄介な事をしてくれる・・・ボーマンダ、神速だ！」

「ディアンシー、ムーンフォース！」

ディアンシーよりボーマンダの方が素早さは断然上！

だが、トリックルームで素早さが低いポケモンが先に攻撃出来る・・・

よって、ディアンシーの攻撃が先に発射され、ボーマンダを攻撃した！

「くっ！厄介な結界だぜ・・・ならば！ボーマンダ、メガ進化！」

プラターヌはボーマンダをメガ進化させた！

「なら！僕もメガ進化させてもらうよ！ディアンシー、僕達の絆、見せつけよう！メガ進化！」

ユウキの小指に填めていた指輪が光り出し、ディアンシーの腕に着いていた、ディアンシーナイトと共鳴！虹色の光が2人を包み込む！

ディアンシーの体は大きくなり・・・

頭の桃色の宝石が大きくなり・・・

宝石から、白い帯が左右に伸び・・・

宝石から下に左右に分かれ髪状に伸び・・・

岩の部分はスカート状に変形した・・・

更に特性が、クリアボディから、マジックミラーに変わった。

マジックミラーは、相手が使った状態異常にする技や能力を下げる技等の変化技を跳ね返す事が出来る。

「メガ進化だっつて!？」

「えへへ〜凄いでしょうけど、まだまだよ。メガディアンシー！ダイ

ヤストーム！」

「ボーマンダ！流星群！」

2体の技がぶつかり合ったが、流星群の方が勝り、ディアンシーを攻撃した！

だが、妖精は龍の攻撃は効果がない。

技には勝ったが、ダメージが無ければ意味が無いのだ・・・

「残念だったね。さあ！これで終わらせるよ！ムーンフォース！」

「僕も負けたくないな！ボーマンダ！ギガインパクト！」

スカイスキンで飛行タイプにしたギガインパクトでボーマンダは突っ込んだ！

ディアンシーはムーンフォースを最大限溜めて、放った！

2体の技はぶつかり合い、大爆発が起こった！

爆発の中をそのままギガインパクトで突っ込んだボーマンダは、そのままディアンシーまで辿り着いたが・・・

「甘いね。ダイヤストーム発射だよ！」

ディアンシーはダイヤストームを最大数、展開した！

そのダイヤストームをユウキが発射命令を出したことにより、ギガインパクトで突っ込んで来たボーマンダを正面から全て叩き込んだ！

効果抜群の技を全弾受けたボーマンダは煙を上げながら、地面に落ちた・・・

その後、メガ進化が解け、戦闘不能に・・・

ディアンシーも勝負が着いたので、メガ進化を解除した。

「勝負あり！ボーマンダ戦闘不能！勝者、ユウキ様！」

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！」

ユウキとプラターヌは同時に頭を下げ、礼を言った。

「ユウキ君は強いね。僕の負けか〜」

「良い勝負だったよ♪またバトルしようね！」

「うん！」

ユウキとプラターヌはその会話で切り上げた。

そして、観客席から見ていた俺は2人に拍手を送った。

「バロン君〜！勝ったよ〜！」

「おめでとうユウキ！」

ユウキは大きく手を振りそう言った。

「君たちラブラブだねえ〜」

「な、なにを言ってるんだ〜！」

俺とユウキは同時にそう言い、顔を赤く染めた・・・

ラブラブか・・・

「照れないでおくれよ・・・僕なんか彼女も出来なかったんだ・・・」

プラターヌは心底悔しそうにそう言った。

「まあ、頑張ってるね？」

「ね？」

俺とユウキは疑問系に言ったけど、プラターヌの元気は回復しなかった。

ちなみに、プラターヌは負けっ放しの状態でそろそろ勝ちたい

筈・・・

だが、俺のバトルは手加減なんてしない主義だ。

悪いが、プラターヌとの戦いも勝たせるつもりは毛頭ない・・・

まあ、どこかで勝てるでしょ！

「あつ！そうだ！バロン君。バロン君の手持ちポケモンが増えた時、僕の方で預からせてくれないか？」

「いいのかユウキ？」

「うん！その時に、山の見回りもして貰うけど、それはいいかな？」

「もちろんだ」

ユウキに感謝だな。

「じゃ俺達はもう行くよ。次の冒険が俺を待っている！」

「わかった！また今度遊びに来てね！」

「おう！」

「元気だね〜」

プラターヌのボーマンダを回復させてから俺達は旅だった。

プラターヌのボーマンダに乗って・・・

その時、山の一部が黄色く輝いた！

ピカチュウの雷だ・・・

今日からもう仕事にかかっているのか・・・

頑張ってくれ、ピカチュウ・・・

俺とプラターヌは次の目的地に向け、飛び立った。

コボクタウン編再開

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十六話

四十六話

俺達はとりあえず、5番道路に戻ってきた。

「さあ、ここからもう一度出発しようではないか！」

プラターヌがそう言ったからだ・・・

俺的には、次の目的地であるコボクタウンで降りして貰えば良かったんだが・・・

「じゃ行きましょ？」

俺はそう言い、歩こうとしたら後ろから俺を呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り返った。

「バロンくん！久しぶり〜！」

サナ達だった。

そう言えば、ハクダンの森以来会ってなかったな・・・

「久しぶりだね。バトルか？」

「うん！私達、短期間でグンと強くなったんだよ！」

サナ達のポケモンも強くなったか。

面白そうだな。

「よし！じゃ、早速バトルしようぜ！出てこい、メタグロス！」

「わ〜！メタグロスになってる！私は、出て来て！リザードン！」

お・・・リザードンか・・・

相性悪！

5番道路戦

☆メタグロスVSリザードン☆

「リザードン、火炎放射！」

「メタグロス、サイコキネシス！」

リザードンが放って来た火炎放射をサイコキネシスで止めた！

「ならー！リザードン、龍の波動よー！」

「メタグロス、鉄壁！」

※鉄壁※【鋼】

自身の防御を格段に上げる。

メタグロスは龍の波動を鉄壁を使い、その身で受けた！

ダメージはあるものの、鉄壁の効果で防御が上がっているので、さほど問題は無い。

・・・ステータス的に問題無いが・・・

メタグロスは龍の波動を難なく耐え、反撃の言葉を待った。

「分かってるよ。メタグロス、メタルクロー！」

「リザードン、ドラゴンクロー！」

※メタルクロー※【鋼】

10%の確率で自身の攻撃力が上がる。

威力は50と少なめ・・・

※ドラゴンクロー※【龍】

通常の攻撃。

威力が80と高い攻撃力がある。

2体の技がぶつかり合った！

「メタルクローなのに押し返せない!?もう！リザードン！あれを使うよ！」

「俺のメタグロスでも押し返せないか。やはり、メタルクローを辞め、コメットパンチにするか・・・」

「リザードン！私達の絆の元に！メガ進化〜！」

え!?メガ進化!?

サナは、指に填めていた指輪のキーストーンに触れると、リザードンの首に装着してあるリザードナイトが反応し、虹色の光が2人を包み込む・・・

リザードンの体は少し大きくなり・・・

口から左右に分かれた炎が出て来た・・・

左右に生えていた翼は、ギザギザの形状に・・・

更に、リザードンの体の色がオレンジから、黒に変わった！

メガリザードン（X）になったのだ！

この状態のリザードンは、炎・飛行から炎・龍にタイプが変わる。

「どうよ私のリザードンは！」

「さすがだな。メタグロス！コメットパンチだ！」

「リザードン！ドラゴンクロー！」

※コメットパンチ※【鋼】

20%の確率で自身の攻撃力を上げる。

威力が90と高い攻撃力を持つ。

メタグロスのコメットパンチとリザードンのドラゴンクローがぶつかり合う！

両者一步も引かないバトルだ！

その後、2匹は一度、距離を取った。

「くっ！私の鍛えた上げたりザードンですら、バロン君のポケモンに押し勝つ事は出来ないの！」

「いや。さすがと言えるぞ。俺のメタグロスと互角に戦えたのだから。だが、そろそろ終わりにしようか・・・メタグロス！真の姿を見せるときだ！メガ進化！」

俺は、腕に付けている腕輪のキーストーンに触れると、メタグロスの腕に付けていたメタグロスナイトと共鳴！虹色の光が2人を包み込む！

メタグロスの体は大きくなり・・・

4本の足は全て前に向き・・・

メタグロスは浮いた・・・

特性は、クリアボディーから硬い爪に変更になり、物理攻撃の威力が上がるようになった。

メガメタグロスの完成だ！

「な・・・メガ進化!?こうなったら！リザードン！奥の手を使おう！ブラストバーン！」

※ブラストバーン※【炎】

この技を使うと反動で動けなくなる。

氷状態のポケモンは熱で氷が溶ける。

威力は炎タイプの中で最も強力な150。

リザードンの体は赤く輝き出し、炎が吹き荒れた！その炎を全て口に収縮していき、1つの球体となった！

炎を超圧縮した、サナとリザードンの考え出した技。「ブラストバーン改」だ！

「この技ならバロン君のポケモンに勝てる筈よ！」

「さすがにブラストバーンはキツいかな・・・メタグロス！ギガインパクトだ！」

メタグロスの体の周りに全てを破壊するオーラを纏った！

「いつけ〜！」

2人同時に技の発射の命令を出し、2体のポケモンは同時に技を放った！

超圧縮したブラストバーンはギガインパクトを使って突っ込むメタグロスに当たると、大爆発が起こり、辺りを穿った！

通常のポケモンなら今の攻撃で戦闘不能になるだろう・・・

だが！

俺のポケモンは育ちが違う！

大地を穿ったブラストバーンの爆炎の中からギガインパクトを使っているメタグロスが出て来た！

「なんで!?!リザードン避けて〜！」

だが、ブラストバーンは使うと反動で動けなくなる・・・

ギガインパクトもそうだが・・・

リザードンは反動のせいで動けないまま、メタグロスのギガインパクトをダイレクトに受けた！

リザードンはその攻撃を受け、戦闘不能になりこの勝負、俺の勝ちで終わった。

「バロン君に勝てない・・・次は勝つから！リザードン、お疲れ様」

「正直、危なかったぞ。ブラストバーンを更に圧縮して、発射した後、火炎放射で速度と熱を更に追加とかがしたら、結構な攻撃力にもなるぞ」

「ブラストバーンは使うと動けなくなるの！」

「鍛え方次第じゃ、それを克服出来るよ。俺のメタグロスはギガイン

パクトを使っても動けるしね」

そう。俺のメタグロスはギガインパクトを使っても普通に動けるので、ギガインパクトを放った後、もし耐えきられたらもう一度ギガインパクトを使うか別の技を使っていた。

「嘘・・・反動を克服出来るの?」

「ああ。ハクダンジムのビオラさんのドラピオンも破壊光線を撃ってきた後、動いていたぞ」

「私の時は使ってなかったよ!?!」

ビオラは俺に本気を出してたって事か・・・

だけど、ウルガモスを使ってなかったな・・・

やっぱりジムリーダーだからか?

「ビオラさんの気分じゃないかな」

「そっか」

それにしても、ハクダンジムは無事に元に戻ったかな・・・

その後サナはリザードンを回復させるために、ミアレシティに戻って行った。

俺のメタグロスは総ダメージ100しか受けていないので問題なかったのもそのまま旅を続ける事にした。

プラターヌもバトルしようとしていたが、受けると長引きそうなのでまたの機会にしようと思った。

さく!今度こそ、コボクタウンに行くぞ!

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十七話

四十七話

俺達は今、コボクタウンの手前のゲートで立ち往生していた・・・
「プラターヌ、これどうしようか？」

「うくん・・・気持ちよく寝てるみたいだしな・・・」

俺達の前には、この地方では珍しい「カビゴン」がコボクタウンに行けるゲートの入り口で気持ちよさそうに寝ていた・・・

「新しくゲートを作っちゃおう？」

「え・・・？」

周りにいた人達も俺の方を見た・・・

「ゲートを作るって、君、正気かい？」

「何日かかると思っているんだ？」

「そもそも子供に出来るわけがないじゃないか」

俺は腰のモンスターボールを必死で抑えている。この中のポケモン達が相当頭にくっているから・・・

これ以上俺の悪口を言ったら、この人達がリアルで死ぬ・・・

「俺がゲートを作るのではなく、俺のポケモン達で作るのです」

「ポケモンがか？」

「そうですよ」

周りの人達は呆れた顔をしてからこう言った。

「はあく所詮は子供が考えることか・・・みな、今日は諦めて帰る帰る」

この言葉に俺のポケモン達は我慢出来なくなり、目の前の、今の言葉を言った人が1人、消えた・・・

ちなみに、これをやったのは・・・

「白龍だな、これをやったのは？」

『我はマスターを侮辱する者は許さないのだ。大丈夫。消した奴の記憶はこの世からも消した瞬間に消してある』

記憶すら消すか・・・

やはり、ポケモンでも神は神って事か・・・

「やり過ぎないでくれよ？」

『無論大丈夫だ。マスターを侮辱しない者は手を出さないからな』
まあ、もう過ぎた事は諦めるか・・・

幸い、他の者は本当に気付いていないみたいだからな・・・

「じゃあ、早速取りかかろうか。出てこいメイビス・白龍！」

『僕の出番だ〜！』

『・・・』

白龍はバロンを見る者たちをさっと見てから、2人消した・・・

『白龍様、怖いよ?』

『マスターを嫌な目で見ていた者を消しただけだ』

『ならいつか!』

「いや!大丈夫じゃないからね!?!とりあえず、作業をして貰っていいかな?」

『勿論♪』

『勿論だ』

白龍は作業を始める前に、白い霧を辺りに出し、5番道路全体が深い霧に覆われた・・・

『さあメイビスよ!やるぞ!』

『はい!』

物音や、白龍達の声が聞こえてから少し経つと、濃い霧が晴れてきた・・・

その場所を見ると・・・

城壁・・・

城壁がそこにはあった・・・

『この世界では城壁と言うらしいが、これはGATEだ』

『そうだよ城壁と言う名のGATEだよ♪』

「良くやったな。お疲れ様♪ちなみにカビゴンは?」

『邪魔だったので近くの木に移動させたぞ?』

移動出来たんだ・・・

それにしても立派な城壁だ。いや、GATEだ・・・

いったい何km続いているんだ・・・

『一応このGATEは、10kmほど続いているが、長かったか?』

「凄いな・・・10kmか・・・良いと思うぞ」

白龍とメイビスは満足そうに頷くと、モンスターボールに戻って行った。

ちなみに、手入れがされなれないと思い、白龍とメイビスは石畳の城壁、GATEを造った・・・

高さ15m

長さ10km

幅10m

名 5番GATE

「さあプラターヌ！俺達が一番に入るぞ！」

「お、おう！」

プラターヌはまだ、この状況になれていないみたいだ・・・

まあ、その内に慣れるだろう・・・

俺達は、一番最初にGATEを潜った。

中には、珍しく何も無く、火の付いた灯籠だけがあった。

ここは城壁が名所になるだろう・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十八話

四十八話

コボクタウンに俺達は着くと先にポケモンセンターに向かい、ポケモン達を回復させた。

コボクタウン・・・

田舎みたいなのは何も無い、民宿はあるが・・・それぐらいしか無い村だ。

だが、1つだけ名所がある。それは・・・

【シヨボンヌ城】

この城に繋がる道がここ、コボクタウンなのだ・・・

シヨボンヌ城・・・

石畳で出来た大きな城。

ポケモンの回復が終わってから直ぐに、シヨボンヌ城に向かった。

シヨボンヌの前に着くと、勝手に扉が開いた！

「ようこそいらっしやいました！どうぞ、お入りください」

そのアナウンスが流れた後、俺達は城の入れ口の扉まで歩いて行っ
た。

扉の様子が伝説のポケモンである、【レシラム】と【ゼクロム】になっ
ていたのに驚いた。

扉の前で少し待つと扉が開いた。

「ここまで歩かせて済まなかったね。どうぞ入ってください」

「ありがとうございます。お邪魔します」

「お邪魔します」

ここの主かな。

小太りの中年男性的な人が出て来た。

「ここってシヨボンヌ城だよね？」

「その筈だが・・・」

そう・・・

俺達はコボクタウンにいて、シヨボンヌ城に来ているのだが、良く
考えると・・・

レシラムとゼクロム系統はパルファム宮殿にあり、シヨボンヌ城は基本的に何も無い・・・

どこかで時空の歪みが生じているのだ・・・

プラターヌは直ぐにそう思い、辺りを探ろうとした時！

「うわ〜！」

「どうした!？」

プラターヌの足下に穴が急に空き、落ちていった！

俺も助けようと動いたが、直ぐに穴は閉じ、俺は地面に転がった！

「な!？」

俺は直ぐに起き上がり、腰のモンスターボールに手を伸ばした！

「出てこい白龍！大地を穿て！爆竜刃！」

※爆竜刃※【龍】

龍の最上級技（小説時のみ）

爆発属性の風と龍属性を合わせた技。

俺は白龍が出るときに命令し、白龍は直ぐにそれに答えてくれた。

『爆竜刃〜！』

白龍はプラターヌがいた場所を爆竜刃で地面を穿ったが・・・

そこには何も無かった・・・

いや、爆竜刃で開けた穴しか無かった・・・

「くそ〜どこにいったんだよプラターヌ！」

白龍はそつと穿った穴を元に戻し、俺の所に来た。

『これは伝説のポケモンの仕業とみていいだろう・・・この空間も時空

の歪みが生じている。この城に思い入れがあるのか？』

「俺はこの城に思い入れは無いが？」

『いや・・・これを仕組んだポケモンについてだが？』

やってしまった・・・

と、とりあえず、考えるか・・・

これを仕組んだ伝説のポケモン・・・

この城にある像は確か、「レシラム」と「ゼクロム」だった筈・・・

だけど、この状態に出来るのは確か・・・

「【パルキア】と【ディアルガ】だった筈・・・」

『我もその2体と考えていた。だが、なぜこの地方にいるかを知りたい』

「確かに・・・確かあの2体は、シンオウ地方にいるはずのポケモン」そのポケモンがこのカロス地方に来ている？

伝説級のポケモンが違う地方にいと、色々と問題が出るのだ・・・ちなみにこれは、俺がポケモンと話せるようになってから解った事だ・・・

ちなみに俺のポケモンにいる。

今は預けているが、レックウザはハウエン地方に生息している伝説ポケモンだ。

メイビス（デオキシス）も一緒のハウエン地方に生息していたポケモンなのだ。

俺の伝説2体はその地方の伝説ポケモンの子供で、俺の所に来た？みたいな感じらしい・・・

白龍はどれとも違う新たな伝説ポケモンに当てはまる。

もしかして・・・

この現象を生み出している伝説も子供か？

このポケモン界の地方は、

カントー地方

ジョウト地方

ハウエン地方

シンオウ地方

イツシュ地方

カロス地方

この6地方があるのだ。

この地方にそれぞれ伝説のポケモンが存在していて、そのポケモンがその地方を束ねている。

話しが少しそれだが、このディアルガとパルキアはシンオウ地方のポケモンで、この2体がいると言う事は・・・【ギラティナ】もいるはず・・・

ギラティナはシンオウ地方の管理者に当てはまるポケモンで、表が

ディアルガとパルキアとなっている・・・

とりあえず会って確かめなければならぬ！

「あのくそろくそろ僕も話していいかな？」

この人の事、忘れてた・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 四十九話

四十九話

「ここはどこだ？」

「僕はなぜここにいる？」

『質問攻めはよしてくれ……ここは反転世界。僕が管理している世界
や』

「反転世界……」

「ギラティナの世界か……」

「君はギラティナで合ってるかい？」

『正式には末っ子のギラティナさ』

「末っ子のギラティナ？」

「ギラティナって伝説の筈……」

「子孫も残せたの!？」

「どうやってだろう？」

「よし!このさい、全部聞いてみよう！」

『質問攻めはよしてくれと言った筈だが?』

「すまなかったね。君は僕の心の声が聞こえるのかい？」

『この世界だと聞こえるぞ。後、あの少年の連れている白い龍は何だ
?』

「ギラティナの聞いている何だはたぶん、白龍自身に付いてだろ
う……」

「僕も近くににいるけど全く解らないんだよな……」

「僕は知らないな……君は知らないの？」

『知らないから聞いているのだが?』

「ギラティナは少し怒り気味に言ってる……」

「今更だけど、ギラティナのフォルムはアナザーフォルムだ。」

「1つ聞きたいんだけど、なぜ僕だけを連れて来たんだい？」

『君はこの事件に付いて直ぐに察知しただろう?パルキアとディアル
ガの存在は察知しているはずだ』

「時間を司るポケモン【ディアルガ】」

空間を司るポケモン【パルキア】

この2体が争うと時空の裂け目ができ、時空の歪みが出るのだ。

この状態を放っておけば、この場所は消える……

『シンオウ地方では争いを収める道具があったが、この地方には無かった……』

「じゃあどうして止めればいいんだい？」

『僕もそれを考えていたんだよ……』

その時！

プラターヌの近くに紫の霧が発生した！

『またか……その霧を吸っちゃダメだよ。毒だから』

「え!？」

プラターヌは直ぐに霧から離れた。

その後、ギラティナは毒を消した。

『ここにこれが出るって事は……あの宮殿がヤバいぞ!』

パルファム宮殿の上空には2体の伝説ポケモンが睨み合ってた……

『お前はいつも俺の邪魔をしゃがる!俺の前からされや!』

『それはこっちの台詞だって何回も言ってるだろ!亜空切断!』

『時の咆哮!』

※亜空切断※【龍】

急所に当たりやすい高威力の技。

威力は100。

※時の咆哮※【龍】

使用した後、反動で動けなくなる高威力の技。

威力は150。

2体の技がぶつかった瞬間!周りの時空が縮まり、消滅が始まった!

「どうなってる!？」

『これはまずいですね……マスター。皆を出して、消滅の時間を稼いでください!我はあの2体の相手をしてきます』

「わかった！出てこいみんな！」

俺は残りのみんなをボールから出し、消滅しようとしている場所に光線系統の技を命じた！

「メイビス、破壊光線！」

レックウザも破壊光線！

ブリガロン、ソーラービーム！

メタグロス、ラスターカノン！

ファイアロー、大文字！」

俺のポケモン達はステータスは通常の倍以上は基本あるので、消滅仕掛けてる場所に攻撃すると簡単に止まった・・・

「さすがー！これなら各自消滅仕掛けてる場所を攻撃出来るな。みんな！消滅仕掛ける場所を攻撃してきてくれ！」

『『了解』』』

メイビスは俺の所に残り、残りは各自自分達の持ち場に着き、攻撃を開始した。

『争いを止めぬか2人とも』

『『邪魔だ！』』

『時の咆哮！』

『亜空切断！』

『バリア』

白龍は左右の手にバリアを展開。2体の技を最小限で防いだ！
『なに!?!』

『お前達の攻撃はこれで十分に防げる』

白龍は瞬時にパルキアの後ろに回り、

『斬空刃！』

※斬空刃※【鋼】

鋼属性の風の刃で相手を攻撃する鋼属性最上級技（小説時のみ）
威力150。

パルキアは斬空刃をまともに食らい、地面に落ちた！

『あいつが一撃で遣られるだと！』

『喋っているなら攻撃したらどうだ?』

『くっ！時の！』遅いわ！炎斬！』

※炎空刃※【炎】

炎属性の風の刃で相手を攻撃する炎属性最上級技（小説時のみ）
威力150。

『グガガガガ！』

ディアルガは白龍の攻撃を食らい、地面に落ちた・・・

『そんな程度か・・・てことは・・・』

白龍は仲間のポケモン達を見渡した。

消滅現象の所を光線系統で攻撃している仲間達。

その攻撃は消滅現象を押し返している。

仲間達の攻撃力が高いので押し返しているのだ・・・

普通なら押し返すなんてまず出来ない。

『全然大丈夫だな』

『何が大丈夫だ〜！亜空切断！』

『貴様は俺が倒す！時の咆哮！』

『芸が無いな。右、亜空切断！左、時の咆哮！』

白龍は左右の手からパルキアに亜空切断。ディアルガに時の咆哮を放った！

『俺達の攻撃を!?!』

2体は驚愕したが、

『オリジナルに勝てると思うなあ!』』

『お前達の攻撃は俺には効かん』

白龍が放った技は2体のポケモンの技とぶつかったが、そのまま2体の方へと押し返していき、2体を攻撃した！

『グアア〜!』』

2体はこの攻撃で戦闘不能になった。

だが、崩壊現象は止まらなかった・・・

『はあく面倒くさい事になった・・・』

「面倒くさい事?」

『崩壊現象を起こしている元凶を倒してしまつて・・・』

「あらま・・・とりあえず起きるまで崩壊現象を攻撃しよ〜白龍はみんな

なのサポートを頼むね」

『了解した』

俺はその間に宮殿の主に話しをしておくか……

「主さん？ポケモンの戦いの中あなたは普通にここに立っていましたか、人間ですか？」

「人間も何も、私の正体は……」

主の姿が変わっていく……

全身から黒い毛が生え、

頭は狐みたいになり、

黒い髪が伸び、先は赤くなっている。

爪は鋭く伸びた。

『俺はゾロアーク。今のは特性、イリュージョンだ』

「ゾロアークだったのか。どうりでびくともしないはずだ」

俺は少しゾロアークと離していたら、後ろから物が壊れる音が聞こえた！

『やっど起きたみたいだね』

「そのようだ」

2体の伝説は白龍を睨み付け、技を放とうとした！

「い・い・か・げ・ん・に・しろ〜！」

俺は全身に赤い気を纏い、瞬発的に全身強化した！

『マスターに付与しなければ！』

白龍は咄嗟に俺に金色のオーラを付与してくれたので、更に強化できた！

この金色のオーラは、属性が神になるのだ！

俺は技を放つ直前のパルキアとディアルガの頭を叩いた！

『なんだ!?!』

パルキアとディアルガは攻撃が来た方を見た。

『人間?!』

「お前達！いつまで喧嘩してるんだ！お前達のせいで崩壊現象が起こってるんだぞ！」

『なんと?!』

『それはまことか!?!』

俺は2体に見てこいと言ひ、現状を見せた。

『なんてことだ・・・1体のポケモンが崩壊現象を止めている・・・向こうもか!』

『こつちもだぞ!』

2体は崩壊現象よりもそれを押し返しているポケモンに驚いていた・・・

「早く崩壊現象を止めてくれよ!」

『ああ。そうだったな』

『だが、条件がある!』

『お前ら、条件つてのは何だ?』

白龍が後ろで笑顔で聞いた・・・

『なんでもありません!直ぐに崩壊現象を止めます!』

2体は直ぐに崩壊現象を止めるために協力し、崩壊現象を見事、止めてみせた。

「ありがとうな」

『『いえいえ!ではこれで失礼します!』』

『うむ。助かったぞ』

『『ありがとうございます!』』

2体は直ぐに時空の狭間へと消えて行った・・・

城はちゃんと元に戻っており、シヨボンヌ城とパルファム宮殿に別れていた。

ちなみに俺達はパルファム宮殿にいる。

『バロンって凄いな!俺はあんたの事が好きだぜ!仲間に入れてくれよ!』

「いいぜ!よろしくなゾロアーク!」

俺はモンスターボールをゾロアークに当て、GETした。

「ゾロアーク、GETだぜ!」

『見事だ』

こうしてまた新たに新しい仲間が出来た。

ステータス

名前	ゾロアーク
LV	90
特性	イリキュージョン
技	悪の波動
	悪巧み
	破壊光線
	龍の波動

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十話

五十話

俺達は一度コボクタウンに戻り、ポケモン達を回復させた。プラターヌはまだ戻ってこないのので、先にユウキの屋敷に向かうことにした。

「レックウザ、今日も頼むね」

『任せろ！』

俺はレックウザに乗り、ユウキの屋敷に向かった。

ユウキには事前に伝えていたので大丈夫だ。

『マスター。もう少しで着きますよ』

「ありがとう」

レックウザは少し旋回すると、先ほどいた場所に雷が落ちた！

「あつぶねえく助かったよレックウザ。雷と言う事は」

『ピカチュウですね』

「だな！とりあえずピカチュウの所に行こう！」

レックウザは直ぐにピカチュウの場所に気付き、ピカチュウの前で降りしてくれた。

「久しぶりだなピカチュウ！」

『そこまで日は経ってないが・・・』

ピカチュウよ！痛いところを突くなよ・・・

「山の統括者の方はどうだ？」

『皆、しっかり者だな。楽しく勤めさせて貰ってるよ』

「そりゃよかった。また新しくポケモンが増えて、今回はファイアローを預ける事になるから仕事配分考えといて」

『大丈夫だ。ファイアローなら空の統括者になってもらう。地上は俺に任せろ』

ファイアローはもう空確定だな。

いや、そうなるのは必然か・・・

「じゃ俺達はユウキに会ってくるね」

『ああ。また会おうな!』

「おう!」

俺は再びレックウザに乗り、ユウキの屋敷に向かった。少し立つとユウキの屋敷が見えてきた。

ユウキは裏庭でバトルの最中みたいだ。

「ニンフィア、ムーンフォース!」

「ボスゴドラ、ラスターカノン!」

ボスゴドラの攻撃がニンフィアの攻撃を押し返し、ニンフィアを吹き飛ばした!

そのままニンフィアは戦闘不能に!

「今日もワシの勝ちじゃな」

「く〜! やっぱりじいちゃんは強いや」

俺は空から見ていて、その会話が終わってから降りた。

「空からすみません。バロンと言います」

「君がバロン君か。緑の龍、レックウザを使うと聞いていたが、まさか手懐けているとは」

手懐けている?!

何を言っているんだ?

「レックウザは友達ですよ?」

「え? 友達?」

じいさんは不思議そうな顔をしている・・・

逆に俺が、何での状態なんだが・・・

「ま、まあよかろう。ようこそ我が屋敷へ! 孫のユウキと遊んでくれていると聞いている。ありがとうね」

「いえいえ! 空からの訪問失礼しました! ユウキとお話があるのですが、少しいいですか?」

じいさんはユウキをチラッと見た。

「僕は別に大丈夫だよ。話してなあに?」

「俺の手持ちポケモンがまたオーバーしてしまって・・・預けようと思っ

「ホントに!? やった〜! じいちゃん! バロン君のポケモンはね! すっ

ごく強いんだよ！山の統括者、ピカチュウもバロン君のポケモンなんだ！」

「ほほおうくならば、ワシとバトルしないか？」

俺はユウキと話したいのに！

「なんじや不満そうじやな？」

「いえいえ。そんな事はありませんよ」

「では、ボスゴドラよ、一度戻れ。そして、出よ！ハガネール！」

「では！行ってこい！ブリガロン！」

ユウキが凄くキラキラな目で俺を見ている。

屋敷戦

☆ハガネールVSブリガロン☆

「じいさん。悪いがここは勝たせて貰うぞ！ブリガロン！爆裂パンチ！」

「そう簡単に勝てると思わないことだ。ハガネール、守るだ」

ハガネールは瞬時に守るを展開して、ブリガロンの攻撃を防いだ！その時、守るの衝撃で少しノックバックが生じた！

「隙を見せたな。ハガネール！叩き付けるにアイアンテールを追加だ！」

※叩き付ける※〔ノーマル〕

相手を叩き付ける通常の攻撃。

威力は80とそこそこ高い。

ハガネールは瞬時に尻尾を鋼鉄化して、ブリガロンに叩き付けた！だが！そう簡単に俺もブリガロンも攻撃を受けるつもりはない！

「ブリガロン！瓦割り！」

※瓦割り※〔格闘〕

リフレクター・光の壁を無効化に出来る。

威力は75とそこそこ高い。

ブリガロンはノックバック状態のまま、ハガネールの技を腕をクロスさせて押し返した！

その衝撃で今度は、ハガネールがノックバック状態を起こした！

「あの状態でワシのハガネールの攻撃を押し返すだど?!」

「まだまだ終わらないですよ！ブリガロン！爆裂パンチ！」

「まずい！ハガネール！守るだ！」

ブリガロンは直ぐに手を爆裂パンチ用に変え、瞬時に腰を低くし、ハガネールの懐に潜り込んだ！

ハガネールはまだ、守るを展開出来ていない！

「はやい!？」

「俺のポケモンをなめるなあ！」

『食らいやがれ！俺の渾身のパンチをく！』

ブリガロンは爆裂パンチをハガネールの顔面に思いつき殴り飛ばした！

ハガネールは守るを展開出来ずに凄く飛ばされ、中距離辺りにあった岩に激突、岩が砕けてから止まり、戦闘不能に状態になった。

「なんと!?!この威力、素晴らしい！」

『フーン！俺をなめるからだ！』

「俺のポケモンは強いからね♪」

じいさんはブリガロンの強さに惚れ惚れしている。

早くハガネールを戻してやれよ・・・

「あ。ハガネール、戻っておくれ。ところで、ユウキに預けたいポケモンはどの子だい？」

「ファイアローです。強さを見せるためにバトルしますけど？」

「よしのった！じゃワシは、行け！ドサイドン！」

「相性が悪いが、行け！ファイアロー！」

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十一話

五十一話

第2戦目

☆ドサイドンVSファイアロー☆

「ドサイドン、ロックカット！」

※ロックカット※【岩】

自身の素早さを格段に上げる技。

「面倒な事を！ファイアロー、鋼の翼！」

※鋼の翼※【鋼】

翼を鋼の硬度に変え相手に攻撃する技。

更に10%の確率で自身の防御を上げる。

威力は70。

ファイアローはドサイドンに突っ込んで行った！

「ドサイドン！アームハンマー！」

※アームハンマー※【格闘】

自分の素早さが1段階下がるが強力な威力の技。

威力は100。

ドサイドンは両手を上段に構え、ファイアローが来るのを待った。

ファイアローはそのままドサイドンを攻撃しようと突っ込んでいく。
「いつ攻撃が来るのだ？」

「今だ！振り下ろせ！」

まだ距離は開いているぞ？

ドサイドンは思い切り地面を攻撃した！

その衝撃で地面に亀裂が入り、土埃が舞った！

ファイアローは土埃に突っ込む形となり、目に土埃が入ってしまった！
「ドサイドン！岩石砲だ！」

ドサイドンは両手を構え、デカイ岩を出現させ、収縮させていった……

それはデカイ岩はみるみる小さくなっていき、やがて、石ころサイズになった・・・

「放て〜！」

その合図と共に岩石砲が放たれた！

石ころサイズの岩石砲はファイアローに当たる前に爆発した！

その爆発は技【大爆発】と一緒に攻撃力を誇っていた・・・

※大爆発※【ノーマル】

自身のライフがゼロになる代わりにフィールド上にいる者たちを全て巻き込む破壊力最大の技。

威力は250！

この技がファイアローの前で起こったのだ！

「ファイアロー！大丈夫か!？」

『安心してマスター。鋼の翼が役にたったよ』

デカイ爆炎の中からファイアローが出て来た！

鋼の翼で大爆発を咄嗟に防いだのだ！

「良かった〜流石にヤバいと思っただぞ・・・」

『正直キツイです。ライフも3／1でもう一発今のを食らうと負けます・・・』

ファイアローを改めて見ると体がボロボロだ。

飛んでいるのも辛いはずの状態だった・・・

「まさか今の攻撃の耐えきるとは・・・ドサイドン、動けるか?」

『まだ行けるぞ』

「ファイアロー、まだ動けそう?」

『大丈夫です!』

2体とも残りライフは3／1を切っている・・・

大技が決まれば勝敗が決まる・・・

「ドサイドン！岩石砲チャージ開始!」

『ウオオオオオオ〜!』

「ファイアロー！鋼の翼に追加！神速だ!」

『ハアアアアア〜!』

「いっけ〜!」

2体が動じに動いた!

ドサイドンは岩石砲を放った!

ファイアローは神速を使い、超高速でドサイドンに接近!

目の前に迫る岩石砲をファイアローは鋼の翼で真つ二つに叩ききった!

そのままの速度で通過し、ドサイドンに技を決め、神速の速さで連続攻撃をした!その後、岩石砲が大爆発を起こした!

ファイアローは静かに俺の前に降下し、着地した。

ドサイドンは静かに前に倒れ、戦闘不能になった...

「ワシの負けじゃ...」

「ファイアローをここまで追い込んだ相手は初めてでした。ありがとうございました」

『良い勝負だった』

『俺の渾身の岩石砲を割られた時はショックだったぞ...』

『すまないな...割らないと負けていた...』

ポケモン同士でも話し合いをしていた...

本当に良い勝負だった。

「ドサイドン、お疲れ様でした。戻ってください。バロン君。ユウキとお話がありましたね。お時間を取らせてしまい申し訳ございません。どうぞ、お屋敷の方へ」

「ファイアローお疲れ様。戻って休んでくれ。屋敷に入ってもいいんですか?」

「じいさまいいの?」

「もちろんだよ」

「やったく!バロン君!早く行こう!」

「うん!」

俺はユウキの後を追う形で屋敷に入って行った。

じいさんは後ろからゆっくりと歩いてきた。

「そう言えば話して、ポケモンを預けたいって事だったよね?」

「うん。今日はファイアローを預けに来たんだ。今先ほどのバトルで怪我をしてしまったけど、預けていいかい?」

「もちろんだよ！怪我は爺様の専属医師に治させるから安心してね！」

爺様の専属医師？

なんか凄そう・・・

「その専属医師って凄いだよね？」

「もちろんだよ！爺様は初代ポケモンマスターなんだよ！その時の女医さん達が今の爺様の専属医師になったんだ！」

「てことは、女医さん達は超が付く程のベテランさん達って事じゃ・・・」

「うん！」

凄い事だぞ・・・

しかも超ベテランって・・・

その方達って何人いるんだ？

「ユウキ。その専属の方達って何人いるんだ？」

「うん？あまり良く解らないけど、若い人々歳の行った人様々いるよ？！見に行く？」

「え？いいの!？」

「うん！」

ユウキはそう言っつて俺の手を掴み走り出した！

「ちよつちよつと！一人で走れるって！」

「良いから良いから！」

ユウキはそう言い、そのまま走って行ったので、俺も転ばないよう気を付けながら走った。

屋敷は思っていた以上に広く、確かに走らないと時間がかかると思える程広く、遠かった・・・

15分程走っていると屋敷を出てしまった・・・

「ユウキ！屋敷出てるぞ！」

「それで合ってるんだよ！もう少しで見える場所がその人達がいる場所さー！」

それから5分程走ると、白い外壁が目立つ建物が見えてきた。

屋敷からは見えなかったのに、こんなに目立つ建物がどうして解ら

なかったんだ？

「ここはポケモンセンターと一緒に機能をしている、女医さん達用の別荘さー！」

「別荘!? めっちゃ豪華なんだけど!?」

そう・・・

白い外壁はそうなんだが・・・

建物が・・・屋敷に負けないぐらいデカく、豪華！

更に門まで付いている！

中も気になるが・・・

その前に気になることが・・・

「なあ。どうしてこんな目立つ建物が、屋敷からもっと言うと、俺は空から来たのに解らなかったんだ？」

「ああ。それはポケモンのおかげさ！ポケモン達が安全を確保するためにここに結界を張ったみたいなんだ」

ポケモンが結界を!?

あり得なくは無いが・・・

少し探りたいな・・・

「探ると女医さん達に怒られるから止めてね？」

「あ。はい・・・」

今回は探るのはよそう・・・

とりあえず挨拶だけでもしておくか！

「じゃ入ろうー！」

「おうー！」

俺達はポケモンセンターユウキ家専用の入っていった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十二話

五十二話

俺とユウキは、ポケモンセンターに入り、女医さんと挨拶を交わしてから、ポケモンバトル場へと案内された・・・

挨拶を交わした人はこの責任者で、名前はアテナと言っていた。

「何でバトル場に案内されたんですか？」

「うすうす気付いていると思うけど、ここはバトル場。もう解るよね？」

「バトルですね？案内されたと思ったらここだったので。ですけど、バトルは受けますよ！」

バトルして勝てば、ポケモンの経験値に変えられるからな。

ついでに、持っていないポケモンなら、ポケモン図鑑に登録出来るから、バトルしていた方が効率がいい！

「では！行ってきなさい！ハピナス！」

ハピナスか・・・

地味に厄介だな・・・

「出てこい！メタグロス！」

「言うのを忘れていたけど、1対1のバトルでいいよかった？」

「大丈夫です！」

ポケモンセンター戦

☆ハピナスVSメタグロス☆

「ハピナス！願い事よ」

※願い事※【ノーマル】

次の攻撃終了時に、バトル場に出している味方のポケモン達のHPを、自分の最大HPの1/2を回復する。

「厄介な事を・・・メタグロス！鉄壁で防御を上げておいてくれ」

メタグロスは鉄壁を直ぐに使い、防御力を格段に上げた。

「さすがに攻撃してこないわね・・・ハピナス、光の壁よ」

※光の壁※【エスパー】

暫くの間、目の前に特殊な結界を張る。

相手の特殊攻撃を半減させる。

ハピナスは光の壁を展開し、願い事の効果で体力が回復した。だが、体力はMAXだったので効果は無い……

「メタグロス、もう一度鉄壁だ」

『攻撃はしないのですか?』

「今はな……」

メタグロスはもう一度鉄壁を使い防御力を更に上げた。

「攻撃しないつもりかしら? まあ良いけどね。ハピナス! ムーンフォース!」

「メタグロス、何もしくなくていい……」

『え? ラスターカノン撃たないのですか?』

「今は撃たなくていい」

俺はテレパシーを使い、メタグロスに作戦を説明した。

『今日のマスターは酷いですね』

「そうか?」

ムーンフォースはメタグロスに直撃して爆発した!

爆発が晴れた後、メタグロスは何事も無かったように立っていた。

「流石に1発じゃ勝てないわね……もう一度ムーンフォース!」

「やっぱり……メタグロス。俺達を楽しませてくれるのはじいさんだけみたいだ。ラスカーカノン発射」

『そのようですね。ラスカーカノン!』

メタグロスの攻撃はハピナスが技を放つ前に当たり、爆発した!

「メタグロス! 追撃でコメントパンチ! 吹っ飛ばせ!」

『はい!』

メタグロスは、ハピナスとの距離を一気に縮めるとハピナスを技で殴った!

ハピナスはその攻撃で壁まで吹っ飛び、激突!

幸い壁は分厚かったおかげで崩壊しなかったが、ずいぶんと壁にめり込んでいた……

ハピナスはそのまま戦闘不能になりメタグロスの勝利で終わった。ちなみに、ハピナスの経験値は美味しいものがあり、倒すと莫大な

経験値が入る！

更に、俺にはポケモン凶鑑効果も合わさり、とんでもない経験値をこのバトルで得た！

ハピナスはLV100。

通常経験値は8万！

凶鑑効果で伝説は4倍。

一般は2倍なので、

白龍・メイビス・レックウザは32万の経験値！

ブリガロン・メタグロス・ファイアロー・ゾロアークは16万の経験値が手に入った！

おかげで凄くレベルアップが出来たぜ！

「あなたは強いですね。この施設を思う存分、お使いくださいませ。後、バロン様専用医師もご用意いたしますので、よろしくお願ひします」

「え？あ、はい！よろしくお願ひします！」

「良かったねバロン君♪僕の家はバトルで勝たないと何も出来ないから」

「そう言う事だったのか・・・」

「じゃあユウキがじいさんとバトルしていた理由って？」

「僕は爺様を倒して、旅に出たいんだ。色々なポケモンと出会い感じ合っしていきたい」

「なるほど・・・ならばピカチュウに稽古して貰うといいぞ」

「ピカチュウに？」

俺のピカチュウの稽古はスパルタだが、確実に強く育つ育成をする事を教えてあげた。

「スパルタは嫌だけど、強くなるなら教えて欲しい！」

「分かった！ピカチュウに稽古付けて貰うように言っておくね。後、ファイアローを預けたかったんだ。頼んで良いかな？」

「もちろん！空も強いポケモンが管轄すると平和になるから嬉しいよ！」

俺とユウキの契約は、俺のポケモンを預ける代わりに、私有地のポ

ケモン達を統括して欲しいとの事だった。

ユウキの私有地のポケモン達は何故か、強いポケモンが集まってお
り、弱いポケモンでは統括することはおろか、袋だたきにされると言
う状況だ・・・

だが、ピカチユウが山の統括者になってからは、地上は平和になっ
たが、空の方は未だに平和的ではない・・・

そこで、飛行タイプであるファイアローをユウキに預け、空も統括
者として活躍出来るであろうファイアローを預ける事にしたのだ。

勿論、俺のポケモンなので手持ちに必要になったときは直ぐに引き
渡してくれると言う。

「じゃファイアローを頼むね」

「うん！ファイアローよろしくね！」

『よろしく頼む！』

俺はファイアローとファイアローのモンスターボールをユウキに
手渡し、預けた。

「じゃファイアロー。空の統括を頼むぞ」

『了解です！』

「頑張つてねファイアロー」

ユウキは俺をチラツツと見てから、

「バロン君？急ぎの用がないなら、今日は泊まっていけない？」

「凄く嬉しいんだけど、今、プラターヌが謎の穴に落ちてから行方が分
からなくて探している最中だから、また今度泊めて貰ってもいいかな
？」

「大丈夫だよ。頑張つて探してね」

「うん！」

俺は腰のモンスターボールからレックウザを出して、

「それじゃ！行ってきます！」

「行ってらっしゃい！」

「「お気を付けて」」

僕の専属女医さん達かな？

僕に頭を下げて、お見送りをしてくれた。

レックウザの上に乗るの何回目だろ？
そう考えている内にパルファム宮殿に着いた。
さあ！プラターヌを探すぞく！

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十三話

五十三話

『プラターヌよ。ディアルガとパルキアの事件だが……まさか、あんな解決法があったなんてな……』

『バロンだからこそ出来る解決法だと思うけど……』

プラターヌと擬人化したギラティナが反転世界で話していた。

擬人化のギラティナは、幼い子供の容姿で髪は黒だ。

反転世界は無重力になっていたので、浮いたりしてギラティナと少し遊んでいたら仲良くなってしまったのだ。

『ディアルガ達の件は片付いちやってるから、プラターヌもそろそろ戻るかい?』

「そうだね。戻ることにするよ。また今度ここに来させて貰ってもいいかな?」

『勿論だよ!じゃ、出口を造るから待っててね』

そう言うってからギラティナは擬人化を解き、ポケモンの姿へと変わった!

「いつ見ても擬人化って凄いと思うよ。ポケモンの時の姿と、擬人化の時の姿と大きさが違うからさ」

『まあ、人間に近づけるようになっている事だからな。擬人化状態だと技もろくに使えない』

そう。擬人化状態だとポケモンの技が殆ど使えないのだ!

『更に伝説ポケモンの中で擬人化状態で技が使えるのは、伝説級伝説ポケモン達。世界を作れる程の力を持つ者なら技は使える』

伝説級……

伝説ポケモンにも階級があるんだな……

ギラティナは作業をしながら更に説明してくれた。

伝説ポケモンの階級は主に……

初級

中級

上級

最上級

伝説級

☆神☆

こんな感じになっている。

ちなみにギラティナは最上級に位置づけられている。

ディアルガ・パルキアは、中級だと教えて貰ったが、あの2体で中級なら伝説級以上はどんな化け物なんだよ……

『プラターヌは知らないと思うが、この世界に【ミュウ】と言うポケモンがいる。このポケモンは伝説級の階級に入っているポケモンだ。

初級は伝説であり伝説では無いポケモン達……

たとえば……

【ルカリオ】・【ミカルゲ】この辺りだな』

ルカリオにミカルゲ……

確かに伝説では無いが、レア度で言えば伝説に近い……

『たぶん分かったと思うが、サンダー達は中級に入る。まあ、ディアルガと一緒にだと思ってくれ』

え!?

サンダー達って言えば……

カントー地方のポケモンで、サンダー・ファイヤー・フリーザーがいたはず。そのポケモン達は中級クラスなのか。なら、レックウザとデオキシスはどうなるんだ？

「ギラティナ。レックウザとデオキシス。いや。バロンのそのポケモンの階級はどれに入る?」

『バロンと言うのか。バロンの伝説ポケモンは階級こそ上級に入っているが、ステータスは伝説級だ』

上級の階級なのに、伝説級のステータス!?

2段飛ばしってバロンの伝説ポケモンは凄すぎだろ!?

「ついでに聞かせてもらうけど、バロンの白い龍。バロンは白龍と名を付けたあのポケモンの階級は何に入る?」

『僕も始めて見たけど、全てにおいて、伝説を上回る……僕もこの目で始めて見た。神級だ……』

神級!?

一番上の階級だって!?

じゃあ、バロンのポケモン達って本当にとんでもなく強いじゃん!

『バロンの伝説ポケモン以外のポケモンでも、ステータスだけなら僕を超えているよ・・・軽くシヨックを受けているよ』

目の前にいる伝説のステータスを上回るだって!?

しかも、伝説以外のって・・・

「じゃ、じゃあ・・・バロンのポケモン達は

白龍・・・☆神☆級☆

メイビス・・・伝説級

レックウザ・・・伝説級

ブリガロン・・・最上級

メタグロス・・・最上級

ゾロアーク・・・上級

これで合ってるか?」

『間違いない・・・普通ならあり得ないが、あのバロンと言うトレーナーのポケモン達は伝説の力と変わらない』

伝説と互角に戦える・・・

いや!

伝説を上回る強さを持っている・・・

何かカラクリがあるのか?

「僕の方で少し探しておくよ」

『頼む』

ギラティナはプラターヌを宮殿に送るために、安全なゲートを造っていてくれたみたいで、時間がかかったみたいだった。

『やっとゲート出来た〜! プラターヌ。どうぞ使ってね!』

「ありがとうね。じゃまたの機械に!」

プラターヌはそう言ってゲートに入って行った。

ゲートの中は真っ暗で何も見えない。

とりあえずまっすぐに歩き続けた。

5分程歩いていると、前方に光が見えた!

その光の方に歩いて行くと、ゲートを抜けた！

辿り着いた場所はパルファム宮殿の噴水の裏だった！

振り返ると、そこにはもうゲートは消えていた……

「ギラティナ……ありがとうな」

プラターヌはパルファム宮殿の方へと歩き出した。

場所的には噴水から1km離れた所にパルファム宮殿がある。

結構広くて歩き疲れるんだよ。ここの宮殿は……

暫く宮殿の方へと歩いていたら僕を呼ぶ声が聞こえた。

だけど、辺りを見渡しても声の主は見つからない……

「プラターヌ〜！上だよ〜！」

上？

プラターヌは顔を上に向けた。

「やっと気付いた〜プラターヌどこに行ってたんだよ」

「すまないね。穴に落ちてから色々あってね……」

プラターヌは少し困った様な顔をしてから笑顔に変わった。

「ただいまバロン〜！」

「おかえりプラターヌ！」

俺達は無事に会合うことが出来た。

「よし！じゃあ旅を続けよう〜！」

「それなんだけど……僕はこの村までの同行で、この後は用事でついて行けないんだ」

プラターヌは申し訳なさそうに言い、頭を下げた。

「大丈夫だよ。ここまで一緒に来てくれてありがとう！」

「こちらこそありがとう。また会える日まで元気にね！」

「うん〜！」

！
プラターヌはボーマンダをモンスターボールから出し、飛び立った

久しぶりの1人旅の再開だ。

次の目的地は……コウジンタウンだ！

とりあえず、地つなぎの洞穴（ほらあな）に向かおう！

俺はパルファム宮殿を出発して7番道路に出た。

そこから地つなぎの洞穴に行けるからだ。
何も問題無く行ければいいが・・・

コウジンタウン編

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十四話

五十四話

俺はやはりトラブルメーカーなのか・・・

通り道にカビゴンが寝ていて、道行く人達は立ち往生していた。

「なんでこんな所にカビゴンが寝ているんだよ！」

「本当面倒な所で寝てくれちゃって！」

「バトルして起こしちゃおう？」

トレーナーはモンスターボールを取り出してそう言った。

俺はとりあえず見ておくか。

すると、他のトレーナー達もそうだなと言い、皆モンスターボールを持った。

「行け！グラエナ！」

「行け！ドラピオン！」

「行け！ヘルガー！」

オレンジ色の服の連中がポケモンを出した！

カビゴンは寝ている最中に、偶然だと思いが技【寝言】を発動した！

※寝言※【ノーマル】

寝ている時のみ使用可能。

自分の覚えている技をランダムで使用する。

カビゴンは寝言で破壊光線を放って来た！

オレンジ色の服の連中のポケモン達は咄嗟の攻撃で反応が遅れ、破壊光線を受けた！

その攻撃で大きく飛ばされ地面に叩き付けられた！

ポケモン達はそのまま戦闘不能に・・・

「なに!?」

俺はオレンジ色の服の連中のポケモン達のレベルを見た。

グラエナ・ドラピオン・ヘルガーのレベルはそれぞれLV50と高

いが、野生のカビゴンのレベルを見ると。

カビゴンLV80となっていた。しかもカビゴンの大きさが普通のと違い大型のカビゴンだったのだ！

通常の大きさは2.1mだが、このカビゴンの大きさは5mだ！
大きさが違うとHPの量も比較的に上がる！

このカビゴンを倒すにも退かすにも、並大抵のポケモンの力じゃ何も出来ない……

「くそ！我々フレア団がこの様なポケモンに負けるだど！」

「こうなったら……」

何をするつもりだ？

「撤退だ〜！」

「「おう〜！」」

え？

フレア団は撤退と言ってから直ぐに引き返して行き、俺1人になってしまった……

カビゴンはまだ寝ているが、ここを通りたい人もいるはずだし退かしておくか。

「出てこいメイビス！」

『は〜い！』

「サイコキネシスでカビゴンを隣の大きな木の下に退かしてくれないか？」

『分かりました！』

メイビスは両手をカビゴンに向けて、サイコキネシスを発動した。するとカビゴンの巨体が浮き、大きな木の下に移動した。そのままサイコキネシスで静かに降ろしてあげ、技を解除した。

カビゴンを見るとスヤスヤと眠っているので、問題なさそうだ。

「ありがとうメイビス。助かったよ」

『マスターの為なら何でもしますよ♪』

メイビスはピースをして笑った。

もちろんデオキシス状態で……

出来れば擬人化でして欲しかった……

俺はメイビスにお礼を言ってからモンスターボールに戻して、地つなぎの洞穴に向かった。

その光景を木の陰から除く者がいたのをバロンはまだ知らない。

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十五話

五十五話

地つなぎの洞穴・・・

4つの出口があり、バロンが通って来た7番道路、それとは違う場所の7番道路に通じる道、8番道路へと続く道、シヨウヨウシティへと続く道がある。

道と言っても洞穴で、ちゃんとした道は無い・・・

シヨウヨウシティともう1つの7番道路へと続く道の所には大きな岩があり、今は通ることが出来ない。

よって、バロンが通ることが出来るのは8番道路へと行く道だけだ。

バロンもこの事はプラターヌから聞いていたので、コウジンタウンに行くことにしたのだ。

「この洞穴、見た目以上に長いんだな・・・天井がズバットだらけだ・・・」

※ズバット※【毒・飛行】

コウモリみたいなポケモンで洞窟を住処にしているポケモン。

「一掃しようと思えば俺のポケモンで出来るけど、生態系を崩すのは良くないか。襲って来たら倒していくでいいか」

バロンはつい独り言を言ってしまう、やってしまったなと思ってしまうた。

そのまま洞穴へと入って行くと少し暗くなったので白龍を出した。

「白龍、すまないが少し照らしてくれないか？」

『了解した。ミニ光球』

※ミニ光球※【電気】

小さな光の球体。

周りを照らすぐらいしか出来ない。

白龍はそのミニ光球をバロンの周りに2個浮かばせ、白龍はどこでも完璧に目が見えるから大丈夫だと自分には付けなかった。

『マスター？少し先の曲がり角に大きな岩があるが、砕こうか？』

「うーん。今回はいいや。このまままっすぐ進むね」

『了解した』

白龍はバロンの後ろに下がり、一緒に行動した。

「いや、頼もしい相棒と洞穴で探検かく安心するな〜」

『そう言っただけ頂けると嬉しいです』

「白龍。そろそろ友達みたいに喋ってよ〜」

『分かった』

その後、洞穴の中間地点ぐらまで行った時、天井にいたズバット達が襲って来た！

凶鑑で先に見ておいたズバット達のレベルはLV20と弱かった・・・

「白龍、バリアだけ張ってくれる？攻撃はしなくていいから」

『わかった。バリア展開！』

白龍はバリアを張ると、技の効果で防御力が格段に上がった。今は防御が上がっても意味がないが・・・

ズバット達はバリアを攻撃しまくるが、攻撃が通じることが無いので、攻撃をするだけ無駄だ。

それでもズバット達は諦めずに攻撃するので、白龍が俺に聞いてきた。

『マスター。こんなに諦めずに攻撃してきているので、もう楽にしてあげたいのですが』

「確かに。よし、楽にしてやれ」

『ありがとうございます。技、神速を発動！』

白龍は声を出し、神速を使った。

その瞬間、バリアを攻撃していたズバット達が一斉に地面に落ちた！

白龍が物凄い速さで攻撃しているのでズバットでは反撃すら出来ないのだ！

俺はそのまま8番道路の出口を目指して歩いた。

『ちよ!?マスター！おいてかないてくださいよ〜！』

白龍がこんな感じで言ってきた時は驚いてしまった・・・

だって、いつもの白龍は爺さんみたいな言い方だからさ。

「すまんすまん。白龍なら絶対に追いつくと思って」
『いや。まあ。追いつくけど!』

白龍は凄く楽しそうだな。

こんな会話が出来て俺も楽しいけど。

『とりあえずズバット達は片付けた。もうじき出口だな』

「ああ。これで出られる」

正直、洞窟とか洞穴は嫌いなんだ。

とりあえず出口の光は見えて来たので、安心だ。

ところが!

急に地面が揺れて、8番道路に続く出口が今の揺れで岩が落ちてきて、出口が塞がってしまった!

俺は白龍にバリアを張って貰い俺達は助かった。

7番道路の方の入り口も今の揺れで岩が落ちて来て塞がっていた

!

両出口は塞がってしまったが、俺は落ち着いていた。

白龍がいたから・・・

「白龍。この岩、破壊してくれる?」

『もちろん!マスターにバリアは張っておくけど、念のために下がって』

「うん」

白龍は拳に力を溜めた。

『我が技を食らえ!気合いパンチ!』

※気合いパンチ※【格闘】

気合いを溜めてから攻撃する後攻技。

溜めている最中に攻撃されると技が失敗する。

威力は150と格闘技の最上級技。

白龍は気合いパンチで正面の落ちてきたて岩を殴った。

岩は白龍の技で木っ端微塵に砕け散り、砂と化した。

その衝撃で洞穴が崩れるかと思っただが、流石は白龍だ。絶妙な力加減で崩壊をしない程度で攻撃したのだ。

『マスター。7番道路の瓦礫も撤去しますか?』

「頼んで良いか？」

『勿論です！』

白龍は技、神速を使い7番道路出口に瞬時に向かい、気合いパンチで岩を木っ端微塵にした。

俺は8番道路側の出口付近のいたのだが、白龍の瓦礫を攻撃する技の音だけが聞こえ、それ以外は音が聞こえなかったのだ。

白龍の攻撃は力加減が絶妙で、洞穴を崩壊させることは皆無に等しいと思った。

音が聞こえた音、白龍は俺の隣にいた。

『戻りました。瓦礫撤去お終いです』

「急に隣に現れるから心臓が止まりそうだよ！」

だって7番道路出入り口から8番道路の出入り口まで結構距離があり、音が聞こえ終わった後、少し経つてから戻って来ると思っていたら、音が聞こえた後、もう隣に白龍がいるんだもん！

びっくりするよね!？」

『すまなかった・・・待たせるのも悪いと思ひ神速で帰って来た』

「その気持ちは嬉しいけど。とりあえず出口に行こうか」

『はい』

俺と白龍は8番道路の出口に向かった。

7番出入り口と8番出入り口の間の大岩で通行不可の場所に、バロンを見る影がいた。

「ちっかなかややるな・・・ゴルグありがとう。戻って良いよ」

ゴルグはその黒い影のモンスターボールへと戻っていった。

その声が聞こえなくなった時にはもう、その影はいなくなっていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十六話

五十六話

俺達はどうとう地つなぎの洞穴の出口に辿り着いた。

出口から入り込む光が凄く眩しい。

俺と白龍は互いの顔を見て頷き、1歩前へ歩いた。

そこはもう地つなぎの洞穴ではない。

明るい太陽の光が照らされる場所、8番道路に出たのだ！

「やつと出られたね。ここが8番道路。もう少しでコウジンタウンだ！」

『お疲れ様マスター』

8番道路。又の名を、ミュライユ海岸。

ここは海岸側と崖側と別れており、地つなぎの洞穴から行ける道は崖側。海岸側はシヨウヨウシテイへ行ける砂浜になっている。

「うくん！気持ちいい風だ！」

『そうだな！よし！我は擬人化になる』

「ちよ!?それはまずいでしょ!？」

『む?忘れていた・・・仕方が無い。このままでいるか』

白龍は凄く残念そうに言った。

コウジンタウンに行く道は地つなぎの洞穴からは下り坂になっているので、下りは楽だった。

ミュライユ海岸の中間地点まで行くと、デカイ崖があり、向こう岸に渡るには迂回するか、空を飛ぶポケモンの力を借りるかで渡ることになる。

「その君〜！僕とバトルしないか？」

急に声を掛けてきたのは、崖の上から見下ろす若い男の子だった。

「いいぜ！出番だ白龍！」

「行け！オオスバメ！」

※オオスバメ※【ノーマル・飛行】

スバメの進化形。

素早さが高く、攻撃力もそこそこある。

空中戦

☆白龍VSオオスバメ☆

「オオスバメ、エアスラッシュー！」

「白龍、バリアー！」

オオスバメが攻撃を放つ前に白龍は片手でバリアを展開した。

オオスバメの攻撃はその後に来たが、全てバリアに排除され、白龍に攻撃は当たらなかった。

「白龍、雷パンチー！」

※雷パンチ※【電気】

手に雷を纏わせ相手を攻撃する。

威力は75と少し低い。

白龍は迸る雷をもう片方の手に纏わせ、神速の速さでオオスバメの懐に潜り込んだ！

『チェックメイトだ！雷パンチー！』

『!?』

オオスバメの姿が消えた・・・

いや、正確には消えてはいない。

バロンは空を見上げた。そこには白龍がオオスバメを雷パンチで仕留めている姿があった。

白龍は雷パンチをオオスバメに当てながら飛んで行ったのだ。

オオスバメは白龍の攻撃を受けて戦闘不能になった。

「この勝負俺の勝ちだな」

「この俺のポケモンが負けた。悔しいが負けは負けだ。次は勝つからからー！」

そのトレーナーはオオスバメをモンスターボールに戻して走り去ってしまった。

「お疲れ様白龍。ついでに俺を向こう岸まで送ってくれないか？」

『勿論！』

白龍は俺にサイコネシスを使い向こう岸まで運んでくれた。

その時に崖下を見たのだが、底が暗くてどうなっているか全く分からなかった。

「白龍はこの崖下は見れる？」

『いや。俺でも下までは見れない。特殊な結界が張つてあるのは確かだが・・・』

特殊な結界・・・

まさか伝説ポケモンがこんな所にいるなんて事はないよね？

「白龍。この下に伝説ポケモンはいるかな？」

『伝説の力は感じないな』

伝説ポケモンじゃないのか。少し残念だがこのままコウジンタウンに行くか。

「向こう岸までこのまま頼むね」

『任せろ！』

白龍はしっかりと技を維持しながら俺を向こう岸まで運んでくれた。

「助かったよ白龍。お疲れ様」

『役にたてたなら良い』

白龍はそう言うと言とモンスターボールに戻ってしまった。

相当疲れたみたいだ・・・

この崖、見た目以上に距離があつたのだ。

その距離は10 km・・・

下の結界のせいなのかは知らないが、見た目以上に距離が長すぎる！

普通のポケモンじゃギリギリの距離だぞ・・・

とりあえず俺は向こう岸、コウジンタウン側に渡れたので歩き出した。

地つなぎの洞穴側の崖付近に黒い影がそれを見ていた。

「しぶとい。あの距離を渡りきるなどあり得ないはず」

黒い影は再び姿を消した・・・

Baronはとうとう、8番道路のミュライユ海岸（崖）からコウジンタウンに入るゲート前に着いたのだが・・・

ゲートが壊されている。

8番道路からコウジンタウンに行くにはこの道しか無く、崖下の砂浜の所に飛び降りたら普通に死ぬ・・・

とりあえずゲートを直すか・・・

バロンは腰のモンスターボールからメイビスと白龍を出そうとしたが、さつきまで崖を渡るために力を使わせてしまって、ゲートを造るなんて厳しすぎると思い、俺は腰のモンスターボールから白龍以外を出した。

「出てこいみんな！この壊れたゲートを修理しよう！」

『『『おおくー！』』』

俺達は早速壊れたゲートの撤去を始めた。

まずは、ブリガロンが瓦礫系統を全て粉碎。

レックウザとゾロアークは使えそうな木材や岩を持って来てもらった。

メタグロスはサイコネシスで重たい物とかを運ぶ手伝いをしてもらった。

メイビスは造形に関してはプロなので、全て任せてしまった。

俺は細かな部分を手伝った。

俺達がゲートを造る作業をしていたら、コウジンタウンの大工さん達や町の人達やこの道を通ろうとしたポケモントレーナー達がみんな手伝ってくれた。

みんなのおかげで半日でコウジンタウンに繋がるゲートが完成した！

「やっと完成した〜！皆さん手伝って頂き本当にありがとうございます！すす！」

「こちらこそありがとうございます！誰かが行動しないと解決しないからね。本当にありがとうございますバロン君」

コウジンタウンの町長であるゲンブがそう言った。

「これでやっと通れるぞ〜！」

「私はもうヘトヘトよ〜」

町の人もポケモントレーナーも皆、今日の作業で疲れ果ててしまっ

ていた。

俺も正直、だいぶ疲れた。

「皆さん。今日はお疲れ様です！町長である私の家でおくつろぎ下さい。晩ご飯と寝床はこちらでお出しますので」

「「やった〜！ありがとう町長さん！」」

太陽はもう沈んでおり、月が出てる時間、僕達はみんな町長のお屋敷に行き、晩ご飯をこちそうになった。

その後は各自、自分達の部屋を用意されており、皆それぞれの部屋に行き、就寝した。

今日は随分と疲れた。

いつも白龍達に助けて貰っているから、怠けていたな。

もつと鍛錬をしないとイケないや。

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十七話

五十七話

翌朝、俺は町長のゲンブさんにお礼を言いに行くため、ゲンブさんの部屋に行った。

「失礼します」

俺はそう言いそのまま部屋に入っていった。

「ん？バロン君じゃないか。どうしたのかな？」

「これからまた旅に出るので止めて頂いたお礼を言いに来ました」

俺は頭を下げ、お礼の言葉を言おうとしたとき、

「ちよつと待った！お礼を言うのはワシの方じゃ！」

ゲンブさんは直ぐに俺の方へ駆け寄った。

「お礼の品を渡したい。着いてきてくれないか？」

「頂いてもいいんですか？」

「勿論じゃ！さき、来て下さい」

ゲンブさんの部屋には隠し扉があり、その隠し扉に入って行くときまた扉があった。

「この扉の先は長い階段なんじゃ。出て来てくれランクルス・ゴチルゼル」

ゲンブさんはモンスターボールから2体のポケモンを出した。

※言い忘れてましたが、ゲンブさんは高齢のおじいさんで白い髭を生やしています。

俺はついポケモン図鑑でステータスを見てしまった。

ランクルス

LV125

特性 シンクロ

ゴチルゼル

LV125

特性 プレッツシャー

え？

この特性は普通じゃありえない！

隠れ特性なのか？

幸いゲンブさんにまだポケモン図鑑で見られている事は気付いていなかったみたいで直ぐに図鑑を鞆に直した。

「ランクルスにゴチルゼル。ワシとバロン君をサイコネシスで地下まで運んでおくれ」

『かしこまりました』

ランクルスとゴチルゼルはサイコネシスを使い、ゲンブさんと俺を浮かせ、地下の狭い階段を降りて行った。

暫くこの状態が続き、眠たいと思い始めたとき、急に開けた場所に出た！

そこには、壁画があり、角の生えた虹色のポケモン。翼が生えている黒と赤が特徴のポケモンがそこには描かれていた。

「この壁画をバロン君に見せたかったの。この描かれているのはポケモン。この地に眠る伝説のポケモンなのじゃ・・・【ゼルネアス】と【イベルタル】この2体の事を伝えておきたかったのじゃ」

「この地に眠る伝説のポケモン・・・」

※ゼルネアス※【妖精】

永遠の命を分け与えると言われている。

樹木の姿で1000年眠り復活する。

伝説の位では、上級になる。

※イベルタル※【悪・飛行】

寿命が尽きるとき、あらゆる生き物の命を吸い尽くし、繭の姿に戻るといふ。

伝説の位では、上級になる。

ゲンブさんから伝説ポケモンの話しを聞き、ゼルネアスは優しい事は解ったが、イベルタルは復活するところでもない事が分かった。

だけど、誰もそんなポケモンを復活させるとは思わない・・・

「この話しをしたくてのお。話しを聞いてくれた代わりにお礼を渡すのお」

こんなレアな壁画を見せて貰い、更に伝説ポケモンについても分かって満足してるが。更にお礼が貰える？

何かあるのか？

「お礼を貰う前に聞いて良いですか？」

「良いがどうせ、なんでこんなにしてくれとかじゃろう？」

「はい」

ゲンブさん。鋭い・・・

「ワシの命はもう長く無いんじやよ・・・だが、ワシの遺産は変な輩に渡ると、大きく言えばこの世界に悪影響が起こるのじや・・・それで、ワシの遺産相続をバロン君にしたいのじや」

「俺が遺産を相続ですか!？」

「頼む！ワシには孫もいない。赤の他人に渡るのは絶対に嫌なのじや！それに・・・」

ゲンブさんはランクルスとゴチルゼルを見た。

ああ・・・

特殊なポケモンで、研究者に渡ると何をされるか分からないって感じだな。

俺の白龍も、それ以外の俺のポケモン達も、通常とは少し違うからな・・・

気持ちが分かる。遺産相続も悪い話しではないし・・・

「遺産相続の件。了解しました。ゲンブさんのポケモンは少し特殊なのは、見た時にわかりました」

まあ、見た時と言っても凶鑑を見たときだが・・・

「やはり分かっておられましたか。ですが、バロン君にならこの子達を任せられると思い、頼まれてくれないだろうか？」

「勿論大丈夫ですよ」

ゲンブさんは凄く嬉しそうにしてくれて、目に涙が零れそうになっていた。

「すまないが頼むよ。後、この笛をバロン君に」

ゲンブさんは壁画の直ぐ側に置かれていた笛を俺に手渡した。

「これは？」

「無限の笛じや。この笛は、かつてワシと戦ってくれていたポケモンがいるんじや」

ゲンブさんと共に戦っていたポケモンって事は相当強いな・・・
ランクルスにゴチルゼルはこうなることが分かっていたのか、静かに見守っている。

※無限の笛※

あるポケモンを呼ぶ笛。

(今は伏せておきます)

ゲンブさんは満足そうに笑うと、ゲンブさんの体から光の粒子が出て来た！

「ゲンブさん!？」

「ワシは満足じゃ。無事に遺産も相続出来た。ワシのポケモンも任せられる。すまないが後の事、頼むぞ」

「うん！わかった！元気で！」

ゲンブさんから出ていた光の粒子は完全に消えた・・・

そこには、バロンとゲンブさんのランクルスとゴチルゼルだけしかいなかった。

ランクルスとゴチルゼルのモンスターボールはゲンブさんの部屋に置いてあった。

更に遺産相続の名前の所に俺の名前が書かれていた。

相続されるもの

ゲンブの屋敷

ゲンブのポケモン達

ゲンブの全財産

コウジンタウン

コウジンタウン!?

この町を貰えるの!?

ゴチルゼルとランクルスは俺が紙を見て驚いているのを見ていたが、この町の事だと直ぐに分かったみたいで頷いてくれた。

「とりあえず、これからよろしくなランクルス、ゴチルゼル」

『よろしくお願いします』

とりあえずこの長い階段を登るのは流石にキツイから、助けを借りるか。

『バロン様。私はテレポートの技を使えるのでバロン様のお部屋にお送りします』

「ありがとうございます。頼むね」

ゴチルゼルは俺とランクルスの手を掴み、テレポートした。

転移先は先ほど言ったバロンの部屋。

テレポートが終わると、ゲンブさんの部屋に到着していた。

『ここが今日からバロン様のお部屋になりますので、ここにテレポートしました』

「なるほどね。ありがとうございます！コウジンタウンのみんなに挨拶はしないといけないね」

ゴチルゼルとランクルスは頷き、俺達はコウジンタウンのみんなに挨拶をしに行った。

その後、気になっていた無限の笛を屋敷の屋上に行って、鳴らしてみた。

ピーー！

その音が鳴った後、空から伝説のポケモン【ラティオス】と【ラティアス】が舞い降りてきた！

※ラティオス※【龍・エスパー】

高い知能を持ち、人間の言葉を理解する。

争いを嫌う優しいポケモンだ。

伝説の位では、上級になる。

※ラティアス※【龍・エスパー】

テレパシーで気持ちを通わせる。

光を屈折させる羽毛で体を包み姿を消す。

伝説の位では、上級になる。

「2体の、伝説ポケモン・・・」

『私達を呼んだのは貴方ね？』

「うん」

『その笛、ゲンブは逝ったのか・・・』

ラティオスは悲しそうに言ったが、直ぐに明るく振る舞うように言った。

『貴公が新たな主人になるんだな?』

「ああ。今日から俺がゲンブさんのポケモン達の主人に代わるから、よろしく頼む!」

『よろしくね。新しい主人様』

「とりあえず、ゲンブさん達のポケモン達にも挨拶をしておきたくて、案内頼めないかな?」

『勿論! 貴方はお兄さんに乗ってね。ゴチルゼルとランクルスは私に乗って』

俺はラティアスに言われた通り、ラティオスに乗せて貰い、ゴチルゼル達はラティアスに乗った。

そして、俺達は飛び立った。

一方・・・

コウジタウンの屋敷付近の木から黒い影がバロン達を見ていた。「まさか、あの爺さんの跡取りがバロンになるとわ。ちっ! 面倒くさい事になりそうだ」

その言葉を残し、黒い影は消えて行くように、その場から完全に消えた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十八話

五十八話

ラティアス達に連れられてきた場所・・・

世界一美しいといわれる水の都「アルマトーレ」にやってきた。見た目はイタリアのベネチアみたいな感じだった。

アルマトーレには、擬人化したポケモン達や、ポケモンの状態で遊んでいたりするポケモンもいた。

「ここがアルマトーレ・・・美しい街だな」

『ありがとう♪ここは昔、人も住んでいたんだけど、ある事件以来、人はここに来なくなつて、私達だけの街になつたんだ』

人も住んでいたのか。それで町並みや時計塔とかもあるんだな。

『このポケモン達はみんなゲンブ爺さんのポケモンなんだよ♪』
「凄い・・・まさかこんなにポケモンを持っているなんて・・・」

ゲンブさんはカントー地方から旅をしていたらしく、ジョウト・ホウエン・シンオウ・イツシユ・カロス地方と全ての地方に訪れ、そのポケモン達を全て手に入れていたと言う。

更には、ゲンブさんはその地方の伝説ポケモンとも仲が良く、一緒に旅に行きたいと言われていたらしい。

ゴチルゼルとランクルスはイツシユ地方からずっと旅に同行していると教えてくれた。

他のポケモン達はこの街、アルマトーレが気に入り、各地方のポケモン達と仲良くここで暮らしている。

俺はアルマトーレにいるポケモン達に挨拶をしに行った。

その時に、ポケモン図鑑に情報を登録させて貰った。

この街には、各地方の伝説ポケモン達が現役を退いてここで暮らしている事も教えて貰った。

海をよく見るとカイオーガや、マナフィ、ルギアなど様々な伝説ポケモンがいた。

アルマトーレは最初は小さな都だったのだが、伝説ポケモンが都を大きくしていき、全てのポケモンが生活出来るように拡張したので、

アルマトールは凄く大きな街になったのだ。

「本当に凄いなあ〜」

『でしょ♪みんなゲンブ爺さんの事が大好きなんだ。そのゲンブ爺さんに認められた貴方の力を試したいんだけど良いかな?』

やっぱり、力は試されるよね。

ここは俺の相棒に頑張ってもらおうか。

「勿論だぜ!誰が俺の相手をするんだ?」

『我が相手をする』

上空からダーククライが舞い降りてきた!

※ダーククライ※【悪】

人々を深い眠りに誘い夢を見せる能力を持つ。

新月の夜に活動する。

伝説の位では、伝説級になる。

今はまだ昼なのに何で活動出来るの!?

「ダーククライだよね?」

『そうだが?』

「何で昼間に活動出来るの?」

『勿論鍛えたからだ』

あ・・・

納得した。

『ここでバトルすると美しいこの街が汚れる。専用のフィールドに案内しよう』

「よろしく頼む」

ラティオスがそう言い、俺を再び運んでくれた。

着いた場所は、山・・・

しかも、この山、頂上付近は猛吹雪で視界が最悪な所だ。

頂上には行きたくないな・・・

『ここで大丈夫だろう。貴方の戦うポケモンは?』

「出てこい!白龍!」

『マスターと我の絆の強さ、ご覧に入れよう』

「最初からクライマックスだ!シンクロ進化!」

白龍はシンクロ進化して、メガ白龍になった！

『なかなか面白い進化をする』

俺はバトルが始まる前に聞いておきたかった事があった。

「ダークライ。1つ聞いて良いか？」

『ん？なんだ』

「レベルを教えてくださいませんか？」

『別にかまわないが？私のレベルは300』

300!?

え!?

嘘でしょ!?

俺のポケモンの最高レベルは150・・・

倍じゃないか！

『落ち着いてマスター。我にはマスターのおかげで通常とは違う育てられ方をした。そう簡単にはやられないだろ？』

「そうだな。ありがとう。ダークライ待たせたな。バトルしようじゃないか！」

アルマトーレ戦

☆白龍VSダークライ☆

「白龍！天空の聖域！」

※天空の聖域※【神】

神タイプの専用技。聖域を発生させ、神タイプの技の威力を4倍にする。

神タイプ以外は、濃い霧に覆われ目の前から1mしか見れなくなる。天空の聖域の効果でバトル場が白い濃い霧に包まれた！

『なるほど。ならば私も神タイプを付けるか・・・真・進化！』

ダークライの体から黒い煙が流れ出し、その煙がダークライを包み込んだ！

ダークライの体は大きくなり・・・

細かった体は逞しい体つきに・・・

腕は筋力が溢れだし腕から突起物が後ろの方へと伸びている・・・顔の前に金色のV型の形をしたのが後ろに伸びた・・・

真ダーククライだ・・・

真ダーククライ【悪・神】

特性ナイトメア↓悪魔の力・ナイトメア

※悪魔の力※

攻撃技が悪タイプになり、悪タイプの攻撃力は3倍になる。

※ナイトメア※

相手が眠り状態の時、相手のHPを徐々に減らす。

『この姿が我の本当の姿。真ダーククライだ』

真ダーククライ!?

凶鑑にも全く情報が無いぞ！

「だけど！俺の白龍なら負けるはずがない！白龍！ギガブレイド！」
『オラ〜！』

白龍のギガブレイドは天空の聖域の効果で攻撃力が4倍！

更に技の範囲も4倍に膨れあがった！

『忘れていないか？天空の聖域は神タイプを強化するのだから？ダークネスサンダー！』

※ダークネスサンダー※【悪・雷】

暗黒の雷を放つ。当たれば相手は麻痺する。

威力は雷級最大の200。

「違うな。神タイプの技を強化するのだよ」

『教えてくれるのだな』

「まあね。白龍！やってしまえ！」

白龍はギガブレイドを思い切り振り払った！

その軌道先には真ダーククライが放ったダークネスサンダーが放たれていたが跡形も無く消し去り、そのまま真ダーククライを攻撃した！

『この程度の攻撃か・・・』

ギガブレイドは真ダーククライには当たったが、そこで止まった。

よく見ると真ダーククライの手にギガブレイドが握られている・・・

『壊してやるか』

真ダーククライはそのまま力を入れ、ギガブレイドを粉々に砕いた！
「なに!?」

『なんだと!』

ギガブレイドを素手で、更に粉々に砕くなんて・・・
だけど!

「これならどうだ!白龍!神の槍(ゲイボルグ)！」

※ゲイボルグ※【神】

通称【神の槍】 威力200

この作品の時、様々な能力がある。

- ①相手のメガ進化・シンクロ進化を解除させる。【青】
 - ②相手のステータスを極限まで下げる。【緑】
 - ③一撃必殺。相手を戦闘不能にさせる。【赤】
 - ④これは、禁忌となっている・・・即死攻撃【黒】
- 白龍は片手を空に向け、ゲイボルグ【赤】を形成し、放った!
ゲイボルグはまっすぐに真ダーククライに向かって行った!

攻撃力が通常で200もあるのに、天空の領域の効果で攻撃力が4
倍の800・・・

『ゲイボルグか・・・真・爆裂拳!』

※真・爆裂拳※【格闘】

両手から最大級の格闘技を放つ。

当たれば相手を混乱状態にさせる。

威力は300!

真ダーククライの両手から赤い光が輝きだした!

その両手を後ろに下げ、腰を少し落とし、片足を後ろに引いた・・・

『発射!』

真ダーククライがそう言った瞬間!

後ろに下げていた両手を勢いよく前に振り出し、真・爆裂拳を放つ
た!

真・爆裂拳はゲイボルグに向かって行き、ぶつかり合った!

ゲイボルグは真・爆裂拳の技に当たると、【赤】の効果が発動した!

相手を一撃必殺にする効果は真・爆裂拳を相殺した。

『相殺か・・・押し返せると思ったのだが、追加効果があるとはな・・・』
追加効果が無ければ危なかった・・・
完全に押し返される所だったからだ。

『ならば、お前達が攻撃する前に攻撃するだけだ』

真ダークライの体から禍々しいオーラが包み込む。

「どうなっているんだ・・・」

真ダークライを包み込んだオーラは右手に全て収縮された・・・
攻撃が来ると思った瞬間！

真ダークライが目の前から消えた！

『どこを見ている？暗黒拳』

※暗黒拳※【悪・神】

暗黒界の力を使い相手を攻撃する。

相手に当たれば、相手は暗黒化・・・悪魔になる。

威力は300。

更に、今回は天空の聖域の効果で威力が4倍！攻撃力は1200だ
！

真ダークライは技、神速を使わず瞬時に白龍の背後に回ったのだ！

『闇に落ちろ・・・』

真ダークライは暗黒拳で白龍の背後から思いっきり殴りつけた！

『グガガガアアア』

『白龍!』

白龍は凄い速さで地面に落下した！

『グハッ!』

更に暗黒拳の追加効果が発揮された！

背中に暗黒拳が当たった場所から、禍々しいオーラが発生！

それは白龍を包み込む・・・

「止めろ！止めろ〜！」

禍々しいオーラが白龍を全て包み込んだ瞬間・・・

白龍の白い体は黒に染まり、優しいかった碧の瞳は怒りの赤に変
わった。

禍々しいオーラは白龍の体に全て吸収され、オーラが消えた時には

もう・・・

そこに白い龍はいなかった。

いたのは黒い龍・・・

『暗黒龍よ。我に従え』

『命令するな』

暗黒龍は口から黒い光線を真ダークライに放った！

真ダークライは咄嗟に守るを使い、技を防いだ筈だったが・・・

『なに!?守るが!』

黒い光線は守るを貫通し、真ダークライを攻撃した！

真ダークライのメガ進化が解け、元の状態に戻り、地面に落下した。

『我は暗黒神・・・我はこの世界を暗黒に染める。我の邪魔をする者、消す』

暗黒龍とダークライは言っていたが、本当の名前は暗黒神・・・

暗黒界の神だったのだ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 五十九話

五十九話

暗黒神になつてしまった白龍……

「白龍だよな？ そうだよな!？」

『誰だそれは？ お前を消すか。滅びろ』

暗黒神は右手を空に翳し、ゲイボルグ【黒】を形成し、俺に向け放つて来た！

『バロン！俺に乗れ！』

ラティオスが俺の直ぐ隣に来てくれて、直ぐに乗った。

ラティオスはメガ進化して、直ぐに飛び立った瞬間！

俺がいた場所をゲイボルグが通り過ぎ、大爆発した！

そこには大きな穴が開き、底が見えない……

『バロン……ここから離脱する！街のポケモン達は皆、伝説ポケモン達がそれぞれ逃がしてくれた!』

「了解……」

『我が逃がすとも?』

暗黒神から特大級の暗黒の球体を出して来た！

『消え去れ』

『そうはさせませんよ』

空からアルセウスが舞い降りた！

※アルセウス※【ノーマル】

宇宙がまだ無い頃に最初に生まれたポケモンと神話の中で語られている。

伝説の位では、☆神☆級☆

だけど、あの球体をどうするつもりだろう？

『掻き消しなさい。ムーンフォース!』

アルセウスから暗黒の球体に向け、ムーンフォースが放たれた！

暗黒神も球体を発射し、ムーンフォースとぶつかり合ったが、ムーンフォースは暗黒の球体を消し去り、そのまま暗黒神を攻撃した！

『なんだと!?!』

『この世界はレベル制なので、レベルが高いほど強い。私のレベルは1000。貴方に私は倒せない』

レベル1000!?

もう限界レベルじゃないか！

(この小説の限界レベルは1000の設定です)

『貴方を先に元に戻さないといけないですね』

アルセウスはそう言うと、暗黒神に向け、13色のプレートを展開し、暗黒神の周りで輝きだした！

光は辺り一面を覆い尽くし、ラティオスも飛ぶのを止めた。前が見えないと危険だからだ。

『グガアア〜！』

暗黒神は雄叫びを上げた後、体から禍々しいオーラが出ていく！

辺り一面の眩しい光が収まると、暗黒神だった者は白い龍に変わっており、地面に横たわっていた。

『元に戻って良かった。白龍よ。もっと鍛錬して己を磨きなさい』

アルセウスはそう言い、空へと戻って行った。

ラティオスは直ぐに白龍の方へと近寄ってくれて、俺を降ろしてくれた。

「白龍。大丈夫か？」

『今は声をかけてもダメだ。意識を失っている。モンスターボールに入れてあげなさい』

「はい」

俺は白龍をモンスターボールに戻して、もう一度ラティオスを見た。

「ラティオス。ありがとうな」

『ああ。街のポケモン達も戻って来たみたいだぞ』

様々な方角から伝説ポケモン達がポケモン達を誘導しながらアルマトーレに戻って来た。

数分しないうちにアルマトーレのポケモンは元のように賑わった。

ダークライとの戦闘場所からアルマトーレまで、実は5kmしか離れていなく、街まで戦闘の被害を少しだが、受けていたのだ・・・

白龍を暗黒神にしたダーククライはあの黒い光線により戦闘不能状態である山に横たわっていたが、命に別状は無く、喋れる様になつてから暗黒神にしてしまった事を凄く謝ってくれた。

更に、白龍の力を認め、アルマトーレのポケモン達も歓迎してくれた。

アルマトーレのポケモン達は四天王と呼ばれるそれぞれ凄く強いポケモンが管理していると教えてくれた。

四天王第一席・ダーククライ

四天王第二席・ゲノセクト

四天王第三席・ボルケニオン

四天王第四席・ディアンシー

四天王統括者・アルセウス

アルセウスは今回みたいなデカイバトルやポケモン達に危険が及ぶ場合に、止めに来る。

本当なら、四天王達が止めるのだが、四天王であるダーククライが暴走したので、他の四天王はポケモン達を非難させ、アルセウスが出て来たのだ。

四天王の事を軽く紹介しよう。

四天王第一席・ダーククライ【悪】

人々を深い眠りに誘い夢を見せる能力を持つ。

新月の夜に活動する。

伝説ランク・伝説級

四天王第二席・ゲノセクト【虫・鋼】

3億年前に最強のハンターとして恐れられていた。

伝説ランク・伝説級

四天王第三席・ボルケニオン【水・炎】

背中のアームから体内の水蒸気を噴射する。

山1つ吹き飛ばす威力。

伝説ランク・伝説級

四天王第四席・ディアンシー【岩・妖】

両手の隙間で空気中の炭素を圧縮して沢山のダイヤを一瞬で生み

出す。

伝説ランク・伝説級

四天王統括者・アルセウス【ノーマル】

宇宙がまだ無い頃に最初に生まれたポケモンと神話の中で語られている。

伝説ランク・神級

四天王達は普通では出来ない進化を成し遂げている。

言わば、メガ進化なのだが・・・

四天王達はメガ進化の更なる進化、【真・進化】を習得している。バロンと白龍のシンクロ進化も【真・進化】に近い原理になるが。

俺はこの街、アルマトーレのポケモン達と歓迎パーティーをして楽しみ、一夜を過ごした。

その日の夜、ラティオスが俺の所に来た。

『アルマトーレのポケモン達に歓迎されて良かったなバロン』

「ああ。本当に良かった。後、アルセウスとラティオスには感謝しないとな」

『なぜ俺にも?』

「なぜって?そりゃラティオスには世話になったし。今日も一日ずっと一緒にいてくれたからね」

俺はそう言い、夜空を見上げた。

空には雲が無く、小さな星達や綺麗な満月がアルマトーレを照らしていた。

「この街の空は綺麗だな」

『そうだな』

俺達は少しの間、夜空を見続けた。

『兄様〜!遊ぼ〜ってあれ?』

『なっ!?これは違うぞ?!勘違いするなよ!さあ行こう!』

『うん!行こう!』

ラティオスがあんなに慌てるなんて面白い♪

今日は色々あったが、充実した1日を過ごせた。
さあ！明日もあるし、俺は寝るか！

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十話

六十話

翌朝、俺は目が覚めると、顔を洗いに洗面台に向かった。

「フアア〜眠い・・・」

俺は大きな欠伸をしながら洗面台に向かった。

『マスター凄く眠そうだよ?』

『みんなでワア! ってしちやう?』

『しようしよう!』

バロンのポケモン達はみんな凄くワクワクしながらバロンが洗面台に近づくのを待っていた。

そして、バロンが洗面台に着いた瞬間!

『『ワア〜!』』

「うおっ!」

俺はびっくりして、尻餅を着いてしまった。

バロンのポケモン達はドッキリが成功して大はしゃぎ♪

しかも、ポケモン状態では無く、みんな擬人化状態なのだ!

「なんでみんな、擬人化!」

『アルマトールレのみんなが教えてくれたんだ!』

『ねえ〜!』

メイビスと白龍の擬人化状態は見たことがあるから大丈夫だが、他のみんなの擬人化は見たことが無かったので凄く驚いた。

メイビスと白龍以外を紹介しよう!

ブリガロン擬人化 オス

見た目は少年。

茶色の髪色をしており、服は緑をメインとしたのを着ている。

メタグロス擬人化 メス

見た目は少女。

青色の髪色をしており、紺色のドレスを着ている。

ゾロアーク擬人化 オス

見た目は青年。

赤い髪色をしており、黒い袴を着ている。

レックウザ擬人化　メス

見た目は少女。

緑の髪色をしており、緑が特徴的なワンピースを着ている。

メタグロスはいつも僕系統の言葉を使っていたので男だと思っていたが、実は女だった事に驚いた。

更に、レックウザ・・・実は女だったなんて。ずっと男だと思ってた・・・

俺のポケモン達は擬人化すると、少女3人。少年1人。青年1人。爺さん1人。そして俺、10歳・・・

このメンバーで歩くと、周りから白龍爺さんが子供達の子守をしているように見られるような気がする・・・

アルマトーレの街はみんなポケモンだから大丈夫だが、一般の世界だと・・・ポケモン状態でいてもらおう・・・

俺はゆつくりと立ち上がり、笑顔で言った。

「おはようみんな！今日はみっちり稽古付けてあげるね」

『『『おう〜！』』』

俺のポケモン達は稽古が好きなのか。

うん！良いことだ！

俺達は顔を洗い終わってから、稽古を始めた。

それぞれの苦手な場所を重点的に稽古をして、更に、アルマトーレの高レベルポケモン達とバトルをしたり、伝説ポケモン達に強烈な攻撃を放って貰い、攻撃を耐えきる特訓をしたりと色々な事をしていたら、日が暮れてしまった・・・

「今日もアルマトーレで泊まりだね」

『うん！今日もお泊まり♪』

『泊まりだ〜！』

みんな擬人化が好きなようで、凄く嬉しそうにしている。

だけど、そろそろ旅に出ないと・・・

ジムバッチがまだ、2個なんだ。

「みんな！明日からまた旅に出るぞ！なので！寝るまで稽古をするぞ
〜！」

『俺達も手伝うぜ！』

『俺もだ！』

「みんな・・・ありがとう！さあ！稽古を再び開始だ〜！」

俺達は再び稽古を再開し、始めよりよりも更に厳しく稽古をした。

更に、アルマトーレのポケモン達やその伝説ポケモン達との稽古も
激しさを増していき、最終的には擬人化状態でも戦える様になれど、
擬人化で稽古までした・・・

アルマトーレでの稽古は夜11時まで続き、みんなが疲れて解散と
なり、それぞれの家へと帰って行った。

レベルも上がり、ステータスも上がり、擬人化状態で戦闘も出来る
様になりと色々と学べた。

明日は久しぶりの旅を再開出来る。

ちなみに俺は、ご飯を作る稽古や、気をもっと上手く扱えるように
と伝説ポケモン達が稽古を付けてくれた。

何はともあれ、俺もレベルアップしたし、今日はみんなで仲良く寝
よう！

明日はシヨウヨウシティに行くか。

シヨウヨウシテイ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十一話

六十一話

俺は無限の笛を使い、ラティオスを呼んだ。

『朝からどうした?』

「俺をシヨウヨウシテイまで運んで欲しくて」

『了解した』

ラティオスは俺を背中に乗つけると、シヨウヨウシテイへと飛び立った。

シヨウヨウシテイに着くとラティオスは再びアルマトーレに戻って行つた。

その時に、

『またいつでも呼んでくれ。力になるから』

そう言ってから飛び立った。

「ありがとうな。ラティオス」

俺はそう言ってから、シヨウヨウジムに行くため、坂道を登る事にした。

「この坂、地味にキツそ・・・そうだ!」

俺は鞆からローラースケートを取り出し、履き替えた。

「やっぱりに楽に移動出来るなくよし!一気にジムまで行くぞ!」

俺はそう言いローラースケートをかつ飛ばし、ジムまで行つた。

俺はジムに着くと、先に運動靴に履き替え直してからジムに入つていった。

「すみませくん!ジムに挑戦しに来ました!」

「ようこそ!僕のジム、シヨウヨウジムに!僕がジムリーダーのザク口だよ。この崖の上に登って来てねチャレンジャー!」

「はー!」

シヨウヨウジムは崖の上にジムがあり、そのジムにも崖があり、一番上にジムリーダーがいるのだ。

崖は登りやすいように、細工されており、少し体力と運動神経が良ければ登ることが出来る様になっている。

俺はこの鍛えた体で軽々と崖を登って見せた。

「おおう凄じやないか！では、ジムバトルを始めよう！使用ポケモンは3体。ポケモンの交代はチャレンジャーのみ有効でいいね？」

「はい！」

バトル形式が決まると、ザクロは腰のベルトに吊していた棒を取り出し、

「バトル場スタンバイ！」

ザクロがそう言い、棒の先端にあった青いボタンを押した。

すると、俺が登って来た崖が2つに別れ、更に横に傾いてまた合体した。

「これが僕のバトル場だよ」

「凄い……」

なかなかハイテクな技術を使ったバトル場だった。

一応バトル場は普通なのだが、それまでがハイテクだった。

バトル場は山のフィールド。

「では、始めようか！出てこいアマルルガ！」

※アマルルガ※【岩・氷】

マイナス150度の冷気をひし形の結晶から出して敵を包み凍りづけにする。

特性は「フリーズスキン」ノーマルタイプの攻撃が氷タイプになり、威力が1.3倍になる。

「出てこいブリガロン！」

シヨウヨウジム戦

☆アマルルガVSブリガロン☆

「アマルルガ、瞑想だ」

※瞑想（めいそう）※【エスパー】

自身の特攻と特防を1段階上げる。

アマルルガは瞑想の為に目を閉じた。

「今のうちに、ブリガロン！爆裂パンチ！」

ブリガロンの自慢の速さで瞬時にアマルルガの懐に行き、爆裂パンチを勢いよく振り上げた！

アマルルガの瞑想は中断され、大きく上に飛んだ！

「追撃だ！ブリガロン、アームハンマー！」

※アームハンマー※【格闘】

強力な一撃を相手に与える。

自身の素早さが1段階下がる。

威力は100。

ブリガロンは両手をアームハンマーに切り替え、勢いよくジャンプし、アマルルガの上に行った。

そして・・・

「避けるアマルルガ！」

「そのまま叩き降ろせ！」

アマルルガは空中で身動きが取れなく、ブリガロンのアームハンマーはアマルルガの腹に命中した！

ブリガロンは腕を最後まで勢いよく振り下ろし、アマルルガを地面にたたき落とした！

アマルルガはその攻撃で戦闘不能になった。

「なかなか凄まじい攻撃だな・・・戻れアマルルガ、出てこいガチゴラス！」

※ガチゴラス※【岩・龍】

1億年前の世界では無敵を誇り王様のように振る舞っていたポケモン。

特性は【頑丈顎】牙や噛み付く系統の技の威力を1.5倍にする。

「俺はこのままブリガロンで行くぜ」

シヨウヨウジム第2戦

☆ガチゴラスVSブリガロン☆

「ガチゴラス！炎の牙！」

※炎の牙※【炎】

牙から炎を出し相手を攻撃する。

威力は65。

ガチゴラスは大口を開けてブリガロンに攻撃をしてきたが、

「ブリガロン、アームハンマーで叩き潰せ」

ブリガロンの両手が再び、アームハンマーに切り替わった。

そして、ガチゴラスが大口を開けて襲ってくるその顔をブリガロンは少し飛んで叩き潰した！

ガチゴラスはその攻撃で地面にめり込みそのまま戦闘不能になった。

「なんと!?僕のガチゴラスも一撃だと。戻れガチゴラス」

「凄いでしょ俺のポケモンは」

俺とブリガロンは胸を張ってそう言った。

「本当に凄いよ……だけど、俺の最後のポケモンはそう簡単には倒せないよ?出てこい、俺の相棒!バンギラス!」

※バンギラス※【岩・悪】

バンギラスが暴れると山が崩れ川が埋まるため地図を書き換えることになる。

特性は【すなおこし】バトル場を砂嵐に変える。

バンギラスがバトル場に出たことにより、砂嵐が巻き起こった!

「ブリガロン、まだ行けるか?」

『勿論!』

ブリガロンは頷くと再び前を向いた。

「俺はこのままブリガロンで行くぜ!」

「わかった!さあ、僕のラストポケモン、バンギラスの力を見せてあげるよ」

シヨウヨウジム戦

☆バンギラスVSブリガロン☆

「バンギラス、龍の舞！」

※龍の舞※【龍】

自身の攻撃と素早さを1段階上げる。

「そうはさせない！ブリガロン、地震！」

『ウオオラアアー！』

ブリガロンは地面を勢いよく殴りつけ、地震を発生させた！

地震はバトルフィールド全域に及び、トレーナーも巻き込まれる・・・

俺は必死に地震の揺れを耐え、バトルを見ていた。ザクロも地震は警戒していたみたいで、俺と同様で地震の揺れを耐えて見せた。

「バンギラス、お前の舞は地震ごときで崩れないだろうか？」

『勿論だぜ』

バンギラスはブリガロンが起こした地震の最中舞い続けた。

そして、龍の舞の効果が発動され、攻撃力と素早さが上がった！

「ちっ！ブリガロン、接近戦でバトルだ！爆裂パンチ！」

『食らいやがれ〜！』

「バンギラス、ストーンエッジ！」

※ストーンエッジ※【岩】

無数の尖った岩で相手を攻撃する。

威力は100。

バンギラスは無数の尖った岩を出現させ、突っ込んでくるブリガロンに全弾放った！

「ブリガロン、お前の素早さで全て回避しながら攻撃を当ててしまえ！」

ブリガロンは無数の尖った岩をギリギリの所で全て回避しながらバンギラスの近くまで接近した！

後もう少しでこの攻撃が当たる！

「バンギラス、更にストーンエッジ！だが、このストーンエッジは手に全て集める」

バンギラスは出現させた尖った岩達を全て手に集め、アーム化させた！

「その状態で、ブリガロンを殴ってやれ！ストーンインパクト！」

※ストーンインパクト※【岩】

ストーンエッジの尖った岩を全て手に集めたその手で、相手を攻撃する。

威力は150。

「いつけ〜！」

『ウオオラアア〜！』

2体の技を発動している拳がぶつかり合った！

ぶつかり合った所は火花が弾け飛び、互いに一步も引かないバトルになった！

「ブリガロン！お前の力でねじ伏せろ〜！」

「バンギラス！お前の力でねじ伏せろ〜！」

2体の攻撃が更に威力を増し、火花の量も増え、更に！2体の足下に攻撃がぶつかり合う衝撃でクレーターが出来てきた！

そして！火花が最高潮に達したとき、大爆発が2体の間で起こり、バトル場一帯に大爆発が起こった！

ザクロも俺もこの爆発に巻き込まれ、大きく吹き飛ばされた！

2体のポケモンも至近距離で大爆発が起こり、更に大きく吹き飛ばされた！

俺は飛ばされている最中にバトル場にあつた取っ手に何とか捕まることができ、ぶら下がる形で爆発が収まるのを待った。

ザクロも飛ばされている最中にバトル場にあつた取っ手に何とか捕まる事が出来たが、爆発の影響で落ちてきた瓦礫に頭をぶつけ意識を失い、落下してしまった！

2体のポケモンはジムの端まで飛ばされ、壁にめり込む形で戦闘不能状態になっていた。

俺はザクロが落ちる前に腰のモンスターボールから白龍を出し、ザクロを助けに行かせた。俺はもう一つのモンスターボールかたメタグロスを出して、乗せて貰い、白龍とメタグロスに守るの技を掛けさせた。

その間に2体の戦闘不能になったポケモンを俺は普通に手持ちに

戻し、ザクロのポケモンは白龍に擬人化になってもらい、手持ちに戻させた。

爆発の影響は1分で無くなり、守るを解除して、バトル場に降りた。

「ザクロさん大丈夫ですか!」

「うん」

ザクロは頭を強くぶつけていて、頭から血が流れていた!

「白龍!頭から血が流れてる!」

『安心してくれ。我が治す』

白龍は両手をザクロの上で翳し、緑色の光を放った。

その光は傷をみるみると治していき、体調も良くなっていった。

「白龍、ザクロを助けてくれてありがとう!」

『ああ。ブリガロンを治療したいから出してくれないか?』

「うん!」

俺は直ぐにブリガロンをモンスターボールから出した。

白龍は今と同じ要領でブリガロンの傷を治してくれた。

『これでもう大丈夫だろう』

「ありがとう白龍!」

ジムは爆発の影響でバトル場は半壊したが、何とかかなりそうだ。

「ここは・・・」

ザクロはゆっくりと目を開きながらそう言った。

「ザクロさん!?目を覚ましたんですね!」

「君はチャレンジャーの?」

ザクロは半身を起こして俺を見た。

「そうですね!チャレンジャーのバロンです!」

「バロン君か。爆発の影響で怪我はないかい?」

「はい。大丈夫です!」

ザクロはほっとした表情で、

「良かった」

そう言い、バトル場に変えた棒に付いていた黄色のボタンを押した。
た。

それを押した瞬間、棒の先端が開き、ジムバッチが出て来た!

「このバッチがシヨウヨウジム勝利の証、ウオールバッチだよ」

「ありがとうございます。ウオールバッチGETだぜ！」

俺はバッチケースに新たに手に入れたウオールバッチを入れた。

これでバッチは3個だ！

「バロン君は次、どこに向かうんだい？」

「次はシャラシティに向かおうと思っています」

シャラシティにシャラジムは格闘タイプの手であるコルニが
ジムリーダーだ。

「わかった。気をつけて行くんだよ」

「ありがとうございます！」

俺はポケモンセンターに戻ってから、シヨウヨウシティを出発する
ことにした。

シヤラシテイ編

ポケツトモンスターXY バロンの旅 六十二話

六十二話

俺はポケモンセンターを出発するとき、自転車屋に立ち寄った。ずっと歩いて旅をすると足がキツイ・・・

カラ〜ンカラ〜ン

自転車屋の扉を開けると鈴の音がなった。

「いらっしやい！」

活気の良い小太りの店主がそう言い、俺の方へ歩み寄ってきた。

「坊主か。自転車を買いに来たんだろう？」

「はい。旅をするために長く使える自転車を買おうと思ひまして」

店主は少し考え、

「ならこの自転車ならどうだ？」

店主が進めてきたのは、「マウンテンバイク」と言う自転車を選んでくれた。

「この自転車なら、普通の道も山道も更にはギアをチェンジして軽くし、急な上り坂も上れるぞ？」

「凄いいじゃないですか！これにしたいです！」

この店の自転車の種類は3種類あり、「マツハ自転車」「ダート自転車」「マウンテンバイク」がある。

この店の一番人気はマウンテンバイクだ。

俺はこのマウンテンバイクが気に入り、早く欲しいと思った。

「走行中は危ないからヘルメットは被ってくれよ。ヘルメットはおまけであげるからよ」

「ありがとう！」

店主は壁に掛けてあった赤いラインが入った黒いヘルメットを俺に手渡してくれた。

「自転車の値段なんだが、お前さん、見たところ10歳位だろ？自転車は1万円でもいいぞ」

「え!?本当にいいんですか!」

このマウンテンバイクの値段は、通常3万円と書いてあるのだ。それを1万円で良いって大丈夫なのか?

「お前さん旅をするのだろうか?これぐらいしてあげなきゃな」

「ありがとうございます!俺の名前はバロンと言います。いずれはカロスチャンピオンになる男です!」

「お前さん面白いな!ガツハツハツハ!ならば、自転車代はお前さんがチャンピオンになった時にでも払ってくれ」

店主はそう言い、俺に自転車とヘルメットを渡してくれた。

「いいの?」

「勿論だ。こんなにはつきりとチャンピオン発言をするお前さんを応援したくなった。頑張れよ!未来のカロスチャンピオン!」

「はい!」

俺は頭を下げ、貰った自転車に跨がりヘルメットを装着した。

その後、シヤラシテイに行くルートを図鑑で確認した。

「シヤラシテイに行くには、あの先にある10番道路に行って、セキタイタウンに向かわないと行けないのか」

俺は図鑑を鞆にしまい、店主に行ってきますと言ってから、シヨウヨウシテイを出発した。

向かうはセキタイタウンに行くための10番道路だ。

※10番道路(メンヒルロード)※

北には岩が沢山並んだエリアがある。周りは木がいくつかある。

南側がシヨウヨウシテイ、北側がセキタイタウンに行ける道だ。

俺は自転車を漕ぎながら10番道路の北に向かっていた。

その時、野生ポケモンを痛めつけているオレンジ色の服の連中が4人いた。あの服は確か・・・フレア団だったはず。

また悪さをしようとしているのか。

これは見過ごせないな・・・俺は直ぐにフレア団の所に向かっている、

「おい!フレア団!また悪さをしているのか!」

「この前のガキか！今回は前みたいには行かないぜ！出てこいヤミラミ！」

「お前も行け！ハガネール！」

「お前もだ！ヘルガー！」

フレア団は3体のポケモンを出して来たか・・・

残りの1人は？

俺は直ぐに周りを見ると、その残りの1人が野生のポケモンを連れ去ろうとしていた。

しかもそのポケモン、よく見ると「イーブイ」だった。

※イーブイ※【ノーマル】

不安定な遺伝子のおかげで様々な進化の可能性を秘めている特殊なポケモン。

「出てこい！白龍、メタグロス、ゾロアーク！」

『俺はあの連れ去ろうとしている奴を捕らえればいいか？』

「うん！フレア団3人はメタグロスとゾロアークで止めておく！」

フレア団達は俺がそう言ったのをしっかりと聞いていて、

「んだとく！てめえ！一度勝ったからといって生意気な！お前達！メガ進化だ！」

「おう！」

「メガ進化！」

「メタグロス、メガ進化！」

白龍はその間に連れ去ろうとしているフレア団に一員を追っていた。

フレア団3人とそのポケモン達、俺とメタグロスがメガ進化の光により、フィールドが光り輝いた！

ヤミラミはお腹の宝石が外に出て、宝石が巨大化。ヤミラミと同じくらいの大きさに変わった。

特性は、「マジックミラー」相手が使った状態異常にする技や能力を下げる技などを跳ね返す。

ハガネールは周りに無数の岩を飛ばして浮遊している。体格も大

きくなっていた。

特性は、【砂の力】 天気が砂嵐の時、地面・岩・鋼タイプ技の威力が1.3倍になる。

ヘルガーは骨みたいなのが伸び、尻尾の先端が2つに少し別れ、体が少し大きくなった。

特性は、【サンパワー】 天気が晴れの時、毎ターン最大HP1/8のダメージを受けるが、特攻ステータスが1.5倍になる。

メタグロスは、4本足が全て前に向き、顔の下に棘状の突起物が生えていた。更にこの状態では浮いている。

特性は、【硬い爪】 直接攻撃技の威力が1/3倍になる。

10番道路・フレア団戦

☆メガヤミラミ・メガハガネール・メガヘルガーVSメガメタグロス・ゾロアーク☆

「ヤミラミ、瞑想を使え！」

「ハガネール、ステルスロックだ！」

「ヘルガー、日本晴れだ！」

※ステルスロック※【岩】

辺りに無数の岩をまき散らす。

相手のポケモンが交代するたびにその岩でダメージを与える。

「メタグロス！ステルスロックの岩を全てサイコキネシスで相手の所に送ってやれ！」

メタグロスは直ぐにサイコキネシスを使い、ステルスロックの岩を止め、送り返そうとしたが、

「それは読んでいた！ハガネール！吠えるだ！」

※吠える※【ノーマル】

吠えて相手を強制交代させる。

ハガネールを大きく息を吸い、吠えるを放った！

吠えるをメタグロスに当て、ステルスロックもその音の波動で全部押し返した！そのままステルスロックはバロンのポケモン達の足下

に散らばった!

更にメガ進化したメタグロスを交代された。

吠えるで交代されたポケモンは次のポケモンを選べずランダムで出て来る。

吠えるの効果で出て来たバロンのポケモンは、ブリガロンだった。

ブリガロンはステルスロックの効果により、岩がブリガロンを攻撃してきて、ダメージを受けた!

「大丈夫かブリガロン?」

『これぐらい何ともない』

更にヘルガーの日本晴れが成功し、暑い天気変わった。

ヤミラミの瞑想も成功し、特攻と特防を上げてしまった。

「どうだ!俺達のポケモンは!」

「上手く連携が取れているが、俺のポケモンを嘗めるなよ?ブリガロン、地面に爆裂パンチ」

ブリガロンはステルスロックが散らばった地面を勢いよく技を使い殴りつけた!

その瞬間、地面が大爆発し、ステルスロックの岩は全て吹き飛んだ!

「なに!?ステルスロックを吹き飛ばすだと!」

「だが!あの爆発でお前のブリガロンは大ダメージを受けてるはず!」

「それはどうか?」

大爆発の煙が晴れてきた時、ブリガロンの姿が現れた。

そこには一切傷が付いていないブリガロンが立っていた。

「なに!?あの爆発でノーダメージ!」

フレア団達は凄く驚いているが、本当は今立っているブリガロンは、ゾロアークの特性、イリュージョンで変化して貰っている。

本体のブリガロン今、俺の手持ちに戻って貰っている。

そして、俺が新たに出すポケモン、それは・・・

「出てこい、レックウザ!」

『ようやく俺の出番か』

レックウザが出たことにより、特性【エアロック】が発動した。
特性【エアロック】

全ての天気を向こうにする。

ヘルガーの日本晴れはエアロックが発動した事により、効果が無くなった。

「レックウザだ?!?だが!ヘルガー!火炎放射!」

「そんな攻撃でレックウザに勝てるんでも?レックウザ!龍の波動!」

レックウザは龍の波動を放ち、ヘルガーの火炎放射を簡単に押し返した!

「なに!?!」

「ハガネール!援護しろ!アイアンヘッド!」

「ヤミラミ、ブリガロンにシャドーボール!」

レックウザの龍の波動はハガネールのアイアンヘッドに辺り、相殺されて爆発した!

ヤミラミはその隙に、ブリガロン(ゾロアーク)に技を放つて来た!

「ちっ!ゾロアーク!イルージョン解除!悪の波動だ!」

ゾロアークはブリガロンの姿から元の姿に戻り、悪の波動を放った!

悪の波動とシャドーボールは相殺されて爆発した!

「なかなかしぶとい・・・」

今回のフレア団、全員がメガ進化し、更には補助技系統で連携も取ってきている。

以前とは全然違う・・・

どのようにして勝つか・・・

自慢のスピードを使い勝つか・・・

強固な守りで防ぎつつ攻めるか・・・

ステータス敵には問題無いが、悩むな・・・

「何をボサツとしてやがる!ヘルガー!ゾロアークに火炎放射!」

「ハガネール!ラスターカノン!」

「ヤミラミ！シャドーボール！」

メガ進化ポケモンの一斉攻撃がゾロアークに向かって行く！

「ゾロアーク！白龍に変身しろ！」

※変身※ 「ノーマル」

違うポケモンに変身する。

ゾロアークの姿が変わっていき、白龍となった！

「ゾロアーク！裁きの鉄槌！」

ゾロアークは裁きの鉄槌を一斉攻撃してきた技に放ち、全て押し返した！そのまま裁きの鉄槌はまっすぐに進んでいき、正面にいたヘルガーに当たり、爆発した！

爆発が晴れた時にはヘルガーは元の姿に戻っており、戦闘不能状態で横たわっていた。

「ヘルガー戻れ！後は任せたぞ」

「おう！」

ゾロアークが白龍に変身出来たのは、アルマトーレの稽古が厳しく尚且つレベルが150に達したからだ。

「よし！この調子で勝つぞ！」

『おう！』

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十三話

六十三話

10番道路後半戦

☆メガヤミラミ・メガハガネールVSレックウザ・ゾロアーク☆

「レックウザ、ハガネールに火炎放射！ゾロアーク、ヤミラミに火炎放射！」

「ハガネール、レックウザにストーンエッジ！」

「ヤミラミ、ゾロアークに悪の波動！」

4体のポケモンの技が一齐に放たれ、バトル場の真ん中で衝突した！

技は両者押し返すことがなく、その場で爆発した！

「押し返せないか……」

「なかなか強いな……」

ポケモン達は俺達の命令を待っている。

ならば……速さで翻弄してやるか。

「レックウザ！お前の本当の速さで技【ドラゴンクロー】で2体を攻撃しろ！」

『了解！』

レックウザは両手を下に向け、爪から緑色の形状のオーラを出し、爪の形を形成した。

そして……レックウザはその場から消えた……

次に現れた場所は、相手のハガネールとヤミラミの後ろ……

レックウザはドラゴンクローを解除し、舞い上がった。

その時、ヤミラミとハガネールは同時にメガ進化が解け、地面に倒れた。

戦闘不能になったのだ。

レックウザは静かに俺の所に舞い降りた。

「ありがとうレックウザ。早すぎて見えなかったよ」

『これが私の本当の速さなので。白龍様には勝てませんが』

白龍は今のよりも早いのか・・・凄いな・・・

「俺のポケモンが倒れたけど・・・」

「レックウザが消えたと思ったら、俺達のポケモンの後ろにいた・・・なんて速さだ・・・」

フレア団の2人はポケモンを手持ちに戻し、残りの1人を探しに行った。

「あ！待て！」

俺は直ぐに追いかけて行こうと思ったが、

『マスター我に乗ってくれ。直ぐに追いつける』

「ありがとう！」

俺はレックウザに乗り、フレア団を追いかけた。

その頃白龍の方は・・・

『あいつがイーブイを連れ去ろうとしていた奴か。あいつの手に持っている石は何だ？』

フレア団の団員が持っている赤い石をイーブイに近づけようとしていた。

『とりあえず止めておくか。神速！』

白龍はその場から消え、団員が持っていた赤い石も消え、イーブイもその場から消えた。

次に現れた場所は団員がいた場所から1km離れた場所だった。

『大丈夫だったかイーブイ？』

『うん。ありがとう！』

白龍は赤い石をマスターに届けようと思い、神速を使おうとしたが、イーブイをこのままにしておけばまた、先ほどの奴が来るだろう・・・

『イーブイよ。我と少し行動を共にしないか？』

『え？いいの？』

『勿論だ』

イーブイは凄く嬉しそうに

『ありがとう！』

そう言い、我の足下に寄り添ってきた。

『では行くか』

『はい！』

我とイーブイがマスターの元に向かう途中に名前だけ名乗っていた。
これでイーブイも名前を呼ぶだろう。

「ちくしょう！あの白い龍！懲らしめてやる……」

先ほどの団員の目は赤く染まっており、

「どこに行きやがった〜!!!」

団員は雄叫びを上げた。

団員は目の前にあつた木を見つけると、腕を横に振った。

すると木が切れた……しかも白い風の刃みたいなのがそのままその軌道上の木を全て切つていった……

「この力いいなあー」

この団員は、特殊な訓練を受けている、非公認の内の1人、バイズと言う。

バイズはポケモンを恐怖で支配する力を持つ。

そのバイズが怒り、力が暴走。今にいたる……

バイズは白龍を探すため、地面に手を付け支配の能力を発動させた。

支配の能力は感知能力もあり、相手の居場所が解る。

「見つけたぞ〜！」

バイズは足に力を溜め、一気に力を放射した。その反動で人間の体で高速移動を行えるようにしたのだ！

白龍も感知能力を持っており、直ぐにこの異変に気付いた。

『あの人間……ヤバいな』

イーブイも何かが来てることに気付き、俺の後ろに隠れた。

俺はその人間が来るであろう場所を睨み付けた。

バイズは高速移動の時、邪魔な木を全て切り落とし、白龍の場所に

迫っていた。

白龍までの距離はおよそ500m!

白龍の方も、睨んでいた場所の木が倒れていくのを目視出来たので、構えた。

『イーブイ、俺から少し離れていてくれ。先ほどの人間が来る』

『うん!』

イーブイは近くにあった木に隠れた。

その時! バイスが放った斬空刃が木をなぎ倒していき、イーブイの隠れた木を切った!

幸いイーブイは隠れている時、伏せていたので怪我は無かった。

『やろう... 神の力を見せてやる! ゲイボルグ!』

白龍が右手を掲げ、ゲイボルグを形成し、バイスが向かってくる場所に放った!

ゲイボルグは周りの木を全て吹き飛ばしていき、バイスに向かって直線距離で突き進んだ!

「あの槍邪魔だなあ! 切つてやる!」

バイスは手を振って、また斬空刃を発射したが、ゲイボルグには勝てない。

簡単に弾き飛ばされゲイボルグはそのままバイスに向かって突き進んだ!

「ちっ! 避けるか」

バイスは、足の力を使い、右の方へ大きく避けた。

そうしないとゲイボルグの攻撃範囲に入ってしまうからである。

ゲイボルグはバイスが避けた後、そのまま通り過ぎ、およそ1kmまで飛んで行き、消滅した。

ゲイボルグの攻撃範囲はおよそ半径300mと広い...

バイスは瞬時にそこまで移動し、攻撃を躲したのだ。

今の攻撃で白龍もバイスの場所を性格に認識でき、白龍は神速を使い、バイスの真後ろまで瞬時に移動した。

そして、バイスが気付く前に首を叩き、気絶させた。

「なん... だ... と...」

バイスは最後にそう言い、完全に気を失い、地面に倒れた。

『この人間もマスターに持って行くか』

あ、イーブイも連れて行かないと。

白龍は先ほどの速さでバイスを担いでイーブイの所に戻って来た。

『待たせたな。それでは行くかうか』

『うん！』

白龍はイーブイとバイスをサイコキネシスで浮かせ、マスターがいる場所に向かった。

マスターの場所に行くとき、フレア団が3人走って行くのが見えたので、更にサイコキネシスを使い、浮かばせた。

「あ！白龍〜！フレア団を捕まえてくれたんだね！ありがとう！」

『ん？ああ。たまたま出くわしたので捕らえておいた』

白龍はマスターの所に静かに舞い降り、イーブイをマスターの所に持って来た。

「イーブイ。ここにいと危険だ。俺達と安全な場所まで一緒に来ないか？」

『ううん。僕、あなたのポケモンになりたい！僕、弱いままじゃまた襲われちゃうから』

イーブイは下を向きそう言った。

「なら、俺のポケモンになり、力を付けよう！」

『うん！』

俺は鞆からモンスターボールを取り出し、イーブイに軽く当てた。

イーブイはモンスターボールの中に入り、直ぐにカチツと音が鳴った。

「イーブイGETだぜ！」

『おめでどうマスター！』

※イーブイ※【ノーマル】LV90

不安定な遺伝子のおかげで様々な進化の可能性を秘めている特殊なポケモン。

特性【適応力】

タイプ一致技の威力が増加し、圧倒的な火力を得る事が出来る。

結構良い特性を持つているじゃないか・・・

技はどんな感じに・・・

堪える・攻撃を受けても必ずHPを1だけ残せる。

じたばた・じたばた暴れて攻撃する。自分のHPが少ないほど技の威力は上がる。

バトンタッチ・控えのポケモンと入れ替わる。能力変化は変わったポケモンが受け継ぐ。

恩返し・トレーナーのために全力で相手を攻撃する。懐いているほど技の威力が上がる。

技も申し分ないのだが・・・

気持ちの問題ではないか？

アルマトーレで特訓したらLVも心も格段に成長するぞ・・・

「イーブイ出て来てくれ」

『どうしたの？』

俺は単刀直入に、

「イーブイ。お前は良い特性と技を持っているが、心とまだLVが追いついていない。そこで、今は俺の街、【アルマトーレ】で修行しに行って欲しい」

『そこに行けば強くなれる？』

イーブイは心配そうにそう言ってきたが、

「心配するな。俺のポケモン達はそこで格段に強くなった。イーブイも必ず強くなれるぞ」

『分かった！そのアルマトーレに僕、行くよ！』

イーブイはそう言ってくれた。

「それじゃ、ラティオス！来てくれ！」

空に一点の光が見えた！

そこから物凄い速さでこちらに向かってくる影があった。ラティオスだ！

『待たせたな』

「大丈夫だよ。俺のイーブイをアルマトーレで強く育てて欲しいんだ。頼めるか？」

『勿論大丈夫だ。行くぞイーブイ』

『うん！行ってきます！』

イーブイはラティオスに乗ると、アルマトーレに出発した。

『もう行ったか。このフレア団達はどうする？』

「とりあえず、ジュンサーさんに引き取ってもらおうか」

俺は直ぐにジュンサーさん呼び、少し待っていたらジュンサーさんが来てくれたので、引き渡した。

「捕まえてくれてありがとう！それでは失礼します！」

ジュンサーさんは敬礼してからバイクに跨がり、後ろの護送車と一緒に走り出した。

「フレア団の情報が出ると良いね」

『そうだな』

「それじゃ出発しようか。モンスターボールに戻って白龍」

『うむ』

白龍はモンスターボールに戻り、俺も再び自転車に跨がった。

俺はセキタイタウンをめざし再び自転車を漕ぎだした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十四話

六十四話

ミアレシテイのとあるレストランにセレナがある人物を待っていた。

「ダンテさん遅いなあ〜」

その時、レストランの入り口の鈴が鳴った。

「いつらしゃいませ！何名様ですか？」

「先に来てもらってる子がいて・・・」

ダンテは直ぐに辺りを見渡して私を見つけた。

「あの子よ！良かった〜もう帰られたかと思っただ〜」

ダンテは私の方に直ぐに来て席に座り、コーヒーを頼んだ。

「待たせてごめん！あ！そうそうこれをどうしてもセレナちゃんに渡したくて」

「これって確か・・・」

ダンテが鞆から出した者はバロンが旅を始める前に渡していた超最新ポケモン全国図鑑・・・

何でこのタイミングで？

「ダンテさん。そのポケモン図鑑は私には必要無いのですが？」

「バロン君と旅をしてほしくて」

「え？」

私はダンテさんに一緒に旅をしなければいけない理由を聞いた。

その理由が・・・

バロンを付け狙う組織がいて、その組織はバロンの旅をなぜか邪魔をしてくる。

しかも、その組織のポケモン達の幹部以上は、その組織の研究者達が開発した、ダンテさんの開発した超最新ポケモン全国図鑑とほぼ一緒の性能を持っており、通常よりも強いポケモン達が揃っているとの事・・・

更に、メガ進化に必要な絆で進化するポケモンを人為的にメガ進化させる機会まで作っていると聞いた。

そんな人達がバロンの旅をなぜか邪魔をしてくる。

何か意味があるのか分からないけど、放っておけない！

「ダンテさん。私、バロンと旅をします。ダンテさんの開発した超最新ポケモン全国図鑑をください」

「そう言ってくれると思ってたよ！だから私ね、この超最新ポケモン全国図鑑を更に改良しちゃたんだ！」

ダンテさんが教えてくれた超最新ポケモン全国図鑑の性能が...

①野生のポケモンに出会うだけで自動的に登録され、野生ポケモンの詳細を見たい時は、図鑑を野生ポケモンに向けるだけで、図鑑にそのポケモンの事が出てくるようになっていく。何体出会ったかも載っている。

②このポケモン図鑑を持っているだけで、ポケモンの経験値を通常よりも多く貰え、さらに、ポケモンのレベルアップ時のステータスが通常よりも多く上がる。

通常ポケモンの場合2倍

伝説ポケモンの場合4倍

これがバロンが持っていた図鑑の性能だ。

だけど、更に改良された図鑑には、メガネみたいなのを付けて相手を見る。

見ているポケモンの詳細が全て出て来るので、見たい情報だけを意識すればそれだけが見れるようになる。

更に、レベルアップ時のステータスの伸びが変更され、

通常ポケモンの場合3倍

伝説ポケモンの場合6倍

凄い数値に変更されていた...

「この図鑑の名前はね！超・ポケモン図鑑だよ！短めに改名したんだ」
「確かに短くなりましたね。ありがたいです」

私は素直な感想を言い、メガネを付けた。

意外と周りが見やすく、町中のポケモン達の詳細が全て頭に流れ込んでくる！

「痛いー！」

情報量が多すぎて頭に激痛が走った！

「始めてだからね・・・先に痛み止めの薬を渡しておくね。使い慣れたら凄く良い物だから頑張って」

「はい。頑張ります・・・」

私は直ぐに痛み止めを飲み、出来るだけ意識を無にした。

するとさつきまでの莫大な情報量が一気に少なくなり、頭の痛みの凄く和らいだ。

「何も考えないようにすれば大丈夫そうですね」

「もう慣れてきたのかい!?!」

「たぶん？」

私は曖昧に答えたが、1日練習すれば使いこなせると思う。

「それじゃ私はこれで！先に支払っておくね！」

「あ！ありがとうございます！」

ダンテさんは会計を終わらせると、腰に吊していたモンスターボールを投げた！

そこから出て来たのはフライゴンだった。

※フライゴン※【地面・龍】

砂漠の精霊と呼ばれる。羽ばたくことで巻き起こした砂嵐の中に隠れている。

私は即座に凶鑑の効果を使う為、メガネを起動した！

欲しい情報は、レベル・ステータス・特性！

※フライゴン※LV380

特性【精霊の加護】

受けるダメージを1/10にする。

ステータス

HP 3420

攻撃 4560

防御 3420

特攻 5700

特防 3420

速度 4560

全てのステータスが高い・・・
その前に、LVが380!?
特性も始めて見た・・・
ダンテさんのポケモン・・・凄い・・・
ダンテはフライゴンの背中に乗り、飛び立ちダンテの研究所の方へと去って行った。
私もレストランから出てからポケモンセンターの宿に移動した。
私のポケモンのステータスが気になっていたからだ。

セレナのポケモン

テールナーLV35【猛火】【マジシャン】

ピジョンLV32【鋭い目】

ピカチュウLV30【静電気】

マリルリLV31【厚い脂肪】

サーナイトLV33【シンクロ】【絆】

ルカリオLV32【不屈の心】

特性【マジシャン】

特殊攻撃力が3倍になる。

【特殊攻撃を跳ね返せる。】

特性【絆】

トレーナーとの絆の分だけ全てのステータスが上がる。

絆が無ければ通常の状態。

この2つの特性、始めて見た・・・

マジシャンに絆。

使いこなさなきゃね!

セレナはバロンに合う前にポケモンのレベル上げをしてから合いに行くことした。

あ・・・バロンがどこにいるか聞いてなかった・・・

バロンの事だから4個目のジムに向かっているかな?

確か場所は・・・フクジさんがいるヒヨクシティだったはず。

とりあえずそこに向かうか!

ここまで来る間、
白い城やデカイ城壁とかがあつたけど・・・
まさかね・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十五話

六十五話

※セキタイタウン※

小さな村で南側にはポケモンセンターと古民家が建っており、北側には、3本の石柱が立っている。

バロンはセキタイタウンに着いた時、北の中央部分に石の柱が3本立っている事に気付いた。

「この石柱ってどんな事に使うのかな？」

「俺もこの石柱の事知りたいな」

俺の後ろから急に声が聞こえたので、咄嗟に反転してからバックステップを取ってしまった。

これもアルマトーレで鍛えて得た物の1つだ。

「そんなに驚かなくても・・・」

その人は少しショックしているみたいだが、急に声が消えたので驚くのは無理も無いはず・・・

「すまん。急に声が聞こえたので」

「いや。俺も悪かった。ごめんな。俺はマサラタウンから来たサトシ。こちらが相棒のピカチュウだ」

『よろしくー!』

(アニメではピカチュウの鳴き声ですが、バロンはポケモンの声が聞こえるので鳴き声は基本使いません)

「こちらこそよろしく!俺はアサメタウンから来たバロン。俺の相棒は出てこい白龍!」

俺はモンスターボールから白龍を出してサトシに見せてあげた。

「すげー!始めてみたポケモンだ」

サトシは反射的にポケモン図鑑を取り出し、データを見ようとしたが・・・

「エラー!このポケモンは図鑑には登録されていません」

「えっ?」

「俺のポケモンは特殊だね。普通のポケモン図鑑では詳細は見れない

よ」

俺はそう言い、白龍を撫でた。

「俺はこのカロス地方のチャンピオンになる男！」

「俺もこのカロス地方のチャンピオンになるために来たんだ。俺とバトルしないか？」

「いいぜ！バトル場に行こう」

着いたバトル場は周りが木で囲まれている森のバトル場。

セキタイタウン戦

☆バロンVSサトシ☆

ルール

1対1の1本勝負。どちらかのポケモンが倒れば試合終了。

「頼んだぞピカチュウ！」

ピカチュウはサトシの肩から飛び降り、バトル場に出た。

『この勝負勝ってやる！』

「行け！俺の相棒、白龍！」

俺の横で待機してくれてた白龍がバトル場に出た。

今更だが、白龍を確認しておこう・・・

俺はポケモン図鑑を取り出し白龍を調べた。

名前・白龍【神】

特性・【神の力】【絆】

技・ポケモン界の全ての技使用可能。

特性【神の力】について。

全てのステータスが大幅アップ。

更に技発動時、神タイプを任意に付与出来る。

神タイプの技の威力を3倍にする。

特性【絆】について。

トレーナーとの絆の分だけ全てのステータスが上がる。

絆が無ければ通常の状態。

白龍の特性、変わったかな？

結構いい特性が備わっている・・・

あ。ついでにサトシのピカチュウも調べておこう。

名前・ピカチュウ【電気】

LV640

特性【静電気】【ギガボルト】

技・エレキボール

アイアンテール

10万ボルト

電光石火

特性【ギガボルト】について。

電気タイプの技の威力を3倍にする。

任意に電気タイプを付与出来る。

LV640って・・・

高すぎ・・・

サトシを見ると、ポケモン図鑑を開いて白龍をもう一度調べていたが、やはり何も分からなかったのだろう・・・

少し落胆していた。

「んじゃサトシ！行くぞー！白龍、天空の領域！」

白龍は空中に跳び、天空の領域を発生させた。

周りは濃い霧に覆われ、神タイプ以外は半径1m未満しか見れない・・・

「何だこの霧は？周りが見えない・・・ピカチュウ、目を閉じて周りを意識しろ」

『了解』

目を閉じるか・・・

だけど、感覚だけで白龍の攻撃を避けられるかな？

「白龍、神の息吹！」

※神の息吹※【神】

神タイプの通常攻撃。

威力は100。

神の息吹は天空の聖域の効果で威力は4倍の400！

さあ、どうする！

「ピカチュウ、風を感じるはずだ。そこに10万ボルト！」

ピカチュウは耳を動かして、技の位置を特定した。

そこにピカチュウの10万ボルトが放たれた。

更に特性ギガボルトで威力は3倍の180！

だけど、LVのせいで実際の攻撃力は物凄く上！

白龍の神の息吹とピカチュウの10万ボルトが当たった時、白龍の技は10万ボルトに押し負けた！

「なに!? 白龍、瞬時にピカチュウの背後に回り、ギガブレイド！」

「ピカチュウ！ 周りに気を付けろ！ アイアンテールに電気付与！ 敵が来たら攻撃しろ！」

『了解！』

白龍はギガブレイドを瞬時に形成し、高速でピカチュウの背後に回った。

その時、10万ボルトが白龍がいた場所を通過した。

ピカチュウも瞬時にアイアンテールに切り替え、電気を付与。雷鋼テールになった。

「白龍、攻撃しろ！」

「ピカチュウ、迎え撃て！」

『ウオオラアア！』

『オオオ〜!!』

白龍はギガブレイドを上段斬りで攻撃！

ピカチュウは雷鋼テールを下から上に振り上げた！

2体の攻撃がぶつかった瞬間、激しく火花が散った！

「いっけ〜！」

ピカチュウも白龍も渾身の攻撃で攻撃していて火花が更に激しく散った瞬間！ 大爆発が起こった！

ピカチュウも白龍も至近距離の爆発により、大きく吹き飛ばされた！

「ピカチュウ大丈夫か！」

「白龍大丈夫か！」

『問題無い!』』

白龍もピカチュウも空中で体勢を立て直した!

「流石だ! 白龍、ゲイボルグ【赤】!!」

「ピカチュウ! エレキボール!」

2体のポケモンの技が放たれた時、天空の聖域の霧が晴れた!

「なに!？」

『何だと!？』

「いつけ〜! ピカチュウ!!」

『穿て! エレキボール!!』

ピカチュウはチャージしたエレキボールを白龍に放った!

白龍と俺は霧が晴れて動揺し、技の発射タイミングが遅れた!

エレキボールはまっすぐに白龍に向かっていき当たり、爆発した!!

爆発の中から白龍が落下していくのが見えた!

白龍が形成したゲイボルグも無くなっている!

「白龍! もう一度体勢を立て直せ〜!」

「ピカチュウ! トドメの攻撃だ! 電気付与のアイアンテール!!」

『ウオオオオオ!!』

ピカチュウは瞬時にアイアンテールに切り替え、近くに木に飛び移

り白龍に向かっていき・・・

『これで! 終わりだ〜!!』

ピカチュウは雷鋼テールを白龍に上段斬りで思い切り当て、叩き落

とした!!

白龍は物凄い速さで地面に激突!

その衝撃で地面に大穴が開いた。

地面に大穴が開いた中に戦闘不能の白龍が横たわっていた・・・

「白龍!? 大丈夫か!!」

「お疲れ様ピカチュウ」

『うん♪』

ピカチュウは戦闘で汚れた部分を自身の電気で綺麗に消した。

その後、サトシの肩に乗った。

「バロン、白龍。良いバトルだったぜ!」

「ああ。まさか白龍が負けるとは思わなかった。またバトルしような！」

「おう！それじゃ俺はもう行くね」

「分かった。気を付けてね」

サトシは手を振り、セキタイタウンを立ち去った。

ちなみに、サトシのピカチュウにダメージを与える事は出来なかった……

「なあピカチュウ、あのバロンって少年、もつと強くなるかな？」

『なると思うよ。その時はまたバトルしたいけど』

「だなー！」

※サトシもポケモンと話せます。サトシのピカチュウのレベルが高い理由が……

カントー地方

ジョウト地方

ホウエン地方

シンオウ地方

イツシュ地方

カロス地方

この地方を旅していた経験値が蓄積されているからです。

「白龍、直ぐにポケモンセンターで回復するね」

『頼む……』

白龍は腕を顔に乗せ、そう言った。

もう片方の手を堅く握られていた。

俺は白龍をモンスターボールに戻し、ポケモンセンターに向かった。

マサラタウン出身のサトシ……

まさかこんなに強いなんて。

次は勝ってやる!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十六話

六十六話

俺は白龍をセキタイタウンのポケモンセンターで回復させていた時、

『私の力はまだまだ弱かった・・・我をアルマトールに預けてくれないか?』

「え?」

白龍の回復中にそう言われ、俺は戸惑った。

「な、なんで?」

『アルマトールには、この世界より強いポケモンが沢山いる。俺はもっと強くなりたい。アルマトールで鍛えたいのだ』

白龍から真剣にそう言われたが、俺は迷っていた。

いつも白龍と白龍と旅をしていたのに、別れるなんて・・・

『強くなればマスターの所に必ず戻ってくるから、頼む!』

「わかった・・・必ず戻って来いよ」

『ありがとうマスター』

白龍はそう言うのと体力を回復させるために眠りについた。

半日経つ頃、白龍の体力は完全に回復して、アルマトールに修行に行った。

「行っちゃったか・・・強くなって戻って来いよ。さて!俺はシヤラシテイに向け、出発するか!」

俺はポケモンセンターに止めておいた自転車に乗り、シヤラシテイに向け出発した。

その時、古民家の近くの木に、黒い影がバロンを見ていた。

「やっと白龍がいなくなったか・・・やるなら今か?」

黒い影は少し考えたが、行動は起こさなかった。

「疲れているときにも襲うか・・・」

黒い影はそう言い、消えて行った。

セキタイタウンを出ると11番道路に出た。
ここから現し身の洞窟に入り、シヤラシテイに抜けることが出来る。

※11番道路※〔ミロワール通り〕

左側がセキタイタウンへと行ける道。

中央の山の穴が、現し身の洞窟に繋がる道だ。

右側には空を飛ぶポケモンだけが行ける場所がある。

※現し身の洞窟※〔うつしみのどうくつ〕

1階・地下1階・地下2階と階層が別れており、入り組んだ道になっている。

1階は11番道路とシヤラシテイに繋がっているが、シヤラシテイに行くためにはその手前の大穴を塞げる位の大岩が必要だ。なので、11番道路から行ける地下1階からの道で行くことになる。

地下1階も入り組んだ道になっている。

地下2階にはそこまで入り組んで無く、貴重なアイテムが落ちている事がある。

俺は自転車を漕ぎながら11番道路を走り、何事も無く現し身の洞窟に辿り着いた。

「もう少しでシヤラシテイだ。頑張ろう」

俺はそう言ってから、自転車を降り、現し身の洞窟に入ってしまった。

(この世界では自転車は降りると自動的に小型化し、鞆に入る。降りたいときは、鞆から出して、軽く投げると自転車化する)

現し身の洞窟は外と違いひんやりとしていた。

「以外と湿気とか無いんだな。動きやすくていいけど、暗い・・・」

俺のポケモンには光を照らすポケモンが・・・

レックウザはまず出来ないし・・・

メイビスは出来るのかな？

メタグロスは出来そうだけど、大きすぎて洞窟の道で挟まる・・・
ゾロアークは出来ないし・・・

ブリガロンも出来ないか・・・

「メイビス、出て来てくれ！」

『は〜い！』

メイビスはデオキシスの姿ではなく、擬人化状態で満面のスマイルで出て来た。

正直、超可愛い・・・

じゃなくて！他のトレーナーに見つかると面倒だから、止めさせないで！

「メイビス、直ぐにポケモンの姿に戻ってくれ」

『あれ？マスターはこの姿嫌い？』

「擬人化のメイビスは凄く好きだ。だけど、今はポケモンの姿にしておくれ」

『マスターがそう言うなら』

メイビスは渋々擬人化を解除して、ポケモンの姿に戻った。

「あ。メイビスはこの洞窟を照らせる？暗くて前が見えなくて」

『出来るよ〜出て来て！光の妖精ライト！』

メイビスは片手を上に向け、ライトを召喚した。

※光の妖精ライト※【メイビス専用技】

妖精を召喚する。それぞれ異なる効果を持つ。

ライトは、辺りを照らしたり、相手を目眩まし状態にしたり出来る。

(この小説のみ)

「凄いいじゃないかメイビス！」

『えへ〜アルマトーレで修行した成果だよ』

メイビスはそんな事までしていたのか・・・

偉いぞメイビス！

『ライト。マスターの周りを照らしてあげて』

『了解です！』

ライトは俺の隣に来て、周りを照らしてくれた。

光のせいで目が見えないかと心配したが、特殊な光みたいで、全く目が痛くなく、心地良い光に感じられた。

『僕のライトマジックは凄いでしょマスター？』

「うん。正直驚いた。メイビス、ライト。ありがとうな」
『うん!』

メイビスとライトはそう言い、俺達は再び地下に向け歩き出した。道なりに進んでいくと左右に分かれる道にさしかかった。

「どっち行けばいいんだ?」

『私に任せて!』

メイビスは目を閉じ、周囲を索敵した。

暫く索敵し終えると、メイビスは静かに目を開いた。

『この道は右に行ってくださいマスター』

「了解。ありがとうね」

俺達は右の道をまっすぐ歩いて行った。

暫く歩くと階段があり降りて行くとまた、左右に分かれる道があった。

『この道は左です』

「ありがとうメイビス!」

俺はメイビスに言われた通り、左に進もうとしたが、メイビスが俺の前に立ち、前方を睨み付けた!

『ライト。光をマスターにだけ効果付与にして』

『了解です』

ライトは黄色い光から緑色の光に変化した。

この状態だと、ステルス効果も発揮し、自分の方は遠くの方まで見えるようになる。

メイビスが出す妖精は、俺と俺のポケモンにしか見えないうようになっっている。

「ありがとうメイビス、ライト。あの角にいるのが敵か?」

『うん。あの人、ずっとマスターを追って来てた。どうやって先周りしたか分からないけど、あの人で間違いないよ』

俺のことをずっと追って来た?

何が目的だろ?

まさか・・・俺のアイドル、メイビスが目的か!?

それとも、俺の自慢のポケモン達が目的なのか?

とりあえず・・・

「メイビス、ステルスにしてくれてありがとう。メイビスは影分身を使って相手を攪乱、メイビス自身は自慢のスピードでその人が逃げた場合捕獲。俺はこのステルス状態で敵に接近する。俺は武術の心得があるから大丈夫だ」

『了解しました』

『了解です』

※影分身※【ノーマル】

自分の分身を出す。

熟練度が上がれば分身の数も増える。

『影分身・シャドー』

※影分身・シャドー※【ゴースト】

分身のゴースト版。

影や暗闇で使うと分身の量が比較的に上がる。

光とかがあると分身は消える。

メイビスは影分身・シャドーを使い、洞窟内に大量のメイビス（デオキシス）を出現させた！

更にこのシャドーは、伝説ポケモンの場合、攻撃も出来るようになるのでえげつない・・・

『行け！私の分身達よ！』

シャドー達は隠れているその人物に向かって一斉に襲いかかりに行った。

「流石伝説・・・だが、出てこいオンバーン！爆音波！」

※爆音波※【ノーマル】

音波で相手を広範囲に攻撃する。

威力は140と高い。

オンバーンは爆音波をシャドー達に放ち、掻き消して爆発した！

『私のシャドーを容易く消すとわ・・・』

メイビスは追撃しようと技を構えたが、

『ん？気配が消えた？オンバーンも!?!』

「確かに・・・俺も索敵を使っているが、全く気が感じられん」

その人物は突如消え、俺達の前から消えた。

「とりあえず、俺達はシヤラシテイを目指そう！」

『うんー！』

俺達は洞窟を進むことにした。

その頃、洞窟の外の岩陰に先ほどの黒い影が突如現れた。

「まさか場所を感じられるとはな・・・」

そろそろボスにバロンのポケモンを見せなければ・・・

俺のポケモンを取られてしまう！

俺は洞窟をもう一度見て、目を瞑った。

その瞬間、その影は消えた。

瞬間移動・・・

その影は再びバロンの背後に迫ってきていた・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十七話

六十八話

現し身の洞窟地下1階に俺はメイビスと光の妖精・ライトとシヤラシテイへの出口を目指していた。

「結構この洞窟って広いんだな」

『そうですね・・・』

俺もメイビスも随分歩き回っていた・・・

途中までは、メイビスの道案内で来れたのだが、あの瞑想は使うと頭痛がするらしく、頻繁には使えない。

先に言ってくれたら良かったのだが・・・

俺って凄く方向音痴みたいで・・・なかなか洞窟を出れなく、約2時間程だろうか・・・彷徨っていた。

「流石に疲れた・・・この洞窟のポケモン達が襲ってくるから全部返り討ちにはしたけど・・・」

俺が迷っている間に物凄い数の野生ポケモン達が俺を襲いに来たが、メイビスが見つけ次第全て返り討ちにし、自己再生しながら戦ってくれていたのだ。

だが、自己再生でも傷は癒えるが心までは癒えない。

メイビスから戦闘の疲れが滲み出していた。

「メイビス。迷ってしまって悪い・・・いったん俺の手持ちに戻り、体力を回復してくれ」

『了解です・・・』

メイビスは静かにモンスターボールをタッチしてボールの中に入って行った。

「疲れた・・・出て来てメタグロス」

『マスター大丈夫？』

メタグロスは心配そうに言い、俺の隣に来てくれた。

「歩き回りすぎて足がもうね・・・」

『じゃあ僕のサイコネシスで浮かせながら行こう！』

「その手があったか！ありがとうメタグロス。サイコネシスを頼

む」

『了解！』

メタグロスは俺にサイコキネシスを使い浮かせばせ、シヤラシテイへの出口を目指しメタグロスは歩き出した。

その頃、シヤラシテイの出口付近の岩陰に黒い影が潜んでいた。

「バロンはいつ来るんだ・・・」

その影はそう言って隠れている岩に座り込み休憩した。

もう2時間もここに潜んでいるから、腰が・・・

奇襲するために配置したポケモン達はバロンが来ないから寝てるし・・・

早く来やがれバロン！

暇だろうが!!

黒い影はそう心の中で叫び、休憩を再開しようとしたとき、地響きが聞こえた！

「メタグロス！凄いやないか！出口だよ！出口！」

『マスターに喜んで頂けて良かったです。後、その岩陰に人がいるみたいですが、どうしますか？』

人？

シヤラシテイまでも少しの所なのにな？

まさか、さっきの黒い影か？

「メタグロス、念のためにその岩、壊して。俺はここに降りしてくれたら大丈夫。ありがとうね」

『了解です』

メタグロスは俺を静かに降ろすと、両手を前に突き出し、緑色の光が両手を包み込んだ。

『コメットパンチ発射〜！』

※コメットパンチ※【鋼】

通常の攻撃で威力は90。

10%の確立で攻撃力が上がる。

な!?

確認もしないで急に攻撃するのか!?

とりあえず、ダグトリオに穴を掘るを使わせるか……

「ダグトリオ、穴を掘る」

俺の横に待機させていたダグトリオに命令し、俺は直ぐに穴に入った。

その時、メタグロスがコメットパンチで突っ込んで来た!

俺の隠れていた岩は木っ端微塵になり、崩れた時、その瓦礫が俺の隠れた穴を上手いごと塞いだ。

「とりあえず助かったか……」

だが、これではテレポートが出来ない。

出来るポケモンは出口付近に待機をさせてしまっているから。

「あの岩に隠れていると思ったんだけどなく勘違いか」

『そうみたいですな』

メタグロスは俺の所に戻って来ると、そう言い俺を背中に乗つけた。

『それではシャラシテイへと出発しましょう』

「おうー!」

俺達はシャラシテイへの出口穴まで行った時、ポケモンが天井や岩陰や地面から出て来た!

天井からはジュペッタ。LV400

岩陰からはボスゴドラ。LV350

地面からはバンギラス。LV350

3体とも高レベルポケモンで、俺を3方向から囲む形で陣形をとった。

『こしゃくなーメタルクロー』

メタグロスは両手から銀色の色をしたオーラを爪状に変え、自慢のスピードで一気に前方にいたジュペッタに攻撃をしに行ったが、

『遅いな……シャドークロー』

※シャドークロー※【ゴースト】

手から紫色の爪状のオーラを出す。

急所に当たりやすい。

威力は70。

ジュペッタは瞬時に両手をシャドークローに変え、その場から消えた・・・

メタグロスはそのままジュペッタがいた場所を通り過ぎた所で、倒れた・・・

次に現れたジュペッタは元の位置に戻っており、技は解除していた。

この一瞬で起きた事を説明しよう。

メタグロスも結構早いスピードを持っているが、ジュペッタの素早さはメタグロスより早く、シャドークローを連撃し、メタグロスを倒したのだ。

メタグロスは突っ込んだ時のスピードが残っていたので、そのまま通り過ぎた形で倒れた。

『この程度の速さで僕に勝てるとても?』

ジュペッタはそう言い、嘲笑った。

「戻ってくれメタグロス・・・」

このジュペッタの素早さ・・・

俺のポケモン図鑑と一緒に効果で特別強化されたのか?

メタグロスを一瞬で倒すとはな。

『ん?この先を通りたいんだろ?俺達を倒してから行きな。ここは俺達の縄張り。余所者はバトルで勝たない限り通さない』

ジュペッタでこの強さなら、残りのボスゴドラ、バンギラスも相当な強さなはず・・・

「なあジュペッタ。ここはいつからお前達の縄張りになったんだ?」

『ん?1週間前からだが?』

意外と最近なのか・・・

とりあえず、白龍を・・・

いなかったんだったな・・・

「出てこい、レックウザ!」

『マスター!ここに、狭い!!』

そっか!

洞窟でレックウザの体は狭すぎる！

「すまない！戻ってくれ」

俺は直ぐにレックウザを手持ちに戻した。

『ん？レックウザ様で戦いたいのか？バンギラス、ボスゴドラ、頼んだ』

『おう！爆裂パンチ！』

2体は左右の壁を爆裂パンチで殴りつけ大穴を開けた！

更に、爆発の影響で天井も大きく開け、シヤラシテイ前の洞窟は大きな空間に変わった。

『んじやレックウザ様を出してくれよ。バトルしたいからな』

『ありがとうな。もう一度出てこい！レックウザ！』

『おう！この広さなら十分だ！』

レックウザは雄叫びを上げながらそう言った。

「レックウザ、シャドークロー！」

『影分身改。シャドークロー！』

※影分身改※【ノーマル】

大量の影分身を出し、実体化させる。

技も放つ事が出来る。

※シャドークロー※【ゴースト】

通常の攻撃。威力は90。

まれに相手の特防を下げる。

ジュペッタはレックウザの攻撃が来る前に大量の影分身を展開した！

その後直ぐにシャドークローを放つ体勢に移った。

レックウザは両手をシャドークローに変え、ジュペッタを攻撃しようとしたが、その時には大量のジュペッタが展開しており、シャドークローのチャージも完了していた・・・

ジュペッタは物凄い速さで2つの技を準備完了にしたのだ！

『さあ！楽しませてくれ！シャドークロー一斉発射！』

「全部打ち返せ！」

『ウオオオオオオオオ！』

ジュペッタの超連撃シャドーボールは一斉にレックウザに襲いかかる！

レックウザは自慢の素早さでシャドークローを使いまくり、シャドーボールを全て打ち返していた。

だが、ジュペッタの影分身。いや、分身は次々にシャドーボールを作り、発射しまくっていた。

レックウザの素早さも疲れて、対処が遅れてきている。

「ならば！出てこいゾロアーク！ブリガロン！周りの展開しているジュペッタを倒せ！」

『おう！』

ゾロアークとブリガロンは左右に分かれジュペッタの分身を攻撃しに行った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十八話

六十八話

現し身の洞窟戦【第2ラウンド】

☆ジユペッタ（大量分身）&バンギラス&ボスゴドラVSレックウザ&ゾロアーク&ブリガロン☆

ゾロアークとブリガロンは分身のジユペッタの所に辿り着き、攻撃しようとしたとき、

『いつまでボサツとしているんだ！攻撃しろボスゴドラ、バンギラス！』

『了解！』

バンギラスとボスゴドラは左右に分かれた俺のポケモンの所に瞬時に行き、俺のポケモンの攻撃を止めた！

『すまねえなゾロアークよ。俺がお前の相手だ』

『バンギラス・・・容赦しないぞ！』

『おつと〜ここからは俺が相手だぜブリガロン』

『おつと。ボスゴドラではないか。邪魔をしないでくれるか？』

2体は俺のポケモンを足止めするためか、少し話ししてからバトルを開始した。

現し身の洞窟戦【第3ラウンド】

☆ジユペッタ（大量分身）VSレックウザ☆

☆バンギラスVSゾロアーク☆

☆ボスゴドラVSブリガロン☆

「くつ・・・3つに別れたか・・・レックウザ！真の力を使え！メガ進化！ゾロアーク、影分身！ブリガロン、爆裂パンチ！」

『了解！』

『メガ進化！』

『影分身！』

『爆裂パンチ！』

レックウザがメガ進化している最中にゾロアークとブリガロンはそれぞれ攻撃を開始した！

『俺達がそれで怯むと？分身よレックウザを包围しろ！そして、お前達！メガ進化だ！』

『おう！メガ進化！』

「メガ進化だって!」

トレーナーとの絆無しでメガ進化が出来るとは・・・
厄介だな・・・

3体の体が一斉に光り出し、姿が変わった。

ボスゴドラは全身に鎧が増え、防御が格段に上がった。

バンギラスも全身に鎧が増え、攻撃と防御が上がった。

ジュペッタは服を着たジュペッタ？見たいな感じになった。

更にバンギラスの特性の効果で砂嵐が発動された！

が・・・その後にレックウザのメガ進化が終わり、乱気流が吹き荒れ、砂嵐を掻き消した！

『俺の砂嵐を掻き消すとわ。許さぬ!』

「レックウザ！画竜点睛！ゾロアーク！悪の波動！ブリガロン！アームハンマー！」

レックウザは空高くに跳び、画竜点睛を纏って勢いよく下降した！

『それがどうした。分身達よ！レックウザに纏わり付け！そして・・・自爆しろ』

「なに!?レックウザ！分身にも気を付けろ！」

その時、ゾロアークの方から叫び声が上がった！

『グガガガッ!』

『残念だったな。俺の勝ちだ』

『くそ・・・まだ負けてねえ』

バンギラスの足下に岩が突き刺さっているゾロアークが倒れていた！
た！

その後直ぐにブリガロンが壁に叩き付けられたのが目に映った。

『グハッ!』

『グハハハ！お前の負けだな』

ブリガロンは壁にめり込み身動きすら取れない状態になってしまった……

その後、上空で大爆発が起こった！

『グオオオ！』

『ギャハハハハ！ざまあねえな！』

ジュペツタは見下しながら煙の中から落ちてくるレックウザを嘲笑っていた。

レックウザは落ちてくるとき、メガ進化も解けてしまった。

『バンギラス、もう一度砂嵐を発動しろ』

『了解』

バンギラスは雄叫びを上げ、砂嵐を突如発生させた！

砂嵐のせいで俺は目を庇うことになり、バトル場の把握が出来なくなってしまうた。

『さあお前達、そこに倒れている奴らにトドメをさせ。俺はレックウザを片付ける』

『了解』

『ゾロアーク、悪く思うなよ』

『ブリガロン、さらばだ』

バンギラスとブリガロンの両手から技を使うためのエネルギーが集まっていく。

最大パワーで放つつもりだ！

『さくっと！消しますか』

ジュペツタは両手を前に突き出し、技を放つエネルギーを集めていった。

最大パワーで放つために……

俺は砂嵐で目が開けられなくなっており、技のエネルギー光だけが分かるだけになっていた。

その時、腰のマスターボールが揺れた！

『マスター！私を使って！早く！』

「出てこいメイビス！」

俺は直ぐにメイビスをモンスターボールから出した。

『マスターに加護を！守りの精霊・フロウ召喚！』

※守りの精霊・フロウ※

守りに徹した精霊。

どんな攻撃でも守る事が出来る。

『フロウ！マスターに加護を！私は・・・』

メイビスは技を放とうとしている3体を睨み付けた。

『あいつらを倒す！影分身・シャドー！更にフォームチェンジ！』

メイビスはアタックフォームに。

シャドー達はディフェンスフォームに。

『『食らいやがれ！』』

『最大パワー！シャドーボール！』

『最大パワー！アームハンマー！』

『最大パワー！爆裂パンチ！』

『シャドー達よ！みんなを守って！』

シャドー達は瞬時にバロンのポケモンの前に移動し、3体ずつ守るを発動した！

その時、フロウが俺に加護を掛けてくれた。

3体の攻撃はシャドー達の守るで技を防いだが、2体は技の威力に耐えきれず消えた・・・

『なんてパワーなのよ・・・マスター！今のうちにみんなを手持ちに戻して！』

「ああ！ありがとうな！みんな戻れ！」

俺は3体を直ぐにモンスターボールに戻した。

「ここからが本番って事か・・・頼むぞメイビス」

『うん！私の本当の力、見せてあげる！』

『このやろう！邪魔しやがって!!』

ジュペッタ達は3方向からメイビス目掛けて技を放って来た！

『シャドーボール！』

『ストーンエッジ！』

『ラスカーカノン！』

メイビスはテレパシーで俺に語りかけてきた！

「私ね・・・真の姿があるの。マスターにも見せていなかったけど、ここで使わないと勝てないと思ったから・・・使うね」

メイビスは擬人化状態になり、俺の方へ駆け寄り、キスをした！

「な!?!え!?!」

『この力を使うと私の姿がね・・・』

メイビスはキスに関しては何も言わなかったが、何かあるみたいだ・・・

『十分にマスターとの絆があるから、今なら制御出来るはず』

メイビスは前に向き直り、構えた・・・

技はもう目の前！

その時、3方向に残っていたシャドーが戻って来て守るを発動した！

『真・進化』

シャドー達が守るで技を防いだ瞬間、メイビスの体が光り輝いた！

メイビスの体は小さくなり、元の大きさの半分になった。

手はデオキシスだった頃とは違う手・・・3本の手に変わった。

足はデオキシスの頃と一緒のままだった。

体の中央にあった宝玉は後ろに移り、そこから光の輪が出ていた。

顔はアタックフォルムの時と似ているが少し違った。

小型化したメイビス・・・

この姿が真の姿。

※真・メイビス※【エスパー・神】

メイビスの真の姿。

神の代行者として、バロンと合う前は悪さをしているポケモン達に審判をくだしていた。

宝玉から出ている光の輪は全ての属性が宿っている。

『私は神の代行者。あなた方を排除します』

メイビスの光の輪が光を増した！

シャドー達は苦しみながら消えて行った。

『神の代行者だ?!?この世界から消えたと思っていたのに!』

『さあ、始めましょう』

メイビスは右手を前に出し、

『撃滅せよーゴツドカノン!』

※ゴツドカノン※【神】

破壊光線の神版。

威力は500!

ゴツドカノンは発射された瞬間、3方向に進路を変えた!

その進路先は・・・

『なぜだ!?俺達の所に来るな!分身よ!俺の盾となれ!』

『俺の所に来たか・・・5重バリア!』

『俺もか・・・5重バリア!』

ゴツドカノンはジュペッタの分身をあつさり消し去り、そのままジュペッタに当たった!

バンギラス、ボスゴドラの5重バリアは当たったと同時に消え去り、2体はゴツドカノンの餌食になった。

ゴツドカノンはそのまま壁まで破壊し、3体は壁の外に打ち上げられた。

壁が破壊され眩しい光が洞窟に降り注いだ。

洞窟が崩壊するかと思ったがその心配も無いみたいだ。

メイビスは真・進化を解き倒れた!

「メイビス!?大丈夫かメイビス!」

俺はメイビスを揺すつたが全く反応は無く、ぐったりしていた・・・ポケモンセンターに行く為、メイビスをモンスターボールに戻そうとしたが、メイビスのモンスターボールが反応しなかった!どうすれば・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 六十九話

六十九話

メイビスは元に戻ることは無く、モンスターボールも反応しない。意識も無く、ずっとぐったりとしている。

俺はメイビスをおんぶして、シヤラシテイに向かうことにした。

「待ってるよメイビス。必ず助けてやるからな」

俺はメイビスをおんぶしたままシヤラシテイへと足を踏み入れた。

現し身の洞窟内の破壊された岩の下では、謎の黒い影がポケモン達と一緒にいた。

「バロンのポケモン・・・色々と研究が必要だな」

『その前に、あの野生のポケモン、僕達の邪魔をしてくれちゃって、許せない！』

そう言ったのは、出口付近で待機していたエルレイドだった。

エルレイドは隠れている穴に拳を叩き付け怒りを露わにしていた。

「あの野生のポケモン、次会ったときに懲らしめればいいさ。今は、ここから出ることが先だよ・・・」

岩が思っていた以上に降り積もり、抜け出せなくなっていたのだ・・・

『ブレイン様。ダグトリオを起こして出口を作ってもらったら?』

そう言ったのは、サーナイトだった。

だが、普通の色とは違い、色違いのサーナイトだ。

ダグトリオが寝ている理由が・・・

バロンとの戦闘で穴を掘ったのは良かったが、俺が急いで穴に入ったときにダグトリオを思いっきり踏みつけてしまったのだ・・・

「そろそろ起きてくれないかダグトリオ?」

『うくん。頭が痛い』

『夢喰い!』

※夢喰い※【エスパー】

眠っている相手の夢を食う。

HPが回復する。

威力は100。

サーナイトがまだ寝ようとしているダグトリオの夢を食い、ダグトリオを強制的に現実に戻した。

『さっさとやれダグトリオ』

エルレイドは自慢の刀の腕で、ダグトリオの首元に当てた。

『直ぐにしますので！刀を納めてください〜！』

ダグトリオは涙目になりながらエルレイドに頼み、刀を引つ込めた瞬間、猛ダツシユで穴を掘っていった。

凄く速さで穴を掘り進み、あっという間に出口を開けた。

「流石だなダグトリオ。エルレイドとサーナイト、手助けありがとう。ようやく出られるよ」

『ブレイン様の為なら』

エルレイドとサーナイトは片膝をついて、頭を下げた。

紹介が遅れた・・・

俺の名はブレイン。

この世界の元・王だ。

今はポケモンリーグと言うのが出て、王だった私は負け、私の地位は地に落ちた。

私はこの世界が嫌いになり、この世界を破壊するため、強いポケモンを探し求めた。

今より更に強いポケモンを手に入れて！

俺のポケモンにサーナイトとエルレイドがいるが、こいつらは俺が旅をしてからずっと一緒にポケモンだ。

レベルも400と高く、基本的に負ける事はないが・・・

今日、野生のジュペッタ共に不意打ちを受け、負けたのだ。

ダグトリオはたまたま見つけたので穴を掘る要員としてGETしたが、こいつは手放そう。

強くないからな。

とりあえずここから出るか・・・

俺達はダグトリオが掘った穴を進み、現し身の洞窟を出ることにした。

ダグトリオは出口で俺達を待っていたが、もう用は済んだので手放した。

ダグトリオは直ぐに洞窟に戻って行った。

皆も思っていると思うが、俺がバロンの邪魔をしている理由。それは、バロンの持っている幻のポケモン【白龍】を手に入れるためだ。

あいつの力いい！

ゲイボルグの効果もとんでもないからな。

今ならまだLV200！

俺の手持ちはLV400！

捕まえるなら今だな！

「行くぞお前達！」

『はい！』

ブレインはエルレイドとサーナイトを連れ、出口に向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十話

七十話

今回は今まで登場した人物紹介を書きます。
本編の今までのまとめみたいなのがあるので読まなくても支障はありません。

主人公 バロン

アサメタウン出身の10歳の男の子。

アサメタウン出身のセレナとは幼馴染み。

メイスイタウンでダンテと合い、超最新ポケモン全国図鑑を貰い、ポケモンが一気に強化される。

夢はカロスチャンピオンになる事。

幼馴染み セレナ

アサメタウン出身の10歳の女の子。

アサメタウン出身のバロンとは幼馴染み。

メイスイタウンでダンテに超最新ポケモン全国図鑑を進められたが断った。

ミアレシテイでダンテに呼ばれ、バロンと旅をして貰うため、超ポケモン図鑑をセレナに渡した。

夢はカロスチャンピオンになる事。

マサラタウン出身 サトシ

相棒のピカチュウを連れ、各地方のポケモンリーグを制覇してきた10歳の男の子。

各地方に行く度、ピカチュウ以外のポケモンをオーキド博士に送り、その地方のポケモンと旅をしている。

夢は世界一のポケモントレーナーになる事。

褐色な少女 サナ

相棒のヒトカゲと旅をする10歳の女の子。

友達のトロバ、ティエルノと旅をしている。

夢はポケモン達に愛される事。

巨漢な少年 ティエルノ

相棒のゼニガメと旅をする10歳の男の子。

友達のサナ、トロバと旅をしている。

夢はポケモン達とダンスをする事。

小柄な少年 トロバ

相棒のフシギダネと旅をする10歳の男の子。

友達のサナ、ティエルノと旅をしている。

夢はポケモン達の写真を撮りまくる事。

ポケモン博士 プラターヌ

ミアレシテイの街でポケモンの研究をしている博士。

バロンとは、ある戦闘で負けてから友達になった。

元カロスチャンピオンだった男。

夢は勿論、ポケモン大博士！

相棒はボーマンダ。

現カロスチャンピオン カルネ

今のカロスチャンピオンの女性。

女優としても活躍しているので、スケジュールが詰まっている。

ポケモンリーグの大会がある時は必ず出席している。

相棒はサーナイト。

ジムバッジを8個揃えるとポケモンリーグに出場する事が出来る。

見事優勝するとその地方のチャンピオンと戦えるのだ。

チャンピオンに勝つことが出来れば、チャンピオンになれる。

ジム戦では、チャレンジャーに合わせてポケモンが変わる。

ハクダンジム・ジムリーダー ビオラ【ポケモン警察課報員】

虫ポケモン使いのジムリーダー。

色々な虫タイプを操り、チャレンジャーと戦う。

チャレンジャーが勝てば、ハクダンジム勝利の証【バグバッジ】が

貰える。

副職でポケモン警察課報員もやっている。

ミアレシテイ・ジムリーダー シトロン【電気屋】

電気タイプ使いのジムリーダー。

色々な電気タイプを操り、チャレンジャーと戦う。

チャレンジャーが勝てば、ミアレジム勝利の証【ボルテージバッジ】が貰える。

副職で電気屋を経営している。

シヨウヨウシテイ・ジムリーダー ザクロ【登山家】

岩タイプ使いのジムリーダー。

色々な岩タイプを操り、チャレンジャーと戦う。

チャレンジャーが勝てば、シヨウヨウジム勝利の証【ウォールバッジ】が貰える。

副職と言うか趣味？で登山家をやっている。

シヤラシテイ・ジムリーダー コルニ【訓練所副所長】

格闘タイプ使いのジムリーダー。

色々な格闘タイプを操り、チャレンジャーと戦う。

チャレンジャーが勝てば、シヤラジム勝利の証【ファイトバッジ】が貰える。

副職でポケモン訓練所の副所長を務めている。

ヒヨクシテイ・ジムリーダー フクジ【花屋店主】

草タイプ使いのジムリーダー。

色々な草タイプを操り、チャレンジャーと戦う。

チャレンジャーが勝てば、ヒヨクジム勝利の証【プラントバッジ】が貰える。

副職で花屋を経営している。

謎の影の正体 ブレイン

元カロスの王。年齢は不明。

全身黒で統一されており、銀色の髪をしている。謎に包まれた存在。

相棒は色違いサーナイト・通常のエルレイド。

ホウエン地方チャンピオン ダイゴ

鋼タイプを主に使うホウエン地方の現チャンピオン。年齢は28の男性。

各地の珍しい石を追い求め、日々探検している。

ホウエン地方のポケモンリーグが開かれるときは帰るようにしている。

相棒はメタグロス。

元フレア団・幹部 キース

悪タイプを使う元フレア団幹部キース。年齢は20の男性。

今はポケモン刑務所で監禁されている。

相棒はヘルガー。

フレア団・幹部 アケビ

悪タイプを主に使っているフレア団の幹部アケビ。年齢は22の女性。

カロス地方である事を企んでいる。

相棒はグラエナ。

フレア団・非公認体 バンズ

身体を改造され続けられた結果、支配の能力を持つことになった。

白龍との戦闘で、その能力が暴走し、今まで眠っていた力が全て目覚めた。

ポケモン自体を持つことは無いが、気に入っていたポケモンがいる。そのポケモンは、サザンドラ。

今はポケモン刑務所で厳重に監禁されている。

ポケモン警察所長 ハンサム

カロス地方のポケモン警察所長、ハンサム。年齢は40の男性。

カロス地方で悪巧みをしようとしているフレア団を追っている。

相棒はハッサム。

ユウキ家の主 閏炎（ぎよくえん）

ユウキ家を納めている主。歳は55歳の白髪のお爺さん。

ユウキ家ではバトルで全ての物事を決めるので、強くなければ何も出来ない。

本編では出てこなかったが、相棒のポケモンは、エンテイ。

大富豪の一人娘 ユウキ

大富豪の一人娘。年齢は12歳の女の子。

広大な敷地に野生のポケモンを住まわしている。

今はバロンのポケモンを預かっており、山と空を統括して貰っている。

相棒は、ディアンシー。

ユウキ家の執事 クラウス

ユウキ家の仕える高齢の執事。年齢は60歳。白髪が似合っている。

屋敷の事は全てクラウスに任されており、屋敷のメイドの管理もしている。

メイドからもユウキ家の皆もクラウスを頼りにしている。

本編には出てこなかったが、相棒のポケモンは、ガブリアス。

ユウキ家の女医代表 アテナ

ユウキ家に仕える女医さんの代表。年齢は45歳。

閨炎が屋敷を建ててからはずっとここで働いている。

相棒は、ハピナス。

ユウキ家の Baron 専属女医 リンとレン

双子の姉妹。歳は12歳。

仲が良い2人で、いつも一緒にいる。

Baronの専属女医になった。

今は亡きコウジンタウンの管理者 ゲンブ

コウジンタウンの管理者だった男。歳は100歳。

Baronに遺産を相続して貰い、天国へと旅だった。

生まれはカントー地方。色々な地方を旅し、カロス地方で生涯をえた。

ゲンブのポケモン達は全て、アルマトーレと言う今は幻の島に住んでいる。

結構な登場人物が出てました(笑)

26人を簡単に紹介しましたが、これからまだまだ登場人物は増えていきますので、楽しみにしてください。

アルマトーレで修行中のポケモンも相当強くなってから帰って来

ます。

セレナの物語があまり進んでいないので、バロンのメイビスの物語を進めてからセレナの物語を書きます。

フレア団もまだ幹部がいるので、後々出て来ます。

七十話は紹介だけなので、これで終わります。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十一話

七十一話

※シヤラシテイ※
比較的小さな町。

町の南側に民家とポケモンセンターがあり、北側は少し砂漠化している。

ジムはその中間辺りの左側にあり、階段を上った所にある。

砂漠の道を進んでいくと、マスタータワーがある。右側には12番道路へと続く道がある。

俺はシヤラシテイに着くと真っ先にポケモンセンターに向かった。

「女医さん！メイビスの意識が無くて！モンスターボールも反応しないんです！」

「分かったわ！直ぐに見るから私に預けて！」

「はい！」

俺はハピナスがいつの間にか持つて来たタンカーにメイビスを静かに乗せ、運んで貰った。

暫く待っていると女医さんが深刻そうな顔をして出て来た。

「治療は終わったのですが、貴方のポケモンは野生化しているみたいです」

「野生化？」

「何故だ？何故野生化したんだ？」

「野生化の理由は分かりませんが、先にGETした方が良かったと思います」

「わかりました」

俺は女医さんに連れられ、メイビスの所に向かった。

野生化したメイビスはまだベッドで眠っていた。

「GETするなら今のうちですよ」

「はい」

俺はメイビスが入っていたモンスターボールを腰のベルトから外し、メイビスに当てた。

するとメイビスはモンスターボールの中に吸い込まれ、モンスターボールが左右に2回程揺れた時、モンスターボールからメイビスが出て来た！GET失敗だ・・・

幸いメイビスはまだ眠っており、GET前同様、ベッドの上で眠っていた。

「流石に一回じゃGET出来ないか・・・何回も投げるしかなそうだな」
「頑張ってください」

俺はその後何回もモンスターボールを投げたが、一向に捕まらな
い・・・

流石に寝ているとはいえ、こう何回も失敗すると・・・

『私の眠りの邪魔をする者は誰だ』

デオキシス・・・メイビスは静かに起き上がり、聞いてきた。

「俺だメイビス。再び俺の元に戻ってきてくれよ」

『メイビスとは誰だ？私の名はデオキシス。宇宙から来た伝説のポケモンだ』

デオキシスは静かに浮くとサイコパワーで扉を開けた。

『眠りを妨げた事は許さぬが、今はバトルする気にもならん。さらばだ』

「待ってくれメイビス！」

俺は直ぐに手を伸ばしたが、デオキシスは瞬時にフォルムチェンジを行い、スピードフォルムに変わり、扉から出て行った。

スピードフォルムはデオキシスの形態の中でトップクラスの素早さを誇る。移動の時などに良く使われる。

「メイビス・・・」

「バロンさん・・・」

俺は体の力が抜け、床に崩れ落ちた。

女医さんが静かに俺の肩に手を置いてくれたが、ハピナスに呼ばれ出て行った。

女医さんも仕事が忙しく、戻らないと行けないから。

俺は・・・俺はどうすればいい・・・

伝説ポケモンであるデオキシスはGET難易度は☆☆☆☆だ。

※GET難易度説明※

☆で難易度を示す。MAXは☆☆☆☆の五個だ。

☆一個がGETしやすく、☆が多くなるほどGET難易度は高い。

デオキシスはその星が4つ。GET難易度は凄く高いのだ。

アルセウスはGETをする事が出来ない特殊なポケモンだ。

デオキシス・・・いや、メイビス。

必ず俺がGETするから、他の者にGETされるなよ。

俺は静かに全身の気を手に集め、床に解き放った！

その気は一気に広範囲に広がり、シヤラシテイ全域を越えた。

この気は索敵用。相手を探すときに効果的な気だ。

俺のこの気でまだ近くにデオキシスがいれば、バトルをして弱った

所をGETすように思っていたのだ。

だが、デオキシスはもうシヤラシテイにはいなかった。

俺は静かに立ち上がり、女医さんに一声かけてからポケモンセン

ターを出た。

今はデオキシスをGETする事が出来ない。俺にその力が無いか

らだ。

この世界のバッジはただ集めるだけではなく、その1つ1つに効果

があるのだ。

俺が持っているバッジの効果は、

バグバッジ・・・LV30までのポケモンをGETしやすくなる。

ボルテージバッジ・・・LV70までのポケモンをGETしやすく

なる。

ウォールバッジ・・・LV120までのポケモンをGETしやすく

なる。

デオキシスのLVは220。バッジの効果でGET出来る範囲を

超えているから、全然GET出来なかったのだ。

今はバッジ効果でLV300までを手懐ける事が出来るバッジを

手に入れなければならない。

冒険を進めよう。

俺は腰に吊しているモンスターボールからポケモン達を出した。

「皆聞いてくれ。今メイビスは野生化しており、LV220の状態。今の俺ではGET出来ない。だから！GET出来るようになるためにバツジを集めに行く。後、メイビスをGETするために戦う事にもなるかもしれない・・・皆。手伝ってくれるか？」

『マスターの為なら何でもしますよ』（メタグロス）

『マスター！手伝わせてもらおうぜ！』（ブリガロン）

『マスターの為なら手伝わせてもらおうぞ』（ゾロアーク）

『我も手伝おう』（レックウザ）

「皆・・・ありがとう！」

俺達はポケモンを出したままシャラシテイのジム、シャラジムに向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十二話

七十二話

「やあ君達！ポケモンを引き連れてどうしたんだい？」

ジムの前に立っていた男性にそう言われた・・・

まあ確かにトレーナーがポケモンを全て出して歩くと言うのは基
本しない事だしな。

しない理由は、自分の手持ちポケモンが分かってしまうからだ。

「ジムに挑戦しようと思ひまして。俺の仲間達で！」

俺はバツと両手を広げ、俺の仲間達を示した。

「ほほう。ジムに挑戦でしたか。どうぞお入りください」

男性の方はジムの扉を開け、俺を中に招き入れた。

そのまま通路をまっすぐ進むとバトル場があった。

「このバトル場がジムバトルをする所です。ジムリーダーはもう直ぐ
来る頃かと」

突如ジム全体の灯りが消え、ジムの中にあつた高台にスポットライ
トが照らされた！

「やあー私がここのジムリーダーコルニ！格闘タイプを使うよ。とく
う！」

高台から飛び降りた少女は華麗に着地し、ジムリーダーのバトル位
置に立った。

「俺はバロン！あなたを倒してファイトバツジを手に入れるぜ！」

「いいじゃない！」

バトル場の中央辺りにいた審判が赤旗を掲げ、

「これより！チャレンジャーバロン対ジムリーダーコルニのシヤラジ
ム戦を開始する！使用ポケモンは3体。ポケモンの交代はチャレン
ジャーのみとする！それでは・・・始め!!」

審判は赤旗を勢いよく振り下ろした！

シヤラジム戦

☆バロンVSコルニ☆

「いけ！メタグロス！」

「出ておいで！カイリキー！」

※カイリキー※ 【格闘】 LV180

4本の腕を持っており、それぞれ様々な動きをする事が出来る。
ワンリキーの最終進化系。

特性は「ノーガード」

いきなり厄介なポケモンが出て来たな。

「メタグロス！最初からクライマックスだぜ！進化を超えろ！メガ進化！」

バロンの腕に付けているキーストーンが、メタグロスの腕に付けているメタグロスナイトと共鳴！

2人を虹色の光が包み込んだ。光が収まるとメタグロスはメガメタグロスになっていた！

「メガ進化かあ〜厄介だけど！カイリキー！爆裂パンチでまずは混乱を狙うよ！」

『了解！』

「メタグロス！コメットパンチだ！」

『了解！』

2体のポケモンが同時に動き、技を使った！

メタグロスは体全体でコメットパンチを使い、カイリキーは4本の腕で爆裂パンチを使った。

2体の技はバトル場の中央で激突！

砂嵐が巻き起こったが、直ぐに晴れ、2体は元の場所に戻った。

「なかなかやるじゃない！」

「ありがとうございます！」

2人はニツと笑うと、ポケモンに指示を出した。

「カイリキー！」

「メタグロス！」

「ギガインパクト！」

『ウオオオ！』

2人は同時に命令を出し、2体は同時に技を発動させた！

先に技のチャージが終わり、動いたのはメタグロスだった！
カイリキーはまだチャージ中で動けない。

メタグロスはカイリキーにギガインパクトをクリティカルヒットさせた！

その攻撃を受けたカイリキーは壁に激闘し、戦闘不能になった。

「カイリキー戦闘不能！メタグロスの勝ち！」

審判がそう言い、カイリキーとの戦闘は俺の勝ちで終わった。

「お疲れ様カイリキー。 Baron 君のメタグロスは早いね。だけど。出て来て！ルチャブル！」

※ルチャブル※【格闘・飛行】LV190

特性【軽業】

持っている道具が無くなると、素早さのステータスが2倍になる。
小さい体からは想像も付かないパワーを秘めている。

次はルチャブルか・・・

相性は俺のメタグロスが上だが、何か企んでるな・・・

「ルチャブル！高速移動を使ってメタグロスの周りを走れ！」

「メタグロスも高速移動を使い！」

※高速移動※【エスパー】

自分の素早さは凄く上げる。

ルチャブルの元の素早さはメタグロスより下。

コルニは素早さを補う為に高速移動を使ったみたいだが、俺のメタグロスにも高速移動を使えば何も問題ない。

ルチャブルはメタグロスの素早さを超えることは出来ないのだ。

「くっ！ならば！ルチャブル！跳び膝蹴り！」

※跳び膝蹴り※【格闘】

威力130の高い威力を持つが、技が失敗すれば自身にダメージを受ける。

ルチャブルは高く飛び上がり、メタグロス目掛け、跳び膝蹴りを使ったが、

「メタグロス！サイコキネシスで動きを止め、地面に叩き落とせ！」
『了解！』

メタグロスのサイコネシスが急降下して来るルチャブルを捕らえ、地面に叩き落とした！

ルチャブルはそのまま戦闘不能になった。

「ルチャブル戦闘不能！メタグロスの勝ち！」

「まさかルチャブルが負けるなんてね。次が私の最後のポケモン！来て相棒！ルカリオ！」

『やつと俺の出番か』

ルカリオは腕を組んで登場した。

※ルカリオ※【格闘・鋼】LV220

特性【不屈の心】

怯むたびに素早さのランクが1段上がる。

波導を操るポケモン。

伝説のトレーナーアローンの相棒だったと記されている。

ルカリオ・・・

腕に付いているあのリングは、ルカリオナイトだな。

「バロン君も気付いたみたいだね。それじゃ行くよ！ルカリオ！メガ進化！」

コルニはネックレスに付いていたキーストーンに触れ、ルカリオの腕に付いているルカリオナイトと共鳴！

虹色の光が2人を包み込む！光が収まるとルカリオはメガルカリオになっていた。

特性も【適応力】に変わり、自身の出す技の威力を2倍にするという効果。

メガルカリオ・・・

なかなか厄介だが、俺のメガメタグロスに勝てる筈はない。油断はしないが気を引き締まるか。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十三話

七十三話

シヤラジム戦

☆コルニVSバロン☆

コルニの残りはメガルカリオだけ。

俺はまだメガメタグロスの他に2体、控えている。

この勝負、勝たせてもらおうぞ！

「行くよ！ルカリオ、拔刀！」

「拔刀!？」

※拔刀※

オリジナル技。

刀系統の時に良く使われる。

「炎を追加よ！炎剣！」

※炎剣※【炎】

刀に炎を纏わせる。

威力は技量により変わるため、測定が出来ない。

ルカリオは炎剣を両手で持ち、構えた。

こうなったら！

「メタグロス！ギアチェンジ！更にステルスロックを自身に装備！」

『了解！』

※ギアチェンジ※【鋼】

自身の攻撃力を上げ、素早さを更に上げる。

※ステルスロック※【岩】

辺りに鋭い岩をばらまく。相手がポケモンを交代するとき、自動で

襲いダメージを与える。

メタグロスはギアチェンジを素早く使い、ステルスロックを出した。

そのステルスロックを自身に全て覆い、装備させた。

これで攻撃力が上がった状態に、更に素早さも上げた状態。更に！
無数の岩を装備。

守りも攻撃もこれで万端だ！

「もう良いかな？」

「待っていてくれたんですね。」

「勿論♪この力を使うのに相応しい相手を完璧な状態で倒したいからね」

「分かりました。では！今の最終形態をお見せしましょう！」

『あの形態ですね？』

「そうだ」

メタグロスは体に纏っていた岩を全て消し、メガ進化も解除した。
そして……

「メタグロス！進化の真骨頂を見せろ！擬人化！」

「擬人化!?!」

メタグロスの体から白い光が溢れだし、メタグロスのポケモンの体が人間の姿に変わっていく！

これを見たコルニも審判もこの力は知らなかったなので、驚愕している。

メタグロスは青色のロングの髪に紺色のドレスを着た女の子に擬人化した。

『お……おんな……だと……』

ルカリオは男だと思っていたのだろう。

いつも僕って言うてるし……

コルニと審判も最初は驚愕していたが、擬人化したメタグロスを見てから頬を緩めた。

だって！超美少女だから！

「なんて可愛いのよ！あぁ〜！いいなあ！」

「可愛い……」

審判はボソツと呟いた。

コルニは普通に大声でそう言い、バトル場に入ろうとしていたが、ルカリオに止められていた。

「コルニさん。もう少し待ってくださいね。」

「勿論よ！」

「メタグロス、完成形まで進めるぞ」

『はい！』

擬人化の時、安定して力を使うとき、魔法陣が展開される。メタグロスの魔法陣は青色だった。

メタグロスは目を閉じ、魔法陣を展開。魔法陣から青い光が溢れ出した。

『僕に魔法の力を！魔装せよ！大地の女神・ガイア！』

メタグロスは宙に浮き、魔装を開始した。

頭には緑色のティアナを付け

紺色のドレスは白色と紺色の2色に変わり

足には銀色の軽い鎧が装着され

右手に長杖が握られていた。

杖の先端部分には、青い宝玉が飾られている。

擬人化のメタグロスの力。それは、神の力を纏うことが出来る事だったのだ。

メタグロスは魔装を完成させ、タイプが追加された。今のメタグロスのステータスは、

メタグロス・ガイア魔装【エスパー・地面・神】

特性【魔法強化・ガイアの加護】

魔法強化は魔法攻撃を強化する事が出来る。

ポケモン界では、例えるなら破壊光線とかが当てはまる。

ガイアの加護は、大地を支配する事ができ、受けるダメージも半減する事が出来る。

更に自動で体力も回復する。

『マスター。魔装完成です』

「良くやった！コルニさん。お待たせしました！」

「あ！ああ！うん！バトルだよね！」

『あの子とバトルか・・・』

コルニとルカリオは調子がおかしくなったみたいだが、大丈夫なのだろうか？

「あの？バトルしていいですか？」

「え？ああ！うん！大丈夫だよ！行くよルカリオ！波導弾！」

「そうこなくちや！メタグロス！大地でガードしろ！」

『大地よ。僕を守って』

メタグロスはそう言うのと、目の前の大地・・・今はバトルフィールドがメタグロスを守るように、盾となった！

波導弾はその大地の盾により、攻撃を防がれた。

この大地の盾は防御が高く、メガ進化しているルカリオですら破壊出来なかった。

「破壊すら出来ないなんて。ならば、ルカリオ！炎剣斬！」

『了解！その盾、破壊してやる！』

ルカリオの右手に持っていた炎剣で大地の盾を攻撃した。

大地の盾は燃えたが、まだ破壊出来ない。ルカリオは破壊出来るまで攻撃を続けた。

その間、メタグロスの持っている杖が光りを増していった。

そろそろ頃合いかな。

『マスター。いつでも発動出来ますが、この攻撃をするとジムが壊れちゃいますよ』

『そうなの？』

『はい。この技は広範囲技でして、このシヤラシテイすら破壊出来ちゃいます』

「えげつないな・・・他の技にするよ」

『はい』

コルニとルカリオは大地の盾を破壊するのに夢中だから、話しは聞かれていない。

他の技は・・・これにしよう！

「メタグロス！ウォールクラッシュの準備を。盾が破壊された時に放て」

『はい』

※ウォールクラッシュ※【岩】

相手に岩をぶつけ爆発させる。

技量により、威力は大きく変わる。

メタグロスの持つていた杖から岩が出て来たが、まだ放たない。待機中の岩はどんどん大きさを増していった。早く放たないと爆発が凄まじくてジムが崩壊する。

その時、大地の盾に亀裂が入った！

「よし！この攻撃で大地の盾を破壊だ〜！炎帝斬！」

『ウオオオオ！』

※炎帝斬※【炎】

炎剣の上位版。

更に炎を纏い攻撃する。当たった場所に炎が燃え移る。

威力は技量により大きく変化する。

ルカリオは炎帝斬を上段斬りで大地の盾を切り裂いた！

大地の盾は激しく燃え、切り裂いた場所から崩れていった。

だが、その盾の先に見える物は絶望しか無かった・・・

「メタグロス、放て」

『はい。ごめんねルカリオ。このバトル僕の勝ちだ』

メタグロスは待機させていた大岩を、盾を破壊したルカリオに放った。

その瞬間、メタグロスは数歩下がり、バロンの直ぐ側により、

『大地の大楯！』

メタグロスは先ほどの盾より更に大きく分厚い大地の盾を出現させた。

その瞬間、ルカリオが大岩が当たった。

「メタグロス！コルニに盾を！」

『もうやってますよ。ルカリオは・・・対戦相手だから・・・』

「仕方ないか・・・戦闘不能になるだけだよね？」

『勿論です』

その頃コルニは・・・

よし！この炎帝斬で最後だ！

盾は破壊され、メタグロスに攻撃すれば！

ルカリオが大地の盾を破壊した時、目の前に見えたのは、メタグロスが大岩を待機させていた時だった。

その大岩、メタグロスが持っていた杖を振り下ろした瞬間、ルカリオに飛んで来た！

その時、コルニの足下が膨れあがり、コルニは尻餅を着いた。

その膨れあがった場所は先ほど破壊した大地の盾があった。ルカリオの姿は見えない。

その後、大地が揺れる程の衝撃が起きた！

あの大岩が爆発したのだ。

コルニは咄嗟に大地の盾にしがみつき、飛ばされないようにした。ルカリオは目の前で起きた爆発により大きく飛ばされ、コルニがいる大地の盾にぶつかった！

ルカリオは爆発により飛ばされるときに、波導を放出させダメージの軽減は出来たが、受けたダメージは相当大きい。

この爆発は直ぐに収まったが、俺達を救ってくれた大地の大楯は、半壊状態。コルニの盾も大楯だ。

メタグロスはバトル中でも、周りを良く見ていて、爆発が始める前に審判の方、ジム全体に大楯を発動させたのだ。そのおかげでジムも人も安全だった。

これ程の力を使っているのに、メタグロスは疲れも見せていない。それは、ガイアの加護の効果もあるだろう。

自動で体力が回復させる効果で、大技を使っても少し経てば回復するのだから。

この力はメリットが凄く良いが、勿論、デメリットもある。それは、『マスター。こつちを見ないでくださいね。魔装を解除するので』

「あ、ああ。向こうを向いておくよ」

力とはあまり関係ないが、魔装を解除するとき、着衣が無いのだ。そのせいで、一番始めの時は死にかけたからな。

『もう大丈夫です』

そう言われ振り返ると、ポケモン状態のメタグロスがいた。

少し残念だが、擬人化の方が良かった。

「さあ、コルニの元に行くか」

『はい』

俺達は少し煤の臭いが残るバトル場を歩き、コルニの元に行った。大地の大楯は、メタグロスが擬人化を解くときに、消しているのだからもうない。

勿論、見えないようにしてからだけど・・・

「ああ。バロン君ね。勝利おめでとう！これが勝利の証、ファイトバッジだよ！LV200まではポケモンがGETしやすくなるよ」

「ありがとうございますーファイトバッジ、GETだぜー」

『よしー！』

メタグロスで完封勝利も出来たし、擬人化の魔装も問題なかった。

さあ！次の冒険にどうか！

「ところでさ。バロン君に話があるので事務所まで来てくれるかな？」

あ・・・

やっぱりこうなるよね・・・

「はい・・・」

俺はコルニに連れられてジムの隣にある、事務所に向かうことになった・・・

審判の方は先ほどの勝負で気絶したみたいなので、ルカリオが抱えて着いてきていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十四話

七十四話

俺はコルニとのジム戦後に事務所に呼び出された。

今は月が輝く雲1つ無い夜空が広がっている。

「さっきのバトルなんだけど」

「そうですね・・・」

やはり先ほどのバトルの事か。

誤魔化すことは出来ないだろうから、どうすれば・・・

「バロン君が言っていた進化の真骨頂、擬人化と言っていたけど、それはどう言う事なのかな？」

「それは、ポケモンの力だけでは為し得ない事をするには、人の力が必要です。その力をポケモンと1つにするには、ポケモンが人に近づければいいと思い、修行の末に辿り着いたのが・・・」

「擬人化と言う訳ね」

「はい」

コルニは少し考えると、

「それは、どのポケモンにも可能性はあるのかしら？」

「今はまだ分かりません」

多分だが、レベルは少なくとも100は超えないといけないはずだ。擬人化は進化の先にある進化だから・・・

「バロン君のポケモンは皆、擬人化出来たりするの？」

「はい。皆出来ます」

「じゃあもう一回私とバトルしよ！違うポケモンで」

他のポケモンの擬人化でバトルしたいとの事だろう。俺も擬人化でのバトル経験は少ないから丁度いい。

「了解しました」

「ありがとう！」

コルニはバツと立ち上がり、伸びをしてから俺に言った。

「リベンジをかねて勝負だ！バロン君！」

「はい！」

俺達は事務所を出て、町の広場に来た。

審判の方は住人の観戦をさせない為に、避難警告を出し町から少しの間遠ざけた。

これはポケモンが擬人化出来る事を皆に知らせない為だ。

後、擬人化の時にフルパワーを使うとどうなるかが分からない為、本当に街規模の被害が出た場合の考慮もあるが・・・

町の住人がいないことを再確認してから、審判の方が赤い旗を掲げた。勝負が始まる・・・

「それではこれより！コルニVSバロンのバトルを始める！使用ポケモンは1体！それでは、始め！」

シヤラシテイ戦

☆コルニVSバロン☆

「出て来て！ルカリオ！」

「出てこい！ブリガロン！」

「先にしちやうよ！ルカリオメガ進化！」

「俺も！ブリガロン、進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化！」

コルニはルカリオをメガ進化させ、俺はブリガロンを擬人化させた。

ブリガロン擬人化の時の見た目は、剣士の少年。

茶色の髪色をしており、鎧は緑をメインとしたのを着ている。

擬人化の時の能力は【格闘特化型魔法戦士・能力アップ】

※格闘特化型魔法戦士※

基本戦闘は全て接近戦。

魔法はステータスアップの時に使う。

※能力アップ※

ステータス系統の能力を使うときの効果がアップする。

「ブリガロンの擬人化も可愛い〜」

『可愛い言うな！マスター早く戦おう！』

「おうー！」

ブリガロンは、腰に装着してある2本の剣を抜いた。ブリガロンは2刀流の剣士なのだ。

「攻撃、素早さ、防御を上げろ」

『了解』

ブリガロンは何の動作も無く、ステータスアップの魔法を掛けた！
「凄い・・・擬人化の時って何でも出来ちゃうの？」

『違うよ。僕の特性が特殊なだけだから』

ブリガロンはコルニにそう言うってから構えた。

『もうバトルは始まっているよ。仕掛けてこないなら』

ブリガロンは俺の方をチラッと見てから前を向いた。

言いたいことは分かっている。さあ、始めようか！

「ブリガロン、アタック開始だ！炎と格闘を剣に！行け！」

『了解！』

ブーン・・・

ブリガロンの剣にその音が鳴った時、左に炎の剣。右に黒い剣に変わった。この黒い剣が格闘の剣。武装した時に色が変わったのだ。

「ルカリオ！ボーンラッシュで対抗して！」

『おう！』

メガルカリオが動いた瞬間、ブリガロンも動いた。

ブリガロンはステータスアップの恩賜のおかげで素早さが段違いに早い！瞬く間にメガルカリオの懐に潜り込み、2本の剣で切り裂いた！

メガルカリオはその攻撃を受けよろめいた！

「追撃！」

「ちよ！早いって！」

ブリガロンは更にメガルカリオを切り裂き、ぶっ飛ばした！

メガルカリオはその攻撃を受け、地面に叩き付けられ戦闘不能になった。

その時にメガ進化も解けた。ブリガロンもバトルが終わったので擬人化を解きポケモンの姿に戻った。

「お疲れ様ブリガロン」

『お疲れ様ですマスター』

「手加減してよく戻ってルカリオ。お疲れ様」

コルニは頬を膨らませ俺にそう言つて来たが、これでも手加減したほうだ。

「今度からもう少し手加減しますね」

「うゝん。本気のバトルしたけど、したらバロン君のポケモンに無双されるし……困つたよゝ！」

「あははは……」

確かに、本気バトルしていいなら無双出来るだろう……

だが、これじゃカロスチャンピオンに勝つのは無理だろう。今になつて分かつたが、カルネのサーナイトのレベル……600は軽く超えている。

この世界のポケモンバトルでいくつかおかしな点があるな……ポケモンの最高レベルが1000。これを超えることは出来ないと言われてる。

ポケモンのステータス。これには上限自体が無い。なので、やり方次第で伝説の力に匹敵する。

ポケモンの特性。この世界のポケモンの特性は基本は1つ。希に特性を2つ以上もつポケモンも確認されている。

バトルの時、普通なら死ぬだろう攻撃もどこかで制御されている。

考えると切りが無いな……

バトルも終わつたし、旅を続けるか。

だけでもう夜なのでポケモンセンターの宿泊施設で寝よう。

「バロン君。今日の止まる場所決まってる？」

「決まってるんですがポケモンセンターの宿泊施設で寝ようと思つてます」

するとコルニは少し慌てて、

「今日の宿泊施設……埋まってるって報告があつただけ……」
「え？」

俺は固まった……

宿泊施設が埋まる？

そんな筈無いよね？

「一応確認の為にポケモンセンターに行つてみます」

「分かった。一応私も着いていくね」

「はい」

俺はコルニを連れて小走りでポケモンセンターに向かった。

審判の方は片付けをしてから自宅に帰るそうだ。

ここからポケモンセンターまでは15分程で着く。それまで会話が無かったので俺から話しかけることにした。

「コルニさんはどうしてジムリーダーをしようと思ったんですか？」

「え？私がジムリーダーになろうとした理由？」

コルニは少し考えこう言った。

「私はバトルが好き。ポケモン達と共に修行するのも好き。それと、人に教えるのが好き」

「教える事が好きなんですか？」

「うん。チャレンジャー達が私を倒してジムバッジを貰う。その人達がポケモンリーグで会うことになる。その時、無知のままだと直ぐに負けるでしょ？だから助言を少しだけ言ってから旅をさせるの」

「俺には？」

俺は助言されてないぞ？

「バロン君は強い。ポケモン達にも信頼されている。後、誰にも為し得なかったポケモンが人になる擬人化。今のバロン君なら6個目のバッジの人にも勝てるよ」

ん!?!6個目なのか!?

「コルニさん？俺の今の強さじゃそこまで何ですか？」

「そうだよ。6個目の人は平均レベル500。メガ進化もするし、伝説ポケモンも使ってくるよ。バトル相手に手加減しないジムリーダーとして近頃有名になったんだ」

手加減しないジムリーダーね・・・

俺の今までのジムリーダーも手加減してなかったような？

ん？ジムリーダーの手加減と俺の思っている手加減と少し違うのかな？

「先にバロン君は5個目のバッジだね！今のバロン君なら大丈夫だよ！」

「ありがとうございます！」

話していたらポケモンセンターに着いた。

俺達はポケモンセンターに入り、女医さんに宿泊施設の空きが無い
か確認を取ったが、今日は空きがありませんと言われてしまった。

「だから言ったでしょ？」

「どうしよう・・・」

「バロン君。私の家に来ない？」

ん？今なんて言ったんだ？

「えくと？」

「だから私の家に止まらないかって事」

「いいんですか!？」

「もつちろん!」

コルニは俺の手を引いて歩いて行つた。

コルニの家は民家で家の中は必要な物以外は何も置いていなか
た。

「何も無いけどゆっくりしていつてね。と言つても寝るだけか」

コルニはニコツと笑いそう言つて着替え始めた。

「え!?!ちよ!ちよつと待って!ここで!？」

「バロン君慌てすぎ!」

コルニは俺の慌てように凄く笑っていたが、驚くに決まっているだ
ろう!女性に対して免疫の無い俺にとっては!

「それじゃバロン君はそっちの部屋ね。私は自分の部屋で寝るから
さ」

「分かった。ありがとうね」

とりあえず着替えるの冗談だったようで、寝室に行つてから着替え
たみたいだった。俺ももう一つの部屋に入り、着替えてから寝た。今
日は気付かない内に疲れていたのだろう。直ぐに寝むれた・・・

ヒヨクシテイ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十五話

七十五話

少し時が遡り、バロンがコルニと2回目のバトルをしている時、とある民家の物陰にブレインはいた。

「バロンのポケモン・・・擬人化って言ってたが、今更か・・・」

ブレインはそう言いサーナイトとエルレイドを見た。この2体も擬人化が出来るのだ。

『バロンも修行の末に発見したんだろう?』

『ならば問題は無いでしょ?』

「2人で攻めるなよ」

ブレインは引きつった顔でそう言い、バロンの戦いを再び見た。

ブリガロンの擬人化の戦いは、2本の剣で主に戦い魔法でステータスアップか。

ステータスアップの時が一番厄介だな。手に負えなくなる・・・

『ステータスアップをさせなければ対したことないですね』

『アップしても俺は勝つがな!』

「問題無いのか?」

正直不安だな・・・

ステータスアップさせなければ確かに大丈夫だと思うが、対処の仕方・・・

能力封じ・・・この技は太古の技。俺やサーナイトは技を覚えてるが、筋肉馬鹿のエルレイドは技自体忘れているだろうな。

「サーナイト、能力封じの技は覚えているだろう?」

『勿論です。その技を使い、ブリガロンの技を封じるのですね?』

「その通りだ」

流石サーナイトだ。俺の意思を直ぐに理解してくれる。

『能力封じって何だ?』

『あなたは黙ってなさい。ややこしくなるから』

『うん．．．』

エルレイドはやはり忘れているな。昔にこの技を使っていたが、基本使うことが無かったし、仕方ないか．．．

ブリガロンの試合を見ると、メガルカリオがぶっ飛ばされて戦闘不能になっていた。

一般の奴等に使うと無双だな。

近いうちにバロンと手合わせするか。白龍の擬人化と戦いからな。

「エルレイド、お前にはブリガロンとの戦闘で頑張って貰うから難しい事は考えるな」

『おう！戦闘なら任せとけ！』

『全く．．．』

俺はサーナイトのテレポートを使い、シャラシティを出た。

一方セレナはヒヨクシティに無事に着き、ポケモンセンターで休息を取っていた。

セレナのポケモンはダンテから貰ったの新・ポケモン図鑑で強く育っていた。

※ヒヨクシティ※

緑豊かな町。シーサイドエリア（海岸側）とヒルトップエリア（崖側）に別れており、そこを行き来するためにモノレールが完備されている。

ヒヨクジムとポケモンセンターはヒルトップエリアだ。

「バロンは今どこら辺かな？もう着いてると思ってたけど．．．」

『心配するな。バロンは1週間程でヒヨクシティに到着する』

「アブソル．．．ありがとう！私達は先にジムに挑戦しよう！」

セレナはヒヨクジムに向かう事にした。

※ヒヨクジム※

草タイプの使い手のジム。

ジムには巨大樹があり、その上辺りにある窪みにジムリーダーのフクジがいる。

フクジに勝てば「プラントバッジ」が貰え、LV300までのポケモンが捕まえやすくなる。

私達はポケモンセンターを出て、ヒヨクジムに向かおうとしたとき、空から伝説のポケモン、デオキシスが私達の目の前に降りてきた！

「え!? デオキシス?!」

『我、バトルが強くなったか確かめたい。お主は強そうだからバトルを挑む』

デオキシスは私達とバトルしたいみたいだけど、このデオキシスのLV350なんだけど・・・

勝てるのかな？

「良いよ。場所を移しましよ」

『我が運ぶ。我に触れてくれ』

私はデオキシスの体に触れたその瞬間、別の場所に転移した！

「ここは？」

『先ほどの場所から100キロ程離れた孤島だ。ここなら思う存分バトルが出来るだろう?』

孤島!?

「そ、そうね。バトルが終わったら元の場所に帰してね?」

『勿論だ』

良かった

それじゃ天気も良いし、いっちょやりますか!

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十六話

七十七話

ここはヒヨクシティから100キロ程離れた孤島。

私達が何故ここにいるかと言うと、伝説のポケモン、デオキシスにバトルを挑まれ、承諾した後ここに運ばれた。

孤島バトル

☆デオキシスVSセレナ☆

「出て来て！アブソル！」

『我、バトルを開始する！』

伝説のポケモンとのバトルが始まる！

う〜！緊張するな〜！

「アブソル、剣の舞」

『影分身シャドー』

※剣の舞※【ノーマル】

自身の攻撃力を格段に上げる。

※影分身シャドー※【ゴースト】

影分身とシャドー達を同時に作り出す。

影分身にシャドーか・・・

「アブソル、鎌鼬よ！」

『シャドー達よ！シャドーボール一斉発射だ！』

※鎌鼬※【ノーマル】

周りに風を発生させ、鎌鼬を発射する。

デオキシスの影分身が消え、シャドー達が一斉にシャドーボールを放って来た！

アブソルはまだ鎌鼬の準備中で風が起こった時だったが、ギリギリ間に合った！

「急いで放って！」

『分かっている！』

アブソルはシャドーボールが当たる前に鎌鼬を発射でき、迫ってくるシャドーボールを相殺出来た。

『お主達、そろそろ本気を出したらどうだ？』

「その言葉に甘えさせて貰うわ。アブソル！メガ進化！」

セレナのブレスレットに詰め込まれていたキーストーンがアブソルの付けているアブソルナイトと共鳴し、メガ進化した！

『では、我も・・・メガ進化！』

デオキシスの体から光が輝きだし、姿が変わった！

全身はオレンジ色から金色に・・・

姿はノーマル・アタック・ディフェンス・スピードフォルム全ての集合体の様になり、阿修羅像みたいな感じになった。

身体も一回り大きくなっている・・・

シャドー達はメガ進化した時に消えた。

「デオキシスがメガ進化・・・」

『そんな筈は・・・』

『驚くのも無理は無い。この姿は我が考え出した姿なのだから』

伝説のポケモンが自ら考え出したメガ進化の姿。

どんな効果があるのか想像が付かない・・・

ダンテから貰った新・ポケモン凶鑑でも検索出来ないのだ。

『我には検索系統は効かぬ。特殊な磁場が発生しているからな』

「ご丁重にどうも。アブソル、私達から仕掛けるよ！悪の波動！」

メガアブソルは悪の波動をメガデオキシスに放ち当てた！当てた衝撃で爆発も起こった。

「よし・・・」

メガデオキシスの周りの煙が晴れた時、何事も無かった様にメガデオキシスはそこにいた。

メガデオキシスは悪の波動が当たる直前にディフェンスフォルムの効果で守るが発動し攻撃を防いだのだ。

先にメガデオキシスの特性について説明しよう。

特性【オート機能・阿修羅・神の威厳】

※オート機能※

メガデオキシス専用特性。

全てのフォルムの集合体であるデオキシスの機能をいつでも発動

出来る。

※阿修羅Ω※

それぞれの思考で行動に移ることが出来るメガデオキシス専用の特性。

4つの顔に8本の腕があるので阿修羅Ωとデオキシスが名付けた。

※神の威厳※

相手を威圧して行動を制限する激レア特性。

任意に発動出来る。

この3つがメガデオキシスの特性だったのだ。

今はまだ神の威厳を使っていない。

『では次は私の番だな。』

「来るか!？」

メガデオキシスの8つの手から炎、水、草、鋼、地、超、龍、妖の属性が出て来た!

「あれはなに!?それぞれの属性!？」

『察しが良いな。さあ!食らうがいい!8属性の技!エヴォリユーションバースト!』

※エヴォリユーションバースト※【それぞれの属性】

それぞれの属性を放てる一斉に放てる特殊技。

威力も各属性の一番高い物になる。

メガデオキシスから一斉に放たれたエヴォリユーションバーストはメガアブソルに向かって来た!

「避けてアブソル!」

メガアブソルは横にステップ移動し、1つめを避けたが次がもう迫ってる!

メガアブソルは直ぐに横に移動し、走り出し2つめを避けた。

「そのまま高速移動を使いながら避けて!」

メガアブソルは移動するスピードを高速移動を使い、更に早く移動して3つめを避けた。

『姑息な・・・』

メガデオキシスは5つめく8つめをサイコキネシスで当たる場所

をコントロールした。4つめはもうメガアブソルが避ける瞬間だった。そこをサイコキネシスでコントロールした3つの属性弾を3方向から放った！

「アブソル！守るを使って！」

『了解！』

『5個目の技だ?!』

基本ポケモンの技は4つまでしか使えないのだ。

それが5つ・・・

メガアブソルは守るを使い、4属性の技を防いだが、守るの技が4つめの技の時に破壊された！

もし3つめに破壊されたら危なかった・・・

『守るも万能じゃ無いって事だな・・・新たに学べて良かった』

「私もよ」

セレナは次にどのようなようにしてメガデオキシスを倒すかを考えていた。

悪の波動は防がれるが、守るは万能じゃ無い。だけど、あれは4つ同時の攻撃の時だった。

鎌鼬と悪の波動の連携を・・・

いや、その間に攻撃される・・・

『考えは纏まったか?』

「まだ・・・」

『セレナ・・・なぜ返答したんだ・・・』

「あ・・・」

メガアブソルは溜息を付き、メガデオキシスは笑い出した。

『お主なかなか面白いな！もうバトルはよい。また今度バトルしようじゃないか』

「あ、ありがとうございます」

メガデオキシスはメガ進化を解き、メガアブソルもメガ進化を解いてモンスターボールに戻って行った。

『それじゃ我に触れておくれ』

「うん」

セレナはデオキシスに触れ、元の場所に戻ってきた。

『では、またな』

「ありがとうね！」

セレナは手を振りデオキシスを見送った。

デオキシスは飛び去るときに笑顔だったような気がしたが、気のせいかな？

セレナはアブソルを回復させるためにポケモンセンターに行くことにした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十七話

七十八話

アブソルを回復させた私は再びヒヨクジムに向けてポケモンセン
ターを出た。

今回は何事も無く、ヒヨクジムに到着して、ジムに挑む事が出来た。

「ようこそ儂のジムに。ジムリーダーのフクジじゃ」

「チャレンジャーのセレナです！ジム戦お願いします！」

「良からう。だが、儂の所まで登って来ておくれよ」

フクジのいる場所は巨大樹の上の方にある窪みにいる。セレナは
ジムの入り口……

辿り着けるかな？

「頑張つてな」

「はいー」

とりあえず辿り着かないとバトルが出来ない。セレナはモン
スターボールからピジョットを出した。

「私をフクジさんの所に送って」

『了解！』

「そう来るとは。フォッホッホッホ」

フクジさんは白い顎髭を摩りながら笑った。あそこに登るにもツ
タや足場が悪いんだもん。

セレナはピジョットの力を借りて無事にフクジさんの場所まで辿
り着いた。

「ではフクジさん！バトルをお願いします！」

「勿論じゃ。少し待っておれ」

フクジは近くあった杖の赤いボタンを押した。すると……

ジムの巨大樹の側にあった崖が動き、バトル場へと変貌した！その
バトル場への通路がこの窪みに伸びていき、接続された。

「いつ見てもジムのこの光景は凄いですね」

「フォッホッホッホ。では、行くかの」

「はい」

フクジさんは笑ってからそう言い、バトル場へと進んでいった。セレナもその後には続き歩いて行った。

バトル場では既に審判の方が待機していてくれた。私達はそれぞれの場所に行き、スタンバイした。

「それではこれより、ヒヨクジムのバトルを始めます！使用ポケモンは4体！ポケモンの交代はチャレンジャーのみ許されます！それは……始め！」

ヒヨクジム戦

※フクジVSセレナ※

「出て来てマフオクシー！」

「ふむ。出て来るのじゃダーテング！」

※ダーテング※【草・悪】

タネボアの最終進化系。

樹齢1000年を超えた大木のでっぺんに住むと言われる謎のポケモン。

葉っぱの団扇で強風を巻き起こす。

ダーテングか……厄介だな。(セレナ)

いきなりマフオクシーとは……見た目によらずせつかちかの？
(フクジ)

「マフオクシー瞑想」

「ダーテング影分身」

2人はそれぞれ命令を出し、準備を整えた。ここからが本番だ。

「マフオクシー！ 火炎放射！」

「ダーテング！ 破壊光線！」

マフオクシーとダーテングの攻撃がぶつかり、バトル中央で爆発した。威力は互角だったのだ。

「続けざまにマフオクシー！ 大文字！」

「ダーテング、地面に瓦割り！」

マフオクシーの大文字がダーテングに届きそうな時、ダーテングはバトル場の地面を瓦割りで飛ばし大文字を防いだ！

「流石ジムリーダー。だけど！マフオクシー攻撃の手を緩めないで火炎放射再発射！」

『はい！』

『またかよ！』

「ふむ、ダーテング、加減分身で躲きなさい」

『了解！』

ダーテングは直ぐに影分身を使用し、マフオクシーの火炎放射を躲したが、

「そのまま薙ぎ払っちゃえ！」

『はい！』

『ハアア！』

「なんと!？」

マフオクシーは火炎放射を放ったまま薙ぎ払うように、ダーテングの影分身に当てていった！その時ダーテング本体にも火炎放射が当たり戦闘不能に出来た。

「なんと!?!一発KOとは・・・戻れダーテング」

「さつすがマフオクシー！次も頑張つてね！」

『はい♪』

マフオクシーの特性「マジシャン」の効果が発揮されていたおかげで威力が大幅に上がっていた火炎放射。

流石のダーテングもこれは耐えきれない。

フクジの2体目はどのポケモンなのかな？

「儂の2体目は、行け！ドダイトス！」

ズドゥン・・・

ドダイトスのヘビー級の重量でバトル場が揺れた・・・

※ドダイトス※【草・地面】

ナエトルの最終進化系。

小さなポケモン達が集まり動かないドダイトスの背中で巣作りを始めることがある。

また厄介な・・・地震使われたら大変だなく（セレナ）

マフオクシーの火炎放射が強烈だからな。ドダイトスで対抗しな

ければ・・・(フクジ)
第2戦目が開始される・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十八話

七十八話

ヒヨクジム戦

☆フクジVSセレナ☆

相手は相性的にはまだ有利なドダイトスだけど、技次第によっては負けてしまう・・・

「マフォクシー先手必勝よ！大文字！」

『はい！』

「そう慌てなさんな。ドダイトス、リフレクターじゃ」

『了解』

ドダイトスの目の前に緑色のバリアが張られた。これは相手の特攻の威力を和らげる効果を持つ厄介な補助技だ。

大文字はリフレクターに当たり弾けた。そのリフレクターには傷1つ着いていなかった。

「そんな馬鹿な！傷ぐらいいは付くはず！マフォクシー瞑想」

「そう来ると思ってたよ。ドダイトス、地震じゃ」

『了解』

マフォクシーが瞑想をするために目を瞑った瞬間、ドダイトスが大きく地面を叩き地震を起こした！その攻撃はマフォクシーにダイレクトに当たり吹き飛ばした！

「マフォクシー！大丈夫!?!」

『問題無いですよ。今の私はね』

「ふむ・・・地震で倒せないとは」

『結構本気の地震だったんだが』

マフォクシーは直ぐに立ち上がり私を見た。

『しっかりしてね？貴女は強いんだから』

「うん！ありがとうね！マフォクシー。更に瞑想」

『はい！』

「こちらも仕掛けるぞドダイトス！ハードプラント！」

『ウオオオオ！』

※ハードプラント※【草】

草タイプ最強技。

地面から極太のツルを出し相手を攻撃する。

威力は150。

ドダイトスは地面から無数の極太のツルを出し、一斉にマフオクシーに放った！

「マフオクシー！ブラストバーン！」

『ヤアアアア！』

※ブラストバーン※【炎】

炎タイプ最強技。

極太の火柱を地面から出し相手を攻撃する。発射させるケースもある。

威力は150。

マフオクシーは地面に手を置き、ブラストバーンを放った！

ドダイトスが放ったハードプラントはブラストバーンで全て焼き尽くされ、そのままドダイトスに攻撃が当たった！ドダイトスはその攻撃を受け戦闘不能になった。

「むう〜お主のマフオクシー大分鍛えられておる。見事じゃ！だが、俺もジムリーダーを努めておるのでなく次の3体目から本気で行くぞ。出てこい！ジユカイン！」

『俺の出番じゃい〜！』

凄く興奮しているジユカイン・・・

「先手必勝！ジユカイン、リーフブレード！」

シャキン！

ジユカインの腕に付いている草の刃が鋭く、更に緑色のオーラが刀状に形成された！

威力こそそこまで驚異では無いが、使い方次第では驚異になる事は必然。

「行けー！」

ジユカインはその命令の瞬間、素早い動きでマフオクシーの背後に周り、リーフブレードでマフオクシーを切り裂いた！

「マフオクシー!?!」

『大丈夫! それより早く命令を!』

「うん! マフオクシー! 火炎放射!」

「ジュカイン! マフオクシーの杖を取れ!」

『悪く思うなよ』

『なっ!?!』

ジュカインはマフオクシーが放とうとした杖を奪い取りフクジの前に突き立てた!

『私の杖を返して!』

『その杖を返して!』

「これもバトルじゃ。本気で行くと言ったろう? ジュカイン! 更にリーフブレード!」

『了解』

ジュカインはマフオクシーの懐の方へと潜り込み、リーフブレードで切り裂き、技を解除した瞬間爆発した!

「マフオクシー!?!」

爆発が晴れた時にはマフオクシーは戦闘不能になっていた。

「お疲れ様マフオクシー。戻って休んでて」

「見事じゃジュカイン」

セレナは次のポケモンを出そうとしたが、あの素早さに勝つには凶鑑効果を全開に出して素早さを極限アップさせないといけない・・・そうすれば勝てると思うが。

いや・・・フクジさんは本気でバトルをしてくれている。私が本気を出さないでどうする!

「フクジさん・・・私も本気を出しますね。サーナイト出番よ」

『私の番でしたか。てつきりルカリオを出すのかと思いました』

「もしメガ進化した時有利に運ぶためよ」

『そういう事でしたか。失礼しました。バトルモードに移行します』

セレナとサーナイトの周りの空気が変わった。

「む? これはいい・・・」

今までは普通の空気だったが、セレナが本気を出すと出て出した

ポケモン、サーナイトとセレナの周りの空気が変わった様に思えたが
気のせいかなの？

「行きますよ？サーナイト影分身タイプα」

『了解』

「タイプα？」

『ん？』

※影分身タイプα※【無】

通常の影分身では無い。

タイプα・・・戦闘特化と思考特化した影分身。

サーナイトは影分身タイプαを5体作り出した。

『行けお前達・・・』

サーナイトの影分身がそれぞれ展開し構えた。

そして・・・

『発射せよ。サイコカッター』

「リーフブレードで切り裂いてやれ！」

『おう！』

※サイコカッター※【エスパー】

サイコキネシスをカッター状に形成した物。

エルレイドの時は、自身にサイコカッターを付けていたが、実際は

放つ事も可能。

ジュカインは瞬時にリーフブレードを形成し、影分身から放たれた

サイコカッターを弾き返した！

『まだまだありますよ？連続発射』

『くっ!?!』

サーナイトは技を出すスピード、弾数、威力の3つを上げジュカインを攻撃した。

このままではヤバいの・・・あれを使うか。

「ジュカイン。あれを使うぞ」

『了解！』

何か仕掛けてくる！

「メガ進化せよジュカイン！」

ジュカインとフクジは光に繋がれジュカインの姿がメガジュカインへと変貌した。

メガ進化の時のタイプは【草・龍】
やっぱり使ってきたか・・・けど、それを使うと妖精タイプが効果抜群になる！

「サーナイト、私達もしましょつか？」

『是非♪』

「私達の絆の元に！サーナイト、メガ進化！」

セレナとサーナイトが光に繋がれサーナイトの姿がメガサーナイトへと変貌した。

「お主もメガ進化出来ておったか。さあ、行くぞ！メガジュカイン、リーフブレード！」

「メガサーナイト！影分身タイプβとタイプα！」

※影分身タイプβ※【無】

通常の影分身では無い。

影分身タイプβ・・・思考特化と感情特化した影分身。

メガサーナイトはタイプα4体。タイプβを4体だしそれぞれ役目を与えた。

タイプαはメガジュカインと戦闘。

タイプβはそのサポート。

もう分かったと思うが、セレナのメガサーナイトは指揮官に特化した頭脳派ポケモン。

自身でも攻撃出来るが、基本は影分身に任せている。

メガジュカインはタイプαが邪魔で攻撃しようとしたが、タイプβが横からバリアを張り、タイプαを守った。

その隙にタイプαは4方向に展開し、ムーンフォースをそれぞれチャージ開始し、タイプβがそれぞれに付き添い、エネルギーを共有し威力を更に高めた。

『発射せよ！ムーンフォース！』

「リーフストームじゃ！」

メガジュカインはリーフストームを放とうとしたが、その前にムー

ンフォースが当たり大爆発した。

煙が晴れた時にはメガジュカインはメガ進化が解けており戦闘不能になっていた。

「お見事じゃ。戻れジュカイン。ふく儂がここまで追い込まれるとは」

「メガサーナイトお疲れ様。一度戻って」

『かしこまりました』

「おや？戻すのかの？」

「はい」

一度サーナイトを休ませてから再度出すつもりだから。

フクジさんが最後に出すポケモンを見てから出すポケモンを決めよう。

「まあ良からう。では儂の最後のポケモンじゃ！神聖なる神のポケモン！出でよー！ビリジオン！」

「伝説のポケモン!?!」

※ビリジオン※【草・格闘】

素早い身のこなしで相手を翻弄してポケモンを守ると伝説で伝えられている。

イツシユ地方の3賢者の1体でもある。

まさか最後のポケモンが伝説ポケモンだなんて・・・(セレナ)

ビリジオンだけで3体倒せるかの？(フクジ)

ポケットモンスターXY バロンの旅 七十九話

七十九話

ヒヨクジム戦

☆フクジVSセレナ☆

フクジの最後のポケモンはイツシュ地方に生息する伝説のポケモン、ビリジオン……

私が出せる残りのポケモンはサーナイト含め3体……

マフオクシーは先の戦闘により負けてしまったからだ。

フクジの方を見ると笑みを浮かべていた。

「フオツホツホ。儂の切り札じゃ！存分に楽しもうぞ！ビリジオン、剣の舞」

『爺さん。動きすぎたら腰が……』

ビリジオンはフクジを気にしていたが、バトル中は関係無いのかな？フクジさん凄く生き生きしてる……

その間にビリジオンは剣の舞を終わらせてしまった。

「まだポケモン出してないよ！行ってきて、ピジョット！高速移動！」

セレナはピジョットを出す前に命令をした！

ピジョットは直ぐに反応し、出した直後に高速移動を使いセレナの元に戻ってきた。

「ごめんねピジョット。今回の相手は相当手強いよ」

『そうみたいだな』

「では行こうか！ビリジオン、聖なる剣！」

「ピジョット、ゴツドバード！」

※聖なる剣※【格闘】

3賢者が得意とする角を剣の様にして攻撃する技。

※ゴツドバード※【飛行】

自身の周りに飛行タイプのオーラを纏い、相手に突撃する。

2体は同時に動いたはずなのにビリジオンが直ぐそこまで迫ってきていた！

「速い！ピジョット頑張って避けて！」

「やれ！」

ビリジオンはピジョットが逃げるであろう場所に聖なる剣を振った！

そこにピジョットが突っ込む形となってしまう。ピジョットは大きく吹き飛ばされ、ジムの壁に当たった！

ピジョットはそのまま戦闘不能になってしまった……

「そんな……戻ってピジョット。お疲れ様」

「どうじゃ儂の切り札は？」

強い……

私はポケモン図鑑の効果を使い、フクジさんのビリジオンのステータスを確認した。

ビリジオンLV450【草・格闘】

特性【正義の心・擬人化】

※正義の心※

悪タイプの攻撃を受けると攻撃力が上がる。

※擬人化※

擬人化出来る。

擬人化時は特性が変わる。

LVが頑張れば何とかなるかもだけど……

擬人化!?

人になるの？

ポケモンが？

最強じゃん!?

「フクジさんの切り札は確かに強力ですが私の切り札も強力ですよ。出て来てルカリオ！」

「ルカリオか。ビリジオン、聖なる剣！」

「ルカリオ、インファイト！」

ルカリオはインファイトでビリジオンの聖なる剣を止めたが、

「これで両手は使えないの〜ビリジオン、ソーラービーム！」

『トドメです』

ビリジオンは0距離からソーラービームをルカリオに当て、戦闘不

能にさせた。

「な!?!ルカリオ戻って!お疲れ様。出て来てメガサーナイト!」

『皆の敵討ち、させて貰います!』

メガサーナイトは構えた。

「影分身タイプα・β出撃準備!」

※影分身タイプ説明一覧※

タイプα・・・戦闘特化と思考特化した影分身。

タイプβ・・・思考特化と感情特化した影分身。

『影分身タイプα3体。タイプβ3体展開。敵、ビリジオンを倒せ!』

αは近接に持ち込み、βはサポートに徹した。

「これは不味いので奥の手を使うぞ!特性「擬人化」発動じゃ!」

影分身達の攻撃を擬人化するときの光で全て消された!そして、ポケモンだった姿は人間へと変わっていった。

「これが・・・擬人化・・・」

ビリジオンの擬人化・・・緑が特徴的な長身の女の子に変わり、背中の中は剣が備わっていた。

特性「正義の心・聖剣威力大幅アップ」

ビリジオンが背中に備えてる剣は「聖剣エクスカリバー」

この剣の威力を大幅に上げることが出来る。

「これが儂とビリジオンの切り札じゃ。さあ!行くぞ!拔刀」

『拔刀!』

ビリジオンは背中の中の鞘からエクスカリバーを出し構えた。

「メガサーナイト、再度影分身してタイプαとβを出して!」

「もう遅いぞ?やれビリジオン」

『承知、切り裂け!エクスカリバー!』

『間に合って!』

ビリジオンはメガサーナイトが影分身を出す前に切り裂き、爆発した!

(このポケモン界では、高威力の技が当たると爆発します。大爆発の時はそれ以上の攻撃の時です)

メガサーナイトは大きく後ろに飛ばされ、地面に倒れたが、まだ戦

闘不能にはなっていない。

「ほう？今のを耐えきるとはの」

「大丈夫!？」

『平気よ・・・ガハッ!』

メガサーナイトは口から血が出てそのまま倒れメガ進化も解けた。

サーナイトは戦闘不能になった。

「サーナイト!?大丈夫サーナイト!？」

「やり過ぎてしまったか・・・女医よ、すまないが至急サーナイトを治療してくれ」

「かしこまりました!」

セレナは女医さんにサーナイトを預け、ヒヨクジムの隣にある事務所にフクジと移動した。

「すまなかったの・・・お主のサーナイトは責任を持って治療させて貰うよ」

「はい・・・」

セレナはヒヨクジムを出てからずっと下を向いたまままで返事も必要最低限しか言わないようになっていた。

その日は夜空が綺麗な日だったが今のセレナには見る気力すら無い状態だった。

フクジはそつと部屋を出て、外に出た。

「暫くそつとしておこうかの・・・次からのバトルは程ほどにしないといけないな」

フクジは当たりにある平らな岩に腰をかけ、夜空を見上げた。

「今日は綺麗な夜空じゃな。あの方も見ておられるかの?」

フクジは笑みを浮かべながら森の中へ消えて行った・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十話

八十話

バロンサイド

俺はコルニに挨拶をしてからシヤラシティを出発した。

目指すはヒヨクシティ！

そのジムバッチを手に入ればバッジは5個だぜ

俺は自転車を設置し、ヒヨクシティに向け漕ぎだした。

※12番道路※（フラージュ通り）

道の間幅が広い川が流れており、ポケモンの助けが無ければ通ることが出来ない。

アズール湾からはここから行ける。

ヒヨクシティは川を渡って道なりに進めば辿り着く。

ここが12番道路か。

確かに川の幅が広いな。まあ俺には関係無いけどな。

バロンは自転車を畳んで収納し、あるポケモンを出した。

「出てこい、レックウザ！」

『マスター？1つ効いていいか？』

珍しいな？

「いいけど？」

『俺を使うなら自転車乗らなくて良かったんじゃない？』

「き、気分だよ！」

痛い所を疲れた……

レックウザは笑ってるし……

速く行こう！

「レックウザ、乗せてくれ。そのままヒヨクシティに行くぞ」

『了解』

俺はレックウザに乗せて貰い、そのままヒヨクシティまで飛んで行った。

後ろに他のトレーナーもいたが、皆俺の後には付いて来なかった。いや、そもそも無理なのだろう。

普通なら【秘伝・空を飛ぶ】と言う技を受け継いでからトレーナーを運べるのだから。

レックウザは最初からそれを覚えているので俺は普通に使っている。

俺はレックウザに無事ヒヨクシティのポケモンセンター前で降ろして貰い、ポケモンセンターで必要な物を買いついた。ちなみに、俺のポケモンは全回復状態なのでその後直ぐにヒヨクジムに向かった。ヒヨクジムに着くと、事務員さんからストップされた・・・

「ジムに挑戦しに来たんですけど？」

「今ジムリーダーのフクジさんがいませんのでジムの挑戦が出来ません。お引き取りください」

「そんな！」

事務員さんはそう言い、ジム横の椅子に座り直した。

「あれ？中には入らないんですか？」

「ジムの鍵はフクジさんが管理しているので・・・私は中に入れないのです」

「そうなのか・・・すまない」

「いえいえ！フクジさんはその内帰って来るでしょう。私は大丈夫です。違うジムを探して貰って良いですか？」

「そうします。それじゃ」

俺はそう言い、タウンマップを見た。

次に行くとしたら・・・クノエシティだな。

※クノエシティ※

町の中央の大きな木の下にジムがある。

南にはポケモンセンター。北にはカフェがある豊かな町。

俺はヒヨクシティを出ようとしたとき、聞き覚えのある声に止められた。

「バロン君!? やつと来たんだね！」

俺は声の主の方を振り返ると、幼馴染みのセレナがいた。

「セレナ!? セレナもヒヨクジムに挑戦しに来たの?」

「私はジムに挑戦して負けちゃった。それとバロン君を探してたの」

「俺を？」

何でセレナが俺を探すんだ？

「ダンテさんからバロン君と旅をして欲しいって頼まれて」
「ダンテさんから？」

何でだろう？

何かあるのかな？

「バロン君を狙う連中から守ってあげてって言われたの」
「俺を守る？」

俺がセレナを守るんじゃないや無く、セレナが俺を守るだって？

俺の男のプライドが許すだけでも？

「セレナ？俺がセレナを守るなら分かるが、セレナが俺を守るってのは納得いかない」

「そんな事言わずに、一緒に旅をしましょ！」

「旅だけなら良いけど・・・」

まあ、旅だけならな・・・

「ありがとう！これからよろしくね！」

「おう！よろしくな！」

(セレナはあの後サーナイトが回復して元気になりました)

俺はタウンマップを広げ、セレナと次の目的地にしようとしたクノエシテイを指したが、

「私的にはここがいいなあ」

「ここは？」

セレナが指した場所は・・・雷轟シテイ。

※雷轟シテイ※

雷が頻繁に起こる町。

年がら年中雨が降り続けている。

町の中央に避雷針が置かれており、町の北側にジムがある。
ポケモンセンターは安全の為、ジムの地下に備え付けられている。

「ここが良いのか？」

「うん。だって近いだもん」

そうゆう理由か・・・んじゃないや雨や雷について知ってる筈だよな？

「それじゃ行くっか？」

「うん！」

こうして俺達は自転車に乗り、雷轟シティへと旅に向かった。

ここから近いと言っても、距離的には結構長いが、クノエシティよりはまだ近い。

雷轟シティ楽しみだなあゝ

雷轟シテイ編

ポケッツトモンスターXY バロンの旅 八十一話

八十一話

俺達は13番道路に戻り、岩の洞窟に向かった。

ここが雷轟シテイに繋がっている道なのだが、岩の洞窟は凹凸が激しく歩かなければならない。

「結構暗いな・・・出てこい、メタグロス！」

「何でメタグロスなの？」

「それはね。メタグロス、あの姿を見せてやれ！擬人化！」

メタグロスは擬人化し、

「魔装せよ！太陽の神・ラー！」

メタグロスは中に浮き、魔法陣を展開した！

青いワンピースに金色のラインが追加され、

髪は黒色に変わり、金のティアアラが付き、

杖の先端は黄色に変わり、周りに赤い装飾品が追加された。

メタグロス・擬人化【魔装・太陽神・ラー】

特性【太陽神の加護・自動体力回復】

※太陽神の加護※

太陽神・ラーの加護を受け、状態状・能力低下系統全ての効果を受けない。

受けるダメージを大幅軽減。

メタグロスは擬人化魔装をし、バロンの隣に立った。

「凄い・・・擬人化して更に太陽神を魔装させるなんて・・・」

「凄いだろ俺のポケモンは？」

「うん！」

セレナは驚きよりも興奮が勝ったみたいで凄く目がキラキラしている。

メタグロスは太陽神を魔装しているため、凄くキリツとしているが、元が可愛いので更に可愛く見えてしまう・・・

「それじゃメタグロス。今から洞窟に行くから洞窟内を照らしてくれ
る？」

『お安いご用ですマスター』

メタグロスは背中に魔法陣を展開させ、金色に輝く光の翼を形成し
た！

『行きましようマスター』

メタグロスはバロンの歩くスピードに合わせて洞窟内を進んで
いった。

セレナも慌てて後を追った。

洞窟内はメタグロスのおかげで外よりも明るく感じる位明るかつ
た。

だけど、凹凸が激しくなかなか思うように進まない。

「メタグロス、この凹凸凄くうざい。平らにしてほしい」

『お任せよ。マスター達は安全の為に結界を張っておきます』

「ありがとう」

メタグロスは俺達に結界を張り、洞窟内にいくつもある凹凸の1つ
に触れた。

『砕け散れ。サンシャインクラッシュ！』

激しい凹凸から眩しい光が一斉に光り出し、片っ端から砕けていっ
た！

光が収まると洞窟内にあつた激しい凹凸は全て消えており、洞窟内
が光り輝いていた……

「凄いじゃないかメタグロス！これなら魔装を解除しても大丈夫だな
！」

『はい。後、思っていたのですが、私が纏っているのは神。なので神装
と言って貰いたいです』

「そう言えばそうだな。これからは神装って言うよ。ありがとうなメ
タグロス」

「洞窟が凄く綺麗……もしかしてこの洞窟全てこんな感じなの？」

『そうだよ。そろそろ神装を解除するね。自動で体力は回復するけど
精神力が持つていかれるんだ』

そう・・・

メタグロスが使っている神装は、神の力が使える変わりに精神が持っていないから。

強い精神を持っていないと、心まで持っていないから。

「すまないな。神装解除だ。後はゆっくり休んでいてくれ」

『はい』

メタグロスは神装を解除し、ポケモンの姿に戻り、モンスターボールに戻った。

「バロン君のポケモンは凄いね。だけど、神装はあまり使わない方が良さそうだね」

メタグロスの神装中にぎっと調べさせて貰ったが、擬人化からの神装はレベルが消えていた。

神装中は本当の意味で神になっているのだろう。

ステータスも大幅・・・超アップしていたから・・・

だけど、今ので分かった。

私のポケモン達も擬人化出来るな。

「バロン君。この洞窟を抜けたら私とバトルしましょう？」

「うん？いいけど俺のポケモン達は手加減知らないぞ？」

あらま・・・

手加減してくれないのね。だけど、特訓と思えばいいかな。

「うん。大丈夫だよ。よし！速く洞窟を抜けよう！」

「おうー！」

俺達は光り輝く洞窟を走って雷轟シテイを目指した。

途中、混乱しているズバット、ゴルバット、クロバットの進化形達が襲って来たが全て返り討ちにしてやった。

洞窟を抜けると雨が降っており、服が直ぐにびしょ濡れになってしまった・・・

「もう！雨なんていやあー！」

「雨は確かに嫌だが。うん。悪くないかな？」

俺はセレナを見てからそう思い、雨に少し感謝した。

意味は男性達なら分かるだろう・・・

今日のセレナは白い服を着ていたのだから・・・

「バロン君？こつち見て何にやけてるの？」

「いや！別に！何でもないぞ！1つ言うとしたら、セレナは可愛いって事だな」

「か、可愛い!?」

セレナが赤面してしまったが、更に可愛さがアップしたただけだぞ？

よく見るとこの洞窟を抜けたら雷轟シティだった・・・

ここはもう雷轟シティ。ポケモンセンターはどこだ？

その時雷が目の前にあつた木に落ちた！

「きゃあー」

セレナは俺に抱きつき、俺もびつくりしたがセレナがもう怖さで泣いている。

俺がすっかりしなければ！

「セレナ、少し落ち着け。とりあえずポケモンセンターが見つからないから、あのデカイ建物に向かおう」

「うん・・・」

俺達は雷が鳴り続けている雷轟シティを気を付けながら建物に進んでいった。

よく見ると、町の中央に避雷針が建てられていた。それを見つけた時、また雷が落ちたが今回はその避雷針に当たった！

この街は色々と危ないな・・・

速くあの建物に行こう！

セレナを抱え、俺はその建物に走って行った。

セレナは俺にしがみついているので落ちる心配はない！

俺が目指してたデカイ建物の看板には「雷轟ジム兼ポケモンセンター」と書いてあった。

「ここがポケモンセンターであり、ジムだったのか・・・」

「やっと着いたね・・・服がびしょびしょだよ」

流石にこの至近距離では目を逸らした。

疚しい目で見続けたら旅に支障が出てしまうからな・・・

「ん？どうかした？」

「いや・・・それより、建物に入ろうか」

「うん！」

俺達は建物に入った。

「いらっしやいませ！」

「ジムに挑戦ですか？」

「ポケモンセンターにご用ですか？」

「温泉にご用ですか？」

「ホテルにご用ですか？」

入った瞬間に4方向から一斉に喋られた！

「とりあえず、ポケモンセンターと温泉に用かな？」

「ご利用ありがとうございます！ささーどぞどぞ！」

従業員さんに急かされ、先に温泉に入ることになったが・・・

「ここで大丈夫です！案内ありがとうございます！」

男湯にそのまま入れられそうだったので危なかった！

俺はそこまで免疫着いていないんだよ！

その後は旅の疲れを癒やす為ゆっくり浸かり休んだ。

その間にポケモン達は従業員さんが女医さんに預けてくれており、

上がった時には回復した状態で手持ちに戻してくれた。

「これからジムに挑戦ですね！頑張ってください！」

「はい！」

俺はセレナがまだ温泉だと思い、先にジムに挑戦するため、ジムの方へと歩いて行った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十二話

八十二話

ジムの前の扉にセレナがこっちを向いて待っていた。

「セレナ!？」

「やっと来た!遅いよ!」

セレナは俺よりも速くジムの前で待っていたみたいだ。

それにしても速くないか？

「速かったね。待たせてごめん」

「うん。待たされたお礼と言う事で私が先にジムに挑戦するね」

「え?ああ。了解・・・」

先に挑戦したかった!

俺達と一緒にジムの扉を開いた。

「すみませくん!ジムに挑戦しに来ました!」

「ようこそ雷轟ジムへ!俺様がここのジムリーダー、ライ・ゴウジンだ!」

ライと名乗った人物は、全身派手な衣装を着ており、髪は金髪の長身の筋肉質な男だった。

ライはそう言い、ポケモンを出してきた!

「出てこい!レントラー!こいつが俺の最初のポケモンだ!使用ポケモンは5体!どっちから始める?」

「私よ!出て来て!アブソル!」

俺は階段を上り、観客席に向かった。

「それじゃ始めようか!」

「はい!」

ここのジムリーダーは熱血系なんだな・・・

雷轟ジム戦

☆ライVSセレナ☆

「先手必勝だ!レントラー、エレキフィールドからの電磁波追加だ!」

※エレキフィールド※【電気】

電気タイプの威力を上げる。眠り状態にならなくなる。

※電磁波※【電気】

相手を麻痺状態にさせる。

レントラーはエレキフィールドを使う時に電磁波も一緒に出し、エレキフィールドの中は電磁波付きのフィールドになった！

アブソルは電磁波の効果により麻痺状態になった。

「そんな!?アブソル大丈夫じゃないよね・・・悪の波動!」

「はっ!そんな雑魚技で俺のレントラーを攻撃出来るとでも?レントラー!ワイルドボルトに電光石火追加だ!」

※ワイルドボルト※【電気】

電気を纏い相手を攻撃する。

自分にも少しダメージを受ける。

アブソルが悪の波動を放つ前にワイルドボルトを使って更に必ず先行出来る電光石火を使い、アブソルを攻撃した!アブソルはその攻撃を受け戦闘不能になった。

「そんな!?一撃だなんて。戻ってアブソル」

「はっ!もつと強いポケモンを出せよ!俺を楽しませろ!」

ライは舌を出しながらゲラゲラ笑い出した!

あいつ・・・俺の番になったらぜってえつぶす!!

「出て来て!マフオクシー!あいつのポケモンを燃やすよ!」

『うん!セレナを侮辱した罪思い知らせてやる!』

ライは前屈みになり、

「さあ!楽しもうか!レントラー!10万ボルトに雷追加だ!」

「マフオクシー!火炎放射に大文字追加よ!」

レントラーの10万ボルトは雷が追加され極太の100万ボルトがマフオクシーに迫る!

マフオクシーの火炎放射は大文字が追加され極太の火炎放射がレントラーに迫る!

2体の技はバトル場中央でぶつかり合ったが、セレナの凶鑑効果が発揮し、本来の力を出したマフオクシーの攻撃力が大幅に上昇され100万ボルトを押し返した!

「なに〜!?」

「いつけ〜!」

火炎放射は更に熱量を増し、獄炎放射となりレントラーに迫った!
「こうなったら! レントラー! 進化の先を見せてやれ! 擬人化!」

獄炎放射がレントラーに当たる直前! レントラーの身体が白く輝き、獄炎放射を消した!

そのままレントラーは人間の姿に変わっていく...

「これが進化の先にあるポケモンの完全体! 擬人化だ! 行くぜレントラー!」

『おう!』

レントラー擬人化

見た目はヤンキーに似た派手な男。

服装も黄色が殆どで、派手!

特性は【闘争心・蓄電】

※闘争心※

攻撃する度にステータスが上がる。

※蓄電※

電気を身体に溜め込む。

溜め込んだ分攻撃力が上がっていく。

更に電気の攻撃を受けると体力が回復する。

「レントラー! 自分に雷を当ててやれ!」

「させない! マフオクシー、鬼火よ!」

※鬼火※【炎】

相手をやけど状態にさせる。

レントラーが雷を放つ前にマフオクシーの鬼火で状態異常を狙おうとしたとき!

「これ待ってたんだ〜! レントラー! 電光石火に雷とワイルドボルト使え!」

レントラーは雷を放つ瞬間に電光石火を使い更に雷とワイルドボルトを使い電気を纏った!

この状態では鬼火はレントラーに届かない!

「マフオクシー！裏効果使おう！マジシャン発揮！それから聖なるブラストバーン！」

※聖なるブラストバーン※【炎】

白い炎で相手を襲う。

当たった場所から炎が燃え移る。

マフオクシーは杖に聖なるブラストバーンを溜め、マジシャンを發揮し放った！

その時にレントラーがマフオクシーが放っていた鬼火を消した時だった。

「レントラー！そのまま突っ込め〜！」

「いっけ〜!!」

レントラーはスピードを緩めないでマフオクシーが放ったブラストバーンに突っ込んだ！

レントラーは電気を纏っていて特性蓄電の効果を使いつつブラストバーンを押し返して行ってる！

「そんな…私たちの必殺技が…」

『まだ…諦めない！フルパワー!!』

マフオクシーは更に炎の質量を増やしレントラーを攻撃した！

「やれ！レントラー！」

『ウオオオ〜!』

レントラーは更に雷の量を増やし回復量を増し、マフオクシーの炎を物ともせず押し返して行った！

「負けるな〜マフオクシー!!」

『負けるわけには行かない!!』

その時！

セレナとマフオクシーの心がシンクロした!!

マフオクシーの体から爆炎の炎が噴き出した！

マフオクシーの髪はオレンジ色の長髪に・・・

額にはV型のマークらしき物が額から後ろに伸びている。

背中には杖の形をした炎が装備されている。

「行くよマフオクシー！」

『うん!』

セレナはマフオクシー視点からバトルを見ている感覚になつていたが、不思議と違和感が無かった・・・

「極・ブラストバーン!!」

レントラーはもう目の前まで迫っている!

マフオクシーは背中の中を杖を使い、前方に向け、技を放とうとしたら魔法陣が展開された!

今は迷っている暇は無い!私とマフオクシーはそのまま極・ブラストバーンを放った!

魔法陣は技を放つたと同時に炎の出力を大幅に上げ、更に威力を極大アップさせた!

レントラーも負けじと雷の出力を大幅に上げたが・・・

マフオクシーの放った炎の威力はレントラーの回復量よりも勝り、レントラーに襲った!

レントラーは獄炎の中で苦しみ地面に倒れ、擬人化が解除され戦闘不能になった。

レントラーを倒した後、セレナが急に倒れた!

マフオクシーも同時に倒れバトルは一時中断となった。

俺は直ぐに観客席から飛び出しセレナの側に行った。

「大丈夫かセレナ!?!」

「大丈夫じゃないかも・・・体中が痛いや」

『私もだよ・・・何が起きたんだろう?』

今のは俺と白龍が使っていたシンクロだな・・・

体に負担が掛かるから使い慣れなければならぬ。

「今のはポケモンの心とトレーナーの心が1つになった時の現象【シンクロ】だな」

「おいおい!今のは何だ!?!擬人化よりも強いのか?」

ここでライも話しに加わった。

今回は単に威力とかの問題だと思ふが・・・

俺は擬人化が進化の先にある進化だと思つている。だからシンクロよりも強いと思つたが、考え直さなければいけないかな?

「それは分かりませんが、今はセレナとマフオクシーの回復を優先させてください」

「確かにそうだな。おい！救急班を直ちに来させろ！俺のレントラーも重傷なんだ。急げ！」

「はい！」

審判の方と女医さんが直ぐに来て、ポケモンとセレナを治療室に連れて行った。

「その済まなかったな。お前の大事な人を傷つけてよ」

「え!?!いや！それは!!」

「何照れてやがんだw今回のバトルは楽しめた。セレナ君が回復したらジムバッジを渡そう。俺のポケモンが回復したら次はお前だな」

ライはそう言い、俺の肩を軽く叩いて事務所の方へと歩いて行った。

あの人はバトル以外だと意外といい人なんだなと俺は思った。

俺は待合室に向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十三話

八十三話

暫く部屋で待っているとライが入ってきた。

「待たせたな。セレナ君とポケモン達の回復が終わったぞ。ジム戦するか？」

「はいー」

「そう言うと思っていたからセレナ君は先にジムの観客席で待たせてるぞ」

「ありがとうございますー！」

ライはそう言い俺と一緒にジムの方へと行った。

ジム場に着くと既に準備は整っていて直ぐにバトルが始められるようになっていた。

俺達はそれぞれの立ち位置に立ち、向かい合った。

セレナは手を振り頑張っつてねと言ってくれたので手を振り替えし微笑み返した。既にバッジは手渡っていると聞かされているので後は俺だけだな。

「これより、雷轟ジムのバトルを始めます。使用ポケモンは5体！ポケモンの交代はチャレンジャーのみとなります！それでは・・・バトル開始!!」

雷轟シテイ戦

☆ライVSバロン☆

「バトルでは加減しないぜ！出てこい、レントラー！」

「勿論です。俺も本気でいきます！出てこい！ブリガロン！」

「進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化!!」

俺とライはポケモンを擬人化させバトルを開始した。

「先手必勝だ！電磁エレキフィールド展開！」

「させない！神速乱れ斬り！」

※神速乱れ斬り※【ノーマル】

神速の速さで相手を斬る。

ブリガロンは瞬時に動き、レントラーが技を放つ前に攻撃を当てた！

レントラーは攻撃を中断され大きく仰け反った！

「なに!?」

「まだまだ！ブリガロン！そのまま爆裂斬！」

ブリガロンが持っていた剣はに爆裂パンチと一緒に性能の技を付与させて切り裂いた！

レントラーはその攻撃を受け、爆発し大きく飛ばされ戦闘不能になり地面に倒れ擬人化が解除されポケモンの姿に戻った。

「俺のレントラーが足下に及ばないか・・・レントラー戻れ。流石だなバロン」

「ありがとうございます。俺はこのままブリガロンで戦います」

俺は交代するのかもしれないのかも聞きたいと思ったので先に言った。

「そうか。それじゃ俺の次のポケモンだ。行け！サンダース！」

※サンダース※【電気】

イーブイの進化形。

空気中のマイナスイオンを吸い込んで約1万ボルトの電気を吐き出すことがある。

「擬人化はしないのですか？待ちますよ？」

「うっ！それは奥の手だ！さあバトルだ！」

「良いのかな？それじゃブリガロン、素早さアップの魔法を掛けてから、剣戟乱舞！」

※剣戟乱舞※【格闘】

剣で相手を連続で攻撃する。

「ちよーモーションすら無いのかよ！サンダース！躲すんだ！」

思ったのだが、ライのポケモンはレントラー以外は擬人化出来ないな？

そんな状態じゃ俺のブリガロンに勝つ事は無理だろう。次はメタグロスで行くかな。

ブリガロンはモーション無しで素早さを上げサンダースが避ける前に剣戟乱舞で攻撃した！

しかも素早さを上げている為、通常の攻撃量と違い倍以上の攻撃をしたのでサンダースを戦闘不能にさせた。

「マジかよ・・・戻れサンダース」

「ブリガロンも戻れ」

ライは凄く驚いたが直ぐに気を取り直した。

「出てこい、ライボルト!」

「出番だメタグロス」

ん?ライの顔が引きつったぞ?

「なあ。聞いていいか?そのメタグロスメガ進化出来るよな?」

「はい。出来ますよ。ライさんのライボルトも出来ますよね?」

ライはもう呆れたような顔をしたぞ・・・

「なあバロン。こう言うのもあれだが・・・俺の負けだ」

・・・え?

まだ残り3体は残っているぞ?

セレナの方も何が起きてるか分からない感じだし。

審判の方も判定に困っている。

「その、だな・・・俺のポケモンはこれ以上強いのないんだ・・・」

ライは両手を挙げ降参を示した。

俺的にはもっと戦いたいけど・・・まあ良いか」

「わかりました」

俺とライは審判の方に顔を向けた。

「はっ・・・この勝負!チャレンジャーバロンの勝ち!」

「すまないな。これは勝利の証【雷獣バッジ】だ。レベル400までのポケモンをGETしやすくなるのと・・・」

ライは更に・・・

「途中でバトルを放棄したんだ。これは謝礼金だ。受け取ってくれ」

そう言う俺のポケモン凶鑑にお金に加算された。しかも桁が凄
い!

「こ、こんな貰って大丈夫ですか?」

「勿論だ。後、何か困った事があれば相談になるから凶鑑に俺のアド
レスを登録しておく」

「ありがとうございます」

ジムリーダーのライさんはいい人なんだな。

セレナもいつの間にか俺の隣に来ていた。

「おめでとうバロン君。ジムバッジ5個目GETだね」

「ああ。ライさんありがとうございます」

「こちらこそ。次はどこにむかうんだ？」

次か・・・

元々向かおうとしていたクノエシテイだな。

「クノエシテイですね。ここから一番近いですし」

「そうだな。言い忘れていたんだが、この頃正体不明の黒い影が彷徨
いているらしいから気をつけろよ」

「ありがとうございます」

ちなみにここ、雷轟シテイはミアレシテイとクノエシテイの真ん中
辺りにあり、クノエシテイよりだ。

後、正体不明の黒い影か・・・

今はセレナもいるから注意して旅をしないとイケないな。

「では僕達はポケモンを回復させてから出発します。ライさんもジム
頑張ってくださいね」

「おう。気を付けてな」

俺達はポケモンを回復させ、雨が未だに降り続ける雷轟シテイに俺
のポケモンを出した。

「出てこいレックウザ。特性のエアロックで天気の影響を無効化し
ろ。そして、クノエシテイに行く前に少し鍛錬がしたい。久しぶりに
ピカチュウ達に会いに行くよ」

『了解ですマスター』

レックウザは咆哮し、雨雲を消し去った。

そして俺はレックウザに乗りセレナを乗せ、飛び立った。

雷轟ジムからはライがあきれ顔でこちらを見ていた・・・

クノエシテイ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十四話

八十四話

レックウザは無事にピカチュウ達がいる山に着いた時、前方にドデカイ雷が落ちた。しかも3回連続で……

セレナは後ろで雷に怯えている。

「レックウザ、あの雷ってピカチュウだよな？」

『その筈だが……あの質量の雷、相当威力も高いぞ』

レックウザも感じ取ったか。

あの雷はただの雷。技を追加したりしていないのだ。

しかもピカチュウの得意な雷電モードもしていない筈だ。雨が降っていないから。

「とりあえず近づこうか？」

『ああ……』

俺達はピカチュウがいるであろう場所にゆっくり近づいて行った。

その頃、雷が落ちた周辺では……

『他に俺に挑む奴はいないのか？全員でも良いんだぜ？』

『ボス！俺達、ボスには勝てないツスよ！』

『そうですボス！』

『むう〜』

ボスと呼ばれているのは山の統括者、ピカチュウだ。

皆からは絶対王者と呼ばれている。この地を管理しているユウキの父を倒してしまったから。

勿論、マスターの言いつけ通り、ユウキ様には誰にも傷つけさせていない。

『ボス！空の方にレックウザが！打ち落としますか？』

む？

あのレックウザは……

マスターだ！久しぶりにマスターが帰って来た！

『俺のマスターだ。手を出すなよ』

『了解しました！』

ちなみに、俺が先ほどから話しているのは、バンギラスにボスゴドラ。その後ろにもレベル300越えのポケモン達が跪いている。バンギラスとボスゴドラはそれぞれレベル350だ。

ちなみに俺はレベル450。

空の統括者は俺の相棒だな。ファイアローだから。

ファイアローは俺よりレベルが少し下のレベル430だ。

ファイアローにもマスターが来たことを教えてやるか。多分だがもう気付いてる筈だが・・・

『お前達俺の言いたい事は解るな？』

『勿論です！空の統括者様、ファイアロー様にマスター様が来たことを伝えれば良いのですよね？』

『ああ。よろしく頼む』

『はい！ウインディ部隊、連絡を頼む！』

『了解しました！皆、行くぞ！』

ウインディ部隊。それはウインディが統括している素早さが高いポケモン集団だ。

隊長がウインディ。

副隊長がギャロップ。

他は一般的なポケモンだが、それなりに鍛錬を積んでいるのでなかなかの強さだ。

ウインディの部隊は全員が神速の技を持っていないければ入隊も出来ない。

ウインディ部隊は全員、神速を使いファイアローがいるところまで走って行った。

『俺はマスターに会いに行つて来る。お前達は自由にしていいて』

『ボスに付いて行つても良いですか？』

むっ？

俺に付いて行きたいのか。

『いいぞ』

『ありがとうございませす』

うん？

バンギラスだけだと思ったらボスゴドラもなのか？

まあいいか・・・

俺達はマスターの所に向かった。

その頃空の統括者、ファイアローは・・・

『今の雷はまたピカチュウか。いつもながら凄いな』

『その通りですね。ボスも炎質量がとんでもないですが・・・』

サザンドラにそう言われてしまった。

俺の炎もピカチュウと一緒にぐらいの質量があるからな。今はまだピカチュウの方が強いが。

『山の方からウインディの部隊が来ました！』

何か報告があるのかな？

『入り口の方にレックウザが来ました！』

今度はレックウザが侵入して来ただど!?

『追加で報告します！レックウザの上にトレーナーが2人乗っています！おそらくボスのマスターかと！』

『それは良い情報を聞いた。ありがとう。俺はマスターに会いに行つて来る。ウインディ部隊もピカチュウに言われたのだろう。もう向かったと言ってくれ。では！』

俺はそう言い、休んでいた大樹から飛び立った！

勿論、神速を使い、直ぐに加速した。

『ボスの素早さは凄いですね。もうあんなに遠くに・・・』

『ボスのマスターはあまり来ないのでそれも有るか』

エアムードがサザンドラにそう言った。

『そう言えばマスターが来たと言う事はまた新しい最強ポケモンを連れてきたのかな？俺達も行くか？』

『是非行かせてください！』

ん？

エアムードの他にフライゴンまで・・・

皆行きたいのか。ボスに連絡は取っていないが大丈夫だろう。

『よし、皆で行くか！』

『はい！』

俺は皆を連れ、ボスを追いかけた。

その頃レックウザの上にいるバロンは・・・

「俺達が来てから様子がおかしくなったな。不審者と間違われたか？」

『それは無いと思います。多分ですが報告をし合っているのかと』

報告か。確かにあり得るな。

レックウザは山の開けた場所に俺を降ろしてくれた。

「ありがとうレックウザ。少しこのままいてくれ」

『はい』

一応セレナはレックウザに何かあれば守って貰うから大丈夫だろ。

そろそろ俺の存在に気付いて来るはずだから。

その時目の前の山から白いピカチュウが出て来た。しかも後ろに

バンギラス、ボスゴドラも。その後ろにも何体かいるな？

上空には何か来る気配があり、ピカチュウの上辺りで止まった。

ああ。ファイアローか。凄く素早さが上がったな。

その後ろからも大量のポケモン達に向かってくる気配があるので

ファイアローの配下なのだろう。ピカチュウ達が俺の前まで来たとき

には空の向かって来ていたポケモン達も全員着いたみたいだな。

「久しぶりだなピカチュウにファイアロー。それとここの皆も」

『久しぶりです！マスター！』

「元気にしてたか？」

『はい！』

そう言えばピカチュウ達のレベルって何LVになったのかな？

「ピカチュウ達はレベルいくつになったんだ。後、簡単に現状報告も

欲しいかな」

『山の統括者ピカチュウ。LVは450になりました。』

各隊長達の平均LVは350。部下達は平均LV300辺りです。連絡部隊にウィンディ部隊がいます。

攻撃部隊はバンギラス部隊がいます。

自然保護部隊にはドダイトス部隊がいます。』

『空の統括者ファイアロー。LVは430になりました。』

各隊長達の平均LVは350。部下達は平均LV300辺りです。山と空と出来るだけLVは近いようにピカチュウに言われましたのでそうしています。

連絡部隊にエアムード部隊がいます。

攻撃部隊はサザンドラ部隊がいます。』

「教えてくれてありがとう。皆役割分担しているんだね。流石だ。それと、今日俺が来たのは少し俺のポケモンを鍛えたくてだな。手伝ってくれないか？」

『勿論です!』』

ちなみに俺のポケモンで最高レベルはレックウザのLV400。

ブリガロンがLV380。

メタグロスもLV380。

ゾロアークはLV350だ。

「では、俺のポケモン達よ出てこい!」

俺は腰に吊りあつた残りのモンスターボール3つを投げ、3体のポケモンを出した。

「皆で鍛えてくれ」

『はい!』』

ピカチュウ達率いるポケモン軍隊は結構強いぞ・・・

『先に提案がありますマスター』

「ん?どうかした?」

『俺と戦ってください。その後はファイアローで。久しぶりに暴れたいので』

『皆!ボスから離れる!急げ!ボスが暴れるぞ!』

『何だつて!皆!急げ!』

おいおい・・・ピカチュウ。

お前が暴れるって言った途端皆、逃げ出したぞ・・・

ん？空にはファイアローだけか？

『マスター。俺の部下は皆、ピカチュウが暴れるの『あ』の時点でもう下がりました』

「速いな！」

『さあマスター！始めましょうよ』

ピカチュウは満面の笑みで、ファイアローは呆れ気味だが、次は自分の番だから俺の動きを見るために近くの木から様子見か・・・

「ああ。俺のポケモンも新たな力を得たからな。ここなら思う存分力が出せる！やろうかピカチュウ！」

『おう！勿論手加減無しだからな！』

「当たり前だ！」

こうして俺とピカチュウ、その後ファイアローのバトルをする事になった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十五話

八十五話

俺とピカチュウの久しぶりのバトル。

ピカチュウも皆を統括する為にストレスが溜まっていたのか、電気袋から火花が散っている……

野戦

☆ピカチュウVSバロン☆

「行ってこいメタグロス！」

『久しぶりの全力バトルか！腕が鳴るぜ！』

『メタグロスか。俺に勝てるかな？』

ピカチュウは手を地面に当て、ニヤリと笑った。何かしてくるぞ！

「メタグロス、守るだ！」

『ちっ！だけどこのまま攻撃するぜ！エレキライジング牢！』

※エレキライジング労※【電気】

エレキフィールドを改良した技。

当たった敵を麻痺状態にさせ、更に雷の柱を数本発生させる。

当たれば確定で麻痺状態にしエレキフィールドに、当たらなくても

エレキフィールドになる。

メタグロスの下の地面が黄色く光り、雷の柱が発生した！しかも6本！

だけど、メタグロスには守るを発動させたので、麻痺状態にはならないが、エレキフィールドは完成した。

「危なかった……まさかこんな技を使える用になっているとは」

『多対一の時に役立つ技を改良に改良をしてな。これは結構使えるんだぜ。勿論、守るを使われた後の事も考えている』

ピカチュウはそう言い、尻尾に雷を溜めていた。いつの間に溜めていたんだ？

「一方的に攻撃されるのはムカつくじゃないか。メタグロス！メガ進化！」

メガ進化中に攻撃しても無効されるので安心してメガ進化出来る

が・・・

ピカチュウが余裕の笑みを浮かべているのが気になる。

ピカチュウの尻尾の電気も更に質量が増しているな。

メタグロスのメガ進化が終わった瞬間、ピカチュウが動いた！

『食らいやがれ！ライジングテール！』

※ライジングテール※【電気】

尻尾に電気を溜めて攻撃する。

尻尾を振り、斬撃を飛ばしたり、直接攻撃したりと応用が利く便利な技。

当たれば麻痺状態に出来る。

ピカチュウは空に飛んで尻尾を縦に振った！

その尻尾に溜めていた電気が斬撃となり、メタグロスに向かって行く！

「メタグロス、ラスターカノン！」

メタグロスは直ぐにラスターカノンを放ち、ライジングテールを相殺した。

可笑しい・・・あんなに溜めていた電気を簡単に相殺できる筈がない。

「メタグロス、守るを使え！」

メタグロスも違和感を感じていたらしく守るを発動しようとしたとき、ピカチュウがメタグロスの下に移動していた！

「いつの間に！」

『もう遅い！本当のライジングテールを食らえ！』

ピカチュウは下から尻尾を勢いよく振り上げ、メタグロスを打ち上げた！更に追加で麻痺状態に！守るの技は麻痺のせいで上手く発動出来ない。

『フィニッシュだ！雷撃テール！』

※雷撃テール※【電気】

ライジングテールの上位版。

麻痺効果を失う代わりに、攻撃力を大幅に上げた高威力技。

ピカチュウは空中に跳び、空中で身動きが取れなくなったメタグロ

スに思い切り雷撃テールを振り落とす！

メタグロスは物凄い速さで地面に落下し、大穴が開いた。その中心にメガ進化が解けて戦闘不能になっているメタグロスがいた。

「結構強くなったな。戻れメタグロス」

『おう！ここに統括する位ならこれぐらいは出来ないとな！次はファイアローで良いぜ』

ピカチュウはそう言うその後ろに下がり、ファイアローが近くの木からフィールドに下りてきた。

『すまないなピカチュウ。俺も戦いたくてよ……マスター。勿論手加減は無しで頼むぜ』

「ああ！行ってこい！レックウザ！」

『あまり調子に乗るなよファイアロー！』

レックウザは咆哮し、空に舞い上がった。ファイアローもそれに続き空に飛んだ。

空中戦

☆レックウザVSファイアロー☆

「レックウザ、神速！」

『遅いな……ニトロゴッドバード！』

※ニトロゴッドバード※【火・飛行】

ニトロチャージとゴッドバードを合体させた技。

素早さも上がり、威力も高い。

ファイアローは体に炎を瞬時に纏わせ、ゴッドバードを使い、レックウザの神速とぶつかり合った！

『なかなかの攻撃力じゃないか』

『これぐらいじゃ満足出来ないよね？だから……』

ファイアローは一度下降しレックウザの下から急上昇した！

『なに!?!』

『くらいな！ドリルバード！』

※ドリルバード※【飛行】

体を高速回転させドリルの様にし、ゴッドバードの技で攻撃する。
『グガガガガ!』

レックウザは腹にまともに攻撃を食らい地面に落下していった。

『まだまだよーメテオキャノン！』

※メテオキャノン※【炎】

破壊光線にオーバーヒートを合体させた高威力技。

当たれば確実にやけど状態にする。

ファイアローはその場からメテオキャノンを放ち、落下中のレックウザに当てた！

レックウザはそのまま勢いよく地面に激突し、大爆発した！

「レックウザ!？」

『ちよいやり過ぎたか・・・』

『全く・・・』

落ちたところの煙が晴れた時、ゆつくりと動く影が見えた。目は赤く染まっている・・・

全身の所々に赤いラインが輝いている。

「レックウザ?」

『マスター!そこから逃げろ〜!』

「え?」

その時、その影から赤い光線が俺に飛んで来た・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十六話

八十六話

目の前に赤い光線が俺の直前まで迫ってきた……

俺はここで終わるのか……

『マスター!!』

ピカチュウの声が聞こえる……

『マスター!逃げてくれ!!』

ああ。ファイアローの声も聞こえる……

周りの全てが遅く感じるな。

その時、目の前に白い影が現れた。

『間に合ったみたいだな。障壁!』

「え?」

何が起きたか分からなくなった時、赤い光線がその半透明な障壁にぶつかり大爆発した!

その時俺は何が起きたかやつと理解した。

白龍が戻って来て、俺を助けてくれたんだ!

「白龍!!」

『『白龍様!!』』

ピカチュウもファイアローも俺の所に来て、白龍を見た。

『間に合って良かった。赤いレックウザですか?珍しいですね』

「あの〜?あのレックウザは俺のレックウザで多分暴走しているのにな〜って」

俺はそう言い、苦笑いした。

『む?暴走か。なら直ぐに解決するな。癒やしの波動』

※癒やしの波動※

全ての状態異常を治す。

癒やしの波動を受けた暴走レックウザは、目の色が赤から元の色に戻り、赤いラインも通常に戻った。

「凄いじゃないか!白龍、ありがとう!」

『たいした事はしてない。俺はマスターがピンチになったから駆けつ

けた』

白龍は元に戻ったレックウザを見たままそう言った。

『我はもつと力を身につける。マスター。次会うときは更に強くなっている事を使おう』

「ああ。ありがとうなレックウザ」

白龍はそう言い、俺を見ずにそのまま空に飛んで行った。

後、白龍が使った癒やしの波動は普通の技。白龍が言った「直ぐに解決するな」と言ったのも、本当ならそれぐらいマスターにでも出来るだろうと言う事を遠回しに言った来たと思う。

俺は少し自惚れていたのかも知らないな。

ピカチュウもファイアローも俺が旅をしている間に大分強くなっていた。

皆で鍛錬を積んで、更に力を付けないとダメだな・・・

後、白龍のレベルが500を超えていたのはセレナしか分からなかった。

この辺りは今回のバトルで大穴が2つに更地になった部分もあり、修復するのが大変だった。

今回は森のポケモン達の協力を頼み、皆で修復作業をした。

後、俺のポケモン達を鍛えたいと言うと皆が賛同してくれたので、拠点となるテントを張り、暫くはここで鍛える事にする。

一応忘れていないが、セレナもポケモンを鍛えたいとの事だったので少し距離を離れた所にテントを張り、2人で修行する事になった。

セレナから寝る前に白龍の事を聞かれたので教えたら、なるほどと言ってから帰って行った。

知らないポケモンだったから知りたかったのかな？

俺は考えることを止め、そのまま寝た。

セレナは自分のテントに行ってから考えていた。

白龍はバロンのポケモンだった。

ダンテさんから貰った新・ポケモン図鑑には登録さえされていないかったのは驚きだ。

白龍のステータスを見た時は情報量が多すぎて頭痛が凄く、レベルだけに絞れば、LV550だった。

私達のポケモンじゃ絶対に勝てない存在。しかも見たことのない、技で伝説ポケモンの攻撃を無力化し、更に一般の技で暴走を止めた。白龍ってポケモンの存在がこの世界に影響を及ぼす恐れがあるような気がする。

何か手を打たないとダメかな？

鬱蒼と生い茂っている木々の間にいる黒い影……

『ブレイン様。あのポケモンは白龍ですよね？』

「その筈だが。手持ちにいなかったのか。しかもLVが飛躍的に上がっている。弱らせて強制的に従わせる計画で行こうか。サーナイト、エルレイド。準備の為に各地に行くぞ」

『了解しました』』

ブレインはその場から姿を消した……

水の都アルマトーレでは……

『ただいま戻りましたアルセウス様』

『ご苦労。まだあの少年を死なせる訳にはいかないから助けなければならぬ』

『はい…』

まだと言う事は用済みの時が心配だな。マスターは思っていたよりも成長が遅い。

俺はもうLV550を超えたのに！後少しでこの体は新たな形になる。

それまでは鍛えて力を付けなければ……

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十七話

八十七話

朝起きるとポケモン達が俺達の周りにいた…

テントから出されていたみたいだ。遠くの方にテントがあったから…

「皆おはよう〜」

『さっさと起きろー！水鉄砲！』

ビーダルに攻撃された！こいつ！

「ブリガロン！爆裂パンチ！」

ブリガロンの反応が無い…

『今更気付くのか？お前のポケモン達は皆ダークホールのおかげで眠っているぞ』

ダークホールだって!?

ダークライしか覚えない技だぞ？

『疑問に思ってると思うから先に説明してやる。ダブルに技をコピーさせたんだよ』

「そういう事か。俺にどうしろと？」

俺だけじゃ何も出来ないから何していいか分からん！後、寝起きだ！

『俺達と体術で語ろうと思ってるな』

はい？

ポケモンと体術って普通に考えて無理じゃね？

「俺は人間。お前達はポケモン。俺が戦うと間違いなく俺、死ぬよ…」

『大丈夫だ！さあ、やろう！』

「ちよつと待て〜！」

その後は問答無用で攻撃されたから避けることに必死だった…俺のポケモン達は昼までずっと眠っていた。

ポケモン達が起きた時、俺が森のポケモン達に攻撃されているのを見て、直ぐに駆けつけてくれた。

『マスターに何しやがる！破壊光線！』

『レックウザか？いきなり攻撃とはな。守る』

レックウザの攻撃を容易く守り抜いた。

だけど、俺の他のポケモン達が攻撃する。

『ラスターカノン！』

『悪の波動！』

『ソーラービーム！』

『破壊光線！』

俺のポケモン達の一斉攻撃がビードルを狙う。

その時、ビードルの後ろの森から光線が飛んで来て、俺のポケモン達の一斉攻撃を相殺した！

森から出て来たのは攻撃部隊のバンギラスにボスゴドラだった。

『朝から騒がしいぞー！』

『静かにせんかー！ボスが来たらどうするんだ』

え？ボスって事はピカチュウの事だったよな？

もしかして・・・

俺の予想は当たったみたいだ。

森からすごく機嫌が悪いピカチュウが電気を纏って来ていた・・・

「おいおい。逃げるぞ？」

『当たり前だ！逃げろー！』

『お、おう！』

俺達は一目散に逃げたけど・・・

『俺から逃げられるとでも？』

ピカチュウは一瞬電気を地面に流し、俺の足を痺れさせた。俺は足が痺れて転んだ。

ビードルとゾロアークも同じく痺れ、転んでいた。

バンギラスとボスゴドラ、メタグロスの最終進化系達は根性でそのまま走った。

空を飛ぶレックウザはそのまま飛んで行こうとしていたが・・・

『まずはレックウザからだ。地面にひれ伏せ！落雷!!』

ピカチュウから電気が放たれた。その電気はレックウザの頭上か

ら急降下し、落雷と化した・・・

レックウザは全身に雷がまわり、地面に落下し痙攣状態で地面に倒れた。

『次は・・・』

ピカチュウは根性で走っている3体を見た。まずは・・・

ピカチュウは磁力を使い高速移動し、バンギラスの懐に移動した。その時、残像が見えた。

バンギラスは急に目の前に現れたピカチュウに驚き少し止まった瞬間、ピカチュウはアイアンテールを勢いよく薙ぎ払った！バンギラスは大きく後ろに飛ばされ、地面に倒れた。

それを見たボスゴドラはピカチュウにラスターカーノンを放った。メタグロスも追撃と言わんばかりにラスターカーノンを発射した。2方向からのラスターカーノンをピカチュウは地面に電気を流し込み、電気柱を発生させ相殺させた。

その後直ぐに磁力を使い高速移動し、メタグロスの真下に潜り込み雷パンチでアップー攻撃した。メタグロスは1回転して地面に倒れた。

残ったボスゴドラは破壊光線をピカチュウに放ったが、簡単に躲し雷を放った。その雷はボスゴドラに当たり地面に倒れ痙攣した。

「ピカチュウ・・・強すぎ・・・」

俺はそのまま倒れた。

私はピカチュウの機嫌を損ねるような事はしないでおこうと思っ
た。

今の戦闘力を見る限りでは、私達はピカチュウに勝てない。

ピカチュウは機嫌が悪くても自身を制御出来ている。

今の戦闘でレベルも上がったみたいだ。

ピカチュウは私の方を見たけど、何もしなかったので私は対象外？

もしかして、寝てたのを邪魔したから起こっていたのかな？

ピカチュウはその後、森に帰っていき寝たみたいだ。

私は朝ご飯の準備をするためにポケモン達を連れて静かに魚釣りをする事にした。

なかなかヒットしないから忍耐力がいるな。根気強く頑張るか

俺達が目を覚ますと皆体力が回復していた。

妙に清々しい目覚めだ。

周りを見るとポケモン達がいいて、回復していてくれたみたいだ。

「皆ありがとう。おかげで随分と楽になったよ」

『いえいえ。私共は回復要員みたいな者ですから』

俺に手を差し伸べてきたハピナスにお礼を言い、立ち上がった。

倒れていたポケモン達も手を差し伸べて立ち上がったみたいだ。

「ピカチュウはまだ寝てる?」

『はい。なので静かにお願いします。ボスはいつも8時に起きます』

今の時間は、まだ7時だった・・・

一時間も時間があるのか。

「何か手伝うことは無いか? 助けて貰ったお礼をしたくて」

『ありがとうございます。では、木の実を取って来て貰えれば助かります。私共は調理の準備をしますので』

そう言いハピナスは簡易キッチンを作っているポケモンの群れへと行った。

他のポケモン達にキッチンの事を聞くと、ボスが指示したらしく、

俺とセレナの為だとか・・・

ピカチュウはやっぱり良いやつだ!

その時、上空からエアムードが降りてきた。

『大変だ! この森に侵入者が入ってきた! 特徴は全身黒! 背が高い大男だ!』

『何だって!? 速くボス達に知らせろ! バロン様、すみませんが朝食は遅くなります』

俺に気を使わなくて大丈夫なのに。皆良いポケモンなんだから。

「俺も侵入者を迎撃しよう。手伝わせてくれ」

『ありがとうございます！ウインディ、バロン様を乗せてあげて。セレナ様を守る役目は防衛の堅いボスゴドラに任せましょう』

「ありがとうございます！頼むウインディ！」

『任せろ！』

俺はウインディとその部下達を引き連れて侵入者が入ってきたと言われた場所へ向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十八話

八十八話

『ボス！森に侵入者が現れました！今、迎撃部隊が向かっています！』
なんだと？

この森に侵入する者がいるとはな。

『排除するぞ！マスターがいる今、無様な所は見せられん！徹底的に排除しろ！俺も直ぐに行く！モード神速』

ピカチュウの周りから電気が迸り、周りが揺れている。

『お前達はセレナとマスターを守れ』

ボスはそう言うと言おうと超高速で森の入り口に向かった。その時、残像と
言うか・・・もう光線みたいな光りの線になっていた。ボス、流石っ
す！

「森が騒がしいけど何かあったのかな？」

私は今だに魚が釣れないまま森の方に注意を向けた。

『何でしょうね？問題事かな？』

その時、森の一角から私達の方へ来るギャロップが来た。

「何かあったの？」

『はい！この森に侵入者が入りまして、セレナ様はボスゴドラ様に護
衛させますので安全な所に案内します！』

そう言い私を背中に乗せて森の中に走り出した！

「ちよつと待つて！私も戦うよ！侵入者なんですよ？」

『ボスからの命令ですから安全な所に送ります。それからは好きにし
てください』

ああ。ギャロップも根は良い子なんだね。ボスの言う事聞かない
といけないけど私のためにも動いてくれる。

「分かったわ。私を安全な所に送ってちよつと待たせよう。その後、作戦会議
したいの」

『作戦会議ですか？』

ギャロップは走りながらそう言い、こちらを少し見た。

「ええ。一応作戦はあった方が良いでしょう？」

『そうですね。では飛ばしますのでしたっか掴まっついていてください！』

そう言うのと直ぐにスピード一気に上げ、安全エリアまで疾走した！

「この森には強いポケモン共がいるな。試しにこいつらから強制支配を試してみるか。」

『ブレイン様。森から大量のポケモン共が来てます。排除しますか？』

「いや。ここで実験する。強制支配の実験をな・・・」

俺は鞆から機械を取り出し、木に設置し始めた。

『戦闘は俺様に任せな！全員蹴散らしてやるぜ！』

『あんたは・・・ブレイン様の話を聞いていたの？』

エルレイドは首を傾げた。

ああ。やっぱり戦闘馬鹿は考えのが嫌いなものね。

「少し位なら蹴散らしても構わん。少し残してくれればいいさ」

俺はそう言い、設置した機械の電源を入れた。

この機械がポケモンを強制支配するのだ。

頭に特殊な電波を出し、それで支配する。簡単なトリックだが、ポケモンには有効だぜ。

『ん？こちらに超高速で迫って来る反応あり！この速度、異常です！』
向こうから木々が飛んでデカい土埃が起こしながらこちらに向かっ
てきている！

「この速度なら後5秒で到着よ・・・」

「この数値・・・異常な程の強さを持っているぞ。神のポケモンか？」
『ブレイン様？』

ブレイン様の様子がおかしい。もしかして相手は伝説ポケモン
だっけ言うの？この地には？

考え事をしていたら目の前の木が飛んでいき、私達の前でその正体

を現した。

『お前達が侵入者か。直ちにこの森から去れ！さもなくば・・・』

「ほお。白いピカチュウとは珍しいじゃねえか。強制支配させてやるぜ！」

ブレインはそう言い機会の電波を強くした。

内心思っただが、神では無く色違いのピカチュウだったのは予想外だった。

『ぐっ!?なんだ？この頭に流れ込んでくるのは？』

ピカチュウは手で頭を抱え込み蹲った。

『お前の仕業か！』

ピカチュウはブレイン様を睨んだ。

許せない・・・ブレイン様を睨むなんて許せない！

『調子に乗るなチビが！』

エルレイドが思いっきり蹴っ飛ばし、何回転かして地面に転がっていった。

ピカチュウはそれでもブレインを睨んだ。

『調子になるなピカチュウ！サイコキネシス！』

私はサイコキネシスを使い体の自由を封じ、空中に浮かばせてから地面に何回も叩き付けた。

その時、こいつほどでも無いが速い速度でこちらに向かってくる気配を感じた。

エルレイドに向かって貰えれば大丈夫ね。

『ブレイン様。あちらの方角に接近する大群を感知しました。エルレイドに行つて貰いますか？』

「そうだな。この睨んでくるピカチュウを我が下僕とするまでの時間稼ぎにはなるよな？」

『時間稼ぎじゃなく、全員ぶつ倒せだろ？ブレイン様』

「そうだな。頼んだぞ」

『おうー！』

丁度その時、雨が降り出してきた。急に降り出したわね。

エルレイドは大群の方へと走っていった。

私はこの生意気な奴をいたぶり、速くブレイン様の下僕にしなく
ちやね・・・

『調子になるなよ人間！』

ピカチュウがそう言うのと、雨雲から雷がピカチュウに向け落ちた！
目の前で雷が落ちた衝撃波で私とブレイン様が吹き飛ばされた！
飛ばされた時、ピカチュウの方を見ると雷を吸収し雷を取り込んだ
！

『雷電モード・・・容赦しないからな？雷パンチ』

ピカチュウはそう言うときまだ衝撃波で飛んでいる私に瞬時に近づ
き、腹に思いつき殴ってきた！

『グハッ！』

「サーナイト！」

『まだだ・・・』

殴られた勢いで思い切り地面に叩き付けられた後、ピカチュウの尻
尾が黄色く輝くのが見えた。

『雷撃テール！』

高濃縮された雷が尻尾の叩き付けられ私は戦闘不能になった。

次にブレインに狙いを定め、電気をチャージし始めた。

ポケモンの大群の方に向かっていて途中、サーナイトの意識が途絶
えたので確認の為に俺は引き返した。

その時、ピカチュウがブレイン様を狙っているのを見つけた！

『何をしてやがる！』

俺は爆裂パンチをピカチュウの顔面に思い切り殴りつけ、ぶっ飛ば
した！

ピカチュウは地面に転がり、何回転かしてから止まった。

ブレインは直ぐにサーナイトの元へ行き【元気の塊】を飲ませた。

※元気の塊※

ポケモンを瀕死状態から完全に回復させる道具。

サーナイトは全回復し、目を開けた。

「大丈夫かサーナイト！」

『ブレイン様？』

『サーナイト!?無事だな?』

ブレイン様にエルレイド?

私はいったい?そうかピカチュウにやられて・・・

私は直ぐに起き上がり、周囲を見た。そこには怒りに満ちたピカチュウがこちらを見ていた・・・

私の心が『逃げろ』と連呼している。

ブレイン様を見るとピカチュウを憎らしげに見ている。

エルレイドはピカチュウに怒りを向けている。

『良くもサーナイト姉様を!』

「よせ!エルレイド!!」

ブレイン様が直ぐに手を伸ばし、エルレイドを止めた。

『来ないのか?来ないならここっちから行くぞ!』

ピカチュウの周りから急激に電気が集まった!来る!!

「サーナイト!ここから逃げるぞ!速く!」

『は、はい!』

私はエルレイドとブレイン様の手を握って、テレポートした!

その瞬間、黄色い光線が私達のいた場所を焼き払った・・・

助かった・・・

あのままだと戦闘不能じゃ無く、永遠にいなくなってしまう所だった。

目の前に黄色い光線が横切った!

その衝撃波は凄まじく、俺達分隊は大きく吹き飛ばされた!

幸いその光線は誰も当たることにはなかったのが救いだな。あれは当たると確実にヤバイぞ・・・

その光線跡には炎が燃えており、火が木に移ろうとしていた!

俺達は直ぐに体勢を立て直し、

「地面技使えるやつはマッドショットか泥掛け!水技使えるやつは波乗りかハイドロポンプ!」

『『おう!』』

幸い片方ずつ使える技を持っているポケモン達がいたので、それぞれの場所に移動し消火活動をした。

それにしても今の光線は・・・ピカチュウなのか？

消火活動が終わる頃にピカチュウが俺の所に来た。

『マスター。この惨状は俺のせいだ。すまない！皆にも迷惑を掛けた。すまなかった！』

「おいおい。どうしたんだよピカチュウ？」

ピカチュウが地面に頭まで付けて、土下座した！

周りのポケモン達も今回みたいなのは初めてらしくて動揺している。

「顔を上げなよ」

『侵入者を取り逃がしてしまっただ！』

そういう事か。

「誰にも失敗はあるよ。次、失敗しなければいいさ」

『マスター・・・』

『そうだぜボス！』

周りのポケモン達もそう言い、ピカチュウを励ました。

『ありがとうみんな・・・』

ピカチュウは少し反省してくると言い、一人川の方へ行った。

マスターはやっぱり優しいな。

俺は感情的になってしまっただけで、周りを見ていない。

今回の失敗は完璧に俺のせいだ。

ただどみんな許してくれた。俺は自分の不甲斐なさをこれ程思った事は無い！

次はこんな事にならないようにもつと！もつと！！もつと！！強くなる！

誰にも負けない強さを！！俺は手に入れる!!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 八十九話

八十九話

私達は作戦会議を終え、現地に向かうと焼け野原になった場所になつていた……

そこにバロンとポケモン達がいた。

「みんな侵入者はどこ？」

「セレナ!? どうしてここに？」

バロンが凄く驚いている。

どうしてって言われても私も侵入者を迎撃しようと思つてきたんだけどな？

「侵入者を迎撃しようと思つてさ」

「ああ。そういう事か。それならもう侵入者はいないよ」

やっぱり。流石バロンね。あつという間に事件解決しちゃった。

「流石バロン！ 私の活躍無いね」

あれ？ バロンやポケモン達が苦笑してるけど？ 何か可笑しかったかな？

「いや〜ね……まあいいじゃないか。さきー！ 朝ご飯にしようぜ！」

「え？ 朝ご飯？」

気が付くとまだ9時だった……

「そうね。朝ご飯食べましょー！」

「うん！」

私達は皆で拠点に向かつて行つた。

拠点に着くと豪華なダイナーが設けられていた。

『やっと来たか……遅いぜ』

『本当だぜ……』

ピカチュウにファイアローが食卓の前でそう言い、待つていた。

「これって全部2人で作つたの？」

『そうだぜ。凄いだろう？』

確かに凄い……

見た目の良い。ご飯の臭いも良い感じだが……

「食べてみないと分からないな。どれどれ？」

目の前にあったスープを少し飲む。

ズズズ・・・ゴクン。

少しとろみのあるスープには少しスパイシーで美味しい・・・

真ん中にあるのは北京ダッグか！

少し切り分け口に運ぶ。

モグモグ・・・ゴクン。

噛んだ瞬間に肉汁が溢れ出す。濃い味付けのソースが肉と合う。

美味しい・・・

「美味しい！めっちゃ美味しいぞ！ピカチュウ、ファイアロー凄いいじゃないか！」

『えへへ。今日はマスターが来たから腕を振るって〜』

『いつもはここまで豪勢じゃないけどね』

いつもは？・・・って事は？

「いつもご飯を作って皆で食べてるの？」

『そうだよ。俺達は料理をする事が出来る様にある術を会得したんだ』

「術？」

そう言う皆がニコニコ笑った。

『皆でマスターを驚かせようと思っていたのもあるけどね。それじゃやるよ！皆！』

『『おおお！』』

そう言う皆、目を瞑り言葉を言った・・・

『『擬人化！』』

すると皆体が光り出し、ポケモンの姿から人間の姿に変わった！

擬人化だったのか。

「えへへ〜凄いでしょ？」

「ああ。凄く驚いたよ。まさか擬人化出来るなんてな」

ピカチュウもファイアローも他の皆も擬人化し、山は擬人化のポケモン達でいっぱいになった。

「この姿だとね、食べる量も少なくて結構良いんだ。だけど、バトルが

不利で基本、戦闘では使わないんだ」

「なるほどね。それにしても皆、美男美女だな」

皆結構容姿が良く、絶対モテるだろう！

「この姿でユウキ様に会いに行ったら凄く驚かれたけど、ユウキ家様達以外に見せちゃダメって事になってるんだ。マスターは俺達のボスだから見せて大丈夫だって」

ユウキがそう言ってくれたのか。

正直助かるな。けど、以外と擬人化って出回っている感じがあるな・・・もしかしてユウキのポケモンも擬人化出来たりするのかな？「それは良かったよ！こんなに美男美女を見れる機会は少ないからね」

「俺達も嬉しいよ！ささ！皆でご飯食べよう！」

俺達は豪華な朝ご飯ディナーを頂くことにした。

☆3つ以上挙げられる美味さの料理を味わいながら食べた。

その後は、他のポケモン達も料理をし、デザートを用意してくれた。勿論美味いがピカチュウ達より1段グレードが下がるな。

その後は少し休憩し、ひたすらバトルを挑み続けた。

セレナはご飯を食べた後、ポケモン達の毛繕いをしてあげた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十話

九十話

俺達は通称「ポケモンの森」で約1ヶ月間修行した。

ポケモンの森に時々遊びに来てくれたユウキと会話も出来た。

久しぶりにあったユウキは更に可愛くなっていて、ドキドキしてしまった。後ろにいたセレナから冷たい視線をぶつけられたけど、気にしないようにしてたから大丈夫だ！

ユウキは未だにお父さんに勝つ事が出来なく、森のポケモンとバトルしたりして経験値を稼いでると言っていたが、ピカチュウやファイアローには1度も勝つ事が出来なかったと言っていた。

俺のポケモン達だが、新たに仲間に加えたのもいる。

紹介しよう！俺の新たなポケモン、ミュウツーだ！

ミュウツーの出会いはいつい最近だが・・・

このポケモンの森に傷ついた状態で入ってきた。

理由を聞くと全身黒の大男が謎の機械を使い、脳に直接攻撃をして来たと言っていた。

ピカチュウが受けた物と一緒にだ。

ミュウツーはシャドーボールで機械を破壊してから、テレポートを使いその場から離脱した。

その後は自分でも分からないがここに向かっていたと言っていた。

俺達がミュウツーを看病し、無事に回復したので旅立つと思ったら、感謝したいと言い俺のポケモンに加わった。

ポケモンの森の皆さんからも祝福され、その日は盛大に宴となった。勿論、ユウキ家の人達も誘っての大きな宴だ！

ミュウツーも楽しんでくれたし、俺はユウキと楽しめたし言うこと無しだ！

今の俺のポケモン達のレベルと特性を覚えておこう。

まず、今も修行に行っている白龍。LV550だ。

アルマトーレの修行中で特性が変わった。

【神の力】【絆】から・・・

【神の力】【神装】に変わった。

※神装※

神様の力を纏うことで、その神の力を使うことができる。

今はユウキ家に預けている、山の統括者ピカチュウ。LV550だ。

特性【蓄電】【ノーガード】【あめふらし】

変わっていないが、3つの特性は健在・・・

今はユウキ家に預けている、空の統括者ファイアロー。LV530だ。

特性【炎の体】

こちらも特性は変わっていません。

現手持ちポケモン。

レックウザ。LV530。

特性【デルタストリーム】

乱気流を起こす事が出来る。

メタグロス。LV550。

特性【クリアボディ】

メガ進化時【堅い爪】

擬人化時【神装】【体力自動回復】

なにげに凄い優秀な事になってる・・・

ブリガロン。LV530。

特性【防弾】

擬人化時【格闘特化型魔法戦士】【能力アップ】

防弾は弾系統の技ではダメージを受けない、隠れ特性だ。

ゾロアーク。LV500。

特性【イリユージョン】

変わりなしです。

最後に加わったミュウツー！LV530。

特性【プレッシャー】

隠れ特性【Wメガ進化】

擬人化時【神装】

ミュウツーY・Xの両方のメガ進化が可能。両方同時メガ進化も可能。

神装を使えるように修行して貰った。

擬人化時の特性は修行しないと身につかないのだ。

後、神装も修行すれば負担無く使える事が判明！

大分使いやすく強いが、あまり見せびらかすのが出来ない所以で状況により使うことにする。

普段はポケモンの状態でバトルする事になるので、そこを重点的に修行する事になっていた。

1ヶ月とは速いものだ。

LVも凄く上がったし楽しく修行出来たが、俺達はまだ旅の途中。

メイビスも探さないといけない。ちなみに俺とセレナのバッジはまだ5個だ。

次の6個目のバッジを手に入れる為にクノエシティに向かおう。

「皆！今まで色々世話になった！」

『良いつて事よ！マスター。また会えるよな？』

「ああ！カロスリーグの時に一緒に戦いたい。その時は頼むよ」

『おうー！』

俺とセレナは皆に見送られ旅を再開した。

説明し忘れてました！

セレナのポケモンも紹介します！

セレナの相棒！火の使い手、マフォクシー！LV500。

特性【劫火】【マジシャン】

劫火（ごうか）は炎属性の攻撃力を大幅に上げる事が出来る。

後、炎属性の攻撃を受けると体力が回復する。

マジシャンは魔法系（放射系）の攻撃力をアップさせる事が出来る。

絆の特性は一時的な物みただ。

アブソル。LV480。

特性【プレッシャー】

ルカリオ。LV490。

特性【不屈の心】

ピジヨット。LV480。

特性【鋭い目】

サーナイト。LV490。

特性【シンクロ】

後、マリルリから新たに仲間に加わったギャラドスと入れ替えた。

ギャラドス。LV490。

特性【威嚇】

相手の攻撃力を下げる効果。

セレナは平均LV490のポケモン達。

バロンは平均LV520のポケモン達だ。

クノエシテイまではレックウザに乗って行くから楽だ。

「ではレックウザ、頼むぞ」

『任せろ！それじゃ皆、世話になった！また会おうな』

レックウザはそう言い、俺達を乗せて飛び立った。

目指すはクノエシテイ！

ジムリーダーは容赦の無い人って言ってたけど、ジムリーダーのマーシユさんて優しそうなイメージがあるけど違うのかな？

とある山奥に全身黒の大男と腰の曲がったお爺さんが会話していた。

その周りには警護するようにポケモンが4体囲むように立っている。

「ブレインや。その計画とやらでお主は再び王になるのだな？」

「ああ。この計画さえ成功すればポケモン共を率いて現カロスチャンピオンを倒し、俺は再び王に戻る」

ポケモン洗脳作戦。

野生のポケモンは勿論、トレーナーのポケモンにも効果があり、俺の支配下になり各地のポケモン共を洗脳し、大群を率いてチャンピオンに攻撃する。

数の暴力でこの地の王になったやるよ・・・

このじじいは何故か俺に協力しやがるが、お前のポケモンも俺の支配下になるんだよ。

それまでは有効活用してやるよ。

はあ。

この大男はそんな事をしようとしていたのか・・・

今なら止めることは出来るじやろう。だが、儂のポケモンよりも2倍以上強いポケモンに警護されておるからの・・・

今は我慢するか。

後でハンサムに伝えなければならんのだ

サーナイトがこちらを睨んでおるが、そのままでもいいか。相手するのも面倒いわ・・・

大男はサーナイトとエルレイドを連れてその場から消えた。

「ポケモンのテレポートで移動とは・・・後を追うことさえ無理か・・・面倒くさいのだ」

その爺さんはゴーゴートに乗り、ゆつくり山を下って行った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十一話

九十一話

俺達はレックウザにクノエシテイまで運んで貰い、ポケモンセンターで道具系統を補充するため向かった。

とりあえずは傷薬とモンスターボールを補充しないといけないな。

セレナも一緒のを買っていったし。

「んじや買い物終わったしジムに挑戦しようぜ！」

「うんー！」

俺達はジムに挑戦しに行った。

今日は良い天気だな。日差しが強いや。

ジムに着くとマーシユさんが日向ぼっこしていた・・・

「マーシユさん。ジムに挑戦しに来ました！」

「同じくジムに挑戦しに来ました！」

マーシユさんはゆっくり目を開けると、

「あら〜ジムに挑戦？ 私はまだ眠たいの〜また後でね〜」

そう言うときまた目を瞑ってしまった・・・

「つてー寝ないでくださいー！ジムに挑戦しに来たんですー！受けてくださいー！」

「さー！」

「そうですよー起きてくださいー！」

マーシユさんはぴくりとも動かない。

すると俺達の後ろから男性の声が聞こえた。

「私、クノエジムの審判をやってますフランといいます。マーシユ様は夜にしかジムバトルはしないので、昼間は良く眠られておりますので起こさないであげてください。勝負の方は私の方で予約を入れますので、夜にまたいらつしやってください」

そうだったのか。それなら仕方ないか。

セレナと観光して暇つぶしをしようかな？

「ありがとうございます。では、また夜に來ますのでよろしくお願ひします」

俺は頭を下げた立ち去ろうとした時、

「ねえねえ！ジム場は貸してくれる？私、バロンとバトルしたい！」
「おやおや・・・そちらの方もそれでよろしいのですか？」

凄くニコニコしながら俺を見てるが、バトルなら大歓迎だ！

「勿論いいぜ！バトルしようぜ！」

「やった〜！皆で修行した成果、見せてあげる！」

「望むところだ！」

フランは俺達をバトル場へ案内してくれて、審判も受けてくれた。
正直ありがたい。使うポケモンは1体でどちらかが戦闘不能になれば終わりのシンプルルールだ。

「それではこれより！バロン様VSセレナ様のバトルを始めます！使用ポケモンは1体！どちらかのポケモンが戦闘不能になれば終わりの1本勝負です。それでは・・・始め!!」

模擬戦

☆セレナVSバロン☆

「行つてきて、マフオクシー！」

「お前の力を見せてやれ！行け、ミュウツー！」

さあ、模擬戦の開始だ！

「先手必勝！ミュウツー、シャドーボールだ！」

「相殺しちやいなさい！マフオクシー、シャドーボール！」

2体のシャドーボールはそれぞれ放つモーションは違うが技は一緒。だが・・・

「私のマフオクシーの特性を忘れちゃ困るよ？」

「くっ！忘れてたぜ・・・」

そう・・・

マフオクシーの特性はマジシャン。

魔法（放つ技）系統の威力を上げる事が出来るのだ！

シャドーボールはミュウツーのシャドーボールを押し返した！

「避けるミュウツー！」

ミュウツーはテレポートを使い、その場から瞬時に離脱。シャドー

ボールは誰もいないところを通過した。

次に現れるところは決まっている！

「ミュウツー！0距離からシャドーボールだ！」

「うそ!?」

テレポートから現れたミュウツーはマフオクシーの後ろに現れて、シャドーボールを放った！

マフオクシーは0距離からの攻撃は流石に防ぎきれず、吹き飛ばされた！

「追撃しろミュウツー！サイコブレイク！」

「体勢を立て直して！守る発動よ！」

ミュウツーはサイコブレイクの技を溜めるために両手を前に出し、エネルギーを溜めた。

その時にマフオクシーは体勢を立て直し守るを発動してからサイコブレイクが放たれた。

勿論、守るを発動しているのでサイコブレイクは不発に終わった。

サイコブレイクは技を溜めてから放つまで5秒ほどかかる。

シャドーボールでも2秒はかかるのだ。

守るは1秒もあれば発動出来る。だが、体勢が悪かったから間に合うと思っていた。

考えが甘かったんだな・・・反省しなければ。

「マフオクシー！杖を地面に刺して！」

マフオクシーは持っていた杖を地面に突き刺した！

「何をする気だ？ミュウツー、あの杖をとりあえず外しておく。サイコネシス」

「やっぱりね・・・」

セレナがクスツと笑ったが・・・罨だったのか？

ミュウツーがサイコネシスで杖を抜いた瞬間、そこからマグマが噴き出した！

更に、抜いた杖はマグマに変わり地面に流れた。

マフオクシーを見ると杖はマフオクシーの手に戻っていた。

どうゆう事だ？

俺は念のために頬を抓ったが変化は無い……

ミュウツーも一緒の事をしたが変化が無かったみたいだ。

「さくて……真のマジシャンの力、見せてあげるわ！マフオクシー！マジカルフレイム！」

「ミュウツー……このままでは負ける！Wメガ進化だ！」

俺は腕に付けているキーストーンに触れ、ミュウツーの両腕に付けているメガストーンと共鳴！2人を虹色の光りが包み込む！

マジカルフレイムはその時に当たったが、メガ進化中は攻撃を受けない！よって、無効化した！

ミュウツーはYの姿、余分な部分を全て取り除いた形になり……Xの姿、両腕、両足の筋肉部分が出来た。

見た目は残念な感じになってしまったが……性能は良い！見た目の改良は頑張るが……

【Wメガミュウツー】にメガ進化した！

「行くぞミュウツー！爆裂パンチ！」

「マフオクシー！守る！」

マフオクシーの守るは発動に1秒掛かるが……

「え？どこにいった……の？」

マフオクシーが仰け反った……いや、正確にはぶっ飛ばしたただ。

WメガミュウツーはYの姿のスピードに加え、Xの力を最大限生かすことが出来る！

！
そのおかげで今先ほどまで場所から移動までは1秒も掛からない

更に、技の発動時間も短縮しているので、爆裂パンチはマフオクシーをアツパーで攻撃し上にぶっ飛ばしたのだ。

勿論、手加減はしないので追撃する！

「ミュウツー！追撃しろ！インフアイト！」

ミュウツーは先ほどの素早さでまだ体勢を整えていないマフオクシーに接近しインフアイトを放ったその瞬間！

「マフオクシー！奥の手を使って！」

マフオクシーの体から物凄い光量が発せられ、ミュウツーは0距離

でその光量を食らった!

ミュウツーはテレポートを使い俺の前まで移動し、目の回復を優先させた。

それにしてもあの光り・・・マフオクシーの体を見るとアレしか思
い浮かばないな・・・

光りが収まるとマフオクシーはポケモンの姿では無く、人間の姿。
擬人化したのだ。

金色の長い髪にマフオクシーに似た耳。

赤いズボンに手首から腕までを覆う赤い布。手には杖を持ってい
る。

服はマフオクシーの毛並みと一緒に黄色に近い色の服を着ている。

金色の尻尾も生えていた。

擬人化マフオクシーだ!

俺は直ぐにポケモン図鑑で擬人化マフオクシーの特性を調べた。

マフオクシー

擬人化時【大魔術師】

マジシャンの高級職版。

全体的に能力を大幅に上げる。

擬人化時【神装】

神様の力を纏うことで、その神の力を使うことが出来る。

「えへへへ〜凄いでしょ! 私達も出来る様に練習したんだよ。主にピ
カチュウに助けて貰ったけどね」

「この姿で神装するまで大変だったんですよ?」

俺は審判の方をチラツと見ると驚くこともなく自然としていた。

もしかしなくてもマーシユさんは擬人化出来るポケモンを手に入
れているな。

ならば俺も擬人化で相手するか。いや、もう少しこのまま攻撃して
みて必要と判断してからでいいか。

「凄いじゃないかセレナにマフオクシー! だけど、俺のミュウツーに
勝てるかな?」

「ちよつとだけ待って! 神装をしたいから!」

おいおい・・・直接お願いされちゃったよ・・・まあ良いか。

「いいよ。どんな神装かも気になるし」

「ありがとう！それじゃ・・・マフオクシー！神装・勝利の女神アテナ！」

勝利の女神・アテナか・・・

これは厄介になるけど、擬人化時の大魔術師の特性を生かし切れていないぞ？

やるなら、魔法の女神であるイシスあたりが妥当だと思うのだが？

セレナが決めた事だからいいか。

マフオクシーの周りに魔法陣が展開され、マフオクシーの体に金色の鎧兜が装着された。

更に手に持っていた木の杖が赤く染まり赤い金属に変わった。

金色の長い髪には、可愛い金色に白色のラインが少し入った髪留めで止めた。

最後に魔法陣が消えたとき、マフオクシーの周りに炎が吹き荒れ、周りを守るように展開した。近づく焼けてしまいそうな位熱い。

セレナの方を見ると、周りに薄い結界が張られている。

これはマフオクシーが気を利かせているのだろう。結界が無ければ熱すぎるからな。

「正直驚いたよ。俺が想像していたアテナは接近だったからさ」

「やっぱり！最初の顔はあきれ顔だったからそうだと思ってたよ」

ポケモン図鑑でマフオクシーの特性を調べてみた結果・・・

特性【勝利の女神】

アテナの加護を全面的に受けれる特性。

魔法威力絶大アップ・体力自動回復大

これはヤバいかも知れないな・・・

ミュウツーを神装させた方が良かったか？

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十二話

九十二話

セレナと模擬戦をする事になったが、本気バトルに変わっていった……

「行くよマフオクシー！火炎放射！」

「ミュウツー！爆裂パンチ！」

マフオクシーは擬人化時の効果により、魔法威力が上がっている。

ミュウツーはWメガ進化時の効果により、力も素早さも上がっている。

ミュウツーはマフオクシーが放った火炎放射を爆裂パンチで裂いていき、マフオクシーの側まで来た。

「それぐらいはすると思っていたよ！マフオクシー！ブラストバーン！」

「ヤバッ！ミュウツー！避けてから再度爆裂パンチで攻撃だ！」

マフオクシーはブラストバーンを放ったが、ミュウツーは当たる直前にテレポートで避けた！

ブラストバーンは避けられた場所に当たり、大爆発を起こした！

直に当たると戦闘不能になるレベルだぞ。

ミュウツーはマフオクシーの横側に現れ、横腹に爆裂パンチで攻撃した！

マフオクシーは思いっきり回転しながら地面を転げ回り、壁に激突した。

マフオクシーは戦闘不能になり、擬人化が解除された。

ミュウツーもメガ進化を解き、俺の横に移動した。

「勝者、バロン様！」

「やっぱり強いねバロン君のポケモン達は」

「ありがとう。もっと鍛錬を積んで白龍に追いつかないとな」

『そうだな。今の俺じゃ白龍様には勝てない』

Wメガ進化のミュウツーでも勝てないのか。少し期待してたけど、やっぱり白龍は別次元の強さを持っているんだな。流石、俺の相棒！

次会うときはもつと強くなっているはずだから。俺達ももつと強くなっておかないとな。

「さくつて！バトルしたらお腹すいちゃった。バロン君、食べに行こうよ！」

「おう！」

俺達は審判をしてくれたフランさんにお礼を言ってからジムを出た。

まだ昼過ぎなのだったので町は賑やか、飲食店や雑貨屋等が立ち並びエリアを俺達は歩いた。もう一つのエリアは居住区エリアになるので、宿泊するときや住人達が住む場所になっている。

「ねえねえ！あそこにある抹茶アイス食べてみよ！」

「そうだな。行こうか」

俺は出来るだけダンディ風にしたいのだが、まだまだ子供だな…セレナは感じていると思う。ニコニコしながらこつちを見ているし。

あゝ！もう！いいよ！俺は子供だから子供らしくするよ！

「速く行こうぜセレナ！」

「うん！」

セレナは満面の笑みを浮かべてくれた。

うん。素直に可愛いと思う。

その後は暫く露店を散策したりして時間をつぶした。

その時にセレナが髪留めが欲しいと言ったのを買ってあげると凄く喜んでくれた。

月明かりが出て来た時、フランさんが俺達の所に来た。

「お待たせしました。マーシユ様がジムで待っていると伝える様に言われました。ご案内します」

「ありがとう」

俺達はフランさんに付いて行き、ジムに向かった。

ジムはライトアップされており、輝いていた。

マーシユはジムの天井に仁王立ちしていた。

「ようこそチャレンジャー！私がここのジムリーダー、マーシユよ！」
「マーシユさん！ジムバトルをお願いします！」

「もちろん！バトル場セットアップ！」

マーシユはそう言い、両手を高らかに挙げた！
すると・・・

ジムが盛り上がり、ジムの天井が開いた。その時マーシユが真上にジャンプし、ジムから出て来た足場に着地した。

ジムの天井は周りに広がっていき、バトル場の形になった。バトル場を支える為に四方の角に石柱が立っている。

「さあチャレンジャー！バトルをしましょう！」

「はい！」

俺はバトル場に走って行き、スタンバイした。マーシユもスタンバイし、両者審判の合図を待つ。

審判役を務めているフランさんが赤旗を掲げた。

「これよりクノエジム戦を始めます！使用ポケモンは4体！ポケモンの交代はチャレンジャーのみとします。それでは・・・始め！」
フランさんが赤旗を勢いよく振り下ろした！

クノエジム戦

☆マーシユVSバロン☆

「出たおいでフラージェス！」

「行ってこいメタグロス！」

さあ、マーシユさんに勝って6個目のジムバッジをゲットするぞ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十三話

九十三話

クノエジム戦の一体目はフラージェス。
フェアリータイプのポケモンだが、鋼タイプには弱い！

「フラージェス、瞑想」

「メタグロス、瞑想」

両者瞑想を使い、特攻・特防を上げた。

ここからが本当のバトルになるだろう。

「先に行くぞー！メタグロス、コメットパンチ！」

「フラージェス、守る！」

フラージェスは瞬時に守るを発動し、メタグロスの技を防いだ！その時、メタグロスがよろけた。

「隙有り！フラージェス、ムーンフォース！」

「メタグロス！守るだ！」

メタグロスは守るを発動しようとしたが、それよりも先にフラージェスのムーンフォースがメタグロスを当て爆発した！

よろけたので守るの発動が少し遅れたのが原因だ。

メタグロスは俺の直ぐ前まで後退し、止まった。

「大丈夫かメタグロス？」

『もちろんだ』

「結構タフじゃない」

マーシユは少し呆れたが攻撃を止めることは勿論ない。

「フラージェス、エナジーボール！」

「メタグロス、ラスターカノン！」

2体の技はバトル場中央でぶつかり合い、爆発した！互いの攻撃力は同じみたいだ。

「こうなったら・・・メタグロス、凶鑑効果を使うぞー！」

「凶鑑効果？正々堂々バトルが出来ないなんて・・・貴方が使うなら私も使わないとね。一方的なバトルは好きじゃ無いわ」

Baronは鞆から凶鑑を取り出し、マーシユは振り袖から凶鑑を取り出した。

「え!? マーシユさんも持っているんですか!？」

「当たり前よ。貴方が凶鑑効果を使うなら私も使う。どうする?」

俺は少しだけ考えたが……

「使います。俺はマーシユさんに勝って、ジムバッジを手に入れるんだ!」

「使うのね……分かったわ。凶鑑効果オン!」

「凶鑑効果オン!」

凶鑑効果を発動し、それぞれのポケモン達は大幅に強化された!

「行けメタグロス! コメットパンチ!」

「迎撃せよフラージェス! ムーンフォース!」

メタグロスは瞬時にフラージェスまで移動し、コメットパンチを当てたはずが……

そこにフラージェスは居なく残像を攻撃していた。

フラージェスはメタグロスの真後ろにおり、ムーンフォースを当て爆発した!

メタグロスはマーシユの側まで飛んでいき、戦闘不能になった。

「強い……メタグロス戻れ。お疲れ様」

「もつと戦略的に動かないと私のポケモンには勝てないわよ?」

マーシユさんのポケモンはメタグロスが攻撃した瞬間に動き、後ろに回って攻撃していた。

ただ攻撃するだけじゃダメなんだ! もつと考えてバトルをしなきゃいけない。

「出てこいレックウザ!」

レックウザは出てから咆哮し俺の前に舞い降りた。

「レックウザ……伝説ポケモンを手に入れるとは凄いじゃない」

「ありがとうございます。レックウザ、今回は最初から本気で行くぞ。メガ進化!」

メガレックウザになった瞬間、辺り一面に乱気流が巻き起こった! 「強い風! もう! 髪の毛のセットが乱れるじゃない! フラージェス! ムー

ンフォース！」

「レックウザ！神速！」

レックウザはフラージエスまで瞬時に移動し、ムーンフォースを当てる前に神速の連撃を与えた！

僅か1秒で50連撃の攻撃は並大抵のポケモンじゃ耐えきれない！

メガレックウザが俺の前に舞い降りた時にはフラージエスはその場で戦闘不能になっていた。

「見えなかった・・・いや、目で見える範疇を超えているわね・・・戻ってフラージエス」

「俺が考えたこの方法は有効みたいですね？」

「それはどうかしら？出て来て、サーナイト！」

素早さはそれほど速くないポケモンだぞ？

何かありそうだ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十四話

九十四話

クノエジム戦でフラージエスは倒せた。

だが、メタグロスは倒されている。今はレックウザを出しているが、マーシユが出してきたポケモンはサーナイト。動きが遅いポケモンだが、なにかあるな・・・

「サーナイト、サイコキネシス」

「レックウザ、神速を使つて技が発動する前に倒してしまえ！」

メガレックウザは瞬時に移動し、サーナイトの前まで移動したが・・・そこから動かない・・・

『なにしやがった？』

『フフフ・・・貴方は罠に掛かったのよ』

サーナイトの周りにはよく見ると結界みたいなのが張ってあった。それにレックウザが当たり、動きが止まった。

「レックウザ、逆鱗で振り解いてしまえ！」

「残念。それはもう無理よ？」

メガレックウザが逆鱗で振り解こうとした時、メガ進化が解けた！
いったい何が起きてやがる！

レックウザは必死に逆鱗を出そうとしているが何も起こらない。

訳が分からないじゃないか！

「そろそろ楽にしてあげましょう。サーナイト、ムーンフォース！」

「避けるく！レックウザ！」

『これで終わりよ』

『くっ！動けねえ』

サーナイトは躊躇なくムーンフォースをレックウザに当て戦闘不能にさせた。

「戻れレックウザ！何が起きたんだ・・・」

「さあ？答えは自分で探さないな」

マーシユとサーナイトはフフフと笑いながらこちらを見ている。

あの半透明な結界が原因なのは分かっているが、突破口が分からない

い。

乱気流もレックウザが倒されてから収まり、通常に戻った。

結界・・・リフレクター系統なら瓦割りで破れるが、サーナイトの結界はそれで破れるのか？

ものは試しか・・・

「出てこい、ブリガロン！進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化！」

ブリガロンの周りに魔法陣が展開され、ポケモンの姿から人間の姿に変わってゆく・・・

「報告にあつた通り、擬人化出来るのね」

マーシユが何か言っていたが聞き取れなかったが、まあ大丈夫だろう。

ブリガロンの擬人化が完了し、2本の剣を抜刀した。

「サーナイトの結界を壊し、サーナイトを倒すぞブリガロン」

「了解した」

「サーナイト、結界の強度を上げてね。後はサイコネシスで動きを止めればいいわ」

『分かりました』

サーナイトは直ぐに結界の強度を上げをしながらサイコネシスをブリガロンに掛けた！

だが・・・

「効か〜ん！瓦割り！爆裂斬り！」

ブリガロンはサイコネシスを受けてなお動き、左の剣で瓦割りを使い、結界を破壊した！

右の剣で爆裂斬りを使い、サーナイトを切り裂き、爆発した！サーナイトは大きく飛ばされ、マーシユの側に落ちた。サーナイトは戦闘不能になっていた。

サイコネシスが解かれたのでブリガロンも体が軽くなったので機敏に動いてる・・・

「やったぜマスター！」

ブリガロンは満面の笑みで俺にそう言い、2本の剣を鞘に収めてピースをした。

俺もそれに答え、ピースをして笑顔で良くやったと褒めた。

「なかなか強いね〜だけど・・・ここからが本番だよ！出て来て、デアンシー！」

「デアンシー!? マーシユさんも伝説ポケモンを持っていたんですね」

マーシユはドツキリが成功したいたずらっ子みtainな顔でエツヘンと言っていた・・・

「さあ！最初から本気で行くよ！デアンシー！真の姿をお見せしましょう！メガ進化！」

デアンシーのネックレスに付いていたデアンシーナイトとマーシユのネックレスに付いていたキーストーンが共鳴！メガ進化した！

「ブリガロン、怖じ気づくことはない。いつも通りバトルするぞ。瓦割り！」

「了解！」

「デアンシー、ダイヤストーム！」

ブリガロンは再び2本の剣を抜刀し、攻撃に移った。

メガデアンシーの周りに大量のダイヤが現れ、ブリガロンに襲いかかるがブリガロンはそれらのダイヤを全て弾き、自慢の素早さで瞬く間にメガデアンシーに迫っていった！

「もう！すばしっこいわね！デアンシー！ダイヤを大量展開！シールドにして防御して！」

メガデアンシーは更にダイヤを作り出し、巨大なダイヤシールドを展開した！

ブリガロンも馬鹿ではない。巨大なダイヤシールドの下に空間が空いており、そこに潜り込んだ！

そして・・・

「いっけ〜！ブリガロン！」

「これで！終わりだ!!」

ブリガロンは体を高速回転しながら2本の剣でメガデアンシーを切り刻み、上空に行き、巨大なダイヤシールドを足場代わりにして

高速落下し、2本の剣で瓦割りをメガディアンシーに当てた！

落下の勢いで更に威力が増しているこの攻撃にメガディアンシーは負けた。

メガディアンシーは勢いよく地面にめり込む形で地面に沈み、メガ進化が解けて戦闘不能になった。

「ディアンシーがほぼ何も出来ずに戦闘不能とはね・・・ブリガロンは強いな〜戻ってディアンシー」

「強いでしょ俺のブリガロン！」

マーシユはうんうんと満足そうに頷いてる。

「こんなに強いならいいよね！うん！いいに決まってる！行くよ！バロン君にブリガロン！私のとっておき！出て来てニンファイア！」

ニンファイアが場に出た瞬間、その周りに魔法陣が展開された！

「最強奥義！擬人化！」

ニンファイアの周りの魔法陣が輝きだし、ニンファイアの体を人間の姿に変えてゆく！

ふんわりとしたピンク色の髪に、ニンファイアの形をした耳が髪留めで上にまとめられていた。

髪留めはニンファイアの薄桃色のリボンでまとめられている。

体格は小柄で少女の容姿。短い尻尾を腰辺りから生やしている。

腰には2本の剣を納めている。

ニンファイアの擬人化、完成だ。

俺は直ぐに凶鑑を使い特性を確認した。

ニンファイア擬人化

特性【格闘特化型魔法戦士】

基本戦闘は全て接近戦。

魔法は能力アップの時に使う。

特性【妖精の加護】

常に体力を回復する。

ダメージ半減効果と与えるダメージ増量効果がある。

おいおい・・・

妖精の加護で常に体力を回復しながら接近戦とかチートだろ・・・

「ブリガロン。全ステータスを底上げしてから攻撃開始だ！」

「ニンファイア。あなたも全ステータスを底上げしてから攻撃開始よ！」

「はい！」

2体のポケモンはステータスを上げ始め、全身からブリガロンは緑色のオーラが。ニンファイアからは桃色のオーラが出て来た。

「行けブリガロン！リーフブレード！」

「行きなさいニンファイア！ムーンフォース！」

2体は直ぐさま2本の剣を抜刀！

それぞれの技を付与し、攻撃を開始した！

お互いのポケモンは凶鑑効果でステータスのリミッターは外している。

ブリガロンもニンファイアも動いた瞬間、2体の真ん中当たりで衝撃波が出た！しかもあちこちに！

2体は超高速で動き、人間の目では追いつけない速さで戦っているのだ！

数十秒後、お互いのポケモンは初期位置に戻ってきた。

強さは互角か？

ブリガロンは肩で息をしているが、ニンファイアは・・・

体から緑色の光りがほのかに輝き、体力を回復されていた！

今回のバトルは結構キツイぞ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十五話

九十五話

クノエジム戦でマーシユの最後の1体、ニンファイアまで追い込んだが、凄く強い。

特性、妖精の加護の効果で体力が自動で回復しながら攻撃してくる。しかも、ダメージ半減するし・・・与えるダメージ増量って・・・意味わかんない！

なに？最大級の攻撃で一撃で決めろだって？技を溜める最中に攻撃されて負けてしまうよ・・・

はあ・・・妖精の加護って結構チートだろ！

そう思いながらもどう勝つかを考えていた。

全ステータスを底上げしてもダメ。それどころか、相手も一緒の特性、格闘特化型魔法戦士があるので、全ステータスを底上げされてしまった。

俺の残りポケモンは、今戦っているブリガロンに控えのミュウツーだけだ。

うーん・・・

回復を封じる・・・回復を・・・封じる!?

回復封じがあつたか!!

※回復封じ※

相手の回復系統を封じる事が出来る。

確かミュウツーが覚えていた技だ。

消さなくて良かった・・・

「ブリガロン。戻れ」

「え!？」

ブリガロンは凄く驚いたが俺の方へと来てくれた。

「何で僕を戻すの？秘策あるんだよね？」

「勿論だ。心配するな。ミュウツーにやって貰うことが事があるんだ。出てこいミュウツー！」

俺はブリガロンを隣に待機させ、ミュウツーを場に出した。

「ミュウツーですって!？」

「また伝説・・・いったい何体持つてるのかしら?。」

上からニンフィア、マーシユの順でそう言い、バトルを開始する。

「ミュウツー!・メガ進化Y」

ミュウツーがYの姿、スピード特化型にメガ進化した!

ニンフィアは2本の剣を抜刀したままだ。

「ニンフィア!・ムーンフォース!」

「ミュウツー!・回復封じしてからテレポート!」

ミュウツーは速攻回復封じをニンフィアに掛け、紙一重でテレポートを使い、ニンフィアの攻撃を避けたが、ニンフィアは直ぐにテレポート先から現れるミュウツーに狙いを定め、ムーンフォースを当てた!

ミュウツーは攻撃を受け大きく吹き飛ばされた!

ミュウツーは空中で体勢を立て直した!

「ミュウツー!・シャドーボール!」

「切り裂けシャドークロー!」

ニンフィアは剣にシャドークローを纏わせ、ミュウツーが放ったシャドーボールを切り裂き、ミュウツーの方へジャンプした!

ミュウツーは直ぐに対応し、腕をクロスさせ攻撃を防いだが大きく後ろに後退させられた。

『なかなかやるなニンフィア』

「ありがとうミュウツー」

ミュウツーとニンフィアは最初に位置に戻り、構え直した。

「ミュウツー交代だ」

『やはり交代か・・・後は頼んだぞブリガロン』

「はい!・回復封じ感謝します!」

ミュウツーは俺の隣に移動し、ブリガロンを場に出した。

「お待たせしました」

「戦略的交代ね。回復を封じただけでも私のニンフィアは倒せるかしら?。」

「倒してみせます!」

2体のポケモンはそれぞれ2本の剣を抜刀し、構えた。

「秘技！亜空切断！」

「ムーンフォース！」

ブリガロンは剣を振り払い亜空切断を放ったが、ニンファイアの振り払ったムーンフォースで消された。

妖精タイプは龍タイプを無効化出来るのだ。

ムーンフォースはそのままブリガロンの方へと飛んできた！

「鋼タイプ付与！斬り裂けえ！」

ムーンフォースの斬撃波はブリガロンが切り裂き、そのままニンファイアの方へ高速で斬りかかった！

「ニンファイア！炎タイプ付与！斬り返しなさい！」

「ブリガロン！タイプ付与キャンセルだ！ノーマル状態で刀身を強化！」

俺は直ぐに属性命令をキャンセルさせ、刀身だけを強化した！

ニンファイアとブリガロンはお互いの技を剣と剣同士で斬りかかり、衝撃波を飛ばした。

凄い速さでぶつかり合う桃色の光りと緑色の光りは地上や空中でぶつかり合っては直ぐに別の場所でぶつかり合う。

「そろそろくたばってくれないかしら？」

「お前がくたばれ！」

高速の戦いは更に素早さが上がり、衝撃波の数が一気に増えた！

「そろそろ決着をつけましょう？」

「そうですね」

2体のポケモンをそれぞれの位置に戻って貰い、2本の剣を鞘に収め、仕切り直した。

2体のポケモンは肩で息をしており、大分体力が減っていた。

「抜刀！」

2体のポケモンが鞘から2本の剣を出した。
シャン

「構え！」

2体のポケモンはそれぞれ技を構える。

ニンファイアは剣を上にも構え、もう片方は横にも構えた。

ブリガロンは剣を横にも構え、もう片方は後ろにも構えた。

「攻撃開始！」

「ハッ！」

ブリガロンとニンファイアは同時に動いた！

ニンファイアは横にも剣を薙ぎ払い斬撃波を放って接近！

ブリガロンも横にも剣を薙ぎ払い斬撃波を放って接近！その接近中にブリガロンは更に攻撃力を上げ、特性の能力アップで更に攻撃力を増加させた！

バトルフィールド中央付近でお互いの攻撃が当たった瞬間、ブリガロンがニンファイアを押し返した！

「うそ!？」

「なんで!？」

「そのまま押し返せ〜!？」

「ウオオオオ〜!？」

ブリガロンは更に力を込め、片方の剣で薙ぎ払いノックバックを発生させ、隙が出来た瞬間全力の攻撃を当てた。

ニンファイアは大きく宙に飛ばされブリガロンが追撃した。

「五月雨斬り!？」

ブリガロンがニンファイアを切り刻み、マーシユの側で落下した。

ニンファイアは擬人化が解け、ポケモンの姿に戻った。そのまま戦闘不能になりブリガロンは最初の位置に戻った。

「ニンファイア戦闘不能!勝者、チャレンジャーバロン!」

「よっしやく〜!ありがどうブリガロン!」

「やった〜!」

俺とブリガロンと隣に居たミュウツーで抱き合った。

「負けちゃった・・・お疲れ様ニンファイア」

『強かったですねブリガロン』

マーシユはニンファイアをモンスターボールに戻し、「フェアリーバッジ」を持って俺の所に持ってきてくれた。

「お疲れ様バロン君。これがクノエジム勝利の証、フェアリーバッジ

よ。1v600までのポケモンを手に入れやすくなるよ」

「ありがとうございます！フェアリーバッジゲットだぜ！」

俺はガッツポーズしてからバッジケースにしまった。これで6個目のバッジをゲット出来た。

次は7個目だな。ここからならヒヤッコクジムが近かったかな？

「次はどこに向かうのかしら？」

「ヒヤッコクシティに向かおうと思っています」

「そう。気を付けて旅をするのよ。後、何かあれば私に連絡なさいな。アドレス登録しておくわね」

そう言うのとポケモン図鑑にアドレスを登録してくれた。

「ありがとうございます！」

俺とマーシユさんはポケモンセンターに向かいポケモンを回復してもらった。

「それでは・・・行って来ます！」

「行ってらっしゃい」

マーシユは優しく微笑み手を振ってくれた。

俺も手を振り、ヒヤッコクシティに向けて出発した。

ヒヤツコクシティ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十六話

九十六話

今回は経験値やお金を稼ぐためにレックウザで空を飛ばず、地道にヒヤツコクシティを目指す。

セレナは明日クノエジムに挑戦すると言っていたので、俺だけ先に行くことにした。

俺は速くメイビスを取り戻したいんだ！

ジムバトル後にポケモンを回復させてそのまま旅を始めたので既に周りは暗い。

俺が歩いてる場所は、15番道路。又の名をブラン通りと言う場所に来ている。

ここには2つの川が流れており、橋が架けられているので比較的通りやすいようになっている。南東に進むとフウジョウタウンへに行く。

南には16番道路へと行ける道もあるが今は行く必要が無いので気が向いたら行こうと思う。

俺が向かうヒヤツコクシティにはこのフウジョウタウンを経由して行った方が速いのだ。

俺は1つめの橋を渡ろうとしたとき、久しぶりにポケモントレーナーに勝負を挑まれた。

「その君と僕とポケモンバトルをしようじゃないか！」

髪は金色・・・

服はいかにも高い服を着ている。

隣には執事が待機している・・・

金持ちの坊ちゃんだな。

「いいぜ。バトルしようー！」

野外戦

☆金持ち坊ちゃんVSバロン☆

「行けクロバット！」

「出てこいメタグロス！」

先にルールだけは決めておくことを忘れる所だった！

「すまない。先に勝敗についてのルールを決めよう」

「ん？2体先に倒した方の勝ちで良いだろうか？」

「わかった」

良かった。すんなり勝敗に付いてのルールが決まった。

「行くぜ！クロバット、竜巻！」

は!?竜巻覚えるの!?

「メタグロス、ラスターカノン！」

クロバットが巻き起こした竜巻は、メタグロスが放ったラスターカノンによってあっさり消され、そのままクロバットに当たった。しかも一撃で戦闘不能に出来た。

「なに〜！俺様のクロバットが！戻れクロバット！こうなったら・・・出てこい！バンギラス！」

バンギラスか。坊ちゃんはもう少しタイプの相性を勉強した方がいいかな？

人のことは関係ないか・・・

「バンギラス！はかい「メタグロス！ラスターカノン！」

俺は坊ちゃんが技を言い終わる前に先に命令を出し、バンギラスを攻撃した。

「隙有り！メタグロス、コメントパンチでトドメだ！」

「なに〜!？」

坊ちゃんのバンギラスはメタグロスのコメントパンチを受け戦闘不能になった。

俺の圧勝だ。

「く・・・俺の負けだ」

「またバトルしような」

「勿論だ！」

俺はそう言い、坊ちゃんとアドレス交換をしてからフウジョウタウンを目指し歩いて行った。

坊ちゃんの名前って【ギン】って言うんだな。

フウジョウタウンに向かう最中に大勢のポケモントレーナーに何回も挑まれたので全て返り討ちにしながら、経験値とお金を稼いでいき、人柄が良さそうな人とはアドレス交換もしておいた。

ジエントルマン【フジ】

お嬢様【サキ】

ギターリスト【モンジ】

空手王候補【ガンロウ】

坊ちゃん【ギン】

この五人が新たにアドレスを登録した人物達だ。

それ以外は興味も無く、人柄も悪い。戦いたくは無い相手だ。

何はともあれようやくフウジョウタウンに着いたのでポケモンセンターに行き、ポケモン回復と寝床に行き、体を休めた。

お月様も丁度真上を向いていたので大分時間が経っていたみたいだ。

明日からヒヤツコクシティに向けて出発だ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十七話

九十七話

朝早くに起き、俺はフウジヨウタウンを出た。目指すはヒヤッコクシティだ！

俺が17番道路に向かおうとしたとき、後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「バロン君！良かったく会えたよ〜」

サナ達が走って追いかけて来ていた。

「久しぶりだな。元気だったか？」

「うん〜」

「それより！この街の上の方にあるフロストケイブにユキノオーが居るんだけどよ」

「そのユキノオーがフレア団に襲われているって住人から報告が来たんだ！」

「私達のカじや無理そうで・・・」

「二お願いします！ユキノオーを助けてやってください！」

※フロストケイブ※

地下4階層に分かれている洞窟。

最奥は開けている場所があり、神聖な場となっている。

3人一斉に頭を下げられた。

フレア団・・・最近噂を聞かないと思ったがやはり悪さをしていたか・・・

「任せろ。俺がフレア団と戦ってやる」

「ありがとう！」

俺は早速フロストケイブに向かった。

「サナ達は危ないからここにいてくれ」

「俺達も微力ながら手伝わせてくれ！」

「ダメだ。もし住人にフレア団に襲われたらどうする？助けられるのは思えただけだ」

「そうか。分かった！ここは俺達に任せろ！」

万が一って事もあるからな。

後はただ足手まといと考えていたが、今はフレア団を潰す事だけを考えるか。

俺はフロストケイブに着き、メタグロスを出した。

「よろしくなメタグロス。この先に大勢の人の気配がある。多分だがフレア団の連中だろう」

『間違い無いでしょう。ここでフレア団を潰せば良いんですよね？』

「ああ」

メタグロスもやる気を出し、俺は最初からやる気だ。

俺はメタグロスの背中に乗り、高速でフレア団に向かっていった。

フロストケイブの中腹辺りまで着くとオレンジ色の服の連中が群れて焚き火の中心で集まっていた。

「メタグロス！ラスターカノンでぶっ飛ばせ！」

『了解！』

俺はメタグロスから落ちないようにしがみつき、ラスターカノンを放った！

フレア団は突然の攻撃に為す術無く吹き飛ばされ、洞窟の中腹から崖下に落ちていった。

俺達はスピードを緩めずにそのまま中腹を通り、最奥へと目指した。

そこに強いエネルギーを感じるから。

その後もフレア団に気付かれないうちに攻撃をして全て倒して行った。

そして・・・

「フレア団！そこまでだ！」

辺りが氷で覆われている開けた場所に出た。

オレンジ色の服の連中がユキノオーを取り囲む様に陣取っており、炎タイプを中心とした構成でユキノオーを攻撃していた。

だが、普通の大きさのユキノオーでは無く、大型のユキノオーだった。

最初はメガ進化したユキノオーだと思ったが、普通のユキノオー

だったのだ。

フレア団はこの珍しい大型のユキノオーを捕らえに来たんだろう。だが！

ポケモンで悪さを使用者なら許すわけにはいかない！

「あの時の餓鬼か！」

「アケビが見た小僧ってこいつ？」

ん？こいつら俺の事を知っているのか？

「俺はお前達の事知らないが俺の事は知っているのか？」

「素直に聞く坊やだね。君が知らないには仕方ないのよ」

ん？意味が分からんぞ？

「カロス発電所の件でアケビがビオラに負けたのよ。その帰る途中にレックウザに乗ってくる貴方を見ただけよ」

「あの時のフレア団は貴女でしたか」

「私達はレアなポケモンを手に入れたくてね・・・」

「そのポケモン達は強い力を持つ」

「そいつらでこの世界を手に入れるのよ！」

その時、後ろの大型ユキノオーが動いた！

『そんな者の下に付く気は無い！立ち去れい！アームハンマー！』

大型のユキノオーの攻撃範囲は相当開く俺の所まで届いた！

「メタグロス、守るだ！」

「ヘルガー！火炎放射！」

「ウインディ！火炎放射！」

俺はメタグロスに守るで攻撃を耐え、アケビともう一人の女性はポケモンに技を出したが、あの巨体の攻撃は並の攻撃では押し返すことは不可能だ。

案の定、火炎放射はアームハンマーによって、そのまま振り下ろされ、ヘルガーとウインディは攻撃を受けた。

2体は周りの氷の壁に激突し、戦闘不能になった。

「ちっ！お前達！何をもたもたしてるんだ！あいつを倒しな！」

「はっ！はい！」

フレア団の下っ端達が俺の方に来たが、この俺に下っ端だけで勝て

るとでも？

「下つ端共に負ける訳ないだろう？メタグロス、ラスターカノンで一掃しな！」

『了解だ』

「生意気な餓鬼が！野郎共！大文字だ!!」

「おう！」

マグカルゴやコータス、バクーダ、ヒヒダルマ、カエンジシが一斉に大文字を放ってきた！

流石に鋼タイプは炎に弱く、ラスターカノンは押し返された。

「メタグロス！守る！」

「所詮は餓鬼だぜ！お前達、そのまま燃やせ〜！」

「おう！」

面倒くさいぜ・・・

「出てこいゾロアーク！」

『やっと俺の出番か！』

ゾロアークは先にイリユージュンを使い、メタグロスに化けて貰っている。

相手はメタグロスを出したと勘違いし、余裕の笑みを浮かべた。

「せっかくゾロアークだと言ってあげたのにね。ゾロアーク！悪の波動！メタグロス！ステルスロックをアーム化しろ」

『了解！』

ゾロアークは最大パワーで悪の波動を放った！

通常の悪の波動は拳大だが、最大パワーの悪の波動はその倍の大きさはある！

フレア団のポケモン達の大文字はゾロアークの悪の波動に押し返され、全弾ポケモン達に当たった！

メタグロスはステルスロックをアーム化させ、腕に装備させた。

「メタグロス、トドメをさせ！アームハンマー！」

ステルスロックを纏った岩村のアームハンマーを勢いよくフレア団のポケモン達に振り払うように攻撃する。

バキバキと後を立てながらポケモン達が巻き込まれていく。最後

には氷の壁に打ち付けられ戦闘不能に・・・

勿論、永久の戦闘不能では無いので安心してほしい。怪我は免れないが・・・

「俺達のポケモンが・・・貴様あー！」

フレア団の下つ端の指揮していた奴が俺を殴りに来たので、メタグロスがサイコネシスを使い、氷の壁に打ち付けた。下つ端の指揮官は骨が折れたのだろう。変な形に腕やら何やらが曲がっている・・・

正直見ない方がいい。見たくない・・・

この状態を見たフレア団の下つ端は一目散に逃げていくが、最初に言ったとおり潰すのでメタグロスが指揮官と一緒に始末した。

アケビともう一人の女性は大型ユキノオーの戦闘に夢中でこちらに気付いていない。

ユキノオーは勿論俺の事に気付いているが、襲ってこないと感じフレア団と戦っている。

勿論俺もただ見るだけじゃない。

「メタグロス！再度アームハンマー！」

メタグロスは先ほどと同じように薙ぎ払うように2体のポケモンとついでにフレア団2名を攻撃し、氷の壁に叩き付けた。先ほどと同じように骨は大変な事になっているだろう。

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十八話

九十八話

フロストケイブで悪さをしようとしていたフレア団は壊滅させ、大型のユキノオーの前に俺はいる。

当たりには傷だらけで意識を失っているフレア団共がいる。

「メタグロス、フレア団共をサイコキネシスで握りつぶせ。ポケモン達はモンスターボールから逃がす。アケビともう一人の女は利用するから拘束だけしろ」

『了解』

メタグロスは俺の命令に従い、次々と後片付けをしポケモン達は俺がモンスターボールから逃がす。

勿論、傷だらけの状態のままだが・・・

アケビともう一人の女。こいつ名前なんて言うんだ？

俺はそいつの服を漁りカードらしき物があったので見てみた。

モミジ

この名前がこの青髪の女の名前か。

念のため隣でくたばっているオレンジ色の髪の女も確認しておくか。

俺は再び服を漁りモミジが持っていたカードみたいなのを探した。

なかなか見つからないので下の方も探そうかと思つてスカートに手を伸ばそうとしたら、堅い物に触れた気がした。

あつた・・・スカートのポケットに『アケビ』と書かれたカードが見つかった。

俺はそのカードを鞆に入れ、二人を起こした。

大型ユキノオーは静かに見守ってくれている。

「そろそろ起きてくれないか？」

「う〜ん・・・ここは・・・???!」

アケビが凄く速さでバックステップを取ったがこちらの地面は氷。

アケビは勢いよく転び再び気絶した。

流星に俺も呆れ、暫く待とうと思つたが・・・ここ、寒い！

「ユキノオー？寒い」

『え？俺に言われてもな・・・？』

あ・・・

つい言葉に出しちゃった。

「すまない・・・」

『ああ・・・』

気まずい！

凄く気まづくなっちゃった！

俺がそうしちゃったんだけど・・・

その時モミジがようやく起きた。

「お前は!?」

モミジは素早く腰のモンスターボールに・・・手を伸ばすことは出来なかった。

モミジも直ぐに腰を見て、モンスターボールが無いことを確認した。

「お前！やりやがったな！」

『マスターに手出しはさせない!』

メタグロスが直ぐさまサイコキネシスで動きを止め、氷の壁に押しつけた。

「このやろう！私のポケモンを返せ！」

「お前達がやって来た事はこうゆう事なんだよ。嫌ならもうしないことを誓え」

「誰がお前の言う事なんて聞くか！フラダリ様がいたらお前なんて！」

フラダリと言う奴がこいつらのボスカ。

案内させるか？

「んじやそいつの所に案内して貰おうか」

「だから！お前の言うことは聞かないって言ってんだろう！」

めんどくさいや・・・

「ユキノオー？あいつを少しずつ凍らして行って。足からでいいよ？」

『ふむ。心得た』

その言った瞬間、モミジの足が後ろの氷の壁に飲み込まれ、だんだんと下から壁に埋まっていく……

「いや！離して！離してよ！」

「じゃ俺の言うこと全て聞いてね？」

「聞く！聞くから！助けて！」

モミジの体が半分埋まったのでユキノオーに止めるように命じた。ユキノオーは直ぐに止めてくれたので、モミジを氷の壁から出してあげた。

「助けてくれてありがとう！もうこんな怖い思いしたくない！私、フレア団を抜ける！だから！もう……」

「分かった。それじゃあもうコレはいらないな？」

俺は事前を取っておいたカードを見せた。

「なんで私のカードを?!」

「勿論取った。言い逃れして逃がすような事はしない。本当に止めるならコレはいらないだろう？」

モミジは悔しそうに、だが……こちらを見たときは吹っ切れたような顔になった。

「そうね。もう私にはいらんわ。だって、いるっていったら周りの子達みたいになるんでしょ？」

モミジは周りの光景を見てそう言った。

「ああ」

「だったらいらんわよ。その代わり一つ私の願いを聞いてくれる？」

ん？何を願うんだ？

「言ってみろ」

「私を貴方の仲間にして欲しいの！」

「ちよっと待って！」

「ダメ！」

「分かった！それじゃ俺の仲間としてよろしく！」

「ありがとう♪」

急展開だよ！

フレア団を抜けて速攻俺の仲間になっちゃったよ！

モミジもなんか嬉しそうだし……

そうだ！

「なあモミジ。俺のポケモン達がいる山に世話役を任せていいかな？心配は無いんだが、そのだな……」

「貴方の言うことは何でも聞くよ？」

モミジがそう言ってくれたので、

「ありがとう！」

「うん！」

その後はモミジのアドレス交換をして、アケビを起こしモミジが説得。

アケビもフレア団を抜けるから俺の仲間になりたいとの事です承。

アケビともアドレス交換をして、俺のポケモン達の世話役としてユウキの山で活動してもらう。

大型ユキノオーは

『俺は空気なんだな……』

ボソリとそう言い、奥で縮こまっていた。

大きい体で縮こまるとデカイ雪だるまみたいだ。

「すまない。モミジとアケビはもう悪さはしないから安心してくれ」

「ユキノオー！ごめんなさい！」

モミジとアケビは同時に頭を下げた。

『改心したなら大丈夫だ』

大型ユキノオーは優しい笑顔を俺達に向けてくれた。

俺達3人はフロストケイブを出て、俺のレックウザでユウキの山に向かった。

結構速くピカチュウと会うけど、元気だろうな〜

ポケットモンスターXY バロンの旅 九十九話

九十九話

ユウキの山にはユウキの家族がピカチュウ達とポケモンバトルの稽古をしていた。

『ボス！上空にてマスターがこちらに向かってきてます！』

『なに!?ユウキ様。申し訳ございませんがマスターの元に向かいたいのですが・・・』

「僕も会いたいから皆で行こうよ！ね？お父様？」

ユウキは満面の笑みからお父様に聞くとときに少し困った顔になってしまった。

まだユウキはお父さんに勝っていないから、お父さんの言うことに従わねばならないからだ。

「当たり前だ。俺達のトップを迎えに行かないでどうする！皆！行くぞ！総員、整列！バロン様をお迎えいたすぞ！」

「はい！」

ユウキは満面の笑みで、ピカチュウ達も言い笑顔だ。

俺達は総員でバロンを迎えに行った。

俺達は上空でユウキの山を飛んでいた。

今日はやけに騒がしいな？何かあったか？

俺はレックウザにいつもの場所に降りて貰い歩き出そうとした時・・・

『マスター！迎えに参りました！』

「バロン君！迎えに来たよ！」

「お帰りなさいませバロン様」

ピカチュウが一番最初に出て来て、ユウキが次に出て来て、その後にメイド達が一斉に出て来て頭を下げられた。

俺、どうしたらいいの？

「なに固まつてるの？ん？後ろの女性は？」

ユウキは不安げに聞いてきた。

「浮気してないからね！」

「ああ。こちらの女性はね・・・」

「私、アケビ！この山でポケモン達のお世話をしろってバロン様に言われたの」

「私、モミジ！アケビと一緒にでそう言われてここに来ました」

「2人が俺の言葉を遮ってそう言った。」

「そうなんだ！よろしくねモミジさん！アケビさん！」

「よろしくお願いします」

モミジとアケビは頭を下げてお願いした。

「一応解決みたいだ。良かった・・・」

「それじゃポケモンを見せて？」

「え？」

モミジとアケビは俺の顔を見た。

俺も悪いと思ってるけど仕方無かったんだ！

「私達ポケモン持ってないの・・・」

「ちよつとした事情があつてね・・・」

「そうだったんだ・・・それじゃ私の山のポケモン達の内、1体プレゼントするよ♪」

ユウキはどう？って俺を見るが、願っても無い事だ。

この2人もポケモンがいないと何も出来ないだろ。俺もだが・・・

「助かるよユウキ。ほら2人もお礼を言わないと」

「ありがとうございます！ユウキ姉様！」

ユウキ様からユウキ姉様に呼び名が変わった。

「うん！それじゃどの子が良いか探しに行こう！」

「はい！」

ユウキは2人を連れて森に入っっていった。

ピカチュウが直ぐに山のポケモンを警護に付けさせたので大丈夫だろう。

「遅くなってすまない。久しぶりに会えたなバロン君」

「久しぶりです！ユウキ達が戻ってくるまでバトルしましょう！」

「ああ！」

俺達はユウキ家特製バトル場へと向かった。
それにしても今日は賑やかだな。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百話

百話

ユウキ家特製バトル場は凄く広がった・・・

バトル場をいくつも完備されており、その中の1つのバトル場へと案内された。

「凄いですね。バトル場がこんなに沢山・・・」

「バトルで物事を決める我が家はこれぐらいでは物足りないがな」

そう言い笑ってる。

「さあ！3対3のバトルをしようじゃないか！ポケモンの交代はお互い有り」

「分かりました！」

俺と閏炎様はそれぞれの立ち位置に着き、ポケモンを出した。

「出てこい。ボスゴドラ！」

「行ってこい！メタグロス！」

ユウキ家戦

☆閏炎VSバロン☆

「ボスゴドラ、ステルスロック」

「メタグロス、瞑想」

最初はお互いステータスを高めた。

「行け！アイアンヘッド！」

「迎え撃て！コメットパンチ！」

お互いのポケモンは同時に動き、バトル場中央でぶつかり合った！

「追撃せよメタグロス！ラスターカノン！」

「殴り飛ばせ！アームハンマー！」

メタグロスがラスターカノンを放とうとした時、ボスゴドラのアームハンマーがメタグロスを左から殴った！

そのせいでラスターカノンの起動がズレ、ボスゴドラの右肩に当たった。

「楽しい！楽しいぞ！ボスゴドラ！岩雪崩れ！」

「俺も楽しいぜ！メタグロス！ラスターカノン！」

ボスゴドラが地面を殴り岩雪崩れを起こした。それをメタグロスがラスターカノンで相殺した。

「今度は俺達の番だ！メタグロス。メガ進化！」

「俺達もするぞ！ボスゴドラ。メガ進化！」

お互いのポケモンをメガ進化させ、再び最初の位置に戻る。

「先手は貰うぜ！ボスゴドラ！アイアンヘッド！」

「迎撃せよメタグロス！コメットパンチ！」

最初と一緒の技だが、お互いメガ進化しているので威力は大きい。

2体がぶつかり合った瞬間、衝撃と火花が散り爆発したが、2体は無傷でその場でぶつかり合っていた。

「クハハハ！あの攻撃を受けてなお無傷か！」

「俺も驚きましたよ。無傷なんですね」

俺のメタグロスがなかなか押し切れない……

いや。閏炎様の指導が良いんだろう。あの時より格段にステータスが上がっている。

ぶつかり合っていた2体のポケモンは再び元の場所に戻った。

「バロン！お前もダンテからポケモン凶鑑貰っているよな？」

「ん？はい。貰ってます」

閏炎様はニヤリと笑い……

「俺も旅をしていた時期があつてな。その時に試作段階のこのポケモン凶鑑を貰っていたんだ」

閏炎はズボンのポケットから古びたポケモン凶鑑を取り出した。

「このポケモン凶鑑にはお前も知っているだろう？チート級に強くなるこの力を……」

「確かに知っています。僕も旅をするときに貰いましたから」

俺も鞆からポケモン凶鑑を取り出した。

「言いたい事は解るな？」

「凶鑑効果を使えですね？」

「ああ！今出せるお互いの力をここで示そうじゃないか！凶鑑効果才

ン！」

閏炎は凶鑑効果を入れ、ポケモンを強化した。

「分かりました！凶鑑効果オン！」

俺も凶鑑効果を入れ、ポケモンを強化した。

お互いのポケモンから溢れんばかりの力が漲る。その力はオーラと化してポケモンを包み込む。

「行くぞ！ボスゴドラ、ラスターカノン！」

「穿てメタグロス！ラスターカノン！」

ボスゴドラとメタグロスはラスターカノンを放ったが凶鑑効果を使っている今、通常の範囲・攻撃力では無い。

ラスターカノンの通った場所の地面は消し飛ばされ丸い穴がお互いのポケモンに向かってる。

バトル場中央ではラスターカノン同士がぶつかり合い、ドデカい爆発を起こした！

バトル場は中央付近から消し飛ばされ、原型をとどめていない。

閏炎と俺はその場で何とか踏みとどまり、飛ばされ事は無くお互いのポケモンも踏みとどまり飛ばされなかった。

「流石だバロン！ボスゴドラ！接近戦行くぞ！アームドインパクト！」

この技はギガインパクトとアームハンマーを合体させた高威力技だ。

「ならば！メタグロス！四神・神装拳！」

※四神・神装拳※

東西南北を司る神。

朱雀・青龍・玄武・白虎の力を宿した拳で相手を攻撃する。

それぞれの神の技を使った後、自身の体力の1割が減る。

それぞれにはタイプがある。

朱雀・・・【神・炎・飛行】

青龍・・・【神・水・龍】

玄武・・・【神・草・鋼】

白虎・・・【神・格闘・妖精】

メタグロスの4本の拳からそれぞれの神を宿したオーラを纏い、お互いのポケモンが高速で殴りにかかった！

バトル場中央ではアームドインパクトでメタグロスに殴りに行くこうとしているボスゴドラが、四神を宿した拳のメタグロスがボスゴドラのその攻撃を朱雀の拳で殴り返し、青龍・玄武・白虎の拳でボスゴドラを殴った。

この攻撃を受けたボスゴドラは大きく吹き飛ばされ閏炎の前で戦闘不能になり倒れた。

「始めて見た技だ……四神・神装拳。戻れボスゴドラ。お疲れ様」

「メタグロス。休むか？」

『まだ大丈夫だ』

メタグロスのその言葉を信じ、俺は2戦目もメタグロスで行くことにした。

「俺の2体目は……虹色の羽を持つ伝説のポケモンよ！出でよ。ハウオウー！」

「伝説ポケモン!?!」

閏炎の2体目は綺麗な虹色の羽を持つ伝説のポケモン。ハウオウだった！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百一話

百一話

ユウキ家の当主である閏炎様とのポケモンバトルは2戦目を迎えた。

ユウキ家第2戦

☆閏炎VSバロン☆

「ホウオウよ！当たりに聖なる炎！」

※聖なる炎※【炎】

高確率で相手を火傷状態にする高威力技。

「メタグロス、瞑想を使ってステータスを更に強化」

俺は瞑想を重ねがけし、ステータスを高めた。

聖なる炎は俺達の周りを覆い尽くし、高々と燃えているし、結構熱い！

閏炎様を見ると上半身裸になっていた・・・

筋肉すげー付いてる。

「バロン君は脱がないのかい？」

「俺は平凡な体ですので見せるほどは無いです」

「そうか」

閏炎は頷くとバトルを開始した。

「では行くぞ！ホウオウよ！全てを焼き尽くすがいい！業火！」

※業火※【炎】

辺り一面を焼く広範囲・高威力技。

ホウオウは上空から翼を広げ業火を放ち、バトル場の空は業火が広がった！その業火が俺達のいる場所に落ちてきた。

「メタグロス！ステルスロックで炎を撃ち尽くせ！」

メタグロスの周りに無数の岩を出現させ上空の業火に向かって撃った。

岩は業火に当たるとその場で爆発し、それが連鎖となって上空で爆

発が連発した。

上空の爆発の煙が晴れたときには全ての炎は消えていた。

「次は俺達だ！メタグロス、四神・神装拳！」

「迎え撃てホウオウ！鳳凰拳！」

※鳳凰拳※【神・炎】

ホウオウの奥義。

神の炎を体に纏わせ全身を使い体術を使う。

デメリットで自身を火傷状態にさせてしまう。

ホウオウの体が白い炎に包まれた。

メタグロスは4本の拳に四神の力を纏わせ、両者バトル場中央でぶつかり合った！

ホウオウは脚や羽を使いメタグロスの上から攻撃。

メタグロスは2本の拳でホウオウを攻撃を迎え撃ち、残り2本の拳で確実にダメージを与えた。

この攻防が高速で行われているので2人は殆どバトル内容が分からない。なので2人は直感で指示を与えたりしている。

「ホウオウの炎が弱まっているだろ？ホウオウ！いったん下がれ！」

「逃がすなメタグロス！ストーンエッジ！」

「くそ！ホウオウ！破壊光線！」

メタグロスが放ったストーンエッジはホウオウの破壊光線によって相殺された。

ホウオウは閏炎の前で舞い降りた。メタグロスも俺の元に来て待機した。

「バロン君！君のポケモン達は本当に強い！なので！ホウオウの真の姿でお相手をしよう」

閏炎はホウオウを見ると頷いた。

「ホウオウよ！真の姿を見せるがいい！擬人化！」

「ホウオウが擬人化!？」

ホウオウの周りに魔法陣が展開された。

ホウオウの体は人間の姿に変わり・・・

赤毛の長髪がポニーテール結びで結ばれている。

鮮やかな袴を着ている。
手には扇を持っている。

見た目は・・・男だ。

擬人化ホウオウ

特性【神の加護】

全ダメージを半減させる。

自動で体力を回復し状態異常も回復する。

特性【鳳凰の力】

炎と風を操る事が出来る。

自動で体力を大幅に回復する。状態異常にならなくなる。

ホウオウの特性で火傷状態が治った。

「ならば！メタグロス、俺達もするぞ！進化の真骨頂を見せてやれ！

擬人化・神装ポセイドン！」

メタグロスの周りに魔法陣が展開され、人間の姿に変わる。

擬人化が完了し直ぐに神装に移り、青色の魔法陣が展開された。

青色の長髪はストレートで背中当たりまで伸びている。

服は蒼をメインとしたワンピースを着ている。

手には三叉の矛を持っている。

特性【神の加護】

全ダメージを半減させる。

自動で体力を回復し状態異常も回復する。

特性【ポセイドン】

海を支配する神・ポセイドンを神装した姿。

三叉の矛（トリアイナ）を武器として扱う。

大海と大陸を自在に支配する。

「ポセイドンか鳳凰が強いか決めようぜ！」

「はい！行くぞメタグロス！海洋神技・オーシャンセイバー！」

「行けホウオウ！炎帝・オーバレー！」

※海洋神技・オーシャンセイバー※【水・神】

三叉の矛の先から青い海のオーラを剣状に形成。

海の力を宿した巨大な力で相手を攻撃する。

※炎帝・オーバレイ※【炎・神】

扇の先から炎のオーラを剣状に形成する。

炎帝の力を宿した巨大な力で相手を攻撃する。

2体の武器からそれぞれの剣状のオーラが形成され、バトル中央で激突した！

メタグロスはオーシャンセイバーを上段斬りし、その攻撃をハウオウがオーバレイで薙ぎ払い、上段斬りで反撃。

その反撃を剣を一回転させ剣先で下から上に弾き返し薙ぎ払い反撃。

さらにその攻撃をバックステップで躲し、オーバレイを腰に引き一気に突いて反撃。

その攻撃を紙一重で右に避け、オーシャンセイバーで突いて反撃し鳳凰の腹に攻撃を当てた！

『グハッ！』

ハウオウは持っていた扇を落とし地面に倒れ戦闘不能になり、擬人化が解けポケモンの状態に戻った。

「ハウオウが!? 戻れハウオウ。お疲れ様」

「流石だメタグロス。次もやるか?」

『ああ。この力をまだまだ出し切れて無いみたいだからな』

メタグロスの神装・ポセイドンの力は今のでまだ40%しか使っていないのだ。

この力を100%使うと本当に神になってしまいそうだぞ・・・

「流石だバロン君、メタグロス。俺の最後のポケモンだ。出てこい俺の相棒! 炎の伝説ポケモン! エンテイ!」

閏炎は最後のポケモンをモンスターボールから出した。

エンテイは閏炎の前に立ち、天高く吠えた! その時、周りの崩れている大地からマグマが噴き出した!

「な!? マグマだと! メタグロス。近くの岩でいいから俺の足場を造ってくれ!」

『了解した』

メタグロスは近くの大岩をサイコキネシスを使い俺の側に置いた。

俺はその岩に乗り、閏炎を見た。

閏炎はエンテイの炎の加護に守られており、マグマの影響を受けていなかった！

エンテイが閏炎の最後のポケモン。勝てば俺のストレート勝ちだが・・・

バトルしないと分からない。

さあ！戦うぞ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二話

百二話

ユウキ家の当主、閏炎様の最後のポケモンは火山ポケモンのエンテイ。

エンテイはマグマの情熱を宿したポケモン。

火山の噴火から生まれたと考えられ、全てを焼き尽くす炎を噴き上げると言われている伝説のポケモンだ。

エンテイがバトル場に出たから天高く吠えた後、今までのバトルで地面が崩れておりその崩れた地面からマグマが噴き出してきた。

俺はメタグロスに足場を造って貰い助かった。

閏炎はエンテイの炎の加護でマグマの影響を受けなくさせていた。閏炎様の最後のポケモン、エンテイとのバトルがついに始まる！

ユウキ家当主・閏炎戦

☆閏炎VSバロン☆

「行くがいいエンテイ！噴火」

「メタグロス！海の力を使い！海震・大地震！」

※噴火※【炎】

自身の体力が多ければ多いほど威力が上がる。

※海震・大地震※【水・地面】

海の偉大なる力で地震を起こす。

地震が起きた後津波が起こる。

エンテイが噴火を起こした後、メタグロスが海震・大地震を起こした。

噴火で起きたマグマは大地震により地面に亀裂が入り地面に穴が開いた。そこにマグマが流れ込んでいく。

噴火で起きた火山弾はメタグロスに向かっていった。それらは、三叉の矛で地面を叩き強制的に津波を起こして火山弾やマグマなどを一掃した。

「エンテイ！大文字！」

「メタグロス、海洋神技・オーシャンセイバー！」

エンテイが放った大文字は津波の力で更に倍増したオーシャンセイバーで真つ二つに裂かれ左右で爆発した。

メタグロスはそのままエンテイにオーシャンセイバーで追撃しようとした時！

「流石にポケモンの姿じゃキツいか・・・エンテイ！お前の真の姿を見せてやれ！最強進化・擬人化武装！」

オーシャンセイバーが届く前にエンテイの周りに魔法陣が展開され、メタグロスの攻撃は弾き返された！

仕方無くメタグロスは俺の元に戻ってきた。

周りの津波の影響はオーシャンセイバーで全て回収しているので元の状態だ。

エンテイの姿はポケモンから人型に変わり・・・

2mを超える長身の男に変わり・・・

茶色の短髪をオールバックで纏めており・・・

服装は紅色をメインとしたのを着ており・・・

左右の腰には赤と黒の長剣が携われている。

服の上からは銀色に近い色の近いマントを羽織っている。

擬人化・・・エンテイだ。

俺は直ぐにポケモン図鑑でステータスの確認を行った。

擬人化・エンテイ【神・格闘】

擬人化【剣の達人】

剣での攻撃では負けることは無いだろうと言われる達人級の使い手になる。

この状態から更に魔法陣が展開された！

エンテイの体に赤と黒色の鎧が装備されていく。

見た目は騎士！

魔法陣は最後にエンテイの背後に鋼の翼を装備させた！

これは・・・空を飛べるんじゃないか？

マントは鎧が装備された時に消えた。

擬人化武装・エンテイ【神・炎・格闘】

擬人化【剣の達人】

剣での攻撃では負けることは無いだろうと言われる達人級の使い手になる。

擬人化武装【鋼の鎧】

全ての攻撃では怯む事が無くなる。

状態異常攻撃は全て無効になる。

おいおい・・・

結構ヤバいぞ・・・流石は伝説だな。

「さあ！準備は整ったぞ！」

「はい！先手は貰うぜ！メタグロス、海洋神技・オーシャンセイバー！」

「エンテイ、抜刀せよ！炎神奥義・双斬無双！」

※炎神奥義・双斬無双（そうざんむそう）※【炎・格闘】

炎を纏った剣で相手を無数に切りつける超連続技。

相手を火傷状態に出来る。

2体は瞬く間にバトル場中央で戦闘が開始された！

メタグロスはオーシャンセイバーを上段斬りでエンテイを攻撃しようとしたが、エンテイは双斬無双の片方の剣で剣を弾き返し、もう片方の剣で直ぐに追撃をした。

この攻撃でメタグロスが怯んだ瞬間にエンテイが双斬無双で超連続撃をメタグロスに攻撃した！

メタグロスは反撃も出来なく、体力が大幅削られた！特性の自動体力回復が間に合っていないのだ！

エンテイは最後に2本の剣を同時に上段から振り下ろし地面ごと切り裂いた！

その後エンテイは大きく後ろに跳び、そのまま背中羽を羽ばたかせ上空に舞った。

メタグロスはギリギリ体力を残しており、立っているのがやっとの

状態。

俺は直ぐにメタグロスを戻そうとしモンスターボールをメタグロスに向けた。

「戻れメタグロス！」

俺のモンスターボールは赤い光りを放ちながらメタグロスに伸びていくが……

「予想通りだ！エンテイ、シャットダウン！」

※シャットダウン※【光】

相手のポケモンを交代出来なくする。

（電気タイプでは無く光タイプです。新タイプです。）

空を飛んでいたエンテイは黒剣から黒い光りをメタグロスに当て、全身に黒い光りが覆われた。

その後モンスターボールの赤い光りがメタグロスに当たったが、弾き返される事になった。

黒い光りは直ぐに収まったが、常時ポケモンの交代は出来ない。

勿論、バトル中のみの効果なので戦闘不能になるかバトルに勝つかでシャットダウンは解除される。

「くそ！メタグロスを交代出来ない！」

「トドメをさせエンテイ！ビッグバン！」

「ビッグバン!？」

※ビッグバン※【炎】

広域滅殺魔法。

辺り一面を焼け野原にする。

「メタグロス！守るをええ！」

「無駄だ」

「なんだと!？」

「ビッグバンにポケモン技の守るが通じるとでも?」

擬人化の状態はポケモンの力を最大限引き出す状態だ。

だから擬人化の技はそのポケモンにあった技を覚える。故に……

「放て！ビッグバン！」

上空を飛んでいたエンテイが2本の長剣を鞘に収め、両手を空に向

けた。

エンテイが空に向けていた手から赤黒い球体が出て、それが一気に大きくなった！

『全てを消し去る大いなる大魔法を食らうがいい！広域滅殺魔法・ビッグバン！』

エンテイがビッグバンを放ったと同時にメタグロスは俺にポセイドンの加護を付けた！

※ポセイドンの加護※【神】

戦闘で一度だけ擬人化が解ける代わりに、どんな攻撃でも無効に出来る。

メタグロスは擬人化が解け、ポケモンの状態に戻った！その状態で守るを発動した！

ビッグバンはメタグロスの守るに当たった瞬間、一気に超絶大爆発が起こった！

ユウキのバトル場は一気に消し飛ばされ、メタグロスは地面にめり込んでいった。

ビッグバンの爆発はデカイ球体状に爆発し、その中央にメタグロスが位置づけられていたので地面にめり込んだのだ！

俺はメタグロスのおかげで爆発の影響は一切受けていないが、閏炎の方はどうなったのか気になり見てみた。

閏炎はビッグバンが放たれる前にエンテイから加護を受けていたみたいだ！赤いオーラ状のドームが閏炎を覆っていた。

凄まじい爆発の後には俺達が戦っていたバトル場はデカイ球体状の穴が空いており、その中心に押しつぶされるようにメタグロスが横たわっていた！

「メタグロス！大丈夫か!？」

俺は直ぐにメタグロスに掛けより声を掛けた。

『流石にキツいな・・・速く体力を回復したいぜ』

メタグロスはニコツと俺に笑いかけてくれた。

俺は直ぐに鞆から傷薬を取り出し使おうとしたが、

『今はいい。モンスターボールの中は医療室みたいなもんだから。そ

の内回復するさ』

「本当か？」

『ああ』

メタグロスはモンスターボールに触れ自分から戻った。

「お疲れ様メタグロス」

俺はメタグロスが入ったモンスターボールを軽く撫でた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三話

百三話

ユウキ家当主の閏炎とのバトルで最後の1体まで追い込んだ。

だが、その最後の1体は伝説のポケモンエンテイだった。

エンテイは擬人化し、更に武装してとてつもない力を引き出した！

俺のメタグロスはエンテイには負けたが、閏炎のポケモンを2体倒すことに成功した。

今はゆっくり休んで体を休めて貰おう。

「閏炎様のエンテイ。凄く強いですね」

「ありがとう。バロン君のメタグロスも凄かったぞ。俺のポケモンを1体で2体を倒すのだからな」

閏炎はガツハツハツハと笑ってる。

「さあ！次のポケモンを出すがいい」

「はい。出てこいブリガロン！」

「ブリガロン？タイプの不利だと思いが何かあるな？」

閏炎とエンテイは少し身構えた。

「勿論考え合つての事です。ブリガロン、進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化！」

俺はブリガロンを出し、直ぐに擬人化に移らせた。

そうしないと炎技が弱点のブリガロンではエンテイの攻撃には耐えきれない。

魔法陣が展開し、ブリガロンは人型になり擬人化した。

擬人化時の能力は皆が知っている通り、格闘特化型魔法戦士だ。

魔法で強化して戦えば勝機はあるはず！

ブリガロンの擬人化が終わり、腰に携えている2本の剣を抜刀した。

エンテイも2本の剣を抜刀し構えた。

ユウキ家当主閏炎戦（バトル場大穴）

☆閏炎VSバロン☆

「エンテイ、空に飛べ！」

「飛ばすなブリガロン！岩雪崩れで上から攻撃だ！」

※岩雪崩れ※【岩】

空中から岩雪崩れを起こす。

地上からも出来る万能技。

エンテイの頭上に岩雪崩れが起こる黒雲を出現させ、岩雪崩れを起こした！

エンテイはその岩雪崩れごと黒雲に突っ込み、全く怯まずに空に飛んだ！

だが、ダメージは受けてる。

「くそ！空に飛びやがった！」

「バロン君のブリガロンは地上戦は強いが空は苦手だろう？」

「っ!？」

閏炎はあの時のバトルから大分研究と鍛錬をしてきているな。

空は確かに苦手な戦闘だ。

これは参ったぞ・・・どうする？

『マスター？エンテイが近づいて来たときに迎え撃つ感じで行きますか？』

「それしか無いが。エンテイは遠距離攻撃も可能だ」

『痺れを切らして接近してくるまで躲せば大丈夫です』

「大丈夫なのか？」

『勿論だ。なんとたつてマスターのポケモンだからな！』

「そうだな。ありがとう！」

閏炎達はニツと笑い・・・

「作戦は終わったな？では・・・参る！エンテイ、炎獄地獄！」

「ブリガロン！全ステータスを底上げし、攻撃範囲から逃げろ！」

※炎獄地獄※【炎】

地獄の炎を呼び起こす。

暫く炎は燃え続ける。

上空のエンテイはまた剣を鞘に収め、地面に向け技を放った。

『大地を地獄に変えろ。広範囲魔法・炎獄地獄!』

エンテイが手から真つ赤なレーザーを地面に放つとそこから広範囲に炎が燃え移った!

その炎はバトル場を覆う……

周りの炎を受けないようにエンテイは審判にも加護を与えていたので影響はなかったみたいだ。

ブリガロンはこの範囲からバトル場へと待避したが、バトル場の外。

場外負けと言われそうで審判と閏炎様を見た。

審判方は赤旗を挙げようとしていた。それを閏炎様が止め、バトルを続行させて貰えた。

「今回のルールでは場外負けは無い。ルールで決めたのはポケモンの交代だけだ。なので心配する必要はない」

「ありがとうございます」

「さあ、気を取り直してバトルの続きを使用じやないか!」

「はい!ブリガロン、瞑想」

「エンテイ!炎帝・オーバーレイ!」

エンテイがオーバーレイを発動した瞬間!炎獄地獄の炎が反応した!

その炎はエンテイが発動したオーバーレイに吸収されるように集まっていき、やがて1つの大きな特大剣と変わった。

「馬鹿な……これだけの質量を有してなお炎獄地獄の炎が消えないだど……ブリガロン、武器に強化魔法を掛けておけ。エンテイが近づいてきた時に居合斬りだ」

『了解した』

ブリガロンは目を閉じたままそう言い、静かに武器を強化し居合斬りの構えに移った。

「ほう。居合斬りか。考えたなようだがこの特大オーバーレイを裁ききれれるかな?攻撃せよエンテイ!」

『了解!特大剣。炎帝・オーバーレイ!受けてみよ!』

エンテイは2本の特大剣・オーバーレイを上空から急降下し、一気にブリガロンに迫った！

ブリガロンはまだ動かない。

「斬れー！」

「今だ！居合斬り・絶！」

※居合斬り・絶※【格闘】

居合斬りの高位技。

広範囲に入った者を一瞬で斬ることが出来る。

範囲は使う者により違う。

ブリガロンはエンテイがオーバーレイを振り下ろす前に居合斬り・絶をエンテイが装備していた翼を破壊して急行中のエンテイを落としました！

「なに?！」

エンテイは地面に凄い勢いで落ちて地面に陥没し、凄い土煙を起しました！

その土埃の中から怒り奮闘のエンテイが吠えた！

『貴様〜！やるさんぞ〜!!』

エンテイは閨炎が命令する前に動いた！

『滅殺剣技・殺戮無双!』

※滅殺剣技・殺戮無双※【悪】

相手を倒すことに執着し、相手が倒れるまでひたすら攻撃する。

この技を発動時、全てのステータスのリミッターを解除し大幅に戦闘力が上がる。

デメリット・・・技が解除されると壮絶な痛みが来る。体力の4割が一気に減る。

『間合いの範囲だ。居合斬り・絶!』

『きか〜ん!』

ブリガロンが放った居合斬り・絶は確かにエンテイの胴体に当たった筈だったが、エンテイは全く怯む事無くこちらに迫ってきた！エンテイが持っている剣にも以上が出て来ているみたいだが、大丈夫なのか？

「閏炎様！エンテイの剣が黒く染まっていますが大丈夫ですか!？」

「なに？エンテイ！大丈夫なのか!？」

『無論、大丈夫だ！我に従え赤と黒の愛剣よ！我に力を貸したまえ！』
そう言った途端、黒く染まっていた剣が元の色に戻り、エンテイが制御した事が分かった。

それとほぼ同時に次は剣がエンテイに力を貸すかのように虹色の光りがエンテイを覆う！

剣がエンテイを強化しているのだ！

『我と私の剣に不可能は無い！滅殺剣技・殺戮無双を受けてみよ！』

『居合斬りはあまり効果がないか・・・』

「ブリガロン！2刀流奥義を使うぞ！」

ブリガロンにそう言い、構えさせた。

「ほう？2刀流奥義とな？」

「見れば分かりますよ。2刀流奥義・新爆絶居合斬り・刹那！」

※2刀流奥義・新爆絶居合斬り・刹那※【炎】

2本の剣で神速の速さ斬り、その後斬った相手を爆発させる。

ブリガロンは腰を少し落とし、2本の剣の柄に手を触れたその瞬間！

ブリガロンはエンテイの後ろに居た。

その後、『キンツ』と音が鳴った瞬間、エンテイを中心に爆発が起こった！

「なに!？」

閏炎は凄く驚いた。

それもそうだろう。今さっきまで立っていたはずのポケモンが一瞬で自分のポケモンの後ろに行き、その後爆発したのだから・・・

爆発の中に虹色の光りが更に強く光り、爆発で生じた煙を掻き消した。

そこには本当にダメージが通っているのか聞きたくなるような状態のエンテイが虹色の光りを纏いながら立っていた。

ブリガロンは確実に勝った思っているので今は隙だらけだ！

「ブリガロン！そこから距離を取れ！まだエンテイは倒せていない

！」

『え?』

ブリガロンが振り返ろうとしたとき、その後ろにエンテイがブリガロンの顔を掴んだ!そして・・・

「倒せエンテイ!灼熱地獄!」

『燃え尽きろ。灼熱地獄』

※灼熱地獄※【炎】

相手の体力が尽きるまでずっと燃え続ける。

『ぐわ〜!』

「ブリガロン!」

俺は直ぐにモンスターボールに手を伸ばしたが、今はまだシャツダウンの効果が続いている・・・

「ブリガロン!剣戟乱舞!」

※剣戟乱舞※【格闘】

剣で相手を連続で攻撃する。

ブリガロンはまだ自由に動ける手で剣を持ち、エンテイに攻撃しようとしたが、その剣をエンテイは素手で止めた。

『大人しく燃え尽きるがいい』

エンテイがそう言うのと炎の勢いが更に増した!

その炎がブリガロンを遅う度、悲鳴が聞こえる。

速く何とかしたいが、どうすれば!

『これでお終いか?実に呆気ない』

エンテイがブリガロンから手を離れた時、擬人化が解けポケモン状態に戻ったブリガロンが戦闘不能で倒れていた。

「ブリガロン!戻れブリガロン。今はゆっくり休んでくれ」

これで俺のポケモンも残り1体になってしまったか・・・

閨炎様はやはり強い。

俺の最後の1体はミュウだ。

頼んだぞ・・・ミュウツー

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四話

百四話

閏炎様とのバトルは遂に両者最後のポケモンとなった。

ポケモンの体力的には閏炎様のエンテイが不利な筈だが、体力が多すぎるせいかなかなか倒れない。

「出てこい俺の最後のポケモン。ミュウツー！」

「ほう。ミュウツーか」

ユウキ家閏炎・最終戦

☆エンテイVSミュウツー☆

「ミュウツー今回は最初から全開で行くぞ！進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化！」

俺は直ぐにミュウツーを擬人化させ・・・

「神装・太陽神ラー！」

神装を使った。

光り輝く魔法陣がミュウツーの側に来て、黄金の鎧を装着した。

手には黄金の鎌を装備し、頭には金の鳥の形をした冠を填めている。

背中には黄金の光輪が光り輝いていた。

神装・太陽神ラーの完成だ！

特性【太陽神】

状態異常を全く受けず、攻撃を受けても怯まない。

太陽の光でステータスを大幅に強化出来る。

「ほう!?太陽神とは・・・」

「ミュウツー！日本晴れ！」

日本晴れの効果で雲が無くなり日照りがバトル場に降り注いだ。

今日は周りの炎は今だ健在で、日照りの効果で更に燃えた。

「エンテイにとって火はエネルギーの源！それを強化するとはな。炎帝・オーバーレイ！」

「迎え撃てミュウツー！ソーラーセイバー！」

※ソーラーセイバー※【光】

太陽系の光を剣に納めた高濃縮の太陽剣。触れた者は確実に火傷状態になる。

赤い剣と光りの剣はバトル場中央でぶつかり合うことになった。

エンテイはオーバーレイを上段斬りで切りつけ攻撃しようとしたが、ミュウツーのソーラーセイバーはその攻撃を切り裂き焼き尽くした！そのままエンテイに攻撃を当て吹き飛ばした。

エンテイは閨炎の居るところまで飛ばされ、体勢を立て直した。

「まさかオーバーレイを切り裂くとは……」

「オーバーレイは【火】ソーラーセイバーは【太陽】ですから」

この違いは天と地の差がある。覆ることはない。

「そろそろ決着ですね？トドメをさせミュウツー！ソーラーセイバー！」

「最後の悪足掻きだ！エンテイ！ビッグバン！」

エンテイの最強攻撃ビッグバンが放たれた！だが……

そのビッグバンのエネルギーごとソーラーセイバーは切り裂きエンテイを攻撃した！

エンテイはこの攻撃を受け、擬人化が解除されポケモンの状態に戻った。

エンテイは地面に倒れ、戦闘不能になった。

周りの炎はエンテイが倒されたときに自然消滅した。

この勝負は……俺の勝ちだ!!

審判の方が赤旗を勢いよく振り上げた！

「エンテイ戦闘不能！勝者……バロン様!!」

「よし!!お疲れ様ミュウツー！」

「よく頑張ったなエンテイ。ゆっくり休め」

俺は閨炎様と握手し、一緒にポケモンを回復させにむかった。

バトル場は当たり一面黒焦げになっており、バトル場中央は大穴が空いている……

ポケモンセンターに着くとユウキとアケビ、モミジが先に休憩して

いた。

何で先にここにいるのか聞くと、俺と閏炎様のバトルの影響力がとんでもなく広がったらしく、バトル場以外にも被害が及んでいたらしい。

バトル場の周りのポケモン達が全くいなかったのが不思議だったが納得した。

後、バトル場の修理はユウキ家がしてくれると言ってくれた。

「バロンは旅を楽しみなさい」

そう言いわれ俺は旅を再開させてもらった。

アケビとモミジはそれぞれ気に入ったポケモンが出来て、そのポケモンを相棒として育てるみたいだ。

アケビはバクーダ。

モミジはキレイハナ。

そのポケモンを選んでこの山のポケモン達と修行して行くみたいだ。

頑張れよ2人共！

俺はポケモンが回復してからレックウザに乗り、ヒヤッコクシテイに向け飛び立った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五話

百五話

俺はレックウザに乗りヒヤッコクシティに直接むかった。
もうセレナも着いてる筈だから・・・

※ヒヤッコクシティ※

北に大きな水晶の日時計がある。

ジムはこの街の真ん中あたりに位置しておりポケモンセンターは南に位置している。

俺はレックウザにヒヤッコクシティのポケモンセンターの前で降りして貰いポケモンセンターに入った。

先にアイテムを買いそろえておこうと思っていたからだ。

そのポケモンセンターに入った時、セレナが丁度女医さんにポケモンを返して貰っている瞬間だった。

「お待たせしました。ポケモン達は皆、元気になりましたよ」

「ありがとうございます」

「ようセレナ！ジムにはもう挑戦したか？」

俺はセレナがポケモンを受け取ったタイミングで話しかけた。

「バロン！もう、この町に居なかつたから先に行ったのか心配したんだよ！後、ジムリーダーのゴジカさんに勝ってジムバッジを手に入れたよ！」

セレナはそう言い、俺にジムバッジケースを見せてくれた。

そこにはちゃんと『サイキックバッジ』が入っていた。

「凄いじゃないかセレナ！俺も負けてられないな！」

俺は直ぐさまアイテムを買い、ジムに向かった。

「ちよーちよつと待ってよ〜！」

セレナは急いで俺の後を追った。

2人でヒヤッコクジムの前に行く扉から1人の女性が出て来た。

「お前達が来ることは予言した。私がこのジムリーダーのゴジカ

だ」

「バロンです！よろしくお願いしますー！」

「私はバトルの観戦に来ました」

「付いてくるがいい。バトル場に案内しよう」

ゴジカはそう言いジムの中へと歩いて行った。

※ヒヤッコクジム、ジムリーダー・ゴジカ※

背が高くスタイルの良い女性のジムリーダー。

エスパーパーポケモン使いだけにミステリアスな印象。

言葉使いは丁寧で静か。

俺達もゴジカさんの後を追ってジムに入っていった。

暫く歩いていると開けた場所に出た。

周りの壁とかの模様が宇宙を感じさせるような色をしている。

天井までの広さも高い。これならレックウザも自由に飛べる広さがある。

「さあ、チャレンジャーのバロン。ジムバトルをしようじゃないか」

「はい！お願いしますー！」

俺達は定位置に付くと審判の方が旗を持って現れた。

審判の方が旗を挙げると・・・

「それではこれより、ヒヤッコクジム戦を始めます！使用ポケモンは3体。ポケモンの交代はチャレンジャーのみとします。それでは・・・始め！」

審判の方が勢いよく旗を振り下ろし、バトルが始まった！

ヒヤッコクジム戦

☆ゴジカVSバロン☆

「出て来なさいシンボラー！」

「出てこいゾロアーク！」

タイプ相性はこつちが有利！速攻で決めてやる！

「ゾロアーク、悪の波動！」

「シンボラー、光りの壁！」

※光りの壁※【エスパー】

暫くの間、相手の特殊攻撃の威力を弱める。

シンボラーの前に光りの壁が現れ、悪の波動はその壁に当たり、シンボラーにダメージは与えられなかった。

「次は私の番だ！シンボラー、エアスラッシュ！」

「ゾロアーク、影分身で避ける！」

ゾロアークは直ぐに影分身し、複数に分かれた。その分身達はシンボラーのエアスラッシュにより消されていく。

「ゾロアーク、ナイトバースト！」

「シンボラー、再び光りの壁！」

※ナイトバースト※【悪】

悪の波動より威力が高めの一般技。

広範囲を攻撃できる。

シンボラーの前に再び光りの壁が現れ、二重の壁となった！

その壁ではもう通常の特攻攻撃では攻撃を与えることも不可能となってしまう。ナイトバーストは呆気なく光りの壁に遮られ終わってしまった。

「ゾロアーク、一度戻れ」

「正しい判断ね」

俺はゾロアークを手持ちに戻し、あの光りの壁を破壊出来るポケモン、ブリガロンかミュウツウを出そうと思ったが、ここはミュウツウに行つて貰つた方が良さそうだな。

「次はお前の番だ！ミュウツウ！」

俺はミュウツウを出し、光りの壁を先に破壊しようとするのであった……

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六話

百六話

ゴジカさんとのバトルで俺のゾロアークはダメージは与えることは出来なく、ミュウツーと交代した。

ヒヤッコクジム戦

☆ゴジカVSバロン☆

「ミュウツー、瓦割り！」

「シンボラー、影分身！」

シンボラーは直ぐに影分身し、ミュウツーは本体を攻撃できず分身を攻撃した。

「チャンスよ！シャドーボール！」

「ミュウツー、テレポート！そして、瓦割り！」

シンボラーがシャドーボールを放ったと同時にテレポートし、シンボラーの真後ろにミュウツーは現れた。

ミュウツーは戸惑うこと無く瓦割りをシンボラーが展開させた光りの壁を攻撃し破壊した。

「こんな使い方をするとね・・・シンボラー！シャドーボール！」

「ミュウツー！テレポート！そして、シャドーボール！」

「シンボラー！直ぐに光りの壁！」

ゴジカはシャドーボールを囷にし光りの壁を再び展開させることが目的だったみたいだ。

まんまと距離を開けられ、光りの壁を展開された。ミュウツーのシャドーボールでも光りの壁はびくともしなかつた。それが二重だったら大技でも破壊は難しくなるだろう。

瓦割りの技は相手の展開した光りの壁やりフレクターを破壊できる少し特殊な技だ。

「また光りの壁を！ミュウツー！瓦割りで破壊しろ！」

「短気な子ね。シンボラー、影分身！」

シンボラーの影分身は1回目よりも更に数が多くなっていた！

ミュウツウはまた分身を攻撃してしまうことになり……

「シャドーボール発射！」

シンボラーが直ぐさまシャドーボールを放ってきた！

「ミュウツウ！避けて、もう一度瓦割り！」

「シンボラー、もう一度影分身！」

ミュウツウはまたしても分身を攻撃する事になってしまった。

「くそ!!当たらない!!ああ〜！」

『マスター！落ち着け！』

俺は頭に血が上っていた。攻撃が当たらない苛立ちから来る物だった。

「すまないミュウツウ」

ミュウツウは一度俺の方に戻り、体勢を立て直した。

シンボラーもゴジカの所に戻り、体勢を立て直した。

俺は少し目を瞑り、考えた……

特殊技を放とうとすれば光りの壁でダメージを与えられない。

接近戦を持ち込めば影分身で避けられる。

技の出す素早さが足りないのか？

「ミュウツウ！メガ進化するぞ！」

『了解！』

「進化を超えろ！メガ進化！」

俺はミュウツウをWメガ進化させ、構えた。

「これも予言で見た。メガ進化のミュウツウは凄まじい素早さと攻撃力を備えている」

「そうです！行きますよ！ミュウツウ！神速、瓦割り！」

「シンボラー！守るです！」

シンボラーが守るを発動させる前にミュウツウはシンボラーに到達していた。

「やれ！瓦割りからの爆裂パンチ！」

ミュウツウは光りの壁を瓦割りで両断し、直ぐさまシンボラーに爆裂パンチを思いつき当てた！

ミュウツーもメガ進化前までは攻撃が当たらない苛立ちが有り、今の素早さも攻撃力もそのおかげでいつもより格段に上がっていた。その攻撃を受けたシンボラーは凄いい勢いでジムの壁に激突！そのまま戦闘不能になった。

「なんと!?これは予想外！戻れシンボラー」

「よし！良くやったミュウツー！」

『ありがとう』

ミュウツーは俺の元に戻り、構えを解いた。

「見事だ！私の2体目は・・・行け、ニャオニクス！」

2体目はニャオニクスだった。

観客席で見ていたセレナは驚いていた。なんでだ？

「セレナ！どうかしたのか？」

「え!?あ、うん。私の時は一番最後がニャオニクスだったから・・・」

「そうか。わかった！」

俺の時は2体目でニャオニクスって事は3体目は・・・

今は考えるのは止そう。今はあのニャオニクスを倒すことを考えなくてはな・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七話

百七話

ゴジカさんの2体目はニャオニクス。
見た目はメスのニャオニクスだな。

ヒヤッコクジム戦

☆ゴジカVSバロン☆

「ニャオニクス、未来予知！」

※未来予知※【エスパ】

未来を予知し、少し経つと空間から特殊攻撃される。

「未来予知か！厄介だな・・・ミュツウー！速攻で勝負を付けるぞ！神速、爆裂パンチ！」

「何度も一緒の技で私勝てると思わないことだ。ニャオニクス、身代わり」

※身代わり※【ノーマル】

身代わりを用意して相手に当てさせる。

体力の1割が減る。

「身代わりされる前にこっちのスピードが上だ！行け！」

ミュウツウの素早さはトップレベルに位置する。

だから一般のポケモンに遅れを取ることはない！

だが・・・

ニャオニクスに攻撃は当たらなかった・・・

良く周りを見ると何かの結界が張られていた。

これは!?

「やつと築いたか。ニャオニクスに未来予知をさせた後に、トリックルームも使わせたのだ」

トリックルーム・・・

くそ！厄介な事になったぞ・・・

トリックルームは素早さが低い方から攻撃できる。

今のミュウツーは素早さはトップクラス。だが、このルームの中では……

その時！ミュウツーの背後の空間から特殊攻撃が来た！

『なに!?』

ミュウツーは避けることが出来ず、攻撃を食らった！

未来予知の攻撃が来たのだ！

「もう来たのか！」

「ニャオニクス、再び未来予知だ！」

「ミュツウー！神速で……」

『マスター?』

トリックルームでは素早さが高ければダメなんだから……

「ミュウツー！当て身投げだ！」

『了解した!』

「当て身投げだって!?そうか！後攻技でトリックルームを活用したんだな」

ゴジカは驚いた後、満足そうに頷いた。

「よし、ニャオニクス、このままでは攻撃を受けてしまう。トリック

ルーム解除してシャドーボール！」

ゴジカがトリックルームを解除した！

好機だ！今ならミュウツーの素早さを活かせるぞ！

「ミュウツー！当て身投げは強制キャンセル！神速、爆裂拳！」

『うお!?りよ、了解した!』

ミュウツーは技のモーションに入っていたので強制キャンセルし、直ぐさま技に移った！

「なんと!?トリックルームの解除は不味かったか！」

「もう遅い！倒せミュツウー！」

ミュウツーはニャオニクスまで一瞬で距離を縮め、爆裂拳をニャオニクスに当て、勢いよく吹っ飛ばされてから爆発した！その爆発が最後の決定打となり地面に倒れ戦闘不能になった。

「見事な素早さ。戻れニャオニクス。私の最後のポケモンは簡単には終わらないよ。出て来なさい私の相棒！ラティアス！」

「やはり伝説のポケモンが出て来ましたか。俺のポケモンも伝説です。さあ！行きますよ！」

ラティアスが場に出たのを見計らい行動に移った。

「ミュウツー、神速、ドラゴンクロー！」

「ラティアス！直ぐにメガ進化を！」

「ちっ！やっぱりメガ進化するか！」

メガ進化中はいかなる攻撃も受け付けない。言わば一時の無敵時間だ。

ラティアスの体は一回り大きくなり、赤い綺麗な体は青色と変わった。

翼も前より大きくなっていった。

メガラティアス完成だ。

「さあ！行きますよラティアス！龍の波動！」

「ミュウツー！シャドーボール！」

お互いの技はぶつかり合い共に爆発した。威力が互角で相殺したのだ。

「ミュウツー！神速、ドラゴンクロー！」

「ラティアス！リフレクター！」

※リフレクター※【エスパー】

暫く相手の物理攻撃を弱くする。

『遅い！』

「ミュウツーの素早さをなめるな！」

Wメガミュウツーはメガラティアスが技を発動する前に攻撃を当てた！

ドラゴンクローはラティアスにとって弱点技だ。

ラティアスは大きく後退し、倒れることは無かったが大幅に体力は減らせた。

「凄い速さね・・・」

「俺のミュウツーは並大抵の素早さじゃないからな」

ミュウツーはいつでも次の攻撃が出来る準備をした。

「ミュウツー！爆裂拳！」

「こうなったら・・・ラティアス！奥の手を使うぞ！擬人化！」

「また技が無効化に！だが、擬人化か・・・ミュウツー！俺達も今のうちに擬人化だ！進化の真骨頂を見せてやれ！」

お互いのポケモンに魔法陣が展開された！

「バロンのポケモンも擬人化が出来るのは他のジムリーダーから聞いておる」

「だから驚かないのですね。僕もジムリーダーが擬人化出来て、そのまま戦闘出来る。数少ない本気でバトル出来る相手には敬意を払いいつも全力でバトルしてます！」

お互いのポケモンの擬人化が終わるのは同時だった。

ラティアスは小柄な可愛い女の子。

髪は短いけど2つに結んでいる。

服は動きやすそうな服にズボンと学生の私服みたいな感じだ。

手には何も持っていない。

擬人化ラティアス。

特性【格闘馬鹿】

格闘技を使う。他はしない。

「・・・格闘馬鹿？」

『もう！失礼ね！馬鹿じゃないもん！』

あ・・・つい声に出して言ってしまったか。

「すまない。つい声に出してしまった。1つ聞きたい。ポケモンの時は格闘系の技使って無かったけど、擬人化は格闘で大丈夫？」

俺はどうしても気になることを聞いた。

「ああ。ラティアスはね・・・擬人化したら魔法が使えなくなるのよ。それで格闘技だけって訳」

格闘技だけね・・・

普通に遠距離で攻撃したら勝てるだろうが、そんな勝ち方俺は望まない。

正々堂々こちらも格闘技で相手をしてやる！

「分かりました。ならば俺達も格闘技でバトルしましょう！行くぞミュウツー！」

『了解した』

ゴジカの最後のポケモンと格闘試合にしてバトル勝つことを決めた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百八話

百八話

ゴジカとのバトルはラティアスとミュツウーの擬人化、格闘試合で勝負を付けることにする。

ヒヤツコクジム戦

☆ゴジカVSバロン☆

「ラティアス！爆裂パンチ！」

「ミュウツー！爆裂パンチ！」

両者共に一緒の技だが、体捌きには違いが出る。

ラティアスは腰を落とし右からアツパーで攻撃しようとしている。

ミュウツーは上から下へと振り下ろす感じで殴る。

両者の攻撃は上と下からの攻撃、下から攻撃したラティアスは重力の関係もあり、押し負けた。

『くっ！やっぱり下からはダメでしたか』

『いや、良い攻撃だったぞ』

2体は一度下がりがり構え直した。

「ミュツウー！気合いパンチ！」

「ラティアス！気合いパンチ！」

また一緒の技だ。

だけど、この気合いパンチは溜めてから放つ。

この溜めている間に気合いを溜め、一気に解き放つ。

この一撃だけで勝敗が決まることもある。

2体はそれぞれ腰を低くし右手に気合いを入れ集中した。

周りの空気がその手に集まりだし、2体のポケモンを中心に渦を巻いていく。

その手が光り輝きだし、2体は前を向いた。

準備が整ったのだ！

「気合いパンチ！」

2体は同時に動き出し、お互いの右手を少し後ろの引き・・・バトル場中央に到達した瞬間、お互いの気合いを溜めたパンチを前に突き出した！

お互いのポケモンは両方胴体に攻撃を当て、一気にバトル場の端まで吹き飛ばした！

『良い攻撃だな・・・』

『そちらもね・・・』

お互いのポケモンは膝をつき呼吸を整える。今の一撃で酸素が一気に無くなったからだ。

「今の一撃を耐えてみせるとは。見事だ！」

「そのお言葉そのまま返します」

俺のミュウツウの気合いパンチを受けてなお耐えてみせるラティアスは強いな。

お互いのポケモンはそれぞれ体力は限界に近くなっているだろう。次の攻撃が最後だな。

「この一撃で終わらせるぞチャレンジャー！ラティアス、爆裂双撃拳！」

「俺もこの一撃に掛けます！ミュウツウ、神速・爆裂拳！」

ミュウツウはバトル場の端からラティアスまで一瞬で近づき爆裂拳を腹に当てようとしたとき、ラティアスは咄嗟に腕をクロスさせ攻撃を防いだ。

だが・・・

爆裂拳は当たった後爆発する技。ミュウツウは直ぐに後ろに下がってラティアスは爆発した。

この爆発が決め手だった。

ラティアスの擬人化は解除されポケモンの姿に変わり、地面に倒れた。戦闘不能だ。

「ラティアス戦闘不能！勝者チャレンジャーバロン！」

「ありがとうございます！」

「見事だ！おめでどうチャレンジャーバロン！」

俺達はポケモンをモンスターボールに戻してから握手をして、バツ

ジを貰った。

「遂に七個目のバッジ・・・『サイキックバッジ』GETだぜ！」

俺はバッジをケースに入れた。

「おめでとうバロン君。次はエイセツシティに行くんでしょ？」

「ああ！」

「そうか。エイセツシティか。気を付けて行くんだぞ」

「はい！」

俺とセレナはヒヤッコクジムを出て、俺のポケモンをポケモンセンターで回復してからエイセツシティに向けて出発した。

次が最後のバッジ。絶対に手に入れてポケモンリーグに挑戦してやる！

エイセツシティ編

ポケッツトモンスタ―XY バロンの旅 百九話

百九話

俺達はヒヤツコクシティを出て18番道路(エトロワ・バレ通り)に来た。

ここは上の段と下の段と分かれており、階段を降りて通行する事になる。

上段はヒヤツコクシティに繋がっており、下段はレンリタウンに繋がっている。

俺達はレンリタウンに一直線に進み、途中トレーナーにバトルを申し込まれたので全て受け、2人で手分けしながらバトルを行った。勿論全戦全勝だ。

あまり問題無く18番道路を進むと直ぐにレンリタウンに着いた。

※レンリタウン※

小さな町。

民家が数軒と小さなホテルが1つ建っている。

南側には川が流れている。

俺達はポケモンバトルで疲れていると思う・・・ポケモン達をポケモンセンターで回復させてからそのまま19番道路にむかった。

19番道路(ラルジェ・バレ通り)

ここはいくつもの階段があり、下には小さな湖がある。その周りに道があり、迂回してエイセツシティに行ける。

下の段はエイセツシティ側からは行けないので、行きたいのであればレンリタウンから行くしかない。

俺達は自転車を用意して迂回路を通り、一気にエイセツシティの側まで来たが、またしても行く途中にバトルを申し込まれ全て受けてしまった・・・勿論全戦全勝したが時間が掛かってしまうけどお金と経験値が欲しいので売られたバトルは買うようにしている。

エイセツシティに着くと先にポケモンセンターに行きポケモン達

を回復させた。

※エイセツシテイ※

雪が降り積もっている少し大きめの町。

ジムはこの町の真ん中に建っており、ポケモンセンターは19番道路側に建っている。

左側には21番道路に繋がる道があり、左下には20番道路に繋がる道がある。

俺は直ぐにジムに挑みたくてジムに挑戦しようとしたが、ジムの前にいる方に止められた。

「今はジムリーダーが居ません。この時間帯だと20番道路の方にいるはずですよ」

「ありがとうございます」

俺達は直ぐに20番道路に向けて出発した。

20番道路（迷いの森）

ここは迷いの森。

いくつもの道があり、最奥に辿り着くには知恵が必要。

俺達は20番道路に着くと立ち止まってしまった・・・

ここは道と言うより森。

俺はモンスターボールを出し、レックウザを出した。

「レックウザ、俺とセレナを乗せて迷いの森にいるはずのジムリーダーを探して欲しい」

『了解した！』

俺は先にレックウザに乗り、セレナが乗るのを手伝った。

「ありがとうございます。さあ、探しましょう！」

「行こうレックウザ！」

俺達はレックウザに乗り飛び立った。

暫く森の上を飛んでいると雪が積もった平地が見えた。そこに1人の男性が居た。

「レックウザ、あそこに降りよう。人が居る」

レックウザは静かにその平地に着地した。

「すみません。エイセツジムジムリーダーさんを見かけなかったです

か?」

「あれだよ、あれ。儂がエイセツジムのジムリーダーだ」

男は腕を組んで笑いながら言った。

「え?あなたがジムリーダー?」

「ん?可笑しいか?」

「そんなことはありませんが、速くバトルをしたくてここに来ました」

俺は直ぐにバトルがしたいことを言うとその人は・・・

「素直な坊主だな。あれだ。事項紹介がまだだったな。儂はウルツプ。お前さん達は?」

「申し遅れました。俺はバロン」

「私はセレナです」

ウルツプは満足そうに頷くと少し待ってくれと言われた。

どうしてかと戸惑っているのと直ぐに原因が分かった。

ウルツプさんの近くの木に横たわっているポケモンがいたのだ。

「このポケモンがな。伝説のポケモン、デオキシスに攻撃され何とかここまで逃げ込んできたと言っていた」

「デオキシス!」

俺とセレナは心当たりがある。

俺は元自分のポケモン。セレナは途中で会った事がある。

「噂をすれば・・・お前達、あれだ、ここから逃げた方がいいぞ?」

ウルツプは森の方を見ながらそう言った。

「もう少しすればデオキシスが来る」

「待つてください!俺、デオキシスの元トレーナーなんです!」

「え!」

「なに?」

2人とも同時に驚き、俺を見た。

「ある事件がきっかけで俺の元を離れたんだ。だけど!俺はデオキシスを旅をしたい!俺に再びGETさせて貰えるチャンスが欲しい!」
「待つて!私もデオキシスに会ってるの!」

「おいおい。2人ともデオキシスに会ってるのか」

俺はデオキシスともう一度旅をするために再びGETしたい。

セレナはあの時出会って、GETしようと密かに思っていた。
ウルップはポケモンを傷つけられたので倒すつもりだ。

GETしようとするのは2人。倒そうと思ってるのは1人。

「あれだ。僕は倒そうと思っていたが、なんだ。GETしたい奴がいるなら俺は必要ないな。先にポケモンを連れてエイセツシティに戻るとするよ」

「分かりました！」

俺とセレナはもうじき来るであろうデオキシスをどっちが手に入るか話し合う必要がある。

「私、今回は引かない！デオキシスは元バロンのものであっても今は野生。手に入れるチャンスは私にもある」

「残念だが俺も引かないぞ。元俺のだが、思い出があるんだ。俺が手に入れる！」

2人同時に腰のモンスターボールに手を伸ばした。

「言っても分からないならー！」

「バトルで決める！」

「出て来て！マフオクシー！」

「出てこい！ブリガロン！」

2人のバトルが始まる！

ウルップはそそくさと町に戻りポケモンを回復させていた。

その後そのままジムの方へと行き、チャレンジャーが来るのを待った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十話

百十話

俺はここでセレナに勝てねばならない！
私はここでバロンに勝てねばならない！
絶対に勝つ！！

20番道路戦

☆セレナVSバロン☆

「マフオクシー！火炎放射！」

「ブリガロン！岩雪崩れ！」

岩雪崩れで火炎放射を押し返した！

「やっぱりか！マフオクシー！サイコキネシスでその岩ごとブリガロンに当てちゃいなさい！」

マフオクシーはサイコキネシスを使い、ブリガロンが出した岩雪崩れをコントロールしブリガロンに放った！

「まさかコントロールするとは！ブリガロン！破壊光線！」

ブリガロンは破壊光線を使い、岩雪崩れごと破壊しマフオクシーの側まで迫った！

「ここで破壊光線!?そういう事か！マフオクシー！擬人化よ！」

「やはりな！ブリガロン！俺達も今のうちに擬人化だ！」

お互いのポケモンを擬人化させた後行うことはただ一つ！

「神装・アテナ！」

「神装・ポセイドン！」

神装アテナ 特性【勝利の女神】

アテナの加護を全面的に受けれる完璧な特性。

ダメージ軽減・魔法威力絶大アップ・魔法障壁・体力自動回復大

神装【ポセイドン】

海を支配する神・ポセイドンを神装した姿。

三叉の矛（トリアイナ）を武器として扱う。

大海と大陸を自在に支配する。

両者ポケモンの最大級の神装を纏った！

デオキシスを賭けた幼馴染みとの超本気バトルが始まる！

「先手必勝だブリガロン！深海・大地震！」

「全てを焼き尽くせマフオクシー！ビッグバン！」

海震の力で大地震を使用したとき、ブリガロンの上空で巨大なビッグバンが炸裂した！

ブリガロンはそのビッグバンを食らってしまい地面にめり込んでしまった！

ビッグバンは辺り一面を焼け野原にするほどの威力があり、周りに積もっていた雪なんて今の熱量で全て解けている。大地震はその後に起こりブリガロンがめり込んでしまった穴に大量の雪が解けた水が入り込んでしまった！

「ブリガロン！大地を穿て、アースインパクト！」

※アースインパクト※【地面】

ギガインパクトを改良した高威力技。

ブリガロンが居た穴からマフオクシーに向けて一直線に緑色の光りがむかつて行った！

「マフオクシー！大地に大いなる炎をもたらせ！灼熱地獄オーバーロード！」

※灼熱地獄オーバーロード※【炎】

灼熱地獄を改良した超高威力技。

広範囲を灼熱地獄に変える。暫く炎は燃え続け水では消えない。

マフオクシーの杖を地面に刺したその瞬間！

そこから技が放たれ、地面に地上に炎が一気に流れた！周りは瞬間に灼熱が覆い尽くす。

ブリガロンは灼熱地獄を地面で受け大ダメージを受け地上に放り出された！

「ブリガロン!?大丈夫か！」

『まだ大丈夫だ』

ブリガロンは直ぐに体勢を立て直した。

「今度はこっちの番だ！海洋神技・オーシャンセイバー！」

「迎え撃ちなさいマフォクシー！軍神の剣・フォトニツクイレイザー
！」

※軍神の剣・フォトニツクイレイザー※【光】

古代の軍神が使っていた剣。

超高濃度の光りの剣で相手を切り裂く。

ブリガロンはオーシャンセイバーを横に構え、マフォクシーに接近し攻撃しようとした時、マフォクシーがフォトニツクイレイザーを下から上へと切り上げオーシャンセイバーを切り裂いた！

そのまま上へ切り裂いた剣を体ごと回転させ遠心力を上乗せした横回転斬りをブリガロンに当てた！

ブリガロンはその攻撃を食らい擬人化が解除され地面に倒れた。

ブリガロンの戦闘不能だ……

「なに……ブリガロンが負けた……」

「お疲れ様マフォクシー！勝てたよ！」

『セレナと私の勝利ですね』

俺は直ぐにブリガロンの元に行った。

「大丈夫かブリガロン？」

『心配ない。次戦う時があればリベンジする』

「そうか。今はボールの中でゆっくり休んでくれ」

俺はモンスターボールをブリガロンに当てボールに戻した。

「見事だったよセレナ。約束通りデオキシスはセレナに譲るよ」

「バロンも見事だったよ。さあ、デオキシスが来るよ」

セレナが空を見上げた時、青空の中からオレンジ色をしたポケモン

『デオキシス』がこちらにやって来た時だった。

「とうとう来たな。セレナ、頑張れよ」

「うん。バロンは離れてて」

「ああ」

俺は少し先にある木に寄りかかりバトルの行く末を見届ける事にした。

空にいるデオキシスはセレナを見付け、草原に着地した。

『久しぶりに会ったな』

「久しぶりデオキシス。ねえ、私と一緒に冒険しない？」

セレナ……

直球過ぎるだろ……

『……我と冒険するだど？神である我ど？』

「うん！デオキシスと一緒に冒険したくて……ダメかな？」

セレナは祈るようにデオキシスに相談した。

『いや……ダメでは無いのだがな……その、なんだ……我を使うに値する人間かどうかを見極めたい』

「バトルするって事？」

セレナは首を傾げそう言った。

『その通りだ。準備はいいか人間？』

「私はセレナって言うんだよ。名前忘れちゃった？」

『すまぬ。では改めて……準備はいいかセレナ』

「うん！私はマフオクシーで戦うよ！」

『了解した！では……始めよう。我を賭けたバトルを！』

とうとうバトルが始まる。

デオキシスはバトルでセレナの力量を測り、仲間になるかならないかを決める。

さあ、どうなるかな？

俺は腕を組みながらそう考えていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十一話

百十一話

20番道路で俺とのバトルの後、デオキシスと連戦することになったセレナ。

このバトルでデオキシスに認めて貰えればデオキシスはセレナのポケモンとなる。

悔しいが俺はセレナに負けたので我慢する事にした。

「行って来てマフオクシー！」

『さあ・・・始めよう！』

デオキシスは両手を広げ、バトル開始の合図をした！

20番道路・デオキシス戦

☆デオキシスVSセレナ☆

「マフオクシー、灼熱地獄！」

『分身達よ集え！』

マフオクシーは杖で地面を叩き炎を一瞬で辺り一面を灼熱地獄に変えた！

デオキシスは体から分身体を出現させ、周りに待機させた。

『ほう？一瞬で炎を広げたか』

「凄いでしょ！さあ行くよ！マフオクシー、炎を纏え！炎帝・オーバレイ！」

マフオクシーの持っている杖が剣に変わり、炎を纏った。

その剣は灼熱地獄の炎を吸収し更に大きくなり、炎の質量が格段に上がった！

『分身達よ！あいつのエネルギーを奪い、我が力の糧にせよ！ダウンチャージ！』

※ダウンチャージ※【悪】

相手のエネルギー（力・技を含む）を奪い、奪った分だけ更に強く

なる。

分身達は一齐にマフオクシーを襲いに行つた！

「流石に直ぐに攻撃は出来ないか。今は襲ってくる分身達を蹴散らしなさい！」

『了解しました！』

マフオクシーはオーバレイで一齐に襲ってくる分身達を切り裂いていく。

だが・・・

『こんな数でくたばるなよ？』

デオキシスはそう言うのと更に分身の数を増やし、今度は四方八方から襲わせた！

「数が多いわね・・・マフオクシー！ビッグバン！」

マフオクシーは襲ってくる分身達を勢いよく剣で一振りした後直ぐにビッグバンを放つた！

ビッグバンは分身達を全て巻き込み更にデオキシスまでを巻き込んで大爆発した！

『グガアアア！』

デオキシスも広範囲に及ぶ高威力技は知らなく、まともに攻撃を受けてしまった。

ビッグバンの爆発が終わり煙りが晴れると半身が無くなっているデオキシスが現れた！

『流石に痛いな・・・再生』

※自己再生※

体力を回復させる。

傷ついた部分を元に戻す。

デオキシスは傷ついた体を再生させ、元に戻した。

「凄い速い回復ね。これで分身達は居なくなつたよ？どうデオキシス？」

『見事と言わざるを得ないな。だが、我のこの姿に勝てるかな？』

デオキシスはそう言うのと体が光り出し、白い魔法陣が出て来た！

デオキシスの体は少女の姿になっていき・・・

金色の長い腰辺りにまで伸び・・・

白いワンピースが凄く似合う可愛い女の子に変わった。

『我はデオキシス。この姿ではそうは見えないだろう？』

「確かに・・・凄く可愛い女の子にしか見えないわ」

デオキシス Lv600

特性【神の加護】

状態異常にならない。

体力自動回復（大）

擬人化【メイビス】

特殊攻撃が格段に強くなる。

防御系魔法（技）の発動時間、効果、範囲が大幅に強化。

俺も遠くで見えていたが特性が変わっている。能力も違うな・・・

どうなっているんだ？まさか・・・別のデオキシス!?

いや・・・あの容姿はどう考えても俺のメイビス（デオキシス）だ

！

「デオキシスの特性凄いな。惚れ惚れしちゃう」

『ありがとう。バトルはまだ続いている。続き行くぞ！』

「うん！」

セレナはバトルに集中しデオキシスは構え直した。

擬人化のデオキシス、擬人化（神装）のマフォクシー。

両方本気を出せる状態になった。

セレナ・・・デオキシスに認めて貰うように頑張れよ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十二話

百十二話

20番道路・デオキシス戦

☆デオキシスVSセレナ☆

「先に行くよ！灼熱地獄オーバーロード！」

『その技は防ぐ。ダウンチャージ！』

デオキシスから分身が現れ、技を放とうとしたマフオクシーに取り憑いた！

「いつの間にな！」

『影から出したからね。防げないでしょ？エネルギーは貰う』

分身はマフオクシーが技を出すエネルギーを吸い取りメイビスに帰って行った。

エネルギーを取られたマフオクシーは膝を着いた。

エネルギーを吸い取った分身は消え去りデオキシスに送られた。

『良いエネルギーね。さあ、この力使わせて貰うぞ！全てを切り裂け！森羅万象斬！』

「な!?マフオクシー伏せて！」

セレナとマフオクシーが咄嗟に地面に伏せた瞬間、マフオクシー達の頭の上を斬撃が飛んでいった・・・

灼熱地獄は森羅万象斬によって技ごと斬られた。

周りを見るとデオキシスからこちらの方全ての上の空間が歪んでいた。

あらゆる物を斬ると言われる技。まさか空間までも斬るとは・・・俺はデオキシスとセレナの間当たりに居たのにここまで斬撃が飛んできた時には冷や汗を掻いた。

俺も咄嗟に伏せたので助かったが、躊躇していると上半身が消えているぞ・・・

『やり過ぎたかな?』

「やり過ぎだよ！空間を斬るなんて！」

デオキシスは頬を軽く搔いて誤魔化そうとしたが流石にこれは無理だろ。

パルキアの亜空切断も驚異だが森羅万象斬・・・この技はヤバいを通り越して禁止技だろ!!

そう話している間に空間は元に戻っていった。

『そっかくそれじゃ！隕石よ！落ちてきて！』

「はい!？」

デオキシスは両手を高らかに振り上げそう叫んだ！

すると、周りの大地が・・・空が揺れた・・・

空を見ると大気圏にデカイ岩・・・隕石がこちらに迫ってきていた！

「ちよっ!?!これは不味いつて!!!」

「ヤバいぞー！この大きさとこの辺り、いや！辺り一面が吹き飛ばぞー!」

『これもやり過ぎたか』

デオキシスはまた頬を搔いたけどこれはやり過ぎを通り越して禁止級の禁止！

カロス地方滅ぶすの!?!いや、この世界を滅ぼすの!?

「おいおい。なかなか戻ってこないと思つて戻ってきた、なんだコレは?？」

森の方からウルップさんがこちらにやって来た。

「あ。これはセレナとデオキシスとのバトルで起きてしまつて・・・」

「この事態は流石に一刻を争う。儂も助太刀するぞ！」

そう言うともンスターボールからキュレムを出した！

※キュレム※【氷・龍】

強力な冷凍エネルギーを体内で作り出すのが漏れ出した冷気で体が凍っている。

伝説のポケモン。

キュレムが場に出て瞬間周りが凍った。怒っているのだ。伝説のポケモンが！

「キュレム！あの隕石に破壊光線！」

「出てこいミュウツー！上空の隕石に破壊光線！」

ミュウツーを出し速攻破壊光線を命じた。

ウルツプのキュレムとミュウツーのダブル破壊光線は隕石には届いたが正面しか壊れなかった！

「バロンにウルツプさん!?デオキシスの出しちゃった隕石が・・・」

「今やってる！セレナはデオキシスに認めて貰え！ミュウツー！メガ進化!!」

「そうだぞセレナ君！君は君の役目を果たしなさい！キュレム、ゼクロムと合体だ！」

※ゼクロム※【電気・龍】

尻尾で電気を作り出す。全身を雷雲に隠してイツシユ地方の雲を飛ぶ。

俺とミュウツーは虹色の光りで包まれ、Wメガ進化したミュウツーにした。

ウルツプは手持ちからゼクロムを出しキュレムと合体させ、ブラックキュレムとなった。

「ブラックキュレム！フリージングボルト！」

「ミュウツー！気合い玉！」

※フリージングボルト※【電気・氷】

ゼクロムの電気とキュレムの氷を合体させた技。

※気合い玉※【格闘】

気合いを込めた玉を放つ。

ブラックキュレムは氷の球体を前方に作り出し、電撃を纏わせ落ちてくる隕石に放った！

Wメガミュウツーは気合いを最大まで頭上で溜め、自身の倍以上の大きさになった時に落ちてくる隕石に放った！

俺達の最大級の放射系技は真っ直ぐに隕石に当たったが・・・

「な・・・高威力技でもダメ・・・なのか・・・」

「あれだ・・・これは参ったな・・・」

2体の最大級の技を受けた隕石は正面を砕いたが、まだ8割も残っ

ている・・・

俺達がもうダメだと思ったとき！

森の方から黒い影が俺達を横切り隕石に向かっていった！

『好き勝手しやがって！』

黒い大型の鳥ポケモンが両方の翼（手）と尻尾を体の中心に来るように構え、破壊のエネルギーを溜めた。

『食らいやがれ！絶・デスウイング！』

※絶・デスウイング※【飛行・神】

イベルタルの専用技。

デスウイングの強化型で攻撃を受けた相手の体力を奪う。

デスウイングは真っ直ぐに隕石に向かっていき隕石を木っ端微塵に砕いた！

『貴様が隕石を落としたんだな？』

『やり過ぎたみたいでごめんね』

そのポケモンはデオキシスと喋っているのです、俺は直ぐにポケモン図鑑で調べた。

イベルタル【悪・神】

カロス地方の伝説ポケモン。

寿命が尽きるとあらゆる生き物の命を吸い尽くし繭の姿に戻るといふ。

この地方の伝説ポケモンだった！

「イベルタル・・・」

デオキシスとイベルタルの間ぐらいの位置にいるセレナはどうする事も出来なくただマフオクシーと立っているだけしか出来なかった。

その時イベルタルはセレナに気づき翼を羽ばたかせた！

その風圧だけでマフオクシーとセレナを大きく吹き飛ばされた！

「セレナ!!」

『サイコキネシス！』

デオキシスが咄嗟に吹き飛ばされたセレナ達を空中で止め地面に降ろした。

『何をするデオキシス。人間は死に行く命。我が消したところで支障はないだろう?』

『そのトレーナーと約束したのです。私が認める程の力があれば一緒に旅をすることを』

『神である我らが人間に使えらだど!!ふざけるな!!!』

イベルタルは上空に飛んだ!

『貴様はもう神でもないな!貴様らもろとも死ぬが良い!絶・デスウイング!』

『破壊光線!』

『ミュウツー!気合い玉!』

『ブラックキュレム!フリージングボルト!』

『マフォクシー!ビッグバン!』

イベルタルが絶・デスウイングを放った時、俺達は一斉に今のポケモン達の最大級の技を放った!

絶・デスウイングと俺達の間で技がぶつかり合い大爆発を起こした!

絶・デスウイングの攻撃力は今の俺達の4体分の威力で相殺出来たと言うことは、1体だけだと簡単に押し返される事になる...

強いぞ...

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十三話

百十三話

デオキシスが隕石を落下させたのをイベルタルが一撃で粉碎し降臨した。

イベルタルは人間が嫌いで、消そうとしていた。

デオキシスはその人間と旅をしようとしていたのでイベルタルは怒り、デオキシスと俺達を序でに消そうとした！

20番道路戦

☆イベルタルVSデオキシス達☆

『我に勝てると思うな人間共！現れろ、暗黒城！』

※暗黒城※

真つ黒な城。

悪タイプのスレータスを大幅強化しそのタイプを持つポケモン・神の放つ技も大幅に強化される。

イベルタルは翼を大きく広げると、地面が揺れた！

俺達は立っていらなくなり地面に伏せた。

その時、俺達がいる地面が割れた・・・俺達は何も抵抗出来なくそのまま落下していくと思っただが、

『危ない！サイコキネシスとバリア！』

デオキシスは落下していく俺達をサイコキネシスで浮かばせ更にバリアを解消した球体のバリアを張ってくれた。

「助かったよデオキシス！」

「あれだ。恩に着る」

「ありがとうデオキシス！」

デオキシスは俺達をデオキシスが居る場所まで浮かばせ、

『私にも城を造ることは出来ますよ！光明城！』

※光明城※

光り輝く城。

デオキシスが作り上げた城で、デオキシスが仲間と思つた者達に力を与える。

ステータスを大幅強化し技の威力も大幅に強化される。

デオキシスの下辺りの地面が割れ、光り輝く光りが放射された！

イベルタル側では割れた地面からは黒い光りが、デオキシス側は白い光りが出ている。

その後、割れた地面が大きく揺れ、大地震が起こった後イベルタル側では黒い城が現れた！

デオキシス側では白い城が現れた！どちらの城もオーラを纏っており、ポケモンを強化されるようになっていく！

「凄い・・・流石は伝説のポケモン。スケールが違うね」

「デオキシス、回復の薬を使うからじっとしててくれ」

「あれだな。デオキシスは少し休め。ここからは人間達の反撃と行くぞ」

『ありがとうございます。休ませて頂きます』

そう言うときデオキシスは丸くなり球体となった。

『人間共が我ら神に勝てると思うなあ！破壊・亜空切断！』

※破壊・亜空切断※【悪・龍】

破壊光線と亜空切断の合わせ技。

イベルタルが翼を前に羽ばたかせ技を放った瞬間、暗黒城から黒いオーラが噴き出した！

破壊・亜空切断はその時一気に巨大化し攻撃範囲と威力が大幅に上昇、凄まじい迫力と恐怖を感じた。

「これが神の力か。だが、俺らも神に力を授かったんだ！」

「ブラックキュレム、フリージンググラビティ！」

「ミュウツー、巨砲・破壊光線！」

「マフォクシー、獄炎・ビッグバン！」

デオキシスの光明城の効果で技が強化されたので、技名も威力も一気に変わる！

※フリージンググラビティ※【氷・神】

辺り一面を氷結させる。

相手を永久凍土させる事が出来る。

※巨砲・破壊光線※【ノーマル・神】

破壊光線の光線を巨大化させた技。

範囲・攻撃力の大幅強化により使える。

※獄炎・ビッグバン※【炎・神】

ビッグバンの火力を大幅に上げた技。

範囲も威力も桁違いに上がっている。

イベルタルが放った亜空切断はブラックキュレムのフリージンググラビティで技を凍らせ、更に辺り一面を氷結させた。凍った亜空切断はミュウツウの破壊光線で木っ端微塵に砕き、イベルタルに向かっていったが、イベルタルは羽を飛ばたかせ破壊光線を受け流した！
だが・・・

イベルタルの上空に獄炎・ビッグバンが発動し、イベルタルを中心に特大爆発が起こった！

俺達はデオキシスの特殊バリアの効果で全く爆発の影響は受けないが、辺り一面に氷結した大地、森は獄炎・ビッグバンの破壊力で全て吹き飛び、暗黒城と光明城も大破した！

20番道路・・・ポケモン達の楽園はもう跡形も無く消し飛びデカイ丸の穴がそこにはあった。

俺は直ぐにイベルタルがどうなったか見ると、イベルタルが居た場所に1つの球体が浮いていた。

「あれは何だ？」

「黒い球体だな・・・」

その黒い球体は黒いオーラを纏っており、ドクンと鳴った！

その音はだんだんと大きくなっていき、黒い球体はひび割れた！

「おい・・・まさかあの球体って・・・」

「嫌な予感的中するんだよね・・・」

黒い球体が完全にひび割れた時、破壊の神『イベルタル』が現れた！

「やっぱり・・・」

「また・・・あの驚異が蘇るのね・・・」

「あれだよ、あれ・・・デオキシスを速く起こした方が良くないか？」
ウルツプはデオキシスを起こしてまた力を貸せと言ってるんだな。
だけど、そうしないと勝てないのも事実。

「デオキシス、起きてる？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

まだ寝てるみたいだな。

さつき寝ただけだから仕方ないか。

「ウルツプさん、ここは俺達で頑張りましょう！」

「そうだな。うん。頑張るか！」

「私も頑張るよ！」

「「出てこい！みんな！」」

俺達は一斉に手持ちの全ポケモンを出した！

「みんな、あそこにいるポケモンはイベルタル！破壊の神だ！俺達の
1体1体の攻撃力ではイベルタルには勝てない。なので、複数チーム
を作る事にする」

俺はそう言い皆を見た。

「そうだな。うん。それで行こうか」

「私もそれに賛成！あっ！バロンイベルタルの攻撃が来る！」

「もうそこまで回復していたか！皆、行くぞ！」

「「破壊光線！」」

破壊光線を覚えているポケモンに命じ、他のポケモン達は俺が臨時
で考えたパーティに編成する。

さあ！イベルタルを迎撃するぞ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十四話

百十四話

チームA 指揮バロン

攻撃部隊

Wメガミュウツー(バロン)

レックウザ(バロン)

ブラックキュレム(ウルツプ)

フリーザー(ウルツプ)

擬人化神装・マフオクシー(セレナ)

チームC 指揮ウルツプ

防御部隊

メタグロス(バロン)

クレベース(ウルツプ)

レジアイス(ウルツプ)

サーナイト(セレナ)

チームD 指揮セレナ

遊撃部隊

ゾロアーク(バロン)

ユキノオー(ウルツプ)

ルカリオ(セレナ)

アブソル(セレナ)

メガギャラドス(セレナ)

イベルタルが放った破壊・亜空切断はバロン達の破壊光線で何と相殺出来た。

『生意気な・・・』

イベルタルは暗黒城から支援がないことに気づいた。

『人間如きが我が城を・・・暗黒城よ蘇れ！』

イベルタルがデスウイングを暗黒城に向け発射し当てた時、大破していた暗黒城がじよじよに治っていく！

「な・・・俺達はイベルタルと戦う！ウルツプさん、セレナ！他は任せます！行くぞみんな！」

『おう！』

「防御は任せろ！皆の者、よろしく頼むぞ！」

『はい！』

「遊撃隊として皆、とりあえず暗黒城を破壊しよつか♪」

『『おおくく！』』

あれ？

セレナの部隊だけ人気高く無いか？

あれだな・・・うん。男性陣には人気は出ないな。

暗黒城は完璧にはもどっていない！今はセレナに暗黒城の破壊を任せ、俺はイベルタルに集中しよう。

イベルタルはまだ暗黒城にデスウイングを放ち続けているが、なにか意味があるのか？

「我が部隊よ！一斉攻撃を開始する！」

ミュウツ、レックウザ、フリーザーは破壊光線！

ブラックキュレムはフリーズボルト！

マフオクシーはビッグバン！」

俺の部隊の一番の火力はマフオクシーのビッグバンだ。

この技をいかに生かせるかが勝利の鍵になるだろう。

まずは破壊光線とフリーズボルトでイベルタルの技を相殺し、フリーズボルトとビッグバンで大ダメージを与える。上手くいけばだが・・・

イベルタルはまだ暗黒城にデスウイングを放ち続けている。

いったい・・・何をするつもりなんだ？

破壊光線は真っ直ぐにイベルタルに向かっていった。

『我の邪魔をするな！』

イベルタルは暗黒城に放ち続けていたデスウイングの出力を上げ破壊光線に向け放ち、相殺させた。

その後直ぐに限界まで溜めたフリーズボルトを放ちイベルタルに

放ったが、

『こしゃくな！悪の波動！』

イベルタルは悪の波動で限界まで溜めた筈のフリーズボルトを押し返した！

「なっ!?」

『障壁！』

悪の波動がフリーズボルトを押し返しながら迫ってきていたのを障壁が展開され防いだ！

その障壁を張った正体は黄金の龍。

「黄金の龍・・・お前は、まさか・・・!!」

『我はマスターのピンチに駆けつける。我が名は黄金龍『エルドラド』マスターのため修行を終えて戻って参りました』

「ありがとう！エルドラド！」

※エルドラド※【神・光】

エルドラド1v800

特性【神の力】

全てのステータスが大幅アップ。

更に技発動時、神タイプを任意に付与出来る。

神タイプの技の威力を3倍にする。

特性【黄金龍】

状態異常、ステータス低下技を無効する。

体力、気力などを自動回復。効果特大。

特性【神装】

神様の力を纏うことで、その神の力を使うことが出来る。

見た目は全身黄金色の大きい2本立ちの龍。

全体の大きさは5mと大きく、黄金色の堅い鱗がある。

爪は鋭く何でも切り裂けるだろう。尻尾も体の大きさに合う感じの長さがある。

翼は鋼みたいに堅く、翼全体を広げると8mを超える。

顔は兜を付けており、後ろ2方向に向かうような尖った形状をしている。

「皆行くよ！バロンに負けてられない！まずは暗黒城を落とします！」

『了解！』

セレナのポケモン達は各自で技や行動を決め、今の最善策を考えながら行動する。

なのでセレナは簡単な命令を出し、必要が出たら技とか行動の命令を出すことになる。

「儂らは各自の防御を上げ、遊撃部隊と攻撃部隊の援護および防御に専念するぞ」

『了解しました。皆、まずはステータスと防御を上げろ。特に防御は上げておけ。行動開始だ！』

『はい!!』

ウルツプの防御部隊は基本はウルツプが命令を出し、防御チームの部隊長であるメタグロスが各自に伝達し、細かい命令を出す。それをしてから動くのが防御チームだが基本は臨機応変に対応する。

『エルドラド？黄金郷と言う意味か？』

『間違いではない。我は進化しこの体を手に入れた。正真正銘神の体になっている。イベルタル！お前はマスターを消そうとした。その罪は重いぞ』

エルドラドはそう言い、デオキシスの造った大破している光明城に黄金色の光線を放った。すると・・・

光明城は光り輝き、元の形に戻った。更に要所要所に黄金で補修されておき、更なる強度を誇っていた。

『光明城に我の黄金を使った。言わば光皇城だな』

「光皇城・・・」

※光皇城※（こうおうじょう）

光り輝く城。

デオキシスが作り上げた城をエルドラドが強化した城。

ステータスを大幅強化し技の威力も大幅に強化され、神タイプ技の攻撃力を3倍にする。

凄い。流石アルマトーレで修行してきた俺の相棒だ！

凄く頼もしい相棒が帰って来たんだ！

「エルドラド。イベルタルを倒すぞ！」

『了解した！エルドラド、参る！』

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十五話

百十五話

20番道路戦

☆イベルタルVSバロン、セレナ、ウルツプ☆

「エルドラド、ゴッドキャノン！」

『絶・破壊光線！』

※ゴッドキャノン※【神】

ゴッドカノンの上位版。

攻撃範囲と威力が上がっている。

※絶・破壊光線※【神】

破壊光線の上位版。

攻撃範囲と威力が上がっている。

エルドラドは両手を前に出し、ゴッドキャノンを放った！その時、光皇城の効果が発揮し更に威力と範囲が広がった！

黄色い光線は発射された瞬間、一気に範囲が広がりエルドラドの5倍の攻撃範囲（25m）の攻撃がイベルタルに向かっていった！

イベルタルは翼（手）と尻尾を体の中心に持っていていき技を構え、絶・破壊光線を放った！その時、暗黒城の効果が発揮し威力と範囲が上がった！

絶・破壊光線は発射された瞬間、一気に範囲が広がりイベルタルの5倍の攻撃範囲（25m）の攻撃がエルドラドに向かっていった！

2体の技がぶつかり合う前に俺は残りの攻撃部隊に技を命じる！

「ミュウツー、レックウザはイベルタルの横側に回り込み破壊光線を放て！今は光皇城の効果で強化されている。安心して放つのだ」

『了解！』

ミュウツーとレックウザは左右に分かれ破壊光線を放った瞬間、光皇城の効果で威力と範囲が広がり広範囲の破壊光線がイベルタルに向かう！

「フリーザーとブラックキュレムはセレナ達より先に暗黒城に行き、絶対零度で氷付けにしろ。そうすれば暗黒城は効果を発揮出来ないはずだ！」

『了解しました！』

フリーザーとブラックキュレムはセレナ達が向かう前に暗黒城に着き、絶対零度を発動させた時、光皇城の効果が発揮し効果範囲が一気に拡張された！

2体の絶対零度は暗黒城の正面と裏から発動させたので20番道路の約半分（イベルタル側）は氷付け状態になった。その時、暗黒城に向かっていたセレナ達の部隊に氷が迫ってきた時、防御部隊が守るを発動してくれたので仲間を巻き込まなくてすんだ。

守るも強化されており広範囲に防御できたのでデカイドーム状みたいになっている・・・

暗黒城が氷付けになったことで黒いオーラが止まり、イベルタルの強化が出来なくなった。

エルドラドのゴッドキャノンはいベルタルの破壊光線を簡単に押し返し、イベルタルに向かっていった！

左右に分かれて破壊光線を撃って貫っているミュウツーとレックウザの破壊光線も向かっている！

「いっけ〜!!!」

『人間如きがあああ!!』

3体の同時広範囲攻撃はいベルタルに直撃した！その直撃により大爆発が起こり爆風が起こった時、マフオクシーが守るを展開してくれたので問題無かった。

3体は普通に爆風に耐えているので凄い。

「勝ったか？」

『まだですね・・・あの爆煙の中にイベルタルがいます』

マフオクシーはそう言い、構えを解かずに睨み付けた。

3体もイベルタルの方を睨んでいる。

『人間・・・ゆるさんぞ！我の本気を見せてやる！』

爆煙の中から声が聞こえたと思ったら黒い光りが一気に広がった

！その時爆煙も消えた。

黒いオーラはイベルタルを包み込みポケモンの姿から人間に変わっていく。

見た目は半人間の姿をした王。

黒い短い髪には黒い王冠が付いており・・・

紅い体の上に真っ黒なコートを羽織っている。

手の通すところは、手とコートが一体化しており、イベルタルの手があつた。

尻尾はイベルタルの尻尾の小型版みたいなのが付いている。

半擬人化イベルタルの身長は2mを少し超えたぐらいだ。

半擬人化・イベルタル【悪・神】

特性【破壊神】

破壊の神。文明・生命を破壊する。

全ての状態異常を無効化し相手に状態異常をさせる。

人間が嫌いと言っていたが擬人化はするとか。いや、半擬人化で擬人化ではないのか？

どちらにせよ、破壊神と言う特性は危険だ。

文明、生命を破壊するだと！絶対に阻止しないと危ないじゃないか！！

「皆！気を引き締めろよ！破壊神イベルタルの攻撃を受けるだけでもヤバそうだ！」

「はい！」

『了解！』

『貴様らに明日は無い』

破壊神イベルタルはそう言い、右手を前に出した。

『暗黒城よ。何を氷付けにされている。その氷を砕け』

『了解』

暗黒城が喋った！いや、イベルタルの時のデスウイングは命を与えていたのか？

いやいや・・・破壊神だしそれは無いはず・・・訳が分からん！！

暗黒城は門を開けると氷が溶けた。

「は!? 門を開けただけで氷が溶けるだど!?」

「何がどうなったの!?」

「あれだ。これは危険だな! 防御部隊、守り切るぞ!」

『はい!』

溶けた氷は大量の水となりセレナ達の方へと流れ行った!

「防御部隊、守るを発動だ!」

『はい!』

「フリーザー! キュレム! 冷凍ビームで水を凍らせろ!」

『はい!』

『そうはさせんぞ』

イベルタルはフリーザー達の方へと行くと、両手をフリーザーとキュレムに向け……

『握りつぶす』

※握りつぶす※〔ノーマル〕(伝説ポケモン使用時〔神〕)

レジギガス専用技。(神は関係無)

相手を握りつぶし戦闘不能にする。

『グ……』

『んにやろう……』

イベルタルは両手をじよじよに握りつぶすように拳を握っていく。それと同時にフリーザーとキュレムの体がおかしな形で縮んでいく……

「止めるイベルタル!」

『黙れ。お前は一番最後だ』

イベルタルはそう言う一気に拳を閉じようとした時、

『そこまでだイベルタル。捌きの鉄槌を受けるがいい!』

「エルドラド!」

エルドラドは捌きの鉄槌を放ちイベルタルを攻撃した!

『邪魔をしゃがって……』

イベルタルは防御のため、閉じようとしていた手を解除し防御に回した。

「ウルップさん！今のうちにフリーザーとキュレムを手持ちに返してください！」

「わかった！戻れお前達！」

エルドラドの捌きの鉄槌は2体を手持ちに返した時に攻撃を止めた。

「ありがとうエルドラド」

俺は感謝しイベルタルを絶対に倒す事を決めた。

「暗黒城はセレナ達で何とかして貰おう！行くぞお前達！」

『『了解！』』』

ミュウツーとレックウザとエルドラドは同時に返事をし、構え直した！

『来るがいい！下等種族よ！』

イベルタルは両手を大きく振り上げた！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十六話

百十六話

20番道路戦

☆破壊神イベルタルVSバロン達☆

「行くぞお前達！進化の真骨頂を見せてやれ！擬人化！」

俺は3体を擬人化させた。

ミュウツーの見た目は白いコートを羽織った青年。

レックウザは緑をメインとしたワンピースを着た少女。

エルドラドは金色の袴を着たおじさん。光輪があり、仲間と自身を強化させる能力を秘めている。

(見た目はイザナギ)

『貴様らもその姿になれるのか。完全な人間なんぞになりやがって』

『この姿は可能性に溢れている。さあ、行くぞ！』

『来い!!』

ミュウツーは右に、レックウザは左に、エルドラドは正面に位置していた。

マフオクシーはそのまま俺の横で警護してもらおう。

時は少し遡り・・・

セレナ達の遊撃部隊はウルツプ達防御部隊と一緒に行動し暗黒城と戦っていた。

「まさか暗黒城と戦うことになるなんてね」

「あれだな。夢みたいなお事になっているな」

ウルツプは腕を組みながら豪快に笑ってるけど暗黒城は何か仕掛けてきそう・・・

『笑うのは構わないが我に勝てるかな？悪の導き』

※悪の導き※【悪】

暗黒城専用技。

門から黒い霧を発生させ、相手を誘惑する。落ちると墮天する。

『この攻撃に耐えきれぬかな？フッフ・・・』

門から黒い霧が出て来て守るをしてるのに入り込んでくる！

「何この黒い霧？」

「あれだな。神経に作用するタイプの技だな」

ウルツプは的確に当て、対策を考えた。

「防衛部隊達よ。神秘の守りを発動し、その後2体はアロマセラピーを発動。守るはすまないが常時展開出来るように」

『はい！』

※神秘の守り※【ノーマル】

状態異常にならなくする。

※アロマセラピー※【草】

状態異常を回復する。

心をリフレッシュさせる。

ウルツプは直ぐに命令を出し、各自直ぐに対応した。

『ほう。頭の切れる者がいるな』

暗黒城はそう言い、黒い霧は止めないが違う技を使おうとしていた。

ちなみに暗黒城は天守閣から声が聞こえる。

「技を出される前に仕掛けるよ！ルカリオ、あの門に波導弾！

ユキノオー、冷凍ビーム！

ギャラドス、破壊光線！」

3体の一斉攻撃は門に向かって一直線に向かっていった。

『我が易々と門に攻撃を通すと思うな。障壁！』

暗黒城が張った黒い障壁は攻撃を受けると吸収した！

「え!?弾くんじゃ無くて吸収!?!」

『小娘、障壁とは色々な使い道があるんだよ。たとえば・・・障壁・リバース!』

※障壁・リバース※【悪】

吸収した攻撃を相手に与える。

障壁の前に紫色の空間が出て来て、黒い光線を放ってきた！

「守るを全力でしろ！」

『はい！』

防御部隊が直ぐに守るの強度（守るを多重に掛ける）を上げ障壁・リバーズの攻撃を防いだ！

『せっかくお前達が攻撃してきた技を返してあげたのに』

「いやいや！あれ食らったら危ないじゃん！」

セレナが直ぐにツッコんだ！

『じゃあ攻撃止めてよ。そうすれば我が暗黒城も攻撃しないからさ』

「本当に？」

「セレナ君。敵の話しをまともに聞くな」

「は、はい！」

『ちえくじゃあ攻撃出来ないように痛めつけちやうよ！』

「あれだな・・・暗黒城の喋り方が変わって来たな」

「あ、言われてみれば！」

暗黒城はだんだんと言葉が人間の子供みたいになってきている。

『我が城のとおっておきを食らっちゃえ！天地界脈！』

※天地界脈※【神】

空と地上を作り替える。

代償に自身の体力の半分を失う。

「天地界脈!?!」

暗黒城の門から発せられていた黒い霧は眩しい更に黒い漆黒の霧に変わり20番道路全てを包み込んだ！

『暗黒城め・・・あの技を使ったか』

「なんだこの霧は？マフオクシーは隣に居るか？」

マフオクシーの返事が聞こえない・・・

「エルドラド!?!」

エルドラドからの返事も聞こえない・・・

「ミュウツー!?!レックウザ!?!」

2体のポケモンの返事も聞こえない・・・

「何も見えない・・・どうなっているんだ・・・」

Baronは暗闇に捕らわれてしまった。

その頃上空でイベルタルを取り囲んでいたミュウツーとレックウザは……

『この黒い霧は何だ？気がつけば周りが見えないだど？』

『暗黒城め……あの技を使ったか』

イベルタルの声が聞こえた。

『イベルタル！この状況を説明しやがれ！』

『我が造った暗黒城の技だ。我には聞かないがお前達は数分後、どうなっているか分からないぞ』

イベルタルはそう言うのと20番道路の上空に飛んでいった。

『暗黒城の天地界脈の範囲を馬鹿にしていた……後少し遅ければ我も危なかったか？』

イベルタルは上空に行き、天地界脈の範囲を確認していた。

その規模は20番道路全てを覆い尽くしていた。更に、じよじよにだが、20番道路以外にも天地界脈の漆黒の霧が広がっている。

1時間もすれば周りの町は漆黒の霧に包まれるだろう……

『我ながらとんでもない城を造りあげたな……彼奴らはもうこの技からは逃げられないだろう……次の場所に移るか』

イベルタルはそう言い、ミアレシテイに飛んでいった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十七話

百十七話

20番道路は暗黒城が放った天地界脈により漆黒の霧へと変わった。

この技は空と地面を作り替える技だが、妙だ・・・
明らかにそれ以外の技が掛かっている！

俺は近くに居た筈のマフオクシー、前方に居た筈のエルドラド、上空に展開していたミュツウーとレックウザを探すことにした。勿論、セレナ達も探すけど。

「おい！マフオクシー！エルドラド！ミュウツー！レックウザ！セレナにウルツプ！どこにいるんだよ〜！」

暗闇を真っ直ぐに歩いてるが何も無ければ何も聞こえない。自分の声が遠くに行っているみたいな感覚だ。

自分以外がない世界みたいだ。

イベルタルの戦闘に夢中になりすぎてこの霧が迫っていた事すら気づけなかった。瞬く間に霧に飲み込まれてから自分がどこにいるかも分からない。俺の腰に吊っていたモンスターボールも無くなっている。

俺と共に戦ったポケモン達も今は見当たらない。

暗黒城を探し出せれば脱出出来るのか？

何も分からない・・・

分からなければ行動しなければ立ち止まるだけだな・・・

俺はとりあえず真っ直ぐ走って行った。

その頃セレナは・・・

「ここはどこなの？ねえ！誰か居ないの!？」

セレナも漆黒の霧に飲み込まれており彷徨っていた・・・

「バロン！ウルツプさん！みんな！どこにいるの!？」

セレナは呼びかけながらひたすら真っ直ぐ歩く。

だが、セレナ以外は誰もいない。

「みんな・・・どこに行ったのよ・・・」

セレナは次第に歩くのを止め、座り込んでしまう。

その頃ウルツプは・・・

「あれだ。完全に暗黒城の技に掛かってしまったな！ガツハツハツハ！！」

ウルツプは豪快に笑い、腕を組んだ。

「とりあえず幻術の類いだろう」

ウルツプはそう考え思い切り自分の頬をグーで殴った！

勢いを良く殴ったので少しよろめいたが変化は無かった・・・

「うむ？変化無しとは！これは現実なのか!？」

ウルツプはまた腕を組み考え込み、暫くじつと考えていると・・・
「あれだ！儂は迷ったな！とりあえずここが現実なら出口があるはずだ」

ウルツプはそう言いとりあえず真っ直ぐ歩くことにした。

したが・・・辺り一面は漆黒の霧、いわば真っ暗な視界で歩かなくてはならない。

神経も使うし、何より不安が押し寄せて来る。これは結構キツイ・・・

ウルツプはひたすら真っ直ぐ歩くことにしたが、歩くスピードは凄く遅い。足下を確認しながら進んでいるから。

その頃ポケモン達は・・・

『お前ら！結界を造るから我の糸につかまれ！』

エルドラドが大声で叫び皆に黄金の糸を掴ませ、一気に引っ張り皆を集めた。その後直ぐに特殊な結界を張り皆を集めた。

この結界は外からは見え、中からは外が見えると言う仕組みになっており、外からは生命反応も遮断出来るので、感知タイプが居てもここは見つからない。

『外が凄いいことになってるよエルドラド様・・・』

『エルドラド様！俺達のマスターはどうするんですか！』

『私の黄金の糸は人間は触れることが出来ない・・・仕方が無かった』
エルドラドは凄く悔しそうに歯を噛みしめそう言った。

皆も意見は一緒だったけどどうしようも無い事は解っていたので誰も文句は言わない・・・いや、ミュウツーが言っていたな・・・

自分達はエルドラド様のおかげで助かってる。

今の自分達が出来るとは、エルドラド様の命令に従い動くことだ。

『エルドラド様、自分達は何をすれば良いですか？』

『今は体を休ませて待機。天地界脈の技は我ら上級の神の技。解除も対応も上級の神しか出来ない。だが、我はその上級の神の位置にいる。この結界は皆に神タイプを一時的に付与させている。だが、この効果が切れると・・・』

『外の漆黒の霧の効果を受けるという事ですね？』

流石ミュウツーだ。

『そうだ。それまでにお前達には一時的に上級神の神の体に耐えられるような体になって貰わなければならない』

上級神は普通の神タイプ付与とは違い、更に濃度が濃い、言わば本当の神になると言う事になる。

上級神になる為には一般のポケモンはその神の体質に耐えられる体を作らないといけない。一時的にとはいえ、限界を超えない限りはそこには到達出来ない。

伝説ポケモン達も神タイプは付くが、上級神までとはいかない者が多い。

なので皆に体作りを短時間で作って貰わなければならない。

『そこでだ。私のこの特殊結界を使い、体作りをして貰う。この結界は外との時間差があり、ここでの一日は外では1分だ。マスター達は長く持って1時間が限界だと思うがそれまでには猛特訓すれば上級神に耐えられる体になるだろう。皆、頑張ってくれるか？』

『はい!!!』

皆は一同に頭を下げ、返事をした。

皆も助けない思いは一緒なのだ。我も共に頑張ろう！

こうしてエルドラド達の上級神の体作りの猛特訓が始まった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十八話

百十八話

上級神の体作りは過酷だった・・・

まずは自身に伝説ポケモンが持つ【神】タイプを自身に身に付ける事から始まった。

エルドラド様の特殊結界で神タイプ付与の効果は受けていたが、それ無しで神タイプになるとすると、物凄い吐き気や痙攣、気絶したりと様々な事が起こった。

だが、ここで挫折すると先に行けない。まだ神タイプの段階なのだ。エルドラド様は言っていた。

伝説ポケモン達は上級神になるための特訓で凄く鍛えているがなかなか到達出来ないみたいだ。

エルドラド様はどのようにして上級神になったか聞いてみると・・・『我はこの世界の本当の神【アルセウス】に会い、直に特訓を受けた。』

長い長い特訓の末に我は上級神に辿り着き、この体を手に入れた』

『上級神になったときに進化したんですか?』

『そうだ。正確には神化だがな』

エルドラドはそう言い、エルドラド自身も特訓し始めた。

『エルドラド様はまだ特訓するのですか?』

『我はまだ強くなれる。まだ上級神だからな。更に上を目指す』

上級神の上。それは・・・

『本当の神になるのですか?』

『ああ。我はマスターを確実に守れる神になる』

『ですが、そうすればもう二度とマスターに会えなくなるのでは?』

『ない!?!』

エルドラドは固まり、ミュウツーを見た。

『神になるとアルセウス様のように異次元で世界を見守り、管理していく立場ですよ?我ら伝説である者達もそこは理解しております』

『忘れていた・・・そう、だよな・・・上級神の上は・・・』

エルドラドはどうしようか考え、直ぐに答えを出した。

『ミュウツーよ。我はやはり神になる。強すぎる力は人間達に恐れられる。神になりこの世界を、この宇宙を、見守り、時には助けになるう』

『エルドラド様・・・』

エルドラドはそう言い、皆の特訓を再開した。

ミュウツーはマスターを確実に守れる強さを手に入れるため、今以上に強くなることを決めた。

エルドラドの上級神への特訓は半月を過ぎる時には皆、神タイプを手に入れた。

だが、神タイプを手に入れると1つ自分のサブタイプを消すことになる。なので・・・

エルドラド【神】

ミュウツー【エスパー・神】

レックウザ【龍・神】

ゾロアーク【悪・神】

メタグロス【鋼・神】

マフオクシー【炎・神】

ルカリオ【格闘・神】

サーナイト【エスパー・神】

アブソル【悪・神】

ギャラドス【水・神】

クレベース【氷・神】

レジアイス【氷・神】

ユキノオー【氷・神】

トレーナーの手持ちにいたポケモン達は特訓出来ていないのでこのメンバーが神タイプを手に入れた。

この中で上級神に一番近づいた者は・・・

ミュウツー

レックウザ

メタグロス

マフオクシー

ルカリオ

レジアイス

ユキノオー

このメンバーだ。上級神一歩手前までの成績を出したが、上級神には後少し届かなかった。

何か足りないのだ・・・

『エルドラド様。俺達はもう半月も特訓し、神タイプを手に入れました！もうイベルタルと暗黒城に勝てますよね？』

『暗黒城には勝てると思うが、イベルタルは無理だろう。あいつ自身上級神の力を持っているからな』

そう・・・イベルタルはカロス地方の上級神で破壊神だ。

最初こそは普通だったが、あの半擬人化のイベルタルは上級神の力を持っている。擬人化が解ければそれは無くなるが・・・倒すしか方法は無いだらう。

『お前達に1つアドバイスをやる』

『『『お願いします！』』』

皆はエルドラドの前に整列し顔を見た。

『上級神になるにはお前達の体では無理だ。もっと強い肉体、すなわち・・・神化しろ！』

『進化？』

『神化？』

レックウザは進化と答え、ミュウツーは神化と答えたが、正解は神化だ。

『神化は神と読んで神化だレックウザ』

『ありがとうミュウツー。その神化を成功すれば上級神になれる器を手に入れる事が出来るだろう』

皆は一斉に喜びやり方を教わろうとしたが、

『やり方は各自で考えろ。アドバイスはするが答えを出すことは出来

ない』

『分かりました。答えを探し当てるまで特訓し、力を付けながら考えます』

ミュウツ―はそう言い、特訓に戻っていった。他の者もそれ続き特訓を再開した。

『皆、頑張ってくれ・・・』

エルドラドは小さくそう言い、上級神になれるように願った。

ちなみに、上級神になるには神化しなくてはならないのだが、その神化が困難だ。

普通のレベルアップでの進化ではなく一度死ななければ神化は出来ない。

エルドラドはアルマトーレの猛特訓中、アルセウスに一度殺された。その時、命の灯火が消え失せる時、

『マスターを守るために俺は強くならなくてはならない！ここで終わってたまるか！』

その時に命の灯火は業火と生まれ変わり命を取り留めた。

命を取り留めたエルドラドはアルセウスに攻撃を仕掛けた。

だが、アルセウスは簡単に攻撃を押し返した後、裁きのつづてを放った。それは間違い無く当たればもう永遠の眠りにつく攻撃だった。それらはエルドラドに迷い無く降り落ちてきた。

本当の死を2度体験しそうになったとき、アルセウスからこう言われた。

『上級神になりたければ神化しなさい！このままでは本当に死にますよー！』

『神化したくても出来ないんだよ！畜生く!!!』

エルドラドは叫び裁きのつづての攻撃を受けた！

8連撃の超高威力技を受けたエルドラドは特殊な結界に包まれていた。

『ほうっ、やっと出て来ましたか。ここまで来たらもう一息です。自分の神化のイメージをして強く思いなさい！大切な者を守る強さ！

諦めなさい思い！強靱な肉体を！』

アルセウスの言葉通りにすると体が光り出した！

『さあ！神化の時です！』

アルセウスは凄く嬉しそうにそう言い、神化を見届けた。

白龍だった頃の白い龍の体は黄金色に・・・

白龍だった頃の2m位だった体は5mの巨体となり4足歩行型に・・・

黄金の体には鉄よりも遙かに堅い、ダイヤモンドの強度を誇る鱗が体全体を覆う・・・

翼は左右3mもある黄金の翼・・・

顔を兜を付けており角が2本、後ろに左右に分かれて伸びている・・・

この姿が、エルドラドが考えた上級神の力に耐えられると想像したからだ。

ちなみに通常のアルセウスの大きさは3mほどだが、アルマトーレの最強アルセウスの大きさはその5倍、15mだ！凄く大きいアルセウスは神の領域と言う本当の神しか入れない部屋でいつもいる。

今回はエルドラドの特訓の付き添いでその部屋から出て特訓に付き合っていたのだ。

『この姿が上級神・・・我の新たな姿』

『そうだ。良くやったな白龍。いや、もうこの名は前の名前だな』

アルセウスは少しだけ考え、こう言った。

『上級神になったお前に名を授けよう。今日からは『エルドラド』と名乗るが良い！』

『エルドラド・・・ありがとうございます！師匠！』

エルドラドは笑顔でお礼を言い、もう少しだけ特訓に付き合ってくださいをしました。

アルセウスは少しだけ呆れていたがいい暇つぶしになるので技の練習をすると言う事で特訓を開始するのであった。

エルドラドは上級神になるために必要な事をこの身で分かったが、皆に死ねと言うのは心が痛む。

だから神までは特訓したが正直、上級神になってほしくない。死んでほしく無いからだ。

エルドラドは皆の特訓を静かに見守ることにした・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百十九話

百十九話

エルドラドの上級神の特訓から半月から少し日が進んだ頃、ミュウツーとレックウザは戦闘を行っていた。

『マスターを守り通せるのは俺だ!』

『いいや!俺だね!』

そもそも何でこんな事になっているかと言うと・・・

特訓により上級神に近くなった事により慢心とマスターを守れる強さは俺の方が上だと言い出してから戦闘が起こった。周りの特訓中の奴等も乱入しようと思ったがエルドラドが睨み大人しくさせた。

2体はエルドラドの睨みを無視し戦闘になったのだ。

エルドラドはその戦闘を止めず戦わせた。

自分の時のように命が危なくなった時、覚醒するかもしれないからだ。

『エルドラド様、あの2体を止めなくて良いのですか?』

『ああ。今は大丈夫だ』

そうやってきたマフオクシーは少し不思議に思いながら戦闘をする2体を見た。

2体の戦闘は、最初こそポケモンの状態でバトルしていたが、途中から擬人化し、本気バトルになっていった。

『天地を穿て!ゲイボルグキャノン!』

『大いなる光を!メテオパニツシャー!』

※ゲイボルグキャノン※【神】

神の槍を相手に投げる。その後大爆発する。

※メテオパニツシャー※【神】

光を纏った隕石を出現させ、相手に放つ。最後は大爆発する。

2体の技は両方最後に爆発という当たっても当たらなくても被害が出る技を繰り返し出して来た!

レックウザはゲイボルグキャノンを思いっきり投げ飛ばし、ミュウツーはメテオパニツシャーを思いっきり放った!

2体の技はぶつかり合うと更に両者追い討ちをかけた！

『砕け散れ！グラビティノヴァー！』

『敵を撃ち抜け！デスキャノン！』

※グラビティノヴァー※【神】

地面から爆発製の球体を形成する。その後任意の場所で爆発させる。

※デスキャノン※【神】

当たれば即死させる技。

エルドラドはミュウツウが放ったデスキャノンを止めようとしたが、レックウザはニツと笑い地面に手を付けると…

『障壁・マジックミラー！』

※障壁・マジックミラー※【光】

光線系の技を反射させる。それ以外は障壁が受け止める。

デスキャノンはグラビティノヴァーとメテオパニツシャーを貫通し消滅させた後、そのままレックウザに向かって行ったが、障壁に弾かれこちらに戻って来た！

『うおっ!? あつぶねー!』

ミュウツウは紙一重で右に回避し直撃を避けた！

デスキャノンはそのままエルドラドが作った結界に当たり消滅した。そこに亀裂が生じたがエルドラドが直ぐに修正し元に戻した。

レックウザはミュウツウが避ける事を確信しており、接近していた！

『吹き飛ばせ！ゴッドハンド！』

※ゴッドハンド※【神】

神の力を手に宿し、相手を殴る。神を付与しているので威力は絶大。

ミュウツウは避けた状態で接近して来たレックウザに気付かず殴り飛ばされた！

ミュウツウは飛ばされレックウザがそこに追い討ちをかける！

『うおおおらああー!』

レックウザはゴッドハンドのままミュウツウの上に瞬時に移動し

両手を勢い良く振り下ろした！ミュウツ―は避ける事も出来ずその攻撃を受け、勢い良く地面に落下した！

『ガハッ！』

ミュウツ―は叩き付けられた衝撃で酸素を全て吐き出してしまい息が出来ない！

そこにレックウザが上からダイブしミュウツ―を踏みつけた！

『グ……………』

ミュウツ―の体から力が抜けた……………

『おいミュウツ―。まだ戦えるだろう？早く立て〜！』

レックウザは踏みつけているミュウツ―を蹴飛ばすと仁王立ちし見下ろした。

ミュウツ―はグツタリしたままだ。

エルドラドはミュウツ―が息をしていない事が直ぐに分かり動こうとしたが、俺の時も似たような感じだったので大丈夫と思い動かなかった。

『覚醒するんだ。ミュウツ―……………』

エルドラドはそう小さく言い、上級神の力を無意識に力を譲渡した。その結果……………

ミュウツ―の体が青く輝きだし、命の灯火が大きく燃え上がった！
ミュウツ―はゆっくり立ち上がり、青い球体状のオーラが体を纏っていた。

『ミュウツ―！神化の時だ！上級神に耐えられるだろう姿をイメージしろ！そして力を解放しろ!!』

『うおおおおお!!』

ミュウツ―が纏っていた青いオーラは更に輝きだしミュツウーを包み込んだ！そして……………

ミュウツ―の体は龍人型になった。

身長は3m程で全身を青色の鱗で覆われている。

背中からは水色の半透明な翼を生やしている。

『どうとう上級神になったかミュウツ―。いや、もうその名では呼べないな』

エルドラドは少し考え、ミュウツーの新名を考えた。

『ミュウツー、これからは【青竜王】と名乗れ』

『はいー』

青竜王はエルドラドに礼をし、構えた瞬間、その周りに波紋が広がり青竜王は消えた。

どこに行ったか探すとレックウザの後ろにいた。レックウザは直ぐに振り向いたが、急にその場で倒れた。

よく見るとレックウザの体は切り傷だらけで血が流れ出していた！

『青竜王。お前の武器はその自慢の爪とゆう訳だな』

『はい。イメージは龍人で主な攻撃は接近攻撃が有利かと思いいこの型にしました』

エルドラドは青竜王と喋りながらレックウザを治療した。この領域ではエルドラドは何でも出来るからだ。

『そうか。見事な上級神になったな。これならイベルタルにも勝てるぞ』

『ありがとうございます！では、早速！』少し待ちなさい』

エルドラドは青竜王を呼び止め、

『他の者の強化を終わらせなければならぬのでな、力を貸してくれ』『わかりました』

青竜王はレックウザに歩みより手を翳した。すると、手から青い光りが輝きレックウザに移っていく。すると傷だらけだったレックウザの体は元に戻り体力が回復した！

『もう立てるかレックウザ？』

『助かった。ありがとうございます青竜王』

レックウザと青竜王は手を取り合い、仲直りし強化訓練を開始した。

※青竜王※【龍・神】 1 v 8 0 0

青い龍人の神。

波紋を作り出すと様々の効果を生み出し強化する事が出来る。

自慢の武器は何でも切り裂ける鋭利な爪。
素早さはトップクラスだが、防御力はそこまで無い。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十話

二百話

青竜王になってからエルドラドと皆を鍛えていた日、青竜王から質問された。

『エルドラド様。俺の波紋で上級神の力を譲渡すれば直ぐになれてしまうのではないですか？』

『む？そう言えばそうだな・・・皆も結構鍛えているし上手くいけば・・・』

エルドラドは少し考えたが首を横に振った。

『いや。止めておこう。命の灯火が大きく燃え上がるには一度死にかけないとダメだろう・・・』

『確かにそうですね。俺の時も一度死んでしまいそうになったとき、命の灯火が大きく燃えた感覚がありました』

青竜王はそう言い、エルドラドと皆の特訓を見た。

その時、レックウザがこちらに来てこう言った。

『エルドラド様。俺の命の灯火がやはり大きくなる感じがしません！』

レックウザはそう言い、心臓の部分に手を当て、そう言った。

『うむ・・・やはり生きている内は命の灯火は大きくはならないか』
『生きてる内とは？』

『俺とエルドラド様は一度死にかけている。その時、命の灯火が一度大きく燃え上がる、その時に復活出来れば上級神への肉体変化が可能になるのだ』

『お前達、試してみるか？』

エルドラドと青竜王は同時にそう言い、皆を見渡した。

『はい！俺も速く強くなるためお願いします！』

他の者も一同に頭を下げた。

『うむ。では1人ずつ相手をしてやる。勿論、失敗すれば本当の死が待っているぞ。後、俺達はお前達を殺すつもりでいくぞ。心の準備が出来た者だけ挑戦するがいい』

エルドラドはそう言う前に出て軽く準備運動を開始した。
青竜王もその横で軽く準備運動をする。

『俺が最初に行く！相手は青竜王！』

『わかった。死ぬなよ？』

青竜王はそう言うと言い青いオーラの球体を作り出すとエルドラドの結界の外に配置した。

広さはエルドラドの結界の半分ほどだがそれでも結構広い。

『さあ、バトル場へと移ろうか』

青竜王はそう言いながらその球体に入ってしまった。

レックウザもその後引き続きその球体に入ってしまった。

『あの球体、俺と似た効果の結界だな。外からの影響を受けなくさせてやがる。見守るしか出来ないか』

エルドラドは小さくそう言いバトルを見届ける事にしようと思つたとき、マフオクシーにバトルを挑まれた。

『私も強くなりたいのでバトルをお願いします！』

『わかった。他の者は端の方で見とけ。さあ、始めようか！』

こうして上級神への挑戦が同時に開始された。

上級神への試練

☆青竜王VSレックウザ（擬人化）☆

『神装・アマテラス！』

レックウザはバトルが始まったと同時に神装を使い強化した。

レックウザの神装が終わると同時に青竜王は構え、波紋が広がったと同時にその場から青竜王の姿が消えた。

『障壁！』

『遅い！』

レックウザは直ぐに障壁を張ったがその時にはもう青竜王はレックウザの懐に入り込んでいた。

『隼』

※隼※

物凄い速さで相手を切り裂く。

青竜王はレックウザの神装部分を攻撃し機能を停止させた。

『アマテラスの効果が発動しないだど!?』

『残念だったな』

青竜王は爪に青いオーラを纏わせ、レックウザの体を貫いた！

『ガハッ!』

青竜王は爪を引き抜くとレックウザの体の真ん中は穴が空いていた。

そのままレックウザは地面に倒れ大量の血が流れ出した。

『お前はここで終わるのか? 違うだろう?』

青竜王はそう言い、レックウザを見た。

俺はこんな簡単に死ぬのか?

まだイベルタルすら倒せていない。

その前にマスターを助けなければならない!

俺はここで終わるわけにはいかない!

上級神になってマスターを守り、イベルタルを倒し、マスターと共に旅をする!

俺の願いはこれだけでいい!

上級神・・・俺に力を寄せ!

マスターを守る強さを!

その時、レックウザの命の灯火が大きく紅く燃え上がった!

その炎はレックウザの体の穴を埋めていき元に戻していく。

レックウザの体は紅く染まっていき、全身から物凄い熱量を放っている!

『そうだ。これでいいんだ! レックウザ! 上級神になるためにはその体を捨て、新たな姿になれ! それが上級神になれる為の課程なんだ!』

青竜王はそう言い、レックウザの姿が変わるのを見届ける。

レックウザを纏っていた炎は形を変え、ドラゴンの形へと変貌して

いった。

全長5 m程の大きな紅いドラゴン。鱗はルビーのように真っ赤に燃えている。

爪は鋭く、尻尾は長く、翼を広げると8 mはあるだろう。

上級神になったレックウザの姿だ。

『上手くいったようだなレックウザ』

『いや、俺はもうレックウザじゃないだろう?』

『確かにな』

2体は少し考え、レックウザの新しい名前を考えた。

『俺はレッドドラゴンが良いと思う』

『そのままだな。俺は紅皇龍と名乗ってみたい』

紅皇龍（こうおうりゆう）

『めっちゃカッコいいな!』

『だろ!』

赤と青の上級神は語り合いながらその結界から出て来た。

新たな上級神誕生。名は『紅皇龍』

※紅皇龍※【炎・上級神】 1 v 8 0 0

紅い鱗が特徴の大型の龍。

防御力が高く、攻撃力も高いが素早さは低い。

光線系の技が強力。

上級神の試練

☆マフオクシーVSエルドラド☆

『さあ、始めるぞ！』

『はい！』

マフオクシーは直ぐに神装・アテネを使い強化した。

『大いなる爆発を！ビッグバン！！』

マフオクシーは高速詠唱をし、エルドラドの上空にビッグバンを発生させ爆発させた。だが・・・

『効かん』

ビッグバンはエルドラドにダメージは与えられていなかった。

『そんな・・・な、なら！永劫地獄・ブラストバーン！』

※永劫地獄・ブラストバーン※【炎】

永遠とブラストバーンの威力の炎を発生させ、相手を攻撃する。

マフオクシーは杖を地面（エルドラドの結界）に刺し、技を放ったが・・・

『その攻撃貫うぞ。アースドレイン！』

※アースドレイン※【地面】

相手のエネルギーを吸収し自分の力に変換させ力を蓄える。

その刺した場所に緑色の大地が広がり出し、マフオクシーの杖から技を放つエネルギーを吸収した。そのまま吸収されたエネルギーで緑の大地を広げていく。

『な!?力が!!』

マフオクシーは直ぐに杖から手を離し、杖を消滅させた。そして、新しい杖を形成し持ち直した。

『ほう?そんな事も出来るのか。だが、その場所は危険だぞ?』

エルドラドはニヤリと笑うと・・・

『絡め取れ、茨地獄』

※茨地獄※【草】

茨で相手を締め付ける。時間が経つにつれ締め付けが強くなっていき最終的には圧縮される。

マフオクシーが着地した場所には茨がいくつもあり、その茨が一斉にマフオクシーに向かっていく！

『く!?炎よー私を守って!!』

マフオクシーは体を丸くし強く炎に願った！その時、マフオクシーの命の灯火が守って欲しいという願いで大きく燃え上がり、茨や緑の大地を燃やし尽くした。

『これは・・・?』

『汝を守る強さを・・・我、『アテナ』が力を授けよう！我をイメージし願え。上級神アテナの力を使うがいい』

マフオクシーは頭の中で必死にイメージし力を一気に解き放った！すると、マフオクシーの体から眩しい赤色の光りが輝きだしマフオクシーの姿を変えていった！

見た目は神装・アテナとあまり変わらないが、その力を全て受け継がれた状態のマフオクシーに生まれ変わった。

赤いロングの髪をストレートに伸ばし

白色をメインとしたドレスを着ており

金色の盾に真っ赤な槍を持っている。

背中には金色と紅色の光輪がありそこから炎が燃えている。

髪にはアクセントに白い薔薇を付けている。

神装・アテナの力を全て受け継がれた、今はもうマフオクシー自体がアテナになったのだ。

『貴方はこれから『アテナ』と呼びなさい。貴方を守る強さ。後、貴方が守りたい方達にこの力を使いなさい』

『ありがとうアテナ様』

マフオクシーはそう言い、静かに地に降り立った。

エルドラドは嬉しそうに微笑み、

『なれたんだな上級神に。新しい方法で・・・』

『はい。この姿が私の新しい力。上級神アテナです』

アテナはそう言い、礼をしてから光輪の炎を納めた。

『もう炎もコントロール出来るのか。たいしたものだ』

『アテナ様にやり方を教わっていますから』

アテナはアテナ様に教えて貰ったと言っているが、上級神になるときに知識が頭に流れ込んだという事だろう。

『そうか。むこうも無事に上級神になれたみたいだぞ』

『そうみたいです』

アテナはエルドラドの隣に立ち、青竜王達が来るのを待った。

上級神アテナ【炎・上級神】 1 v 800

マフオクシーがアテナの力を受け継いだ姿。

炎を操ったり、槍とかで攻撃したりと様々な事が出来る万能型。

光輪の炎はステータスを高めたり、攻撃に使えたりと色々出来る。

百二十二話

青竜王達が戻ってきた時に、レックウザの新しい名を聞いた。

『紅皇龍と言います！』

『アテナと言います』

新しく上級神となった2体はお互いの名を教えあった。

『他の者で上級神の試練に挑む者はいないか？』

エルドラドはそう言い、周りで見えていた者達に声をかけた。

その中の1体が前に進みエルドラドの前に立った。

『俺がその試練を受ける』

ユキノオーはそう言いメガ進化した。

『我ら上級神の内、誰と戦いたい？』

『選んで良いならエルドラド様、貴方です！』

『良からう。では始めるとしようか！』

『はい！』

周りに居た者は更に端に移動し、試練を見守ることにした。

上級神の試練

☆メガユキノオーVSエルドラド☆

『全てを凍らせろ！絶対零度！』

『障壁！』

ユキノオーが放った絶対零度はエルドラドの障壁により防がれたが、

『アイススピア！』

※アイススピア※【氷】

氷で槍を形成する。

『ほう。氷の槍か。ゴールドンスピア！』

※ゴールドンスピア※【鋼】

金で出来た槍。

エルドラドは金で槍を大量に造り、宙に浮かせた。

『さあ、発射だ』

『くっ！』

エルドラドは咆哮するとゴールデンスピアが一斉に放たれた！

それらは躊躇なくユキノオーに向かって行く。ユキノオーはそれらを捌ける物は捌き、避けれる物は避けることにし、攻撃を受けずに済んだ。

『ほう。じゃあ次行くか』

エルドラドは更に大量の・・・ゴールデンスピアを全方位に展開させた！

『はあ!?多すぎだろ!!』

ユキノオーはそう言いながら構えた。

『全て凍れ！瞬間凍結・アイスインパクト!』

※瞬間凍結・アイスインパクト※【氷】

当たった物全てを凍らせる。

広範囲を一気に凍らせることが出来る。

ユキノオーはまだ宙に浮いている状態の時に技を発動し、辺り一面とゴールデンスピアを凍らせた！

だが・・・

『それぐらいで防げるとでも思っていたか？全槍よ！発射だ』

エルドラドは再び咆哮をすると凍っていた物を全ての氷だけを破壊し、槍を発射した。

全方位の無数の槍はユキノオーに一斉に降り注ぐ事になったのだ。

『アイスウォール!』

※アイスウォール※【氷】

氷の壁を造る。

エルドラドはそのまま槍を発射させた。槍は一直線にユキノオー目掛けて降り注ぎ、ユキノオーが造った氷の壁は簡単に破壊され、そのままユキノオーを全方位から串刺しにする・・・

無数の槍の攻撃が終わった頃にはユキノオーはそこには居なかった。

『エルドラド様！どう考えてもやり過ぎです！』

アテナが直ぐにエルドラドに掛けよりそう言ったが、

『安心しろアテナ。青竜王が串刺しされる一步手前で助け出ししている』

『え？』

アテナも周りのポケモン達も不思議そうに槍の方を見てみると確かに血は流れていないし、何も無い。

『じゃあユキノオーや青竜王はどこ？』

『上』

紅皇龍は上を指さすと空を飛んでいる青竜王がユキノオーを頑張って担いでいた。

『流石にもう降ろすぞ！』

『すまぬ・・・』

青竜王はその場からユキノオーを降ろすとズドンと言う音と共にユキノオーが降ってきた。

『おいおい。降ろすってそこからかよ！』

紅皇龍が笑いながらそう言っているが落とされた方はマジで痛い。

『た、助かりました青竜王様。後、出来れば落とさないでほしかったです・・・』

『贅沢言うな。お前重たいんだよ！』

ユキノオーはメンタル面で大ダメージを受けて落ち込んだ・・・

『試練は辞退させて頂きます。申し訳ありません』

ユキノオーはそう言うと言った皆の方へと向かって行った。

ユキノオーは命の灯火が大きく燃え上がらなかつた。上級神にはなれないな・・・

エルドラドはそう考え、槍を消した。

『他に挑戦者はいないか？』

エルドラドは周りのポケモン達を見るが皆、下を向き顔を上げない。

それもそうだろう。今までが上手くいっていただけで実際は死にかけてから勝負みたな物だから。

マフオクシーは異例だったが、そのように神化出来ることも分かっただけでも成果だ。

エルドラドはもう一度周りのポケモン達を見たが結果は一緒だったので次のステップに移ることにした。

『いないみたいだな。それじゃそれぞれマスター達を助けに行くぞ』

『よし！やつとマスターを助けに行けるんだな！』

『速くセレナを助けたいわ！』

『俺はウルップを助けてやる』

上からエルドラド、青竜王、アテナ、紅皇龍がそう言い、周りのポケモン達も喜んだ。

『今は半月立った位だから外では30分。今ならまだ間に合う。行くぞお前達!!』

『『『おお〜!!!』』』

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十三話

百二十三話

エルドラドは自分が造った特殊結界を解除し雄叫びをあげた！

『マスター！助けに行くぞ〜!!』

その咆哮で漆黒の霧は少し遠のいたが直ぐに迫ってきた。

『お前達、もう分かっていると思うが神タイプには干渉されない霧だ。今ならマスター達を助けられる。急げ!』

『はい!!』

ポケモン達は直ぐに行動に移りそれぞれのマスターを探しに行った。

漆黒の霧で視界は最悪だが、人の気配は感じるのでそれを目指し進んでいく。

エルドラドはマスターの位置を探るため目を閉じ、周囲に気配を巡らせた。

青竜王は波紋を広げることで感知も出来るので波紋を拡張させ気配を探る。

アテナは光輪の炎で辺りを照らしながら探すことにした。

紅皇龍も体から赤い光りを放ち探すことにした。

それぞれの探し方でマスターの位置をやつと分かるど皆、一気に動きそれぞれのマスター（トレーナー）の場所に向かった！

『マスター！やつと見付けた!』

『エルドラド！やつた。会えて良かった』

『セレナ！やつと見付けたよ!』

『マフオクシーだよね?』

『うん！元マフオクシーで今は『アテナ』だよ』

『ウルツプだな？いつもながらニコニコしてやがる』

『ガツハツハツハ！あれだ。1人だと寂しいものだな!』

『あ・・・暗黒城じゃん！久しぶりだな〜』

『だれ?』

エルドラドはバロンを見付ける事ができ、アテナはセレナを見付け

る事ができ、青竜王はウルップを見付ける事が出来た。紅皇龍はまさかの暗黒城を見つけた……

『マスター。俺の背中に乗ってくれ。この霧の上に行く』

「わかったー！」

バロンは直ぐにエルドラドの上によじ登り跨がった。

そして一気に上空に飛んだ。

『セレナ！迎えに来たよ』

「アテナ。可愛くなったね」

『ありがとう！じゃなくて！今はここを出るよ！私の手に掴まって！』

「うんー！」

セレナはアテナの手を掴みテレポトし、上空に転移した。

『ウルップ。この霧の上に行くから俺の手に掴まれ』

「助かる」

ウルップは青竜王の手を掴み、青竜王から波紋が広がった。その時にはもう青竜王とウルップはその場には居なかつた。次に現れる場所は勿論、上空だ。

『なあ暗黒城。お前をここで潰すわ』

『急に物騒な事言うなよ！』

暗黒城から更に濃い霧が発せられたが、紅皇龍には全く効かない。

『んじやさくつと殺っちゃいますか』

『ちよっ！ちよつと待ってくれ!!!』

紅皇龍は暗黒城に触れると消滅させた。

『これで霧は自然に消えるな。皆は空に行つたか』

紅皇龍は皆の所に向かった。

その他のポケモン達はマスターが上空に居ることが分かるはずもなく、闇雲に探していた。

暗黒城が消滅してから漆黒の霧はなくなり元の風景に……

『これは……仕方がないのか？』

空から見た見た地上は草木一本も無くただ平地が続いていた。

あの漆黒の霧は30分という時間でそこまで行動していたのか……

速く消しておいて良かった。

紅皇龍は空にいるエルドラドの所へ向かった。

他の者たちもエルドラドの場所に各自向かって行った。

エルドラドはイベルタルが向かったであろう場所を確認し、皆が来る前に作戦を立てることにした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十四話

百二十四話

時は遡りブレインの『ポケモン完全自由計画』は終盤を迎えていた。

『ブレイン様。残すはミアレシティだけですね』

「ああ。やっとここまで来たんだ。必ず成功させよう！」

ブレイン達が居る場所はカロス地方の一番高い山、フロストケイブの山頂だ。

ポケモン達を解放するための機械を色々な町や村、山、海に設置した。残りはカロスの中心に位置する町、ミアレシティにあるプリズムタワーの天辺にこの装置を配置し起動させればカロス地方のポケモンを解放出来る。

その後は現チャンピオンを倒し、この地方の王に俺は戻る。

ちなみに、当初の目的と違うようになったのは理由がある。

最初こそ、ポケモン達を支配しこの地方の王になろうとしたが、その後俺は何をすればいいのかを考え悩んだ。

その結果・・・ポケモン達を支配するのでは無く、ポケモン達から親しまれ、ポケモン達から俺に付いてきてくれれば支配では無く仲間としてこの地方を共に手に入れ、モンスターボールと言う檻からポケモン達を解放し好きに生活させる。それがブレインが導き出した答えだ。

サーナイトとエルレイドはこの計画を邪魔する者は許さない。

逆らう者は潰し、従う者には仲間を迎え入れ共に行動をする。

「さあ、最終ステージに行くとしようかお前達」

『『はー』』』

ブレインの後ろにはサーナイトにエルレイド、その他にもブレインの計画を知り力を貸すポケモン達があった。

ちなみに、フロストケイブの主であるユキノオーもこの計画に賛成であり、ブレインに力を貸している。

ブレインはポケモン達を連れミアレシティへと進軍した。

フロストケイブ付近の町や村はこの進軍により被害を受けていた。

ポケモン達をボールに入れて飼い慣らす者たち（ポケモントレーナー）を、俺の仲間のポケモン達が解放していつているのだ。

そのポケモン達は解放されれば野生ポケモンとなるので、そのポケモンがどうしたいかを決めさせる。

勿論、ブレインの配下に加わるならば仲間に迎え入れ、断ればポケモンの軍勢で潰す。

この結果、現在のカロス地方の殆どの町や村が襲われ被害は甚大。野生ポケモンが多くなりブレインの配下が多くなっていく。

カロス地方の9割を制圧していて、各地にブレインの仲間が散らばっている。

元々の野生ポケモンは勿論、この計画に賛成しているので規模で言うと、とんでもない事になっている。

ちなみに、バロン達はその制圧されている場所（20番道路）にいるが、伝説ポケモンに戦闘で近づけないでいる。

近づけないなので、その間有力な強者達を収集し徐々に勢力を拡大していつている。準備が整えば進軍するために・・・

ちなみにここに今いるポケモンはリザードンとルカリオとその他のポケモン達だ。

今のブレインの優秀な仲間

サーナイト	L V 9 5 0
エルレイド	L V 9 5 0
アルセウス	L V 1 0 0 0
ミュウツー	L V 9 8 0
ミュウ	L V 9 8 0
ゼルネアス	L V 9 8 0
ダークライ	L V 9 8 0
フシギバナ	L V 8 0 0
リザードン	L V 8 0 0
カメックス	L V 8 0 0

ユキノオー	ルカリオ	ガブリアス	アブソル	ジュペッタ	ライボルト	チャーレム	ボスゴドラ	クチート	バシヤモ	バンギラス	ヘルガー	ヘラクロス	ハッサム	デンリュウ	プテラ	ギャラドス	カイロス	ガルーラ	ゲンガー	フリーデイン
L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L	L
V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V	V
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十五話

百二十五話

各々がそれぞれの目的でミアレシティに目指している時、各地のジムリーダーは野生ポケモン達の猛攻と戦っていた。

ハクダンシティでは・・・

町は既にポケモン達により民家に住んでいたトレーナー達のポケモン達は野生に還っていた。

残りはジムにいるトレーナーとジムリーダーのポケモン達だけとなっていた。

ブレインがここに送ったポケモンは、ヘルガー、プテラ、バシャーモとその他のポケモン達だ。

『ジムを破壊するぞ！オーバーヒート！』

『破壊光線！』

『ブラストバーン！』

三体の高威力技を真っ直ぐハクダンジムに向かって行きジムの扉を破壊した！

『俺に続け〜！』

『おお〜！』

ヘルガーが先頭でジムに入って行き、プテラとその他数匹を連れてジムに入っていく。バシャーモと残りのポケモンはその周辺を偵察したりした。

ジムの中では事務員3人が警備網を敷いていたがヘルガーの火炎放射で吹き飛ばした！

その後、事務員の腰のモンスターボールを壊し、ポケモン達を解放した。

『お前達、ブレイン様の計画に参加する者は俺達の仲間として迎え入れよう。拒否をすればここで倒す』

ヘルガーが手短に計画の内容を説明し、解放したポケモン達の答えを待った。

『参加させて頂きます』（ルチャブル）

『俺も参加だ』（ゴロンダ）

『俺は嫌だな。トレーナーとの絆が俺にまだある！』（カイリキー）

最後の1体、カイリキーは事務員の側に行き、守るように戦闘態勢を取った。

残りのポケモン、ルチャブルとゴロンダはブレインの計画に参加し仲間に加わった。

※カイリキー※【格闘】

発達した4本の腕は2秒間に1000発のパンチを繰り出すことが出来る。

※ルチャブル※【格闘・飛行】

体格は小柄だがカイリキーやハリテヤマなど大きなポケモンと互角に戦うテクニシャン。

※ゴロンダ※【格闘・悪】

攻撃を受けても怯まずに突進して電柱をへし折るパワーの腕力でぶちのめす。

『ほう？俺達と敵対するか』

カイリキーの周りにヘルガーの仲間達が取り囲む。ルチャブルとゴロンダは端の方で待機した。

『一斉攻撃を開始しろ！』

ヘルガーの合図でカイリキーを取り囲んでいたポケモン達はそれぞれの最高威力技でカイリキーを攻撃した！

『俺は見くびるな！雷・炎・氷・龍連続パンチ！』

※雷・炎・氷・龍連続パンチ※【四属性】

連続パンチにそれぞれの技を追加している。

カイリキーは一斉攻撃の軌道を瞬時に読み取り、それぞれの腕で技を相殺していく！

最後の1撃は破壊光線だったので全ての腕で攻撃し相殺する。

この一斉攻撃を全て相殺したカイリキーはスタミナを一気に消耗したがダメージは無くした。

『ほう？流石と言うべきか。だが、皆の者！休まず攻撃を続ける！スタミナが切れればこちらの勝ちだ！』

『『おっー！』』

ヘルガーの合図で一斉攻撃が再度開始された！カイリキーも先ほどと一緒に技で応戦する。

その時、ヘルガーがルチャブル達の所に行った。

『お前達、仲間になるならカイリキーを倒せ。それぐらいは出来るだろう？』

『わかった。俺に任せろ』

『俺も仲間になるんだ。任せてくれ』

ルチャブルとゴロンダは共に前に出て行き、一斉攻撃の包囲網の少し後ろに陣取った。

『行くぞルチャブル！』

『いつでも来い！』

ゴロンダはルチャブルを持つと思いつきカイリキー目掛けて放り投げた！

『ブレイブバード！』

ルチャブルは投げられた瞬間に技を発動し高速でカイリキーにつっこんだ！

カイリキーは咄嗟に両腕をクロスさせ攻撃を防ぎ、残りの2本腕で反撃しようとしたとき、周りの一斉攻撃が来た！ルチャブルはバツクステップをし攻撃範囲から離脱した。

カイリキーは直ぐに4本腕で攻撃を相殺しようとしたが、

『ギガインパクト〜！』

ゴロンダがギガインパクトで突っ込んできた！

周りにいたポケモン達は接近に直ぐに気付き躲したが、カイリキーは攻撃を相殺する事に必死でゴロンダに気付いていない！ゴロンダはそのままカイリキーに突っ込み攻撃を当てた！

この攻撃でカイリキーは壁に激突し、周りに居たポケモン達の一斉攻撃が再び始まった！

この攻撃は防ぎきることは出来ず、カイリキーは倒れた。

この後直ぐにジムリーダーであるビオラが駆けつけた！

「みんなをよくも！出て来てウルガモス！」

『お前達、俺の仲間を・・・許さない!』

ウルガモスは直ぐに熱風を放った!

その攻撃はプテラが竜巻を発生させ相殺した。

「強い!?ならば!ウルガモス、擬人化よ!」

『はい!』

『そうはさせない!神速!』

擬人化の光りが出る前に神速を使いプテラがウルガモスを攻撃しそのまま壁に叩き付けた!

『この距離なら外すことは無い。岩石砲』

プテラはウルガモスの目の前で岩石砲を発射し倒した。

「そんな!?戻ってウルガモス!」

ビオラがモンスターボールをウルガモスに向ける瞬間、ヘルガーがモンスターボールを噛み砕いた!

「きゃ!!あ・・・モンスターボールが!!」

『これでもうウルガモスは戻せないぞ』

ヘルガーはビオラの前に立ち、そう言った。

ビオラは直ぐに別のモンスターボールを出そうと腰にあるモンスターボールに手を伸ばしたが、

「モンスターボールがない!」

『残念だったわね、貴方のモンスターボールは私が奪い取ったわ』

ビオラの後ろに笑いながらそう言ったのはマニニューラだった!

「私のモンスターボール返して!」

『ダメよ。ヘルガー様!これを!』

マニニューラは高速移動を使い瞬時にヘルガーの隣に戻りビオラのポケモンが入っているモンスターボールを渡した。それをヘルガーは噛み砕きモンスターボールを破壊。中のポケモンは野生となり出て来た!

『あれ?野生化してる?』

『どうなってんだ?』

『お前達に問う。ブレイン様の計画に参加する者は俺達の仲間として迎え入れよう。拒否をすればここで倒す』

ヘルガーが手短かに計画の内容を説明し、解放したポケモン達の答えを待った。

『俺はビオラの矛だ。お前達に付いて行くことは無い!』(ドラピオン)

『俺はビオラの盾だ。お前達に付いて行くことは無い!』(ハガネール)

『私もビオラの矛よ! 貴方達に付いて行かないわ!』(クチート)

『私もビオラの矛なのよ? 付いて行く訳無いじゃない』(ミロカロス)

『俺もビオラの矛だぜ! 忘れちゃ困る! 無論、付いて行く気もない!』

(オンバーン)

ビオラのポケモン達は野生に還ってもビオラからは離れないと言っている。

『そうか。残念だ』

ヘルガーは悲しそうにそう言い、戦闘態勢に入った。

ヘルガーの仲間も皆戦闘態勢に移った。

『皆、勧誘は失敗。敵を排除する!』

『『はい!』』

『皆、戦うよ!』

『『はい!』』

ハクダンジムの攻防戦が始まる!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十六話

百二十六話

ハクダンジム防衛戦

☆ビオラVSヘルガー率いるポケモン軍団☆

『お前ら一斉攻撃だ！』

「私達も一斉攻撃よ！」

ビオラとヘルガーはそれぞれ仲間達に指示し攻撃に移った！

「ドラピオン、クロスポイズンクロー！」

ハガネール、ラスターカノン！

クチート、ムーンフォース！

ミロカロス、ハイドロポンプ！

オンバーン、爆音波！」

『サイコカッター！』（エルレイド）

『オーバーヒート！』（ブルーバーン）

『ラスターカノン！』（ジバコイル）

『雷！』（エレキブル）

『破壊光線！』（ムーランド）

ヘルガー達のポケモン軍団は的確に相手の弱点属性の攻撃で押し返しビオラのポケモン達にダメージを与えた！

『今だ！突撃〜!!』

『『ギガインパクト！』『』（ケンタロス×2）（プテラ）（カビゴン）（ムーランド）

「ハガネール！守るを発動して！」

『おつとくそうはさせないぜ？エルレイド頼んだぞ』

『お任せを。フェイト発動！』

ハガネールが守るを発動しようとした時、エルレイドのフェイトが炸裂！

守るを発動出来なくなり攻撃を受けた直後エルレイドは直ぐに後退し突撃してくる仲間達に進路を譲った。

その突撃部隊はビオラのポケモン達全員を攻撃しジムの壁ごと破壊し戦闘不能にさせた！

「そんな!!」

『後は貴女だけです。スリーパー頼みましたよ』

『お任せください。サイコキネシス』

スリーパーはサイコキネシスでビオラを浮かばせると民間人を閉じ込めている牢屋へと連れて行った。

その時ビオラは助けると連呼していたが自分達の仲間になろうとしなかった者には容赦はしない。

ヘルガーはビオラの元ポケモン達に歩み寄り、もう一度あの言葉を贈った。

『お前達にもう一度だけ問う。ブレイン様の計画に参加する者は俺達の仲間として迎え入れよう。拒否をすればここで倒す』

ビオラの元ポケモン達は下を向き、歯を食いしばっている。

参加すれば自由が得られるが、拒否すれば自由は無いと言う事は皆解っているからだ。

『ドラピオン。お前からいい。返答はどうだ？参加か？それとも拒否か？』

ドラピオンは数秒悩み決断した。

『自由が無いのは辛い。だが、俺はビオラに忠誠を誓っている。お前達には付いて行かない。俺を捕まえたければ掴まれろ』

ヘルガーがスリーパーに首で指示すると隣に来てサイコキネシスを掛けた。

そのままポケモンの牢屋に連行した。

『次はハガネール。お前だ』

『その前に少し聞かせてくれ。お前達はポケモンを解放するために動いているのだろうか？拒否する奴等を捕まえて何をする気だ？後、トレーナー達はどうか？』

『そりゃあ勿論、従わない者建ちにはブレイン様の計画の生け贄になつて貰うさ』

『生け贄!?!』

ヘルガーはブレインの計画で拒否さればどうなるか細かく教えた。拒否したポケモン達は、ブレイン様が開発した【神支配マシン】のエネルギーにするために必要なエネルギーを拒否したポケモンから奪いとり、神を仲間にしこの地方の完全な王となる為の生け贄になって貰う。

トレーナー達は皆、地下牢に閉じ込められなくする。

有能なトレーナーにはポケモン達のご飯を作って貰う。勿論、ポケモン達の監視有りのだが。

ハガネール達はこの説明を聞き驚愕した。拒否すれば神を支配するマシンの生け贄になるだなんて助かる事はない。それならこいつらの仲間になってタイミングを見計らいピオラを助けに行つた方がいい。

『わかった。ならば俺はお前達の仲間に加わろう。神の生け贄なんてごめんだ』

『そうか。ならば歓迎しよう！ようこそ我がヘルガー隊へ！』

ヘルガーはハガネールを招き入れ、仲間を呼びアジトへと連れて行かせた。

『後はお前達だが？誰から聞こうか』

『私も貴方の仲間になりますわ』

『ほう。ミロカロスからそう言うとはな。だが、仲間になるなら歓迎しよう！』

ミロカロスもヘルガーの仲間とアジトへと連れて行かせた。

『仕方が無いか。俺達も仲間になるぜ。これから頼むわ』

『そうかそうか！それならばドラピオン以外は我らの仲間だな！歓迎しよう！』

残りのピオラの元ポケモン達はヘルガーとバシヤーマとヘルガー達の数匹連れてアジトへと連れて行つた。

プテラとその残りのポケモン達はハクダンシティをくまなく探し、トレーナーやまだ仲間になっていないポケモンを勧誘するように命じた。

ヘルガー隊のアジトはハクダンの森で、その森の出入り口はトリデ

プスとアーマルドが守っている。空はピジョットやアメモース、ビビヨンなどが見守っている。

『ここが俺達のアジトだ。皆と仲良くしろよ』
『はい』

クチート達は周りを見渡しながら本当にここはハクダンの森なのか少し戸惑っていた。

緑豊かな感じは一緒だが、周りの木が多いし、こここの場所・・・中心だと思ふ場所は木のドームで囲まれている。

ヘルガーはその木の台座みたいな場所で寛いでいるし、プテラはこのドームの上で居座っているし・・・

緊張感が凄い・・・

『少しは落ち着けばいいだろう。お前達は仲間なんだから』

『そ、そうですね』

クチートとその仲間達はまだ違和感が残りながらもドームを出て森の中を散歩する事にした。

暫く散歩してかたドームに戻るとヘルガーが待っていた。

『散歩は済んだか？お前達が落ち着かない理由を考えていてな。仕事に欲しかったんだろう？』

『え？』

クチートとその仲間達はびっくりしてしまった。

『やはりそうか！すまんかった。では早速仕事を与えるのでしつかり仕事をしてくれ！』

オンバーンはプテラの副官として一緒に仕事をしてくれ。

クチートは森の出入り口の警備のトリデプス達と仕事をしてくれ。

ハガネールはこの森の地下の警備をダグトリオ達と仕事をしてくれ。

ミロカロスは新しく出来た湖の調整をシャワーズと仕事をしてくれ。

ウルガモスは空の警備をピジョット達と仕事をしてくれ。

以上だ。何か分からない事があれば聞いてくれ』

ヘルガーは満足そうそう言い、各担当のポケモン達を呼び出し、連

れて行かせた。

ヘルガーは再びハクダンシティへと向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十七話

百二十七話

同時刻シヨウヨウシティにもポケモン軍団が街攻撃していた。

町は既にポケモン達により民家に住んでいたトレーナー達のポケモン達は野生に還っていた。

残りはジムにいるトレーナーとジムリーダーのポケモン達だけとなっていた。

ブレインがここに送ったポケモンは、カメックス、デンリユウ、ボスゴドラとその他のポケモン達だ。

『ジムを破壊するぞ！ハイドロカノン！』

『雷！』

『ラスターカノン！』

3体の一斉攻撃はジムの壁を破壊した！

その破壊された壁から4人の黒服の男達が出て来た。

「貴様ら！扉でトラップ仕掛けていたのに壁を壊すと反則だろ！」

『知らんな』

「んだと〜！出てこいライボルト！」

「お前も行けジュペッタ！」

「お前もだ！ハガネール！」

「出番だ！ネイティオ！」

※ライボルト※【電気】

たてがみから放電している。頭上に雷雲を作り稲妻を落として攻撃する。

※ジュペッタ※【ゴースト】

捨てられたぬいぐるみに怨念が宿りポケモンになった。自分を捨てた子供を探している。

※ハガネール※【鋼・地面】

地中の高い圧力と熱で鍛えられた体はあらゆる金属よりも硬い。

※ネイティオ※【エスパー・飛行】

過去と未来を見通せる。毎日太陽の動きを見続けている不思議な

ポケモン。

この者達はこのジムの警護の者だな。

ポケモン達の少しは鍛えられているが俺達の方が上だ。

「先手必勝だ！ライボルト、雷！」

「ジユペツタ、シャドーボール！」

「ハガネール、ラスターカノン！」

「ネイティオ、未来予知」

カメックス達は直ぐに攻撃に移った。

『雷は俺が盾となる！』（ハガネール）

『助かる！悪の波動！』（ドンカラス）

『大文字！』（バクーダ）

『神速』（ウインディ）

ライボルトの雷はハガネールがその身を持って盾となり攻撃を防いだ！

だが、ハガネールには電気タイプへの攻撃は通じない。地面タイプは電気技を無力化出来るからだ！

ジユペツタのシャドーボールはドンカラスの悪の波動で押し返しジユペツタを攻撃して吹き飛ばしジムの壁に激突！ジムの壁が崩れジユペツタは瓦礫の下敷きになった。

相手のハガネールのラスターカノンはバクーダの大文字により速攻押し返しハガネールを攻撃して戦闘不能にさせた！

ネイティオの未来予知は先に神速で攻撃したウインディがネイティオを吹き飛ばした事により技は失敗、更にジムの壁に激突！ジムの壁が崩れネイティオも瓦礫の下敷きになった。

『残りライボルトだけだ！全員総攻撃！』

『『『おうー！』』』

カメックスはハイドロポンプ

デンリリュウは龍の波動

ボスゴドラは破壊光線

ドンカラスは悪の波動

ウインディは大文字

バクーダは噴火

「くっ!?ライボルト!守る発動!」

ライボルトは直ぐに守るを発動・・・

『そうはさせない!フェイト!』

近くの木からバトルを見ていたりオルがフェイトを使い、守るを邪魔した!その後リオルは直ぐに後退して技の範囲外に離脱。その後直ぐにライボルトは一斉攻撃を受けることになった。

※リオル※【格闘】

体から発する波動は怖いとき悲しいときに強まりピンチを仲間に伝える。

「ライボルト!!ちっ!?戻れライボルト!」

他の者たちも直ぐにモンスタールボールをポケモンに向け戻そうとしたとき、その光りはポケモン達に届く前に消えた。

『その行為はさせない!大地よ、ポケモンを囲え!断崖の剣!』

ドーブルがグラードンの技【断崖の剣】をスケッチして手に入れた技でポケモンを戻される前に岩で遮った!

※ドーブル※【ノーマル】

尻尾を筆のように使って縄張りをマークで搔く。その種類は500以上。

※グラードン※【地面】

カイオーガと死闘の末に永い眠りについた。大地の化身と言われる伝説のポケモン。

※スケッチ※【ノーマル】

自分以外が使った技をスケッチし、自分も使えるようにする。

※断崖の剣※(だんがいのつるぎ)【地面】

地面から無数の岩の剣を出す。急所に当たりやすく高威力技。

「てめえら!良くもやってくれたな!いけモンスタール!GETしてやる!」

技を使い疲れてしまったドーブルに黒服の男性がモンスタールを投げってきた!

『させるかよ!砕け散れ!破壊光線!』

カメックスがダブルに飛んでいくモンスターボールを破壊光線で木つ端微塵に砕き、そのまま破壊光線を放ちながらそのトレーナーに放った！

「や、やめろ〜!!!」

トレーナーの声はその以降は聞こえなくなった。周りに居たトレーナー含めて……

破壊光線はそのままジムを崩壊させた。

『ありがとうございます！カメックス様！』

『大丈夫みたいだな。良かった』

カメックスは戦闘不能になり動けなくなったポケモン達に歩み寄りこう言った。

『お前達に問う。ブレイン様の計画に参加する者は俺達の仲間として迎え入れよう。拒否をすればここで潰す！』

カメックスは手短に計画の内容を説明し、解放したポケモン達の答えを待った。

『俺は参加しないぞ』

『そうか。残念だ……』

ガチャン！

カメックスの甲羅から生えている砲台がライボルトを捕らえた。

『さようなら……(破壊光線発射)』

この瞬間、ライボルトの姿は永遠と見ることは無くなり、大穴が空く事になった。

『貴方達の仲間にならせてください！』

『俺もお願いします！』

『俺も！』

残りの3体は今の光景を見て、直ぐに仲間に加わることにし命を助けて貰うのと一緒に仲間に加わった。

その後直ぐにジムの瓦礫の中からジムリーダーのザクロが傷だらけで這い上がって来た。

「いたたた……誰だよ俺のジムを壊すのは」

ザクロは目の前の光景を見て感づいた。

「あくなるほどな。まあ、お前達が攻めてきてるならこうなるのも必然か。お前達のボスに会わせろ」

ザクロは腕組みをしながらそう言い、返答を待った。

『ボスに会いたければ俺達を倒す事だな』

「そうか。ならばそうしよう！覚悟しろ！出てこいお前達!!」

ザクロは手持ちのポケモン達を一斉に戦闘に出した。

アマルルガ【岩・氷】

ガチゴラス【岩・龍】

アバゴーラ【岩・水】

メレシー【岩・妖】

プテラ【岩・飛行】

テラキオン【岩・格闘】

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十八話

百二十八話

「お前達！一斉攻撃だ！」

アマルルガ、冷凍ビーム！

ガチガロス、龍の波動！

アバゴーラ、ハイドロポンプ！

プテラ、岩石砲！

メレシー、ムーンフォース！

テラキオン、波動弾！」

『皆！押し返して戦闘不能にさせろ！』

『『はい！』』

カメックスの周りに集まっていたポケモン達が直ぐに陣形を組み技を放った！

『大文字！』（ギャロップ）

『ムーンフォース！』（トゲキッス）

『雷！』（シビルドン）

『気合い玉！』（チャーレム）

『ラスターカノン！』（ドータクン）

『暴風！』（オンバーン）

※ギャロップ※【炎】

全力で駆け抜けるとき燃えるたてがみが煌めいてよりいつそう美しく見える。

※トゲキッス※【妖・飛行】

お互いの存在を認め合い無駄に争わない人のために様々な恵みを分け与える。

※シビルドン※【電気】

吸盤になっっている口で張り付いて牙を差し込み強力な電気を流す。

※チャーレム※【格闘・エスパー】

ダンスのような優雅な動きで攻撃を躲して強烈な一撃を相手にお見舞いする。

※ドータクン※【鋼・エスパー】

雨雲を呼べるポケモンとして大昔から祀られていた。時々地面に埋められている。

※オンバーン※【飛行・龍】

月明かりすら無い闇夜を跳び油断している獲物を襲う。暗闇の戦いでは無敵だ。

ポケモン達はそれぞれ得意な相手を選び技を放った。

アマルルガの冷凍ビームはギャロップの大文字により押し返されアマルルガを攻撃した。

だが、アマルルガのタイプは岩タイプ。炎では相性は悪い。効果はいまひとつになり倒す事は出来なかったが後退はさせた。

ガチゴラスの龍の波動はトゲキッスのムーンフォースにより簡単に押し返されガチゴラスを攻撃した！

ガチゴラスはこの攻撃により戦闘不能になった。

アバゴーラのハイドロポンプはシビルドンの雷によって押し返されアバゴーラを攻撃し戦闘不能にした。

プテラの岩石砲はチャーレムの気合い玉で相殺。押し返すことは出来なかった。

メレシーのムーンフォースはドータクンのラスターカノンで押し返しメレシーを攻撃、戦闘不能に出来た。

テラキオンの波導弾はオンバーンの暴風により波導弾ごと押し返しテラキオンに攻撃しようとしたが、テラキオンは咄嗟に聖なる剣を発動し、波導弾を相殺したが、暴風の攻撃は防ぐことが出来ず攻撃を受けた。

だが、伝説であるテラキオンはそう簡単には倒れない。

「結構強いな・・・戻れお前達」

ザクロは腰のモンスターボールを取り出し戦闘不能になったポケモン達を戻そうとしたが・・・

『そうはさせないぜ。黒いまなぎしー！』

※黒いまなぎし※

相手は戦闘では逃げることに、手持ちに戻る事が出来ない。

クロバットがザクロのポケモン達に技を出し、手持ちに戻させないようにした。

「ちっ！ならば倒すまで！テラキオン、聖なる剣で相手を蹴散らせ！アマルルガ、光りの壁でサポートだ！」

『了解！』

アマルルガは直ぐに光りの壁を発動し、テラキオンは聖なる剣を発動し、カメックスに向かって行った。

『チャーレム、光りの壁を破壊しろ。テラキオンは俺達が袋だたきにしてやる』

『かしこまりました。瓦割り』

チャーレムは瓦割りを発動し、光りの壁を砕いた！

その後直ぐにカメックス達の一斉攻撃が始まる。

『サイコネシス！』（フリーデン）

『ハイドロカノン！』（カメックス）

『大文字！』（ギャロップ）

『断崖の剣！』（ドーブル）

『岩雪崩れ！』（ゴローニャ）

フリーデンが迫ってくるテラキオンをサイコネシスで動きを止め、カメックス率いる一斉攻撃でテラキオンを総攻撃し戦闘不能にした。

「なに!?アマルルガ！破壊光線！」

ザクロはとにかく1体でも多く敵を倒すために近くにいたポケモンを狙わせ破壊光線を使わせた。

そのポケモンはソーナンス。

『その攻撃、倍にして返すぜ。カウンター！』

※カウンター※

相手の攻撃を倍にして跳ね返す。

ソーナンスは破壊光線をカウンターで跳ね返し、アマルルガに攻撃した！その攻撃によりアマルルガは戦闘不能になった。

「く!?お前ら！覚えてろよ！」

ザクロはポケモン達から逃げるように逃げ出したがポケモン達は

それを許すわけがない。

『逃がすかよ。サイコネシス!』

フリーデンが直ぐにサイコネシスを使いザクロを捕らえカメックスの前に連れて来た。

「離せよ!」

カメックスの背中の砲台はきつちりとザクロに向いている。

『お前はいらぬいな。さよならだ』

「そうだろ!だから速く離せ!」

ザクロはそう言い、苦笑いしながら話したが、カメックスの砲台からはエネルギーがチャージされていく。

「おい?冗談は止そうぜ?」

ザクロも笑うのを止め、言葉を掛けたが・・・

『言つたろ?お前はいらぬいな。さよならだ(破壊光線発射)』

カメックスの砲台から破壊光線が発射された・・・

その攻撃がザクロに当たる直前、空から白い光線が降ってきて破壊光線を相殺した。

『誰だ!』

カメックス達は直ぐに上を向き敵を探したが見当たらない。再びザクロの方を見ると消えていた。

『くそ!逃がしたか!!お前からあいつを探せ!後、そこのお前ら、俺達の仲間になるなら命は助ける。嫌なら消えろ』

カメックスはザクロのポケモン達にそう言い、答えを促した。

『仲間にならせて頂きます』

全員が一緒の返答でカメックスの仲間に加わった。

カメックスは従わない者は消し、従う者だけを活かしているので『神支配計画』のエネルギーが殆ど溜まっていない。それをヘルガーが頑張つて補っている。

カメックスはバトル好きで砲台から発射される光線系はとても強い。

その攻撃を相殺した者はカメックス並の強さを持つ事になる。カメックスは絶対にそいつを見付け仲間にする。勿論、断れば消しつ

りだ。

『ぜってえく見付けてやる…』

カメックスはそう言い捜索を開始した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百二十九話

百二十九話

俺を直前で助けた者は今、俺の目の前にいる。

「俺を助けてありがとう。助かった」

『お前にはまだ仕事があるからな』

その者は見たこともない姿の人間だった。

「あなたの名前を伺っていていいですか？あ、俺はザクロ。助けてくれた町のジムリーダーだ」

『俺はシンテイ。この地方を裏から見守っていた神だ』

※シンテイ※【全能神】（人間）

カロス地方の裏でこの地方を見守っていた神。

ブレインの神支配計画を知り、シンテイも動き出した。

見た目は色白の長身の男性。

コートは銀色と結構明るい色を羽織っている。

声は結構低い感じだ。

人間でありポケモンでもある。

擬人化では無いのでそこは注意。

カロス地方の裏の神様？

俺・・・凄い方に助けてもらっちゃったな・・・

「助けて貰って悪いけど何で俺を助けた？」

『お前にはやって貰う事がある。その為だ』

シンテイはそう言うのとザクロの手を掴むとテレポートした。テレポート先は・・・

「おい！ここって!!」

『んだあ〜？ってお前か！さっさと殺されろ！』

カメックスの前がテレポート先だった！しかもカメックスの砲台からエネルギーがチャージされている！

『死ねえ〜!!』

「うあああああああああ！」

カメックスが破壊光線を撃ち、俺は必死に両手を前に突き出した！

すると！

破壊光線はザクロが突き出した両手から左右に分かれザクロを通り過ぎて行った。

『これが貴方の力です。『技を避けさせる力』それを貴方に与えました』

シンテイはそう言うのと俺を残して消えた。

「ちよ！ちよつと待つてくれよ！」

『調子になるな人間が!!オリジナルを味わうがいい！メテオパニツシャー!』

※メテオパニツシャー※【光・炎】

高濃縮した光りの玉を発射する。

カメックスの砲台から眩しい光の球体が発射された！

「シンテイから授かった力、発動！」

ザクロは両手を前に突き出しメテオパニツシャーが来るのを待った。

『嘗めるなど言つたら人間！爆発せよビッグバン!』

カメックスは勢いよく地面を殴り、ザクロの立っていた地面が大爆発を起こした！

「ぐはっ!!」

下からの攻撃は全く予想していなく高く飛ばされた！その場所には先ほど放たれたメテオパニツシャーが!!

「くっ!?!この攻撃だけでも!!」

メテオパニツシャーが当たる寸前、ザクロは両手をなんとか前に突き出し、メテオパニツシャーからの攻撃を避けさせた。

『しぶとい奴め。だが、エネルギー最大チャージ開始』

カメックスは砲台にエネルギーを溜め始めた。

ザクロは落下中……

「あいつ何する気だ……」

『この一撃でお前は未来永劫消える！さらば人間!!!』

カメックスの砲台がザクロを捕らえる！そして……

『消え失せるーボルメテウス!!』

※メテオボルメテウス※【炎】

超高濃縮した炎の熱線を発射する。

当たった場所は炎の力で溶けて無くなる。

温度はマグマよりも数倍上。

カメックスの砲台から技が発射される前、カメックスの仲間達が技をサポートした！

『岩石封じー』（ゴローニャ×3）（トリデプス×3）

この技でカメックスの足場を補強し、地盤を固める。

『ステルスロックー』（アーマルド×2）（ユレイドル×2）（アマールガ×2）（ガチゴラス×2）

この技でカメックスの砲台を補強し、強い力の負担を軽くさせる。

更にステルスロックの技で砲台の形を作り、そこに技のエネルギーを移し変えた事によりカメックスの負担を更に軽くさせる。技の威力は勿論変わらない。

『日照りー』（コータス×3）（バクーダ×3）

ステルスロックで造った砲台の中で日照りを発生させる。

炎の威力を上げる能力を持っているが、砲台の中は狭い。そのせいで砲台自体が高温状態になり炎の威力を更に増加させる。

『癒やしの波動ー』（トゲキッス）（ハピナス）（プクリン）

カメックスの体力を回復させる。

『手助けー』（プラスル）（マイナン）

この技により攻撃は急所に当たりやすくなり威力を増加させる。

『ハードメタル』（ハガネール）（エアムード）

鋼鉄より堅い鋼を作りだしカメックスに装着させる。

炎の熱さにも耐えられる使用にしているのと、動きやすさにも拘っているので動きやすい。

※ハードメタル※【鋼】

鋼鉄より堅い鋼を作りだす。

その鋼は作り出した時は柔らかいので形を変えられる。数秒経つと固まる。

このサポートによりカメックスは更に出力を出せた状態で技が発射された！

その発射の影響はカメックス自身にも及んだがサポートにより耐えられる。

岩石封じで足下を補強し、反動を軽くしていた筈なのにカメックスの技の威力が強すぎて補強が崩れかける。

『お前達も手伝ってくれ！』

『『はい！』』

『岩石封じ!!』（岩タイプ一同）

カメックスの足場をその場に居た岩タイプのポケモン達、総勢50匹がカメックスに岩石封じを使い足場を補強した！そのおかげでカメックスの足場は完全に安全になり後ろに下がることは無くなった。カメックスの放ったメテオボルメテウスはザクロに真っ直ぐ進んだ。

「技よー避ける!!」

ザクロは空中でなんとか体勢を立て直し、両手を前に突き出した！その瞬間、超高濃縮された熱線がザクロを遅う！

ザクロの両手の前を熱線が避けて行くが、熱さはマグマを超えている。皮膚は凄い火傷になり凄い痛みが襲う。

カメックスの熱線は数秒経った頃に漸く収まり技を止めた。

熱線が終わった時には黒焦げ状態のザクロが地面に落下し亡くなった。

技は避けさせたが熱さは避けさせる事が出来ない。カメックスの勝ちだ。

『人間。お前の負けだ』

カメックスはそう言い、ザクロを消した。

その頃ショウヨウシテイ上空ではシンテイがいた。

『流石にぶつつけ本番では使い切れないか。それにしても容赦ないな』

シンテイはふと思いついたみたい手を軽く叩くと・・・

『そうだよ。雷を落とすしちやえばいいんだ！そうすればあいつの吊いになるだろう。そう言えばブレインと言う男、どこにいるんだ？』

シンテイは少しだけ考えると・・・

移動を開始した。勿論、雷を発生させた後に・・・

『カメックス様！空の様子がおかしいです！』

『見りや分かる！どうなっているんだ？』

シヨウヨウシティ周辺の空模様が急に変わり、雷が鳴り響いている。

『おいおい。ここ危くないか？』

『速くこの街から逃げましょう！』

その時だった！

鳴り響いていた雷がカメックス目掛けて落ちてきたのだ！

『はあ!? 守る発動！』

カメックスは直ぐに守るを発動し直撃を避けたが、先ほどまで話していたボスゴドラが黒焦げ状態で亡くなった。

その後、更に雷がカメックス目掛けて落ちてきた！

『どうなってやがる！ 守る再発動！』

守るは連発すると失敗するがカメックスは守るを強化するため修行している時に守るを2回連続で使えるようになっていた。

雷を再度防いだ時、雷がカメックス以外の場所に降り注いだ！

シヨウヨウシティの至る所に雷は落ち、町は厄災に包まれ、ポケモン達は重傷したり黒焦げになり亡くなったりした。

『あの雷雲の中に何かあるのか？』

カメックスは考えるより先に行動しようとし、砲台から破壊光線を放った！

だが、破壊光線は雷雲に届く前に雷に辺り押し返された！

『なごう!』

カメックスは破壊光線の反動により動けないでいた！

『カメックス様〜！』

その時だった。壊れた建物の中からデンリユウが現れカメックスを押し、雷の直撃を避けさせた。雷はそのままデンリユウに当たり吹き飛ばした！カメックスはギリギリ範囲から外れた。

カメックスは直ぐにデンリユウの方に掛けより状態を確認しようとしたが止めた。

既に黒焦げになり亡くなっていたからだ・・・

『許さねえ〜許さねえぞおおおおお!!!』

カメックスはショウヨウシテイに響き渡る咆哮をしたとき、雷雲の雷はカメックスを仕留めた。カメックスも黒焦げになり亡くなった・・・

その後、このショウヨウシテイは炎に包まれ、生存者は居なくなつた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十話

百三十話

同時刻シヤラシテイではブレインが送り込んだゲンガー、ギャラドス、リザードンとその他のポケモン達が町を占拠していた。

ジムリーダーのゴルニはジムから出ており、シヤラシテイの中央の広場で町中のポケモン達と戦っていた。

「ルカリオ、ボーンラッシュで敵を薙ぎ払え！」

『おう！』

ルカリオはボーンラッシュで周りに群がるポケモンに攻撃しようとしたが、

『甘いわ！守る発動』（ゴローニヤ）

『爆裂パンチ！』（カイリキー）

『ドレインパンチ！』（チャーレム）

『アームハンマー！』（ゴロンダ）

ゴローニヤが直ぐに守るを発動し、ルカリオの攻撃を防いだ瞬間、ゴローニヤの後ろにいた3体が一齐に反撃してきた。

爆裂パンチとドレインパンチはボーンラッシュの骨で受け止めた時、アームハンマーを振り下ろされたが、バックステップで躲し、直ぐにボーンラッシュで反撃したが、ゴロンダに守るを使われ、一度距離を取った。

「なかなか上手くないわね・・・おっと!？」

油断した時後ろからエアームドに襲われたが右に避けて攻撃を躲した。躲した場所には技を構えているポケモンがいる！

「出て来てルチャブル！瓦割り！」

『はっ！』

「ルカリオはインファイトでゴロンダを攻撃！」

『おう！』

ルチャブルはボールから出た後直ぐに技を構えているポケモン達の足下を狙い瓦割りで攻撃した！

技を構えていたポケモン達は体勢を崩し地面に倒れ込んだ。

ルカリオはゴロンダにインファイトを当て、戦闘不能に出来た。その後直ぐに、横からゴローニヤの岩雪崩れが襲ってきたのをボンラッシュを発動し両手で地面を思いつき突き刺して上空にジャンプした。

「今よールカリオ、波導弾！」

『オラア！』

ルカリオは空中で波導弾をゴローニヤに向けて放った！

『俺を忘れちゃダメだぜ？ドラゴンクロー！』

ゴローニヤに波導弾が当たる直前、リザードンがドラゴンクローを使い波導弾を弾き返した！

波導弾はルカリオに向かって行く！

『ボンラッシュ！』

ルカリオは直ぐにボンラッシュを使い波導弾をたたき割り、地上に着地した。

「強いわね」

『そうですね』

『数が多いぜ・・・』

リザードン達は既に陣形を立て直しており攻撃に転じた！

『お前達！一斉攻撃開始だ!!』

『『おう！』』

リザードンのかけ声と共にポケモン達の地上と空中の一斉攻撃が始まった！

「ルチャブル、ルカリオ！一度撤退するよ！出て来てチャーレム！テレポート!!」

『『はー』』

ルチャブルとルカリオは直ぐにコルニの側に行き、チャーレムのレポートで戦闘を離脱した。

その瞬間、一斉攻撃がコルニ達が居た場所を襲う。後少しでも遅ければ当たっていた・・・

『逃げられたか。グラエナ、ポチエナ。臭いで居場所が解るか？』

『今の攻撃で土埃が激しく臭いで検索は出来ません』

『そうか。』

リザードンはそう言うのとシヤラシティの上空に飛んだ。

その後、シヤラシティを一望した後、

『飛行・龍タイプは俺に付いて来い』

そう言い、山の方へと飛び去った。

飛行タイプと龍タイプのポケモン達は少し遅れて付いて行った。

地上のポケモン達も少数で付いて行き、残りのポケモン達はシヤラシティの警備に回した。

「ふく危なかった〜！チャールムありがとう」

チャールムがテレポートした先はシヤラシティの側にある山の頂上。

結構距離があり、体力が半分近くまで消耗したが戦闘はまだ出来る。

『助けられて良かったですが、こちらに向かってくる反応があります』

チャールムはその反応がある方に指を指してコルニに教えた。

その場所には先ほどのポケモン達を束ねていたりザードンに空を飛ぶポケモン達……

「そんな……チャールム！回復の薬を使うからもう一度テレポートを使つて！」

『かしこまりました』

「ルカリオ達は一度モンスターボールに戻つて！」

コルニはそう言うのとルカリオとルチャブルをモンスターボールに戻し、チャールムに掴まった。

『テレポート！』

その数分後リザードン達が山に到着したがもう誰もいない。

『逃がしたか……皆、すまない。戻るぞ』

『はいー！』

リザードンとその仲間達はシヤラシティに戻っていった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十一話

百三十一話

同時刻、ヒヨクシティではブレインが送ったカイロス、チャーレム、ガルーラとその他のポケモン達で町は9割まで占領した。

残りの1割はこのジムリーダーでは無く、その補佐を務めている者が持ちこたえていた。

「はあはあ・・・なんて数のポケモン達だ。倒しても切りが無いぞ」
『流石にキツイですね・・・ジムリーダーが来るまで持ちこたえましよう！』

そう言ったのはジムリーダーの補佐であるジファアと言う白髪のおじさんと、その相棒のハッサムである。

『おいおい。お前本当に人間か？これだけの大群を相手にしてるのに何故倒れない？』

「希望があるからだ！ハッサム！シザークロス！」

『はい！』

『希望ね・・・メガトンキック！』

ハッサムのシザークロスをチャーレムがメガトンキックで押し返した！

「ハッサム！影分身だ！」

『はっ！』

ハッサムは直ぐさま影分身を使おうとしたが、

『封印！』

※封印※

自分が持っている技を使えなくさせる。

いつの間にかいたユキメノコが封印を使い技を封じた！

「面倒な事を！ハッサム！メタルクローに切り替えて押し返せ！」

『はい！』

ハッサムは直ぐにシザークロスからメタルクローに切り替え、押し返そうとしたが、

『俺の仲間を忘れちゃ困るぜ？』

チャーレムが首を横に向けた瞬間、光線がハッサム目掛けて放たれた！

ハッサムは避ける事が出来ずに攻撃が当たり爆発し煙を上げながら地面に倒れた。

「ハッサム!?!」

『申し訳・・・あり・・・ません・・・』

ハッサムは戦闘不能になり起き上がらない。

「ハッサム、ボールに戻れ」

ジファはハッサムをモンスターボールに戻そうとしたがそれはかなわなかった・・・

腰にあるはずのモンスターボールが無くなっていったのだ！

「な!?!モンスターボールが無い!?!」

『残念だったな。お前のボールはここだ!』

ガルローラは足下にあるモンスターボールを踏みつけ粉々に粉碎した。

「何て事を!」

『ポケモン完全自由計画の邪魔な物は全て排除する!』

ガルローラはジファに突貫した!

『お前はここで消えろ!爆裂パンチ!』

ジファは咄嗟にしゃがみ紙一重でガルローラの攻撃を躲した!

「はあはあ・・・」

速くハッサムを回復させなければここで終わってしまう。

『まだまだああああ!』

ガルローラの二度目の攻撃が来た!

ジファは攻撃の軌道を読み取ろうと集中した時だった!背中に激痛が走った!?!

「ぐはっ!」

その激痛と共にジファはガルローラの方に飛ばされガルローラの攻撃を腹に受けた。

「がはっ!?!」

ジファはその場で倒れた。

『ガルーラ、お前だけ良いところは渡さないって言つたろ?』

『むく俺だけで決めたかつた』

カイロスはそう言い、自慢のハサミをで倒れているジファアを持ち上げ、

『こいつもあの計画に使う材料だろ?消す前に力だけでも奪つておこ
うぜ?』

『それもそうだな。よし、連れて行こう。お前達、ここは頼んだぞ』

『『はい!』』

ガルーラとカイロスはある施設にジファアを連れて行った。

その施設はカロス発電所・・・

『さあ、この首輪を付けろ。ああ、勿論抵抗すれば灼熱の釜に入って貰
うがな』

灼熱の釜・・・この施設に新たなに造られた拷問用の釜だ。肌が焼
け焦がれて最終的には溶ける。

『こんな古いぼれに出来ることはもう無いじやろう?解放してやれカ
イロス』

突如上の高台の方から聞き覚えのある声がした。ジファアは直ぐに
上を向くとそこには、希望があった。

『フクジ様!』

『ジファアよ。今までご苦労だった。町を守ってくれてありがとう。だ
がな・・・』

フクジの優しい顔は厳しい顔に変わった。

『ポケモン完全自由計画の邪魔はしないでくれたまえ』

フクジは高台から飛び降りジファアの前に降り立った。

『私は!私は貴方が帰って来る場所を守っていただけなのです!信じ
てください!』

『守るね・・・儂はな、もうヒヨクシティには戻らんよ』

フクジは悲しげな顔をした後・・・

『儂は、この新のカロスの王の仲間だ。故に、邪魔者は排除するように
命じられている。もし、儂の邪魔をするなら、ジファア・・・お前も例
外では無いぞ?』

「そんな……では！私もフクジ様の元で働かせてください！」

「ならば……持っているモンスターボールを全て壊せ」

「……はい」

ジファは鞆に隠していたモンスターボールを取り出したその時！

ジファの頭の中に直接声が聞こえた。

『本当に破壊するのですか？貴方の大切なポケモンでしょうか？私が力を貸します』

その声が聞こえた時、ジファの後ろに白銀のポケモンが舞い降りた！

『我がなはスファイア。貴方達の事は見ていましたが、我慢の限界です。ジファ、貴方の大事な物は壊さないで』

※スファイア※【上級神・騎士】

妖精の騎士。

白と青が特徴的な綺麗な翼に剣と盾。

騎士なのだが、見た目は青い妖精。

素早さなら誰にも負けることはない。

「スファイア様。申し訳ありません。大切な物を……自分の手で無くす所でした。私は何を何て事を……」

『あまり自分を責めないで。追い込まれていたのだから。さて……』

スファイアはジファの前に立ち、剣を構えると……

『覚悟は出来てますよね？行きます!!』

スファイアはまずカイロスに狙いを定め、斬り裂きそのまま連撃した後直ぐにガルーラに狙いを定め、剣先から光線を放ちガルーラの体を貫通した。その光線を横に薙ぎ払い灼熱の釜を壊し、足場も崩した。発電所の壁もこの光線により破壊された。

僅か一秒でスファイアはここまでの事をし、更に周りを取り囲もうとしていたポケモン達を全て峰打ちで倒した。

スファイアはカロス発電所のポケモンの粗方を倒したのだ。

残りの少数は裏口から逃げ出していた。

『あく裏口から逃げられちゃった。少し待っててね』

そう言つたと同時にスファイアの姿はいなくなり、頬に風が流れた。

風が止んだときにスファイアは戻ってきた。

『外のポケモン達も一応峰打ちで倒したからもう大丈夫！ジファア？体に怪我はない？』

「大丈夫です。助かりましたスファイア様」

ジファアは片膝を着きスファイアに頭を下げた。

「ジファアめ・・・妖精を召喚したのか」

『いいえ。召喚されたのでなく、自らジファアを助けに来ました。それと、ジファアを虐めた貴方を許しません』

スファイアは右手をフクジに向けた。

『ジファア、少し目を瞑っていてください』

「はい」

ジファアは直ぐに目を瞑ると眩しい光がカロス発電所を包み込んだ！

目を瞑っているのにまだ眩しいので腕で更に目を隠し目を守った。

「目がああああああ!!」

フクジの叫び声が聞こえてきたが、私は動けない。

「ブレイン様・・・」

フクジの最後の言葉は誰かの名前だったが私には分からない。

眩しい光は漸く収まり目を開けられる様になった。

『大丈夫でしたか？お体に支障はありませんか？』

「大丈夫です。フクジ様は倒されたのですね」

『そうです。悪は消さねばなりません。ジファア、ヒヨクシテイにはまだチャーレムとポケモン達で占領されています。倒しに行きましよう』

「はい」

スファイアはジファアの手を掴み、テレポートした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十二話

百三十二話

スファイアと共にヒヨクシティに戻った私は直ぐに戦闘を開始する事になった。

『ジファは下がって！妖精の息吹！』

※妖精の息吹※【妖】

妖精の力を風に乗せ全体を攻撃する。

当たれば魅惑状態になり攻撃が出来なくなる。

スファイアはジファに加護を使用し空中に移動、妖精の息吹を使い、ヒヨクシティ全体を魅了状態にした。

『さて・・・派手に行きますか！』

スファイアは急降下した後、高速でヒヨクシティを駆け巡りポケモン達を峰打ちしていった。

その途中、チャールムを見付けたので峰打ちでは無く、倒した。

僅か三秒でヒヨクシティはスファイアの力で取り返したのだ。

「凄い・・・凄いじゃないかスファイア！」

『えへへへ次は何処に行く？』

「そうだな。とりあえず、隣のシャラシティに行こう。コルニ様に会いに行きましょう」

『了解！』

同時刻クノエシティでは、ブレインが送り込んだルカリオ、アブソル、ヘラクロスとその仲間達の攻防戦が繰り広げられていた。

「タブンネー！ムーンフォース！」

『ラスターカノン！』

クノエシティのジムリーダー、マーシユを筆頭にバトルがあちこちで繰り広げられており、マーシユは野生ポケモンのまとめ役のルカリオとジムの前で戦っていた。

他のポケモン達はマーシユの仲間であるトレーナー達に戦って貰っている。

タブンネのムーンフォースはルカリオのラスターカノンで押し返されるが直ぐにタブンネは回避し、

「火炎放射！」

『波導弾！』

火炎放射を放ったが波導弾で相殺される。

相殺した時に発生した煙の中からルカリオが急に現れた！

『ドレインパンチ！』

「守る！」

ルカリオは勢いよく攻撃してきたが、タブンネの守るにより弾き返される。その時にルカリオは多少よろけたのだが、直ぐにバックステップを取り後退し構えた。

「流石はリーダーって事ね。タブンネ！メガ進化！」

『メガ進化〜！』

マーシユはタブンネをメガ進化させ、ルカリオもメガ進化をした。

「1人でメガ進化出来るとは」

『行くぞ！』

『来い！』

ルカリオは波導を脚に纏わせ瞬発力を上げ、タブンネに突貫した！

「タブンネ！ドレインキッツス！」

※ドレインキッツス※【妖】

相手に与えたダメージの3/4の体力を回復する。

ルカリオは手に波導を纏わせ、ドレインキッツスを弾き飛ばした！そのままの勢いでルカリオは手を硬化させ、

『バレットパンチ！』

『守る！』

ルカリオはタブンネが守るを発動する前に辿り着き、

『遅いな』

バレットパンチをタブンネの顔面に思いつきり殴り、吹き飛ばしジムの壁を破壊して漸く止まった。

「タブンネ!?!」

『波導弾！』

ルカリオは直ぐに波導の弾を作り、タブンネがいる場所に波導弾を連発で撃ち込んだ！

タブンネは瓦礫が上に乗っているので身動きが取れない！無数の波導弾は容赦なくタブンネを襲う！

10発位打ち込んで漸く止めた時にはタブンネはぐったりと倒れておりメガ進化も解け戦闘不能になっていた。

『次はどいつが相手だ？』

「少し待って！タブンネを戻させて！」

『ならぬ。俺達はポケモン完全自由計画の為に動いている。お前が持っているモンスターボールは檻みたいな物だ。俺達には窮屈でしかない』

「確かにポケモン達からすれば檻で合ってると思う。だけど！私はそうは思わない！」

ルカリオは静かに怒る・・・

「ポケモンをGETして、一緒に旅して、一緒に強くなって、一緒に戦う。モンスターボールに体を休める事だって出来るよ」

『体を休めるのも旅もバトルも全部モンスターボールが無くても出来る事じゃないか。ボールはポケモンを手に入れて檻に閉じ込める為の道具。俺達はそんな物に入りたくは無いんだ！』

ルカリオはマーシユの袖に隠しているモンスターボールを波導で捕らえ、波導弾を放った！

波導弾は真っ直ぐにマーシユの袖に向かって行き当たった。

「きゃっー！」

袖に隠しているモンスターボールは波導弾に当たり壊れ、中にいたポケモン達が出て来た。

『あれ？野生化してる？』

『どうなってるんだ？』

マーシユは壊れたモンスターボールを拾い上げルカリオを睨んだ。「よくもやってくれたわね！クレツフィー！ラスターカノンよ！」

マーシユは勢いよく手をルカリオに向けて降りそう言ったがクレツフィーは技を出さない。

「クレツファイヤー？」

『もうマーシユのポケモンじゃ無いからね』

『だそうだぞ？さあ、次は何をしてくれるのかな？』

ルカリオは面白そうにそう言い、マーシユの言葉を待った。

マーシユは出来ることを封じられ何も出来ない。大人しく降参するか助けを呼ぶしかない。

「私はまだ負けた訳じゃない！だれか！助けて！」

『まだだ。ここはもうドータクンにより結界が張られている。声が漏れることも入ることも無い』

マーシユはその場で崩れた。もう何も出来ない。もう降参するか生き残る事が出来なくなってしまったのだ。

「私の負けです」

『うむ。では、この手錠を手首に付けて連行する』

ルカリオはそう言い、マーシユの手首に手錠を付けて連行した。

『クレツファイヤー、本当にこれで良かったのか？』

『この街の人達が捕まっている場所を探すためにマーシユ様を使つた。助け出した後で謝る』

『そうだったのか。わかった。俺も手伝う』

『よろしく頼むクチート』

クレツファイヤーは密かにマーシユを助ける為、クチートに作戦を説明し行動を開始した。

『やはり主に忠実だな。野生でも変わらないものだな』

近くの木にいたヘラクロスはアブソルの元に向かった。

トレーナーと反抗したポケモンの監視を担当しているのはアブソルだからだ。

人間や反抗したポケモン達は、この街のポケモンセンターに連れて行かれる。

神支配計画のエネルギーを溜める施設に改良しているので、電力は反抗したポケモンから取り、人間の生命エネルギーを糧にエネルギーを溜めている。

強いトレーナーほど沢山のエネルギーが溜まるのでジムリーダー

は打って付けだ。勿論、エネルギーを吸収し終われば処分されるが……

マーシユはポケモンセンターの一番デカイ装置の中に入れられ、機械の触手がマーシユを襲う。暫くすると触手はマーシユの体を固定し、生命エネルギーを吸い取りだした。

「ああああああああ!!」

生命エネルギーは命そのもの。吸い取れると体中に激痛が受ける。

暫く30秒ほどエネルギーを吸い取るとマーシユは体に力が入らなくなり、地面に倒れた。

『おいおい。まだ30秒だけ?もっと絞り出せ!』

『ですが!このままだとこの女性が死んでしまいます!』

『最後は処分するんだ。吸い取り終わればそれで役目は終了。他の者たちもそうしただろう?』

アブソルはこの機械の操作を任しているユンゲラーにそう言い、操作を再開させたその時!

通気口の蓋からポケモンが2匹出て来た。

『マーシユ!大丈夫か!』

『どけ!噛み砕く!』

クチートは自慢の顎でマーシユを捕らえている装置を攻撃しようとしたとき、その装置から硬質化した機械の触手が出て来て、触手が噛み砕くを受け止めた。

クチートは噛み砕くに力を更に込め、噛み千切ろうとしたが全く歯が立たない。

『クチート!後ろ!!』

『え?』

クチートは後ろを振り返ると硬質化した先が尖った触手に体を貫かれた!

クチートからは赤い血が大量に流れ出てそのまま動かなくなった。

『クチートおとおおとおお!』

クレツフィーは叫び触手を睨み付けたその時、

「ああああああああ!!」

マーシユの叫び声が上がった！またエネルギーを取られているのだ！

『このままじゃ・・・2人を救えない・・・俺は、俺は・・・』

その時、頭の中に声が聞こえた。

『まだ諦めるのが速いですよ』

その瞬間、クレツファイアの体が黄金に光り輝いた！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十三話

百三十三話

黄金の光りは触手を近寄せない。

『おい！速くあの光りを納めさせろ！眩しすぎて何も見えん！』

『今やっていますが！触手の光りにより押し返されているのです！』

『何だと!?』

クレツファイアの黄金色の輝きは体を貫かれたクチートにも移り触手を押し返した！

クチートの体の穴は黄金色によって埋め尽くされ、穴を塞いぎクチートは静かに目を開いた。

『俺は死んだんじゃ?』

『貴方は一度死にました。ですが、私の力を使い生き返らせました』

クチートの頭の中に直接声が聞こえた。

『貴方はいったい誰なのですか?』

『私の名はマーファイア。貴方達を助けに参りました』

※マーファイア※【上級神・精霊】

紫色の小さな精霊。

物を融合させ更なる力を与える神。

『貴方達に更なる力を与えようと思ったのですが、2人の同意が必要でして』

『同意?』

マーファイアの説明は、クレツファイアとクチートを融合させ新の力を目覚めさせると言う事だった。

クチートの穴は塞がっているが、黄金の光りが消えると死んでしまう。穴の場所は心臓の場所だったから・・・

マーファイアと融合すると体が持たなくなり、内側から破裂して死んでしまう。

『クチートとの』

『クレツファイアとの』

『融合に同意します』

『分かりました。それでは・・・』

マーフィアは2人の同意を受け力を使った。黄金の光りが更に輝きだし、2体の体を包み込み小さくなっていく。

小さくなった光りの球体から鋭い爪が生えた手が2本出て来た。

その次は強靱な脚が2本出て来た。

その次は顔。ドラゴンみみたいな細い顔をしていた。

次に出て来たのは胴体。綺麗な紫色の鱗をした胴体が出て来た。

最後に翼と尻尾も出て来た後、黄金色の光りは静かに消えていった。

『この姿が貴方の姿。名を『ディアスファイア』』

『ディアスファイア』

※ディアスファイア※【神・龍】

マーフィアの力によりクチートとクレツフィーが融合した姿。

2 m程の小型の人型のドラゴンだが、神の力を手に入れた事により戦闘力は大幅に上がった。

『これが俺達の力・・・力が漲る!』

『ふふ。さあ、マーシユさんを助けてあげて』

『ありがとう!』

ディアスファイアは鋭い爪でマーシユが閉じ込められている機械を切り裂き壊した!

その時、硬質化した触手がディアスファイアを攻撃しようとしたが、

『邪魔だ』

ディアスファイアは尻尾を巧みに使い、触手を全て叩き落とした。だが触手は直ぐに起き上がり再度攻撃してきた!

ディアスファイアは爪で触手を切り裂き口から破壊光線を放ち襲つて来ようとした触手共を殲滅した。

『まだ襲ってくるか触手共?』

触手はウネウネと動いているがディアスファイアを襲おうとはしなかった。

『マーシユ様助けに参りました!』

「貴方はいったい・・・誰なの？」

『ディアスファイアです。元はクレツファイーとクチートでしたが』

マーシユは首を傾げ、

「うゝん？って事は2人は合体してその姿になったの？」

『その通りです！流石はマーシユ様！』

その時後ろから鎌鼬が襲ってきた！

『障壁よ！』

ディアスファイアは直ぐに障壁を展開し、鎌鼬を防いだ。

障壁は、守るの技と違い何度使っても失敗はしない。

「ディアスファイア、貴方強くなりましたね。さあ、反撃開始と行きましょー！」

『はー！』

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十四話

百三十四話

「行くよディアスファイア！」

『はい！』

『俺の施設をよくも〜！』

アブソルは咆哮するとメガ進化した！

「1人でメガ進化か。ディアスファイア！やってしまいなさい！攻撃は任せます」

『了解しました！』

『悪の波動！』

『新・亜空切断』

※新・亜空切断※【神】

空間を切り裂き異空間を発生させた刃を放つ。

アブソルが放った技は亜空切断により異空間へと消えていった。そのまま施設の機材諸共を異空間へ消していきアブソルを攻撃した。アブソルは異空間に引つ張られそのまま消えていった。

ポケモンセンターの施設は右半分を異空間へ消し去ったので左側しか残っていない。

「凄い。これがディアスファイアの力なのね！」

『空間を支配する力なのかな？もしそうだとするとディアルガやパルキアが黙ってなさそう・・・』

「そ・・・そうね・・・」

マーシユとディアスファイアは苦笑いしながら掴まっている人達を助けるため施設の地下へと降りていった。

その頃ヘラクロスはジムリーダーの補佐を任されているトレーナーと戦っていた。

『しつこい人間だ！メガホーン！』

「そっちもでしょ！ムーンフォース！」

ジムリーダーの補佐を務めているのは、フラン。

水色の着物が似合うトレーナーだ。

その補佐のポケモンはトゲキッス。厳しく育てたポケモンでありフランの相棒だ。

ヘラクロスの攻撃はトゲキッスの攻撃を押し返した！

「なんで!？」

『フハハハ！俺の攻撃をメタル化させたのだ！メタルメガホーン!』

そのまま一気に加速しをトゲキッスを攻撃した！トゲキッスは地面に勢いよくぶつかり一撃で戦闘不能になった。

「トゲキッス!？」

『次はお前だ！メタルメガホーン!』

ヘラクロスはフランに攻撃しようと接近したその時！

「そこまでよー！ディアスファイア行きなさい!」

『紫城防壁!』

※紫城防壁※（しじょうぼうへき）【地面・毒】

地面から紫色の城壁を造り出す。

物理攻撃した物全てを猛毒状態し10秒で死なせる。

ディアスファイアは地面に手を付き、トゲキッスの前に猛毒の城壁を造りだした。

ヘラクロスは止まることが出来ずにその城壁を攻撃し猛毒を浴びた！しかも城壁には傷1つ着いてない。

『ぐああ・・・!!!』

ヘラクロスは地面に野たれ周り10秒後動かなくなった。

その後、紫城防壁は消え去った。

「マーシユ様!と・・・名前は分かりませんがありがとうございます!助かりました!」

「このポケモンは私の相棒。ディアスファイアよ」

『フラン様、ディアスファイアです。今後ともよろしくお願ひします』

「あ、はい!こちらこそよろしくお願ひします!」

マーシユはディアスファイアの事を軽く説明しフランは少し驚いたが納得した。

「他の人達も助けるわよ!後、元気の塊をトゲキッスにどうぞ」

「ありがとうございます!」

マーシユは元気の塊をフランにあげ直ぐにトゲキツスを回復させた。

元気の塊は瀕死状態（戦闘不能）のポケモンを全回復させる貴重な代物だ。元気のかけらは市場に出回っているが、塊は洞窟の奥深くにあり数も少ない。

その後2人はクノエシテイの人達を助け、半数を取り戻した。

だが・・・残りの半数は生命エネルギーを吸い取られ死んでしまっていた。

「そう言えばマーフィア様の姿見たこと無いわね・・・」

『私は妖精の姿ですが今はまだ貴方達にお見せすることは出来ません』

「そうなのね。事情があるみたいだからこれ以上は聞かないようにします」

『ありがとう。それとルカリオはもうこの街にはいません。ミアレシテイに向かいました』

マーフィアはクノエジムの上にある時計から映像を映し出しルカリオを映し出した。

『あの速度で走っているのもう追いつけないでしょう』

その時、ルカリオの前に突如白い光線が降ってきた！

その光が収まると謎の人物がルカリオの前に立っていた。

「あの人は？」

『あれは!?全能神・シンテイ様!?!』

ルカリオは突如現れた男に戸惑ったが直ぐに攻撃をした。

『ボーンラツシユ!』

「邪魔だ。消えなさい」

シンテイは手を前の出すと銀色の光線を放ちルカリオの体を貫いた！

『ガハッ!』

ルカリオはそのまま地面に倒れた。

シンテイはルカリオに近づくと手を翳しルカリオの潜在能力である波導を吸い取り我が物にした。

「この力が波導か。便利だな。ルカリオ、お前はもう用済みだ」

シンテイはルカリオに触れた瞬間、ルカリオの体が光りの粒子になり消えていった。

その後、シンテイは光りの柱を発生させなくなった。

その光景をクノエシンテイで見ていた皆は恐怖を感じた。

シンテイ様に会えば命は無いと・・・

そう皆で思った瞬間、背後に気配を感じた。皆、一斉に振り返ると・・・

『人間共、我を見て恐怖したか？』

シンテイがそこにいた・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十五話

百三十五話

『人間共、我を見て恐怖したか?』

シンテイは人間達にそう聞いたが、皆は恐怖のあまり声が出ない。

『全能神様。マーフィアでございます』

『マーフィア? ああ、妖精のマーフィアか』

シンテイはそう答えた後、半霊化した。

『やはりこちら側にいたか。まだ力は戻らないのか?』

半霊化したシンテイはマーフィアと喋っている。と・・・言う事は、

マーフィアは幽霊?

『お話の途中すみません。マーフィア様は幽霊なのですか?』

『ん? 人間、知らなかったのか? マーフィアは霊体であり現界するには、

よほどの力が無い限り出来ないぞ』

『そうだったのですか! 教えて頂きありがとうございます』

マーシユは礼をしてから会話を聞くことにした。

『はい。力は徐々に溜めているのですが、まだ不完全です』

『そうか。ミアレでデカイ戦闘がじき始まる。それまでに現界し戦力

になれるように頑張れよ。我も戦闘で暴れるのでな』

『かしこまりました。全力で頑張らせて頂きます』

マーシユ達はシンテイが言った『デカイ戦闘がじき始まる』の部分

に引つかかった。

『シンテイ様、じきにデカイ戦闘が始まると言うのはいったいどのよ

うな?』

『ん? ブレインと言う男がポケモン完全自由計画を進めていてな。こ

の地方のバランスを崩すことになるだ。そこで我が動き計画を阻止

するため動いている。人間達の身方と思ってくれていい』

『ありがとうございます!』

シンテイはそう言い、マーフィアを一度見てから頷き、光りの柱を

発生させ移動した。

『マーシユ。先ほどの話し合った通り私が現界するには力が必要なの

ですが、その力が・・・』

「生命エネルギーですか？」

マーシユは薄々気付いていた。

現界、すなわち形になって現れるので命がいる。そのエネルギーはまさに生命エネルギー。

『その通りです。その生命エネルギーはポケモンセンターの施設に合ったのですが・・・』

「もしかして・・・亜空切断で異空間に飛ばした時に巻き込んだじゃった？」

『はい・・・』

やっってしまった・・・

マーシユとディアスファイアは互いに顔を見てから頭を下げた。

「すみませんでした！」

『すみませんでした！』

『頭を上げてください。多分ですが他の町にも一緒に被害が出ている筈なので、その施設で溜まっている生命エネルギーを使います。ですので直ぐに出発しましょう！』

「はい！フランと皆はこの町を守ってくれる？私とディアスファイアは他の町に行つて来る！」

「かしこまりました！」

マーシユ達3人はよろしくと言ってからクノエシティを出発した。

目指すはヒヤッコクシティ。ディアスファイアの力を借りて直ぐにでも行こう。

フラン達は町の警護に回るため5人体制で巡回と警備を開始した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十六話

百三十六話

同時刻ヒヤッコクシティではブレインが最初から送っていたポケモン、フシギバナ、フーデイン、バンギラスとその他のポケモン達がヒヤッコクシティを襲っていた。

『全員捕まえてしまえ！』

『おお〜！』

バンギラスはポケモン達を率いてトレーナー達を乱獲し、フシギバナが施設にぶち込んでいる。

「メタング、ラストーカノン！」

『しゃらくせえ！ギガントヒル！』

※ギガントヒル※【悪】

ギガインパクトの破壊エネルギーを凝縮させ腕に纏わせる。

当たった物全ての体力を大幅に奪い、体力を回復する。更に各ステータスが上がる。

メタングのラストーカノンはバンギラスの攻撃により2方向に割れ、違う場所を攻撃した。

そのままバンギラスはメタングを攻撃し、体力を大幅に奪いバンギラスの体力は回復した。

更に攻撃力が上がったこの状態で追い打ちをかける！

『さくらばだーガンズハンマー！』

※ガンズハンマー※【格闘・悪】

相手を叩き付ける。ステータスが上がっている状態で使えば追加効果が発生する。

攻撃力・特攻が上がっている場合・・・大地ごと陥没する威力を發揮する。

防御力・特防が上がっている場合・・・スーパーアーマー状態になり、どんな攻撃を受けても怯まず、ダメージを半分まで削減する。

素早さが上がっている場合・・・常時神速の速さを得る。

バンギラスの攻撃が当たった瞬間、大地が円形状に陥没しそこから

四方に大地が割れた！

メタングの体は攻撃を吸収しきれず木っ端微塵になり形すら残っていない。メタングのトレーナーは大地が割れた時に落ちて消えた。

『次の戦場に行くぜ！』

『はい！』

今の攻撃によりバンギラスの側にいた仲間も巻き込まれ数体を葬った。

だが、バンギラスは止まることは無く、次の相手を探しに神速の速さでその場を離れ次の相手を探しに行った。

『バンギラス様・・・最強ツス！』

近くで見えていたヨーギラスはバンギラスに憧れている。

だが力は天と地ほど離れているので戦力にはならず見るだけにしていた。

ガンズハンマーの陥没した大地への衝撃はヒヤツコクシテイ全てに渡り戦闘していた者たちの動きを一瞬だけ奪った。その一瞬でバンギラスは次の戦場に辿り着き一番手前にいたニャオニクスを攻撃した。

『ギガントヒル！』

『どこから!?!』

ニャオニクスが振り返った時には凶悪な顔のバンギラスが自分を攻撃した時だった！

物凄い痛みが来た時には上空に飛ばされており、その更に上に先ほどの恐ろしい顔がそこにはあった・・・

『さらばだ！ガンズハンマー！』

バンギラスが両手で振り下ろした攻撃でニャオニクスは神速の速さで地面に落下し、追加効果により大地が陥没しニャオニクスの体が弾けた！

「ニャオニクスく!!」

そのトレーナーは紫色のコートみたいなのを羽織ったおばさんだった。

『ん？誰だばああ?』

「な!?! 私は! 『うるさいから死ね』」

バンギラスは空中にいたのに、その言葉を言った時にはそこにはいなく私の前にいた!

その時、体に痛みがはしった。

『じゃあな』

バンギラスはそう言うと言った。いや、移動したのだ。

その人はヒヤッコクジムのジムリーダー、ゴジカ。

そのゴジカの腹には大きな穴が空いており、血が大量に流れ出していた。

「あの・・・時・・・か・・・」

ゴジカはそのまま地面に倒れ永遠に動かなくなった。

その後フシギバナがゴジカの前に現れポケモンセンターの施設にある機械に放り込んだ。

その機械はいくつもあり、その中には人間達が入っていた。

『さあて今日も働いて貰うぞお前達!』

「嫌! 速く解放して! 死んじやう!!」

人間達は助けを求めるが勿論誰も助けない。

そして、機械は無慈悲に起動し人間達の生命エネルギーを吸い取りだした。

「いや〜!!!」

機械の中にいた人間は緑色に発光し、その光りが機械に繋がっているケーブルを伝い一番大きい機械に溜められる。この一番大きい機械が生命エネルギーを溜める機械だ。

『さあ! お前達、今日も頑張つて生き残れ! ハハハハ!』

フシギバナは笑いながらその場を離れていった。次の人間を連れてくる為に・・・

フリーデインは各トレーナーと戦っているのだが毎回バンギラスに邪魔される。

今はヒヤッコクシティのデカイ水晶の上で休憩している。

『ど派手に暴れとるなく町が崩壊してるじゃないか・・・』

フリーデインは呆れながら町が壊れていくのを見ていた。

自分が動かなくてもバンギラスとフシギバナが動くから・・・
まあ、自分が動かなくても分身を使い働かせるから別にいいのだが
と思ったその時！

『っーバリア展開!!』

いきなりヒヤッコクシテイ側から光線が来た！

フリーデインのバリアは並大抵の攻撃じゃビクともしないがこの光
線は違った。

バリアに亀裂が入ったのだ！

『ぐっ!?仕事サボったのがバレたか・・・バリア最大出力!』

フリーデインは今までの出力を最大に上げ光線を跳ね返した！

その光線は放たれた方向と一緒に場所に行き大爆発した！周りの
民家は木っ端微塵に砕けその光線を放ったポケモンが煙の中から現
れた。

『やっぱり貴方ですよね・・・』

『分かっているのなら仕事をしろ。次は出力を上げるぞ?』

『すみません。では始めますので・・・多重分身!分身達よ行ってこい
!』

フリーデインは数多くの分身を出しヒヤッコクシテイに解き放った。

光線を放ったポケモン・・・フシギバナは仕事を開始したフリーデ
インを見ると元の場所に戻って行き、破壊された民家の中からトレ
ナーを見付けたので序でに連れて行った。

このヒヤッコクシテイは生命エネルギーを一番溜めており、ブレ
イが使いを送り良くエネルギーを取りに来る。

よって・・・戦闘に特化したバンギラスや施設の整備を任せられる
フシギバナ。町全体を見ることが出来るフリーデインを送ったのだ。

すでにヒヤッコクシテイはバンギラスが暴れて壊滅状態。

トレーナーも殆どがエネルギー源に替えられておりヒヤッコクシ
テイにトレーナーは数人しかいな。

その数人は・・・

この地方に旅に来たサトシとその相棒のピカチュウ。

サトシのピカチュウを盗(と)ろうとここまでやって来た、ロケツ

ト団と名乗る3人組。

ムサシ、コジロウ、ニヤース。このニヤースは何と人間の言葉を喋れる超レアなポケモンだ。

白が特徴的な人物もつい先ほどここにやって来た。その人物は……シンテイ。

この6名がヒヤツコクシティにいる最後の戦える人間達だ。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十七話

百三十七話

ヒヤツコクシテイが大きく揺れた時、サトシはポケモンの軍団と戦っていた。

「今の揺れは!？」

『何かあったみたいだけど・・・今がチャンスだぜ相棒!』

「だな! やってしまえピカチュウ! 100万ボルト!」

※100万ボルト※【雷】

10万ボルトを極めた技。

当たれば確実に麻痺状態になるが・・・基本、相手は耐えきれない。ポケモン軍団にとびっきりの100万ボルトを浴びせ一撃で軍団を壊滅させたその時! ピカチュウの後ろにポケモンが現れた!

「ピカチュウ! 後ろにアイアンテール!」

『吹き飛ば! 豪腕・メテオドラグニル!』

※豪腕・メテオドラグニル※【格闘・炎】

腕から手にかけて、龍すら倒す事が出来る炎を纏い相手を攻撃する。当たった敵は超火傷状態になり戦闘不能になるか大量の水を浴びなければ治ることはない。

ピカチュウは咄嗟にアイアンテールに電気を纏わせ振り下ろした

!

その先には炎の腕が攻撃を防いでいた! しかも・・・右腕で受け止めていて、左腕から攻撃が来たのだ!
ピカチュウは躲すために尻尾に力を入れ上に跳び・・・

「今だ100万ボルト!」

『メテオドラグニル!』

ピカチュウは100万ボルトを放ちメテオドラグニルを相殺した!

ピカチュウは地面に降り立ち直ぐに構えた。バンギラスは一度下がり構え直した。

「何だこの強いバンギラスは・・・」

『俺は最強のバンギラス！お前らに負ければ最強ではいられない！では・・・参る！』

バンギラスはそう言うとピカチュウに突貫して来た！

『ギガントヒル！』

「ピカチュウ、電撃槍・ヴォルグ！」

※電撃槍・ヴォルグ※【雷】

雷の槍を発生させ相手に投げる。

当たれば暫く動けなくさせる超麻痺状態にさせる。

ピカチュウは電撃槍を直ぐに錬成し発射したが・・・

『しゃらくせえ！吸収せよゴッドレイン！』

※ゴッドレイン※【生命】（神）

相手の攻撃を奪い我が物とする。

相手自身に当たれば即死させ相手の能力全てを我が物とする。

「気を付けろピカチュウ！」

『分かってる！』

バンギラスは右手に輝く虹色の拳で電撃槍・ヴォルグを払いのけ、その攻撃を我が物とした。その手はそのままの状態です。左手の方はメテオドラグニルの状態・・・

2秒もあれば迫り着かれ自分は死ぬだろう・・・

相棒・・・新の力は今、使うべきじゃないか？

ピカチュウは目でサトシを見るとサトシは頷いた。

「新の力を解放しろピカチュウ！」

『おおおおおおおおおお！』

ピカチュウの周りから物凄い出量の電撃が舞い上がったがバンギラスはお構いなくゴッドレインで攻撃した！が・・・

ゴッドレインは電撃に当たった瞬間弾き返された！だがメテオドラグニルが残っている！

バンギラスは直ぐにそちらで攻撃したが結果は一緒だった。バンギラスは仕方無く一度後退し構えた。

『ならばー！』

バンギラスは自身の心臓の部分に拳を当て・・・自身の体を貫いた

！
『ガハッ！俺……の……最強の……力を……見せてやる……
ぜ！』

バンギラスは貫いて出て来た心臓を握りつぶした！そして……
バンギラスの体から禍々しい程の黒いオーラが包み込む！

ピカチュウは周りの電撃を自身に収縮させていき……自身を包み
込んだ！

禍々しい球体のオーラから真つ黒な怪物が出て来た！

龍の顔した頭……

胴体の真ん中に禍々しい龍の模様……いや、龍の顔がある……

背中からは黒い翼が生えており、翼膜は赤い……

腕は全体的に黒い。手は、鋭い爪があり何でも切り裂けるだろ
う……

脚は全てを支えられる強靱な足……

腰からは黒い尻尾が生えており……

翼と尻尾の間から鋭い剣が何本も出て来て翼みたいに1つ形状へ
と変わった……

邪神龍・バンギディア【神・悪】

自らの心臓を邪神に捧げた姿。

心臓が無い最強の邪神龍。

翼と尻尾の間の場所に無限の剣を生産でき、その剣で攻撃出来たり
放ったり出来る。

バンギラスの能力も全て引き継いでいて、更に邪神龍としての能力
が加わる。

特性 無尽蔵

心臓が無い事により永遠に疲れる事が無くなり、ずっと攻撃出来
る。

重複特性 邪神の力

1秒ごとに体力が大幅に回復する。それと同時に傷も回復する。

電撃の球体からピカチュウが・・・

顔は確かにピカチュウだが少し・・・いや・・・かなり違うぞ！かなり厳しい顔のピカチュウだ！

体は・・・可愛いふっくらした感じで無く・・・逞しい筋肉質な・・・ああピカチュウよ・・・

尻尾なんかもうキレイツキレの尖った尻尾だし・・・

何より赤い布を腰に巻いてるよ！

ピカチュウ（最強状態？）

特性 最強ボルト

雷の質量を最大に引き上げる。

重複特性 格闘最強！

格闘戦では誰にも負けることは無いと言われる幻の特性！

（ネタですね・・・）

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十八話

百三十八話

ヒヤツコクシテイ戦

☆ピカチュウ（最強状態？）VS 邪神龍・バンギディア☆

「ピカチュウ！電撃ブレイド！」

※電撃ブレイド※【雷】

電撃で剣を形成する。

雷を凝縮させているので当たれば麻痺状態！

『ブレイドワークス』

※ブレイドワークス※【剣】

無限の剣を形成し出現させる。

ピカチュウは片手に電撃ブレイドを、バンギディアは超大量の剣を展開しその内の1本を手にとった。

『行くぞ！』

ピカチュウは電撃ブレイドをやや後ろに構え突貫し、バンギディアは無限の剣をピカチュウに向け発射した！

ピカチュウは電撃ブレイドを巧みに使い剣を全て捌き斬る。

「ピカチュウ！後ろだ!!」

ピカチュウは咄嗟に電撃ブレイドを後ろに振り払った瞬間！重たい攻撃が来た！

『良く受け止めたな。だが！』

バンギディアは数歩下がり構えた！

『暗黒剣・ハルンフェイド！』

※暗黒剣・ハルンフェイド※【悪】

剣を振り払い斬撃波を無数発生させる。

バンギディアは暗黒剣を勢いよく振り払い斬撃波を無数飛ばした！

ピカチュウは技を使わず全て剣戟で斬撃波を対処した！

『!?!?・・・絶神速・無音斬』

※絶神速・無音斬※【神】

音速を超えた攻撃。

音が発生した時にはすでに攻撃は終わっている。

バンギディアは暗黒剣を構え音速の域に入った。だが！

『電撃音派』

※電撃音派※【雷】

電撃の力で筋肉を動かし肉体では到達不可能な音速の域に到達出来るようになる。

副作用で後日壮絶な筋肉痛になる。

バンギディアは動いたと思えばすでに姿は無く、同時にピカチュウの姿も消えていた。

正確にはそこにいるのだろうか・・・だが、常人には見えない速度で戦っているのでサトシでは見ることが出来ない。

音が鳴った時には両者無傷のまま元の位置から数歩下がった場所にいた。

バンギディアが動いた瞬間、ピカチュウも同時に動いており、中央付近で剣戟していた。

バンギディアは暗黒剣を使い更に無数の剣を生み出し発射し攻撃していた。

一方ピカチュウは電撃ブレイドでバンギディアの攻撃を捌き、尖った尻尾にも電撃ブレイドと一緒にの仕組みを使いバンギディア以外の攻撃は尻尾で捌いていた。

最後は一番力強い一撃を決めるため瞬時に一步下がりを直ぐに両者力強い斬撃波を飛ばしたが相殺されこの位置にいる。

ピカチュウは今の剣戟により大幅に体力が減り方で息をしているが、バンギディアは数秒で息を整え直し元の状態に戻っていた・・・

「おいおい・・・これじゃあ流石にキツイぞ・・・」

『ピカチュウよ。もう終わりか?』

『ハッ言ってくれるな・・・ならこれでも食らいやがれえ！1億万ボルト!!』

※1億万ボルト※【雷】

「物凄い質量の雷を落とす！」

「当たれば即死だ！」

バンギディアは右手を空に向け・・・

『ゴッドレイン』

ピカチュウが放った1億万ボルトの雷を全て吸収してしまった！

「なっ!?」

『なっ!?』

『他の攻撃は無いのか？無いならこの攻撃、そのまま返してやろう。』

1億万ボルト』

バンギディアは右手をピカチュウに向け雷を発射した。

ピカチュウは避ける事も出来ずこの攻撃に当たり黒焦げ状態に・・・

最強状態も解除になり元の姿に戻りそのまま地面に倒れた。

「ピカチュウく!!!」

サトシは直ぐにピカチュウの元に走ろうとしたが転んでしまった。

サトシは何故だろうと思いい足を見ると足が石化していた！

『お前は動くな。楽しませてくれたお礼だ。殺さないでおく』

バンギディアはそう言うと言ったサトシを瞬時に石化させた。

そのままサトシとピカチュウをつまみ上げ、水晶の前に移動し置い

た。

バンギディアは楽しませてくれたお礼にピカチュウも石化させサ

トシの隣に置いた。

その後バンギディアは次の戦場に向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百三十九話

百三十九話

サトシ達がバンギディアと戦っている最中、サトシとは反対方向にいたロケット団達は無数のフリーデインと戦っていた。

「もう！何回倒しても切りが無い！」

「全くだぜ！どこかに本体がいるはずだ」

『ニヤースもそう思うニヤー！』

ロケット団達は上空から攻撃してくるフリーデインの攻撃を躲し本体を探し回っていた。

いくら攻撃して倒しても、次から次へと現れるフリーデインを攻撃しても意味が無く先に本体を倒す事にしたからだ。

ロケット団達はデカイ水晶の場所までフリーデインの攻撃から逃れここまで来た。

町を一望するなら一番高い場所が望ましいからとここに的を絞っていたのだ。案の定当たりだ。

本体であるフリーデインはこちらを見下ろしていた。

「あんたね！そこから降りてきなさいよ！」

「そうだそうだ！」

『速く降りてくるニヤー！』

『うるさい奴等だ・・・分身達よ奴等を始末しろ。なに・・・分身に勝てないようでは俺に勝つなど無理だ』

フリーデインはそう言うのと右手を前に出し分身達に一斉に襲わせた。

「ちっ！バケツチャ！シャドーボール！」

「カラマネロ！サイケ光線！」

『乱れひっかきニヤー！』

無数に襲いかかるフリーデインを一撃で葬っているが次から次へとやはり切りが無い！

ならば！

「ゴジロウ！」

「分かってる！ニヤース、少し頼むぞ」

『任せろニャー!』

ムサシとコジロウはフリーデインの分身達を任せ本体を狙うことにした。

『む? 流石に馬鹿では内容だな。良かろう、相手になってやる』

「上から目線め! バケツチャ! シャドーボール!」

「カラマネロもシャドーボールだ!」

『バリア』

バケツチャとカラマネロのダブルシャドーボールはフリーデインのバリアにより防がれた!

『こんな物か・・・』

フリーデインはデカイ水晶の場所から少し浮き、手を重ねた。

『遠距離攻撃だけだと思ふなよ?』

そう言うフリーデインは重ねた手を少しずつ広げると槍状の武器が現れた!

『雷槍・ライジングランス!』

※雷槍・ライジングランス※【雷】

ステータスの特攻が高ければ高いほど攻撃力が上がる槍。

光線を放つたり直接突いたり様々な事が出来る。

「な・・・槍だと!?!」

「あんなの見たことないぞ!」

『ニャンと!?! 分身達が電気を纏ってるニャー! 物理攻撃なんて出来ないのニャー!』

「なに!?!」

フリーデインは雷槍を右手に持ち、左手前に降った。すると空間が歪み時空の狭間が出現した!

フリーデインはそう狭間に入った。ムサシ達はその光景を見ていなかった。

ニヤースが言っていた分身達が電気を纏っていると云っていたのを確認するためだったからだ。次にフリーデインがいた場所を見てもどこにもいない。

『次元槍・ボルグ!』

※次元槍・ボルグ※【空間】

時空の狭間から現実世界へと攻撃する為の技。

フリーデインはニヤースの真後ろから次元槍を使い、雷槍でニヤースを貫いた！

『ガフツ！いいたい・・・どこ・・・か・・・ら』

フリーデインは貫いたと同時に直ぐに引っ込め時空の狭間に戻っている。

ムサシとコジロウはフリーデインの攻撃を見ていなかった！

血まみれで倒れているニヤースの側に行き抱き上げた。

「ニヤース！しっかりしろ！」

「ニヤース！」

『後は・・・まか・・・せた・・・ニヤ』

ニヤースはぐったりとした状態になり亡くなった。

ムサシとコジロウの目は憎しみの目へと変わった。

「許さない・・・」

「許せねえ・・・」

「出て来やがれ！フリーデイン!!」

フリーデインは時空の狭間で次はどこから出てうるさくなった奴等を始末しようかと思っていると・・・

『フリーデイン。ここは俺の領域だぞ！出て行け!!』

ギラティナが俺を攻撃しやがった！

ギラティナは反転世界の主だった筈だ！なぜ、時空の狭間にいるんだ！いるならディアルガやパルキアだろ！

『亜空切断！』

『時の咆哮！』

『シャドードライブ！』

気がつけば3方向から技を放たれていた！

くそ！ディアルガとパルキア！やはりいたのか！

『バリア！』

フリーデインは両手を前に出しバリアを張ったが・・・

『後ろだ・・・シャドークロー！』

ギラティナが後ろからフリーデインを攻撃した！そのせいでバリアを張るための意識が痛みにより出来なくなり2体の同時攻撃を受けてしまった！ギラティナは攻撃した後直ぐにシャドーダイブでいなくなっており、フリーデインだけが攻撃を受けた。

フリーデインは大ダメージを受けたが隠れ特性、自己修復で傷と体力を回復した。

『ほう。珍しい特性を持っているな。だが……』

『俺達の攻撃をどこまで耐えきれるかな？』

『食らうがいい！時の咆哮！』

『亜空切断！』

『シャドーダイブ！』

フリーデインは3体同時攻撃が放たれた瞬間、両手を前に出し構えた。

『極大魔法・次元閉鎖』

※極大魔法・次元閉鎖※【神】

次元そのものを閉鎖し閉じ込める究極技。

技を出した者はその空間から逃れることは出来るが、受けた者は出られない。

フリーデインが解き放った次元閉鎖は極大の魔法陣が展開され、その空間全土に渡り技が発動した！

その瞬間、ギラティナがシャドーダイブから出現しフリーデインを攻撃しようとしたが、フリーデインは分身を出現させ技を受けさせた。時の咆哮と亜空切断はその直後に迫ってきたが、更に分身を出現させ身代わりにした。

そして……

『この空間全てを閉鎖する。さらば伝説ポケモン達よ』

『『待て！』』

フリーデインは紫色の粒子となり消えた！

3体は直ぐにフリーデインがいた場所に辿り着いたが遅かった。

もうこの空間からは逃れられない……

『やられたな……誰かが彼奴を倒さない限り出られないぞ……』

『極大魔法・・・厄介だな』

『全くだ・・・』

伝説ポケモン3体を閉じ込めたフリーデインは元の世界に戻って来た。

『さあ続きと行こうか』

フリーデインはそう言う分身達を大量に出現させムサシとコジロウを取り囲んだ。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十話

百四十話

ヒヤツコクシテイ戦

☆ムサシ&コジロウVSフリーデイン☆

「カラマネロ!」

「バケツチャ!」

「シヤドーボール!」

ムサシとコジロウは同時に技を命令しフリーデインに放ったが分身達が身代わりになり、本体に攻撃が届かない。

『もう終わりか?ならば行くぞ!サイコキネシス』

フリーデインはサイコキネシスを使い、バケツチャとカラマネロをぶつけさせた!その後地面に勢いよく叩き付けた後、湖に放り投げた。

デカイ水晶のある場所は湖にあり、その湖に2体は落ちた。

『さあ、フィニッシュだ。落雷!』

フリーデインは雷を使い湖に落ちた2体を攻撃した!水は電気を満遍なく通るので、全身濡れた2体はこの攻撃により戦闘不能になった。水晶は黄色く光ったが全く傷は付いていなく無傷だ。

「バケツチャ!」

「カラマネロ!」

ムサシとコジロウは直ぐにモンスターボールを取り出し2体を戻そうとしたが・・・

『させるわけ無かろう?毒層壁!』

※毒層壁※【毒】(どくそうへき)

猛毒の層を幾十にも重ねた壁。

当たれば猛毒を受け10秒も経たない内に死ぬ。

フリーデインは湖の側にある手すり付近に毒層壁を出現させ近づけなくさせた。

更に湖の方から出現させた事により、毒層壁の猛毒が湖に流れ出し

た。湖は瞬く間に毒化した。

湖で戦闘不能になっている2体は、上空を飛んでいたエアームドにより救出されていた。

勿論、そのままポケモンセンターの施設にいるフシギバナに渡すためにそのまま飛んでいった。

ムサシとコジロウは毒層壁のせいで助けられている事は知らず、慌てていた。

「触ったら死んでしまうぞムサシ!」

「じゃあどうするのよ!あの子が死んじゃうじゃない!」

「それでも俺はムサシに死んでほしくないから止めるぞ!」

『話しは済んだか?』

フリーデインは2人が喧嘩している間に分身達を2人の周りに配置し待っていた。

「ちよつとフリーデイン!この壁を退かして!バケッチャを助けられないじゃない!」

『既に2体は助け出したぞ。今はポケモンセンターに運んでいる』

ムサシとコジロウはこの言葉で嬉しくなりはしゃぎだした。

『むう・・・これで攻撃すれば外道か・・・お前達、ポケモンセンターに連れて行くこうか?』

「良いのか!」

『勿論だ』

フリーデインは笑顔でそう言った。

なぜなら今のポケモンセンターはフシギバナによって生命エネルギーに変える施設が変わっているのだから。

そこに自分達から行くと言っているのだから手間が省ける。

『では行くこうか。分身達よその2人を運んでやれ』

「待つて!ニヤースは・・・」

『亡骸なら既にポケモンセンターに運んだ』

「ありがとう!」

勿論亡骸なんてこいつらが見えないところで処分している。

それに俺は元々外道だ。このまま殺しても良いがどうせなら命を

吸い取って、使い物にならなくなってから処分すればいい。ああ……早くサボりてえ

フリーデインは分身達に2人を運ばせ、自分は建物の裏に行き休んだ。

百四十一話

その頃フシギバナはポケモンセンターの施設から出て町を巡回していた。

『あの振動が無くなったな・・・もう全て片付いたか?』

フシギバナはそう言いながらも、くまなく町を見て回ろうとした時、後ろからとてつもない気配を感じ振り返ったが、誰もいなかった。

フシギバナは再び前を向き歩こうとした時、前に転んだ。

よく見ると足が石化していたのだ!

『な!?!』

フシギバナは必死に足を動かそうとするが全く動かない。

その時前方から先ほどの気配がし前を向くと白い服の男が立っていた。

『我が名はシンテイ。フシギバナ。お前の悪事は既に知っている。もうしないと約束出来るなら殺さないがどうする?』

フシギバナからは大量の冷や汗が流れ出た。

このシンテイと言う人間は俺を簡単に殺す事が出来る。だが、俺はブレイン様の為にまだ働く!

ここで引くわけにはいかない!

『俺はひかない。ここでお前を倒して俺は自分の仕事をする!』

『ほう?我を倒すか。良かろう!では死ぬがいい!』

シンテイは右手を前に向け光り輝く光線を放った!

その光線はフシギバナに届く寸前、フシギバナは自身に蔓のムチを心臓に放ち心臓を穿った!

『我が心臓を魔神に捧げる!我が身に大なる力をもたらせ!』

フシギバナの心臓は一気に黒く染まり天から黒い光りがフシギバナを襲った!

その時シンテイの光り輝く光線が当たったが黒い光りが攻撃を防いだ!

フシギバナの体は黒く染まり全身黒い鎧包まれ・・・

背中からは赤い翼膜の翼が生え・
右手からは鋭く尖った赤い剣が生えており・
左手からは金の大楯を持っている。

魔神・フアボロ【魔神】

フシギバナが魔神に心臓を捧げ魔神化した姿。

心臓が無いので弱点自体が基本的に無い。

特性 無尽蔵

心臓が無い事により永遠に疲れる事が無くなる。

重複特性 呪魔の力

呪いと魔法の効果を物凄く高める。

シンテイの顔が真剣な顔に変わり技を構えた。

『人間如きに負けるかあああ！』

『我也手加減無しで参る！』

ヒヤツコクシンテイ戦

☆邪神・フアボロVS全能神・シンテイ☆

フアボロは呪魔の力を解放し攻撃を仕掛けた！

『ファイナルヘヴン！』

『サンシャインインパクト！』

※ファイナルヘヴン※【神】

闇の光りで相手を攻撃する。

※サンシャインインパクト※【太陽】

太陽の力を借り、太陽光を圧縮し相手を攻撃する。

フアボロは高速で呪文を唱え、両手を前に出し技を放った！

シンテイは両手を上に挙げ、太陽光を凝縮し前に突き出して技を放った！

闇と太陽の光りが2体の間でぶつかり合った瞬間、シンテイは瞬間移動しフアボロの後ろに回った！

『絶剣ー！』

※絶剣※【刀】

剣技を究極まで高めた究極の一撃。

シンテイは光りの剣を出現させファボロに向け振り払った！
『瞬間強化』

※瞬間強化※【魔法】

瞬間的にステータスを大幅に上げることが出来る。

シンテイが振り払った絶剣は瞬間強化された翼で受け止められた！

『インパクトラッシュ！』

※インパクトラッシュ※【ノーマル】

大楯で相手を攻撃する。

ファボロは持っていた大楯を勢いよく振りシンテイを横から攻撃しようとしたが、シンテイは直ぐにもう一本絶剣を出現させ大楯の攻撃を防いだ！

『そう簡単には倒せないか。では、私の必殺技を受けよ！』

『貴方も俺の本気の攻撃を受けて頂きますよ！』

2体は空を飛びビャツコクシンテイの上空に移動し構えた。

『呪滅撃！』

『正拳突き！』

※呪滅撃※【呪法】

呪いの一撃を与える。

自身が死んでも相手を道連れに出来る。

※正拳突き※【格闘】

気合いを溜めた渾身の一撃。

ファボロは右手に呪滅撃を纏い突貫して来た！

シンテイは右手に正拳突きを溜めるためまだ動かない。

『死ねえ〜！』

ファボロはシンテイの目の前まで来て呪滅撃で攻撃したが、シンテイは左手から絶剣を瞬時に出現させ右腕を切り落とした！

呪滅撃は接触している部分を切り落とせば効果は無い。

そして・・・

『正拳突き！』

最大まで溜めた正拳突きをファボロの腹に当て吹き飛ばした！更

にシンテイは瞬間移動し飛んでいく方向から絶剣を横に構え、フアボロが吹き飛ぶ軌道で構えた。

『さあ、終わり時だ・・・』

フアボロはシンテイがそこにいることは知らない・・・

そのまま飛んでいきシンテイが構えた絶剣に当たり・・・体が分裂した・・・

『グハツ!?き・・・さま・・・は!?』

『さらばだ』

シンテイは光りの柱を発生させ消えた。

フアボロはそのまま上半身と下半身が分かれたまま落下し、出血多量で死んだ。

シンテイはポケモンセンターに移動するとその施設いた人間とポケモンを全て解放し施設を破壊。

シンテイはまた光りの柱を発生させフリーデインの元に向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十二話

百四十二話

休憩していたフリーデインは何者かがこちらに近づいてくる気配を感じ取った。

フリーデインは直ぐに罾を張り巡らせどこから来ても良いように構えた。

『ほう？準備が良いな』

『誰だ!?姿を現せ!』

フリーデインはそう叫び構えたまま動かない。

『お前の後ろだが?』

『なっ!?』

フリーデインは直ぐにそこから距離を置いたがそこには・・・

『お前が穴を張り巡らせている事ぐらい知っている。その罾をそのままお前の足下に設置しておいてやったぞ』

『くっ!?』

フリーデインが仕掛けた罾の内1つが相手を痺れさせる罾だ。フリーデインはそれに引っかかり体中が痺れている。

『お前がこの町でやった悪事は他の元と比べると小さいがなに・・・直ぐにこの世から消えるんだ。そのままじつとしていろ』

フリーデインは口を動かそうにも痺れていて何も喋れない。

シンテイはゆっくり近づきながら絶剣を出現させ手に持った。

『じゃあな』

シンテイはそのままフリーデインに向け剣を振ったその時!

上空から赤黒い光線が放たれシンテイは後ろに下がった。

シンテイがいた場所は石化しており当たれば危なかった。

『誰だ!』

『誰だって・・・全能神様。俺ですよ?イベルタルです!』

イベルタルはフリーデインの前に降り立った。

『大丈夫かフリーデイン?』

イベルタルはボソツと聞きフリーデインは頷いた。

ギリギリ助ける事が出来てたが、相手は全能神様・・・

自分では勝てないだろう・・・

『イベルタルよ。俺の邪魔をするな』

『すみませんがこいつは俺の仲間ですてね・・・見逃してはくれませんか？』

イベルタルは構えたままそう言い、断れば直ぐにでも攻撃出来る様に体勢を整えた。

シンテイもそのことは分かっていたので構えを解かないまま・・・

『勿論無理だ。この世界の秩序を保つため、ブレインと言う男の計画を破壊する！』

シンテイはそう言った瞬間絶剣を構え突貫した！

イベルタルは直ぐにデスウイングを放ったが、絶剣が光りを纏いデスウイングを切り裂き攻撃を無力化した！

そのままイベルタルの懐に辿り着き絶剣を振り払いイベルタルの腹を切り裂いた！

『ぐっ!?』

『トドメだ!』

イベルタルが痛みで地面に落ちた時、シンテイはイベルタルの首に絶剣を当て、振り下ろす・・・

『イベルタル様!!』

フリーデインの痺れが解かれたのはそれと同時に、イベルタルの首当たり超硬化の技を掛けた！

だが・・・

『邪魔な奴め』

シンテイは振り下ろすと同時に超硬化の強制解除の技を使い無効化させそのまま振り下ろしイベルタルを亡き者にした。

『次はお前だ』

フリーデインはイベルタルが亡くなった悲しみで動けなくなっている。

シンテイはゆっくり近づき、絶剣の間合いに入ってから振り払った。だが・・・

『許さねえぞ・・・』

絶剣でフリーデインを攻撃した筈なのだが、当たらない・・・
もう一度絶剣で攻撃してみたのだが一緒だ。

『空間転移か・・・全能神である我と戦いとは面白い』
『お前は必ず殺す！』

フリーデインの目は赤く輝き、フリーデインの体は黄色から紫色に変わり、腕が2本から6本に増え、赤と黄色の光輪が出現し、紫色のオーラを纏った。

新・フリーデイン※【エスパー・毒】

フリーデインが全能神・シンテイに復習するために変貌した姿。
猛毒を操れるようになり戦いの幅が広がった。

光輪からは常にエネルギーを蓄える事が出来る。

『超猛毒バルカン！』

『3重障壁！』

※超猛毒バルカン※【猛毒】
猛毒の弾を無数に発射する。
当たれば即死するほどの毒。

※3重障壁※【神】

障壁を3重に張り強度を増した透明な壁。
色々な攻撃を防ぐことが出来る。

シンテイは直ぐに障壁を張り猛毒の弾に備えた！

猛毒の弾はシンテイの障壁に当たると砕け直ぐに溶けていったが・・・障壁も溶け出した！

『な!?!1重障壁・メタル化』

『火炎弾!冷水弾!波導弾!』

フリーデインはシンテイがメタル化させた障壁に3つの属性弾を撃ち、火炎弾でメタル化の1カ所を集中砲火し、熱くなった場所を冷水弾で急激に冷やし亀裂を入れさせ、波導弾で破壊した！

シンテイの3重障壁の1重目は突破出来た！

フリーデインの猛毒弾をまだ放ち続けているので、2重目の障壁は溶け出している。

『理性が吹っ飛んでいるかと思ったがそうでもないのか・・・』

シンテイは光りの柱を出現させその場を離脱と同時に障壁は消え、無数の猛毒は当たりの民家に当たり、溶けた。

シンテイは上空に移動した後、雷雲を出現させ辺りに雷が絶え間なく鳴り響いた。

『雷よ。フリーデインを攻撃しろ！』

シンテイがそう命じると鳴り響いていた雷は一斉にフリーデイン目掛け落ちた！

『あそこか・・・転移』

フリーデインは雷が当たる直前に転移し、シンテイの前に現れた。

『ほう？転移も出来るのか』

『極大魔法・次元閉鎖』

フリーデインはシンテイの話しを無視し次元閉鎖を発動させた。

シンテイは何もせずその技にかかり次元閉鎖空間に行った。

『やはりここに閉じ込められていたか』

『『全能神様!?!』』

ギラテイナ達はこの空間に閉じ込められ解決案を模索していたのだ。その時に空間が開き、そこからシンテイが現れたのだ。

『お前達の声が聞こえなくなったのでな、別次元に閉じ込められていると思うフリーデインに接触したのだ』

『流石全能神様です！あ・・・ここから出る方法が見つからず出れませんでした』

『俺達の得意技を放つても何も反応しなくて・・・』

『亜空切断ならばと思いましたがそれも不可能で・・・』

3体はそれぞれ言いたい事を言い、落ち込んだ。

シンテイは皆の方を軽く叩き・・・

『大丈夫だ。我がここに来た理由はお前達を助ける為だ。ここから出るぞ！』

『『はー！』』

3体から元気が戻りどうするかをシンテイに聞いた。

『我には解除術があるのでな。それは今から使う』

シンテイは両手を前に出し巨大な魔法陣を展開した。

『極大魔法・次元閉鎖・解除』

シンテイは極大魔法から一緒の技名の最後に解除と言った途端、この空間全土に渡り亀裂が入り、光りが見えた！

『さあお前達、今が暴れるときだ！この空間に入った亀裂の場所を攻撃しろ！さすればここから出られるぞ！』

『『分かりました！』』

3体はそれぞれ亀裂に攻撃し、破壊を繰り返した！そして・・・

最後の一番デカい亀裂を4体同時攻撃をして破壊した途端、元の世界に戻った。

元の世界に戻るとフリーデインが驚愕していた。

『な!?!なんでお前・・・達がいるんだ!?!』

『何故って?そりゃあそこの空間から出て来たんだ。さあ、殺るか!』

『『おう!』』

『くそがあああ!もう一度幽閉してやる!極大魔法!』うるさい』

フリーデインが極大魔法を展開しようとした瞬間、シンテイは絶剣を振り払い、フリーデインの腕全てを切り落とした!フリーデインはあまりの痛みにより地面にひれ伏した。

『お前達にトドメを譲ってやる。手加減なんてするなよ?』

『『勿論です!』』

3体はそれぞれ破壊光線をフリーデインに向け発射した時、フリーデインは障壁を発動した!だが・・・

『させるわけ無かるう?封印』

シンテイはフリーデインに封印をかけ技を封じた。そのせいでフリーデインは障壁を発動出来なくなり、3体の技を生身で受けることになり亡くなった。

『うむ。言い攻撃だ!この町にいる幹部クラスはバンギラスぐらいか』

『バンギラスの気配が先ほど消えましたが?』

シンテイは少しだけ考えるところ言った。

『奴は一度死んでいる。だが、新たな姿となって今も生きているぞ』

『え?』

『こちらに物凄い勢いで向かってくる奴がいるのは感知出来るか?』

ギラティナ達は意識を町全体に張り巡らせた。

『確かに・・・こちらに1体物凄い勢いで向かってきてます』

『この速さなら後1分もしないうちにここに辿り着きます』

『この者がバンギラスの転生者ですか?』

『その通りだ。転生バンギラスの力はお前達以上の力がある。反転世界に行き、行く末を見届けるがいい』

シンティはそう言うとバンギラスが来る方向に歩き出した。

『分かりました。ディアルガ、パルキア行くぞ』

『はい』

『』お気を付けて』

『ありがとう』

シンティは軽く手を上げてそう言いそのまま歩き出した。

ギラティナ達は反転世界に入り、シンティの動きを見ることにした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十三話

百四十三話

反転世界で事の成り行きを見守ることになったギラティナ達は一番見やすいポジションに着いた。

『全能神様……ご武運をお祈りしてます……』

ギラティナ達は擬人化状態になり椅子に座りながらシンテイの行動を見守った。

その頃シンテイは物凄い勢いでこちらに向かってくるバンギラス（バンギディア）にこちらから向かって行ってた。

『そろそろか……』

シンテイは地面に手を触れると魔法を掛けた。

『固有結界・剣山夢想』

※固有結界・剣山夢想※【神】

特定のエリアに結界を張り、外からの干渉を受けなくする。

夢の世界を作り出し、自身のステータスを大幅に上げる。

『これでいいか』

この技はシンテイの奥義でもあり、これを使う場合情報を漏らさないために見た者は必ず殺す事になっているのだ。

ギラティナ達には見ておけと言ったが、全てを見ろとは言っていない。この技を解除した後の光景だけを見ればいい。

バンギラス（バンギディア）もこの結界に入っている事を確認しているから大丈夫だな。

さあ……仕事を再開しようか！

『なんだこの違和感は？』

バンギディアは変な感覚を抱いたまま強烈な気配を醸し出している場所に向かっていた。

ある程度進んでいると白い服の男がいた。

『ん？まだ人間がいたのか……おい！その人間！』

『ん？やつと来たか。待ちくたびれたぞ』

その人間（シンテイ）はそう言うどゆつくりとこちらに近づいて来

ながら・・・

『名を聞かせろ』

『んだあ？名を聞くなら自分からっだろ!!』

バンギディアはそう言うとその人間に突貫した！

『それもそうだな。我はシンテイ!』

シンテイも直ぐに突貫し絶剣を出現させバンギディアに振り払った！

『俺様はバンギディア!』

バンギディアはそのままギガントヒルを発動し殴りかかった！だが！

シンテイはその攻撃を紙一重で躲しきり、絶剣でバンギディアの両腕を切断した！

『ぐっ!? 貴様あ!』

バンギディアは直ぐさま口から破壊光線を放ちシンテイを攻撃しようとしたが、シンテイは絶剣で破壊光線を切り裂きシンテイの後ろの方に流れていった。

『じゃあなバンギディア。名前だけ覚えておくよ』

シンテイはそう言うのとバンギディアの首目掛け絶剣を振り払った！バンギディアは避ける事が出来ず首が飛んだ・・・

シンテイはバンギディアがちゃんと死んでいるか確認したのち、バンギディアの能力を回収した。

全能神であるシンテイは情報を漏らすことは亡く避けなければならない。

もしバンギディアの能力で死んでもなお生き返るみたいな事になった場合は大変だ。

ちなみに、シンテイが去るときに光りの柱を発生させる意味は死んだ相手の能力を奪えると言う裏の目的もあるのだ。だが、今回は彼奴らがいるので、手動で能力を奪わなければならない。

・・・めんどくさいぜ。

5秒ほどすればバンギディアの能力は全てシンテイに受け継がれ、バンギディアは何の能力も持たないただの屍になった。勿論、怪しま

れない為に普通のポケモンの特性や、危険じゃないちよつと変わった特性を足すようにしているの、怪しまれる事はない。

作業が終わったのでシンテイは固有結界を解除し、ギラティナ達を呼んだ。

すると少し離れた建物から反転世界へ繋がる歪みが発生し、ギラティナ達が出て来た。

『お疲れ様です！変な結界のせいで中の様子は見れなかったのですが、大丈夫そうで良かったです！』

『ああ。ちよいと相手の結界に閉じ込められてな……このバンギディアと言うのが、バンギラスだ』

シンテイが指さした方には首が飛んでいるバンギディアだ。

ギラティナ達は渋い顔をしたが、擬人化になり黙祷を捧げた。

『礼儀正しいのだな。我は他にも行かなければならない場所がある』

『引き留めてしまってすみません！』

『お気を付けて行ってらっしゃいませ！』

『ああ。ありがとう。ではさらばだ！』

シンテイは少しだけ離れると光りの柱を発生させこの場から消えた。

『流石は全能神だな！この凶悪そうなのを簡単に倒しちゃったよ』

『ああ。流石だ！』

『俺達ももつと頑張らなければな！』

残った3体はそれぞれの空間に行き修行に励んだ。

ヒヤッコクシティの上空では、新たな力を複数手に入れたシンテイが町を見下ろしていた。

『流石に短時間で新しい能力を加えるとキツいな……無人の島に行き少しパワーを出すか……』

シンテイは独り言でそうつぶやき、誰もいなさそうな島に移した。

その後、その島に向け極大の破滅の光線を放ち、島とその周りに浮かぶ小島とその周辺の海諸共消し去った。

『あ……やり過ぎたか……』

シンテイは苦笑いした後、軽く海を復元させてからその場を離れた。

目指すはハクダンシティ。

あそこはポケモンに占領されている筈だから・・・

※全能神・シンテイ※【全能神】

新たな特性 無尽蔵

バンギディアの能力を受け継ぎ、永遠に疲れる事が無くなる。

新たな特性 邪神の力

1秒ごとに体力が大幅に回復する。それと同時に傷も回復する。

新たな特性 呪魔の力

呪いと魔法の効果をも凄く高める。

魔神・フアボロ【魔神】

呪魔系統の性能が大幅に上がる。

邪神龍・バンギディア【神・悪】

翼と尻尾の間の場所に無限の剣を生産でき、その剣で攻撃出来たり放ったり出来る。

これらの物を全て取り込み、全能神の特性に追加される。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十四話

百四十四話

シャラシテイからちャーレムのテレポートで逃げ延びたコルニはヒヤツコクシテイに辿り着いた。

そこにはディアスファイアに乗って来たマーシユもいた。

更に、バンギディアにより石化していたサトシとピカチュウもそこにはいた。

この石化状態はバンギディアが倒されてから解除され自由になったのだ。

サトシのピカチュウも石化が解除された時には健康な姿になっており、直ぐに動けた。

「俺はマサラタウンのサトシ！こっちは相棒のピカチュウ！よろしくな！」

「私はシャラシテイのジムリーダーのコルニよ！チャーレムの助けを借りながらここに来たの」

「私はクノエシテイのジムリーダーのマーシユよ。この子は私の相棒、ディアスファイア。よろしくね」

3人は簡単に挨拶を交わし、この町の状況を聞くと……

既にこの街には野生ポケモン達は全滅しており、全て町の端にあり墓地に埋葬した。

この町に派遣されていた幹部クラスのポケモン達は全て倒しており、サトシが埋葬した。

この町の人間達とポケモン達は全員生命エネルギーの機械に閉じ込められていたが、白い服の人が助けてくれて皆、無事に生還した。

今は町の復旧のために皆で協力しながら働いている。

この町のジムリーダーであるゴジカは、腹に大穴が空いていて、残念ながら亡くなれた。

「結構凄い事になっていたのね……」

「ああ。その人が来なければこの町は終わっていたから助かったよ」

「お礼は言ったの？」

「俺とピカチュウが石化中に全てが片付いていて、俺達の石化が解けたときにはこの状態。町の人達から話しを聞いて今に至るって感じだよ」

2人とも頷いてから少し考え、先にコルニが聞いた。

「さつきから思ってたんだけど・・・マーシユさんの後ろにいるもう1体は何て名前なの？」

「え？ああ！この方はディアスファイアにしてくれたマーファイア様よ・・・って見えるの!?!」

「ううん。波導を感じたから」

「サトシは？」

「俺は何も感じないな。ピカチュウは感じるか？」

ピカチュウは首を横に振り感じないと表現した。

「そつか。全能神様がマーファイア様に近い内にデカイ戦闘がミアレシテイで起こるから、それまでに戦力になるように具現化しろって言われてね。その具現化の方法が生命エネルギーなの・・・」

マーシユは申し訳なさそうに言いどうしようかと迷った時に、

「ならさ！その全能神様をお願いして具現化させて貰えれば早いじゃん！」

「あ!?!」

『そう言えばそうね・・・』

『む？言われてみればそうだな』

皆がその考えに至った時、早く行動しなきゃと思い皆が各自の移動手段を考えると・・・

「なあ？ディアスファイアは何人まで一度に運べる？」

『見て分からないか？俺は小型ドラゴン。マーシユ1人ぐらいしか運べない』

「チャーレムは一度に何人までテレポト出来る？」

『サトシ・・・すまんがコルニだけで精一杯だ』

「ピカチュウ・・・どうしよう?！」

『俺に聞くな!』

サトシが困り果てた時、上空から声が聞こえた！

「わくはっはっは！今日こそピカチュウを貰うわよ！行けバケツチャ！」

「お前もだカラマネロ！」

上空にニヤースの顔の形をした気球に、Rの文字が書かれた白い服を着た2人組がポケモンを出してきた！

「ロケット団!？」

「サトシ君！あいつらは!？」

「人のポケモンを奪う悪い奴等です！」

「OK！じゃあさっさと……ってあの気球使えばサトシ君移動出来るね！」

「ああ……!!!」

サトシとピカチュウが不気味に悪い、ロケット団は少し引きつったが攻撃を開始した！

「私達の気球をあげるつもりなんて無いわよ！バケツチャ、種爆弾！」

「カラマネロ、サイケ光線！」

2体の攻撃は真つ直ぐこちらに向かってくる！

「ピカチュウ！10万ボルト！」

「チャーレム！波導弾！」

「ディアスファイア！亜空切断！」

ピカチュウとチャーレムの同時攻撃により技は相殺された後に、ディアスファイアの亜空切断がロケット団が乗る気球に当たる直前

『ロケット団を攻撃しろ』

ディアスファイアはボソツとそう言い、亜空切断は気球に当たる直前、小さくなりロケット団だけを攻撃し爆発した！気球はサトシ達の前で落下し、ロケット団は天高くに飛ばされた。

「いやな感じく!!!」

気球はドスンと落ちたがあまり支障は無いみたいでそのままコルニとサトシ、ピカチュウとチャーレムの4人が乗り込み、マーシユはディアスファイアの背中に乗った。

「では！コルニが襲われた町、シヤラシテイに行こう！シンテイ様もきつとそこに来てくれるよ！ダメならミアレシテイで合うしか無い

けど」

「きつと大丈夫だ！さあ、出発だく！」

「「おおく！」」

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十五話

百四十五話

ハクダンシティでは町にいた人間達は全てポケモンセンターに運び生命エネルギーへの変換の機械に入れてあり、逆らったポケモン達も同様にそうしていた。

ブレインの送ったポケモン達とその幹部クラスのバシャーモ、プテラ、ヘルガー達は宴会していた。

『ふはあく！仕事が終わった後の酒は美味いぜ！』

『本当だぜ！』

『今日は飲むぞ〜！』

幹部の3体は次々に酒を飲み酔いしれていた。

だが、それも時期に終わる・・・

急にハクダンシティ上空が曇り始め雨が降り始めた・・・

『んだ〜？今日は雨降る天気だったか？』

『いえ！そんな事はありません！』

完全に酔ってるバシャーモは立ち上がると上空に火炎放射を放った！

『バシャーモ様!?!』

『ガハハハ！雨なんて燃やせばいいんだよ！』

バシャーモが雨を燃やしていると雷が鳴り響いた。そして・・・

火炎放射を適当に放っていたバシャーモに雷が落ちた！

『バシャーモ様!?!』

『ガハツ・・・』

バシャーモは黒焦げになり動かなくなった。

ヘルガーとプテラは直ぐに立ち上がったが飲み過ぎて真っ直ぐ立てない。

『くそっ！敵の事を考えとけば良かった！』

『本当だぜ！』

その直ぐ後、2体の真上に雷が落ちた時、プテラがいち早く気付きヘルガーを押しした。

『プテラ!?』

『お前だけでも生き延びろ!』

直後、プテラに雷が落ち黒焦げになり動かなくなった。

ヘルガーは自分の足を思い切り噛み付き気をしっかり持つようにした。

『お前達は洞窟へ避難しろ! 雷には極力当たらないように!』

『はい!』

その時、ハクダンシテイにある洞窟2カ所の直ぐ側にあつた木に雷が落ち、木が転倒し洞窟の前に覆い被さつた!

『ちっ! 居合斬り使える奴は木を切り裂け! 守るの技は使える者が多いだろう!』

『はい!』

『しっかり皆を守つてやれよ!』

『はい!』

その直後、ヘルガーに向かって雷が落ちた!

『守る!』

だが、酔いを吹き飛ばしたヘルガーは直ぐに反応し雷を防いだその直後!

直ぐに雷が後方に落ちポケモンの悲鳴が聞こえた! 更には傷ついていたポケモンを介護するための小屋に雷が落ち小屋が燃え、崩れた!

『どうなってるだ!?!』

更には雨が激しさを増し始め視界が悪くなっていく!

炎は直ぐに消えるが雷はあちらこちら落ちている! そのたびにポケモン達の悲鳴が聞こえだんだんと聞こえなくなつていった...

ヘルガーは生き残っているポケモン達を探すためハクダンシテイを走り回つたが、殆どが黒焦げになつておりもう二度と動かなくなつているポケモン達しか見付ける事が出来なかつた...

『なんで... なんでこうなつた?!』

ヘルガーの雄叫びがハクダンシテイに響き渡つた時、今まで一番デカイ雷が落ちた。

その震動は凄く、落ちた場所が円形の形に陥没しており周りの物を吹き飛ばしていた。

その陥没している中心部には黒焦げの状態になっているヘルガーが横たわっていた。もう2度と動かないが……

そのハクダンシティの上空ではシンテイが腕を組んで見下ろしていた。

『我が出るまでもないわ。さあ……研究所を破壊するか』

シンテイはポケモンセンターに行き、掴まっている人間達とポケモンを解放した。

その後、皆をポケモンセンターの外に避難させた後、破壊した。

『もう一つの町に行くか……』

シンテイはそうつぶやき光りの柱を発生させ移動した。

町の人間達はシンテイが移動するまでお礼の言葉を言っていた。

「あの白い人はいったい、何者なのかしら……」

ポケモンセンターから解放されたビオラは少し疑問を感じたが、命の恩人を疑うのは悪いと思ひ考えるのを止めた。

ビオラのポケモン達はブレインの仲間として行動していたので、シンテイが雷を落とし駆逐していた。

ビオラはそのことは知らなく町中を探し回り漸く見付けた時には黒焦げ状態のポケモン達だった……

町の至る所に黒焦げになっているポケモン達があり、町の人達は協力し合い、近くの森に埋葬してあげた。

無事だったポケモン達も手伝ってくれたので良かった。

シンテイは移動しながらハクダンシティの事を考えていた。

手っ取り早くブレインの手下共を一掃するにはこれがベストだった。

だが……終わってみれば残酷な状態のポケモン達の姿を町の間人共は見ることになる。

それなら最初から形すら残さなければ良かったのだな。次に行く街はそうしよう。

全てを無に返す！
シンティは次の町、シヤラシティを目指しながら移動した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十六話

百四十六話

シャラシテイを勝ち取ったりザードン達は遊ぶことはしなくそれぞれ鍛錬をしていた。

その時だった。町の周辺を見ていたヨルノズクから緊急連絡が入った！

『北の方角からこちらに向かってくる気球を発見！更にその横に見たこともないドラゴンに人が乗ってます！』

『気球にドラゴン？空を飛べる者共は俺に付いて来い！』

『はい！』

『地上は俺に任せろ。湖はギャラドスに任せれば大丈夫だ』

『助かる。行くぞお前達！』

『はい！』

空を飛べるポケモン達は、リザードンと一緒に飛び立ち気球の方角へと飛んでいった。

『俺達は町の警備を嚴重に。どこから来られても対処出来るように！敵を発見した場合は各自分かるように伝えること！』

『はい！』

ゲンガーは北の方角の方を警備し、他の者も数十名こちらに着いた。

それ以外の場所はここの倍の数で警備させた。

湖はギャラドスの活動範囲を広げるためこの町を占拠した時に破壊光線を使い地面を砕きながら湖にする範囲を広げ、シャラシテイの町は中央部分が大きい湖になり、その湖の少し潜った場所からは川に通じる穴もある。

『俺達はこの町全体を警備だ！野郎共！仕事を始めるぜ！』

『おおう！』

ギャラドス率いる水軍団は町に警備に回った。

その頃、気球とディアスファイアでシャラシテイに向かってきているサトシ達は、こちらに向かってくる大量の飛行タイプを目撃した。

「やっぱり町に着く前にポケモン達と戦闘になるか・・・サトシ君達はリザードンの周りのポケモン達を倒して！私とディアスファイアでリザードンと戦うわ！」

「了解！」

『我が足場を造ろう。皆で思う存分暴れよう！フィールド展開！』

「ありがとう！」

※フィールド展開※【エスパー】

半透明な足場を造り出す。

任意で結界を張る事が出来る。

サトシ達はディアスファイアに造ってくれた足場に移り、気球を角の方に固定しサトシはピジョットを出した。

コルニはモンスターボールからルカリオを出した。

前方にはリザードン達が率いるポケモンの大群がこちらにまだ向かってきていた。

「あの距離だと・・・1分程で到着しそうね」

「そうですね。ルカリオ、準備はいい？」

『大丈夫だ』

「ピジョットも準備はいいか？」

『問題無い』

「ディアスファイア、貴方も準備はいい？」

『無論大丈夫だ。リザードンは我に任せろ』

その時だった！

リザードンが破壊光線を放ってきた！

『障壁！』

直ぐにディアスファイアが障壁を張り、破壊光線を防いだ。

『流石にこの距離では防がれたか。野郎共！行くぞ！』

『おお〜！』

リザードン率いるポケモン達が四方に別れ高速で接近してきた！

「行けピジョット！ポケモン達を殲滅するぞ！」

『おう！』

「ルカリオ！波導弾で打ち落とさない！」

『了解！』

「ディアスファイア、リザードンを頼むわ！」

『ああ！』

ディアスファイアはリザードンに向かって行き、ピジョットは四方に別れたポケモン達を追った。

ルカリオは波導を周囲に流し、ポケモン達の場所を全て把握し、波導弾を打ち始めた。

リザードン率いる空部隊とサトシ達の空中戦が始まった！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十七話

百四十七話

シヤラシテイ近辺の上空戦

☆サトシ達VSリザードン率いる空部隊☆

「ピジヨット！エアスラッシュで南側の先頭集団を攻撃だ！」

『俺達もエアスラッシュ！』

『おう！』

南側の先頭集団のトップはヨルノズクでポケモン達を指揮していた。

ピジヨットのエアスラッシュはポケモン達の総攻撃により簡単に押し返されピジヨットの方に飛んできた！

「ピジヨット、電光石火で攻撃を躲しつつ攻撃だ！」

『お前達、電光石火でピジヨットを攻撃！俺達は援護する！』

その時だった。後方から攻撃が来た！

「な!?ピジヨット！急降下しろ！」

ピジヨットは直ぐに急降下し突然来た攻撃を間一髪で躲した。

そのまま急降下しながら下の方にいたポケモン2体を攻撃し落としてからサトシの方へと戻っていた。

ピジヨットを攻撃しようとした電光石火のポケモン達は途中で引き返しており攻撃は当たっていない。

その光線をした方向を見ると、オンバーンが先頭の集団がいた。

『今の攻撃を躲すか。なかなかやる』

『俺の獲物の邪魔をしないで欲しいが、今回は共同作業といこうか』

『ああ』

ヨルノズクとオンバーンが共同だ!?

俺はピジヨットだけ・・・俺のオオスバメを出すか。

「出てこいオオスバメ！ピジヨットと共同で2集団を倒すぞ！」

『おう！』

その頃ルカリオは黙々と波導弾を撃ちながらポケモン達を落としていった。

また1体落とし、更に1体落とし・・・8体目の時とうとう弾かれた！

『調子になるなあ！破壊光線！』

そのポケモンはボーマンダ。東の方向の先頭集団の指揮官だ。

ちなみに、西の先頭集団の指揮官はムクホークだ。

「ルカリオ！気合い玉！」

ルカリオは気合い玉を発射しボーマンダの破壊光線を相殺した！

ボーマンダは口から球体を上空に発射した。

『流星群』

ボーマンダがそう言うのと上空に発射された球体は弾け流星群が発生し辺りに降り注いだ！

「ルカリオ！波導弾で打ち落として！」

『了解！』

ルカリオは次々に降り注ぐ流星群を波導弾で破壊し攻撃を防いだが、ボーマンダはその間にこちらにむかっておりドラゴンクローで攻撃して来た！

「ルカリオ！ボーンラッシュで弾き返して！」

ルカリオは直ぐにボーンラッシュを形成しボーマンダが振りかざしてきたドラゴンクローを弾き返した！そのままボーンラッシュを一回転させボーマンダの腹に突き刺した！

『ぐお!? 貴様ああ！』

ボーマンダは攻撃を受けた事により頭に血が上り激昂し、上空に飛ぶと破壊光線を放ってきた！

「気合い玉！」

ルカリオは直ぐに気合い玉を放ち破壊光線を相殺したが、ボーマンダは破壊光線を連発してきた！

「な!? ルカリオ！波導弾を連打！」

『ウオオ！』

ルカリオは波導弾を次々に打ち出しボーマンダの破壊光線を何と

か相殺し続けていた時、ボーマンダの仲間であるトロピウスとオニドリルがルカリオの横に回り込み、エアスラッシュを放ってきた！

「あ！ルカリオ！ボーンラッシュを使って上に飛んで！」

『え？了解！』

ルカリオは少しだけ戸惑ったが直ぐに技を使い上に飛んだその時！2方向から放たれた攻撃がそこに当たり、技同士がぶつかった衝撃で爆発した！爆発の衝撃はコルニの方にも来たが影響力は少なく目を庇うだけで持ちこたえた。ルカリオは元の場所に着地した。

「ディアスファイアの加護が切れたのかな？」

『もしそうだとってもコルニは俺が守る！』

ルカリオはコルニの前に立ち、構えなおした。

「ありがとうルカリオ。この戦い勝つよ！我らの絆の元にメガ進化せよ！」

『メガ進化！』

コルニは指に付けていたキーストーンに触れ、ルカリオの腕に付けていたメガストーンと共鳴！虹色の光りが2人を包み込み、ルカリオはメガルカリオに姿を変えた！

だが、今回のメガ進化は通常のメガ進化と少し違い、色が違った。

通常の色と違い、虹色になっているのだ！

「その色は・・・？」

『分からない。けど、今までよりも力が溢れてる。コルニと俺の絆が具現化したのかもな』

「そうだよ！それだよ！さっすがルカリオ！さあ、攻撃開始よ！」

『ああ！』

新たな力を得たメガルカリオを見たボーマンダは、自身もメガ進化をした。

メガ進化同士の対決になったが、ボーマンダの方は仲間がまだまだいる。

攻撃中に攻撃が来ないかをコルニがしっかりと見定め、ルカリオに指示を出しながらのバトルになる。

厳しい戦いになるが、頑張るしかない！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十八話

百四十八話

シヤラシテイ戦

☆サトシ達VSポケモン軍団☆

『ブラストバーン!』

『亜空切断!』

リザードンはこちらに迫ってくるディアスファイアにブラストバーンを放ったが、ディアスファイアの亜空切断により簡単に消されそのまま突っ込んできた!

『ちっ!メタルドラゴンクロー!』

リザードンはドラゴンクローをメタル化させ強度を増した状態で亜空切断を攻撃し相殺した。

『皆は・・・うん。我の後ろだな』

『何を言ってるんだ?まあ良い・・・行くぜ!オーバーヒート!』

『新・阿空切断!』

ディアスファイアは目の前に以前より大きな刃状の異空間を発生させ放った。

それは全てを飲み込んでいき、リザードンの攻撃も、そのリザードン自体も、更には周辺にいたポケモン達も、最後には地上の木すらも飲み込んだ。

『マーシユ、片付いたぞ』

『ディアスファイア・・・腕が!』

ディアスファイアは自分の腕を見ると、腕がおかしな方向に向いていた。その瞬間痛みがはしった。

『ぐっ!?先ほどの技の後遺症か・・・』

「大きすぎる力は自身にも影響が出るって事?それより!早く手当するからこっちにきて!」

マーシユは直ぐにディアスファイアをこちらに來させ、回復の薬を使い腕を治してあげた。

意外にも回復の薬は効果があり、ちゃんと治ったのだ。

「良かった・・・サトシ君達はまだかかりそうね。手助けしよっか？」
『そうだな。早くシャラシティに行かないとダメだし』

ディアスファイアは東西の頭であるボーマンダとムクホークを倒しに向かう最中に、先ほど放った新・阿空切断を最小化させ爪に纏わせた。

ボーマンダ達の場所に近づくとルカリオが飽和攻撃を受けていた。

『新・阿空切断改良型』

ディアスファイアはボーマンダの後ろに回り込み、両翼を攻撃し異空間に消し飛ばした。その結果ボーマンダは空を飛ぶことが出来なくなり落下していった。

そのままムクホークの方に向かい攻撃しようとした時、ムクホークが鋼の翼で攻撃しようとしてきた。

だが、新・阿空切断の前では無力。そのままディアスファイアはムクホークの両翼を攻撃し、異空間に消し飛ばした。ムクホークはそのまま地面に落下した。

2体の頭が地に落ちたので、他のポケモン達は一斉にディアスファイアに襲いかかってきた。

『新・時の咆哮！』

※新・時の咆哮※【神】

時間を止め、時の咆哮を放つ神の技。

ディアスファイアが新・時の咆哮を放つ瞬間、辺り一帯の時間が止まり、四方八方から襲いかかってくるポケモン達が動かなくなった。ディアスファイアはそのまま時の咆哮を放ちそのポケモン達を攻撃した時、時間が元に戻りポケモン達は一斉に地面に落下していった。

「今のは？何が起こったの？」

『時を止め時の咆哮を放ってみた結果、こうなった・・・』
「え!？」

マーシユも流石に驚き固まってしまったが直ぐに気を取り直しディアスファイアを労った。

「ディアスファイア、凄いじゃないか！」

「まさか、あのポケモン達をこうもあっさり倒すなんて！私、ルカリオをメガ進化させて今から本気出すところだったんだよ（笑）」

「あちやくだからポーマンダはメガ進化していたのね」

『その・・・だな。すまない。次は横取りするような事しないようにする』

ディアスファイアの頭を下げた。

「ちよっ！結果はどうあれ空中戦は早く終わったから、逆にありがとうね！」

『そう言つて貰えると助かる。後は・・・地上戦と海中戦だな』

ディアスファイアはシャラシテイの方に向き直り、マーシユを背中に乗せた。

「そうだな。ピジョット、オオスバメ、モンスターボールに戻つてゆっくり休んでくれ」

『了解』

「ルカリオもモンスターボールに戻つてゆっくり休んで」

『了解した』

サトシとコルニはポケモンをボールに戻してから気球に乗り込んだ。

それを確認してからディアスファイアは足場を解除し移動を開始した。

シャラシテイの近くにあるゲート付近に気球を着地させ、ディアスファイアはマーシユを静かに降ろしゲートを通りシャラシテイへと入つて行つた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百四十九話

百四十九話

その頃シャラシテイでは、ゲンガーとギャラドスがリザードン達がいなくなつたのを見ていた。

『とうとう逝ってしまつたか』

『形すら残さないとはいな．．．』

ゲンガーとギャラドスは静かに目を瞑り黙祷した。

次に目を開いた時には仇を取ると決めた目だった。

再び上を向くとリザードンを消した謎のポケモンがこちらに向かってきていた。更には気球に乗ってくる人間が2人。ここから攻撃しても良いが、どうせならこの町で消してやる！

『行くぞお前達。ゲート前で開戦する』

『はい』

ゲンガーの仲間達もリザードン達が死んでから復讐してやると決めていたので、目が鋭く赤く染まっていた。

『ボスゴドラ、バンギラス、ゴローニヤ、ガブリアスは俺と共に最前線で戦ってくれ。他の者はゲート以外から来る者の対処を頼む』

『了解！』

ゲンガー達はゲートに向かい、それ以外はどこから来ても良いように町を見張った。

数分後サトシ達がゲートを潜りシャラシテイに着いた瞬間！

『『破壊光線！』』

『障壁全開！』

ディアスファイアが咄嗟に障壁を張ってくれたので助かった。

『お前がリザードンを殺した奴だな？』

『ああ。こんな荒事をして確認するのは、覚悟はしているな？』

ディアスファイアはマーシユに破壊光線の脅威を感じさせてしまったので凄く怒っている。

「ディアスファイア？」

『マーシユは下がっていてくれ。サトシ達もだ』

「わかった」

「気を付けてディアスファイア」

『任せろ』

ディアスファイアは既に新・阿空切断を爪に纏っている。更には超加速出来るように足には風を纏わせている。

『お前達！開戦だ！』

『おおく！』新・時の咆哮！』

ディアスファイアはゲンガー達が喋っている間に新・時の咆哮を放つた事により、時を止めた。

その間に爪に纏わせている新・阿空切断を剣状に変形させゲンガーの腕と足を切り落とし、その直ぐ後ろにいる奴等を全て一緒の様に斬ってやった。その後、ゲンガー共目掛け、思いつきり時の咆哮を放った。

時の咆哮の瞬間、時は戻りゲンガー達は目の前に時の咆哮が来る感じになっている。更に、足と腕を切り落としているので反撃も出来ない。ゲンガー達は断末魔をあげ消えていった。

「ディアスファイア・・・」

『まだ動くな。湖に強い反応があるから行って来る』

ディアスファイアは足に纏っていた風を爆発させ一気に湖の方向へと消えていった。

「マーシユさん。ディアスファイア、凄く怒っていましたね」

「それほどディアスファイアはマーシユの事が好きなのよ」

「私の事が好き？」

マーシユはポカンとしているが、コルニはニコニコしながらうんと首を縦に振っている。

サトシは苦笑いしているけど・・・

「そっか！私もディアスファイアの事好きだから良かった」

「マーシユの思ってる好きと私の好きは少し違うような気がする・・・」

コルニは少し溜息したが気を取り直し近くにあった岩に腰掛けた。

サトシ達も一緒の様にしてディアスファイアが戻ってくるのを待った。

今のディアスファイアの言う事を聞かないと俺達が危なそうだから・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十話

百五十話

ディアスファイアはマーシユ達をゲート付近に待機させ1人でシャラシテイのポケモン達を倒そうと考えていたが、俺の後ろを追ってくる気配を感じ取ったので振り返った。

『やっぱりバレてたか〜』

『マーフィア様でしたか。これより先、シャラシテイで俺は暴れますのでマーフィア様もここに残っていて欲しいのですが・・・』

ディアスファイアは困った顔をしながらマーフィアにそう言った。

『私は生命エネルギーを取りに行くだけです、戦いは貴方の好きにしてください』

『わかりました』

ディアスファイアはそれ以上何も言わずシャラシテイの湖へと飛んでいった。マーフィアもその後を追う。

一方、シャラシテイの湖ではギャラドスが完全に怒っていた。

『あの小さいドラゴンがああ！殺す！ぶっ殺す！』

ギャラドスは辺り構わず破壊光線を乱発していた。丁度その時、ディアスファイアが湖に辿り着き破壊光線の斜線に入ってしまった！ディアスファイアはその破壊光線を防ぐことすら出来ず当たった。

『貴様あらあ！死にさせえ！新・時の咆哮！』

『アクアジェット！』

ギャラドスはその体に合わない素早い速さでディアスファイアに辿り着き、技を発動させる前に攻撃した！

ディアスファイアは体勢を崩し技の発動が出来なかった。ギャラドスはそのままドラゴンテールをディアスファイアの首目掛け上から勢いよく振り下ろした！

デカい地響きと共にディアスファイアは湖の直ぐ側の地面に顔を半分以上埋めてる状態となっていた。

『お前らー！一斉攻撃だ！』

『おうー！』

そのかけ声と共に湖から大量の水ポケモン達が出て来て一斉の攻撃を開始した。

その攻撃は避けることすら出来ないディアスファイアに当たり大爆発を起こした！煙が晴れている時に赤い血だけが残っていた。

『俺達の勝ちだ〜！』

『新・時の咆哮！』

『っ!?アクアジェット！』

ギャラドスは叫んでいる途中に先ほどと一緒の技名を言ったポケモンの方を瞬時に向き、直ぐにアクアジェットで攻撃した！そのポケモンは先ほど殺したはずのディアスファイアだった！

『ドラゴンテール！』

ギャラドスは先ほどの様にドラゴンテールをディアスファイアの首目掛け思い切り叩き降ろした！

ディアスファイアはまた顔を半分以上埋もれた状態となり、今度はギャラドス自身がその場で破壊光線を放った。

ディアスファイアは避けられずその攻撃を受け消え去った。

『『新・時の咆哮！』』

『3方向だ?!』

流石にこれは防ぎきれない！いったいどうなってやがる！

その瞬間、ディアスファイアの技効果で時間が止まった。

ディアスファイアは上空から急降下し新・阿空切断を纏った爪で体を真つ二つに切り裂きそのまま上空に戻って行った。その後、時間は元に戻り3方向からの同時攻撃がギャラドスを襲った。

『この力も良いな。幻術に掛け相手の動きを止める。発動者は一定の距離を保てば技を掛けられる。高性能だ』

ディアスファイアの新たな技『空間幻術』。

※空間幻術※【エスパー・神】

一定の距離に幻術を掛ける。

1分しか保たないが、その間相手は動けない。

この攻撃によりギャラドスは真つ二つされた体ごと異空間に飛ばされた。

ギャラドスからすれば時の咆哮を受けた感じになっており異空間に飛ばされるよりも精神ダメージを受けているので、痛みは既に無く異空間に飛ばされる事になっている。

『この町も取り戻せたね。さあ、ミアレに行くわよ』

後ろから急に声を掛けられたので振り返ると、紫色の妖精がそこにいた。

『マーフィア様!?とうとう現界出来たのですね!』

『ええ。それと、貴方が相手していたポケモン以外はこちらで処理しておいたわ。マーシユ達を連れてミアレに行きましょう』

『ですが、まだハクダンシティに行っていません』

ディアスフィアはそちらもポケモン達から町を取り戻そうとしていた。

『もう既に町は取り戻されているわ。シンテイ様が処理してくださいましたのよ』

マーフィアは苦笑いしながらそう言い、早く行こうと促した。

『そんなに急ぐ理由はもしかして・・・ブレインと言う男が既にミアレに着いているのですか?』

『そうなのよ。私がテレポートを使って瞬時に目的地に行くから皆を集めて』

『了解しました!』

ディアスフィアは足に爆風を纏い超加速し家や木など関係なく突っ込みマーシユ達がいるゲートに向かった。

マーシユ側からすれば、凄い勢いでこちらに迫ってくる者に恐怖を感じたが、目の前でディアスフィアが止まり安堵した。

『ディアスフィアだったのね。驚いちゃった』

『すみません。急ぎでお迎えに参りまして。マーシユ様、サトシ達。俺に掴まってくれ。マーフィア様の所にお連れする』

『わかった』

サトシ達は直ぐにディアスフィアの手に取り、マーシユはディアスフィアの背中に乗った。

ディアスフィアは瞬間移動を使いその場から消え、マーフィアの前

に現れた。

『あら。結構早いじゃ無い。さあ、行くわよ！』

『お願いします』

マーフィアはディアスファイアの頭に触れ、ミアレシティへとテレポートした。

時は少しだけ遡り、シンテイがハクダンシティに到着した時、町全体を深い眠り状態にして、掴まっている人間共とポケモン共を秒速で助け出し、近くの森に避難させた。

その後、町全体を覆うほどの強大な魔法陣を上空に展開し、白い光りが魔法陣からハクダンシティに向け落ちた。

その光りは全てを無にし、光りが収まった時には円形状に何も無い更地へと変わっていた。

シンテイはそのままミアレシティへと移動した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十一話

百五十一話

フウジョウタウン側の16番ゲートからは、ブレインと、最強クラスの間達である、

サーナイト

エルレイド

アルセウス

ミュウツー

ミュウ

ゼルネアス

ダークライ

このポケモン達を筆頭にミアレシティの中心あるプリズムタワーを目指して歩いていた。

それ以外の幹部クラスのポケモン達である、

ハッサム

クチート

ライボルト

ジュペッタ

ガブリアス

ユキノオー

このポケモン達は2人1組に分かれミアレシティにいる人間達を全て始末させ、ポケモン達は全て仲間にさせるように命じた。勿論、逆らえば容赦なく始末していいと伝えてある。

同時刻、ヒヨクシティ側の13番ゲートからは、ジファとその相棒、ハッサム。それに加え、スファイアがミアレシティに着いた。

3人はプリズムタワーを目指して歩いていた。

同時刻、コボクタウン側の5番ゲートに、サトシ、コルニ、マーシユとディアスファイア、マーファイアが到着した。

『ブレイン達はプリズムタワーに向かっているみたいね。みんな、急ぐよー!』

『俺が先に行こうか?』

「みんなで行きましょう。何かあったときに力になってほしいの!」
『了解した!』

サトシ達はミアレシティに走って向かって行った。

同時刻、ハクダンシティ側の4番ゲートに現れた全能神・シンテイは、まだブレインが活動を開始していない事が分かり、少しだけ安堵するとプリズムタワーに向かおうとした時、16番ゲート側からポケモン4体がこちらに向かってきた。

『ん?あいつも仲間に入れさすか!多い方がいいもんな!』

先頭を走っているガブリアスがそう言いながらシンテイの前に着き、仲間にならないかと聞いた。

『何の仲間になれと?』

『この世界の王となる御方の仲間にだよ!ならないなら死んで貰うぜ!』

ガブリアスが爪を振り上げた瞬間、ガブリアスの腕が落ちた。

『ギャアアアア!腕がああああ!』

『うるさいなあ』

シンテイはガブリアスの頭に手を置くと、体の中から爆発させた。その光景を見ていたガブリアスの後ろにいた連中が一斉にシンテイに襲いかかって来た!

『『貴様ああ!』』

『許さねえ!』

3体が一斉にシンテイを攻撃しようとしたとき、そのポケモン達の周りに異空間が発生した!

『お前達うるさいから消えてくれ』

シンテイがそう言うとその異空間は瞬間的に大きくなり3体を飲み込んだ!異空間はそのまま直ぐに消え何事も無かったように元に戻った。

シンティはプリズムタワーに向かい再び歩き出した。

同時刻、クノエシティ側の14番ゲートからは、擬人化のポケモン4体が向かってきていた。そのポケモンは、

水の都・アルマトーレの四天王！

四天王第一席・ダークライ【上級神・悪】

四天王第二席・ゲノセクト【上級神・虫】

四天王第三席・ボルケニオン【上級神・水】

四天王第四席・ディアンシー【上級神・妖】

バロンの仲間の最強戦力、この戦いが始まるのをアルセウスから聞いたので駆けつけたのだ。

ちなみに、アルセウスは【全能神】のタイプになっている。

同時刻、バロンとセレナ、ウルップ達はエルドラドの瞬間移動でミアレシティの14番ゲートに着いた。

丁度その時、バロンの仲間であるアルマトーレ四天王が目の前にいたので声を掛けた。

「お〜い！お前達久しぶりだな！」

『ん？おお！バロンじゃないか！久しいな！』

ダークライが直ぐに気付き、バロンとハグをした。

セレナやウルップ達はと言う事か分ならず混乱している。

『嬉しい再開ではあるが、今は緊急事態だろ？バロン、我ら四天王の力をバロンに貸す。この地方で最悪の悪さをしようとしてるブレインと言う男を倒して欲しい！』

ゲノセクトはそう言い頭を下げた。それを見たダークライも直ぐにハグを止め、頭を下げた。

「頭を上げてくれよ。勿論、悪いことをする奴は絶対に倒す！力を貸してもらおうぜ！」

『ああー！』

話しが纏まったので、ディアンシーが、

『それでは、プリズムタワーに向かいますか』

「はい！」

Baron 達はプリズムタワーに向け歩き出した。その最中にセレナとウルツプに軽く四天王の事を話してあげた。

凄く驚いていたが、目の前の光景を見て納得したようだ。

ミアレシテイの各出入り口から、それぞれのポケモンとトレーナーがプリズムタワーに向かった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十二話

百五十二話

ミアレシテイの中心に建つプリズムタワー。
今ここに5方向からそれぞれのトレーナーが集まった。

「俺の計画の完成を皆で祝ってくれるかな？」

『そんな訳なからう人間』

シンテイは腕を組みながら見下すようにそう言った。

「だろうな。では、俺の最強のポケモン達と遊んで貰おうか！行け！
お前達！俺の邪魔をする者共を皆殺しにしろ！」

『『おう！』』

ブレインの後ろにいたポケモン達、ミュウ、ミュウツー、ダークライ、ゼルネアスが攻撃態勢に入った！

ブレインはそのままプリズムタワーに向かい歩き出した。それを
守るようにサーナイト、エルレイド、アルセウスが付いて行った。

『貴様ら邪魔だ！』

シンテイはミュウ達の上に魔法陣を展開させた。

だが、ミュウが即座に反応し魔法陣に桃色の光線を放ち掻き消した
！

『流石は全ての技を使うポケモンだな』

シンテイは満足そうにそう言い腕を組み直した。

その間にミュウツーはサトシの方に、ダークライはジファアの方に、
ゼルネアスはバロンの方向に向かった。

『手際が良いのだな。では、始めるとしようか！』

『そうですね』

ミアレシテイ大決戦

☆全能神・シンテイVSミュウ☆

ミュウは瞬間移動しシンテイの背後に回った！

『波導弾！』

『障壁よ！』

ミュウは桃色の波導弾を放ったが、シンテイが張った障壁により防がれた。

ミュウはまた瞬間移動しシンテイの上に移動した。

『ヴァルキリーファイア！』

『多重障壁』

※ヴァルキリーファイア※【神・炎】

煌びやかな炎で攻撃する。

ミュウは両手を前に出し技を放ったが、それすらも障壁を1枚破つて防がれた。

ミュウは元の位置に戻り直した。

『それだけか？』

『今はね。次はそちらからどうぞ！』

『ああ。では・・・行くぞ！』

シンテイは地面に手を置くと、目の前に強大なポケモンの石像を出現させた！

更にその石像は機敏に動き、ミュウに突貫した！

『自分から動かないの？波導刃！』

※波導刃※【神】

波導を刃状にして放つ。

ミュウは尻尾を前に振り払い桃色の波導刃を放った！

その刃は巨大なポケモンの石像の腹を真っ二つに切り裂きそのままシンテイの方へ飛んでいった！

『ほう？我を序でにと攻撃してきたか。シャインニングボウ！』

※シャインニングボウ※【光】

光りの矢を放つ。

シンテイは左手を前に出し、光りの弓を形成し右手でシャインニングボウを番え引き絞った。

波導刃が直前まで来た時にシャインニングボウを解き放った！

波導刃は簡単に消され、大地を穿ちシンテイが出した巨大なポケモンの石像を木っ端微塵に吹き飛ばしそのままミュウの方に飛んで

いった!

『何て出力!瞬間移動!』

『させるかよ!』

シンテイは手を地面に付け、ミュウの足下の地面を一気に上がらせ
ミュウの足を捕らえた!

『え!?!』

土はミュウの足を捕らえると直ぐに体の方まで浸食していく!

『溶ける!』

ミュウは体を液状に溶かし、土から逃れ直ぐに実体化し瞬間移動し
上空に移動したその時!シャインニングボウが先ほどいた場所を通
り過ぎた。

『危なかつた!お返ししなきゃね!』

ミュウは両手を空に向け特大の魔法陣を展開した!

『ほう?なら我も極大魔法を使うとするか』

シンテイは地面に特大の魔法陣を展開した。

『極大魔法!』

『空千・絶凶斬!』

『アース・ユグドラシル!』

※極大魔法・空千・絶凶斬※〔空・神〕

空に巨大な魔法陣を展開し、そこから全てを切り裂く真空刃を地上
に落とす。

※極大魔法・アース・ユグドラシル※〔地面・神〕

地上に巨大な魔法陣を展開し、そこから全てを緑に変える自然エネ
ルギーを発射する。

シンテイとミュウの互いの大技はミアレシテイを大きく変え、ぶつ
かり合った。

ミュウの技でミアレシテイの建物は無残に切り刻まれ、シンテイの
技でミアレシテイ全土に緑が広がった。

2体の技は互角では無くシンテイが勝っている。

ミュウはフルパワーで放っているにもかかわらず、シンテイは余裕
の表情。

10秒経つときには、シンテイの技はミュウに届く寸前だった。

『私は！負けない!!』

『直ぐに終わらせてやる』

シンテイは手をクイツと自分の方に向けるとミュウの後ろに突如、剣が出現しミュウの体を貫いた！

貫いた剣は直ぐに光りの粒子になり消えた。

ミュウは刺された痛みで技の発動を維持出来なくなり力が弱まった時、シンテイの攻撃がミュウを襲った！

ミュウの体に空いた穴から緑の芽が出て来て、ミュウの命を吸い取り、芽が伸びていきミュウを包み込んだ。

それは更に大きくなり、やがて1本の大きな世界樹のような木に変わった。

ミアレシテイ全土にも緑が更に広がり、町の電気は全て機能を停止した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十三話

百五十三話

Baron達はそれぞれ目の前に来た伝説ポケモンと向き合っていた時、シンティが放った大技により大地が一気に緑に変わった！更にはミュウの大技とぶつかり合った瞬間、その規模は更に広がり、そのミュウがシンティの技に敗れ世界樹みたいなデカイ木に変わった時にはミアレシティ全土が緑に変わってしまった。

これにはブレインも動きを止め・・・俺達も、ポケモン達も動きを止め、全能神の力の一部を知った感じがした。

Baronは直ぐに我に返り、目の前にいるゼルネアスを見た。

ゼルネアスもBaronに向き直っている。

『では、始めますか！』

「ああーいくぜー！」

ミアレシティ大決戦

☆Baron VSゼルネアス☆

「エルドラド！裁きのつづてー！」

『ジオコントロール』

エルドラドが球体を上に放つ間、ゼルネアスは自身を強化した。その後、球体が弾け裁きのつづてがゼルネアス目掛け降り注いだ！

だが、強化済みのゼルネアスに並大抵の攻撃など通じる訳も無く、簡単に全ての攻撃を躲された。

「ちっ！青竜王！紅皇龍！エルドラド！一斉攻撃だ！」

『『『おうー！』』』

Baronの後ろにいたウルップとセレナはやつと我に返り戦いに参加しようとしたが、四天王のゲノセクトに止められた。

『お前達では邪魔になる。ここで大人しく見ておれ』

「でもー！」

『あの戦いを見て力になれるとでも？』

ゲノセクトの言うとおり、バロンが戦っているのは普通じゃかなわない相手、ゼルネアスと戦っている。

でも！私にはアテナがいる！

「私にはアテナがいる！アテナと一緒にこの戦いに参戦させて貰おうよ！」

『いいや、ダメだ。アテナの今のレベルでは話しにならない。どうしても言うなら俺が力になってやる』

ゲノセクトはセレナの方を軽く叩いた。

「本当に!？」

『ああ。ゼルネアスには相性が良いしな。では・・・始めるとしようか！』

「はい！アテナは待っててね」

『了解しました』

こうしてセレナは、ゲノセクトと手を組みバロン達と一緒にこの戦いに参戦した。

直ぐにバロンの方に行くと丁度バロンが、3体に指示を出した時だった。

「セレナとゲノセクト?」

「私達も一緒に戦うよ！」

「ありがとう！ゼルネアスは今、自身を強化している状態で素早さと特攻が凄く高くなっている！」

「了解！」

『了解した』

ゲノセクトは直ぐに戦闘態勢に入りセレナの指示を待った。

「ゲノセクト！エルドラド達と強力してゼルネアスを倒すよ！」

『心得た』

ゲノセクトは宙に浮くとエルドラドと逆側に飛んでいった。

『む？ゲノセクトか』

『強力させて頂きます！』

「ゲノセクト！ラスターカノン!!」

「エルドラド！オーバーエンド！」

青竜王！オーシャンセイバー！

紅皇龍！オーバーレイ！」

ゲノセクトはラスターカノンを放ち、エルドラドはオーバーエンドを上から勢いよく振り下ろし、青竜王は蒼剣に海の力を纏わせ横に振り払い斬撃を飛ばし、紅皇龍も紅剣に太陽の力を纏わせ横に振り払い斬撃を飛ばした！

『4方向同時攻撃か、ミラーフォース！』

※ミラーフォース※【エスパー・神】

虹色のバリアを張る。このバリアに当たった攻撃は全て跳ね返される。

ゼルネアスの周りにミラーフォースが張られ、4体の同時攻撃が当たった！

だが、ミラーフォースの効果でそれぞれの技が跳ね返り、自分達の方に技が返って来た！

4体はそれぞれ返って来た技を避け、バリアを壊しに掛かった。

『新・阿空切断！』

『呪縛！』

エルドラドは尻尾を勢いよく振り下ろし新・阿空切断を放ち異空間の刃をゼルネアスに放った！それと同時に紅皇龍が呪縛を使い、バリアを締め付け逃げられないようにした。

『ちっ！あの技を食らうのはキツイな・・・時空振動！』

※時空振動※【エスパー・神】

次元を揺るがし大地震を起こす。

ゼルネアスは自身の角に重力を纏い振り下ろした！

その時、重力を下に降ろした事により、ポケモン達や今放たれた技が地面に落ちた！

ゼルネアスの角が地面に当たった瞬間、その地面が地中深くまで陥没し、その余波が周りに行き緑一色の大地は全て吹き飛ばされた。その時、大地が大きく揺れた！

技を放ったゼルネアスも体勢を崩し地面に倒れ、他の者たちも体勢を崩し地面に倒れた。

唯一干渉を受けなかったのは、全能神であるシンテイのみ。

この大地震により大地の至るところが割れ始め、崩壊していく……建物は割れた地面に飲み込まれるように沈んで行き、 Baron 達は必死に地面にしがみつき、落ちないようにした。

ポケモン達もトレーナーを守りたい気持ちはあるが、重力が下の方に強制的に向けられており、飛ぶことが出来ない！それどころか、ポケモン達には効果が高いのか、地面に強く引き寄せられている。

『動けねえ……』

「エルドラド……青竜……紅皇……無事か？」

『俺達は大丈夫だ。マスターの方は大丈夫か？』

「今は大丈夫」

他を見るとそれぞれのトレーナーが互いのポケモンの無事を確認していた。

ブレインはと言うと、サーナイトが張った特殊結界の中でエルレイドと一緒にいた。しかも手には先ほどの機械を持っていた！

「やばいぞ……あいつの手に持っているのが設置されたら……」
『分かってはいるが動けないんだ！』

紅皇は怒鳴ると、無理矢理体を動かそうとしたその時！
目の前に白い光線が飛んでいきゼルネアスに当たった！

光線元を見るとシンテイがゼルネアスに向け手を翳していた！

『シンテイ様！』

『お前達は黙れ。私の造った大地を汚された罪は重いぞゼルネアス』

シンテイは更に白い光線をゼルネアスに打ち込むと、打ち込まれた所が光りの粒子になっていき、体が消え始めた！

『な!?俺の体が!』

ゼルネアスの体は抵抗出来ないまま完全に消えた。

ゼルネアスが消えた事により技は解除されこれ以上酷くなる事は無くなったが……

現状は……

ミアレシティの至る所に大地が割れて出来た大穴があり、建築物などは全て倒壊し瓦礫の山と化していた。その瓦礫の殆どは、先ほどの

重力により大穴に殆ど落ちていた。

ミアレシテイの町人半数以上は、今回の大地震により亡くなった。生き残りは5カ所から集まったバロン達と町人の三割ほどだ。

『極大魔法・アース・ユグドラシル!』

シンテイは町に再び巨大な魔法陣を展開し、ユグドラシルを再び使い町全土に緑を広めた。

瓦礫の山や割れた大地には緑が生い茂り、大穴からは大樹が生え、割れた大地の場所には川が流れた。

「凄い・・・これが全能神様の力か・・・」

「おいおい・・・どんなけ力が有り余っているんだよ・・・」

「アレだな!流石はトップクラスの伝説だな!」

『お前達なあ・・・一応言っておくが、我はポケモンではないからな? まあ姿を見れば分かるはずだが?』

皆は今一度シンテイを見つめ直した。

「えくと・・・擬人化じゃなかったって事ですか?」

『え?ずっとそう思ってた感じか?』

「二はい」

「アレだな!人間でも伝説になれば最強になれるんだな!」

ウルップは豪快は笑い始めたがまだ、戦いは終わっていない・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十四話

百五十四話

ブレインのポケモンはそれぞれ相手したい奴の場所に行ったが、ミュウとシンテイの極大魔法に巻き込まれ、更にゼルネアスの時空振動の攻撃にも巻き込まれた結果、戦闘する事無くこの世を去った…

ブレインはと言うと、サーナイトの特殊な結界が続いており無傷で元プリズムタワーの下にいた。エルレイドもその結界の中におり、体がデカイアルセウスは自身で特殊な結界を張り攻撃を防いだ。

結果・・・ブレインのポケモンは残り3体になったのである。

一方、バロン達は全員が生き残っており軽い軽傷を負った者が数名いるくらいだ。

『ブレイン様、今のうちに最後の装置を設置してしましましょう』

「ああ。これで漸く俺の計画が完成する！」

ブレインは持っていた装置を地面に置いた時、装置の面の部分が開きアンテナ状の物が出て来た。

「よしー！」

ブレインは立ち上がり目の前にいるポケモン達を見た。

「装置を設置出来たおかげで俺の計画は完成した！伝説ポケモン達よ！俺に従え！」

伝説ポケモン達はブレインの方を見ると一斉に口を開き破壊光線を放った！

「え？」

『ブレイン様!!』

エルレイドが咄嗟にブレインの前に立ち腕をクロスし伝説ポケモン達の破壊光線を受け倒れた！

「エルレイド!?おい！大丈夫か!しっかりしろ！」

『エルレイド!しっかりするのです!』

サーナイトとブレインは動かないエルレイドに声を掛ける。

機械はしっかりと働いているのに何故言う事を聞かない?何か問題でもあったのか?

『人間、お前はこの状況をみてまだ分かっていないようだな。この町は既に電気は使えなく、更にはこの町以外の場所も電気も通じなければ大地も一緒のようになってる。分かるか？お前の機械はただのガラクタに変わってしまったのだよ』

シンテイは腕を組みながら見下した。

伝説ポケモン達もシンテイの方に集まり、バロン達もシンテイの方に集まった。

『この地方の秩序を崩そうとした罪、ここで償って貰うぞ。アルセウス、お前は邪魔するなよ？』

『はい』

アルセウスはブレイン達からスツと離れシンテイ達の後ろに回った。

『何故アルセウス様があちら側にいたのですか？』

『隙を見てブレインを消そうと思ったからですよ。私以外の伝説達やポケモン達は違うと思いますけどね』

『そうだったのですね！』

ダークライはそう言うのとシンテイの方に向き直った。

『お前らあくエルレイドを良くも！』

『許しませんよ！』

ブレインとサーナイトはゆっくり立ち上がり構えた。

『人間風情が我に挑むとはな・・・掛かってくるがいい！』

「サーナイト！剣とガントレットを出してくれ！」

『かしこまりました』

サーナイトは手を合わせてから離すと1本の紫色の剣が出てきてきた。その後もう一度一緒の事をするると銀のガントレットが出来てきた。それをブレインが装着した。

ブレインが剣を持つと刀身から禍々しいオーラが出て来た。

『邪刀・ムラサメか？』

※邪刀・ムラサメ※【呪・刀】

呪いの刀の1種。

自身の邪悪な心が多いほど体を蝕み、刀に力を与える。

ブレインの刀を持っている手からは血が流れ刀に吸収されている。

『ブレイン様……』

「サーナイト。エルレイドを連れてここから逃げてくれ。」

『ブレイン様……私も一緒に戦わせてください！』

サーナイトは懇願するように、胸の前で手を組みブレインを見つめたが、

「ダメだ。この刀の特性はお前も知っているだろう？だからこそだ」

『でも！』

「頼む……」

ブレインは悲しい顔をサーナイトに見せ頼んだ。

『分かりました……』

サーナイトはエルレイドに触れると、テレポートを使いエルレイドごとこの場を離脱した。

『話しは済んだようだな。始めるとしようか！』

「ああ！この勝負負けるわけにはいかないんだ！」

邪刀は更にブレインの血を吸い取りパワーアップした。

「おおおおー！」

ブレインは走り出しシンテイに向かって行った。

シンテイは右手を前に突き出すと、その周りに無数の剣や槍が出現し発射された。

ブレインは放たれた剣や槍を躲し、躲しきれなかった物はムラサメで切り落とした。

『ほう？ならばこれならどうだ？』

シンテイはブレインの足下に剣先を無数に生やしブレインの足を串刺しにした！

その後、剣先全ては光りの粒子になり消えた後、真後ろから無数の槍がブレインの背中を串刺しにした！

更に槍は光りの粒子になり消えた後、全方位に剣や槍が出現。この時既にブレインの体中から血が流れている……

ムラサメが大好き名血が……

ドクン・・・

その場にいた者全員が聞こえるほどの心臓の音が聞こえた時、ブレインの持っていたムラサメが先ほどよりも禍々しいオーラが発せられ、ブレインを包み込んだ。ブレインの目は血の様に赤く染まり、筋肉が膨張し服が破けた！

「おまえを、殺す！」

そう言いブレインは突貫してきた！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十五話

百五十五話

シンテイに向かい突貫して来るブレイン。俺達がそれを阻止しようと思いきや動こうとしたら、シンテイに止められた。

『お前達は何もするな。我一人で十分だ』

シンテイはそう言い、腕を組みながら辺りに無数の剣や槍を出現させた。

『刺し穿て！』

シンテイがそう言った瞬間、辺りに浮かんでいた無数の剣と槍がブレインに向け放たれた！

ブレインはムラサメのオーラを一気に拡大し、横に薙ぎ払い斬撃波を飛ばし剣や槍を全て弾き返した！

『ほう？ならばこれはどうだ？』

シンテイの周りに無数の魔法陣が出現した後、一斉に白い光線が放たれた！

あの光線は受ければ光りの粒子になり消えていくのを何度か見たことがある、当たれば危険な技だ。

ブレインは再びオーラを一気に膨れあがらせ、放たれた光線を切り裂き消滅させ、ムラサメの攻撃範囲まで来た。

「死ねえ!!!」

ブレインは全体重を乗せた一撃をシンテイに放った！

『人間が・・・魔力障壁！』

※魔力障壁※【神】

普通の障壁と違い、魔力によって造られた障壁。

発動者の魔力により防げる物が変わる。

シンテイの周りに紫色の障壁が張られ、ブレインのムラサメを止めた！

ブレインは直ぐにバックステップで後退し、鎧を外した。

『鎧を外すか。スピードで勝負か？』

「ああ！行くぜえ！」

ブレインは鎧を外した事により、素早さが段違いに上がり瞬く間にシンテイの懐まで辿り着いた！

『なに!?!』

「これで死ねえ!!」

ブレインは勢いよくムラサメを振り上げた！

が・・・シンテイは光りの粒子になり消え、ムラサメはその粒子を切り上げた。

「な!?!どこに行きやがっ!?!」

『今のは正直危なかったぞ。だが、これでお終いだな』

シンテイはブレインの真後ろに回り込んでおり、シンテイが伸ばした手はブレイン体を貫いて心臓を掴んでいた。

『なかなか楽しませて貰ったぞ。さらば元カロスの王よ』

「無念」

バシユ!

シンテイはブレインの心臓を握りつぶした事によりブレインは死んだ。ムラサメと外した鎧は同時に消えた。

シンテイはブレインに手を翳すと光りがブレインを包み込む。

『あの世でゆっくり休め』

光りは粒子となり空に消えていった。

「『シンテイ様!万歳!』」

『『シンテイ様!万歳!』』

シンテイの後ろにいた人間達とポケモン達は各々手を上げ下げし歓喜していた。

その中からバロンがシンテイの方に走ってきた。

「シンテイ様!流石です!」

『ありがとう。私の仕事は一応は終わりだが、ミアレシティとその周辺の市町村は壊滅している。俺の技で緑をそこに届くように放ったから、木などは生えている筈だ』

「そこまで配慮してくださり本当にありがとうございます!」

バロンの後ろには皆が並び、

「シンテイ様!本当にありがとうございます!」

「後のことは我々で力を合わせてやっていきます」

「シンテイ様、今後も我々を見守っていてください」

『ああ。そうするよ。逃げた二匹に関してはこちらで処理をしよう。復讐されたらお前達など直ぐに死ぬからな』

シンテイは思い出した様な顔をしてから、バロンとセレナに言った。

『後、バロンとセレナのポケモンは特殊だ。今のままではいずれこの世界に恐怖を与えるだろう。我が元のポケモンの状態に戻そうと思うのだがどうだ？』

バロンとセレナは互いの顔を見合った後、自分のポケモン達を見た。

「エルドラド、青竜王、紅皇龍。お前達はどうしたい？俺は、お前達に意見を尊重するよ」

「アテナもどうしたい？私も貴女の意見を尊重するよ」

エルドラド達は自分の気持ちを考え、1分程たった時全員が顔を上げた。

『俺はこのままの姿で、マスターを守り続ける。この世界が俺を受け入れなくてもそれでいい。俺はマスターを守るなら何だってするから』

『俺もだ。マスターを守る強さをやっとな手に入れた。この先何があるうとも、俺はマスターを裏切らないし、この世界が俺を受け入れなくてもいい』

『俺もだな。マスターを守れるならそれでいい。この世界がマスターを迫害する場合、俺はそいつらを根絶やしにするがな』

上からエルドラド、青竜王、紅皇龍がそう言ってくれた。

「お前達・・・グスツ・・・俺は嬉しいよ。お前達、ずっとずっと一緒にだからな！」

『『ああ。これからもよろしく頼む』』

バロンはエルドラド達の輪の中に入っていった。

アルマトーレ四天王もそれに続き輪の中に入っていき、笑顔で話合った。

『私もセレナを守れるならこの姿でいいです。この世界は私を受け入れてくれないと思いますが、それでもいいかなと思います』

「アテナ。ありがとうございます！これからもよろしく！」

『はい。これからもよろしくお願いします』

セレナはアテナに抱きつき、うれし泣きをした。

シンテイは言い笑顔を頷いていた。

『いい絆だ。お前達ならこの世界でもそのままやっていけるだろう。良い旅を続けて行くがいい』

「はい！」

『はい！』

シンテイは光りの柱を発生させ消えた。

光りに柱の場所にキラリと光る物が見えたので、バロンが拾いに行くこと……

「これは……ジムバッジ？えくと？」

拾ったジムバッジの裏には名前が書いていた。

『シャインバッジ』

このバッジの名前みたいだ。

そのバッジを見たウルツプやコルニ、マーシユ、ジファは皆、笑顔になりウルツプが前に歩み出た。

「ジムバッジ獲得おめでとう！これでバロン君は、ジムバッジいくつになった？」

「あ……8個です！」

今度はマーシユが歩み出た。

「おめでとうございます♪これでバロン君は、ポケモンリーグの出場権を得ました」

「ありがとうございます！」

今度はコルニが歩み出た。

「バロン君なら直ぐにチャンピオン戦になっちゃいそうだね！」

「そうなるかな？バトルでは手加減しませんから！」

「うん！ポケモンリーグ、頑張ってね！」

「はい！」

今度はマーシユが歩み出た。

「おめでとうございます♪これでバロン君は、ポケモンリーグの出場権を得ました」

「ありがとうございます！」

今度はコルニが歩み出た。

「バロン君なら直ぐにチャンピオン戦になっちゃいそうだね！」

「そうなるかな？バトルでは手加減しませんから！」

「うん！ポケモンリーグ、頑張ってね！」

「はい！」

次にジファが歩み出た。

「今の君ならどんな敵が来ても大丈夫そうだ。ポケモンリーグ頑張っ
てな」

「はい！」

最後にポケモン達が進み出た。

『何かあったらいつでも手を貸すぜバロン！』（ダークライ）

『ありがとう！その時は呼ぶからよろしく頼むよ』

『いつでも相手になってやる。時々で良いからアルマトールに顔を出
してくれよ』（ゲノセクト）

「ああ！俺も強くなりたいたいからな。よろしく頼むよ」

『ゲンブ様の町にも顔を出してくださいね？あの町はもう、バロン様
の物ですから』（ディアンシー）

「そうだった・・・必ず行くようにするよ」

『全く、俺達が付いていないと何も出来ないのかよ』（ボルケニオン）
「その通りだな。俺は1人では何も出来ないや」

アルマトールと四天王と言葉を交わした後、

『俺達は町に戻る。何かあったら必ず言えよ』（ボルケニオン）
「ああ！ありがとう！」

アルマトールと四天王達は自分達の町に帰って行った。

「では！町の復旧をしましょうか！」

「「おう!!」」

こうして、ミアレシティとその周辺の復旧作業が始まった。

ポケモンリーグ編

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十六話

百五十六話

町の復旧作業から半年後……

カロス地方の市町村全てが一丸となり復旧作業は終わりを告げた。その更に1ヶ月半後、ミアレシティでは大きいドームが建てられた。このドームこそ、ポケモンリーグが行われる会場だ。

「ついに完成しましたね！」

「ええ！皆様のおかげですわ！」

皆のおかげで無事、ポケモンリーグの舞台が完成した後、この地方のチャンピオンであるカルネが来た。その方と一緒にプラターヌ博士も来た。

「やあ君たち！ご苦労様」

「ご苦労様です。私はカロス地方のチャンピオン、カルネと申します」

カルネはそう挨拶をした。

「俺はバロン。それと相棒のエルドラドです」

「バロン君のポケモンは凄く強いと聞きましたが、本当のようですね。チャンピオン戦では手加減なんてしませんから、本気でぶつかって来てください。私の相棒はサーナイトです」

「はいー」

カルネはそう言いドームの関係者入れ口から中へと入って行った。それに続きプラターヌ博士も入って行った。

バロン達はリーグに挑戦するため、正面入り口から入り、受付でエントリーをしに行った。

エントリーNo. 1：リョウ

エントリーNo. 2：ダルク

エントリーNo. 3：バロン

エントリーNo. 4：セレナ

エントリーNo. 5：サナ

エントリーN.O. 6：ティエルノ

エントリーN.O. 7：トロバ

エントリーN.O. 8：モモ

エントリーN.O. 9：エーギル

エントリーN.O. 10：ルーマ

以上がリーグの挑戦者だ。

このメンバーの中から勝ち抜いた者が、カロスのチャンピオンである、カルネと戦う権利を与えられる。

「みんな！今からはみんながライバルだ！手加減なんてしないからな！」

「あつたりまえだ！」

「私達、以前より強くなった事、証明してみせるからね！」

「頑張ります！」

リーグ戦では、手持ちポケモンは3体まで。

ポケモンの交代は両方共に有り。

どちらかのポケモンを3体先に倒すか、降参する事で勝敗を決する。

ちなみにバロンは、エルドラド、青竜王、紅皇龍で出場だ。エントリーの時に登録しないといけないので、決めていた。

リーグの開会式は今日の昼から行われる。それまでに会場入りして整列すれば大丈夫だ。

このバトルは全国放送もされるので、テレビの視聴率はとんでもなく高い。

更には、観客席を1万席用意してあるので、大勢の方が生のバトルを見れるようにしている。

控え室は100部屋もあり、選手がそれぞれの部屋で休憩したり作戦を練れるようにと防諜設備も完璧である。

勿論、大きい広間もあり、そこで休憩や話し合いなど様々な事も出来るようにしてあり、温泉も設備されている。

温泉は一般用と選手用、職員用と分けられている。

更にはホテルも完備されており、選手の人達は無料で泊まることが

出来るようになってる。

ちなみに、一般の料金は一泊3万とお高い・・・

買い物も出来たりと色々な施設が揃っている最強の建物だ。

バロン達はそれぞれの控え室に行き、ポケモン達のコンディションの確認を行った。

晩ご飯は皆で食べようと言う事になってるので、夕方になってから広間に向かった。

そこには既に全員が揃っていた。

「みんな早くないか？」

「バロン君が遅いのよ！」

「俺達、5分前にはここに到着していたぞ？」

「マジか！すまん!!」

バロンは速攻頭を下げ謝り許して貰った。

「じゃ行こっか！」

「「お〜!!」」

こうしてみんなで晩ご飯を共にして、ワイワイはしゃぎ楽しくご飯を食べた。

その後ホテルに行き、それぞれの部屋に行った。

「いよいよ明日だな・・・」

『マスター？不安か？』

「いや、凄く楽しみだ！」

『良かった。俺達も楽しみだ』

『強い奴等が一同に集まる祭りか。良いな！』

『早く戦いたいぜ！』

『なんなら肩慣らしに俺と戦うか？』

『おう！やるか！』

「お前達なく今日はもう寝るぞ」

青竜王と紅皇龍は凄く残念そうに頭を下げ、

『は〜い』

そう言い、2体とも寝た。エルドラドも眠たかったのか、直ぐに眠りバロンのベッドで眠りについた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十七話
リーグ1回戦

百五十七話

翌日、バロン達はリーグ中央の広間に集まり開会式が行われるのを待った。

「いよいよ本番かくドキドキしてきたよ」

「サナ大丈夫か？」

「なんとか・・・」

サナは緊張しすぎてカチカチに固まっている。

バロンの方を見ると目が爛々と輝いている。凄くバトルしたそうだな・・・

丁度その時に、プラターヌ博士が卓上に上がりマイクを取った。

「お待たせしました！これよりポケモンリーグ戦を始めたいと思います！司会を勤めるプラターヌです。よろしく！実況は、ギャラクシーさんと言う方が行ってくれます」

『ギャラクシーだぜ！実況はまくかせる！』

スピーカーから甲高くテンションMAXの声が会場中に響き渡った。

「長話はしようと思わないので早速始めましょう！対戦相手を発表しますのでテレビモニターに注目してください！」

テレビモニターには挑戦者10人の顔写真が映っていた。

その写真が回転し裏向きになると、トーナメント表が出て来て、それぞれの線の場所に移っていった。

「それではーオープン!!」

裏返しの写真が表にひっくり返ると、それぞれの対戦相手の顔写真が移った。

1回戦

セレナVSモモ

2回戦

トロバVSリョウ

3回戦

サナVSルーマ

4回戦

ティエルノVSエーギル

5回戦

バロンVSダルク

このように分かれた。

初戦から知り合い同士のバトルは免れたが、初戦から負ける訳には
いかないぜ！

絶対勝ち続け、俺はチャンピオンのカルネさんと戦う！

「それでは早速始めますので、1回戦以外の選手は控え室に戻って
ください。」

それぞれの選手が控え室に戻って行った後、1回戦の選手がそれぞ
れ所定の場所に移動した。

「1回戦のバトル場は岩山になります！バトル場！セットアップ！」

プラターヌの言葉と同時に会場の中央が底に沈んでいき、岩山の
フィールドが地上に上がってきた。

正直に凄いと関心する・・・

ガシヤンと金属と金属が合体した音がした後、

「それでは舞台が整いましたので、1回戦を始めます！」

ポケモンリーグ戦

☆セレナVSモモ☆

「出て来て！ルカリオ！」

「出番ですわよ！ハピナス！」

『ルカリオは相性的に有利です！ハピナスは不利か!?!』

最初にセレナが動いた！

「ルカリオ！波導弾乱れ打ち！」

「ハピナス！ムーンフォースで吹き飛ばしなさい！」

ルカリオは波導弾をハピナスに放ったがハピナスのムーンフォー

スにより相殺され爆発した。

『おくと2体の技は互角か!?』

「互角ですか・・・」

「ルカリオ！ボーンラッシュ（鋼付与）」

『了解した』

ルカリオは目を瞑り、波導でハピナスの位置を把握し、先ほどのバトルで爆発した煙に突っ込んだ！

「ハピナス、相手の場所わかる？」

『全くつかめないで!?』

『もらったあゝ!』

モモとハピナスが話している時にルカリオが煙から出て来て、ハピナスをボーンラッシュで連撃した！

『煙の中から突如ルカリオが！この攻撃は痛いゝ!!!』

「ハピナス!？」

「ルカリオ！トドメの一撃を！」

ルカリオは遠心力を活かして、ボーンラッシュ大きく振りかぶりハピナスを吹き飛ばした！

ハピナスはバトル場の壁まで飛んでいき、戦闘不能で倒れた。

「ハピナス!？」

『おおーと!!物凄いラッシュ攻撃に耐えきれなかったゝ!ハピナス戦闘不能です!』

「戻ってハピナス・・・」

流星に強いなくでも！私もここまで来たんだから！次のポケモンは・・・

「出て来て！リザードン！」

『おくと！モモ選手のポケモンはリザードンです！これはルカリオ不利か!!』

「そんなことないと思うけどなあゝ」

「強がるのは今も内だけだよ！リザードン！大文字！」

「ルカリオ！地面にボーンラッシュ！」

リザードンから放たれた大文字はルカリオに迫っていき、ルカリオ

はボンラツシュを地面に勢いよく振り下ろし、土を舞上げた！その舞上げた土埃に大文字が当たり再び爆発した。

『なくんとおおおお！ボンラツシュで大量の土埃を舞上げて大文字を防いだぞおおお!!』

「何て事よ・・・リザードン！空を飛んで！」

「やっぱりそう来るよね。ルカリオ！波導弾！」

ルカリオはリザードンが飛ぶ先に波導弾を撃ち放った！

「リザードン！ドラゴンクローで弾き返せ！」

リザードンはドラゴンクローを使い、放たれた波導弾を打ち返しルカリオの方に飛ばした！

ルカリオは数歩隣に移動し攻撃を躲した。

『今度はドラゴンクローで弾き返したぞおおお!!』

「いちいちうるさいなあ！」

「本当うるさい！」

選手2人にダメだしされた実況者・・・

『う!?すまない!』

ゴンツと渋い音がしたが2人とも気にしてない様子だ。

本当にうるさかったから、バトルに集中出来ないので静かにしてくれた方が見てる方も、戦っている方も助かる。

もう喋らなくていいよ実況の人・・・

「さて、仕切り直していきましようか？」

「そうですね」

ポケモン達も最初の位置に戻っていた。

会場が静まりかえった時、最初に動いたのはモモだった。

「リザードン！日本晴れ！」

「ルカリオ！波導弾！」

リザードンが日本晴れした直後、ルカリオが放った波導弾がリザードンに当たり爆発を起こした。

「リザードン!？」

『平気だ。それよりも早く指示を!』

「はい！リザードン！大技行くよ！ブラストバーン！」

『ウオオオオオオオ！』

リザードンは雄叫びを上げ、地面に拳を勢いよく振り下ろし、炎を発生させルカリオの方に向かわせた！

「ルカリオ！守る！」

ルカリオが直ぐに守るを発動した直後！守るの下から先ほどのブラストバーンの炎が噴き上げ、ルカリオの守ること上に飛ばした！

「リザードン飛んで！ドラゴンテール！」

『ウオオラアア！』

リザードンがルカリオの上に着いた時、運悪く守るの継続時間が切れてしまった！

「あ!？」

「いっけえええ!!！」

リザードンの渾身の一撃をルカリオに当てる直後に、ルカリオは咄嗟に腕を前に交差させ衝撃に備えた！

ドラゴンテールがルカリオに当たった瞬間、ルカリオの腕がミシツと音を立て骨が折れた。

ルカリオはそのまま急降下し地面に激突し広範囲に土埃が舞い上がった！

リザードンは静かに地面に降りた。

『強烈な一撃が決まったああ！ルカリオはどうなったのか!？』

会場全体が静まりかえり、土埃が晴れるのを待った。

バトル場の周りは通気口があり、係員が開閉している。今回は土埃の影響力が凄かったので係員が動いてくれて、ある程度の土埃を吸い込んだ。

おかげで、30秒ほど待つと土埃が晴れて、バトルの結果が分かった。

ルカリオはバトル場の真ん中で戦闘不能になっていた。

『ルカリオは・・・戦闘不能だああ！リザードンがルカリオの猛攻を止めたああ!』

観客席からも拍手喝采が起こったが、セレナは・・・

「私の時は何も無かったのにな」

そう独り言を呟いた。

「戻ってルカリオ。彼奴を絶対に倒してやる！出て来て、ギャラドス！」

『ルカリオ様を良くもおー！』

ギャラドスは大きな咆哮を上げ、リザードンを睨んだ。

「さあ、行くよ！ギャラドス、ハイドロポンプ！」

「リザードン！避けて！」

リザードンは素早く上空に飛んでハイドロポンプを避けたが、

「ギャラドス！そのまま放ちながら上に方向を変えて！」

「えっ！」

ギャラドスが放ったハイドロポンプはそのまま上に方向を変え、リザードンに迫っていった！

「甘いよ！リザードン、ハイドロポンプを避けながら、ドラゴンテールを当てなさい！」

リザードンは一気にギャラドスの上に飛んでいきドラゴンテールを急降下しながらギャラドスに向け攻撃した！

「ギャラドス！アクアテール！」

ギャラドスの尻尾から大量の水が流れ出し、急降下しながら攻撃して来るリザードンのドラゴンテールにアクアテールをぶつけた！

だが、リザードンの方が急降下と体重の関係で威力はギャラドスを完全に上待っている！

2体の攻撃がぶつかった瞬間、ギャラドスのいた地面が、円形状に少し陥没し亀裂が入った！

「ギャラドス！今のうちにハイドロポンプ！」

「やばい！リザードン！鋼の翼で身を守って！」

ギャラドスの攻撃が来る直前にリザードンは鋼の翼を使い身を守った後に、ハイドロポンプの攻撃が当たり、大きく吹き飛ばしたが、殆どが鋼の翼で防がれてしまった。

「貴女、なかなか強いじゃない」

「貴女もね・・・」

2人と2体は互いにニヤリと笑い合った。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十八話
リーグ1回戦

百五十八話

ポケモンリーグ戦1回戦の戦いは白熱していた。

「先に行かせて貰うわよ！ギャラドス、雨乞い！」

「ちよっ！それ面倒くさいやつ！リザードン、日本晴れ！」

「それも面倒くさいけど！」

2人は互いに技を掛け合い、ギャラドスが雨乞いをして雨を降らせた後直ぐに、リザードンの日本晴れにより雨雲が消え去り熱い日差しが入り込んだ。

「こつちが有利ね！リザードン、ブラストバーン！」

「こうなったら・・・ギャラドス！私達の絆の元に、メガ進化!!」

『メガ進化！』

リザードンの技はメガ進化中の虹色の光りにより遮られた！

光りが収まるとギャラドスはメガ進化していた。

「ちっ！リザードン！メガ進化!!」

『メガ進化！』

リザードンも虹色の光りに包まれ、メガ進化した。

メガ進化した事により日照りが発生し、炎タイプの技の威力が上がってしまい、水タイプの技の威力が下がってしまう。

「やっぱりメガ進化、出来るのね」

「貴女のギャラドスもね」

2人と2体はまたニヤリと笑い合うと、セレナから動いた！

「さあ、行くよギャラドス！雨乞いからの波乗り！」

「リザードン！空に飛んで！」

ギャラドスは雨乞いを発生させ日照りを遮り雨を降らせた。これにより今度は、水タイプの技の威力上がり、炎タイプの技の威力が下がる。

ギャラドスは直ぐに上空に飛び上がり、雨乞いの雲の上に行った。

波乗りの技は当たらないが、フィールドは雨乞いの効果も合わさり、水かさが3cm出来た。

雲の上はまだ日照りが続いているので、炎タイプの技の威力は上がる！

「今度はこっちの番だよ！リザードン！大文字!!」

リザードンが放つ大文字は日照りの効果も合わさり技の威力が上がり、大きさも広がった！

デカくなった大文字は雨雲を突き抜け、ギャラドス目掛け落ちて行く！

「相当デカいわね・・・でも、ギャラドス！ハイドロポンプ！」

ギャラドスが放ったハイドロポンプは雨乞いの効果が合わさり技の威力が上がり、攻撃範囲も広がった！

2体の攻撃は雨雲の直ぐ側でぶつかり合い大爆発し、雨雲が消し飛んだ！

威力が互角だったのだ！

「今よ！フレアドライブ！」

「迎え撃ちなさいギャラドス！アクアテール！」

リザードンが爆煙の中から炎を纏い急降下して来たのを、ギャラドスはアクアテールで迎え撃った！

ギャラドスのアクアテールが当たった瞬間、日照りの効果で水が少し蒸発し威力が半減してしまった！更に！

リザードンの急降下した速度が加わり、ギャラドスが押し負け思い切り吹き飛ばされた！

地面にまで激突したりザードンのフレアドライブは辺り一面の水を一気に蒸発させ、蒸し暑い状態になり元の位置に戻った。

ギャラドスの方を見ると、メガ進化が解け戦闘不能になっていた。『凄い白熱したバトルの結果は！リザードンの勝ちだ！モモ選手が

大手を掛けたぞ！』

「戻ってギャラドス。お疲れ様。私の最後のポケモン。出て来て相棒！アテナ!!」

『このバトル、仲間の為にも勝たせて貰います！』

「あの姿はポケモンなの!？」

『おおくと!!!私も見ることが無いポケモンだ〜!!!名前はアテナと言っていたぞ!!』

会場からもザワザワと会話が聞こえるが、もう気にもしない。

アテナはこの世界で1体しかいない私だけのポケモンなのだから。

姿は上級神になった時から、擬人化のまままで登録上はポケモンだけど、姿は人間に近い。

始めて見た人達なら当然の反応だよね・・・

「アテナ?大丈夫?」

『大丈夫よ。こうなることは予想していたし。何より、私はセレナがいればそれだけで良いもの』

「アテナ・・・ありがとう!バトル、始めるよ!」

『はい!』

アテナは炎の杖を出現させた。

『おい!しっかりとしろモモ!このバトル場に出た来たのだから、相手はポケモンと思え!後、今はまだバトル中だ!』

「あつ!はい!ごめんさい!」

「薄々気付いていたけどモモさんもポケモンと会話が出来るとは思いませんでしたのでね」

「はい!小さい時からポケモン達と遊んでいましたので」

モモは無邪気な笑顔でそう言ってくれた。

「教えてくれてありがとう。私もポケモンと会話出来るよ。それじゃバトルの続きしましょうか!」

「はい!」

アテナは炎の杖を地面に突き刺した!

「アテナ!炎の楽園!」

「リザードン!とりあえず空に飛んで!」

『おく!新しい技、炎の楽園だ〜!いったいどんな効果があるのか!』

アテナが突き刺した炎の杖が一気にバトル場全体に広がり、燃えさかる炎がバトル場を覆う。

アテナはバトル場中央にゆっくりと歩き出した。

「どんな効果か分からないけど、攻撃あるのみ！リザードン！フレアドライブ！」

「アテナ、燃えさかる劫槍（ごうそう）！」
『了解！』

アテナは手を前に翳し、炎の槍を出現させ空中に浮かばせた。それに反応するかのように、炎の楽園が槍に炎を纏わせていく。

劫槍は炎の楽園とセットの技。少しだけ時間が掛かるが完成した。

『来た来た来たく！合体技だく！』

「発射！」

劫槍は一気にリザードン目掛け飛んでいった！

「リザードン！フレアドライブを維持したまま大文字発射！フレアドライブを強化して！」

『おう！』

リザードンは大文字を使い更にフレアドライブを強化した。更に日照りの効果も合わせりフレアドライブは更なる強化が施され、隕石みたいな大きさになった！

『こちらも合体技だく！デカい！デカいぞく!!!』

リザードンのフレアドライブ（隕石並）と劫槍が空中でぶつかり合う瞬間！

「アテナ！楽園の炎を全て劫槍に回して！」

『はい！瞬間転移！楽園よ、劫槍に力を渡せ！』

その瞬間、バトル場の炎が一瞬で消えた！

その消えた炎は劫槍の先端部分に移動していた。凝縮した炎は高出力だ！

「いっけえええええええええ！」

2体の渾身の一撃は空中でぶつかり合い、大爆発が起こった！

その爆煙の中から赤い光りが見えると、そこからリザードンがフレアドライブでこちらに来ていた！

「な!?今の攻撃で相殺すら出来なかったの!?!」

リザードンのフレアドライブは更に出力を増して、加速しアテナを攻撃して吹き飛ばした！

「アテナ!？」

アテナは焼け野原になっている地面に強く打ち付けられぐったりしている。

『これは戦闘不能か!？』

「リザードン! トドメの一撃よ! 渾身のブラストバーン!!」

『ウオオオオオオオオオ!!』

「アテナ! 逃げてく!」

セレナは叫んだが、アテナは動けない。

リザードンのブラストバーンは真つ直ぐにアテナに向かって行き、そのまま攻撃して戦闘不能にさせた。

『決着がつけました! 今の攻撃がトドメとなりアテナは戦闘不能! 第

1回戦の勝者はくモモ選手だく!!』

「そ、そんな、ばかな．．．アテナ、戻って．．．」

「勝った．．．リザードン! 私達勝ったよ!! やったく!!」

『ウオオオオ!!』

リザードンは雄叫びを上げてからモモの方に戻って行った。

セレナは下を向き、控え室の方に向かって行った。

モモのその後自分の控え室に戻っていった。

ポケモンリーグ第1回戦は、まさかのセレナ初戦敗退だった。

セレナの知人達は結構驚いたが、バロンは技の選択等に原因があると直ぐに分かった。

セレナは1回戦だからと手を抜いていたんだ。本当ならリザードンが飛んだ時にビッグバンを使い攻撃して、もし耐えきっていたら、灼熱地獄を使い永久的に炎の攻撃を続行。それでも耐えきっていた場合、永劫地獄・ブラストバーンを使えば確実に勝てただろう。

もったいないな．．．

ポケットモンスターXY バロンの旅 百五十九話
リーグ1回戦

百五十九話

1回戦が終わった後、司会のプラターヌから2回戦を始めるとアナウンスが流れた。

トロバとリヨウの1回戦のバトル場は森林が舞台となった。

『それでは、選手の入場です!』

右側からリヨウが出て来て、左側からトロバが出て来た。

『これより、ポケモンリーグ第1回戦を始めます!勝負開始!』

ポケモンリーグ1回戦

☆トロバVSリヨウ☆

「行って来てください、カイリキー!」

「行くがいい!ボーマンダ!」

『両者最初のポケモンが出たぞ!相性だけではリヨウ選手が有利だ!』

その通り、タイプだけではボーマンダの方が有利だが、ポケモンは色んな技が使える。技量で補うのも1つの手なのだ。

「行きますよ!カイリキー、ストーンエッジ!」

「ボーマンダ!破壊光線!」

カイリキーの周りに無数の拳大の石が出現し、それをボーマンダに向けて発射したが、ボーマンダは破壊光線で全てのストーンエッジを破壊し相殺した。

「破壊光線はストーンエッジで相殺出来ましたね。良い感じですよ」

「ふん!何が良い感じだ!お前は今から負けるのにな!」

リヨウは再びボーマンダに破壊光線を命じた。

「カイリキー!爆裂パンチで破壊光線を弾き飛ばせ!」

『ウオオオオリヤー!』

カイリーは迫って来た破壊光線を爆裂パンチを纏った手で斜め上

方向に殴り飛ばした！破壊光線はそのせいで軌道がズレ、上の方に飛んでいった。

「弾き返すまではいかないか。ならば・・・カイリキー！もう一度ストーンエッジ！」

「面倒くさい奴だ！ボーマンダ！空に飛んで回避しろ！」

その時、トロバの口元がニツと笑ったが、リョウは気がついていなかった。

カイリキーが放ったストーンエッジは、ボーマンダが空に飛んで避けたと思ったが、ストーンエッジは直ぐに飛んでいく方向を変えボーマンダの方に飛んでいった！

「しまった！ボーマンダ！鋼の翼を使い！」

「もう遅い！」

ストーンエッジはボーマンダが技を使う前に当たりボーマンダを攻撃した！全弾当たり終えると爆発しボーマンダは地面に落下し戦闘不能になった。

『おお〜つと!!これは!!カイリキーの特性、ノーガードが発揮されたぞ！ボーマンダは戦闘不能だあああ！』

「ちっ！一撃かよ・・・ボーマンダ戻ってくれ。次は・・・出てこい！ガブリアス！」

「ストーンエッジは効果的だったと・・・今度はガブリアスですか。僕はこのまま戦います」

トロバはそう言い、ガブリアスがどう動いて来るか待った。

「お前から来ると思ったが、来ないならこちらから行くぜ！ガブリアス！ドラゴンダイブ！」

ガブリアスは上空に飛び、ドラゴンのオーラを纏い急降下してきた！

「特性ノーガードは両方のポケモンに聞くからな！さあ！どうする！」

『お〜！特性ノーガードの力を使いドラゴンダイブを回避させなくしたぞ〜！どうするトロバ！どうするカイリキー！』

実況者はこのシチュエーションが好きと・・・メモメモ・・・

トロバは地味な所までメモった。

その後、直前まで迫って来たガブリアスの攻撃の対処をした。

「カイリキー、怪力を使い受け止めてください」

カイリキーは怪力を使い、筋肉を強化した。

その強化中の怪力でガブリアスのドラゴンダイブを正面から受け止めた時に、衝撃がバトル場を襲い森林のステージの木が吹き飛んだ！

「カイリキー、まだ余力があるならそのまま地面に叩き付けなさい。その後直ぐにアームハンマーです」

ガブリアスの攻撃をしつかりと受け止めたカイリキーは本当にダメージを受けているのか信じられないぐらいのパワーでガブリアスをそのまま地面に叩き付けた！その後、命令通りアームハンマーをガブリアス目掛け振り下ろした。

「ガブリアスっ!?!」

カイリキー静かにその場を離れ元の位置に戻った。

この攻撃が決め手で、ガブリアスは戦闘不能になっていた。

『おおく!!!トロバ選手が2連勝だ！後が無くなったリョウ選手！残りのポケモンは誰だ〜!』

「思ってたよりも強えじゃねえか・・・出てこい俺の相棒！キュレム!」
「キュレム!?!別地方の伝説ポケモンじゃないですか」

流石に驚いた・・・リョウ選手は別地方出身みたいだな。

『リョウ選手の最後のポケモンは何と!?!イッシュ地方の伝説ポケモンだ〜!』

キュレムが場に出た事により、特性のプレッシャーが解き放たれた。

凄い威圧感だ・・・

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十話
リーグ1回戦

百六十話

ポケモンリーグ1回戦 後半戦

☆トロバVSリョウ☆

僕はこのままカイリキーで戦おうと思ったが、相手が伝説ポケモンなら少しキツイかもしれない・・・

「カイリキー、お疲れ様です。手持ちに戻ってください」

「流石に戻すか・・・」

『ここでトロバ選手のカイリキーが手持ちに戻りました！次のポケモンは何が出る！』

「僕が出すポケモンは、出て来てくださいサーナイト！」

「ちっ！またやっかないなポケモンを・・・」

『来た！サーナイトです！！相性は当然！有利だ！！』

この実況者さん・・・完全に僕よりだよな？まあ良いか・・・

「行きますよ！サーナイト、ムーンフォース！」

「キュレム、凍える世界！」

サーナイトが放ったムーンフォースはキュレムの凍える世界により相殺された。

「やっぱり相殺になりますね・・・」

「俺の相棒の得意技を相殺かよ」

『いきなりお互いの得意技炸裂だ！』

これは少し戦い方を変えますか・・・

「サーナイト、僕との絆の元にメガ進化！」

「キュレム！お前もあの姿になれ！」

サーナイトがメガ進化すると同時に、キュレムはブラックキュレムに形態変化させた！

「ブラックキュレム!?まさか単体でそれが出来てしまうとは・・・」

「修行すればどうとでもなるぜ！」

『まさかの単体で形態変化です！この形態はゼクロムとキュレムが合体した姿です！』

これは厄介だな。だけど、メガサーナイトの特性を考えれば何とかなるか……

「先に行かせて貰うぜ！フリーズボルト！」

「サーナイト！破壊光線！」

お互いの得意技同士がバトル場中央でぶつかり合った時、僅かにメガサーナイトの技の方が威力が高く、フリーズボルトを押し返した！

「破壊光線フルパワー!!!」

「キュレム！もつとパワーを込めろ!!」

キュレムが放っていたフリーズボルトはパワーを上げ更に大きくなったが、サーナイトの破壊光線がフルパワーされた事により、極太の破壊光線が簡単にフリーズボルトを押し返しキュレムを攻撃した！

攻撃が当たり大爆発した後、キュレムの形態変化が解け、戦闘不能になった。

サーナイトもメガ進化を解いた。

「戻れキュレム。俺達もつと修行しなければならぬな」

「お疲れ様サーナイト。いい攻撃だったよ」

『決着く!!!フルパワーの破壊光線が当たった事によりキュレムが戦闘不能になったあああああ！第1回戦の勝者はく！トロバ選手だく!!!』
「ありがとうございます」

2人は互いに頭を下げバトル場を出て、それぞれの控え室に戻って行った。

10分後、プラターヌ博士からアナウンスが流れた。

今回のバトル場はなんと……人工洞窟だ！

外からは中の様子が見えないので、特殊なカメラを至る所に設置されている。

中の様子はそのカメラから映し出される映像を見る事になる。

『お待たせしました！これよりポケモンリーグ1回戦を始めます！出場者の2名はバトル場に出てください』

右側からはルーマが出て来て、左側からはサナが出て来た。
『それでは、ポケモンリーグ1回戦始め!』

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十一話
リーグ1回戦

百六十一話

ポケモンリーグ1回戦

☆サナVSルーマ☆

「行って来て、メタグロス！」

「行くぞ、ドンカラス！」

先に仕掛けたのはルーマだった。

「ドンカラス、悪の波動！」

「メタグロス、リフレクターを張り直ぐに光りの壁！」

ドンカラスの技が迫って来る中、メタグロスは高速で技を2重がけして技を防いだ！

しかもリフレクターと光りの壁の効果で暫くの間はダメージの軽減も出来る。相手にとっては嫌なコンボ技だ。

「ドンカラス、翼を効果させて疑似・瓦割り！」

「な!?メタグロス!多重バリア展開！」

メタグロスはバリアを3重に重ねがけしてドンカラスの技を再度防いだ。

更にバリアには、自身の防御力を格段に上げる効果も有るので、防御は万全だ。

「面倒くさいな!ドンカラス、黒い霧！」

「メタグロス!ラスターカノンで霧ごと吹き飛ばせ！」

ドンカラスは黒い霧を発生させメタグロスのステータス強化を無効化しようとしたが、メタグロスが放ったラスターカノンにより霧が吹き飛ばされそのままドンカラスに当たった!

ドンカラスはこの一撃で戦闘不能になってしまった。

「ドンカラス!？」

『おくと!メタグロスのラスターカノンが直撃だ!ドンカラスが一撃でやられたぞ〜!』

ルーマはドンカラスを手持ちに戻した後、2体を出した。

「出て来てムウマーヅ！」

「やっぱりゴーストタイプ。メタグロス！サイコキネシスでムウマーヅを捕縛！その後、ラスターカノンでトドメよ！」

「させないわよ！ムウマーヅ、守る発動！その間に封印よ！」

ムウマーヅは直ぐに守るを発動して、メタグロスのサイコキネシスを防いだ。

メタグロスは捕縛出来なかつたので、ラスターカノンを撃つのを躊躇っている間にムウマーヅは封印を開始した。

ムウマーヅの覚えている技は・・・

【サイコキネシス】

【シャドーボール】

【影分身】

【封印】

この4つだ。この中にメタグロスが使ってくる技、サイコキネシスを封じる事が出来たが・・・

メタグロスが使ってきた技が多い。

【リフレクター】

【光りの壁】

【バリア】

【サイコキネシス】

【ラスターカノン】

通常は4つしか使えない筈なのに、5つも技を使えるなんて・・・バトル中に悪いけど1つだけ教えてくれないかしら？」

「どうかしたの？」

「貴女のメタグロス、技を5つも使えるなんて反則じゃないかしら？」

ルーマはサナを睨みながらそう言ったが、サナは・・・

「受付の時に説明したら『大丈夫です。試合頑張ってくださいね』って言われたわよ？」

「そ、そうなんだ・・・ありがとう」

「いえいえ。では、バトルの続き行きますよ？」

「はい」

サナとルーマのポケモンは再び構え直し戦闘態勢に入った。

「ムウマージ、影分身！」

「メタグロス、ストーンエッジでムウマージ達を乱れ打ち！」

ムウマージが物凄い速さで影分身を出した瞬間、メタグロスがストーンエッジを周りに出現させ、ムウマージ（影分身含む）目掛け一斉に発射した。それらは全てのムウマージに当たり、影分身のムウマージは当たった瞬間に消えて、本体のムウマージは当たった瞬間爆発した！

「ヒット！メタグロス！ラスターカノンでトドメ！」

「くっ!?ムウマージ！渾身のシャドーボール！」

ムウマージは残っている全ての力をシャドーボールに注ぎ込み特大級のシャドーボールを形成し発射した。

メタグロスのラスターカノンもそれとほぼ同時に発射され、バトル中央でぶつかり合った。

「メタグロス！追撃の破壊光線！」

「ムウマージにノーマルタイプの技は効かないわ！」

メタグロスは瞬間的にラスターカノンを止め破壊光線に打ち替えた！それと同じタイミングで、ぶつかり合っていたラスターカノンとシャドーボールが爆発した。その爆煙の中から破壊光線がムウマージ目掛けて飛んできた！

だが・・・ムウマージにノーマルタイプは効かない。何故破壊光線を命じたのだろうか？

「メタグロス、高速移動を重ねがけしてムウマージの背後に回って。そこでコメットパンチを叩き込んで。破壊光線はムウマージを盾にすればダメーჯは受けないわ」

『了解した』

サナはメタグロスにだけ聞こえる位の小さな会話で命じた。その瞬間、高速移動を重ねがけしたメタグロスは神速の速さでムウマージの背後に回り、コメットパンチを叩き込んだ！

その瞬間、爆煙の中から飛んできた破壊光線がムウマージに当たり

大爆発した!

「ムウマージ!?!」

「メタグロス、その邪魔な爆煙を消し飛ばしなさい」

メタグロスは高速でその場で回転して煙を消し飛ばした。

煙が晴れた時には、ムウマージは地面に倒れておりメタグロスはその場で見下ろしていた。

『メタグロスの一撃が決まったあああ!何があったかは分かりませんが、メタグロスの破壊光線でしょうか!?!それが爆発して戦闘不能だああ!!サナ選手も2連勝中!ルーマ選手、追い込まれたあああ!』

実況者の方は、メタグロスの速さを見切れない。いや、この会場であの速度を見極めるのは一緒の技を重ねがけしたポケモンかそれ以上のポケモン位だろう。

今のメタグロスは、普通でも早い素早さを極限まで上げている状態。言わば神速だ。

ルーマさんの最後の1体がなんであれ、この状態のメタグロスを倒せるとは思えない。

「戻ってムウマージ。お疲れ様です。私の相棒、出番が来たわ。暴れておいで、ギラティナ!!」

ルーマの最後のポケモンはシンオウ地方の伝説ポケモン『ギラティナ』だった。

と言う事は・・・ルーマ選手はシンオウ地方の出身かもしれない。とりあえず私はこのままで戦おう。今のメタグロスを止められるはずは無い!

「私はこのままで戦います」

「分かりました。では、行きます!ギラティナ、シャドーダイブ!」
「メタグロス、周りにステルスロック」

ギラティナがシャドーダイブを発動させバトル場から姿を消した時に、メタグロスがステルスロックを使いバトル場に尖った岩をばらまいた。

その後、ギラティナがメタグロスの背後から出現して攻撃しようとした時、メタグロスがばらまいたステルスロックがギラティナを攻撃

した！

「な!?!なぜステルスロックが攻撃を!?!」

「ちよつと特殊な事をしてね。半自動ステルスロックにしたんだ。それじゃ今度はこっちから行くよ。メタグロス! コメットパンチ!」

「くっ! ギラティナ、シャドークロー!」

ギラティナは直ぐに巨大な手からシャドークローを発動させ襲いかかったが、メタグロスの今の素早さでは勝てない。メタグロスは直ぐに正面から背後に回り遠心力を活かしたコメットパンチでギラティナの横腹を勢いよく殴り飛ばした!

ギラティナは数メートル飛ばされたが体制を立て直し、

「ギラティナ、破壊光線!」

「メタグロス、バレットパンチ!」

バレットパンチは先行技。その為、ギラティナが技を出す前に攻撃が届く。更には神速の速さになっているメタグロスには最早関係無いが・・・

メタグロスは超高速でギラティナの懐に潜り込み、バレットパンチを腹に思い切り叩き込んだ!

「追撃! コメットパンチ! 更に爆裂パンチ!」

「ギラティナ! シャドードライブで一度逃げて!」

メタグロスはコメットパンチを更に腹に打ち込み、ギラティナがよろめいた瞬間、更に爆裂パンチを顔面に向けアッパーで攻撃した! その瞬間、爆裂パンチの追加効果により爆発し混乱した。シャドードライブは怒濤の攻撃によって技が打てない。更には混乱し技が上手く発動しなくなった。

「トドメよ! コメットパンチ!」

「ギラティナ! 守るを使って!」

ギラティナは守るを発動しようとしているのに、混乱のせいで上手く技が発動しなく、メタグロスがギラティナの頭上に現れたその時、ギラティナの顔がデカイ音と共に地面に沈んだ。

メタグロスが勢いよく振り落としたからだ。

この攻撃が決め手となり、ギラティナは戦闘不能になった。

「ギラティナ・・・」

「良くやったわメタグロス！」

『決まったあああああ！今大会の初3連勝利！メタグロスの怒濤の攻撃ラッシュに為す術無くギラティナが沈んだああ！1回戦の勝者は!!サナ選手だく!!!』

「ありがとうございます」

両選手共に頭を下げバトル場から出た。

次のバトル場が出現するまでは休憩だ。

サナはメタグロスを控え室で回復し、ルーマはポケモンセンターに行きポケモン達を回復させた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十二話
リーグ1回戦

百六十二話

1回戦の出場者達は次の試合が始まるアナウンスが会場に流れたので、バトル場に移動した。

『お待ちせしました！これよりポケモンリーグ1回戦を始めます！両選手入場！』

今回のバトル場はまさかの水中戦。水上には丸板が何枚か浮いている位だ。

右側からはイーグルが入場し、左側からはティエルノが入場した。

『それではバトル開始!!』

ポケモンリーグ1回戦

☆ティエルノVSイーグル☆

「出てこい！カメックス！」

「出てこい！ランターン！」

『おくと!!両選手両方とも水中戦が得意なポケモンだ!』

両選手のポケモンは手持ちから出た後、直ぐに水中に潜った。

「カメックス、アクアジェット！」

「ランターン、放電！」

カメックスは体の周りに水を纏わせ物凄い速さでランターンに迫っていった時、ランターンの体から電気が迸った後一気に解放され辺り一面に強烈な電気を放った！その攻撃はカメックスにもダイレクトに辺り、体を痺れさせた。技も解除され手足が思うように動けなくなってしまった。

「くっ！カメックス戻れ！」

ティエルノは直ぐにカメックスを手持ちに戻した。

『ティエルノ選手たまらずカメックスを手持ちに戻した！次のポケ

モンは何を出す!!」

「電気には地面!出てこい!トリトドン!」

「地面か。ランターン、戻ってくれ」

『おくと!?エーギル選手もランターンを手持ちに戻したぞ!!』

ちっ!流石にランターンは戻すか。つて事はトリトドンに有利なポケモンを出してくるか・・・

「出てこい!トロピウス!」

「トロピウス!?!」

『ここで何と!草と飛行タイプのポケモン、トロピウスが出て来たぞ!!これはティエルノ選手不利かああ!!』

不味い・・・エーギルつて人、完全に俺のポケモンより有利なポケモンを選んで来やがる・・・

「ぼくとしてたらやられるぜ!トロピウス、日本晴れ!更にソーラービーム!」

「くっ!?トリトドン!冷凍ビーム!」

トリトドンはトロピウスに冷凍ビームを放ったが、日本晴れの効果により少し溶けてしまい威力が半減した。

トロピウスはソーラービームを放ち冷凍ビームを押し返し、そのままトリトドンを攻撃した!

この攻撃でトリトドンは一撃で戦闘不能になった。

『トロピウスのソーラービームが決まったああ!トリトドン戦闘不能です!』

「トリトドン戻ってくれ。なかなか厄介だな・・・」

「今大会の出場者の活躍や、それまでの手持ちポケモンなど色々調べたからな」

エーギル選手はメガネをクイツと上げた。

ティエルノの手持ちはトリトドンがやられ後は、カメックスとライチュウだ。

「こうなったら!出てこいライチュウ!」

「やはり相棒の次に冒険を共にしてきたポケモンでしたか」

「そこまで調べてたのか」

テイエルノとライチュウは少しだけ引いたが、バトルに集中するために構え直した。

エーギルはトロピウスを手持ちに戻して、再びランターンを出してきた。

「行きますよー！ランターン、波乗り！」

「ライチュウ！雷！」

ランターンは水中から勢いよく跳ね上がり波を起こしてライチュウに接近していった。ライチュウはその波ごと雷で攻撃して、ランターンを攻撃した！

ランターンは雷をまともに受けたが、何事も無かったようにそのまま攻撃してきた！

「まさか!?特性は蓄電か！」

「ご名答。さあ！やってしまいなさい、ランターン!!」

ランターンは勢いよくライチュウに波乗りを当て水中に落とした。

「ランターン、放電です！」

「ライチュウ！充電しろ！」

ライチュウは直ぐに充電を開始し、体の周りに電気を纏ったその時、ランターンの放電が発生し、水中全てに電気が流れバトル場は黄色く光った後、水柱がバトル場中央付近で起こった。

暫く水しぶきが起こった後、水面にライチュウが浮かんでいた。

『ライチュウ戦闘不能です！ランターンの放電がクリティカルヒットしたのでしよう!!』

「戻れライチュウ・・・畜生・・・カメックス、後は頼んだぞ!!」

「ランターン、そのままお願いします」

テイエルノの最後のポケモンはカメックス。麻痺状態のせいで上手く動けない状態からのスタートは結構厳しい。

相手のエーギルは、ランターン・トロピウス・最後の1体はまだ出していない状態。しかもダメージすら通っていない状態だ。

「先に行きますよー！ランターン、雷！」

「カメックス！ハイドロポンプ！」

カメックスは甲羅から生えている砲身から凝縮された水を発射し

だが、水は電気には勝てない。

雷はハイドロポンプを簡単に押し返していきカメックスに迫って行った！

「今だー冷凍ビームー！」

ハイドロポンプを直ぐ止め、冷凍ビームを放った！そのビームはハイドロポンプの水を瞬く間に凍らせて行き、ランターンの雷を止めた。

直径2 m程の氷の柱が完成した。

「カメックス！その氷の柱を武器にしろ！」

「ランターン、その武器とやらを壊してしまえ。シグナルビーム！」

ランターンの提灯の部分から虹色に近い光線がカメックスの持っていた氷柱に当たり破壊した！

「な!?こうなったら・・・カメックス！最終奥義！ハイドロカノン!!」

「ランターン！水中に潜って攻撃を回避しろ！その後、雷だ！」

ランターンは直ぐに水中に潜り、カメックスが放ったハイドロカノンを紙一重で躲しきり、その後直ぐに雷を放った！カメックスは技の反動により動けなく、雷の攻撃を受けて倒れた。

『カメックス！戦闘不能だああああ！ポケモンリーグ第4回戦の勝者はイーグル選手だく!!』

「ありがとうございます」

ティエルノはカメックスをモンスターボールに戻しポケモンセンタ―へとトボトボ歩いて行った。

イーグルは小声で「勝利だ」と言いランターンを手持ちに返し控え室に向かって行った。

◇今の状況◇

第1回戦勝者

モモ

トロバ

サナ

イーグル

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十三話
リーグ1回戦

百六十三話

「エルドラド、とうとう俺達の番だな・・・」

『ああ！マスター、この試合で着て欲しい物がある！』

エルドラド、青竜王、紅皇龍は俺の控え室で擬人化状態でいらっている。そうしないと狭くて苦しいから・・・

青竜王は鏡の方で髪の設定をしているし、紅皇龍は腕を組んで椅子で寝てる。エルドラドは俺とモニターを見ながら試合観戦をしていたのだ。

「着て欲しい物？」

『これだ！俺が作ったこの衣装で試合に出て欲しい！』

その言葉を聞いた青竜王と紅皇龍は直ぐに俺達の方を向き、

『『それなら俺達のも着てくれ！』』

同時にそう言い、どこから取り出したのか分からないが、青竜王は青をメインとした静かなイメージの衣装。

紅皇龍は赤をメインとした情熱的な衣装。

エルドラドは黄金色をメインとしたキラキラした衣装を各自提示してきた。

「みんな俺に着て欲しいの？」

『『勿論だ！』』

「そっか！ありがとうね。試合を勝ち進めれば全部着れるから、最初は青竜王の衣装を着るね。その次は紅皇龍でその次がエルドラド。それでいいかな？」

『『勿論だ！俺達が全部着れる様に全員に容赦なく潰してやる！』』

「うん！とりあえず殺しは無しだからね？それしちゃうと失格になって、問答無用で負けにされちゃうから」

『『了解した・・・』』

3人一斉にへこんだけど、殺すつもりだったのか!?

『お待ちせしました〜！これより1回戦を始めます！両選手入場！』
今回のバトル場は平原だった。

右側からダルクが入場し、左側からバロンが入場した。

今回バロンは先ほどの約束通り、青竜王が作った衣装を着て登場した。

『バロン選手張り切ってますねえ〜それではこれより！1回戦を始めます！試合始め！』

ポケモンリーグ1回戦

☆バロンVSダルク☆

「出てこい青竜王！」

「蹴散らしてこい！バンギラス！」

青竜王はバトル中はポケモンの姿だ。

バンギラスがバトル場に出た事により特性で、砂嵐状態になったが、それを青竜王は許さなかった。

青竜王は直ぐに手を地面に付け、青い波紋をバトル場に展開すると一気に風が上空に舞い上がり砂嵐を掻き消した！

「ありがとう青竜王」

『マスターを汚させるわけにはいきませんので』

『新種のポケモンかあああ!?青竜王はバンギラスの特性をかき消せるのか!?』

「まさかバンギラスの特性の砂嵐を秒速の勢いで消すとは・・・面白い！行くぞバンギラス！岩雪崩れ！」

『雑魚が・・・波導弾』

青竜王は俺が命じるよりも早く技を出し、岩雪崩れの発生源を壊した。その後、青竜王が放った波導弾をコントロールし、バンギラスの背後から攻撃し爆発した！

「バンギラス!？」

『この程度で倒れるわけないよな?』

爆発の煙が晴れるとバンギラスは戦闘不能で倒れていた。

『おくと!?バンギラスは戦闘不能です!』

『ん?可笑しいな・・・マスター、俺は手加減したぞ?』

『そうだよな・・・何かあったのか?』

『バンギラス戻ってくれ。あの青竜王と言うポケモン。とんでもない強さだぞ・・・』

ダルクはバンギラスを手持ちに戻し次のポケモンを出した。

『出てこい、サーナイト!』

『俺はこのままでいいですよ』

！
 Baronはそう言い、ダルクは頷いた。その後直ぐにダルクが動いた

『先に行くぜ!サーナイト影分身!』

『青竜王、波紋を広げ本体を見付けたら本体を攻撃しろ。技は任せる』
 『了解した』

サーナイトは影分身を大量展開した。観客席からは大量のサーナイトがバトル場にいるように見えている。実際にそう見えるのだが・・・

青竜王は再び地面に手を付け、波紋を広げた。

『不味い!サーナイト!直ぐに攻撃に移るぞ!ムーンフォース!』

『流石に一度やった技は警戒しますね。ですが、もう遅い』

青竜王は技を発動しようとしている本体のサーナイトの居場所を見付けその場から消えた。いや、実際には神速の速さで移動した。

青竜王はサーナイトの懐に潜り込み、腹に手を翳し上に圧縮波を放った!

※圧縮波※【波導】

一点に圧縮された波導。それを打ち出した技。

サーナイトは突如現れた青竜王に対処が追いつかず、盛大に上空に吹き飛ばされた!

青竜王は更に追撃しようと両手を合わせ波導を溜め始めた。

『青竜王!そこまでだ!』

『む？マスター？』

青竜王は技の発動を止め、マスターの方へと戻って行ったその時、サーナイトが地面に落下した。

実況者の方が地面に落下したサーナイトを確認すると戦闘不能になっっていた。

『サーナイト戦闘不能です！驚異的な力を見せつけた青竜王！止めることは出来るのか!!!』

「戻ってくれサーナイト。こうなったら俺の切り札を出してやる！」
「それなら先に出せばいいのに・・・」

「黙れ！出てこい伝説ポケモン！ダーククライ！」

ダーククライか。このダーククライはそこまでの力を感じられないな・・・

「青竜王。あのダーククライはLv600前後じゃないか？」

『流石マスター。その通りです！一撃で戦闘が終わりますがよろしいですか？』

「仕方ないだろ。殺さない程度の力加減は頼むぞ」

『了解です』

「何をごちゃごちゃ言ってる！ダーククライ、ダークホール！」

ダーククライは両手を上に上げ黒い球体を作り出した時に、青竜王が無言で波導弾を放ち球体を破壊した。その後、瞬時にダーククライの背後に回り込み、首筋を叩いた。

それだけでダーククライは気絶し戦闘不能になった。

「なに!?ダーククライ！大丈夫か!!」

『な、何が起こったのでしょうか!!青竜王が消えたと思ったら、ダーククライの後ろにいたあああ！更にはそのダーククライが突如倒れたぞおおお！よく見ると戦闘不能だ〜！1回戦の勝者は、圧倒的強さを誇るバロン選手だ〜!!』

試合会場から盛大な拍手が鳴り響いた。

口々から「お前は最強だ〜!」「最強のチャレンジャー来た〜!」など様々な事を言われた。

ダルクからは、

「お前は俺より100倍強い。いや、それ以上だ。お前ならチャンピオンになれるだろう。頑張ってくれ」

そう言いいいポケモンセンターの方へと歩いて行った。

『彼奴地味にキザな奴なのか?』

「良く分からないけど、応援してくれるんじゃないかな?」

バロン達も試合会場を出て控え室に行った。

ポケモンリーグの1回戦は終わり、勝ち進んだ者たちは・・・

第1回戦勝者・モモ

第1回戦勝者・トロバ

第1回戦勝者・サナ

第1回戦勝者・エーギル

第1回戦勝者・バロン

次は第2回戦が行われるのだが、1人はシード枠になるだろう。

対戦表が出る間でのんびり待つつもりが、早々に対戦表が出来上がったらしく直ぐに勝ち進んだ選手達を会場に呼び出した。

そこには、現カロスチャンピオンのカルネと、ポケモン博士のプラターヌ博士が立っていた。その横には何故か実況者のお兄さんも立っていた。

選手達は直ぐに横一列に整列した。

「直ぐにお呼び出しして申し訳ない。対戦表が出来上がったので直ぐに発表したくてね。ちなみに、バロン選手には、少し悪いけど2人を相手にして欲しいの」

「構いませんよ。その方が俺のポケモン達も喜びますし」

この瞬間、バロンの周りの選手達から一斉に睨まれたが、バロンはそれを予測して言ったのだ。

その方が早く戦いが終わり、この地方の一番強い人と戦える。貴重な経験を積むことも出来るし、何よりポケモン達が一番輝く瞬間でもあるので、バトル出来るならさせてあげたい。

「あらあら。バロン選手、いきなり周りの人達を敵に回しちゃったけ

ど大丈夫？」

カルネさんが心配そうにそう言ってくれらけど、俺だけ特別扱いしちゃ他の人が・・・

「僕は大丈夫ですよ。それよりも早く対戦表を見せて頂きたいです」

「そうですね。プラターヌよろしくね」

「はい。それでは対戦表をお見せします！」

プラターヌが指を鳴らすと、テレビモニターに対戦表が現れた！

選手達も一斉に振り返り誰が対戦者かを見た。

ポケモンリーグ第2回戦

サナVSトロバ

バロンVSエーギル&モモ

『なお。第2回戦は明日に行われます。各選手は調整をし、ポケモンの入れ替えがある場合は受付で再度報告しておいてください。対戦表はこの後全国に流れますので、更に人が来るでしょう！皆さん、頑張ってくださいね！』

カルネはそう言いプラターヌ達と会場を出た。

バロンは青竜王を出し、飛び立った。一応サナ達には、試合期間中は敵同士だから連絡の取り合いは無しにしようというメールを送っていた。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十四話
リーグ1回戦の夜

百六十四話

ポケモンリーグ2回戦は明日だが、俺は一度ゲンジさんから相続されたコウジンタウンに行った。

日はすっかり沈み星が綺麗に見える時間帯になっていた。

「やっと着いたね。青竜王、あの屋敷で降ろしてくれ。久しぶりの我が家だ」

『久しぶりですね。何も変わっていないように思えます』

そのままの状態ですつと使用人に管理させていた我が屋敷は、まだ灯りが付いていた。使用人達がまだ働いているのだろうか？

「とりあえず入ろう」

『はい』

俺は青竜王に玄関前で降ろしてもらい、屋敷に入った。

すると、屋敷の扉を開けた瞬間、目の前で剣が音を立てて交差された。それを見た青竜王は直ぐに行動に移った。

『邪魔者が』

青竜王は手に波導を纏わせ剣を叩き割った！その後直ぐに屋敷内に入り、剣を持っていた人を峰打ちし気絶させた。その後、青竜王は手を床に付け、波紋を屋敷全体に巡らせた。

正面の扉に人が4人。ポケモンが6体。

左側の扉には人が2人。ポケモンが4体。

右側の扉には人が3人。ポケモンが4体。

2階の階段前の扉には人が10人以上。ポケモンは6体。

2階の各部屋（6部屋）には人が3人。ポケモンは1体。

こんなに人とポケモンがいた。だが、この静けさは何か可笑しい。しかも、この倒れている人は見覚えが無い。

まさかと思うが・・・我が屋敷を襲ったのか？そう考えるしか無いな・・・

多分だが、2階の一番人がいる場所が、ここの使用人達が掴まっている場所だろう。

「出てこい紅皇龍。エルドラド。青竜王と紅皇龍は1階にいる此奴らの仲間だと思ふ奴等を峰打ちで捕まえてくれ。エルドラドと俺で2階の掴まっている人達を助ける」

『『了解！』』

俺達は直ぐに行動した。

青竜王は手を前方の扉に向け波導で扉を押し開けた！

中の人は直ぐに青竜王を確認し、ポケモンで攻撃する指示を出そうとした時、青竜王は神速の速さで一気に接近し、この部屋のポケモン6体を数秒で倒した。

中にいた人達は、ポケモンが倒されたので一斉に逃げだそうとした時、青竜王はバロンの指示通り、逃げだそうとした人達の首筋を軽く叩き気絶させた。

紅皇龍も同時に動き、擬人化して分身を出し左右の扉を押し開けた！

右側の部屋の人は無視して、先にポケモン共を腹を殴り気絶させ、その後この部屋にいた3人の人達の首筋を軽く叩き気絶させた。

それと同時に分身の方も、左側の部屋に入り、先にポケモン達の腹を殴り背中を思い切り叩き叩きノックアウトさせた後、その部屋にいた4人の人達の首筋を軽く叩き気絶させた。

その後、縄を出現させ気絶させたポケモン達と人達を縛り上げた。バロンはエルドラドと一緒に2階に上がり正面の扉を勢いよく開けた。

そこには、この屋敷の使用人達が縄で縛られており、ポケモン達が見張っていた。

「てめえら！エルドラド！此奴らを全員捕まえろ!!」

『勿論だ！』

この部屋にいたポケモン達は破壊光線を放とうとしてきたので、それより早くエルドラドは分身を出現させ、6体のポケモンの口を封じ口の中で爆発させた。

爆発したせいで口の中から黒い煙が出たがもう気にしない。その攻撃で戦闘不能になっていたから。

エルドラドは直ぐに丈夫な縄を出現させ、ポケモン達を縛り上げた。

分身達には2階の各部屋にいる人達を捕まえ、連れてくるように命じ部屋から出した。

「バロン様!!助けてくださりありがとうございます!」

「ですが、今はポケモンリーグの最中ではありませんでしたか?」

使用人達は感謝の気持ちと、リーグ中の俺の心配をしてくれた。

「大丈夫だ。俺のポケモンの速度で十分に間に合う。それよりも酷いことされなかったか?」

俺はそっちの方が心配だった。もしもの事があれば此奴らを全員・・・

「突然大勢の方が押し寄せて来た時はびっくりしましたが、抵抗しなければ危害は加えないと言う事でしたので、大人しくしました。怪我はありません」

「それは良かった。今巡查さん呼びますので待っててください」

「はい」

俺は直ぐに巡查さんに連絡を入れ、3分後に来てくれた。

この屋敷の側にポケモン警察出張所があるので、来るのが早いのだ。

「バロン様!・巡查ただ今到着しました!・襲撃班を捕まえて頂きありがとうございます!」

「それでは、此奴らを頼みます」

「はい!・それでは、失礼します!」

巡查さんは敬礼をして直ぐに車を走らせた。

その後俺は、夜遅いがエルドラド達の力を借りて、我が屋敷をパワーアップさせた。その時に音や光りが凄くて町人達が起きてしまい苦情を言いに来る人が多くなったが、屋敷の方を見ると皆黙っていった・・・

コウジンタウン自体が小さな町なので、町人達全員が我が屋敷の前

に来た。

最初は、ゲンジさんの好きだった木造立ての屋敷だったが、今はエルドラド達の力を借りて、黄金や、ルビー、サファイアなど様々な効果な宝石などが多様に使われた豪華な屋敷に変わっていった。

更には、屋敷自体も大きくなりコウジンタウンの岩山側に家が広がっていった。

最終的には黄金色の城壁が造られ、屋敷が大きくなり、やがて煌びやかな豪華な城へと形を変えた。

結構広範囲の規模の城になったので、町人達に城で住まないかと聞くと言った。喜んで住むと言ってくれた。

皆が了承してくれたので、城壁の場所を変更しコウジンタウンの土地の境界線に黄金色の城壁を作り替えた。

城自体の場所は変わらず、岩山の上の方に建てられ、町人達が住んでいた民家などは、皆の了承を得て取り壊し商売用の店を建てた。

一番大切なポケモンセンターは、商売エリアと城エリアと2カ所に建て女医さんを更に雇わせて貰った。

巡查さんも更に雇わせて貰ったが、警備に2進化以上のポケモンがいることを条件に雇ったので、10人ほど雇うことにした。

他の事も色々しなくちゃいけないかったのだが、町人達に「明日は大仕事なりーグ戦があるのでもう休んでください」と言われたので、甘えさせて貰った。

翌朝起きると、町人達の中に数人いた高レベルポケモントレーナー(現役引退者)達が俺の所に来た。

「朝早くにすみません。私はこの町出身のガフォルと申します。こちらが・・・」

「ヴォルフと申します」

「フォランと申します」

「ダダンと申します」

「バンデンと申します」

朝早くから名乗って来たポケモントレーナーは見た感じは40代の人達だった。

フォランとダダンは女性の方で、ガフォル、ヴォルフ、バンデンは男性の方だ。

男性の方の名前が正直、覚えづらいな・・・

「どうかしましたか？」

「我らをどうか、雇ってください！」

「城の警護など何でもします！」

「どうか!!」

「お願いします！」

5人が一斉に頭を下げた。

この城の警備などは確かに欲しかったので、俺にもいい話だ。

「分かりました。雇わせて頂きます。手続きは代官に任せますので、そちらでお願いします」

「「ありがとうございます！」」

更に頭を下げられた後、5人は喜びあった。

そんなにこの城で働きたいのかな?と思ってしまったが、まあ普通は城に住むだけでも凄い事なので、町人達からすれば嬉しいのだろう。更には、40代だと出来る仕事に限られるので、仕事が出来て嬉しいと言うのもあるのだろう。

俺は旅の途中に、白龍やデオキシスに城を造って貰ったりしていたから驚きは少ないけど、完璧に豪華な城になっているので、そこには驚いている。

ちなみに、この町の代官はコーラスと言う白髪のお爺さんで、城を造って貰っている間に自己紹介をしていた。

俺がここに戻って来るまで色々と頑張ってくれていたので、リーグ優勝した時に町人達とリーグ関係者と盛大なパーティを開こうと思う。

スペシャルゲストにカルネさんも来たら面白そうだな。

俺はそう考えながら明日(時刻は0時を回っている)ので今日)リーグの支度を始めた時に思い出した。

「エイセツシテイの時のデオキシス、結局セレナ捕まえれなかったな。あの時は、どつちがあの場合でGETするかだったから、今はもう良い

よな。俺達ならデオキシスをGET出来るかな」

独り言を呟いていると、エルドラドから声を掛けられた。

『マスターはデオキシスの事が好きなのですね』

「え？ああ、好きなんだと思う。エルドラド、力を貸してくれないか？」

『はい。では、行きましようか。テラスで青竜王がデオキシスの居場所を既に探してくれています』

「ありがとう！」

バロンは直ぐにリュックに荷物を詰め込み、エルドラドと一緒にテラスに向かった。

そこには既に満足そうな顔の青竜王がいた。

「青竜王！待たせてすまない。デオキシスの居場所は分かったか？」

『勿論だマスター。デオキシスはこの城に興味を持ち、直ぐ側にいた』
「そばに!」

バロンは直ぐに周りを見渡したが、デオキシスらしき姿が見えない。もう一度青竜王に聞こうと思った時、青竜王の辺りにデオキシスの影が見えた！

バロンはを直ぐに上を見るとデオキシスがこちらを見下ろしていた。

「デオキシス！会いたかったぞ！」

『人間。我に会いたかったのか？』

「ああ！俺はお前をGETしたい！バトルしてくれ！」

『よかろう。では、始めるとしよう』

デオキシスからプレッシャーが発生して、威圧が凄い。

だが、ここで暴れると城と住んでいる町人に迷惑がかかる。

「エルドラド！直ぐにデオキシスと俺達を別空間に転移してくれ！」

『ああ！』

エルドラドが咆哮すると、半透明は青い球体が発生し、デオキシスと俺達を包み込んだ。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十五話
リーグ1回戦の夜

百六十五話

エルドラドの咆哮で別空間に転移した場所は、草原だった。辺り一面に草場だけが広がっており、それ以外は何も無い。

デオキシスの方を見ると、ノーマルフォルムからスピードフォルムにチェンジしていた。

エルドラドは既に戦闘態勢に入っている。

草原 デオキシス戦

☆エルドラドVSデオキシス☆

デオキシスは神速を使いエルドラドの背後に回り込みサイコカッターを使ってきた！

その攻撃をエルドラドは硬質化した翼を振り払い技を弾き返した。デオキシスの方に返って来た技は神速を使い回避した後、エルドラドの懐まで一気に迫った！

エルドラドは直ぐに体自体を硬質化して防御を一気に高めた。

デオキシスはそのままサイコカッターを使い攻撃したが、簡単に弾かれ直ぐに後退した。

『防御が高いのですね』

『まあな。次はこちらから行くぞ』

エルドラドは自身の周りに光りの球体を数十個展開し、そこから光りの光線を放った！

デオキシスは直ぐに神速を使い光線を躲したが、その光線は追尾効果も備わっておりデオキシスを追いかけた！

周りには障害物となる物も無いので一番厄介な攻撃だが、デオキシスは神速を使ったままエルドラドの方へと突貫して来た！光りの光線もそれに続き迫って来る！

エルドラドは迫って来るデオキシスと光線を微動だにせず、正面に

光りの球体を展開して極太の光線を放った！

その光線はこちらに迫って来ていたデオキシスを巻き込み、光りの光線も一緒に吹き飛ばした！

デオキシスは間一髪ディフェンスフォームにチェンジし、守るを發動したがエルドラドの技の威力に負け体半分が吹き飛んだ。

『防ぎ切れなかったか・・・自己再生』

デオキシスは失った体の部分を修復し元に戻した。

『ほう？便利な技だな』

『そうでしょう。次はこちらの番ですね！』

デオキシスはアタックフォームにチェンジすると、両手を重ね紫色のエネルギーを溜め始めた。

『サイコブーストか？』

エルドラドは少し疑問に思ったが考えるのを止め、黄金の球体を100個出現させた。その後、各球体がそれぞれエネルギーをチャージし始めた。エルドラドは自分自身をステータス強化した。

『完成した。サイコブレイク・オーバーチャージ！』

『各球体よ！あの攻撃を打ち砕け！』

デオキシスが放ったオーバーチャージされたサイコブレイクがエルドラドに向け放たれた！

その攻撃をエルドラドが展開していた各黄金の球体から、黄金色の

光線が一齐に発射されサイコブレイクを打ち砕いた！

『我の最強の一撃を・・・小さな球体だけで打ち砕くだと・・・』

『まだ球体達は余力を残しているぞ？もう一度放つか？』

『いや・・・止しておくよ』

デオキシスはノーマルフォームにチェンジして両手を上に上げた。

『我の負けだ。見事だった』

『球体よ。暫く休憩だ、戻ってくれ』

エルドラドがそう言うと一緒に粒子となり消えていった。

『デオキシス、マスターの仲間になってくれるか？』

『勿論です』

『ではマスター、最後の仕上げをお願いします』

「ありがとうな、エルドラド」

バロンは元デオキシスのモンスターボールを取り出しデオキシスに当てた。

デオキシスは抵抗する事無くボールの中に入っけいき3回ボールが揺れると音が鳴った。

GET完了だ。

『おめでとうマスター。漸く戻って来ましたね』

「本当にありがとうエルドラド。出てこいデオキシス！」

『マスター!!ひっさしぶりですう!』

バロンとエルドラドは凄く驚いてしまった・・・いや、驚くよ!!

「もしかして記憶が戻った?」

『マスター?おかしな顔しながら聞かないでくださいよマスターと一緒に旅をしていたメイビスじゃないですか』

「メイビス・・・良かった。本当に・・・良かった・・・」

『マスター?』

バロンは地面に崩れ泣き出した。

エルドラドとメイビスは擬人化して、エルドラドがメイビスに理由を話した。

メイビスは自分がそんな悪いことをしたんだと分かり、直ぐバロンに必死に謝った。

バロンは直ぐに許したけど、まだ泣いていた。メイビスも次第に泣き出した。

暫く待っているとバロンとメイビスは泣き止み、年相応の無邪気笑顔で抱き合った。

地味にエルドラドも抱き合いたかったが我慢した。

「エルドラド、いつもありがとう」

バロンはそう言うと、エルドラドをクイツと引き寄せて3人で抱き合った。

エルドラドも笑顔になり、抱きしめ返した。少し経つと3人はエルドラドと一緒に元の場所に転移した。

そこには既に青竜王と紅皇龍が擬人化状態で待っていた。

「待たせてすまない。メイビスとまた一緒に旅が出来るぞ」

『良かったな、マスター』

『おめでとうマスター』

「ありがとう！」

Baron達は城のテラスで祝ながら、今後の手持ちポケモンとリーグに出すポケモンを決めることにした。

Baronが少し考えて提案した結果は……

「ゾロアークには悪いけど、アルマトーレで更に鍛えて貰う。

メイビスはゾロアークの枠に入ってくれ。

エルドラド、青竜王、紅皇龍は引き続き、俺の手持ちポケモンとリーグで一緒に戦ってくれ。

メタグロスも引き続き俺の手持ちのまま頼む」

俺のポケモン達は皆、了承してくれてゾロアークはラティオスに頼んでアルマトーレに送ってもらった。

「それじゃみんな、今日はもう寝よう！」

『うん！私はマスターの隣ね』

『それはダメだ！我がマスターの隣だ！』

『エルドラド様が言うなら俺もだ！俺が隣だ！』

『皆……マスターの隣は俺のだ』

「あははは……皆で仲良く寝ようよ。ベッドが何故か凄く広いんだから」

チラツとエルドラドを見ると、目をそらされた。

絶対に仕組んでいたな……嬉しいからいいけど。

Baronは皆の背中を押しながら寝室に戻っていった。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十六話
リーグ2回戦の朝

百六十六話

翌朝目が覚めると疲れが全て取れたかのように体が凄く軽かった。きつと、メイビスが戻って来てくれたからだ。ずっと追いかけていたから・・・

「みんなおはよう。今日も1日よろしく頼むね」
『うん〜』

メイビスが寝込みたいな伸びをしながら返事をしてくれた。他のみんなはまだ眠たいのかゴロゴロしている・・・

「今日ってリーグの日だから早く行きたいんだけど?」

その瞬間、ゴロゴロしていたみんなが一斉に立ち上がり、直ぐに洗面台に向かって行き、整った顔で戻って来た。

『おはようございますマスター!』

『お見苦しい所をお見せしてしまい申し訳ございません!』

「いいいいよ。俺達は友達なんだから」

『マスター!』

メイビスが勢いよく抱きついて来たのでしつかりと受け止めた。

「メイビス・・・今日はすまないがリーグ中はボールの中で待機しててくれよ」

『うん!その後はマスターにくつつくよ!』

「うん。その時は大丈夫だよ」

『やった〜!』

『メイビス・・・俺達もくつつきたいが・・・周りの目が気になってしまふから、気を付けてくれよ?』

『勿論!マスターを困らせないように、控え室って部屋に着いたら直ぐに抱きつくから!』

メイビスは満面の笑みでそう答えボールの中に入った。メタグロスもやれやれと言った感じでボールに入った。

紅皇龍とエルドラドは空を飛ぶと目立ってしまうので、今はまだボールの中で待機だ。

リーグ優勝するときには3体とも表に出るから隠すことはしなくて大丈夫だが、それまでは我慢だ。

青竜王以外がボールに入った後、扉をノックされた。

「バロン様。朝食の準備が整いましたので、こちらにお届けしましょうか?」

「え?あ、待って!みんなで食べよう!」

バロンはまだ10歳。咄嗟の反応が完璧に子どもになってしまった。

メイドの方もクスクスと笑っていたが、失礼しましたと言ってご飯が置いてある居間まで案内してくれた。

一応俺の城だから大方の場所は把握しているが、城の長だからと言う事で俺専属のメイドと言う事でこの町一番のメイド長を俺に着けたようだ。

俺はメイド長の後ろに着いて行きながら居間に入る扉を開いた途端、他のメイド達や執事達が一齐に頭を下げた。

「「おはようございます。ご主人様」」

「お、おはよう」

バロンはぎこちなく挨拶をして、席に着いた。

すると、この城のコック長が挨拶をしてくれたのでこちらも挨拶を返した。

朝のフルコース料理には、高級食材だと分かる物が次々と皿に出された。

「ごちそうさまでした」

バロンはフルコースを食べ終わると居間を出て行った。

まさか、この町の人達がここまでしてくれるなんて思ってた。なかった。

時刻を見るとリーグの受付まで後1時間しか無かった!

「青竜王!直ぐに出発する!行くぞ!」

『はー!』

Baronはサツと青竜王の背中に乗り、青竜王は飛び立った。

「青竜王、もつと飛ばしてくれ！」

『了解マスター！加護だけ付けます』

青竜王はBaronに加護を着けて神速を使った。

青竜王が着けた加護は、どんな速度でも自分にしがみついている。振り落とされないと言う加護。更に、スピードが速すぎて人間では呼吸すら出来ないのも防ぐ事が出来るようになった。

普通なら1時間は掛かる距離を青竜王のおかげで5分で着いた。

「ありがとう青竜王。凄く助かったよ」

『マスターの為なら何処へでも行きます』

青竜王はそう言うと言った。

「さて・・・受付するか」

Baronはリーグの受付の行き、ポケモンの交代はしないと伝えた。

大会が始まるまでは自由時間になる。

「さてと・・・後40分はあるぞ」

Baronは2回戦が行われる試合会場を見に行った。

そこは1回戦とは違い、バトル場が固定だった。周りはコンクリートで囲まれており、地面は人工芝。

「ここが2回戦の会場か。なかなか殺風景だな」

「あ〜！Baron!!」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえた。この声は俺の好きな人の声だ。

Baronが振り返るとユウキが抱きついてきた！

「ユウキ!?久しぶりだな！」

Baronはしっかりとユウキを抱きしめてゆっくりと話した。後ろにお父様と執事の方がいたし・・・

「すまないねBaron君。ユウキがどうしても君に会いたいと言う事で」

「構いません。ユウキに会えて良かったです。ユウキパワーでどんな敵にでも勝って見せますよ！後、自分の城が昨日出来たので、お父様。僕がこのリーグで優勝すれば、ユウキさんを俺の嫁に貰わせてください」

い！」

この発言にはユウキ家が皆、びつくりした。

ユウキは堂々とプロポーズを超えて結婚させて欲しいとお父様に申し込んだバロンに対して。勿論、ユウキもバロンの事が好きで結婚はしたいが。

お父様は、バロンが既に我が屋敷を超える城を持っていると言った事と、ユウキを嫁に欲しいと言った事だ。

執事は、両方の事で驚いていた。

「バロン君。私も君の事は好きだが、娘を嫁に送るのは」

「ユウキ家は強さが全てとお父様が言いましたよね？僕はこのリーグで絶対に優勝します！」

「バロン様……」

執事が何かを言おうとした時、お父様に止められた。

「そこまで言うなら、俺も覚悟を決めよう！ユウキを嫁にするならリーグ優勝が一番の力！」

「それこそが！」

「ユウキ家の掟！」

バロンとお父様は互いにニツと笑い、大声でお互い笑い出した。

「バロン君！私も応援するよ。君の優勝を！」

「私も応援するよ！ダーリン！」

「わたくしも応援させて頂きます」

ユウキ家の人達から応援される喜びと、大好きな人との結婚が掛かったこのリーグ戦。必ず優勝してみせる！

その後は、雑談を楽しみながら時間が来るまで楽しんだ。

試合開始5分前になった所で俺は選手専用入り口に行き、アナウンスが流れるまで休憩場で待った。

そして漸く、試合が始まるアナウンスが流れた。それと同時に2回戦の最初の相手、サナとトロバがそれぞれの控え室から出て来た。

「バロン君。3回戦は私と当たるかもよ？」

「サナ君。君は僕を倒せるとでも？」

俺の目の前で火花が散る程の睨み合いが始まり、係員が来て会場の

方に案内した。

「さて。2回戦の試合を見ようか」

俺は控え室に戻り、テレビモニターを見た。

『マスター？もういいかな？』

「今なら良いよ。おいで」

『やった〜！』

メイビスがボールから出て来て、擬人化状態の愛おしい姿で俺の膝の上に座った。

『始まりますね試合！』

「うん。楽しみだ」

他の友達も皆、ボールから出て来て近くにあった椅子に座り、テレビモニターを見た。

いよいよ2回戦の始まりだ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十七話
リーグ2回戦

百六十七話

『お待ちせしました！これよりポケモンリーグ2回戦第1試合を始めます！なお、実況者がうるさいとクリームが殺到しまして、実況無しで試合をします。それでは選手入場です!!』

左右の選手入場口から白い煙が勢いよく噴き出した！そこから選手が入場した。

右からはサナが、左からはトロバが出て来た。

『それでは！2回戦第1試合、開始です!!』

「出て来て、ルカリオ！」

「出番です、カイリキー！」

ポケモンリーグ2回戦第1試合

☆サナVSトロバ☆

「ルカリオ、剣の舞」

「カイリキー、ビルドアップ」

ルカリオは攻撃力を格段に上げ、カイリキーは攻守両方上げた。

「行くよルカリオ！気合い玉！」

「カイリキー、爆裂パンチ！」

ルカリオは直ぐに気合い玉を放ち、カイリキーは突貫して、爆裂パンチで気合い玉を殴り飛ばしバトル場の壁にぶつけた。そのままカイリキーはルカリオの方に走って行き、爆裂パンチで攻撃しようとした！

「ルカリオ、ボーンラッシュで防いで！」

「カイリキー、残りの腕も爆裂パンチで攻撃してください。これでルカリオは倒せます」

「ルカリオ！後退して！」

カイリキーは直ぐに4本の腕全てを爆裂パンチに切り替えルカリオを攻撃した。

ルカリオはボンラッシュを使い、次々に繰り出される攻撃をギリギリで防いでいたが、次第に体力の方が消耗していき、遂に攻撃が当たった！

ルカリオは勢いよく吹き飛ばされそのまま戦闘不能になった。

「ルカリオ・・・戻って、お疲れ様」

「カイリキー、お疲れ様です。今のうちに回復の薬を使います」

サナが次のポケモンを出す間にトロバは鞆から薬を取り出し、カイリキーを全回復させた。

「回復も早いわね。出て来て、サーナイト！」

「相性は不利ですね・・・カイリキー、一度戻ってください」

ここでトロバもポケモンを戻した。

「僕のポケモンは・・・出番です、ギルガルド！」

「ギルガルド!?!」

※ギルガルド※【鋼・ゴースト】

王の素質を持つ人間を見抜くらしい。認められた人はやがて王になると言われている。

見た目は剣と盾で、攻撃の時と防御の時とで形態が変わる。

サナはびつくりしていたが、技はちゃんと考えてあるので気を取り直してバトルに集中した。

「それでは、行きますよ。ギルガルド、剣の舞」

「サーナイト、瞑想」

ギルガルドは攻撃力を格段に上げ、サーナイトは特攻、特防を上げた。

「サーナイト、火炎放射！」

「ギルガルド、キングシールド！」

※キングシールド※【鋼】

相手の攻撃を防ぐと同時に防御態勢にあんる。触れた相手の攻撃を下げる。

ギルガルドは剣を鞘に戻して盾のモードに切り替わり、防御を上げ

つつサーナイトの攻撃を防いだ。

「やっぱりキングシールド・・・サーナイト、シャドーボール！」

「ギルガルド、聖なる剣！」

ギルガルドが鞘から剣を抜き形態が変わると、聖なる剣を使いシャドーボールを切り裂いた。そのままサーナイトの方に突貫し切りつけようとした時！

「サーナイト、守る」

ギルガルドの攻撃を守るを発動し攻撃を守るを直ぐに反撃を開始した。

「サーナイト、火炎放射！」

「ギルガルド、キングシールド！」

ギルガルドは再びキングシールドを使い防御を上げつつ攻撃を防いだ。

「剣の舞で更に攻撃を上げてください」

「っ！サーナイト！直ぐに火炎放射！」

ギルガルドは直ぐに技を使い攻撃力を更に格段に上げた。その時、サーナイトが放った火炎放射がギルガルドに当たる直前！

「ギルガルド！盾で防いでください」

ギルガルドは直ぐに自慢の盾で火炎放射を受け止めた！

サーナイトは瞑想の効果で火炎放射の威力は更に上がっているの
で、攻撃を受け止めていてもダメージは大きい。

「迂闊でした。ギルガルド、聖なる剣！」

「サーナイト、再び守る！」

サーナイトは直ぐに守るを発動してギルガルドの守るを防いで・・・
「ギルガルド！もつとパワーを上げてください！」

ギルガルドが更に力を込め、サーナイトが張った守るを攻撃する！
サーナイトも守るの技を頑張つて維持するが、技自体の効果が切れ始
めた時、ギルガルドの刀身が更に赤くなった！

「今頃築きましたか。攻撃中に剣の舞を使っていたのですよ！」

「なんてめちやくちやな！サーナイト、催眠術で眠らして！」

サーナイトは守るを維持しながら催眠術を仕掛けてきた！

「まずい！ギルガルド、キングシールドで防いでください！」

ギルガルドは直ぐに攻撃を中断し離れて、剣を鞘に高速で収納しキングシールドを使い催眠術を間一髪で防いだ。

眠らせたなら攻撃し放題、能力アップし放題にしてしまうので絶対に防ぎたい技だ。

「避けられた!？」

「間一髪でした。ギルガルド、連続斬り！」

「サーナイト、火炎放射！」

ギルガルドは再び形態を変え攻撃しに行った。サーナイトは直ぐに火炎放射を放ったが、予期せぬ自体が発生した！

「え!?何で炎を切り裂けるの!？」

「攻撃力を底上げしましたからね。火炎放射はもう怖くありません！斬り倒しなさいギルガルド！」

トロバは右手を勢いよくサーナイトに指を向けた後、ギルガルドがサーナイトを連続で斬りつけた！

その攻撃を受け、サーナイトは倒れた。

「サーナイトまで・・・トロバ、いつのまにそんなに強いポケモンを育てたの?」

「この一週間、夜に猛特訓しましたから」

「なるほどね・・・サーナイト戻って、お疲れ様」

サナは最後の1体のボールを手に持った。

「最後は貴方よ。出て来て！リザードン!!」

「やはり最後はリザードンですか。戻ってくださいギルガルド。僕は、再び出番です！カイリキー！」

「やっぱりカイリキー。リザードン、最初から本気で行くよ！メガ進化!!」

サナは指に付けていたキーストーンに触れ、リザードンをメガ進化させた。

メガリザードンの効果で日照りが発生し炎タイプの威力は上がる。

「さあ！行くよ、リザードン！ブラストバーン！」

「いきなり大技ですね。カイリキー、守るです」

リザードンは勢いよく地面に拳を当て、炎の柱を発生させながらカイリキーに向かわせた。

カイリキーは直ぐに守るを発動させ、その攻撃を防ぎきった。

「さあ、反撃と行きましょうか！カイリキー、走りながらストーンエッジ、拳には爆裂パンチ。攻撃範囲に入った後は連続で攻撃です！」

「リザードン、避けて！」

カイリキーはストーンエッジを走りながら発生させ、爆裂パンチの準備をしている間にストーンエッジを発射させた。カイリキーの特性、ノーガードにより攻撃は確実にヒットさせる事が出来るので、避けるは禁物だ。

ストーンエッジは真っ直ぐリザードンに飛んでいき攻撃を当てた。リザードンは炎と飛行タイプ。岩タイプは4倍の効果抜群の攻撃だ。当たれば大ダメージだ。

リザードンはストーンエッジを受け片膝を着いた時、カイリキーが攻撃範囲内に入った。

「リザードン！大文字よ！」

リザードンは前方に大文字を発射させたが、カイリキーは爆裂パンチで掻き消した！

「え!？」

「そのままドメです！必殺、爆裂4連撃！」

カイリキーはリザードンの腹に1発当て爆発。顔にアッパー攻撃1発当て爆発。更に顔を2方向から同時にプレスするように当て大爆発。この攻撃によりリザードンは地面に倒れメガ進化が解け戦闘不能になった。

『カイリキーの猛攻撃に耐えきれずリザードン戦闘不能！ポケモンリーグ2回戦第1試合の勝者はトロバ選手だ！』

「ありがとうございます」

サナとトロバはお互いのポケモンを手持ちに戻し、頭を下げて会場を出た。

その後、2人は控え室に行きバロン達の戦闘を見ることにした。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十八話
リーグ2回戦

百六十八話

ポケモンリーグ2回戦第1試合が終わりとうとう、俺達の番が来た。

Baronは既に入場口に行き待機していた。残りの選手2名はギリギリまで作戦を練っていて、係員に呼ばれてから入場口に行った。

『お待たせしました！これよりポケモンリーグ2回戦第2試合を始めます！今回 Baron 選手は、モモ選手とイーギル選手両方と同時バトルをしてもらいます。両選手ともに了承しています。それでは、選手入場です！』

第1試合同様に、入場口に白い煙が勢いよく噴き出しそこから選手が入場した。

右側からは Baron が、左側からはモモとイーギルが入場した。

今回の Baron の衣装は、紅皇龍が用意してくれた赤がメインの衣装だ。

『今回も Baron 選手、気合いが入ってますね！それでは！ポケモンリーグ2回戦第2試合を始めます！』

ポケモンリーグ2回戦第2試合

☆ Baron VS モモ & イーギル ☆

「出てこい、紅皇龍！」

「出番だ、ドラピオン！」

「行って来て、ハガネール！」

イーギルがドラピオン。モモがハガネールを出した。 Baron は事前に決めていた紅皇龍を出した。

「先に行くぜ！ドラピオン、どくどくだ！」

「ハガネールはロックカット！」

ドラピオンは口から猛毒の毒液を吐き出してきた！ハガネールは

自身の素早さを格段に上げた。

「紅皇龍、毒諸共燃やし尽くせ」

『良いんだな?』

「勿論、死なない程度にね」

『了解した』

紅皇龍の周りにマグマが唐突に噴き出し猛毒が焼き尽くされた後、紅皇龍が咆哮した瞬間、マグマがハガネールとドラピオン目掛け襲いかかった!

「守る!」

2体は直ぐに守るを張り、マグマを防いだが周りにマグマがそのまま流れる。トレーナーの場所とは3m程の高台の場所で指示するので被害は無いが、ポケモンにとっては危険な場所になった。守るが維持出来なくなれば高確率で戦闘不能になる。

「ドラピオン、戻れ!」

「ハガネールも戻って!」

モモとエーギルは守るを発動させたままポケモンを手持ちに戻した。

「流石に戻したか。紅皇龍、手加減したな?」

『手加減無しだと殺してしまいます...』

「それもそうか。悪かった」

紅皇龍はビクツと体が震えた。その元凶はバロンの腰に吊してある紅皇龍以外のモンスターボール全てからだった。

『すみません!口答えして本当にすみません!』

紅皇龍は俺とその友達(ボールの中のポケモン達)にだけ聞こえるように、速攻で謝った。

ちなみにボールの中では...

『死なない程度に何故、攻撃しない!』(青竜王)

『マスターは死なない程度と言ったのに、手加減して守るの技で攻撃を防がれおって!』(エルドラド)

『私だったら、神速で物理攻撃でやっちゃうけどな』(メイビス)

『マスターの命令は絶対』(メタグロス)

その後、殺意が籠もった感情を解放した。その時に紅皇龍が速攻で謝ったのだ。

紅皇龍は冷や汗が滝のように流れ、次から死なない程度に本気で攻撃をする事を決めた。

俺達の中だけでこのようなやりとりをしている間に相手方2人は次のポケモンを出した。

「出てこいトロピウス！」

「出て来てペリッパー！」

「やはり両方共に飛行タイプか」

その時には、リーグのバトル場全てにマグマが浸透した。その中に紅皇龍が立っている状態だ。

勿論、紅皇龍の体はマグマでも大丈夫な体をしているので、何の問題もない。

「速攻仕掛けろ！ソーラービーム！」

「ペリッパーはハイドロポンプ！」

「紅皇龍、一撃で仕留めろ」

『仰せのままに』

紅皇龍は自身の周りに赤黒い球体を10個出現させ、そこから真っ赤な光線を2体に向け放った。

勿論、斜線には2体が放った技があり、その技を一瞬で消し飛ばしそのまま2体を攻撃して大爆発が起こりバトル場に落下しそうになった。

「紅皇龍、バトル場のマグマを消してやれ。あのままだと死んで俺が負けになる」

『直ぐに！』

紅皇龍は2体が落下する前にバトル場に浸透したマグマを1つの球体に速攻で纏め上げ、宙に浮かせた。その時に2体のポケモンはバトル場に落下して戦闘不能になった。

マグマの球体は太陽みたいに凄く明るく熱い。バロンは、紅皇龍の加護により大丈夫だが、観客や相手方2人が大分キツイだろう。

「紅皇龍。せっかくで悪いが、観客にも被害が及ぶからその球体も消

してくれないか？」

『そうでしたか！すみません！』

紅皇龍は球体を収縮させていき、完全に消えさせた。

その間に相手はポケモンを手持ちに返し、次のポケモンを出した。

「もう一回行ってこい、ドラピオン！」

「貴方もよろしく、ハガネール！」

場に出した時に2体のポケモンは威嚇するかのようには咆哮した。

「速攻で決めろ紅皇龍」

バロンはそれだけ言うとは紅皇龍に任せた。

紅皇龍は、周りに浮かばせていた球体からもう一度光線を放った。

「守る！」

相手は再び守るを発動したが・・・

『2度も同じ手は通用せぬ！』

紅皇龍は更に球体を20個出現させ、バトル場全方向から光線を放った！2体は必死に守るを発動したが、光線の威力が強くだんだんと守るが収縮していく！

『出力増加！』

球体からの光線が更に強くなり、守るの技は破壊された！そのまま2体を集中砲火し大爆発が起こった！

爆煙が晴れると2体は戦闘不能で地面に倒れていた。

紅皇龍は球体を待機モードに切り替えた。

「戻れドラピオン！」

「戻ってハガネール」

2人は直ぐに2体を手持ちに戻し、最後のポケモンを出した。

「行け俺の相棒、ライコウ！」

「行って来て相棒、クレセリア！」

「紅皇龍、戦闘続行だ」

紅皇龍は直ぐに球体をバトルモードに移行して再度、光線をバトル場全方向から発射した。

「ライコウ、放電！」

「クレセリア、瞑想」

ライコウが放電で迫って来る光線を相殺している間にクレセリアが瞑想で特攻と特防を上げた。

「紅皇龍。球体に攻撃を出し続けるように命令。自身はステータス強化。次の攻撃で決めるぞ」

『了解しました。マスター』

ライコウは必死に雷を操り光線を相殺している。クレセリアは瞑想が終わり攻撃準備に入った。

紅皇龍は命令通り、球体に攻撃を出し続けさせ、自身はステータスの強化に入った。大技で決めるので、ステータスを出るだけ強化して放つつもりだ。

紅皇龍の体はだんだんと赤くなっていく……

「急ぐぞ！必ず大技が来る！ライコウ、100万ボルト！」

「クレセリア、ミストラルフィニッシュ！」

※100万ボルト※【雷】

10万ボルトと雷を合体させた技。

※ミストラルフィニッシュ※【妖精】

霧を発生させて自身の姿を消す。その後、奇襲攻撃を仕掛ける。

「ほう？そちらも大技か。霧が邪魔だな。球体よ。霧を消し飛ばせ！」

球体がバロンの命令を聞き、その場で高速回転を始めた。その時にライコウが100万ボルトを放った。

クレセリアが発生させた霧は、球体の回転により全て上空に飛んでいき霧が完全に晴れた。だが、そこには既にクレセリアの姿は無かった。

『障壁』

紅皇龍が自身の周りに障壁を張り、ライコウが放った100万ボルトを防いだ後、クレセリアが背後から強烈な一撃を仕掛けてきた！

「紅皇龍！後ろだ！」

『了解！オーバーレイ！』

紅皇龍は尻尾をオーバーレイにしてクレセリアの強烈な一撃を斬り返した！

「紅皇龍、この技で決めるぞ！極・ビッグバン！」

※極（きわみ）・ビッグバン※【炎】

ビッグバンの上位版。広範囲に大爆発を起こす。

紅皇龍が一気に空に飛び上がり、バトル場中央に極・ビッグバンを放った！

ライコウもクレセリアも相手方2人も動けない。強大な力に言葉も出なく、体を動かすことすら出来なかったのだ。

ビッグバンが大爆発した瞬間、その衝撃波が2体のポケモンを襲いバトル場の壁に叩き付けられた。

相手方2人は、係員が直ぐにバリアを張り選手を守った。

バロンは既に紅皇龍の加護が付いているので、問題は無い。

衝撃波はこの会場全てを遅い、係員が動かなければ死人や怪我人が出たであろう程の威力を誇っていた。

ビッグバンが晴れた時には、バトル場は崩壊しており、2体のポケモンは壁に埋もれており、そこで戦闘不能になっていた。怪我は勿論しているが、死ななければ退場にはならないので、大丈夫だ。

観客席の方にも被害が及んでおり、係員のポケモン達が2列になり観客席を『守る』で防いでくれた。

チャンピオンとプラターヌの方は、それぞれのポケモンが守り出場ポケモンだけが怪我をして、それ以外は怪我はしていないが、会場が半壊状態になった。

相手方2人の方を見ると、腰が抜けて立ち上がれなくなっていた。

2体のポケモンは直ぐに女医さんが来て、治療室に運んでいった。

「やり過ぎたかな？」

『マスターは優しすぎます。これぐらいした方が良いでしょう』

その時、ボールからエルドラドが出て来て紅皇龍を叱った。

『お前な！人間共に恐怖を与えたら、マスターが居づらくなるのだぞ！力はセーブしろ！』

『すみませんでした！』

「別にいいよ。みんな上級神。相手を死なせないだけでも難しいですわ。」

エルドラドの顔が明らかに驚いていた。

『マスター。何故それを知っていたのですか?』

「薄々感づいていたよ。まあ、チャンピオンのカルネさんやプラターヌは、伝説ポケモンぐらいは使ってくると思うから、次のバトルでとりあえず勝って、チャンピオン戦に行こう。その時は思いっきり暴れて良いから」

その時、青竜王、メイビス、メタグロスがボールから出て来て…

『『暴れても良いのか!?!』』

とみんなが一斉に聞いてきた。

流石に驚いたが、やはりみんな力をセーブしていたんだろう。

「うん。だって、相手はチャンピオン。本気で挑まないと逆に失礼でしょ?。」

『流石はマスター!その通りです!』

みんなもその通りと言い、話しは纏まった。

後、アナウンスが流れると思ってここで待ってたが、全然流れてこない…

「あ…ビッグバンで施設自体が崩壊したからアナウンスが流れないか」

『あ…すみませんでした…』

紅皇龍が地面に頭を付けて謝った。

丁度その時、会場にカルネとプラターヌが入ってきた。

「紅皇龍。直ぐに頭を上げてくれ」

『はい!』

紅皇龍は直ぐに頭を上げ、こちらに向かって来る2人を見た。

「お待たせしてすみません。ポケモンリーグ2回戦第2試合はバロンの勝ちです」

「勝ちなのだが、この会場は暫く使えなく、別の場所で決勝戦をする事になったんだ」

「やっぱりそうですよね…」

紅皇龍は球体で『ゴメン』と形作った。

「え?あ、うん。紅皇龍さんはバトルで手加減して怒られたんでしょ」

？」

「なんで知ってるんですか？」

「勿論、私もポケモンと会話出来るからよ」

「そうでしたか」

カルネは反応が面白くなかったそうで、頬を膨らせた。

「そうだ。言い忘れる所だったわ。次の3回戦。トロバ選手は辞退するそうよ」

「ビッグバンが大分効いたみたいだよ」

プラターヌが内容を教えてくれたおかげで、内容は分かったがまさか辞退するとは……

「と言う事は……次はチャンピオン戦が出来るんですね？」

この問いにカルネが微笑んだ。

「勿論です。チャンピオン・カルネ。全力でお相手させて頂きます！」

「ありがとうございます。こちらも全力を持ってお相手させて頂きます」

バロンとカルネは握手をして、詳細は追って連絡しますと言われてから別れた。

しばらくは自由行動なので、我が城に帰るか。

「あ！ユウキは大丈夫なのか!?!」

バロンは直ぐに観客席に走り出した。

ポケットモンスターXY バロンの旅 百六十九話
リーグ2回戦終了

百六十九話

ビッグバンの影響力が酷かったが、係員のポケモン達のおかげで観客席の被害は最小限に留まっていた。

「ユウキ〜！無事か!!」

バロンは観客席に着いた瞬間に大声でユウキを呼ぶと、ユウキから返事が返ってきた。

「ここだよ〜！私達は無事よ!」

ユウキは大きく手を挙げてここにいるアピールをしてくれた。

バロンは直ぐにユウキの方に行こうとした時、観客席の人達に詰め寄られた。

「お前のポケモンどうなってるんだ!」

「あんな技見たことないぞ!」

「お前のレアポケモン、俺のポケモンと交換してくれよ!」

バロンはだんだんと詰め寄って来る連中に苛立ってきた。

ポケモンを交換するだつて?ふざけやがって・・・

『グオオオオオオ!』(人間共が!マスターに近寄るなあああ!)

エルドラドがこちらの方に咆哮すると、エルドラドの周りに黄金色の魔法陣が展開され、そこから特大級の光線が放たれた!

青竜王と紅皇龍が咄嗟に観客席が向かい、全力障壁を同時に発動しギリギリ防げたが、体力を大きく消耗し地面に膝を着いた。

『グオオオオオオ!』(邪魔をするなお前ら!彼奴らを!彼奴らを!)

エルドラドは、人間共がマスターに詰め寄り困っているのを見て怒ったのだ。

その人間達は確実に自分達が狙われている事が分かり、マスターに早く何とかしろと言い寄っている。

エルドラドの怒りは更に上がり、体が黄金色に輝きだした。

大技を放つ前段階だ。極大魔法よりも威力が高い、上級神の必殺技。今の紅皇龍と青竜王だと防げない！

「分かったから落ち着け！エルドラド！お前も少し落ち着いてくれ！」

『グオオオオオオ！』

エルドラドは咆哮をすると空の方に黄金色の光線を発射した。その光線は発射された時の大きさの約4倍の大きさになり戻って来た！

「エルドラドおおお！」

『多重結界！』

その時、バロンの後ろの方からこの世界の本当の神、『アルセウス』が現れ何十にも結界を張り、エルドラドの攻撃から自分達を守ってくれた。

「アルセウス!？」

『バロン。こいつらは?』

「ポケモンバトルの試合を見に来た人達です」

さすがの観客席の人達も目の前に、この世界を作り出した神が現れた事により全員が地面にへこたれた。

『エルドラドを怒らせたのはこの人達ですね。私の方で処理させていただきます』

「ちよつと待ってください！」

『ん?』

アルセウスから敵意の籠もった目で見られた。

「この人達を見逃してあげてくれませんか? 2度目は僕も手は出しません。今回だけ見逃してあげてください」

『バロン。お前は甘い。此奴らは一緒の事を平然とまたやるだろう。その時は、私が来るより先にお前の仲間が此奴らを殺すだろう』

「その時は自分が説得します」

アルセウスから殺意がそつと消えた。

『そこまで言うなら今回は見逃す。後、エルドラドも元に戻しておこう。ではな・・・』

「ありがとうございます」

アルセウスはエルドラドの半暴走状態になりつつあるエルドラドを正常に戻してくれた。

その後、アルセウスは自分の居場所に帰って行った。

「バロン君。いや、バロン様。この命救って頂き、ありがとうございます」

いつの間にか直ぐ側に来ていたユウキのお父さん、閏炎はバロンにそう言い頭を下げた。

後ろの言い寄っていた連中も直ぐに謝りと感謝の言葉を言い、頭を下げた。

その後、観客席の皆がバロンの元で働きたいと申し出てきた。

急な展開だったが人数も殆どいないので、

「僕の所で働きたい人がいれば我が城に来てください」

そう言うのと口々に「ありがとうございます」と言われたり、「この命を救ってくれた恩人の為何でもします！」と言ってくれた人達もいた。

更には、「まだ10歳のバロン様の為に、儂から援助金を出す」と言ってくれた人達もいた。

こうしてバロンの城に大勢の人達、更には大富豪の人達が来てくれた。

「今宵は我が城で宴をします！行きたい人がいれば来てくださいね。城門は開けておきます。時刻は19時にスタートします。」

バロンはそう言うのとエルドラドを呼び、背中に乗った。

「ユウキ、早く来て」

バロンは後ろの方にいるユウキに話しかけ、手を伸ばした。周りの人達の目が温かいな。

「うんーバロン君、今すぐ行くねー」

ユウキはバロンの方に走りそのまま手を握り、バロンが引つ張り上げそのままエルドラドの背中に乗せた。

「出発だ！」

「レッツゴー！」

ユウキを乗せエルドラドはマスターの城に飛んでいった。

今の時刻は17時。まだまだ時間はある。

観客席の人達と閨炎さん達は、そろそろと動き出し宴に行くために、支度のため一度自分達の家に向かいバロンの城に向かった。

バロンの城は殆どが黄金で出来ているので、この城を知る人達は皆『黄金城』と呼んでいる。

バロンもまだこの城に名前を付けていないので、使用人達にこの話しを聞いた時に、正式にこの城の名前を黄金城にした。

その黄金城に宴に行きたい人達が沢山来た。

このカロス地方の殆どの人がバロンの城に来て盛り上がっている。支度するために戻って行った人達が皆に知らせたので、皆来たのだ。

その中には各町のジムリーダーも来ていたり、カロス地方チャンピオンのカルネさんも来てくれた。勿論、プラターヌ博士も一緒に来てくれた。

そして時刻が19時になった時、黄金城のテラスにバロンが立った。

「お集まりいただきありがとうございます！これより宴を開催させていただきます！みなさん、存分に楽しんでいってください！エルドラド、よろしく!!」

バロンが両手を勢いよく振り上げるとエルドラドが城の天辺から現れ、黄金の球体を空に放った。

それが弾けると花火みたいに綺麗な光景が目に入って来た。

集まってくれた人達も喜んでくれたので良かった。

その後は、バロンも下に降りて一緒に宴を楽しんだ。

更にはカルネさんから、

「黄金城、更に拡大する予定あるのかしら？」

「はい。人数が僕の城に住んでくれるみたいですので、拡大しようと思います」

「そうよね。では、チャンピオンの権限を使いバロン君の領地を広げましょう！」

「大丈夫ですか？アルセウスに言ってからの方が良いような気がしません」

カルネが固まってしまった。

「カルネさん？」

「そ、そうよね！ごめんさない」

カルネは謝ったが、普通にアルセウスに聞けばいいだけじゃないかな？

「カルネさん、少しだけ待ってくださいね。アルセウスに頼んできます」

「え？」

Baronはそのままエルドラドに軽く説明すると背中に乗り、そのまま飛んでいった。

数分後、エルドラドに乗って戻って来た後ろには……

「アルセウス様!?!」

カルネやその他の人々が直ぐに頭を下げた。

「連れてきましたよ！ってカルネさん？」

『 Baron。この人物は？』

「この地方のチャンピオン。僕に領地をあげるって言ってくれたんだけど、この世界の神には言わなくて良いのかなって思って、それで連れて来たんだ」

アルセウスは納得したように頷き、

『そういう事か。ならば問題ない。明日、 Baron VS カルネが戦い勝った方がこの地方を制する。その時にしたいようにすればいい』

「そうだね！だけど……リーグのバトル城は戦いの時に半壊させてしまいバトル出来ないんだ」

アルセウスはやれやれと言い、

『そこでバトルしないと言うわけではあるまい。そうだな……』

アルセウスは少し考えると、

『我がバトル場を造ろう』

「ありがとう！」

アルセウスがそう言うのと直ぐにバトル場が目の前に出来た。

「これでバトルが出来る！本当にありがとうアルセウス！」

『ああ。それでは、我は帰るとしよう』

「うん！また今度遊びに行くね！」

『ああ、待っている』

アルセウスはそう言うと言分の居場所に帰って行った。

その後は再び宴を再開して、夜遅くまで皆で騒いだ。

後日のチャンピオン戦は午後からにしてくれると言う事で、カルネ

さんも今回はいっぱい飲み楽しんでくれた。

プラターヌはそうそうに酔いつぶれて寝ているが・・・

明日が楽しみだ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十話
チャンピオン戦前の午前中

百九十話

翌朝、カルネさんが2日酔いで朝は休むので、俺はラティオスを呼び仲間達と一緒にアルマトールレに向かった。

「久しぶりのアルマトールレだな。みんな元気にしてるかな？」

『皆、バロンが帰って来るのを待っているぞ。勿論、全員が元気で、日々強くなるためにバトルをしている』

ラティオスはアルマトールレの事を説明しながら向かってくれて、色々と今の状況が分かった。

最低レベルが大幅に更新され、今のアルマトールレの最低レベルが400と言う事が分かり、どんなふうになればそんな事が出来るか聞くと……

高レベルのポケモンにタマゴを産ませれば、高レベルポケモンが生まれると言う事だった。

しかも、その子どもは両親の力を引き継いで更にパワーアップして生まれるので、更に強くなっていく。

俺がいない期間で、子どもから成長したポケモン達も数多くいる事が分かり、そのポケモン達と鍛錬してもらいたいと言う事も聞いた。

アルマトールレの近海の海に近づくと、海に住んでいるポケモン達が出迎えてくれた。

『やっと来たか！待っていたぞ!!』(カイオーガ)

『久しぶりだな。ラティオスから話しは聞いているだろ？早くバトルしようぜ!』(ルギア)

「久しぶりだな！後でバトルするから待っていてくれ！」

『おう!』(ルギア)

ラティオスそのままアルマトールレに飛んでいくと、今度はアルマトールレの上空に飛んでいたポケモン達から声を掛けられた。

『久しぶりだなマスター!』(ホウオウ)

『早くバトルしたいぜ!』(レックウザ)

「久しぶりだなお前達!後でバトルするから待っていてくれ!」

『おう!』(上空にいた殆どのポケモン……)

思っていた以上に返事が返ってきた……みんなとバトルか。頑張らないとな!

ちなみに、ラティオスが向かっている場所は、アルマトールを管理している四天王がいる場所だ。

『遅くなってすまないな。やっと着いたぞ』

「送ってくれてありがとう。助かったよ」

バロンはラティオスに手を振ってから四天王がいる宮殿に足を踏み入れた。

この宮殿はアルマトールの町の中で一番豪華で、一番広い施設だ。この中に四天王が卓上を囲んで座っている事が多く、日々アルマトールの考え会議している。

今のアルマトールの人工(ポケモン達)が多くなって来たので、島(町)を拡大しようと計画しているが、創世の力を使えるのは上級神・神のみなので、この町のポケモン達では無理だ。

丁度その時、バロンが宮殿に入ってきた。

「久しぶりだなみんな!ミアレの時はありがとうな」

『久しぶりですねバロン様。ミアレの時は当然のことをしたままですわ』(ディアンシー)

『久しぶりだなバロン!今、会議中だから少しだけ待ってくれ』(ゲノセクト)

「わかった。内容が気になるから俺も参加させてもらおうぞ」

『ええ。この島の王ですので、どうぞ玉座にて座って下さい』

「いやいや!この王はアルセウスでしょ!」

流星にそれは困るぞ!アルセウスがいなければダメだ!世界が崩壊するじゃないか!

『アルセウス様が決めた事ですわ。あの方は基本的には現界に降りて来られない御方。現界に降りる必要が無い限りは、アルマトールの王はバロンに勤めさせよとの事でしたわ』

「そうか。アルセウスの言う事なら聞かないわけにはいかないな。わかった！では、玉座にて会議の話しを聞かせて貰うね」

『はい』

バロンが歩く瞬間、ボールの中にいたエルドラドが、マスターが王になったと聞いた瞬間、衣装替えの準備をしていた。

バロンが玉座の前に着き、円卓の方を向いた瞬間を狙って、エルドラドはマスターの服を金をメインにした衣装に替えた。バロンもこれにはびっくりしたが、エルドラドだと直ぐに分かり、ゆっくりと玉座に腰を下ろした。

四天王達も瞬間的に衣装が替わった時は驚いたが、直ぐに元に戻った。

「では、会議の内容を聞かせてくれ」

『はい。このアルマトーレの人口が大幅に増えた事により島を拡大しようと思ひ、会議をしていたのですが、この町は特殊な結界のせいで、通常のポケモン達では拡大は出来ません。出来るのは神であるポケモンと、上級神だけなのです』

なるほど・・・

人工が増えた事により町の拡大が必要か。ならば、ここはエルドラド達に任せるか。

「了解した。その案件については俺の方で何とか出来る。出番だエルドラド、メイビス。お前達の力で町の拡大及び、この町の雰囲気壊さず作り替えて欲しい。出来るか？」

『勿論ですマスター』

『任せて！』

エルドラドとメイビスは直ぐにその場を離れ、作業に取りかかった。

『私達も力を貸さなければ、四天王の名が汚れますわ！行きますよみんな！』

『ああー！』

ディアンシーがそう言い、みんな一斉にエルドラド達の方に向かって行った。

町のポケモン達もエルドラドが町を作り替えるのを見て、直ぐに何か協力できる事が無いか聞いて作業に取りかかった。

僅か数分でアルマトールレ全てのポケモン達が皆で協力し合い作業に取りかかっていた。

まずは地盤固めの為、エルドラドが黄金を使わず、水に強い材質の石を造りだし、地盤を固めた。

その後は、メイビスが石の上に土を空中で造りだし、エルドラドが作った場所の上にかぶせてた。

次にエルドラドが石畳に使うための石材を造りだし、メイビスがかぶせてくれた土の上に石畳を敷き詰めた。

次にエルドラドとメイビスが共同で、アルマトールレの煉瓦造りの家と一緒にタイプの家を造り、拡大した場所にも一緒の様に家が建ち並んだ。

この町のポケモン達には、家具造りなどを頼み、エルドラドとメイビスはアルマトールレでマスターが住む家も建て始めた。

ちゃんと外装は煉瓦造りの家だが、内装は言われていない。

結果・・・内装は白銀がメインで造られ、エルドラド達が遊べるように広めの部屋を造った。

2階にはマスターとみんなが寝られるように寝室にした。

特大級のベッドを作り、マスターに着て貰う為の衣装も既にクロージャケットに収納した。

マスターは四天王の宮殿で座って待つて貰っているが、そろそろ動き出すと思う。

エルドラドはマスターの方に向かい飛んでいった。

メイビスもエルドラドの行動を察知して直ぐに後を追いかけた。

その頃バロンは・・・玉座に座ってるのが退屈過ぎて動き出していた。

まずは宮殿は抜けて正門に行くと、そこにエルドラドとメイビスが既に立っていた。

「あれ？もう作業はすんだの？」

『担当している場所は全て終わらせました』

『マスターの為に頑張ったよ！』

『ありがとう』

バロンが礼を言ってから直ぐにメイビスがこちらに向かってきた。

『マスター！案内したい所があるからエルドラド様に乗って！』

「え？わ、わかった」

メイビスはエルドラドの背中にマスターを乗せると、マスターの為に造った屋敷へと飛んでいった。

エルドラドも笑顔を浮かべている。

案内された場所はエルドラドとメイビスが造ってくれたアルマトーレの新しい家だった。

「ありがとう2人とも。嬉しいよ」

『えへへへこの後あのカルネって人とバトルでしょ？紅茶いれるからテーブルに座って！』

メイビスがバロンの背中を押しながらそう言い、バロンは椅子に座った。エルドラドもそれに続き、空いている椅子に座りメイビスが紅茶を出すまで待った。

少しだけ待つとメイビスがサイコキネシスを使い、紅茶の入ったコップを持ってきてくれた。

「ありがとうメイビス。では、頂きます」

『うん！頂きます』

『頂きます』

3人が同時に紅茶を飲んだ。

「美味しい。この紅茶凄く美味しいよ！」

『美味しいじゃないか。メイビス凄いいぞ』

『ありがとう2人とも！』

バロン達はメイビスがいれてくれた紅茶を飲みながら、午前中を過ごした。

午後からはカルネさんとチャンピオン戦！

エルドラド、一緒に頑張ろうな!!

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十一話
チャンピオン戦前半

百七十一話

午後、バロンの城の中庭でカロス地方のチャンピオン、カルネとの試合が始まる。

今回はプラターヌが審判を務める。

カルネは白がメインの衣装を着ている。バロンは、エルドラドが作ってくれた金色がメインの衣装だ。

「今日は一段と気合いが入っているね」

「はい！今日はカルネさんを倒してカロスチャンピオンになります！」

「大きく出たわね。良いでしょう！それでは、バトルしましょうか！」
カルネとバロンは直ぐにポケモンを出そうとした時、プラターヌがた待ったが掛かった。

「とりあえずルール説明だけです！使用ポケモンは5体！先に全てのポケモンを倒した方の勝ちです！それで、バトル開始！」

ポケモンリーグチャンピオン戦

☆バロンVSカルネ☆

「出番だ、エルドラド！」

『マスターの勝利の為、いざ参る！』

「出番よ、トゲキツス！」

『カルネ様の為に、全力でいきます！』

両者ポケモンを出し終え、バトル開始だ！

最初に動いたのはバロンだ。

「エルドラド、黄金世界！」

※黄金世界※【神】

エルドラド専用フィールド技。

辺り一面を黄金に変え、エルドラドの受けるダメージを半減、与えるダメージ増加効果を与える。

この技はエルドラドが倒されない限り消えることはない。

「こんな技、始めてみた……トゲキツス、影分身してからムーンフォース！」

「エルドラド、ゴールデンストリーム！」

※ゴールデンストリーム※【風】

黄金色の竜巻を発生させる。

当たった相手の全ステータスを大幅に下げる。

トゲキツスは影分身をしてからムーンフォースを放つ準備をしている間に、エルドラドの竜巻が発生した。

その後、トゲキツスはムーンフォースを放ったが、竜巻に当たり簡単に掻き消された。

「トゲキツス！高速移動を使ってその場から離脱して！」

「させませんよ！エルドラド、トゲキツスの周りに黄金壁！」

エルドラドはトゲキツスの周りに黄金の壁を瞬時に出現させ、トゲキツスの逃げ場を上空だけに絞らせた。

トゲキツスは直ぐに急上昇して黄金壁を飛び越えると……

「かかったな……エルドラド、破滅の光線！」

※破滅の光線※【無】

一撃必殺技の最強クラス。

攻撃範囲が狭く、打てる場所も上空から下に向けて発射する扱いにくい技。

エルドラドは直ぐに破滅の光線を放ち、トゲキツスを一撃で仕留めた。

「なんて攻撃なの……逃げ場を無くし尚且つ一撃必殺技……完璧ね。戻ってトゲキツス！」

エルドラドはトゲキツスがモンスターボールに戻ったのを確認してから竜巻を消した。

「次は貴方よ！出て来て、バシャーモ！」

「エルドラド、攻撃続行だ！ゴールデンストリーム！」

「バシヤーモ、フレアドライブ！」

バシヤーモは体に炎を纏わせ、エルドラドに向かって行つた。その間にエルドラドは竜巻を発生させバシヤーモに向け発射した。

その竜巻をバシヤーモは真横にステップ移動して攻撃を躲してそのままエルドラドの方に突貫した！

「なるほど、エルドラド！ツールハンマー！」

エルドラドは黄金色の拳を造りだし、バシヤーモ目掛けて振り下ろした！だが、

「大ぶりは良くないね。バシヤーモ直ぐに避けて攻撃を当てなさい！」

バシヤーモは直ぐに真横にステップ移動してまた攻撃を躲した！だが、その先には……

「簡単に引つかかってくれますね。エルドラド、そのまま竜巻の餌食にしてやれ！」

バシヤーモの躲した場所には先ほどエルドラドが放った竜巻が2分裂してバシヤーモに迫っていた！

「いつの間！？バシヤーモ！技解除して高速移動で緊急離脱！」

バシヤーモは技を強制解除して直ぐに後方に行こうとしたが……「逃がすわけ無いでしょ？黄金壁！」

エルドラドはバシヤーモの前方以外を黄金壁で囲み、逃げ場を一点に絞った。だが、その一点には最後振りかぶったツールハンマーがあり、左右には竜巻が迫っている。後は……

「バシヤーモ！貴方ならその高さ飛び越えられるはずよ！」

カルネはバシヤーモに壁を飛び越えさせるように命じたが、先ほどの事を忘れたのだろうか？

バシヤーモはカルネの指示通りに壁を飛び越えようと跳躍した瞬間、

「やれエルドラド！」

エルドラドはバシヤーモの上空に、破滅の光線を放ち一撃で仕留めた。

「そんな……バシヤーモ戻って。新たな技で戸惑っていたわ」

「やっぱりそうでしたか。エルドラド、今放っている技を一度解除しろ。黄金世界だけ残しておけ」

『了解』

エルドラドは黄金世界のみを残して後は解除した。

すると、空に青空が映った。

「え？」

「エルドラドはこのバトル場全体に技を仕掛けていたんですよ。どこからでも攻撃が出来るぞって意味だと思いますけど」

『その通りだ』

エルドラドはテレパシーでカルネに語りかけた。

「なるほどね。ここからは、私もポケモン達も今以上に本気でいくわよ！」

「最初から本気で来て欲しかったですけどね。さあ、エルドラド、俺達も手加減しなくて良さそうだ。暴れようぜ！」

「貴方達・・・あれで手加減無しって異常よ・・・」

カルネは3体目のポケモン、グラードンを出した！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十二話
チャンピオン戦

百七十二話

百七十二話

カルネの3体目はハウエン地方の伝説ポケモン、グラードンだった。

場に出た事により日照りが発生し蒸し暑い。カルネの方を見ると、上に羽織っていたコートを脱いで薄着になっていた。

バロンの衣装は、エルドラドが作ってくれているおかげで暑さ対策も寒さ対策も万全だ！

「さあグラードン、貴方の本当の姿をさらしなさい！ゲンシカイキ！」
グラードンの周りに虹色の球体が発生しグラードンの姿が変わった！

グラードンが更に大きくなり、黒い模様が黄色く光りだした。

特性が変わり、終わりの大地に変わった。その効果で日差しが更に熱くなり陽炎が見えるようにまでなった。

※特性・終わりの大地※

天候がとても熱い日差し状態になる。

天候変化技が効かなくなり。原子グラードンが倒されるまでこの効果は続く。

天候が更に熱くなったせいで、観客達も服を脱ぎ薄着になったが、この天候で薄着だと観客達にも悪影響が出るかもしれない。

「カルネさん、少しだけバトル待って貰っていいですか？」

「何でかしら？」

「このバトルを見る観客達にはグラードンの特性は悪影響ですので、こちらで対処したいのです」

カルネは観客達の事が頭に入っていないなかつたみたいだ。

「ごめん。その仕事頼めるかしら？」

「勿論です。出てこい青竜王！紅皇龍！観客達の身の安全と、この熱

さの対策をしてくれ！急いで取りかかってくれ！」

『了解！』

青竜王と紅皇龍は2手に別れ直ぐに耐久性がある特殊結界を張った。この結界の中にいる間は天候系統の温度変化の影響を一切受けないようになっていた。

観客達から口々にお礼の言葉を貰い、バトルを再開することにした。

「お待たせしました。それでは、バトルの続きしましょうか」

「ええ、バロン君。貴方の手持ちポケモンである2体を結界の方に回して大丈夫なの？」

カルネは心配してくれているが、正直な事を言う・・・

「カルネさん、正直に言いますと・・・俺のエルドラドは貴女には倒せない。俺の信用ある2体に結界を任せ、エルドラドだけで貴女を倒そうと思ってます」

この言葉にカルネの表情が変わった。

「この私にたった1体で勝てるだけでも？いいわ、私の本気の方見せてあげる!!」

カルネの表情は、今までの優しい雰囲気とは全く逆の怖いと言える表情に変わった。

バロンはニツと口に笑みを浮かべバトルを再開した。

「先に行くわ！グラードン！エルドラドを串刺しにしなさい！断崖の剣!!」

「技に移行するまでが長いですよ、カルネさん。エルドラド、黄金世界の力を見せてやれ！」

グラードンが地面の黄金に勢いよく殴り、断崖の剣を出そうとしたが、その拳は黄金により弾かれた！

「なに!？」

「並大抵の攻撃じゃ俺のエルドラドの黄金は、傷1つ付かない！」

エルドラドは誇らしげに咆哮すると、

「さあ、攻撃開始だ！エルドラド、グラードンの周辺に黄金壁！更にゴールデンストリーム！」

エルドラドはグラードンの周りに黄金壁を瞬時に造りだし竜巻を同時に発生させた。

「グラードン！ソーラービーム！」

「竜巻の餌食になれ！風雷派！」

※風雷派※【風・電気】

風を凝縮し、更に雷を纏わせ相手に投げつける。

当たった場所から竜巻が発生する。

エルドラドの周辺に風雷派を5つ発生させ間隔を開けて発射した。勿論、ゴールデンストリームを避けて発射しているので、まだ竜巻は発生したままだ。

グラードンが発射したソーラービームは風雷派の一撃により簡単に掻き消され、そのままグラードンに5つ全てが飛んでいった。

「グラードン！岩石封じで前方を塞いで！」

「無駄だ」

グラードンは岩石封じを使い前方に岩を出現させ塞いだが、エルドラドが発射した風雷派は、当たれば竜巻を発生させる事が出来る技。

その風雷派の1つが岩石封じに当たり勢いよく竜巻が発生し、岩石封じを飛ばした！

残りの4つがそのまま風雷派の竜巻を突き破り、グラードンを攻撃した！

この攻撃が決めてで、グラードンは戦闘不能になった。

ゴールデンストリームの竜巻は、保険みたいな物で発生させたので、エルドラドに消して貰った。

「戻ってグラードン。こうなったら・・・出て来てルカリオ！」

カルネは一度目を瞑り意を決したかのように目を再び開いた。

「バロン君。貴方は本当に強いね。だから、私のポケモンの進化の先にある進化を見せてあげろ！ルカリオ！進化を超越しなさい！擬人化!!」

ルカリオの体から虹色の光りが発生し、擬人化した！

鎧姿の男性に変わった。腰には2本の剣が吊されている。

「その姿がカルネさんのルカリオの擬人化なんですね。では、エルド

ラドよ。俺達も見せてあげよう！超越した神化を！擬人化!!」

エルドラドの体からも虹色の光りが発生し、大きかった体は2 m程の人間サイズになり、上半身裸の男性に変わった。下は金色の派手なズボンをはいており、背中からは光輪が輝いている。手には黄金の剣が握られている。

擬人化（神化）が終わったエルドラドはゆっくりと地上に降り立った。

「なんて神々しいの・・・あの姿がエルドラドの擬人化なのね」

「そうですよ。では、行きますよ！エルドラド、ゴールドデンインパクト！」

「ルカリオ！双剣乱舞！」

※ゴールドデンインパクト※【神】

金色の光りを物や体に纏わせて突貫する技。

当たった後は対象物を大爆発させる。

※双剣乱舞※【格闘】

2本の剣で舞うように剣を振るう。

ルカリオは腰の剣を取り出し、エルドラドに向かって行った！

エルドラドは剣に黄金を纏わせ構え、一気に突貫した！

2体はバトル中央で剣と剣でぶつかり合い、エルドラドの技の追加効果でルカリオの剣を爆発させた！

「な?!ルカリオ！居合斬りで剣を形成！」

「エルドラド！追撃だ！」

エルドラドは更に剣を横に振り払い、黄金の斬撃波を放った！それはルカリオの方に飛んで行ったが、ルカリオは居合斬りで斬り飛ばした！だが、技の効果でまた爆発しルカリオの居合斬りを持っていた手が損傷した。

「ルカリオ!?!」

「トドメだ！断崖の剣（エルドラドバージョン）!!」

エルドラドは持っていた剣を地面に突き刺し、黄金色の断崖の剣をルカリオの足下から生やし、攻撃した！ルカリオは大きく宙に飛ばされ、エルドラドが更に追撃を掛けた！

『これで終わりだ』

エルドラドは拳を勢いよく振り下ろし、ルカリオを攻撃した！

ルカリオは急降下し地面に激突！黄金の堅い地面が陥没し、ルカリオは戦闘不能になった。

「そんな・・・擬人化でも全く効かないなんて、戻ってルカリオ」

「だから言ったでしょ？」

エルドラドは静かにバロンの前に舞い降りて、カルネを見た。

『まだやるんだろ？早くポケモンを出せ』

エルドラドは腕を組みながらそう言い、睨み付けた。

「分かってるわ！出て来て、エルレイド！直ぐに擬人化よ！」

バトル場は先ほどと一緒のままにしてあるので、黄金壁を上手く使おうか。

さあ、楽しもうか！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十三話
チャンピオン戦決着

百七十三話

カルネとのチャンピオン戦は、バロンがカルネのポケモンを4体倒し、バロンは1体も倒されていない状態になった。

「さあ、行きますよー！エルドラド、ゴールドデンセイバー！」

「エルレイド、爆裂ラッシュ！」

※ゴールドデンセイバー※【神】

黄金の剣。

擬人化状態のエルドラドが常に持っている剣の名前。

エルドラドは高く跳び上がり、上から重力を活かして落下攻撃をした！

その攻撃をエルレイドは、爆裂パンチの拳で勢いよく振り上げ、打ち合った！

エルドラドは直ぐに、光輪から光りの光線を放ち、エルレイドを攻撃しようとした！

その攻撃をエルレイドは、足にサイコカッターを纏わせ、足蹴りで全て相殺した！

直ぐにエルドラドが、空いている手でギガントヒルを使い攻撃した！

エルレイドもギガントヒルを使いエルドラドの攻撃を相殺した！

2体は一度距離を取るため、後退した。

『なかなかやるじゃないか』

『ありがとうございます、エルドラド様』

エルレイドは構えながら礼を言い、次の指示を待った。エルドラドも一緒の様に待ち、次の指示を待っている。

「いい攻撃だ。エルドラド、エルレイドの周りに黄金壁！更にゴールドデンストリームで追い打ちだ！」

「エルレイド、高速移動でエルドラドに接近！爆裂ラッシュで攻撃！」

エルドラドは黄金壁を使いエルレイドの左右と後ろを囲んだが、エルレイドは真つ直ぐに突っ込んできた為、不発に終わったが、直ぐに竜巻を発生させ真つ直ぐ来られないようにした。だが……

『その攻撃！俺の一撃で〜！』

エルレイドは爆裂パンチに更に上書きした気合いパンチを使い目の前にあるゴールデンストリームを殴った！だが、この竜巻の効果は発揮し、エルレイドの全ステータスは下がる。

エルレイドは竜巻を殴ったが、全く効果は無く竜巻の餌食になってしまう筈だった。

エルレイドが竜巻の餌食になる直前、エルドラドは竜巻を自分で消し飛ばし、エルレイドを竜巻から救ったのだ！

「エルドラド!？」

『すまないマスター。エルレイドと正面から拳と拳で戦ってみたくなかった』

「そうか。ならば何も言わない。そのかわり、必ず勝てよ？」

『勿論です。エルレイド、ステータスを元に戻しておけ。待つてやる』
カルネもエルレイドも、観客達もびつくりしたが、エルドラドの言葉聞いて、納得したと同時に観客達から拍手喝采を貰った。

エルレイドは直ぐにステータスを強化し直し、元の状態に戻した後お礼を言い、構えた。

「エルレイド、貴方の好きなように戦いなさい。私も見守ります」

『ありがとうございます。全力で行きます！』

お互いのトレーナーは見るだけ。お互いのポケモンが自分で考えて攻撃すると言う、チャンピオン戦初めての光景となった。

これには、プラターヌも観客達も興奮した。

『さて、始めるか』

『はいー』

お互い構え、そして……

エルレイドとエルドラドは同時に神速を使い、殴りかかった！

エルレイドの神速の色は緑、エルドラドの神速の色は金だ。

エルレイドが最初に殴ろうとしたが、エルドラドが下からアッパー

攻撃で腹を勢いよく殴り、エルレイドを吹き飛ばす！直ぐにエルレイドは勢いよく拳を振り下ろしエルドラド顔を殴るが、直ぐにエルレイドの背中を勢いよく殴られた！

エルレイドは吹き飛ばされたが、地面に足が付いた瞬間、直ぐにエルドラドを殴りに行く！

エルドラドもエルレイドの方に殴りに行き、アッパー攻撃した！エルレイドも直ぐにアッパー攻撃してお互いの顔を勢いよく攻撃した！

エルドラドは頭を勢いよく振り、エルレイドの顔を攻撃！エルレイドはエルドラドの顔を横から勢いよく殴る！

エルドラドはよろける前にエルレイドの顔を横から殴ってからお互いよろけ、また殴り合った。

人間達から見ると、緑色と金色の線が激しくぶつかり合っているように見える。

『そろそろ、拳の技でも使うか』

『そうですね。お互い素で殴っても自動回復で意味無いですからね』

エルドラドもエルレイドもスキルで自動回復が付いており、高攻撃力以外では体力を削りきる切ることが出来ない。

『奥義・ゴッドブレイカー！』

『秘技・阿修羅神拳！』

※奥義・ゴッドブレイカー※【神】

拳に神の力を纏わせ攻撃する。

※秘技・阿修羅神拳※【神】

阿修羅のように、腕を6本、顔を3つに変えて、相手を攻撃する。エルレイドの体が赤黒く輝き、顔が2つ生え、腕が6本に増えた。エルドラドは、拳に虹色の光りを纏わせ構えた。

2体は同時に動き、バトル場中央でぶつかり合う！

エルレイドの拳がエルドラドの顔目掛けて殴ってきたが、エルドラドは拳を上には振り上げ、殴ってきた拳の軌道をずらした。

2回目の拳が左から迫って来たのは、もう片方の拳で殴り相殺した。

3回目の拳が右側から迫って来たのは、少しだけ後ろに下がり躲した。

4回目の拳は、両拳が下からアッパー攻撃してきたので、回し蹴りを当て軌道をずらしゴッドブレイカーで反撃したが、最初の拳で相殺された。

5回目の拳の時に、横腹を勢いよく殴られ攻撃を受けてしまった！エルドラドは直ぐに踏ん張りゴッドブレイカーで反撃し、エルレイドの顔を殴り飛ばした！

大きく飛んで行ったエルレイドは地面を何回転かしてから止まり、擬人化が解除されて戦闘不能になった。

『私の勝ちだ』

「エルレイド!?!」

エルドラドは自動体力回復で既に全回復した状態でバロンの前に再び舞い降りた。

「流石だ、エルドラド。次からは普段通り戦ってくれ
『了解した』

「戻ってエルレイド。行って来て相棒！サーナイト!!」

カルネはサーナイトをバトル場に出した時にそのままメガ進化をした。

「最初から本気でいくよ！サーナイト、ムーンフォース！」

「エルドラド、シャインパニツシャー！」

エルドラドは自身の周りに黄金の球体を複数出現させ、サーナイトの放ったムーンフォースをその内の一つで破壊した。残りの球体は直接サーナイトに向かって行く！

「サーナイト！破壊光線！」

「エルドラド！破壊光線の斜線上に黄金壁！」

サーナイトが放った破壊光線はエルドラドが作り出した黄金壁で遮られ防がれた！しかも傷一つ付いていない……

その後直ぐにシャインパニツシャーは黄金壁を自動で躲しサーナイトに向かって行く！

「壁に当たらずに!?!サーナイト、リフレクター！」

サーナイトは前方にリフレクターを張り、シャインパニツシャーに備えたが、シャインパニツシャーはそのリフレクターを避けサーナイトに攻撃し、複数当たった後大爆発した！

爆煙が晴れた後、サーナイトはまだそこに立っていたが、大幅に体力は削っている。

「良かった・・・サーナイト、自己再生して体力を回復させて」

「させるわけ無いじゃないですか。エルドラド、トドメをさせなさい」
『了解。黄金監獄』

サーナイトの周りに黄金製の檻が出現し、サーナイトを捕らえた。その後、エルドラドは光輪から前方にエネルギーを凝縮させていき、拳大の大きさの爆弾を作った。

『さらばだ、サーナイト・・・青竜王、紅皇龍。観客達の安全頼むぞ』
『はい！』

エルドラドはそう言うのと目の前の球体をサーナイトに向け発射した。

青竜王、紅皇龍はエルドラドが発射する前に、結界を多重結界に変え、更に強度を増したが、エルドラドが俺達に守れと言ったと言う事は、もっと強度を増さなければならぬ。

青竜王と紅皇龍は、結界の外側にそれぞれの多重城壁を造った。

青竜王は青色の城壁を、紅皇龍は紅色の城壁をそれぞれ造り出した。

その後直ぐに、エルドラドの攻撃がサーナイトに当たり、特大級の大爆発がバトル場全体に起こった！！

大爆発する前に、事前にエルドラドはサーナイトに衝撃緩和、体力を1だけ残せるように、細工をして、カルネとマスターには絶対防御の結界を張った。

エルドラドが起こした大爆発は、バトル場（黄金世界含む）を木っ端微塵に破壊し、サーナイトは大きく宙に投げ出された！

観客席は、青竜王と紅皇龍が作り出した城壁が一瞬で消し飛ばされ、多重結界を一気に襲う！

青竜王も紅皇龍もここまでの威力だと思わなく、多重結界に攻撃が

着たときにいくつかの結果は一瞬にして消し飛ばされていた。後3重ほどしか残っていない結果を青竜王と紅皇龍は力一杯結果を強め、大爆発の攻撃を受け止めた。

この大爆発は、近くにあるバロンの黄金城にも被害は及び、バトル場に面している方の壁は崩れ去り、城の中の方にまで被害は及び、城の3割は消し飛ばされた。瓦礫すら残っていない。幸い、今回は城の中に人はいなく、皆がバトルを見に来ていたので、被害者がいなかった。

大爆発が終わった後には、バトル場を中心に大きな穴が空いており、その中心にサーナイトが横たわっていた。エルドラドはバロンの横に無傷の状態であった。

カルネはエルドラドのおかげで被害は無いが、目の前の光景を見て腰が抜けていた。

観客席は、青竜王達の多重結果が残り1枚まで減っており、ギリギリ耐えきり観客席の人達を守り切った。2体は技を解除し地面に膝を着き休んだ。

観客達は目の前の光景を見た後で、青竜王達が守ってくれたおかげで自分達は生きていると実感し、皆が2体にお礼を言いに行っていた。

プラターヌはバトル場中央で横たわっているサーナイトの方に行き、状態を見に行くと戦闘不能になっていた。プラターヌはマイクを手に取り、

『最後の特技は凄かった！あの一撃でサーナイトは戦闘不能！カロスリーグチャンピオンの勝者は!!チャレンジャー、バロン!!』
『『おおく!!!』』

観客席から拍手喝采を貰い、バロンは笑顔で手を振った。

カルネの方はやっと歩けるようになり、サーナイトをボールに戻してからバロンの方に向かった。

「最後の1撃は凄かったわ。後、私も結果を張ってくれてありがとう。助かりました」

『当然の事をしたただけだ。マスターに誰も死なせないように言われて

いたからな』

『エルドラド様〜！今の一撃、危なかったです!!』

青竜王が観客席から一気にこちらに来て、そう言った。

『もつと力を付ける。そうでなければ、マスターを守ることは出来な
いぞ』

『はい！』

青竜王は返事をしてからカルネを見た。

『チャンピオンカルネ。マスターとエルドラド様は最強だろ?』

「ええ、最強よ。チャンピオンカルネは今をもって、ポケモントレー
ナーです。今からバロン君はこのカロス地方の3代目チャンピオン
です」

「ありがとうございます」

カルネはそう言うと、胸元に付けていた花の形をしたバッジをバロ
ンに渡した。

「このバッジがチャンピオンの証です。必ず付けておいてください
ね」

「はい！」

バロンは託されたバッジを胸元に付けた。

ここに新たなカロス地方3代目チャンピオンが誕生した！

これから先はバロンがカロスチャンピオンだ！

ポケットモンスターXY バロンの旅 百七十四話 バロンの旅

百七十四話

バロンが新カロスチャンピオンになってから2ヶ月。

バロンが担当しているコウジンタウンは、黄金城が出来てから一気に賑やかになった。

この城は、バロンがどんな方でも見て回って良いし、泊まってくれても良いと言ってくれたからだ。

更には、3つ星級のコックがこの城で働きたいと申し込んで来たので、許可すると直ぐに働き、日々美味しい料理が食べられる事から世界中の人達がこの街にやって来た。

ミアレシティは、いちからプリズムタワーを建て直し、バロンのポケモン達も協力して更に強固なタワーに生まれ変わった。

更に、この街の一番の役目である電気発電にも力を入れ、カロス地方の中心部は更に活気付いた。

この街で行われたポケモンリーグは取り壊されており、大きな公園に作り替えた。

各街のジムリーダーにも変更があり、今回の大戦で亡くなったジムリーダーは、その補佐がジムリーダーになったり、その街の人達からジムリーダーに相応しい人が見つければ、その人がジムリーダーをやる事になった。

エイセツシティのジムリーダー、ウルツプのポケモン達は今回の大戦で一時的にだが、神タイプが付き、複タイプが消えた。それは、永続するものなので、大戦が終わった後は神タイプは消え、氷タイプだけになった。

ウルツプは自主的にジムリーダーを辞めると言い、バロンの黄金城の警備員として雇って欲しいと言ってきたので、許可した。

今の8大ジムの変更は既に済んでおり、以下の通りである。

ハクダンジム 虫ポケモン

ジムリーダー・ゼピオン
シヨウヨウジム 岩タイプ
ジムリーダー・ゴードン
シヤラジム 格闘タイプ
ジムリーダー・コルニ
ヒヨクジム 草タイプ
ジムリーダー・ジファ
ミアレジム 電気タイプ
ジムリーダー・ギル
クノエジム 妖精タイプ
ジムリーダー・マーシュ
ヒヤツコクジム エスパークタイプ
ジムリーダー・フロマージュ
エイセツシテイ 氷タイプ
ジムリーダー・ヒルデガード
以上が今の8代ジムで、変更済みのジムだ。
各市町村にも点在しているジムもあるが、その報告等はいくつか
来ている。

色々と変わった後、バロンはチャンピオンとして、チャレンジャー
達と王座を掛けてバトルしている。

バロンの1体目は、メタグロス。

チャレンジャーの中では、最強の盾と言われており、その防御力の
高さで皆苦戦している。

更には素早さも早い、攻撃力も高いので、一撃を食らえば殆どが戦
闘不能になる。

数人だけメタグロスを倒せた者がいたが、それらは全てピカチュウ
が倒しているので皆、2体目で全滅する。

皆からは最強の矛と言われ、ピカチュウ打倒も頑張っている。

数ヶ月、いや・・・数年はチャンピオンが変わることは無いだろう。

元チャンピオンのカルネさんも最近チャレンジしに来たことが
あったが、2体目のピカチュウで全滅させたのだ。

その後は、プラターヌもチャレンジしに来たが、1体目のメタグロスで全滅と言う結果になった。

カロス地方の現チャンピオンのバロンは皆から、絶対王者と言われている。

アルマトーレの方も行っており、そこでバロンのポケモン達を鍛えている。

今のバロンの手持ちポケモン達のレベルは・・・

エルドラドLv1000

青竜王Lv1000

紅皇龍Lv1000

メイビスLv1000

ピカチュウLv950

メタグロスLv940

アルマトーレの四天王達は皆、バロンのポケモン達と戦い続けてLv1000に到達している。

その他にはアルマトーレの各街のポケモン達もバロンのポケモン達と戦い、Lv900になっている。

その子ども達は、Lv400とやはり高い。

一番の驚きは、生まれてきたポケモンが突然変異していた事だ。

そのポケモンは、ボスゴドラとバシャーモの子どもで、両親の特徴を引き継いで生まれたきた子だ。

体つきはボスゴドラなのだが、手や足の場所はバシャーモの炎が燃えており、素早さが凄く高くなっていた。

特性は【加速】【頑丈】の2つが付いており、ステータスは通常の1.5倍だ。

他にも数組の突然変異の子どもが生まれている事を教えて貰った。そのポケモンが更に強く育てば、ピカチュウと互角にたたえるだろう。

う。楽しみだ。

これから先も更にポケモントレーナーは増えるだろう。

悪事を働く者もいるだろう。勿論、悪事を働く者がいた場合、速攻潰しに行くが・・・

「ポケモントレーナー諸君！カロスチャンピオンになりたければ、俺を倒すがいい！俺はいつでも待ってやる！」